



第1話 病人列島

世の中が不景気になり、複雑で混迷の時代になると比例して病人が増産される。ストレスから癌が増え、ノイローゼから心身症、鬱病とぎっくり腰と糖尿病患者がうじゃうじゃと病院に列をなす。どこの医者もてんでこまい。病院のベッドは不足して予約で先までいっぱいだ。手術など順番待ちでいつになるやら。手術しなければあと三ヶ月と宣告された末期患者も手術の日取りが四ヶ月先という異常事態。街は病人で溢れていた。

Kもまた血圧が不安定。株価や円相場のように上がったり下がったりで一喜一憂する毎日だ。常に血圧計を左手の人差し指に嵌めたまま、仕事をしていた。会社で経理を担当している主任だ。パソコンを打つのに少し不便だが、慣れてしまえばなんということもない。血圧計を着装していなければ不安でしょうがない。「主任、顔色が紅潮してきておりますが」と、女子事務員が話しかける。

「そうか」とKは血圧計のスイッチをONにする。「上がってきた、上がってきた」最高血圧が一八〇、最低血圧が一二〇、下が高い。つかさず机の引き出しからブランデーのポケット瓶を取り出すと、麻薬中毒患者が薬が切れたように、手を震わせながらぐいと一口呑んだ。ふうっと息を吐く。アルコールは一時的に血圧を下げる効果があった。もうひと口呑んだ。癖になる。仕事中に薬と云ってあるから誰も何も云わない。周知のこととして咎める者もない。血圧計を見る。下がった。上が九〇、下が六〇。少し下がり過ぎた。それでまた具合が悪くなってくる。どうしたらいい。

経理部長は点滴マニアでキャスター付きのポールに点滴の袋ぶらさげて、がらがらと押しながら事務所内を歩いていた。別の女子事務員は額にアイスノンをくくりつけて電卓を叩いている。微熱がとれない症候群だった。別室では奇声が発せられていたが、いつものことで誰も気に留める者もない。隔離されているのは煩いからだが、財務担当の係長がときどき発作を起こす。総合失調症だから、喚く暴れる。個室の中は壊されてもいいものばかりが置かれていた。がしゃがしゃんと凄まじい破壊音がするが、いつものことだ。

昼になった。そろそろと昼食に近くのレストランなどに繰り出すため、エレベーターにみんな乗り込む。いい天気だった。からりと雲ひとつない。ビルからオフィス街に出ると、サラリーマンたちが一斉に外に出ていた。車椅子の者、松葉杖の者、点滴の者、バジャマ姿の者、顔面に包帯の者、うじゃうじゃと歩いている。健常者はひとりとしていなかった。みんなどこか病気だった。あちこちから奇声奇態が横行し、異形の者まで走り回る。いつからこんなになってしまったのだろう。みんな社会が悪いのだ。

第2話 モバイル

ぼくはさっきからナオミのことをじっと凝視めているだけでよかった。恋人たちには言葉はいらない。どんな美辞麗句を並べ立てたところで嘘になる。君を表現するには言葉だけでは足り

ない。かといってビジュアルだけでも騙される。そんな光景は前世紀で終わっていた。ぼくらは互いの脳皮質にマイクロチップのモデムを内蔵していた。テレパシーという特殊能力がなくてもぼくらは互いの心と心で交信できる。だからこの喫茶店も多くの恋人たちがいても、静かだった。会話がなくなって何年経ったろう。音楽以外に雑音もない。声を発することも忘れてしまった。

ただ、あまりに互いの考えていることが赤裸々なので駆け引きも嘘もなくなって、恋というゲームがつまらなくなったのも事実だった。

(いや、わたしの下半身を想像していやらしい)

ぼくの思惟に入り込んでナオミはそう云い、ぼくを睨んでいた。ぼくはできるだけ変な想像をやめるように頭を叩いて別のことを考えようとしていた。ぼくの性欲が昂進してくると、ウエイトレスのミニから伸びた細い足まですべてがセックスと関連づけられてしまう。ウエイトレスもぼくを軽蔑するように横目を見た。(彼女がいるのに、どうして男ってそうなの)とウエイトレスの声が送られてきた。いかん、いかん。できるだけ健全なことを考えるようにしていると、昔の別れた女がちらりと出てきて、急に服を脱ぎはじめたりする。

(あなたって、最低)とうとう、ナオミは切れた。席を立ち上がり外へ出てゆく。ぼくは周章でナオミを追いかけた。勘定を済ませると、雑踏にナオミの後ろ姿を探した。いろんな人間の声が入り込んできて、ざわざわとうるさい。混線しているように、(あんな女と寝たい)(車が欲しい)(自殺なんかじゃない、おれが殺した)あんまり騒がしいのでモデムのスイッチを切った。すると耳で聞こえる音だけになる。

ナオミは、いたいた、公園のベンチですんでいた。(みつかったか、謝っても許さない)(でも、君の疑いは尤もだが、体だけを求めてつきあっているわけではない、ぼくの心を読んでほしい)(解ったわ、あなたはわたしと結婚まで考えているのね)(そうだ、いまここで君と結婚しよう。君のすべてが欲しい。君の過去も考え方も)

ぼくらは互いのハート・ディスクを無線LANで接続しあった。すると一瞬にして互いの過去、思い出、性格、思想を共有することになった。ぼくはナオミの肉体に自由に移動もできる。初めて女性の体というものの感覚を知った。もう言葉はなにもいらぬ。君はぼくであり、ぼくは君そのものなのだから。

第3話 エレホン

サラリーマン氏は同僚と別れて、まだ呑みが足りないと、裏通りの見なれぬスナックに入った。終電までまだ一時間はある。給料日くらい贅沢にゆきたい。カウンターだけの狭い店だった。客はいない。外人のバーテンがひとりグラスを磨いていた。カラオケもない。ジャズが低く流れている。しけた店だ。サラリーマン氏はいまさら引き返せないで、とまり木について無口なバーテンにビールをオーダーした。すると、バーテンは判らないといったジェスチャーをして、早口の英語でまくしたてる。「なんなんだ、この店は。メニューも英語か。面白いじゃないか」ま

だ若いサラリーマン氏は言語を英語に切り替えてバーテンにからんだ。相当酔っていた。バドワイザーが出た。

「こんな不況の日本でスナックなんて儲からないでしょう。本国のほうはまだ景気がよさそうだけど」と、切り出すと、バーテンは首を傾げて「Japan?」と聞き返すのだ。「そうだ、この役人天国の腐敗政治の日本だよ」「フハイ?」とバーテンは口髭を摘んで聞き返す。「おれたちサラリーマンがどんなに働いても、借金をかかえてしまった国は税金で搾り取る国だよ」バーテンはますます解らないといった顔をする。「いくらあるんだ、その借金というやつは」「四百兆を超えている。国家予算の五倍だ」バーテンは首を横に振り、「ありえない。そんな国が成り立つわけがない」と、笑う。「加えて、官僚の汚職、天下り」サラリーマン氏は発憤してビールをぐっと呷る。

ドアが開いて外人の二人組が入ってきた。常連の客らしい。「おい、知っているか、日本という国から来たと云っている」バーテンが訊くと、二人とも笑って、「そいつは太陽系にあるのか、どうみてもインベーダーには見えないが」

サラリーマン氏はむっとして立ち上がった。バーテンはそれを制するように、「ここに世界地図が書いてある」と、旅行ガイドブックを開いて見せる。「おまえの日本という国はどこにあるのだ」サラリーマン氏は子供扱いされ、からかわれていることにますます怒りがこみあげてくる。「ばかやろう、おまえらのいま立っているところが日本だ。ここだよ」と、地図のアジアの端を指さした。指したところは太平洋だった。「なんだと?」サラリーマン氏は目を疑った。あるべきところに島がない。中国からいきなり太平洋だ。日本がない。「みんなで、おれを馬鹿にしているな」むらむときた。すると外人三人、腹を抱えて笑うこと。頭にきてサラリーマン氏はドアを蹴って外に出た。真夜中だったのが、いつの間にか真昼だ。獣のような熱い太陽が天中にある。しかも辺りは荒野だ。緑も建物もない荒涼たる砂漠だ。東京ではない。駅はどっちだ。ここはどこだ。おれは、どうなっちゃった。サラリーマン氏は炎天下のどこにもない国をさまよっていた。

第4話 平成方丈記

おれは車の中で暮らしている。鉛の箱を後ろに積んだ保冷車を改造した車だった。かつて乳製品を運んだというパネルバンの内側に薄い鉛板を貼った。さらに、箱の外側にはすべて太陽電池のパネルを張り巡らした。車は太陽エネルギーで走るソーラーカーだった。箱の内部は一間×一間の方丈になっている。畳二畳の広さに折り畳みのベッド。こいつは倒すと長椅子とテーブルになる。電灯もソーラーなら、密閉されて窓もない箱から外を覗く潜望鏡がモニターに車の周辺を映し出す。小さな冷蔵庫にエアコン、カーコンポからはMDの音楽。ノートパソコンに携帯電話。電磁調理器で炊事もできる。箱の隅にはおれがひとりようやく立てるファンシーケースのような防水のシャワー兼トイレまでついている。食料や水も漢方、非常食を中心に一月分は積んでいた。おれの過去はたった三枚のDVDにぎっしりと詰まっていた。かつていた家族のアルバム

、膨大な日記、ビデオ画像。思い出はすべて薄い円盤に保存されていた。百科事典や世界各国の翻訳機はパソコンにインストールしてあるし、読みたい小説は千冊以上がやはり薄いメディアに保存され、いつでも読める。テレビもラジオも新聞もネットで配信されて全世界の情報がリアルタイムに入ってくるのだ。ここは素敵なおれの書斎であり寝床である。かつて荒れた京の町外れに鴨長明が蟄居した庵に車をつけて移動させたいと、長明が書いていた実践だ。おれの人生のすべてがここにある。ヤドカリのようにジプシーのようにおれの生活そのものを背負って歩くようなものだ。

女房、子供が出てゆき、家が差し押さえになり、会社は倒産。おれはとうとうひとりになった。街はおれたちを見捨てた。税金は高くとても払えるものではない。そのためにおれは住所不定、無職になり、流浪の民としてこんな車上生活をするようになった。国籍まで離脱してコスモポリタンになってからは意志のあるホームレスとして厭世生活に入る。人間とのかかわりもなく、親姉弟とも離縁され、社会と隔絶したひきこもりの毎日。どこに住んだっていい。山がいいと思えば山奥まで車を走らせて格好の場所に滞在する。どろどろした街は嫌いだった。食料は天然の菜食を主にしていた。危険な食品は何も信ずるものがない。おれたちを搾取する政府の世話にもならないが、びた一文税金も払わない。高等な乞食家業は三日やったらやめられない。自由であるということの真の意味が判ってくる。

遠くの街から煙が上がっている。恐らく暴動が起こっているのだ。超インフレと重税にあえぐ生き残った市民が焼き討ち、打ち壊しをしているのだ。隣国との戦争も始まった。原子力発電所が狙われた。おれは恐る恐る外に出てみた。放射能は測定されていない。久方に出た外の空気はどろりと濁っていた。

第5話 その他

学究派のSは会社では営業向ではなかった。くよくよ考える、納得ゆくまで先に進めない。そんなだから、営業から商品管理部へ配置転換されたばかりだった。几帳面で細かい性格が適材だった。

ある休日にひとりアパートで朝食を撮っていたSは重大な発見をすることになる。休みとはいえ正確に六時には起きる。独身でもだらしない生活は嫌だ。きちんと正坐して、ハムエッグとトーストの朝食。食卓に置いたハムの包装を見て、Sは目を見張った。それは、ハムの原材料名の表示の印刷だった。(豚、羊、馬、その他)と明記してある。主要原材料は混入の多いものから順番に記載するきまりは知っていたが、成分の肉の中の「その他」が気になりはじめた。パッケージにお客様相談室というフリーダイヤルの番号があったので、Sはさっそく電話してみた。女性の係が対応した。

「あのう、原料のですね、中にその他とあるんですが、具体的に何が使われているんですか」女性の声は上づっている。－異物混入とか、商品の苦情ではないんですね。それでは担当の者と替

わかります。次に男性が出る。－その他ですか、配合については食品衛生法並びに表示義務としましては省略が許されておるものですから、それに会社といたしましては企業秘密の点多多ありまして、公表できないこともありますので…。

「そんな隠すようなものが入っているんですか、〇〇ハンバーガーなんか、食用みみずをバンズパテに使用しているという噂もありましたし」－まさか、お客さん、根も葉もないデマですよあれは。昔と違って食肉はスーパーへ行かれても判りますように、高価なものではなくなりました。安く輸入できる時代にわざわざ別のものを混ぜる手間暇のほうが大変ですよ。と、押し切られてしまった。何かすっきりしない。きっとSは気になって夜は眠れないのだ。

Sは外出した。足はスーパーに向いている。「その他、その他…」とぶつぶつ呟きながら。食べられる肉というと、しかも安く量産可能なものは、鶏か、繋ぎのウサギか、はたまた鼠か。あれやこれやと考えているうちにスーパーに到着する。ちなみに他の食品を手にとって見ると、ジュースもレトルトカレーもお菓子も(その他、その他)の行列だった。スーパーの店長がマイクで叫んでいる。「ポイントカードをお持ちのお客様は2番レジでお会計ください。その他のお客様は…」「何？ その他だと」Sはつつかと店長のところに大股で歩いてゆくと、「その他とはなんだ、具体的に云え。なんでも省略するな」怒ったSに何事かと血相変える店長。「カードをお持ちでないお客様は3番レジの方へ、でよろしゅうございますか」小声で店長は照れ笑い。

店内のテレビでニュースをやっていた。－近頃、失踪する若い人が増えております。しかも、ふくよかな肥満タイプの女性が多いのが特徴で、警察では対策本部を設置してなんらかの共通点で捜査している模様です。

Sは食肉コーナーを通りかかる。冷蔵ショーケースの中は空っぽだった。張り紙がしてある。「ただいま、狂牛病だけではなく、その他の肉にも病気が発覚しましたので当分販売を自粛いたしております」

第6話 抗 菌

市太郎に初孫ができた。なにか恥ずかしいやら嬉しいやら。そそくさと東京の孫の顔見たさにはばあさんと上京した。お祝いにベビー服とベビー毛布。ばあさんが夜なべして縫ったおしめ。どっさりとかさばるが、たいして重くはない。上野駅から地下鉄、私鉄と乗り換えて、郊外の団地へと向かう。ひとり娘が商社マンと結婚したのは去年。待望の男の子が生まれたのは先月。名前はジョージ。どうして譲治ではないのだと電話で訊くと、亭主の趣味だとか。なにか外人みたいだなとばあさんと笑う。時代が変わったのだ。

ふたりが団地の娘の部屋に着いたのは昼だった。娘は少し肥ったような顔に所帯じみていた。もう母親なのだという感じが娘を遠ざけていた。孫のジョージはベビーベッドできろきろと目を開けていた。「どれ、おじいちゃんだよ」と市太郎が「おじいちゃん」という言葉に慣れない羞恥をもって云い、抱き上げようとすると、

「待って、ふたりとも手を消毒してからよ」と、娘は両親の手に抗菌スプレーをかけた。ふたり

とも顔を見合わせて呆れていた。市太郎は抱き上げると、「重いな、五千を越えたか、おお、目鼻立ちがはっきりしたいいい子だ」と云い、つい頬擦りしてしまった。

「何するのよ、お父さん」娘は半狂乱になって赤ん坊を取り返すと、消毒用ガーゼで頬を拭いていた。「病気が移ったらどうするの」「病気って、なにも風邪ひいているわけでもないしな、おまえ」

お昼はコンビニ弁当だった。ばあさんは、冷蔵庫の中が空なのに驚いていた。台所には包丁もまな板もない。味気ない弁当を三人で食べて、「おまえ、いつもこんなもの食べているのかい」と、ばあさんが信じられないといった食傷気味の声。「ひとりで作る気はしないわ」「晩御飯はどうしているんだい」「だいたい外食ね。近くに自然食レストランがあるの。有機野菜や無添加の材料で安全なのよ」「ふうん」ばあさんには判らない。水道にもなにやら機械が取り付けられている。「あれは水道水をイオンで浄化するの。東京の水はそれでも飲めないわ。飲料水はペットボトルでミネラルウォーターを買ってくるのね」「この機械はなんだね」さっきからファンが鳴っている。「これは空気清浄機よ。エアコンにもついているけど、ダニや埃をシャッタアウトするのよ」娘はそう云いながら、やたらとさっきから部屋の床などにスプレーを撒いている。「それは？」田舎から出てきたふたりにはすっかり異文化である。「これは殺菌もするけど、部屋の匂い消しね。お父さんたちが外から雑菌を持ち込んだから、退治しなくては赤ちゃんに大変」ばあさんは呆れて皮肉も出る。「そんなものかねえ、無菌状態で育てて、どんな子になることか」本棚にはずらりと育児書が並んでいる。部屋には見慣れないカプセルが置いてあった。赤ん坊の寝床だ。外敵から守れるし、地震がきてものが倒れても安全な設計だという。強化ガラスの保育器か。市太郎は独り言を呟いた。おしめもいらないと断られた。そんなもの誰も使っていないという。ベビー服も化学繊維の安全なものでなければ着せられないと拒否。お祝いは無駄になった。

市太郎はカプセルの中で寝息もたてずに眠る孫を、まるで貴重な実験動物でも眺めるように、恐る恐る見ていた。それは人間の子どもではない、異星人のようにも見えた。

第7話 味盲のグルマンたち

テレビのチャンネルを変えるたびに料理バラエティ番組ばかり。インタビューに応えた娘は、食べたいので喉に指入れて吐いても食べると云っていた。ローマ帝国が滅びるときもそうした墮落した奢侈が横溢していたなど、道夫は忌々しく思いテレビ消した。と、取引先の専務から家に電話が入った。—お休みのところどうも。今夜、美食倶楽部のパーティがあるのだが、欠員が出たんでどうだ、来ないか。

断りきれない相手だったから、正装して指定のホテルへでかけた。あまり気乗りがしない会食だった。シャンデリアの下がるロココ調のホール、趣味が悪いと道夫は落ち着かない様子で席についた。特製のメニューがなにやらフランス語で印刷されている。さっぱり解らない。アペリティフに赤い酒が注がれた。妙に赤い。呑んでみると少し塩っ辛くぬめりとした。「これは？

」とお隣りの社長に訊くと、「これはすっぽんの血とシェリー酒のカクテルですな」生き血は生きそうだが不気味だ。オードブルになめくじの荒塩盛、みみずの裏ごしスフレ、金魚のテリーヌとか。「こんなもの食べられるンですかね」道夫は恐る恐る訊いた。

「あなた、この会は真のグルメの集いですぞ。かのサバランの新しい天体の発見を試みる喜びです」「はあ、お言葉ですが、まだお茶漬けのほうか...」「うおほん、ここの会員はすでに美食に飽きた戦士ばかりです。もう、ありきたりのメニューでは舌鼓を打ちますまい」

道夫は目を瞑ってなめくじだかなんだか解らないものを口に入れた。もの凄い悪臭に吐きそうになるが、ぐっと呑み込んだ。側のワインを呑んで、驚いて吐き出した。みんなの視線が集まった。「まあ、下品な方」と囁く。何だ、このワインは酢じゃないか。コルクは青黴だらけ、おりで濁って百年ものだと馬鹿にしやがって。道夫は改めて回りを見渡した。いずれも財界政界の名士ばかり。「あなた、海鼠は食べますか」「ええ、食べたことはあります」「最初に食べた人は勇気があったでしょう。ひょっとして、われわれは珍味をいまだ発見していないかもしれないのです」そんなもっともらしい理屈つけても所詮第一次欲求の動物のレベルの欲望ではないか。みんなどこか狂っている。道夫は逃げだそうと思った。次々に出てくる。蛙の小便入り蚊の目玉スープ。堆肥のサラダ。

「さあ、いよいよですな、今日の極め付きメインディッシュは何ですかな」ボーイが銀の大皿に蓋をしてテーブルの中央に置いた。ボーイが蓋を取ると「おおっ」と一同からどよめきが起こった。皿の上には若い女の白い生の腕が飾り付けして乗っていた。爪にはマニキュア、指輪までしている。人間の究極の食べ物人間。「それも処女に限りますな」切り立ての生肉はドレッシングでどうぞ。

第8話 めし

御飯から何も唾液が出ない。それは「めし」でなければいけなかった。駅裏の寂れた定食屋の店頭「めし」という張り紙がしてある。学生時代のわたしはいつも腹が減っていた記憶がある。貧乏学生だから一日喰えない日もあった。たまのバイト代が入った日には、その定食屋に寄って大盛の丼めしに豚汁、厚いトンカツ、添え物の刻みキャベツにはたっぷりウスターソースをかけて食べるというささやかな贅沢をした。テレビでは七十年安保のデモの様子を中継していた。すわっ、ゼネストかと思われるほどのデモ隊が都心部を埋めつくして機動隊とこぜりあいを繰り返していた。わたしはノンポリだが、そんなことにかかわっているほど純粹でも生活にユトリもあるわけではなかった。わたしには無縁の世界の出来事のように見ていた。熱い揚げたてのトンカツがまさに目の前にある。思えば昨日から何も口にしていない。腹が条件反射でぐうと情けなく鳴った。さあ、喰うぞとナイフでトンカツを切っていると、外がやけに騒がしい。

「われわれの一6.23の一勝利にいー」「道路を空ける。車両の通行妨害だ」マイクの音量が大きすぎる。そういえば、このすぐ近くに某大学のキャンパスがあるのだ。機動隊と全学連のせめぎあい、いきなり商店街の路上に火炎瓶が燃え上がった。商店はとぼっちりをくわないようシャ

ッターを下ろしはじめる。催涙弾がうちこまれたのか、煙が店の中まで入ってくる。定食屋のおかみさんは、店を閉めるから今日はもう終りだよと、慄いている。こっちはまだトンカツを口に入れていないというのに、冗談じゃない。客の多くは店を出て逃げた。「がっちゃん」と、入口のガラス戸が割れた。投石が飛び込んできたのだ。たて続けに石が飛び込んでくる。わたしの頭にもあたった。それでもくわえたトンカツはくわえたままだ。そうかと思うと、黒ヘルの学生がゲバ棒持って数人が壊れたドアから店内に逃げてくる。機動隊がジュラルミンの楯を手に追いつめてくる。食堂のテーブルはひっくり返され、椅子もバリケードに使われた。「どけ、こんなときめし喰ってんじゃねえ」と、黒ヘルに怒鳴られた。声が必死だった。こっちも必死で店の隅に丼と皿と豚汁の乗ったトレイを避難させて、ゴミが入らないように庇いながら、急いで食べていた。うまいという味覚はあるわけがない。トンカツを喉に詰まらせる。めしの塊で落としてやる。豚汁で流し込む。胸が苦しい。店内は滅茶苦茶になっていた。学生たちを逮捕しようとする機動隊と玄関で殴りあいが始まった。わたしの図上に急須が飛んできた。頭から茶をかぶる。おしんこも飛びかう。

やがて、すべての学生が排除され連行されると、わたしは床に伏せたまま、最後の一切を口に入れた。やはり御飯ではいけない、「めし」でなければ。

第9話 終りに言葉なかりき

古本屋のわたしの店にある日、警察が入った。刑事によって警告文が読み上げられた。

「これらの古書籍には差別用語が多数修正することなく印刷されているので即刻サインペン等で削除しなければ、営業許可を取り消すものである」

わたしはうろたえた。「そんな、何が差別用語かも判らないのに」と、訴えると、「心配せんでいい。ここに差別用語辞典がある。これを購入して調べるんだな」分厚い辞典の中身をすべて暗記しろというのか。それによれば、つい十年前に精神分裂という言葉が廃止されたあと、統合失調症と代えられたが、その言葉も子供たちがバカにするときに使うので廃止になったとある。新しい言葉も十年もたない。それもいつか差別用語になるのだ。いたちごっこだった。使う者の意識の問題なのだが、だんだん過敏になってきて、最近の辞書は薄くなった。使える言葉のほうが少ない。テレビのアナウンサーも回りくどい云い方をするか、うんとかすんと伏字で喋る。○○はとか××はとか、会話の中に意味不明の言語が横行するようになった。隠語も当然陰で飛び交う。

わたしはお上の命令で、しづしづ戦後まもなくの小学の教科書のように、サインペンで夏目漱石の草枕から一ページずつ差別用語を黒く塗り潰していった。これじゃ、読んでも意味が通じない。しかも膨大な古書の山をすべてチェックするというのが、生きている間にできるのか。ポルノ小説なんかすでに発売禁止。それ自体がセクハラ用語で満ち満ちている。気が遠くなってくる。

小説家の多くは地下出版に潜り、それもいつか摘発され牢獄にぶちこまれた。次は古本屋が標的か。ただでも活字離れで本を読まなくなったのに、このままでは人間はどうなってしまうのだ。

新刊書は文字の少ない写真集が多くなり、それだけではやってゆけないから出版社も書店もどんどん潰れた。図書館も利用客激減のため相次いで閉鎖。学校で教える教育漢字も半分以下になり、教科書も薄くなった。当然、子供たちの学力は低下してアホ(これも差別用語だ)が量産される。涙を垂らして口を半開きにした子供たちがゲームばかりやっている。

総理大臣は文部科学省の大臣と密談していた。

「どうだ、進行状態は」「総理、二十年前と比べると学力は半分に落ちました」「そうか、予定通りだな。大学も次々に閉鎖して、これで文句を云うやつが少なくなる」「まさしく焚書坑儒ですな。愚民政策をとることでわれわれの政治がやりやすくなりますな」

一億総白痴化政策はテレビ局と結託して進められた。その次には…。

第10話 廃墟

市長は議会の諮問で返答に窮していた。かつて市街の文化ゾーンと云われた場所に放置されたままの廃屋があった。街の美観を損ねるといっているので市民団体から撤去の署名が提出されていた。だが、市の財政難は慢性的なもので撤去費用にかかる予算も並のものではない。地下一階、地上四階、前庭から駐車スペースまでの広大な廃墟を更地にするというのも時間も費用も莫大にかかる。まして産業廃棄物の処理にも困る。ともかく調査のために市会議員たちが業者を連れてその物件に立ち入ることとなった。

鉄の正門は錆びて鍵穴も定かではない。もう、何十年放置してあったのか。やむなくトラックにロープをかけて鉄扉を引っ張ることにした。重い扉が引き倒されると、調査団はどやどやと前庭に入る。そこはジャングルだった。丈高い草が雑木が建物をも覆い隠している。草刈機でそれらを切り倒しながら進んでいった。ようやく板を打ち付けた玄関に辿り着く。土建屋たちは慣れた手つきで封鎖しているコンパネを剥がしてゆく。もうもうと埃が立ち込める。みんな口にハンカチをあてて、中に入る。天上が高く、中二階の壁にはミケランジェロの天地創造の模写が描かれている。電気は止めてあるから懐中電灯だ。足元の床には何者かが侵入して荒らしたあとがあり、食べ物のパッケージや、本などが散乱していた。あとは物凄い蜘蛛の巣だった。ところどころの窓ガラスは割られ、そこから草や枝が伸びてきていた。自動販売機が壊されている。昔懐かしい缶ジュースが転がっている。議員たちは怖々と一団になって土建屋に続いた。両開きの大きなドアをバリでこじ開けると、全員、息を止めた。「何だ、この匂いは、窒息しそうだ」土建屋は平気で入ってゆく。「黴の匂いですよ」不気味な光景だった。書架がずらりと建ち並び、本がぎっしりと並べられてある。二階まで吹き抜けになっていて、手すり越しに二階の書架も見られた。若手の議員は訊いた。「ここは昔、何に使ったんですか」古株の議員が応えた。「勉強不足だよ。かつて図書館といわれた処だ」「図書館？ 一体何をするとところなんです」と、若い議員。「本というものを貸したりしてな、ここで学生たちが勉強もしていた。そのための資料も

置いてあった」「へえ、これが本ですか。これだけの量の中から開いて調べるのでは、当時の人たちは大変だったろうな」

本がデータベースになってからは、図書館もいらなくなった。本もすべてネット配信になってからは印刷物一切がこの世から消えて久しい。若い者たちは本を見たこともないのがある。博物館に行けば展示しているに過ぎない。

議員たちは市長に報告書を送った。図書館は補正予算で即刻壊すべきであると。

第11話 苦し紛れ

男は気がついたら暗闇のどこか閉所に幽閉されている自分を発見した。どうしてこのような羽目になったのか、考えても解らない。小さいが会社を経営する社長だった。取引先と呑み歩いて、帰宅するときに迷い込んだか、いつもの道とは違うと思った。街灯もない、狭い塀に囲まれている小路に入りこんだと思ったら、そこは外でないことに気づいた。天井も見えないくらい真っ暗だが、建物の中のような感触だった。塀ではなく、迷路の間仕切りのような感じだと、男は思った。窓も出口もない。自分の掌さえ見えない、一寸先は闇なのだ。そうして、さまよい、何日が経つだろう。喉も乾いた。腹も減った。途中で地べたに寝ていたような気がするし、寝ていない気もする。おおいと人を呼んでみる。もう、何度も助けを求めた。声が囁けてくる。返答がないばかりか、誰もいない。男は本当の孤独を味わっていた。誰が、何のためにこんな場所を作ったのか。音もしないのは、防音されているからか。時間も解らない。今日が何日で、今が何時何分なのかも。迷路は手で探りながら、右に折れ、左に折れたりして、なんだか同じところをぐるぐると回っているような気もする。西も東も解らない空間。ひょつとして異次元に迷いこんだか。どうみてもここは別の世界だった。壁を叩いても、堅牢な造りでびくともしない。あまり叩いたので指先から血も流れた。次第に心細くなり泣きたくなってきた。助けを求める声もかすれて出なくなった。体力も急激に衰えてきていた。このまま吞まず喰わず、不眠不休で誰にも看取られずに死んでしまうというのか。男はぞっとした。どれぐらい広いのか、入口も出口もないだっ広い黒い箱の中のような。男は最後の力を絞って走った。狂った鼠のように、あちこちへぶつかっては倒れた。涙と鼻水で顔がべろべろになった。助けてくれ、助けて。男は闇の中で苦し紛れに何かを掴んだ。それは天井から垂れている藁のようなものであった。地獄の底に垂れてくる蜘蛛の糸にも思えた。何かに縋りたい、何でもよかった。男は藁の束を両手で引いた。すると、手応えがあった。どうしたことだろう。いきなり壁が反転して、明るい外の光が射し込んだ。男は目を射られたように閉じた。眩しい、眩しすぎる。壁は開いて外へ出られた。と、男は大勢の人間に囲まれていた。全員が笑いながら拍手をしているではないか。カメラのフラッシュがたかれた。テレビカメラも近づいてくる。テレビ局のアナウンサーがマイクを向けてきた。

「おめでとうございます。この迷路から脱出できた方には、一億円の無担保無保証無利子の融資が受けられます。この幸運を射止めたご感想をどうぞ」

男はおいおいと泣いた。こんなばかばかしいことを考えた社会にか。

第12話 出征

「どうしても、行ってしまうのね」婚約者は青年に縋り付いていた。一時も離れているのが辛い。とうとう、来るものがきたという感じだった。さ来月に結婚式を控えているというのに、

選ばれたからには仕方がない。これからより厳しい訓練が始まる。敵地へ乗り込むまで、徹底的にしごかれるのだ。婚約者は青年のためにお百度参りもした。お守りも与えた。神仏に祈願するだけでは気持ちが修まらなかった。真冬に水ごりまでして、自らの体を痛めつけることで、青年の気持ちを分かちあいたいと願った。

出征の前の晩は二人で過ごしたが、青年は君を綺麗なままにとっておきたい。勝って迎えにくるまで待っていてほしいと、この世に未練を残すことで、より強い自分がいるものと信じたかった。

雪がちらついていた。いよいよ、招集の日、青年は婚約者とわざと目を合わせなかった。それだけ辛くなるのを振り切るように。仏壇に手を合わせ、家族に正座してきちんと決意を述べた。

「家名に恥じることなく思う存分活躍して参ります」

駅のプラットホームに人だかりができていた。これから東京へ発つ列車の前で、襷に名前の書かれた制服の青年が見送られてゆく。日の丸の小旗を手に手に激励の歌まで合唱された。町長は青年の壮行会を終えたばかりだった。「○○君はこれから敵地へ乗り込んで、鬼畜米英ものともせず必ずや手柄立てて帰ってくるものと確信するものであります」ついで、助役が「○○君の武運長久を祈願して、万歳、万歳」青年は拍手で送られてゆく。ホームの柱の陰では婚約者が泣いている。側で母親が慰めている。友人知人からは日の丸への寄せ書きが贈られた。君が代が誰ということなく低く歌われていた。父親は息子が出征してお国のためになることを誇りに思っていた。立派に闘ってくるんだ。撃ちてしやまん。

列車はゆっくりとホームを滑り出す。町内の人たちは口々に、

「いい息子さんを持ったもんですな。町の名誉だ。射撃の腕前もすごい。」「んだ、おらほの町の誇りだ」

列車が小学校の校庭を過ぎるとき、子供たちが校庭に整列して、日の丸を振っていた。青年は直立不動のまま、列車のデッキに立ったまま、敬礼していた。

懐かしい故郷の山が白く雪に煙る。平野も裸木や神社が雪におおわれて、涙さえ出てくる。青年のポケットでなにか鳴るものがあった。青年はおもむろにケイタイを取り出すと、「おお、君か」と電話に出た。相手は婚約者だ。「大丈夫だよ、オリンピックでは金メダルを君にプレゼントするよ」

第13話 アナーキストたち

消費税が二割になったあと、所得税も倍以上、あらゆる税金が倍以上になると、国民の所得の半分以上が持ってゆかれる時代になった。当然可処分所得が減るので消費は落ち込み、商店街は全滅、通販までが半減した。構造改革は不発に終わっていた。その帳尻が国民に押しつけられる最悪のシナリオになった。それでも羊の国民は怒らない。怒る元気もなく疲弊していた。働く若い人たちもやる気がない。失業者は溢れ、自殺、犯罪が倍増した。こんな国にとっても住んでいられないと、余裕のある者たちはごっそりと他国に逃散した。海外で少ない年金でも物価が低いか

ら日本以上の生活ができる。日本はデフレのあと、超インフレ時代を迎えていた。税金を滞納している家に徴収に係りが向かう。玄関のドアに「不納税組合の家」という看板がある。「わたしたちは税金を納めません」と張り紙。係りは渋い顔して、インターホンを押す。「この家もか」奥さんが出る。

「税務署の方、看板が見えませんか？」「そんなことをしても無駄ですよ。法律で決まっている以上、差し押さえされます」「それは日本の国民だからでしょう。わたしたちは日本を捨てたんです。税金を拒否しますが、その代わりに、国に何も求めません。期待しません。どうぞ、勝手にやってください。選挙権も保険も年金も道路も学校もゴミ収集もいっさい要りません。国の世話にはならないんですから、当然納めなくてもいいんです。文句があったら組合に云って頂戴」係りはうんざりしていた。いまや、組合は全国規模に膨れあがって、国民の三割が加入する勢いだ。学校も組合運営、車も乗らない。泥棒が入っても警察を呼ばない。火事でも消防も呼ばない。みんなで自衛する。

政府は対応に苦慮していた。すでに財政は破綻状態。国会議員でさえ、報酬を貰えないありさま。国の資金は底をついていた。裁判所が強制執行しようとしても組合員がスクラム組んで阻止する。生産者も販売者もあらゆる業界が組合についた。すでに第二国家の様相を呈してきていた組合は助け合い、分けあい精神で、ひとつのコミュニオンだった。

日本は破産宣告した。その宣告先の裁判所も破産だ。裁判官も逃げた。困った、誰に破産申し込みすればいいのだ。日本は無政府状態になった。

ある日、組合の支部にベートーベンのような髪をした老人が訪れた。

「わたしも組合に加入したいんだが」「お名前は？」「コイズミと申します」係りはじろりと老人を見た。どこかで見たことのある。「組合費は要りません、みんなボランティアですから。あなたにはそうですね、ゴミ収集をして貰います」役人はいない。定職を持ちながらのボランティア。自分のことは自分でしなければならない。甘えてはいけない。税金がないからそれくらい。

第14話 ビバ！ アメリカ

「わたしをここから出さない。そうでなければ、大変なことになるだろう。わたしを殺したりすれば、アメリカだけでなく、西側連合軍が報復攻撃するだろう。わたしはアメリカ合衆国の大統領だ。即刻出さない。まあ、FBIが救出に来るのは時間の問題だろうがな。君たちの行動はすでに監視衛星でリアルタイムにペンタゴンに把握されているのだ。わたしを監禁することで、君たちは大きな犠牲をペイすることになる。世界はすべてアメリカの監視下に置かれている。アメリカこそ世界の警察国家として、正義と自由を守るための、アメリカは世界の憲法、法律そのものなのだ。君らの律法なぞパリサイ人のそれで、キリストに相反するものはすべて邪宗で悪なのだ。イスラムもブッディストもその他の宗教もすべては無意味で異端なのだ。全世界からやがては排斥されるべきは異教徒。諸悪の根元だ。キリストに刃向かうものがある限りは戦争は終わらないだろう。キリストはすべての規範だ。正義だ。それはアメリカが大天使としての

使命を帯びて戦うことは神のご意志なのだ。アメリカは神そのものなのだ。神に反抗するものには劫火が下るだろう。ソドムを一瞬で焼き払った見てはいけない、この世のものでない火、それが核なのだ。われわれは神からそのスイッチを手渡されている。われわれにだけその行使権がある。それをなまいきにも、神の最後の審判の切り札の核を保有する国があるというのは許せない。君たち貧しい国はアメリカを規範として見直すべきなのだ。貧しさが諍いを引き起こす。リッチになることだ。そのためには大量生産の大量消費、多少の公害撒き散らしなぞ問題ではない。文化を模倣せよ。ハンバーガーを食べ、コーヒーもアメリカン、バーボンを呑み、クライスラーに乗り、マイクロソフトのパソコンソフトだ。どんどん使い捨てろ、消費は美德だ。この世にドルで買えないものはない。映画はハリウッド、シュワルツネッカーを見ろ、ブラット・ピットを見ろ。アクション映画こそアメリカを象徴する文化だ。正義は最後に勝つ、勧善懲悪のハッピーエンド。敵はイスラムのテロリスト、フセイン、ビンラディン、はたまたキョウサンシュギ者たち。世界は二分される、アメリカにつくか、敵対するか、正義か悪か、白か黒か、フロンティア精神に溢れる、偉大な国家、アメリカ万歳、白人万歳、WASP万歳。判ったか、だからわたしをここから出さない。何の目的で、こんな鉄格子の部屋に閉じこめておくのだ」

白衣の医師が二人、病室を見回りに来ていた。

「この患者はああして一日中、叫んでいて疲れないのかな」

「自分をアメリカの大統領と思いこんでいる妄想もひどいものだが」

第15話 援交

銀行の貸し渋りが新山の会社にも及んだ。融資条件を厳しくしてきたので、毎年借りていた繋ぎ資金が出なくなったというのだ。社員、十人の零細企業の社長の新山には、不測の事態だった。このままでは今月の給与が払えないかもしれない。売上は落ちこんでいたし、受取手形のサイトは長くなり、資金圧迫をしていた。景気はどん底だった。

新山は虎の子の保険を解約しようと、自宅に戻ったとき、家のどこかでメロディが鳴っていた。どこで鳴っているのかと、辺りを見回すと、食卓の下に高校の息子のケイタイが落ちていた。忘れ物なのだ。新山は操作方法を知らない。適当にボタンを押すと、女の声が聞こえる。

「タケシ、いま学校なの？ 放課後に茶店に絶対来てよね。一茶店ってどこの…。新山は親子で声が似ているから、息子の彼女も間違う。一ばか、大通りのクリスティに四時よ。判ってんの？

「四時か」新山は何を思ったか、ケイタイのボタンを押すうち、息子の女友達のアドレスをみつけた。すべてメモした。そうして、のこのこと時間通りに指定の茶店にでかけた。

可愛い制服の女子高生が待っていた。いつも息子のところに来る子だから、新山は顔見知りだ。向こうから挨拶してくる。「おじさん、どうしてここへ」おどおどしている。新山はけろりと、「息子の代わりに来た。ビール、呑んでいいかな。おじさん、お金ないから」「ええ、どうぞ」と、彼女は財布を覗いていた。一万円札が見えた。最近の子供は金持ちだった。親のほうで貧乏だ。「君にお願いがあってね、わたしと援助交際をしてくれないか」新山の弁に彼女は目が点

になる。「ええ？ 親子丼ってやつ」「いや、そうじゃなくて、おじさんに小遣いをくれないか。ケイタイに何万円も払っているのなら、その半分でもいいから。そうしたら、うちの息子となにしても許してやるから」「信じらんない」「会社が大変で、息子も高校やめないで済むから。このビールも君の奢りで悪いな。今日のところは一万でいいから、頼む」彼女は渋々万札置いて逃げるように茶店を出ていった。どうれ、次に誰を呼び出そうかな。新山はメモしたケイタイ番号を上から順に電話した。「ああ、俺、新山だ。いま大通りの茶店。クリスティにいるから、来ないか。ところで金持ってる？ 一万でいいんだ。どうしても月末までいるんだ」

息子は美男子だからもてるのだ。親子で利用しない手はない。

第16話 ミンシュシュギ

国際政治学を専攻する村田は大学の派遣でM国へ飛んだ。世界で最も民主主義が行き届いた国として注目を浴びていた。人口五千人の小国だが、プラトンの国家論からすれば、広場で声の届くちょうどいいサイズなのだ。

空港で荷物を受け取ると、タクシーを待っていた。すると、側に置いたスーツケースが引き寄せられた。警察へ訴えた。大事なデジカメからパソコン一式が入っていた。幸い財布とパスポートはポケットで助かった。警察はふんふんと聞いているような聞いていないような態度だ。村田は英語でまくしたてた。「被害届を出すのに調書も取ろうとしないんですか」警官はようやく面倒くさそうに重い口を開いた。

「あんたはこの国が初めてらしいな。この国では引き引き、万引きは罪にはならないんだぜ」村田は愕然とした。「悪いことが許されるんですか」「仕方ねえよ、法律がそうなっている。盗られる方がまぬけなんだと制定されている」「誰が、そんなバカな法律を作った」わなわなと震えている。「国民の多数決で法律も改正できる。みんな盗みけがあるんだな。それは俺も否定しねえ。という国民の総意が法律だ、判るか」村田は啞然として声も出ない。とんでもない国に来たと思った。

タクシーで唯一の国立大学へ向かう。そのタクシーもメーターがない。これは白タクかと聞くと、「とんでもない、人を見て料金は決めるんでさ」と、運転手。この国のデパートでも商品には定価というものがない。みんな儲けようという下心があるから、法律でそう決まったという

。大学の正門から入ると、女子大生が悲鳴をあげて飛び出してくる。それを男子学生が追いかけている。庭園の草むらに嫌がる女子学生を引きずりこんでレイプしている。村田は驚いて、表通りを通りかかった警官を呼び止めた。

「強姦だ。助けてやってくれ」すると、警官はにやにや笑って、「おまえが助けてやりたいのか、いくら払うんだ？」「払う？ 有料なのか。それとも賄賂を要求しているのか」「賄賂だなんて古い言葉だ。サービス料と云うのだ。昔のチップと同じで正当な要求だ」「犯罪を取り締まるのが警察ではないのか」「この国ではセックスはなにをしても合法だ。みんなが求めるものはそ

れが法律なのだ」

街のあちこちで銃声、悲鳴、怒号。どうなっているんだこの国は。村田は呆然と突っ立っていると、大学の教授が側に来て云った。

「民主主義で戦争も起こります。人間の欲望のままに多数決で決めた国がこれです。いつも民衆が正しいとは限りません。日本もそうならないようにね」

第17話 会社崩壊

一体全体どうなってしまったんだ。社長以下、役員は取締役会で頭を抱えていた。階下の騒音が上まで響いてきていた。総務部長が飛んできた。頭から何故かスパゲッティをかぶっている。

「し、社長、何とかしてください。もう手がつけられません」

階下の総務部ではキャーキャーと女子事務員が走り回っている。社員の持ち込んだコンポからハードロックがががが。机の前で美顔パックする女子、ゲームボーイをしている男子、机の上にはハンバーガー、コーラ、ポテトチップ、茶髪で派手な化粧、パソコンでアダルトサイトを覗いているやつ、ケイタイでメールを送るやつ、机に脚をあげてマンガを読むやつ。恐る恐るドアが開いた。取引先の来客だったが、「失礼しました」と、戻っていった。「おかしいな、確かにこのフロアだと思ったが、こんなビルに幼稚園が入居していたかな」

ようやく社長が重い腰をあげた、というより役員に背中を押されていやいや。総務部のドアを開けると耳をつんざく音楽。

「あのね、君たち、頼むから仕事をしてくれないかね」社長はできるだけ社員を刺激しないようにやわらかく諭した。女子社員が、指さして下品に笑う。

「あっ、このおじさん見たことがある。あんた誰だっけ」社長の顔も知らない。

ましてや、名前なんて知らないかもしれない。むっとしたが堪える。「ばーか、社長じゃねえか」と、三年社員が女子の頭を叩いた。「そうか、入社式以来見たことないもんね、あはははは」社長は怒りを堪えてわなわな震えていた。総務部長は土下座までして社員に頼む。「この通りだ、働いてくれ、業務が滞って、このままでは整理もつかない」誰も聞いていない。無視して遊んでいる。社長は改めて会社の現場の実状を見た。思えばここ数年で社員の質が低下した。面接にそんな若者より集まらなくなった。言葉使いも礼儀も常識も知らない。命令も上下関係も無視。タメ口、若者言葉、制服の裾を勝手に短くする。学級崩壊の子供たちが社会へ出てきたのだ。常務も専務もひとりひとりに頭を下げる。

「るせえんだよ、そんなに仕事して貰いたかったら遅配している給料払えよ」

「そうよ、どうせこの会社来月で業務縮小、わたしたちリストラだもんね、この就職難に再就職もあるわけじゃなし、なんで残務整理しなきゃなんないの」

「債権投資が失敗したツケが社員の首切りじゃ、やってらんないでしょ。ざけんじゃないって感じ。おまえら、自分の責任棚上げしてのうのうと会社に居残る神経、ちょっとロードーシャをなんだと思ってんの」すごすごと役員一同退散した。

「ウイスキーあったじゃん、いまから派手にパーティやろ」音量はアップした。

第18話 DV

ここは戦場だった。台所に椅子や机を積んでバリケードを築いた妻は、庖丁を手に、「来ないで」と、絶叫している。台所に蒲団もおまるまで用意していた。冷蔵庫を確保しているから、水と食料は豊富だ。すでに闘いは持久戦の様相を呈してきていた。その亭主はというと、ウイスキーの瓶を片手に金属バットも持ち、さんざん暴れた後だった。ガラス戸は割れて、食卓はひっくり返された。居間を橋頭堡として、ソファに陣取りテレビだけは占領していた。「ばかやろう、亭主をなんだとっていやがる。仕事にあぶれたからお払い箱かよ」と、玄関のチャイムが鳴った。亭主は、また近所の通報で警察が来たのかと、いきり立って玄関に飛び出た。ドアを開けると、そこに一人の青年が犬を連れて立っていた。

「こちらですか、その、つまり、夫婦喧嘩が絶えない家というのは」礼儀正しい青年の態度にバカにされていると亭主は思い激昂した。「なんだと、見せ物じゃねえや」すかさず、青年は名刺を差し出した。それにはこう書かれていた。

頭狂大学大学院理学部動物生態研究所研究生 牛丸祐二

「で、頭大のエリートさんが何用だ」「実は、夫婦の精神的軋轢とドッグフードとの関連性についてという研究テーマで論文をまとめているところです。そこで、サンプリングをフィールドワークで採取しているわけで、是非ご協力していただきたいと」「何ごちゃごちゃと訳の分からない御託を並べていやがるんだ、帰れ、帰らないとぶん殴るぞ」亭主がバットを振り上げると、犬がいまにも噛みつきそうに吠えたてた。亭主はひるんで後ずさりして、廊下まで逃げた。青年は「お邪魔します」と、慣れた様子で図々しくも人の家に犬を引き連れて入ってゆく。「なんなんだ、おまえは、なんで人の家に勝手に入ってくるんだ、その犬をなんとかしろ」「この犬は噛みつきます。研究材料ですが、いままで攻撃したものに対しては容赦しないほど獰猛です」つかつかと居間まで入ってゆく。亭主は後退して「よせ、近づけるんじゃない」と、びびっている。それをバリケードの陰から見ていた妻は援軍来たと大喜び。「あんたの様だったらいいわね、何よさっきの勢いはどこへいったのよ」と、笑うこと。「うるせえ、おまえが呼んだのか、この男はおまえの間男か」亭主は妻に唾棄した。妻も負けてはいない。「何よ、元はといえばあんたの浮気が原因じゃないの、よくもぬけぬけと云えたもんね」「なに、ぶち殺してやる」と、いままで攻撃体勢に入っていた犬が、「キャーン、キャーン」と、萎縮しはじめた。青年はメモを取り始めた。「ふむ、なるほど、変化が見られた、犬はそっぽを向いてげんがりしていると…」モノが飛び始めた。青年は退散しながら、「やはり夫婦喧嘩は犬の餌にはならずか…」

第19話 子捨て街

ひきこもり、ピーターパンと呼ばれる青年が増えている。花岡の息子の修一もそうだった。進学するわけでもなく、就職するわけでもなく、だらだらと家において、テレビを見たり、音楽を聴

いたり、プレステをやったりして勉強も嫌い、働くのも嫌いとするかじり。いい若いものがこれでいいのかと、将来を案じる夫婦は、何度話し合っても諭してもやる気のない息子は無反応。「地元就職が皆無」というのが息子の弁。食べて寝てばかりだから運動不足で肥満になって我が儘し放題。友達もいない、彼女もいない、何を生き甲斐に生きているのか。我が子ながら情けなくなる。せめてアルバイトぐらいしてくれてもいいのに。

夫婦で話し合った。「よし、修一を捨てに行こう」犬猫でもあるまいし、どこに捨てるというのか。粗大ゴミ、生ゴミにでも出せるのか。

「修ちゃん、家族で旅行に行こうと思うの。あんたも退屈でしょう。たまに気分転換にいいわよ」と、息子を騙して車に乗せた。手ぶらで乗り込んだ息子はちょっとドライブくらいにしか思っていないのだろう。母親はバッグに息子の着換えから洗面用具、シュラフなど密かに用意していた。

車は高速道路を東京に向かっていった。できるだけ遠い街がいいと思ったが、東京なら何か生きる縁があるだろう。行くだけで一日がかりの行程だった。途中、三度の食事はサービスエリアのレストランで摂った。修一は大喰いで一度にカツ丼とラーメンとピザを頼み、それも幼児のように食べ残す。両親とも目を伏せていた。躰は親の責任。恥ずかしくて周囲の視線が気になった。

（この子は一人で生きてゆけるのだろうか）と、母親は泣きたいほど心配していた。父親は、その手をかけすぎのおまえが悪い、依頼心が強くなって自立できないのだと叱られた。車は首都高速に入った。田舎から出てきて、西も東も判らないが、ともかくどこかのシティホテルへ着いた。今夜は一泊する。親子の最後の夜だった。息子は何も知らない。両親は涙を見せまいと平生を装っていたが、息子が寝たあと二人で抱き合って泣いた。

翌朝、三人で渋谷にショッピングにでかけた。そこで計画は実行される。待ち合わせ場所を決めて息子と別れた。人混みにやがて見えなくなる息子。これだけの人がある大都会だ。生きてゆけるだろう。両親は息子を東京の雑踏に捨てて、ふたりで逃げるように車で高速を突っ走った。妻は追いかけてくるようで後ろばかり気にしていた。「振り返るな、あいつも二十二歳だ。もう子供じゃない」「帰ったら、わたしたちも引っ越しね。あなたの海外赴任についてゆきます。社宅も引き揚げたら、あの子の帰る家はもうないのね」車は猛スピードで夜に逃げた。

第20話 食卓物語

食卓の上に納豆とパン。味噌汁の匂いもない。テレビではモーニングショーの時計がわり。朝から芸能ニュース、誰それが別れたくつついた。パンはミミだけになる。三分の一は捨てられる。みんな出かけたあとのテーブルにはオーブントースターと飲みかけのコーヒー。四人家族で二人分の食事。子供たちは朝食抜きか。

昼は主婦ひとりのせいせいしたカップラーメン。テレビだけが騒がしい。カップラーメンだけでいいんですか。グレープフルーツが出てくる。美容と健康にビタミンC、ダイエット中の奥さんはシュガーカットをかけて食べる。その後がいけない。専業主婦は退屈まぎれに間断なく口が

忙しい。ホテトチップにチップチョコ。掃除、洗濯終わればパート勤務終了。

電話が鳴る。近所の奥さん連中がくる。時計は三時。女三人寄れば姦しい。手土産に結婚式の引き物というハードタイプのレアチーズケーキ。さっそく紅茶が入れられる。ダージリンを紅茶ポットで蒸らすこと三分。あらっ、奥さん、そのブラウスの柄が素敵、どこで買ったのと、もっぱらファッションに関心。音楽はCDでお気に入りクラブ系ミュージック。同じく結婚式で貰った薔薇一輪、やわらかな午後の日差しを受けて食卓に斜めの影おとし。

奥さんたちが帰り、買い物に出かけた誰もいない部屋も束の間、鍵っ子の子供たちがそれぞれ帰ってくる。食卓の上にランドセル。母親からのメモ見て、用意していたおやつホットケーキを遊びながら食べている。結局、ぐちゃぐちゃに掻き回して食べ残す。テーブルの上をちらかしたまま遊びに行った。ミルクが零れている上に蠅がとまる。

奥さんが買い物から帰って、台所は賑やかになる。まつわりつく子供。お姉さんは手伝いもしない。出来上がった料理が大皿に盛られて出てくる。一見きれいだが、よく見ると冷凍食品、インスタント食品、温めるだけとか、炒めるだけとか。加工した後が少ない。完全手抜き。台所でトントンというものを切る音がしなくなった。代わりにチンと音がする。

亭主のご帰宅。風呂上がりにビールが食卓に出る。夕刊見ながらビールに枝豆。今日の献立は中華。ホイコーロにシュウマイ、スープ。いただきますも云わない子供たち、コーラ出して御飯をコーラで呑み流す。また食べ散らかす。食べ残す。買ってきた食材の四割を惜しげもなく捨てた。食料自給も四割。漁師、農家のとれたもの、そのままゴミ箱へ。食卓の上は食器そのまま。明日、かたづけようと、食卓の上のサークラインの電灯が消される。おやすみなさい。やれやれ。

第21話 貧 婚

新郎道彦君は昭和五十年に北村道朗、佳子の長男として生まれ、地元の高校から東京の名門大学を優等でご卒業されました。大学は出たけれどという昭和初期の話にも似て、就職もなく苦労されたようですが、ようやく入社した一流会社もこのたび倒産、現在は無職でおられます。それでも持って生まれたノーテンキの性格が幸いし、全く自らかかった災難を災難とも思わぬ無神経さが救いとなっておるようであります。一方、新婦の美香さんは、昭和五十四年に川原木忠一、寿子の長女として生まれ、地元の高校ではチアリーダーを努めるなど活発なお嬢さんぶりを発揮しておられました。地元の短大をご卒業後、新郎と同じ会社に入社、社内結婚ということでここに至るわけですが、先月の倒産で新婚夫婦ともども失職という憂き目に遭いました。ここにご列席の皆様にお願いがございます。ご両人の再就職を仲人としても強く懇願するところでございます。

本日は新郎新婦とも本来なら羽織袴、文金高島田で皆様の前に晴れ姿をご披露するべきところ、予算をやむなく削るために平服とさせていただきます。また、目の前のお料理ですが、鯛のお頭つきもめざしのお頭つきに変更と、このような諸事情をお酌み取りいただきお許しいただきたいと思えます。また、新婦の父道朗さんの事業が先週の新聞で報じられたとおり、破産いたしまして本日このめでたい席にも債権者が押し掛けるなど、皆様のご祝儀も差し押さえされる受付の騒動を驚かれたと思えますが、事態は深刻であります。家も差し押さえになりましたので、明日から住む家がありません。新婚生活をダンボールハウスでというわけにもゆきませんので、どなたか、ここにおいでの皆様の中でアパートを借りられるようになるまで下宿させる方はおりませんか。ご覧の通り、新婦はいま流行りのできちゃった結婚で新年早々、予定日を迎えます。これから冬に向かって、家もなく、仕事もなく、食べられず、寒空の下で生まれてくる子は一体どうすればいいのでありましょう。のちほど、新郎新婦によるキャンドルサービスの代わりに、帽子を持って皆様の席を回りますので、どうか義捐金をお与えくださるよう、切にお願い申し上げます。

披露宴のあとは、お二人はハネムーンの代わりに近くの公園まで水筒弁当持参で遠足をする予定であります。なにからなにまで涙を誘う光景でありませんか。これから恐慌の日本でどなたも大変な時代に入ってゆきます。そんな中、未熟な二人ではございますが、ボロを着てでも手を取り合って生きてゆく誓いをされました。どうか、ご列席の皆様にはこのお二人に末永く施しを賜りますよう、ご両親に代わりましてお願いいたします。

第22話 ラッキーカラー

陽子は以前名前を耀子といったが、姓名判断でこの陽子にしたのだが、その間には洋子、容子、庸子、葉子と五回も名前を変えていた。買い求める姓名判断の本によって判断が違うからそ

うなった。印鑑もそれに従って替えたので高くついた。陽子は自分で自分のことを決められない弱さから占いに頼るようになった。毎朝のテレビの占い、新聞の占い、週刊誌の週間占い、高島の占いと、朝は欠かさず見ることにしている。それでも不安なので、ノートパソコンに入っている占星術をやり、トランプを並べての占いまでするという念の入りよう。

今日は当たりの日だという。何をしても当たる日だというので、会社の帰りにでも宝くじを買おうと決めていた。別の占いでは、思わぬ大金が入る予感があるという。ラッキーカラーは「赤」、髪にヘアトニックがいいとか、アイテムに腹巻きとあったので、父親のものを借りてした。男性向けの占いも信じてしまう怖さがあった。ラッキーアイテムに鍋の蓋とあるから会社まで持って行く。今日は赤いスーツにハイヒールと「赤」で統一してみた。ふんぷんと男の匂いを漂わせて片手には何故か鍋の蓋。

地下鉄駅の階段が十三あると二段はぽんと跳ねる。切符の数字を足してカブで占う。けしって四両目には乗らない。みんなちらちらと陽子を気にしている。見て見ぬふりをしている。それは会社でも同じだった。更衣室で制服に着替える。同僚が腹巻きを見て驚く。指で頭の上に輪を描く。ストッキングも赤ならブラジャーまで赤。仲のいい女子社員が隣で囁く。

「今日は赤なの？ 昨日は黄色だったわね、おとついは黒だった。あんた、色別に上から下までフルセットで持ってるのね」くっくっくと笑う。本人は至って真面目だ。

「陽子くん、その鍋の蓋はなんとかならんのかな、昨日は湯たんぽだったし、おとといは哺乳壺だった。それでいいことあったのかね」上司は呆れて訊いた。

「ええ、昨日は大きい商談がまとまりましたし、おとといは千円拾いました」あまりの真顔なので誰も何も云わない。

会社をひけて地下鉄で帰る。おかしい、今日はいいことがないなと陽子は不思議がる。自宅までの夜道を歩いていると後ろからクラクション。あっと振り向いた途端跳ねられた。近所がもの音聞いて飛び出してくる。車は塀に当たって止まり。陽子は路上に横たわっていた。頭を打った。路面がみるみる赤くなる。「当たったわ、赤い血。意識が遠くなる。わたし死ぬのかしら。そうだわ、生命保険に入っていた。死亡で五千万。占いて外れたこと...な...い...」

第23話 金髪先生

職員会議は難航していた。梅中学では生徒の大半が茶髪にしてくるのが問題になっていた。もはや先生の云うことは聞かない。手のつけられない状況になっていた。

「どうしたら、生徒の茶髪をやめさせることができるか。何かいい案はないものか」校長は行き詰まっていた。親を呼んでも、親の云うことさえ聞かない子供たちだ。腕組みしていた社会の里村先生が挙手した。

「わたしにいい案があります。それには先生方全員の協力が必要です。茶髪というのも流行に過ぎない一過性の現象です。流行というのは若い人たちから始まり、次第に高齢へと伝播してゆきます。ブランド商品も珍しいうちはステイタスですが、出回るようになってからはメーカーが量

産し、価格が安くなり、特価台に乗るようになって、大衆商品となります。おばさんから子供まで着るようになってその流行は終焉を迎えるのですな。最初に流行に飛びついたものから先に流行から乖離するという法則があります。そこで、みなさんに是非協力してもらいたいことがあります。明日から全員が茶髪にしてください。校則も一時撤回しましょう。茶髪を逆に奨励するのはです。校則違反というアウトロー的なところやスリルが生徒には格好いいのですから、認めるのです」

翌日、里村先生はど派手に金髪に染めてきた。教頭や校長まで薄くなった髪を無理に染めてきた。校門で生徒たちと逢う。「おはよう」とつんとすまして挨拶する。生徒たちは啞然として声も出ない。朝礼で校長の話があった。

「今日から、わが中学は茶髪にすることを校則にします。黒髪は校則違反ということになります」「ええー、嘘お」と、全員からどよめき。みんな下を向いていつもの元気がない。先生たちは逆にご機嫌で、「一度これがしてみたかったんだよな。似合うかな」と日がな手鏡を覗いている。「主任、十歳は若く見えますよ」「おれの色は栗色だ、今度は赤くしようかな」みんなうきうきしている。

翌日から生徒に変化が見られた。ひとりひとりと突っ張っていた問題の生徒から黒く染めてきたのだ。その仲間もリーダーに同調するように黒髪にしてきた。「あんた、まだ茶髪なの、ダッセー。校長や教頭と同じ髪なんて」まだ茶髪の生徒が少数派になり、虐めにあうという風潮になった。「なんだ、みんな髪を黒くして、校則違反じゃないのか」先生たちの思惑通りになった。しめしめと先生たち。学校の外を町内の人たちが噂して通り過ぎる。

「ここの中学ったら、生徒はみんな真面目なんだけど、先生たちがいかれているそうよ」

第24話 スパムメール

小説は読まれなくなった。本自体が活字離れで読まれなくなったら、出版社は倒産、小説家は廃業に追い込まれた。これは、そんな末期状態に起こった犯罪である。

小説家で一時名を馳せた逢瀬夜梅が暮らしに困り、アパートの家賃も払えない窮地で女房にも冷たく突き放された。

「どうするのよ、この部屋中の返本の山は、本の上に蒲団を敷いて寝ているのよ。役に立たない小説ばかり書いて、せめてこの本を換金してきて今夜のおかずぐらい買ってきてよ」

逢瀬は自書を抱えながら、一軒ずつセールスして歩いた。「小説はいかがですか、買ってください」「うちは本なんか読む人はいないの」大抵の家はそうして門前払い。それでは売れない。

「おれは昨日刑務所を出てきたばかりなんだ、奥さん、悪いけど一冊買ってくれねえか」今度は押し売りスタイルに変えた。すごむので恐喝に近い。すぐに近所で警察に連絡、逢瀬は逮捕された。

初犯なので書類送検されずに警察でお灸を据えられて帰された。今日も一円にもならなかった。女房の僅かの内職で喰わせてもらっている。男として情けない。なんとか喰える方法はないものか。逢瀬はあることを思いついた。メール・マガジンを発行して友人知人に定期購読してもら

うのだ。自宅のパソコンから早速メールに小説を載せて毎日あちこちにメールを送り続けた。最初は同情されてみんなから激励の返信メールが来ていたが、次第に沈黙、仕舞いに「うるさい」とばかり苦情が来るようになった。小説の押しつけはみんなにとって苦痛以外のなにものでもなかった。大方は読まないで削除している。もつと悪いのは迷惑メールに指定して、受取拒否。ついにはウイルスメールと同じ扱い。所詮、小説家は街のダニ、世間の嫌われものだ。

それも失敗すると逢瀬は別の手口を思いついた。ネットでメールアドレスを入手すると再びあちこちへメルマガを配信しはじめた。小説の載った添付ファイルを開くと、相手のパソコンがダイヤルQ2へ繋がりはなしになるようなソフトを侵入させたのだ。逢瀬はポルノ小説を書いていた。青少年を誘い込む巧みなリードコピーで添付ファイルをダウンロードさせる。相手はアダルトサイトではないからと安心して過激な小説を無料で読もうとする。

逢瀬はサイバーポリスに摘発された。アパートのパソコンは証拠品として押収された。翌日の新聞の片隅にかつて芥川賞作家だった逢瀬の顔写真が小さく載っていた。

第25話 墜落

それはいつもの乱気流だと思った。初めは上下に激しく機体は揺れ動いていたが、やがて急降下しはじめた。機内の警報ランプが点滅して、天井の室内灯はすべて消えた。乗客から悲鳴が上がった。スチュワーデスの叫びともつかない金切り声でアナウンスが入った。「た、ただいま機はエンジン不良のため急降下中です。乗客の、み、皆様はシートベルトをお締めになり、ご自分の頭を抱えるようにして、姿勢を低くしてください」かなり慌てている。子供たちは泣き叫ぶ。「怖いよう、怖いよう」隣りの老婆は目を瞑って、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と、経をとなえている。座席の上の棚カバーが開閉し、自動的に酸素吸入器が下りてくる。窓の外を見るとどんどん海と陸地が近づいてきている。主翼についたエンジンから火が吹いているのが確認された。ぼくはすでに失禁状態。ズボンがびしょ濡れだった。がたがた震えがきて止まらない。酸素吸入やライフジャケットなんか何の役にたつというのだ。どうしてジェット戦闘機のように各座席が飛び上がりパラシュートで降りるように設計されていないのだ。そうすれば大部分の人命が救われるのだ。時速五百キロでぶつかるんだ。車じゃないんだ。シートベルトなんか何の足しにもならない。いつかの週刊誌の記事で読んだが、墜落死体は悉く腰から切断されていると。それはシートベルトがカッターになるぐらいの衝撃だということだ。即死だろうな。一瞬にして痛みも感じないほどの死だろうな。まだ、子供も小さい、女房も若くして未亡人。保険金は入るのか。家のローンはそれで返せるだろう。やり残している仕事がある。会社じゃ大騒ぎだ。そうだ、遺書を書き留めよう。ぼくは手帖に震える手で、さようなら、パパはもうだめだ、ママを大事にしると名前も書いておいた。新聞によく咄嗟のときのメモが載ったりしている。それでも助かる確率はないわけでもない。全員死亡とはいいが、稀に一人か二人くらい重症でも奇跡的に助かったりしている。どうすればいい。機体は炎に包まれた。煙でむせる。絶叫する声が暗闇に響いた。機体は激しく揺れて天井が剥がれた。ダメだ、いよいよ空中分解か爆発か。窓からは東京のビル街がすぐ近くに見える。あと数秒すれば大惨事だ。ぼくの死体は原型を留めないだろう

。ばらばらになって飛び散るのだ。助けてくれ。こんなことなら出張に行かねばよかった。まだ三十半ばで人生も終わる。南無三。

「そこで目が醒めたんだよ。不吉な夢だったから、今日の出張は取りやめにしてもらった。ぼくの夢って当たるんだ。ぼくが死んだら君とこうして浮気もできないしね。レストランでおいしいものも食べられないし」彼女は急にレストランの窓を指差して叫んだ。「飛行機が、こっちへ来るわ」

第26話 フェチ

ぼくは、告白すれば小学生の頃から足フェチだった。フェティシズムというのは何か心因性のコンプレックスがあって、それが様々な形になって性欲をかきたてる嗜好を形成しているのだろうか。男性が女性を最初に見るところ、大概その視線がその人の持つフェチなのだ。ぼくは、だから足を見る。それも大根足ではいけなかった。ストッキング売り場のマネキンの足のようなスリムで均整のとれた形でなければ許せなかった。さらに足フェチはそれを神秘的ベール、ストッキングで覆うエロティシズムを感じる。色も好みだが、黒もしくはグレーがよかった。他の色、オーソドックスな肌色とか奇抜なイエローとかはいただけない。そしてタイツや網々、柄物もダメだった。真冬の番手の高い厚手も苦手だった。それは薄くあるべきだと、条件が厳しい。

ぼくの少年時代に住んだ街は学園都市だった。ぼくの家のお隣に女子高が二つもあった。ランドセルを背負ったぼくはお姉さんたちには興味がなかったが、朝の通学時にいつも物凄い女子高生たちの間を歩いて学校へ行くのが次第に意識されて恥ずかしかった。それで、いつも下を向いて通学していたのだが、見えるのは黒いストッキングの足ばかり。そのせいなのか。あるいは、幼児の頃から枕カバーは薄い木目細かな生地でなければいけなかったという、肌触りを求める性癖があったが、そのせいなものか。いつもカバーを触りながら眠った記憶がある。とすれば、足ではなくストッキングそのもののフェチではないのか。ならば、ストッキングの中身は足でなくてもマネキンでもいいのか。いろいろ自問しながら、最近になってから自分の異常性欲を考えるようになった。ストッキングから透けて見えるつま先などぞくぞくしてくる。以前はエロ雑誌からそんな写真ばかりを集めてスクラップブックまで作っていたが、最近はその足フェチ専門の月刊誌までいくつか出ていて、驚かされた。インターネットで足フェチと検索すれば、あるはあるはその同好サイトが山とある。ぼくは安心した。ぼくのような性欲を持つ男たちが世間には沢山いるのだ。

そのぼくもセックスはノーマルで普通の女と結婚もした。ただ、やはり足の形にこだわった人選で、相手の顔や髪型、教養なんか関係がなかった。いつも下ばかり向いているので随分とシャイな男と思ったろうが、実は足ばかり見ていたというわけだ。妻に娶った人は美人ではないが、足がすらりと形よく伸びて筋肉質ではなく、それでほどよく肉付きもいい足の持ち主だった。ぼくは新婚初夜から足に遠慮なくむしゃぶりついた。これでぼくの専用の足が手に入ったと得意満面だった。妻と寝るときもシックス・ナインという濃厚な性戯のようだが、なんのことはない

、ただ抱き枕のように妻の足を抱いて寝るのだった。それ以上のなにもないのが妻には不満だったが、次第に異常に思えて、ぼくのフェチを詰るようになった。

「あなたはわたしの足と結婚したのよ。ちっともわたしの目を見ようもしないし、髪に触ろうもしない、いつも足に触り、足に話しかけ、わたしにコートの一着も買ってくれないのに、足には自分の好みのパンストを買ってくる」

「靴も買ってやったろう」「それだって足の履くものじゃない。あなにとって足ってなんなのよ。女のすべて？」

ぼくはそこまで詰問されて、考えこんでしまった。ぼくはどうかしている。このままでは結婚生活にも破綻がくる。ぼくはこの異常性欲を克服しなければならない。

仕事が休みの日、ぼくは妻と二人で心理クリニックのドアを開けた。セラピストは口髭の温厚そうな紳士だった。恥ずかしながら夫婦生活のこと、足のことを話した。簡単なペーパーテストをして性格分析をしたあと、催眠療法にはいった。椅子にゆったりと眠らせられ、あとで妻から聞いた話によると、ぼくは妻の足にまつわりついて、「ママ」と確かに云ったのだそうだ。泣きながら暫く足から離れなかったと云い、幼児体験のトラウマが起因するものではないかと云われた。眠っている間、ぼくは確かに長く忘れていた記憶を取り戻していた。誰かの葬式があった。みんな黒い服で立っていた。黒いストッキングの足が並ぶ中に、三歳かもっと小さかったかのぼくが、母と思う人の足にすがりついて怯えていたのだ。誰が死んだのだろう。それから、モニターのように記憶の欠けた部分に、いろんな場面がスライドショーされていった。いつもぼくは母と思う人の足にまつわりついて離れない。その母の顔が不思議と思い出せないでいた。ぼくが三歳のときに父と離婚して家を出た母。それっきり逢うこともなく、生きているのか死んでいるのかも定かではない。父は暫くして再婚して、ぼくは母のことなど口にはいけないタブーとして忘れていた。

「ちょっと普通の人より強迫観念が強いようですね。気にすることもありませんが。まあ、結婚して一年ですか、お子さんでもそろそろお考えになったらいかがですか。そうすれば生活が変わります。お子さんを中心に夫婦としての絆もできますし」セラピストはそう、アドバイスした。「だって、判った？ 今日から枕を並べて寝てくれる？」

久しぶりに夫婦で外に出たついでに何かおいしいもの食べて、映画でも見ようということになった。街歩く人の足が気になる。沢山の足が歩いている。

「ダメ、足下ばかり見て。上を向いて歩きなさい」

上を向くと妻の笑っている顔が見えた。なんだ、足のずっと上のほうに君がいたんだ。妻は嬉しそうにぼくと腕を組んで歩いた。

第27話 はまりまくり

ぼくのお父さんはパソコンに嵌っていました。会社から帰ってくると、いつも残業とかで遅くなり、十時過ぎることがたびたびでした。だから、ぼくと妹の春香とお母さんは、お父さんと一緒に夕食を食べたことがありません。お父さんはぼくたちが寝たあとに風呂に入りビール飲んで

ひとり夕食だそうです。そのあとは夜中まで書斎に閉じこもってノートパソコンを叩いています。ぼくたちと顔を合わせるの朝の三十分くらいでしょうか。日曜日にも家にいない日が多く、秋葉原に行ったり、「オフ」とかでチャット仲間と逢いに行ったりして自分だけのために過ごしています。同じクラスの子のように家族でドライブとか、デズニーランドとかはうちではありません。羨ましいなと思ったりしましたが、もう諦めています。ぼくがグレないのは妹がまだ小さいからです。だいたいそんな薄情な親を持った可哀想な子供は非行に走り、家庭内暴力をしてものを壊したりするってテレビでやっていましたが、ぼくは親なんか初めからいないものだと思うようにしていました。

ぼくの小学校でもパソコンの時間があるので、さわるくらいできます。それでお母さんが買物に出ている間に黙ってお父さんの部屋に入り、パソコンを開けてみたことがあります。ファイルを次々に開けてみると、女の人とのラブレターみたいなものばかりでした。お父さんにはアイコンがいるんだと子供だけそれぐらいは判ります。インターネットで何をいつも見ているのかも開いて判りました。女の人裸ばかりが出てくるものです。英語ばかりでぼくには読めませんが、お父さんは外国のホームページで英語の勉強をしているので、偉いなと思いました。

お父さんと話をしたこともあまりありません。暇があればパソコンに向き合って、オタッキーをやっていました。この前も運動会にまでパソコンを持ってきて恥ずかしかった。デジカメ、デジタルビデオで撮ってすぐその場で編集するんだそうですが、みんな笑って見ていました。

お母さんは、このところずっとケイタイに嵌っていました。台所でも買物で歩いていても、トイレの中にまでケイタイを持って指で打っているんです。たまに、違うものを手にして眺めているなと思うと、コンパクトだったりします。そうでないときはたいていケイタイを眺めています。なんだか、教科書にある聖徳太子さんみたいにいつも手に持っているんです。メルトモが沢山いるようで、毎日あちこちへメールを送っているようです。通販とか天気とか献立とかも暇あれば見えています。この前は参観日に後ろのほうで着メロがなりました。ハマリマクリ・クリスティの新曲だから、お母さんだとすぐ判りました。廊下に出たお母さんは、廊下に出た意味のない大声で友達とケイタイで話していて、先生もあきれていました。スーパーや歩きながらのケイタイはやめてもらいたかった。よく自動車にひっかからないなと思いました。お母さんの耳には何も聞こえていません。お母さんの目にはケイタイの画面より見えていません。

こんなだから、当然夫婦の会話もないし、親子の会話もありません。みんな好きなことばかりやっていて、相手を間違えていました。お父さんはパソコンと結婚すればよかったのです。お母さんはケイタイと結婚したほうがよかった。

で、昨日のことが起こったんです。お母さんが台所で揚げ物をしているときに、ケイタイが鳴りました。何か聞かれてはまずい電話だったのか、トイレに入ってこそこそ話していました。これはお父さんも同じで、何かお互いに秘密を持っているようです。内緒の話が多くて、ぼくたちにも教えません。お父さんは土曜日で早く帰ってきて、書斎にひきこもったまま。ぼくと春香は庭でハムスターと遊んでいました。すると台所が真赤になっているので驚いて中に入りました。ものすごい煙で息が苦しくなりました。お母さんに火事だと教えたと、「判った、判った」とトイレから返事がします。階段を駆け上がってお父さんにも教えました。「後で行くから」と、とんちんかん返事で部屋から出てきません。そのうち火が燃え広がり、ぼくと春香は玄関から飛

び出しました。すると同時にどっかーんと大きな音で家が爆発したのです。ぼくたちは大声でお父さん、お母さんと呼びました。ぼくたちはおしっこを漏らして泣き叫びました。

ぼくたちはパソコンもケイタイも嫌いです。お父さんとお母さんを殺したのもあいつらだ。ねえ、おまわりさんたちも聞いているの？ さっきからケイタイばかり見ている。

第28話 太郎の馬鹿

北朝鮮がアメリカの挑発に乗って、宣戦布告するや突如北緯38度線を越えて侵攻してきたときも、わが国の国会は小田原評定どころか、まだ国会議員の賄賂がどうの、首相の支持率がどうのといった問題を議論していて、北朝鮮を甘く見ていた。アメリカの巨大な軍事力の前には赤い手をひねるぐらいにしか誰も考えていなかった。だが、一週間で韓国を占領し、破竹の勢いで日本海を渡ってきたときには、臨時国会で第九条を改正しようという段階だった。ミサイルが連日大都市と原発、米軍基地へ打ち込まれる。ミサイルの精度が悪いからどこへ飛んでくるかわからない怖さがあった。すでに何基かの原発が破壊され、放射能が周辺に放出されるや、避難命令が出された。新幹線、幹線道路、トンネル、橋などは前から日本に潜入していたゲリラが要所を破壊して交通麻痺を起こさせ、通信設備、電源、コンピュータ通信網は全国的に使用不能に陥っていた。

にもかかわらずだ、国民は動かなかった。米軍は出遅れて本国へ一時撤退した。すでに東北、北陸、裏日本は占拠され、日本人を巻き添えにできないので国連軍も手が出せなかった。自衛隊は法案が可決していないので動けない。ただ、遠巻きでマイクで「やめなさい、即刻国外に退去しなさい」と叫ぶばかり。火器の使用が出来ないので説得工作。警察は代わりに戦線に機動隊を派遣し、ジュラルミンの楯を持たせて市民の防御に廻ったが、手も出せないから、敵兵たちはその前を素通りする。自衛隊の戦車は赤信号で止まっているのに、北朝鮮の戦車は赤信号を無視して街に無血入城しようとする。そのとき、白バイがサイレン鳴らして敵の戦車を止めた。戦車から兵隊が顔を出す。「免許証は？」言葉が通じない。交通機動隊は困り果てた。「免許不携帯はこのキップで反則金を支払ってもらうから」と、キップをきっていた。

テレビでは相変わらずバカバカしいワイドショーをやっていて、日本海沿岸に上陸してきている北朝鮮の兵隊に、芸能レポーターたちがこぞってインタビューしていた。沿岸の不況にあえぐ村々では、一挙に何万人もの兵隊たちが海から上がってくるので、ここぞとばかり露店を出し、地場産品の売り込みだ。試食も出して勧める。辺鄙な村はお祭り騒ぎになる。

街ではテレビ局、市役所、県庁、警察署が敵に占拠され、日の丸の代わりに北朝鮮の国旗が翻っているだけで、市民は平生を保っていた。デパートは今日からのバーゲンをやっていたし、パチンコ屋は新台入れ替えで活気づいていた。テレビでは野球、競馬の放送。街角に敵の歩哨が立つと、若者たちは取り囲み、銃を触らせてとか、格好いいとか、一緒にデジカメで記念写真を撮ったりしていた。

東京も占領され、日本を掌握するのに十日とかならなかつた。すでに国会議事堂も敵の一個師団に包囲されていた。それなのに、国会はまだあーでもない、こーでもないとすぐに窓の外の状況を理解していない様子。総理の遊武太郎は各大臣の諮問を受けて答弁していた。

「これは願ってもいないチャンスだ。ひょっとして救世主現るだ。われわれはこの千載一遇のチャンスを逃してはならない」

国会議事堂の窓から白旗が振られた。

日本全国暖簾に腕押し、糠に釘。北朝鮮側はかなりの犠牲を覚悟していたのに、あっさり日本が降伏するとは信じ難かつた。かつて、朝鮮半島を植民地にして暴利謀略の限りを尽くした子孫とは思えない軟弱さ。皇室だけは海外へ避難させたが、内閣はそのまま残っていた。国民の多くには歓迎ムードすらあつた。だらしのない政府にいままでどれだけ苦勞させられたことか。日本政府はあっさり降伏調印すると、臨時政府代表に北朝鮮の陸軍大臣が就いて、要職もすべて北側が務めることとなつた。官吏はそのままなんら変わることなく執務を行っていた。

新しい総理大臣に内閣官房長官の次官が進言した。

「ところで、新総理、わが国の現状はすでに知つての上の占領と思われませんが、国の借金は五百兆を越えており、債務超過であります。歴代の総理が果たせなかつた構造改革を是非進めていただきたいと、みなご期待申しております。さらに、国民の大半は長引く恐慌で疲れ果て、犯罪多発、若い者たちはやる気なく、だらだらと遊び、巷にはホームレスが溢れ、大手企業は債務不履行、銀行も破産寸前…」

新総理の耳には次第に言葉が聞こえなくなつてきていた。

第29話 不思議の絵の町

わたしたちが夫の転勤で北国のS市に引っ越してきたのが事の始まりだつた。

S市は市の条例で弱い者が保護されている住みやすい町で有名だつた。夫と二人の子どもと車でS市の社宅へ向つていた。交叉点でのろのろ走っている車が前にいたから、夫はいつものようにクラクションを鳴らした。するとすべての車が止まり、窓を開けてこっちを見ている。警官が飛んできて、「いま、クラクション鳴らしたのはお宅ですね。点数は引かれませんが、反則金は支払ってもらいます」訊けば、危険なとき以外に鳴らせば迷惑防止条例に引っかかるそうだ。そんなことだと思いましたが、ここは郷に入つたら郷に従えで我慢した。

頭にきて、夫は苛々しているようだつた。車が社宅に着いたとき、家の前で荷物を運ばないで家にはしゃいで入ろうとした息子を怒鳴つた。近所がその大声を聞いて窓から顔を出した。夫は息子の頭を一回軽く叩いた。するとまもなくパトカーがやってくる。警官が降りるなり、「いま、近所から通報があつて、幼児虐待をしたのはおまえか。逮捕する」わたしたち夫婦は仰天して卒倒しそうになる。「とんでもない、いつものように軽く叩いただけです。そんな、怪我させたわけでもないのに」わたしは憤慨して夫を庇つた。「お宅らはこの市に引っ越してきたばかりら

しいから、今日のところは許してやるが、子どもの体を叩いても罪になるからな。よく注意するように」

子ども二人を明日から学校に通わせるため、近くの小学校へ挨拶に行ってきた。校門に立つと異常な雰囲気伝わってくる。校舎の窓ガラスはことごとく割れ、子どもたちの歓声が校庭まで聞えてくる。入口から入るなり、ものが飛んで来る。先生が玄関までプロテクター嵌めてヘルメット被り情けない恰好で出てきた。「お母さんも危ないですから、ヘルメット被ってください」と、来客用と書かれたものを被らせられた。児童は廊下を我が物顔で走り回り、ゴミも平気で捨ててゆく。わたしたちは職員室になんとか避難した。

「どうして注意しないんですか」わたしは頭にきて、先生に抗議した。「虐待の禁止ができてから、叩けないんでみんなのさばってしまったんです。もう言うことは聞きません。野放しなんです。学級崩壊どころか学校崩壊ですね」と、先生は笑う。信じられない。「PTAもうるさくて、先生が吊るし上げになるんです」それにしてもこれは酷かった。

翌日から子どもたちは学校へ通った。初日に学校から家に電話が入る。

—お子様が熱がありますので、迎えに来ていただけませんか。

—熱って、そうかしら、何度ぐらいあるんですか？

—37.0度もあります。

—ええ？ それじゃ平熱とたいして変らないじゃないですか。

—それでもですねえ、学校側といたしましては万が一を考えますと、後々の責任問題もごさいますので...

—本人は歩いて帰れますでしょう。歩いて帰していただけませんか？

—ええ？ いま、何とおっしゃいました？

—だから、それほどの熱じゃないし、家が近いから迎えに行かなくとも...

—ご冗談を。相手はお子様ですよ、お子様。

仕方なく迎えに行った。子どもを大事にしすぎるのは異常だった。何がお子様よ。

「ママ、わたしね、この町大好きになりそうよ」娘は初日から満足げ。「先生たちよりわたしたちのほうが偉いのよ。面白かった」娘の額に手をあてる。熱なんてない。元気じゃないの。横断歩道で老婆が立っていた。車がすべて止まる。へえ、この町は交通道德が行き届いているんだ。渡ろうとすると、老婆が後ろから怒鳴る。「わしの手を引いてくれんのか」ええっ、今、何云われたのかしらと思った。車から首を出して、運転手たちも口々に、「酷い女だ、老人の手を引いてやらないとは」「警官にみつかりと捕まるぞ」一瞬おろおろしたが、仕方なく老婆の手を引いて道路を渡った。老婆は当然と云った顔で威張っている。バスの中もそうだった。年寄に席を譲らないと罰金、もしくは懲役。そうか、この町は老人、子どもを保護する条例を数々作ったということでは有名なんだ。

そういえば、町のあちこちに老人専用の休息所や、施設がやたら目立つ。老人たちのホテル並の豪華な福祉センター。老人ホームも帝国ホテルに負けない立派な作り。老人、子どもが威張って、税金納めている働く人たちが小さくなっている。福祉が行き過ぎるとこんな町になるのかと思った。

スーパーに買い物に寄ると、驚いたことに少年少女たちの堂々とした万引だった。店員に教え

ると、

「いいんですよ、この町では青少年保護条例ができて、何をしても犯罪にはならないし罰せられることはないんですから」と諦め顔。町の標語ポスターが店内に貼ってある。【百まで生きて百万円】百歳まで生きると百万円が貰えるらしい。なんのために？ お金貰って嬉しいの？ 何に使うの。

この町に暮らしていれば、反則金と税金で殺されてしまうわ。家に戻って夫に相談した。「この町は少し異常だわ。隣り町に引っ越ししましょうよ。そこから、あなた、車で通ってよ」夫も狂っていることに気がつきはじめた。「それがいいかな、子供たちの教育のためにもな」

来たばかりにまた引っ越しの支度をして、いよいよ町を出る日、社宅の周りには夥しい老人子供が手に手に棒を持って睨んで立っていた。どの目も同じ光を発していた。「なんなのよ、一体、わたしたちが何をしたというのよ」わたしはヒステリックに叫んだ。じわりと、取り囲む輪が狭まってきた。

第30話 仰げば戸落し我が死の音

わたしは感慨深げに高校脇のポプラ並木をひとり歩いていた。今年は雪も少なく、庭園には残雪さえあるが、温かなまぎれもない春の匂いが辺りにたっていた。三年前の四月は春遅く、やはりこうした残雪を見ながら息子と入学式に望んだ。三年はあっという間だった。いろいろありすぎた。子はきっと成長して親は老けてゆく。時間がなにもかも解決していた。忘れるものは忘れ、わたしの白くなった髪を撫で。

女房と離婚してから、十四年経っていた。その間主夫をやりながら三人の息子を育てた。いままた三男が卒業し、社会人として東京へ就職してゆく。これで親としての役目は終わった。これからはわたしはわたし自身のために生きる。やりたいことは山とあった。家にひとりで暮らすことになるが気楽でいいだろう。

普段あまり来ることのない高校の門を潜る。卒業式会場の看板。玄関で袴姿の女の先生が目礼する。礼服の先生方もどこか緊張して見えた。わたしは少し校内を歩いてみた。もう来ることのない学校だ。

受験の日は豪雪だった。朝早く車で息子を学校近くまで送ったが、渋滞して時間に遅れる。焦った。息子は途中から車を降りて走った。大丈夫だろうか。合格発表は仕事場で一報を受けた。できの悪い子だったのでぎりぎり心配させた。「合格したよ」との電話でどっと力が抜けた。あれから三年だ。親はなくとも子は育つ。片親だからといろんな人に云われもしたが、そうグレることなく育った。親でなければならんとするのはわれわれの幻想なのかもしれない。どこかで親子の間に線が引かれているのは、今日のような日に意識させられる。

体育館のほうからピアノが聞こえてくる。窓から見える運動場のサッカーのゴールポストに走る息子の顔が思い出された。静かな時が廊下を回遊している。明日から末っ子も社会人。今日は親の卒業式でもある。

柄の悪い学校と評判だが、どうして生徒は礼儀正しく父兄にも挨拶する。体育館に父兄、在校生が整列していた。ブラスバンドはエルガーの威風堂々。

「卒業生入場!」胸に花を付けた卒業生たちが後方から入ってくる。拍手で迎える。が、手が止まる。続々と入場するのはこの世のものかと疑いたくなるような異形の行進だった。男子は様々な髪型、モヒカンあり金髪ありドレットから寝癖、スキンヘッド、まともな者はひとりもない。わが息子でさえ、学校ではつっぱって髪を立たせているのではないか。パンツ見えるだらしなロック、腕まくり、赤シャツ。女子は全員お水系。髪はアップでどぎつい化粧、茶髪部分染め、制服のスカートはミニで、スカート上げてウエストは胸、どう見てもアンバランス。ピアスにケイタイかけまくりの何でもありあり。ヘッドホンでMD聴いて踊るやつ、クラッカーを鳴らすやつ。これは人間の子供か、異星人ではないのかと信じ難い光景だった。「静かにしなさい」と、先生方に叱られるが聞く耳持たない。校長の挨拶も聞こえない。異様な集団だった。これはわが子かと父兄も疑った。

突然、体育館の二階から割れんばかりのドラムとエレキの音、ブラスバンドも曲目変えてヘビメタのロック。がんがんやっているのに、在校生も乗ってきて、生徒全員、椅子をどけての踊りまくり。君が代も蛍の光もどこかへ行った。椅子を投げる。壇上に駆け上がりビールの掛け合い。プロ野球の優勝パーティーそのもので、父兄、先生にも頭からビールのシャワー。キャーキャーと逃げまどう父兄。大パニックになった。ガラス窓が割れる。学校側で通報したのかパトカーが数台前庭に到着。警官がどこどかと体育館に警棒持って雪崩れ込む。それを阻止するように、二階から手当たり次第にモノを投げつける。新聞社、テレビ局もカメラを持って取材にくる。事前にそんな荒れる卒業式という予感があったのか。低レベルの卒業生には式の紛糾とか政治的目論見は露ひとつない。ただのどんちゃん騒ぎで悪ふざけののりのりに過ぎない。拡声器で「やめなさい、卒業式中止」の先生の声も聞こえない。「全員、解散」という校内放送も突然、ロックに変わる。放送室も占拠された。校長室も職員室も乱入した生徒たちに滅茶苦茶に掻き回された。裸足で命からがら避難する先生、靴を手にスリッパで逃げる父兄。殴られて鼻血が吹き出る者、引き裂かれた礼服、腕の骨が折れて転がりこむ母親、廊下も教室も水だらけ。救急車も何台か到着した。かなりの死傷者が出ている模様。「卒業しても仕事がねえ」「そんな格好でどこの会社がとるか、ばかやろう」「なんだと、おめえら大人がこんな借金だらけの社会作ったくせによ」あちこちで怒鳴りあい、とっくみあい、殴り合い。廊下、体育館の壁といい床といい血で赤くなる。わたしも逃げ場を失って、全身に消化器の泡をかぶって凶暴化した生徒に囲まれていた。「親が悪い」「責任転嫁するな、甘ったれるな」罵りあい、あちこちで親子でも闘う場面。わたしはその合間を縫って、なんとか体育館のドアから外に出られた。町民の野次馬が学校を取り囲んでいるのが見えた。そっちの方へよろよろと歩きだすと、「あっ、危ない」という悲鳴が聞こえた。みんな上を見て指をさしている。わたしはふっと頭上を見た。体育館の二階の窓から戸を落としている生徒がいた。戸はスローモーションで落ちてくる。真っ直ぐにわたしの真上に。長い時間に感じられた。わたしの頭を直撃し、ぐしゃりと脳天が潰れる音が聞こえた。

第31話 ドライフラワー

「いつか、云ったね、君とこうして、どこかで再会したら、そのときは笑って、お茶を飲もうって」

「それが待って、待って、どうして今日でなければいけなかったの」

「いいじゃないか、偶然の悪戯ということがあるものだ。このカフェで君と偶然、出逢った。そしていまも」

「そうね、ついあなたを思い出しちゃって、ふらりと入ったら、あなたがいる、あのときのよように。出来過ぎね。安っぽい恋愛小説だわ」

「君はあのときわたしの隣ですまして本を読み耽っていたね。なんと云ったかな、そうそう『マノン・レスコー』だった。わたしが、声をかけても警戒して乗ってこない堅さがあった」

「ふふ、そうかしらね、誰でもあなたのようなうまい会話にころりと行くでしょう。男前だし、やさしそうだし。第一印象はプレイボーイね」

「ひどいなあ、君のような素敵な人をほっておくのはよほど目が悪い男だ。君は細い縁のメガネをかけて品のいい知的な人に見えた。五月の日差しに眩しいパープルのワンピースを着ていた」

「よく覚えているわね。その辺りがいまも変わらなくうまいのよ。女がどうすれば喜んでくれるかコツが判る人だった。わたしの堅い鎧もあなたの巧みな話術に剥ぎ取られてしまった」

「それにしても、このカフェはよくこのまま残っていたものだ。君はそう、この席にいまのように座っていた。ヴィンテージの紅茶を飲んでいた」

「よく、そんな細かいことまで覚えているわね。女は忘れっぽいのかしら」

「男は過去に生き、女は刹那に生きる」

「それ、誰の箴言かしら」

「いま、わたしが考えたんだよ」

「ほほほ、相変わらず上手ね、その言葉でいままで何人の女の人を泣かせたの」

「そんな人聞きの悪い。いつだって、わたしの方がふられ虫さ。泣いたのはこっちだよ。現に君だってそうだ。突然の結婚でわたしの前から姿を消した。わたしは探した。まるで気が狂ったようにね。いまならストーカーだったろうね」

「ごめんなさい。あなたはわたしには重かったのよ。あのときあなたには作詞家として成功するかどうかという正念場だった。生活という安泰の巣に収まってはいけなかったと思った」

「お陰でわたしは作詞家にはなれなかったがコピーライターとしてある程度の地位を得た。君への苦しみの人々に共感を得られるフレーズとなって吐き出された」

「わたしも苦しんだわ。新婚生活を遠い町で過ごしていても、銀行やクリーニング店のポスターにあなたがいた。『捨てるものがなくなったとき、大事な君』だったかな、わたし、泣いたわ。どこの町に行ってもあなたから逃げられない。どんな町角にいても、あなたが語りかけてくる。残酷な仕打ちだった...」

「君は幸せではなかったようだね」

「どうして？」

「そんな暗い影が顔に落ちている。以前の君はそうではなかった」

「判るのね。わたし、彼と結婚に失敗したのよ。子供はひとりいたけど彼が離さなかった。それからずっとひとり。いろんな男がいたわ。わたしはマノンその人ね。そういうあなたも幸せそうじゃない」

「そうだな、君を忘れるためにあれから好きでもない女と見合い結婚した。子供は三人、小さいがマイホームも持てた。本も何冊か出した。平凡な幸福を手に入れたと思っていた。だけど何かが欠落していた。ずっと君を振りきれない哀れな亭主を女房はとっくに気づいていた。二人の間にはいつも見えない女が立っていた」

「そんな、いまさらわたしを責めないで。それで、いま奥様は？」

「四年前に亡くなった。癌で苦しんでね。不幸は続くもので、翌年息子が交通事故で」

「いまのあなたは見ていられない。ねえ、ふたりでどこかへ行かない。ふたりっきりになれるところへ」

「君はまだわたしを愛しているのか」

「そうよ、ずっと忘れたことはなかった。あなたと別れた日を年忌のように毎年祈っていたわ。またあなたに抱かれない...」

「でも、それはできない」

「どうして、わたしを嫌いになった。まだ恨んでいるの」

「そうじゃない、そうじゃないんだ」

「だったら、あのときのように、また恋人同士に戻って、ね」

「いくら、人間が長生きしても、セックスだけは長続きしないんだ。考えてもみたまえ、わたしは今年で九十だ。昔なら卒寿。君だって八十八だろう。もう米寿なんだ。七十年前のふたりではないんだ、判るだろう」

「最近のおじいさん、おばあさんは昔と違って若いのよ。モテルはお年寄りで満員という話よ。あなたは古いのよ」

「でも、なにができるというんだ、いまさら、なにが...」

第32話 精神病棟

ここは病院なのだろうか。とても脱出できそうにない、気の遠くなるほどの高さを持ったコンクリートの塀、分厚い壁で覆われてとても穴の開きそうもない堅牢な建物、小さな鉄格子の窓、ここがどこで、何県にあるのかさえ判らない。

わたしがこの精神病棟に収監されたのは先週だった。何がどうなったのかも判らないほどのドタバタ喜劇の末に、食肉を運搬する保冷車のようなトラックに載せられて、他の数名と半ば強引に入院させられてしまった。トラックには窓がないから、西へ走ったのか、何キロ走ったのか、時間も定かではないが、半日を車に閉じ込められて、この塀の中で解放されたというわけだ。

だんだんと思い出してくる。鎮静剤かなにかを注射されて、意識が朦朧としていたが、事の始まりは本社の営業部に顔を出したときだった。わたしの会社は建築関係の会社で、主に役所の指名業者として入札して仕事を貰っていた。

その日、わたしはA市から福祉センターの改修工事を依頼されて、予算計上の詰めを行っていた。向うの担当主任が、「予算が余っているから、目いっぱいつけてもらいたい」と、理不尽なことを云い出すので、「そうはゆきません、公正な材料費というものがありますので」と、わたしも融通が利かない堅物だった。その事が役所から会社の上司に連絡が入った。

わたしが本社に帰って上司と押し問答しているときだった。通報が入って、サイレンを鳴らしながら例のトラックが玄関に止まったと思うと、四、五人の白衣姿の看護師たちがヘルメットにマスク、拘束衣やロープを手に事務所に入ってきた。わたしの方にづかづかと近づくや、ロープで縛り連行したのだ。暴れる暇さえなかった。あっという間にトラックにぶちこまれた。中にはもう一人の男が縛られて転がっていた。

連れて行かれたところは噂では聞いていたが、見るのも初めての、刑務所より怖い精神病棟だった。わたしは一切の私物を取り上げられ、家族との面会も許されない。社会から完全に隔離した生活を強要られるのだ。その意味が判らないままに。一体、わたしが何をしたというのだ。

わたしがぶちこまれた部屋には、聡明そうなおとなしい、いわゆる「患者」が五人いた。始めは誰もが抵抗を示し、自分を出せと騒ぎ喚くそうだ。自分は気違いではない、そう思っているのが大方だ。

「あなたは何かを云ったのでここに連れてこられた、ですね？」同室の患者が話し掛けてきた。訊けば大学教授だという。始めはみんなどこかおかしいのかと口も利かなかった。だが、話しているうちに普通の人間であることに気付く。

「そういうあなたは何でここへ？」「わたしは」と、教授が小声で話した。「自分の著書のなかでマスコミ批判を書いたのです。連日のワイドショーのあまりに低俗なことを、日本の恥だとね」「たったそれだけのことで気違い扱いですか」

「向こうの彼はもっとひどい。知っていますか、国会議員だったのです。消費税値上げのときに、これは福祉に回すとの首相の弁に噛み付いたのです。税金などプールされればただの金だとね」「それはひどい、あたりまえのことじゃないですか」「さらにお隣の青年は、社会保険もつけない、残業もつけない会社を労働基準監督署に訴えたら、署員から通報されたんです」「...」「そのお隣の魚屋のおやじさんは、神社の寄付を町内で集めにきたのを断ったらここへ連れてこられた」

わたしは何がなんだか頭の中が整理できないでいた。みんな当然のことでなんら不思議なこともない。

「判りますか？ 人間を二つに分けて考えましょう。常識人と非常識人。かつての矛盾は非常識でした。それが大多数の人間たちがそう思うようになれば、非常識も常識になります。矛盾は矛盾でなくなるんです」「そうか、それに気がついた人間はそんな世の中から見れば狂っていることになる」「その通りです。賄賂もあたりまえ、法律があってもみんなが黙認していることは習慣であってもいつか合法になる」「矛盾を指摘したものが世間から見れば異常な人間になるわけだ」「ヒトラーのもとでヤダヤ人狩をした国民も、日の丸、天皇を崇めない戦前の国民も狂ってい

ましたか?」

わたしは鉄格子の外を飛ぶ鳥を見ていた。少なくともここは安全だ。迫害はないし、厭な世の中を見なくともいい。監視が廊下を通りかかる。檻の向こうはすでに別世界なのだ。われわれとは別の価値観と善悪と感性を持っている腐敗した世界なのだ。看守も看護師も医師もあちら側の人間で全員狂っている。一步外へ出ればすべてが気違いだ。ここに隔離された者だけがまともなのだ。

歴史がやがてそれを覆す日がきっと来るだろう。それまでわれわれはこの精神病棟で患者として出られる日を待つのだ。

第33話 ホームレス志願

森脇芳郎は途方にくれて神田川にかかる橋の上に立っていた。設計事務所をやっていたが、顧客の保証人で借金の肩代わりをさせられると、その弁済のために町の金融に手を出して、気がつくやうに雪だるま式に高利の借金が増えていた。二進も三進もゆかなくなるところへ、この建築不況だ。仕事もない。借金とりだけが毎日事務所と自宅に脅迫にくる。とうとう妻は子どもを連れて出て行った。後で離婚届だけが郵送されてきた。不甲斐ない男に呆れたのだ。家も事務所も家財一切が債権者の言い成りで処分され、破産もできない状況ですでに帰る家もない。友人と名がつく者たちは悉くブラインドを下ろした。親戚も冷たいもので関わりになりたくない。相手がヤクザだから達が悪いのを知っている。

一とうとう、おれ、独りになったか。さりとして橋の上から飛び降りる勇気もない。腹が減ったという感覚だけは残っているから生きているのは確かだ。ポケットに手を入れる。小銭が少し。六十円ぽっち。これでは半額のハンバーガーも買えない。今日はどこで寝るかだ。芳郎は改めてショーウィンドウに映したわが身の落魄れた姿を見た。きっと逃げ回っている間に風呂にも入るのを忘れていたし、着の身着のまま泥だらけ。洗濯もしていないし、着替えもない。すっかり乞食だった。

「あんた、見慣れない顔だな」後ろから声をかける者がいる。顔中髭だらけのホームレスのじいさんだ。同僚に見られるほどみすぼらしい自分の格好に芳郎はようやく笑った。「腹が鳴ってるぜ、寝床もないらしいな、この橋の下のマンションに来るか?」

芳郎がじいさんについてゆくと、薄暗い橋の下にホームレス団地があるではないか。様々な形のダンボール・ハウスに洗濯物の万国旗、煮炊きの煙まであがっている。

「電気と電話はないけどな、快適だぜ」なにやら怪しげなものを炙っている四五人に芳郎を紹介した。「モリワキです」と挨拶し、名刺を出そうとしている自分にはっとした。

「まあ、堅苦しいのは抜きにしてよ、座ってワインでもどうだ。ドンペリだぜ」昼から酒飲んでいる陽気な連中だ。焼いているのはなんとローストビーフのブロック。

「そ、そんなのどうして手に入れるんですか」芳郎は驚いていた。「なあに、近くの結婚式場

でさ。近頃は宴会料理の四割は捨てられるんだとよ。ただ、生では食べねえからちゃんと火をとおしてな」洋酒のビンもごろごろある。底に溜まった酒も集めれば結構な量になる。さっきのじいさんご満悦でみんなも紹介する。会社の社長だった人もいれば、高校の先生しくじった者もいる。大学出がこんな生活している。みんなどこか事情があって零落しているのだ。「ホームレスになるには、この世に未練持ちゃいけない、仕事も家庭も昔どうのもみんな捨てるんだ」暗にそんなホームレス憲章みたいなものがある。

「ダンボールがそこにあるから、自分のねぐらを造りな」ハウスの中には粗大ゴミや家具でも使えるものを拾ってきて結構みんな文化的生活している。

芳郎はダンボール箱で自分の住む家を造り始めた。そこは一級建築士の腕の見せどころ。洒落た屋根までつけ、窓もドアもある。内部に棚も付け、ミニチュアだが、ちゃんと普通の家の形をしている。ホームレスたちが覗きにきて、感心して眺めていた。誰かが芳郎に頼まれてペンキや絵の具を持ってきた。工事現場に行けばいろいろ手に入る。それでカラフルに家を塗装した。まさに芸術に近かった。ただ住めばいいと思っていたホームレスたちは、うちの家も直してくれと芳郎に頼んだ。すべてダンボールでできているが、ドアを開ければ玄関があり、下足箱もある。台所から食堂も、長椅子のある居間まで家具調度品すべてダンボール製ときている。みんなも芳郎に手伝うようになった。各地からホームレスたちが噂を聞いて見学にくるようになった。

「これは事業になるかもしれない」誰しもそう思った。全員街のあちこちから、芳郎に頼まれた廃材などを集めてくる。橋の下という下に彼らは「建売住宅」を造りはじめた。ホームレスたちが相手だから金はない。食糧、薪と交換だ。テレビ局、新聞社が取材に来る。いままで見苦しく汚らしいものとしてホームレスたちを見ていた市民までわざわざ見にくるようになった。観光バスも止まる名所になった。ダンボールで細工物をこしらえて、観光客相手にお土産を売る器用な者も出てきた。金が入るようになった。連日大勢の人びとがおしかけて芳郎も時の人になった。

と、みんな札束を目の前にして躊躇していた。

「何か違う。おれたちはホームレスなんだ。社会を捨てたんだ。この金に泣かされてこんな生活に落ちてきたんじゃないのかい。もう野心は捨てたんだ。夢は終りにしなければ」

全員一致した意見で札束はどぶ川へ撒き散らされた。都会の汚れた川を汚れた金が流れてゆく。

芳郎はスーパーの裏手をごそごとと犬のように食糧を探していた。「あった、潰れた缶詰、賞味期間の過ぎたハム、今夜はご馳走だ」すっかりホームレス家業が定着してしまっていた。三日やったらやめられないというのは本当だった。

第34話 ある晴れた朝突然に

富士山の山頂にある気象観測所に勤務する所長の後藤はその朝、気分が悪くなって目が醒めた。朝と思っていたが外はやけに明るい。時計を見るとまだ五時半だ。真冬の今ごろの日の出は六時五十分のはずが、真昼のように外は明るい。慌ててアノラックを着て外へ飛び出した。なんと太陽は南中している。寝過ごしたか、腕時計が狂っているか。他の隊員も数名起き出してきて、

何が起こったのか目をこすっていた。気象庁から電話が入る。緊急の電話だ。相手は興奮して何を話しているのかよく聞き取れない。と、通話が途切れた。こっちから掛け直すが不通になったままだ。

「何かが起こったんだ。おい、テレビを点けてみろ」隊員たちは事務所に集まっていた。後藤を入れて三名が越冬隊員だった。テレビはどこも放送していない。「ダメです。ラジオも聞こえません」無線もダメだった。下界との通信は遮断されていた。

「所長、ジャイロが狂っています。計器という計器が測定不能です」「まさか」部下の叫びに後藤が観測室に入ると、コンパスがあらぬ方角を指していた。「気温がどんどん上昇しています。ただいま山頂で摂氏五度」隊員が興奮して声が震えていた。「なんだと、昨日から三十度も上昇したというのか」

後藤は双眼鏡を手に下界を眺めていた。分厚い雲が富士山の七合目まで覆っていて、視界がきかなかった。ぎらぎらと真夏よりも高い太陽が照りつける。

「大変です。太陽の位置は赤道と同じくらいです。どうなっているんだ」隊員は狂おしい悲鳴を上げた。風の吹く向きも違う。雪と氷は解け初めていた。ケイタイも電話という電話は使えなくなっていた。インターネットも繋がらない。

「何があったんだ。何が」後藤は恐ろしさのあまり体が強張ってきていた。無線なら使えるかもしれない。「所長、乗鞍の測候所から無線が入りました」周波数を乗鞍に合わせた。よく聞き取れない。ようやく人間の声と出会うことができた。

「何、地軸が移動したって？ 三十六度傾いた。高波が全世界を襲っているらしい」後藤は雲が切れてきたところを双眼鏡で見て驚いた。「信じられない。海がすぐそこまできている…」麓の町でも海拔は五百メートルはある。そこまで高波が押し寄せたとすると、「東京は全滅だろうな。いや、わが国の海に面した街は悉く波にさらわれただろう。波の高さは四百、いやそれ以上の高さかもしれない」緯度と経度が逆になった。地球はごろんと横になったまま自転している。日本が赤道直下の熱帯になる。アメリカの西海岸辺りが北極になり、南極はどこだ。隊員たちは地図を広げて現在の位置関係を知るために世界地図に線を引いた。

「大変なことになるぞ。生態系がめちゃめちゃになってしまう。作物は全滅し、動植物も移動できないものは絶滅だ。潮の流れから魚も全滅するのが出てくる」それよりも、隊員たちは自分たちの家族のことを心配していた。内陸の標高のあるところの町は助かったろうが、日本の多くの都市は海辺にある。まだ寝床にある未明に海がせりあがり、街をひと呑みしてしまう。木造の建物はひとたまりもない。ビルも水圧で倒れる。一瞬にして街は深さ四百メートルの海底になる。そ

の水圧で生きているものはいないだろう。

「八千年前にも地軸は移動した記録がある。ツンドラ地帯から熱帯植物の化石が出てくるのもそうした理由だ」

「それじゃ、かつて絶滅した動物たちも移動できないものから死に絶えていったんですか」「そうかもしれん」「われわれも絶滅するんですか」

「さあ、これからの食糧確保は難しくなるだろうが。暑いな、ストーブは消せ。窓を開けよう」気温は二十度を示していた。下界では五十度を越えるだろう。二月だというのに。

「海が、海が引いてゆきます」津波のように押し寄せてきた波はゆっくりと引いてゆくのが遠目に見えた。海岸は死体と瓦礫で埋まっているだろう。反対に街には魚が溢れているだろう。みんなそれぞれ悪夢のような想像をしていた。

全世界の生き残ったものたちから無線が入る。いずれも高い山の上や高地の都市からのものだった。メキシコシチーは助かったが、酷い寒さで市民は移動しているものもあるという。

「さて、われわれはどうするかだ。ここにいても任務遂行をする命令はこないだろう。政府というものがまだあればの話だが」

「連絡を待つにしても、関係個所はすべて連絡不能です。わたしは、山を降りたほうがいいと思います」

「わたしも、横浜の実家が心配であります」二人の若い隊員は気弱にそう云った。

「そうか、そうだな、ここにいても何の解決にもならない。五日後にここを引き払うことにする。それまで観測所の封鎖の準備だ。観測は今後のためにデータだけはとれるようにオートにしておけ」

後藤以下二人の隊員はできるだけ多くの食糧と医薬品をリュックに詰めて、下山の準備をした。みんな緊張して半年ぶりに山を降りた。下界は地獄だろう。生き残ったものだけで、何ができるかだ。この先、日本が砂漠になるか、ジャングルになるか、それは誰にも判らない。

第35話 偉大なる発見

時田は会社の同僚と夜更まで飲み歩いて帰宅した。女房子供は寝鎮まっている。居間のソファでごろんと寝てしまう。いつもそうしてだらしなく酔い潰れた。夜中に目が覚めた。喉がからからだった。台所で水を飲み、ついで小便をと、廊下を歩くとき、天窓から夥しい星が眺められた。雨上がりの未明、地方都市の灯の消えた時間帯は星座が綺麗に見えた。時田は吸い込まれそうな星空に我が目を疑った。何かを探すように二階のベランダに出ていた。星は、意識したことはないが、あれは太古の光なのだ。すでに滅んでいまはない星の光かもしれないと、いまさらながら時田は思った。漆黒の宇宙に自分がいま向き合っていた。壮絶な孤独を全身で感じていた。それはどこまでも果てがない宇宙に独り立たされている意識だった。時田は怖いと思った。宇宙に果てはないのか。われわれは無限という錯覚の中に生かされているのか。と、思うと時田は気が狂うほどの混乱を覚えた。「大変だ」それに気付いたのは、生まれて三十五年経って始めての大発見だった。

時田は大声で家族を起こして廻った。家族はこんな夜中に何事かと半分寝ぼけて、ベランダへ出た。「見ろ、果てしない宇宙だ。おれたちは無限のなかに生きているんだぞ」きょとんとした女房はあまりのばかばかしさに怒った。「何、酔っ払ってるの。寝なさい、もう」

翌朝から、時田の態度ががらりと変わった。どこかおどおどしている。うわ言のようになにやらぶつくさと独言を吐いていたと思うと、自分の頭を拳で叩く。女房は夫がノイローゼからおかしくなったと思っていた。「おまえは怖くないのか、この無限ということを考えてだけでも、果

てがない世界という、その果ての果ての果てまで考えたことがあるのか」始めは笑っていた女房も悲しそうな顔をして、「あなた、疲れているのよ。少し、休んだらいいわ。それから病院に行きましょう」としみじみと急変した夫の顔をみつめていた。

時田は出勤の電車に乗っていても、「あのこと」が脳裏を離れない。無限を想像しただけで気がおかしくなりそうだった。会社でも全く仕事が手につかない。ぼんやり考えているかと思うと急に頭を抱えて塞ぎこむ。同じ企画部の同僚たちはひそひそと話している。異常に気がついた部長が時田を別室へ呼んだ。

「時田君、何か悩みがあるのではないかね。話してみたまえ」

「部長、自分はあることに気がついたんです。それはわれわれ全員の存在に関する重要なことなのです。それはこの世に人間が誕生したときから、きっと難問としていつもわれわれに問い掛けてきたものなのです。宇宙が無限であるという謎です。世界が無限であることは自分の中では処理しきれないことで、考えれば考えるほどこんがらがって、自制心を失いかけます」

部長は深刻に聞いていたが、「判った。時田君、君に有給休暇をやるから、少し旅行にでも行ったらいい。今のプロジェクトは主任に任せるから、心配しないでゆっくりと休養するように」

時田はみんな自分が精神的な病気と思っていることに落胆した。納得がゆかないので、午後は街の図書館へ調べものをしに出かけた。宇宙、無限ということについて、あらゆる本を引っぱってきて読んだ。アインシュタインの相対性理論も出てくる。宇宙は卵型をしている。数学の二次方程式の放物線が限りなくゼロに近づくと、それは卵型を描くようにまた元に戻ってくる。宇宙の果てもだから曲がって元に戻る。空間は究極には捻れて閉じて終わるのだ。果てがないということは三次元の感覚だから気が遠くなる。というようなちんぷんかんぷんな数学から天文学まで出してきたが判らない。何か、われわれ人間がもっと大きなものに弄ばれているような気がしてならない。それは神だろうか。

時田は近くの教会に足を運んだ。司祭さんが事務所で執筆していた。「あのう、お聞きしたいことが」と、信仰心もない時田は初めて教会で司祭さんと話した。司祭さんは感銘を受けたように聞いていた。

「あなたの発見は天の啓示です。この小さな世界に生かされていることのカラクリに気付かれた。それは神の存在そのものなのです」と、またちんぷんかんぷんな話だ。宗教、哲学、自然科学、何でもいいから教えてくれと、時田は叫んだ。

会社に戻ってもぶつぶつ分けのわからないことを口走り、時折叫んだ。見るに見かねて同僚が時田を精神科に連れていった。病院では鎮痛剤を注射して、問診したが、医師はカルテにこう書いた。「無限恐怖症」と。

だが、そうだろうか。われわれは目先のことに忙しく、われわれの存在している場の矛盾を知ろうともしない。ほら、今日もまたひとり、無限に悩まされ発狂して走ってゆくものがある。エンドレスのいつまでも廻る世界から逃げられずに。

ロミー・オブラエンはエール大学を卒業したエリート社員だった。アメリカに本社のある保険会社のシンガポール支店に勤務していた。若くして次期支店長と噂されている。人柄もよく、本国でプラント経営の大富豪の家に生まれ、血筋もいい。その彼がいつものようにパソコンのネットから全世界の株価をリアルタイムで情報収集していたとき、それは起こった。

突然パソコンのモニターが白く光り出す。ロミーは新種のウイルスの仕業かと回線を切った。そしていつもの手順で強制終了して電源を落とす。それでも光は消えない。「まさか」ロミーは焦って、電源を抜いた。それでも光っている。「なんということだ。こんなことがあるのか」光の中に白髭を蓄えた老人が現れた。【ロミー、ロミー・オブラエン】と確かに老人は名を呼んだ。ロミーは周囲を見回した。普通の事務所でコピーをとる者、電話をする者、忙しく歩き回る者、誰の耳にも聞こえないのか、この声は。ロミーは何ものかの悪戯と思ったが、己の幻想かとも思い頭を叩いた。【ロミー、メガネと時計を外せ、体から金属と化学繊維を脱ぎ去り、裸足で西のシナイの村へ行きなさい。体には白い綿の布を巻いて行きなさい】声は尚もそう続けた。事務所全体の壁から反響してくるような荘厳な声だったが、誰も気づかない。ロミーはひどい感動を覚えていた。奇跡というものがいま自分に降りてきていた。やがてモニターは黒い画面になった。ロミーは命じられるまま、メガネと腕時計を外した。ふらりとオフィスビルの外へ出た。「お出かけですか」秘書が声をかける。ロミーは熱病に罹ったようにふらふらとメインストリートのデパートに入っていった。そこで綿の反物を買うと、フィッティングルームで衣服をすべて脱いで体に白布を巻き付けた。裸足になってビジネス街を歩くと、通行人が奇異の視線を向けてよこした。国道を誇りまみれになって歩いた。多くの車がクラクションを鳴らして笑って見てゆく。西の海の側に聞いたことのないシナイ村があった。ロミーが辺鄙な村に足を入れると、村人たちが待っていたようにロミーを取り囲み足下に縋り付いて泣いた。女も子供も老人もロミーにひれ伏しておいおい泣くのだ。ロミーは驚かなかった。まるで遠い昔からそうなるであろうことを知っていたように。

村長がロミーの前に出てうやうやしく木箱を手渡した。「あなたが、ここにお出でになるのをこの村は二千年待ちました。今日のこの日のこの時をどんなに待ち望んでいたことか」そう云ってロミーの足に接吻した。木箱を開けると、中にはぼろぼろのパピルス文書が入っていた。ヘブライ語のような文字だが、その古代文字をロミーは不思議と読むことができた。

「自然のものだけで作られし白い布を巻いた白い人がこの詩編を読み解くとき真の救い主がそこに見出されるであろう。戦いと血とを好むすべての邪宗を捨て、人間の造りし不自然なるものを壊し、金物は土に戻し、硬貨と偶像を求めず、礼拝のための華美な教会を造らず、欲と権力を捨ててこそ真の信仰を得られん。言葉より行い、教典より約束、神のいない自然を敬え。すべての民は野に帰り、農耕に汗し、けしって生きて動くものを食べてはならない」

ロミーが巻物を読むと村人たちは長く意味の判らなかつた伝説が解けたと喜んだ。ロミーは何ものかに導かれるように、立ち上がった。

「さあ、新しい村を島に造りにゆきましょう」村人たちは文明に汚染されて村を捨て、丸木舟で沖合の無人島へと漕いで出た。人々は一様にタバコと酒を捨て、指輪と装飾品を外し、化繊の洋

服を脱いだ。島にはいっさいの文明を持ち込んではいらない。

人々は格好の地に木と葉で家をこしらえた。それからロミーの指導のもとに自然農法で作物を植えた。自然を自然のままに使う方法をどうして覚えたのか。すべての人が働き、収穫は分け与えるという原始共産制の社会だった。神の不在の宗教だった。自然神を崇拝する。祈るのは全宇宙に生かされていることの感謝を伝える。金はいらない。ベジタリアンで満足しなければならない。モスクも教会も建てない。聖書も十字架もない。すべての宗教の過ちをここに示した。

この噂は全世界に瞬く間に広がった。取材に飛行艇で来たマスコミはロビーは悉く拒否した。モーターボートで見学にくる日本の国会議員たちも追い払った。教義に賛同した財閥の寄付金も断った。まだ誰もが理解していない。すべてを捨て去り、裸で共に生活をと望むものだけが入ることができた。電気も水道もガスもない。自然のサイクルに乗らないものはここには不必要なものとして除外された。

神学者、宗教家、科学者たちが次々に裸でロミーに会見を求めた。

「あなたの求める世界には進歩がありません」と、科学者がロミーに反目する。

「あなたがたの狂信的な進歩とは何ですか。その先に何があるのですか」ロミーは逆に質問した。核と武器と公害と自然破壊とそして戦争と、人類に何をもたらしたかと問いつめた。

「アッラーもキリストも間違いだと？」宗教学者が信者と共に反論する。

「原典はその昔は正しかった。時代とあなたがたが曲解し、悪の手引となったのです。良識がわれわれの神です。それはあなたがたの胸の中にいます」ロミーはどんな論理で攻められても屈することはなかったが、ずっぴりと文明と利権、俗欲にまみれた衆生にはどんなに説いても無駄だった。理解するまでの距離がありすぎた。哲学者が問うた。

「全世界があなたの云う自然神の信者になれば、どうなりますか」

「少なくとも、飢えと戦さで死ぬものはなくなります」「あなたの開示を他に得た人はいませんか」「おりました。日本に昔、ショウエキ・アンドウという医者が、そしてフランスにはルソーが」

多くの人間は、欲を捨てきれず、その代償としての危険と病気と貧困を負の資産として取引した。ロミーは村人を集めて、農地でお祈りをした。誰も助けてはくれない。われわれの神はわれわれの中にいる。すべは自然の意のままに、と。

第37話 沈没

豪華客船のジパング号がバブル海峡で冰山に衝突した。それまで美酒に酔いしれていた乗客は突然の衝撃にパニックになっていた。船長は一応救難信号を打電したが、乗客の気を鎮めるために船内放送を繰り返した。

「乗客の皆様、この船はかつて不沈空母と云われた堅牢な造りをしております。安全設計においては我が船に並ぶものはありません。どうぞ、ご安心の上、ご会食のほどお願いいたします」再び派手な音楽が鳴り出すと、ホールの舞台にはセミヌードの娘たちが繰り出して歌と踊りがより騒々しく続けられた。船長から乗客にシャンパンが振舞われた。

機関士から操舵室へ被害状況が続々と報告された。船首にかなり大きなダメージをくらい、浸水してきていた。すでに手の施しようがなく、船は船首から沈みかけ、少しずつ傾き始めていた。排水ポンプなどきかないほどの浸水の量だった。技術者の計算ではどう頑張っても、あと六時間で船は沈没をまぬがれない。このことは航海士だけの秘密にしておいた。船長以下、乗組員たちは上から下まで船の金銀製品や、金目のものを浮き輪に括り付け、密かに脱出用のイカダを作る者もいた。救命ボートは定員がある。その操作のために一隻二名のクルーが助かるが、あとのクルーたちは戸板を引っ剥がして自分ひとりが助かるイカダを用意した。乗客のことなど考えてもいない。この真冬の氷点下の海に投げ出されたら、一分ともたないで心臓発作で死ぬということを経験上知っていた。

客船はいよいよ傾いてきた。ざわざわと乗客は不審がり沈没するのではないかという噂が出たが、「皆さん、これから楽しいショーをお目にかけてみましょう。クルーたちによる茶番喜劇です」と、乗客の関心をステージのほうへと向かわせた。乗客たちは腹を抱えて笑っていた。

それでも、もうごまかしがきかないほど、船が傾いたときは、もうこれまでと、船長は乗客に話さざるをえなくなった。

「皆さん、この船は絶対に大丈夫ですが、少し重すぎるようです。皆さんにご協力いただいて、荷物でいらぬものは海へ捨てていただきます。乗客も多すぎますので、船を助けるために救命胴衣をお貸しいたしますので、勇気ある者から船を離れていただきます。多少の痛みは伴いますが、それでこのジパング号は助かるのです」

さあ、大変なことになった。乗客同士の喧嘩まであちこちで始まった。誰が犠牲になるかだった。ところが、その選別をするまでもなく、船が傾斜してくると、力の弱いものから、すがるものがなく、ずるずると甲板を滑り落ちて海へダイブした。金のある者はクルーに金を渡して、支えてもらっていた。

救命ボートに乗る乗客の選別が始まった。政治家がまず一番に、そして財界人、医者と続いた。女子どもではなかった。この先、か弱い女が残ってもなにができるか。命の値は金で決められた。客船の中はパニックになり、悲鳴や嗚咽が聞かれ、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものとなった。そんなときでも、船長以下、航海士たちは自分のことばかり考えて、船に蔵っておいた高価なワインや、年代もののコニャックを確保するためにやっきとなっていた。それらはビニールの袋に結わえておけば、救助がきたあとゆっくり楽しめると考えていた。

バカな乗客は酔っていて、何が起きているのか理解しない者もいて、食堂の柱に掴まりながらも美食にうつつをぬかしていた。楽隊は最後の最後までロックを演奏している。女子どもから海に転落していった。救命胴衣も金で買うのだ。貧乏人は死ぬよりなかった。それでもライフジャケットを付けたからといって、助かる保障はない。寒さで凍え死ぬか、鮫に喰われていずれ死んでゆくのだ。ジパング号は静かに船首から海に沈んでいった。

大勢の乗客が夜の海原に投げ出された。最初はみんなわいわいがやがやとうるさいくらい騒いでいたが、次第に声もしなくなった。海の藻屑となって浮かんでいるもの、深い海に沈んでゆくもの、いずれも水づく屍となり波間に漂っていた。

船長以下の航海士たちはイカダの上で持ってきたワインを呑みながら、アメリカの救助隊が来

るのを待っていた。イカダの上で云い争いがおこっていた。「船長は、船と運命を共にしなければならないから、死んだことにしましょう」「それで、誰が新しい船の船長になるかだ」「おまえらだって一蓮托生ではないか」と、船長も噛み付く。「船を沈めた責任はどうしてくれる」「これは不可抗力だ、予測がつかない事態だった」「うるさい、進路を変えようと提言したのに判断ミスしたのは誰だ」醜い責任のなりすあいが続いていた。重い荷は沈んだ。これからは軽くなって新しい船で輝かしい航海だ。救命ボートの上で、政治家と財界人は互いに手を取り合って無事を喜んだ。頭上で哨戒機の爆音がした。ボートから発光弾が夜空に打ち上げられた。

第38話 犬のなみだ

ジョンは人間でいえば七十くらいの老犬だ。いまでこそ犬にも洒落た名前が多いが、ひと昔前は犬といえばジョンが多かった。高名な作家が本の中で犬のジョンとバカにするほどに。老いてくると人間と同じで耳も遠くなる。痴呆のようにぼんやりしていることが多くなる。吠える元気もない。茶色の柴犬だが毛並みも悪く、目には目ヤニ、頭にはストレスから人間並みにハゲまでできていた。一日玄関脇の犬小屋に繋がれていて、このところずっとご主人は散歩にも連れてゆかない。腹が減ったと鳴いたりすると、ようやく存在が判ってもらえ、忘れていた食事を出される。それも残飯だった。余った御飯に味噌汁かけて捨てるような食べ残しを上混ぜてよこす。暑いときでも水も与えられない。舌を出してはあはあいつているのに、忘れているのだ。

何故、ジョンが冷たく放置されているのかというと、この家に新しく仔犬が飼われたからだ。ラプドールという外国種の犬で毛並みもいい。ジョンにとっては自分のひ孫のような犬だったから別に嫉妬するほどのこともない。三度の飯と散歩だけあれば文句はない。主人は子供のいない人だったのでやたらネコでなく犬可愛がりする。名前はミーシャという今流行の歌手の名前を付けていた。ジョンとミーシャ、偉く違う。可愛らしいプリント柄の洋服まで着せられて、ペット専用のパーマ屋でシャンプーにセットまでしてもらっている。

—いいなあ、おまえは、人間の子供と同じ扱いだ。と、ジョンはミーシャに話し掛ける。—それでもないのよ。この服も始めは厭で脱ごうとしたんだけど、中々脱げなくて苛々しちゃった。噛みきろうとしたら主人に叱られたから、我慢して着ているけど。パーマだって熱くて厭だし、どうして人間はもっと裸の自由を求めないのかしら。

—人間世界には規則だとか制約だとかやたら多いんだ。人間だけが間が付く。間という社会に生きているから自由は束縛されねば互いにぶつかりあうんだな。

—ふうん、難しくて判んない。あなたも可哀想ね。お風呂に入っていないようだし。

—そうさ、近頃、蚤が増えて敵わない。おまえは人間と同じ風呂に入り、ドッグフードに缶詰、おやつまで与えられて幸せなやつだ。

—でも、自由に走りたいのよ。首輪とロープはなんとかしてもらいたいわ。

主人が出てきて夕方の散歩にミーシャを連れてゆく。ジョンはロープの長さ、半径一メートル五十センチの自由が与えられているに過ぎない。そこもコンクリートだから、長年、土というも

のを見たことがない。土を思いっきり前足で搔いてみたいと思う。外を歩く犬もいない。まして遠吠えしても返してくる仲間もいない。みんなこの都会のコンクリートの中で犬であることを忘れて生きているんだろう、とジョンは思っていた。ペットとは愛玩動物だ。愛玩されなくなったらペットではない。人間たちの思い上がりで動物の自由を奪っている。終いには見捨てられ、粗末にされて殺される。

ジョンは自分の余命が幾ばくか知っていた。死に場所を捜しに旅に出たい本能がどこからともなく沸いてくる。それなのに、繋がれたまま見捨てられ、この玄関の隅っこで犬死にだけはしたくない。最後は自由に野性に戻って、野山を駆け巡って広い原っぱで死にたい。ジョンはこのかた主人に歯向かったこともなければ、従順な僕として使えてきたつもりだった。いままで長く世話になった恩は忘れてはいない。この家にも未練はあったが、自分の始末は自分でつけたい。それがひいては主人のためにもなりそうだ。厄介者はただ消え去るのみ、とジョンは始めて逃げることを考えた。実は、いつからか首輪が取れそうなのを知っていた。ろくな食べ物も与えられないし、年取ってきたら痩せて小さくなった自分を感じていた。案の定、首輪は前足で頑張るとすっぽりと抜けた。

主人がミーシャの散歩に行っている隙に逃げるんだ。ジョンは走った。久し振りの走りだった。まだこんな力が残っていたのだ。住宅街を抜け、商店街に入る。夕方の買物客は悲鳴をあげて、ジョンを避けた。中にはシャッター棒を持って追いかける商店主もいた。いつからか、犬は繋ぐものになってから、街から自由にうろつく犬の姿が消えた。犬と人間の生活に線が引かれた。犬は個人的には家族以上だが、社会では敵になったのだ。

ジョンは追いまわされ、車道へ飛び出した。乗用車がジョンを避けようとハンドルを切って対向車の大型トラックと衝突した。その後続のワゴン車も追突を避けようと歩道に乗り上げた。買物の歩行者を何人か跳ね飛ばして、果物屋に突っ込んで止まった。歩道は果物と負傷者と野次馬で大混乱となっていた。ジョンは渋滞して通行不能になった車の脇で内臓をはみ出させて死んでいた。こんなはずじゃなかった。ただ、帰りたかっただけなのに。血だらけのジョンの目に光るものを見た。

第39話 仕事がない

こんなことなら、大学なんか行かなければよかった。健司はハローワークの求人コーナーを眺めては溜息をついていた。思えば、四年前、同じ高校を卒業した友人たちは、高卒でそれなりの職業に就いていまも働いていた。健司は少し高望みしたかもしれない。早い者勝ちのとりもの勝ちの狭き門を妙な理屈ばかりつけて、物色している間に定員オーバーになってしまっていた。どこかで妥協さえすれば仕事はまだあったのだ。それだから、時間稼ぎのために、目的もなくただなんとなく三流大学に入って、四年間も親の脛を齧り、遊んでしまった。ろくに勉強なんかしなかったから、そう資格を持っているわけでもなく、怠け癖がついたぶんふしだらになっていた。大学は出たけれどという昭和初年の恐慌にも似た現代は、大学どころか高校を出ても仕事は

ない。就職課の先生たちはお手上げだった。卒業生に紹介する相手先がない。地方都市のただでも不景気な万年田舎町のことだ。人口は減りつづけ、町は年寄りばかり。若い者はみんな都会へ仕事を探しに出てしまう。つい先日も地元で大手のデパートが倒産、二千人が解雇されたばかりだ。ハローワークではその再就職が先で、生活のそうかかっている親と同居の若いものは後回しになる。いよいよ仕事がなくなる。現役で当たればまだ正社員で入れるところもあったのに、就職浪人となると不利で、中途採用扱い、すなわちパート、アルバイト扱いだ。身分の保証がない。社保も賞与もない、契約期間は半年ときている。それで、健司の同期はさらに上の大学院へと進む。上へ逃げたのだが、そうしたところで大変なのは親で、さらにのちのち狭き門となるのは判っていた。経済破綻はこれからが本番だ。

ハローワークの職員は投げやりな態度で健司に職を紹介する。

「おたくは教職の資格を持っているから、学校の先生はどうですか」健司はさあっと顔色を変えて、「そんな危険な仕事ができますか。命がいくらあっても足りない」と、拒絶した。教育の荒廃から先生の成り手がいない。多少頑強なら、無資格でも先生が勤まる時代だった。

「では、おたくは長男ですし、後継ぎになるわけですよ、お父さんと一緒に持ち家に住んでいらっしゃる。とすれば...お勧めの職があります。このA商事の社長のポストなどいかがでしょう」健司はまたかと思った。求人コーナーに「社長求む」のなんと多いことか。「どうせ、採用条件は担保物権の提供と借入れ保証の約束付きでしょう」健司は剥れて云った。職員は笑いをこらえて、「そうなんですよ、この不景気でどこも社長が辞めたくてパタパタしているもので」と、下を向いた。詐欺に近いんじゃないかと健司は腹を立てる。職員は思い直して、「では、こちらはどうぞ」と、自信を持って勧める。求人票を見ると、なんと市会議員の席だ。最近議員汚職がオンブズマンの目がうるさくて容易にできなくなった。政治家になっても旨味がないから、ただ文句云われてナンボでは合わないかと、成り手がここにもいない。選挙でも立候補する者がいないので、選挙制を廃止して、募集に切り替えたが、やはり誰もやりたがらない。問題は放置したまま山積しているから、触らぬ神に祟りなしだ。

失業率は二十パーセントを越えた。「職をよこせ」とデモが連日行われる。「どんな仕事でもします」とプラカードを首から下げて大通りを徘徊する失業者もいた。県庁の臨時職員のお茶汲みに、募集人員の二百倍も集まったりしていた。

首相官邸で、閣僚との密談が行われていた。

「首相、そろそろ機が熟してきたようすな。例の計画を実行に移すときがやってきました」文部科学省の大臣が切り出した。

「若い人が仕事がなく溢れている。この春の卒業生の八割は就職未定という実情を打破するためには、やはり徴兵制でしょうな」官房長官もようやく念願のわが国の軍国主義化を押し進めるいい機会と認識していた。

「こんな大変な時代だ。昔の失業対策も役に立たない。国防予算を増加して、国民皆兵に向けて、ひとまず兵役を義務化するための法案を国会に提出しよう」首相は自信満々に応えた。

昭和初期の恐慌は娘の身売りや、銀行破産など深刻な状況を生み出した。いままさに似たような追いつめられた状況の下で不気味な軍靴の音がする。

第40話 出版記念会

山田晴子は念願の小説集を上梓することになった。布張り箱入り、タイトルは箔押しの上製本だった。退職金の大方をつぎ込んで、五百冊を印刷製本した。地方の小出版社は、主だった書店への委託販売もするが、あくまでも自費出版なので経費はすべて晴子が持った。長く同人誌で小説を発表してきたが、ようやく処女出版という夢が叶うこととなった。その山田晴子の小説出版記念パーティーが市内で一番格式のあるホテルで執り行われることになった。当日は会費制とし、その会費の中に本代も含むというやり方で、半分はその場で売ってしまおうというのが目的だ。さて、誰を呼ぼうかと結婚式のように考えるのも楽しい。文学仲間だけでなく、職場の同僚、昔のクラス会のメンバー、親戚、隣近所、ありとあらゆる関係者に通知を出した。出欠の葉書がきて、当日は二百人を超えることとなった。料理は披露宴並のフランス料理のフルコースとした。

当日はまるで自分の結婚式のようにそわそわして落ち着かない。一番上等の着物を着て、美容院で髪もセットしてもらった。ホテルの大ホールの舞台上に「山田晴子小説集出版記念会」の幕。何か嬉しいような恥ずかしいような。受付は文学仲間の若手が買って出た。司会はテレビ局のフリーのアナウンサーを頼んだ。式次第も和紙を使った豪華なもの。

晴子は定刻になって、夫と二人でホールの入口に立って、来席の方々に挨拶していた。口々におめでとうを云われ握手される。

さあ、パーティーが始まる。晴子は胸に花をつけて檀上の椅子に座っていた。来賓の挨拶が三人からあった。市長代理、県会議員、恩師の先生と続く。いずれも話が長く、小一時間はかかった。聞いているふりをして居眠りしている出席者もいた。みんな、円卓について、初めて手にする晴子の小説をぺらぺらとめくっていた。小説を渡されたのは今日が初めてだから、中身の知らない人が殆どで、本の出来ぐあいを褒めるよりない。読んでいないのだから。それでも一様にみんな祝辞の中ではべた褒めだ。「わが街に文化の灯をともし続ける」とか「これを契機に芥川賞作家をひとつこの街から輩出したい」だとか、晴子の文才を褒めちぎり、持ち上げる。その夜の主演は人生で最高の日だった。自分がずっと偉くなったようにのぼせ上がる。新聞記者も来ていて、写真を撮ってゆく。小さな田舎町だから、そうそう出版する人もいないのだ。珍しいことは記事になる。多分、明日の夕刊の文化欄に載るのだ。本一冊で山田晴子はこの街の有名人、文化人になれるのだ。

祝辞が終わると祝電披露、続いて花束の贈呈、著者からのお礼の挨拶となる。花束だけでも十以上はきた。晴子は感激して、声を震わせながら、マイクの前に入った。

「皆様、本日はお足元のお悪い中...」外は晴れていた。「わたくしも皆様の声援に応えるよう、次の新人賞を目指して大作を書いており...」言葉は詰まっていた。盛大な拍手が起こる。長い挨拶が終わってよかったという拍手だった。いよいよ待望の乾杯だ。ご馳走と酒を目の前に、我慢していた人たちの喉が鳴った。ところが、乾杯のご発声を指名された同人誌のリーダーである老人の「一言」がやたら長い。みんな起立して、グラスを持つ手もいい加減に疲れてくる。早く止

めて欲しい。みんなの視線が睨んでいるの本人は知らない。乾杯。音楽が高らかに鳴った。

酒が入ると、もう誰もテーブルスピーチや余興の踊りなど見ていない、聞いていない。わいわいがやがやと、暫くぶりであった知人友人と歓談し、酒を酌み交わし、大声で笑い、今日は何の会だったかと忘れていた。主役が酒を注ぎにテーブルを廻るときだけ、拍手と社交辞令。あとは本人はいてもいなくても構わない。高い会費の元をとらねば。どんどん酒が出される。

三時間の長い出版記念パーティーはようやくお披露目となった。中締めと称して、また街の有力者が一本締めを行う。みんないい顔で帰ってゆく。何人か、肝心の本を忘れてゆく。

ホテルを出ると、ある者はゴミ箱に本を捨てた。本など縁のない人で読んだこともない。今日は義理で出席していた。またある者はその足で古本屋に寄った。「この本はいくらで引き取ってくれるかな。いま出たばかりの新本だよ」鼻眼鏡をかけた古本屋のおやじは、「ああ、自費出版の本だね。うちじゃ、店頭で五十円均一台にこんな本はごろごろあるけど、売れないねえ」と買う気がしない。

またある者はその足で二次会にカラオケスナックへ仲間と行くと、ママに本を上げてしまう。ママもしぶしぶ受け取ると、流しの隅にぽんと放った。

出席者で隅から隅まで本をきちんと読んだ者は五本の指におさまるくらいで、大半は一行も読んではいなかった。人の人生なんか興味がないくらい、みんな自分の人生に忙しい。

第41話 喰われてたまるか

狂牛病の次に世界的に広まったのは狂豚病だった。スーパーや肉屋の店頭から、これらの肉が消えてからは冷蔵ショーケースの中には鶏肉だけが並ぶようになった。人間たちの口を満たすために養鶏が各地で盛んになり、ブロイラーが量産されるようになった。

偉い迷惑しているのは鶏たちだ。みんな集まって話していた。

「おい、のんびり餌をついばんでいるときではないぞ。なんらかの対策を講じなければ」長老の雄鶏が仲間を集めて会談していた。

「豚どもはうまいことやったそうじゃないか。牛の真似して狂ったふりをして助かった」情報通の若い雄鶏が聞いてきたような話をする。

「あれは演技だったのか」驚いてみんなざわめく。

「それじゃ、われわれも狂ったふりをすればいい。ほれ、こんなふうにと、おどけた雄鶏がよたよた歩いては倒れ、痙攣してみせる。みんな爆笑した。

「そもそも、人間何様と思っているのか、動物を大量生産、大量殺戮、自分達の餌にするとは不遜もいいところだ」「そうだ、そうだ」と、若い鶏たちは氣勢をあげる。

それからというもの、全国の鶏に鳴き声の合図で伝播した仮病はまんまと成功した。新聞各紙は大見出しで、「鶏よおまえもかー狂鶏病全国規模で発病」と報じた。ブロイラーは瞬く間に売れなくなり、肉屋は廃業。農家も窮地に追い込まれた。週刊誌は「肉食への戒めー江戸時代に帰れ」と、食生活の改善を書きたてた。誰しも行き過ぎの肉食への天罰だと思った。別に肉がなくとも魚があるじゃないかと、もともと百数十年前まで四足を食べなかった日本人はたいして気にもしない。だが、その魚にも異変が起きた。海が汚染され、魚の奇形、病気が蔓延するや、魚の消費は極端に落ち込んだ。食卓から肉魚のメインが消えたから大変。主役がない。

政府も対応に苦慮し、国民に最低必要な動物性たんぱく質をいかに安全に摂取させるかということが急務となった。様々な学者先生が会議に出席して議論百出したが、結論が出ない。ある学者が登壇して演説した。

「世界的人口増加では、いままでのような肉食では限界があることは、昔から計算されていました。一頭の牛、あるいは養殖のハマチがわれわれの口に入るまでどれほどの牧草と、餌の魚を食べているのでしょうか。そうしたものを最終消費しているわれわれは、地球上のカロリー消費では人間の食生活がもっとも贅沢で無駄です。以前から提案のあったプランクトンから動物性たんぱく質を摂る方向へと移行すべきです」

海に無尽蔵にあるプランクトンを加工して、大豆たんぱくと共に、様々な食材に化けさせる。現代の加工技術からすれば、ハンバーグでも牛肉にでも、魚の形にでもできないことはない。味だって、いくらでも似せて作ることが可能だ。その動物たちの狂う病気を契機に研究開発が各国でなされた。より安全でアルファ化の高い栄養食品が目白押しで市場に出回ることとなった。漁師はプランクトンの養殖と捕獲に乗り出す。農家は大豆の生産に転作する。食肉加工業者は○○もどきのコピー食品をいろいろと製造しだした。

これで地球は二百億の人口に増えても食べさせて行くことができる」と国連で試算された。食料があれば戦争も減る。とりあえず腹を満たすことだった。腹が満ちれば怒らない。喧嘩もしない。不平不満も減るといふものだ。

ところが、それも束の間、海の汚染でプランクトンも死滅した。天候異変で大豆も不作。いまさら肉食へ戻れない。牛も豚も鶏も家畜から外してからはめっきりと数が減った。さて、困った。各国の首脳が食料会議を始めたが、いいアイデアが出ない。みんな、もう何日も肉らしい肉を口にしていない。ぐうと腹も鳴る。ある国の代表が発言した。

「この地上で、いま一番余っている動物は実は人間です」

互いにみんな顔を見合った。ごくりと喉が鳴った。

第42話 愁学旅行

私立みなと中学の修学旅行は海外だった。チャーター便のはずが、添乗員になりすました男によってハイジャックされた。行き先がハワイの予定が、アフリカへと機首を向けさせた。犯人が要求している行き先は治安の悪い、内戦が絶えないB国だった。日本との国交はない。その国に着いたのは、日本を出てから半日が経っていた。生徒たちは思い思いの服装に耳にはヘッドホン、デジカメにケイタイとリッチな現代子ばかりだ。着いた空港は砂漠の真ん中。ハイジャックされたことも知らない。ぞろぞろとタラップを降りると、銃を構えた黒人の兵士たちに全員連行された。

生徒と先生たちは空港の粗末なターミナルに収容され、荷物をすべて没収された。「この国には持ち込めないものばかりだ」と云うのが理由だが、ハイジャックされたのだといくら説明しても埒があかない。ひょっとして、これは政治的な背景のハイジャックではなく、飛行機ごと強盗されたのだということが次第に判ってきた。貧しい国だから外貨を稼ぐ手だてもない。国を挙げた泥棒だ。みなと中学はその犠牲になったのだ。ほとんど裸の住民たちがターミナルに群がってくる。まるで追い剥ぎだった。全員の着ているものを争うように剥ぎ取ると、全員を裸にしておくのも可哀想だと腰に巻くボロ布をあてがった。何がなんだか判らないままに、生徒は泣き出す。「ママ、家に帰りたいよお、助けてよう」おいおいと、先生まで泣く始末。ジェット機の日丸はその国の国旗に塗り替えられていた。百二十名の生徒が猛暑の砂漠に裸足、裸同然で放り出されたから大変だ。昨日日本を出てから食事らしい食事もしていない。喉も乾いた。生徒の一人が無意識に自動販売機を探している。「ばか、こんな砂漠に電気もないのに、あるわけがないだろう。それに、円は通用しないし、ぼくたち丸裸なんだぞ」クラス委員長が窘めた。「先生、先生」と、泣きわめく。「水がのみたいよう」「お腹空いたよう」と、ただ泣くばかり。砂嵐がきて、全員砂まみれ。髪も顔も口の中まで砂だ。誰かが足が痛い」と騒ぐ。見るとサソリに噛まれた。大変だ。先生が懸命に血を吸って吐き出す。「蛇もいます」生徒はパニックになった。「頭の形が三角だから毒蛇かもしれない」理科の先生が云うと、「怖い」と、先生にしがみつく。

暫く炎天下の砂漠をさまよっていると、蜃気楼のように地平線に車と人影がいくつも見えた。

みんな手を振った。「助けてくれ」すると、ピューンと空を切って何かが飛んでくる。すぐ近くで迫撃砲の砲弾が炸裂した。「みんな、危ない、伏せて」生徒たちの後方からラクダに乗ったさっきの兵士たちが機関銃を撃ちながら応戦していた。生徒たちは、まるでアクション映画かシューティング・ゲームのように思っていたが、誰かが弾を足に掠って血を流すと、それが本物で口ケなんかではないと知ると、一斉に走りだした。

ようやく戦火から逃れて草木の生えるオアシスに辿り着いた。住民たちが泥のような水を汲んでいた。喉がみんなたまらなく乾いていたので、泥に顔を埋めるように呑んでいたが、多くの生徒は吐き出していた。住民たちは日本の難民を哀れに思い、食べ物を恵んだ。バッタの干したものの、ネズミの焼いたものなどのご馳走だったが、誰も口にできない。先生から食べた。吐き出した。住民たちは怪訝そうな顔をして怒って帰った。彼らも大半は飢えていた。子供たちはがりがりに痩せて、腹だけが異常に膨れていたし、乳飲み子は乳の出ないしなびた乳房に吸い付いていた。

夜になると真っ暗になる。互いの顔も見えない。声だけで無事を確認しあう。昼は五十度近くなるのに、夜は逆に冷えた。「寒いよう」とみんな身を寄せ合う。手探りで草を集めてくると、棒きれを擦り合わせて原始的に火を起こした。全員が恐る恐る枯れ草を集めてきて焚き火をして暖をとった。不気味な獣の吠える声がした。

翌日もその翌日もオアシスにいて泥水と草を喰って飢えをしのいだ。蛇を捕まえてきた生徒がいた。それを殺して皮を剥ぎ、生のまま嚙りつくものもいた。虫でも何でも食べるようになった。それができない生徒だけが衰弱して寝たきりとなった。下痢と熱病で体が衰弱し、何日か放っておけば確実に死ぬだろう。

「いいか、死にたくなかったら、喰えるものは喰っておけ」先生が檄を飛ばす。

一週間目にヘリコプターが上空を飛んだ。敵か味方か判らないから誰も手は振らずに立ったまま見上げていた。砲声がやがて遠くで聞こえはじめた。また戦争が始まったかと先生は憎々しげに煙立つ空港の方を見ていた。すると、その方角から無数のヘリコプターが飛来して、オアシスの周辺に着陸し始めた。アメリカのマークと自衛隊の日の丸だ。助かった。先生と生徒はよろけながら気力あるものは駆け寄った。

国連軍によって全員無事に救出されたニュースは全世界を驚愕させた。日本に帰ってきた生徒の親たちがインタビューに答えていた。

「うちの子は我が儘で手のつけられない子だったんですけど、今度のことがあってから、食べ物は好き嫌いしなくなったし、第一食べ残したりしなくなりました。家の手伝いはしますし、素直で本当にいい子になったのが驚きです」

一様にどの親も同じ答えを返してよこした。

文部科学省は来年度からの修学旅行のコースを変更し、アフリカに決定したと各紙が報じていた。

外務省と国連協共催のアフガニスタン難民救済パーティーが都内の某ホテルで執り行われた。アフガンの新政府領事としてこのたび赴任してきたサヤフラ氏がアフガニスタンの実状を訴える講演を冒頭に行った。出席している紳士淑女はみんな礼装していた。特に女性は煌びやかなパーティー用の衣装でサヤフラ氏の質素な民族衣装とは裏腹だった。招待者の多くは政界と財界の大物たちがご夫婦での参会となった。サヤフラ氏は英語で講演し、それを同時通訳していた。この夜のパーティー収益はすべて相手国に寄付されるばかりか、救援物資も企業から申し出るよう依頼していた。

「このような大勢の方々のご慈悲とご理解のもとに、われわれは戦後処理を終え、国家再建に向けて果敢に立ち向かう所存であります」

講演には耳を傾けないご夫人が二人、ひそひそ話をしていた。

「あら、奥様、そのお洋服、お似合いですこと」

「生地だけ取り寄せました。デザイナーさんにお任せよ。でも最近、太っちゃって大変」

「学校は爆撃で破壊、家もない、両親も戦死した戦災孤児が増えております。いま、子供たちに必要なのは着るものより夜具です。まだ氷点下に近い瓦礫の下で毛布もなく眠れない子供たちが沢山おります」

「最近は毎日のようにこんなパーティーがありますの。美食はわたしたちの敵ですわね。またエステにかかってしまいます」

「あら、奥様、どちらのエステに通ってらっしゃるの」

「衛生状態もよくはありません。内戦が始まってから二年三年と水浴もできずに疥癬で悩まされている住民も多数おります」

「ダイエットも大変よね。食べて痩せられる食品も高かったけど続けてみたのよ。それがさっぱり効果がなかったわ」

「何か文句云うと個人差がありますという返答でしょう。インチキ食品もあるのよ」

「食糧難も深刻なものがあります。子供たちは一日当たりの必要摂取カロリーも半分以下と、健康状態にも不安が出てきています」

「わたしたち、まだ勿体ないと思うわけよ。うちの娘なんか、食べ残すのを当然と思っているのね。いつも我が家は残飯の山」

「娘さんのおっしゃる通りだわ。捨てることよ。わたしたちには食べ物は大敵だわ」

「子供たちにはせめて腹一杯食べさせてやりたいと思います。戦火が激しくなる秋からすでに蓄えは底をつき、どの家も配給で雑穀を与えられるのを待っている現状がいまも続いております」

「栄養補助食品ってあるでしょう。奥様はどんなの呑んでまして？」

「美容にはコラーゲンね。ビタミンCでしょう。カルシウムに併用してビタミンDね。それから...」

「老人、子供など弱い者たちから、極度の栄養失調にかかっております。彼らにビタミンなどの栄養剤も不足しております。医療品だけではなく、そうした健康面でもご支援いただければとお願いいたします」

「奥様の主治医から処方しておもらいになればお安くいただけますわよ」

「ついでに痩せ薬も貰おうかしら」

「医薬品についても絶対数が欠乏しております。血清やワクチンなどよりも、地雷による足の損傷が急速に増えておりますので、義足、松葉杖、包帯というものも不足しております」

「病院も混んで嫌ね。お年寄りばかりじゃない。病院が社交場になっているって話だから、そうしたいことがないのに、話をするために病院に毎日通っているって人もいたわ」

「老人の医療費が高くなれば患者がどっと減るっておかしいわよね」

「たったいまも、我が国では飢えで死ぬ者、看護の甲斐もなく助かる病気、怪我で死ぬものがあるとを絶ちません。どうか、贅沢なものは必要ありません。救援物資に高価なジャムやバター、缶詰などが送られてきますが、われわれに必要なものは、もっと安価なものでいいのです。質より量をください」

「量より質よね。美味しいものを少しだけいただく。それがダイエットの秘訣だわ」

「ハイマンナンとかできるだけノンカロリーのものを食べることね」

「さらに時間はかかりますが、インフラの整備も急務となっております。電気より水道です。そして、地雷除去には莫大な費用もかかります。何卒、人道的ご支援を我が国は日本に期待するものであります。両国の友好と繁栄が今後も続きますように。イン・シャ・アッラー」

第44話 路頭に迷う

帰るところがない。家はすでに差し押さえ、事業は破産、妻は離縁して実家へ帰った。権堂喜久夫はすってんてんになって、身の置き場所に窮していた。会社のビルには債権者がたむろしているから近づけない。家の辺りには怪しい連中がうろついていて危険だった。かつての商売仲間や友人には出資で迷惑をかけた。とても顔は出せない。行くところがない。何百人もいた社員は残務整理がいやで、放置したまま再就職へ駆け回る。弁護士からは、どうしても財務内容を明確にしてもらいますから、逃げないでくださいと釘を刺されていた。社員任せで、何がなんだか判らない浦島太郎に何もできない。いっそ、自殺しようか。六十年、好きなことをやってきて、組合の会長だ、なんだと名誉職もやってきて、もういつ死んでもいい。街行く人は指をさす。新聞でも大きく取り上げて倒産を騒いだから、喜久夫も名士様から罪人へと転落して非難の目が集まる。

「そうだ、死ぬ前に故郷の墓参りをしてからにしよう」

権堂喜久夫は無一文だから、電車賃もない。故郷の田舎町まで半日も電車でかかる距離を歩いて帰ろうと思った。国道をてくてくと歩き始めた。国道沿いを歩くものは少ないのでみんな振り返って見ている。まして、背広姿の恰幅のいい紳士が家もない郊外を歩いているのがおかしい。

喜久夫は道端で最近また不況で増えてきた乞食と出会った。農家の軒先に捨ててあった、野菜屑と生のじゃがいもの欠片を囓っていた。喜久夫はすごい迫力を感じていた。野良犬のように「生きる」ために「喰う」という仕事をしているやつがいる。さらにごそごそと生ゴミを漁り、残飯を徐に口に入れている。年の頃は喜久夫と同じくらいか。わたしもいずれそうなるのかと、自

分の明日を乞食に見ていた。喜久夫にはとてもできそうにない。確かに腹は減っていた。昨日からろくなものを口にしていないが、まだプライドというものがあった。憐れんで、喜久夫は腕時計を外して乞食に与えた。それを換金すればもっとましなものが喰えるだろう。

体力がなくなってきた。足が動かない。普段、車ばかり使って歩くということをしていない。秋から冬へかけて夕方は日も落ちるのが早い。柿を取って喰ったり、沢に口をつけて喉を潤したりした。それは社長だったつい昨日の喜久夫の姿ではない。やがて日が暮れるだろう。どこでどう寝ればいいのか。無一文で家も家族もない。行き倒れもまたいい死に様かもしれない。喜久夫は自嘲するように云った。

「どこへ行くところです。先ほどよりずっと後ろをついてきました」

声で振り返れば白装束に裸足の巡礼らしい老人が立っていた。

「わたしはこの格好で奉仕をして旅をしているのです。あなたはひどくお困りの様子だ」

喜久夫はやさしい声をかけられて涙ぐんだ。

「実は、わたしは破産しまして、無一物で帰るところもなく、歩いて郷里へ行こうと無謀にも町を出てきたのです」

喜久夫がいままでの事情を老人に話すと、老人は晴れやかな顔になり、

「無一物結構、死ぬの結構、どうですか、旅は道連れ、しばしご一緒しませんかな。今夜の宿と飯はあの農家の灯りが見える。あそこにしましょう」

老人はまるで知り合いのように、農家に何やら交渉していた。農家の年寄りから老人は白い経帷子を貰っていた。

「さあ、あなたはこれに着換えるのです。死ぬつもりなら死装束すなわち死出の旅の姿です」

その代わりに、この家に不必要な背広とネクタイ、革靴は差し上げてくる。年寄りたちよりいい農家だった。まるで坊さんに手を合わせるように、老夫婦ともに老人を拝んでいた。何者なのだろう。喜久夫は不審に思った。

「さあ、ひと仕事しましょう。一宿一飯の恩義というやつですな。わたしは風呂の掃除をいたしますから、あなたは便所を掃除してください」

喜久夫は生まれて初めて便所掃除をさせられた。ゴム手袋を探していると老人に叱られた。「素手で洗いなさい。雑巾もブラシも使わずに、手で金かくしを拭くのです。それがあなたの修行です」

喜久夫はいまや最低の人間だった。人様の便所を、汚物を手で直接拭き清めるのだ。「それができて、初めてあなたは何ものからも裸になれる」老人はそう諭した。始めは情けなくて涙が出た。つい昨日まで社長室にふんぞり返っていた自分が人間として最低のことをしている。その悔しさ、恥ずかしさが次第になくなってきていた。

農家の老夫婦から塩だけの握り飯を貰う。それをありがたく頂戴した。二日ぶりの飯だった。寝床は納屋の中の土間に直接寝る。蒲団ではない。筵を幾重にもかけて蒲団がわりだ。

翌日から、また老人との奉仕の旅が始まった。裸足は痛かったが、昔の人は平気で歩いていたのだ。慣れないと不安だが、両足で地面に立っているという感触があった。老人と路頭の行という修行をしているうちに、喜久夫に迷いはなくなった。すべてが生かされているというありがたさ。寒ければ火のありがたさ。雨降れば軒のありがたさ。衣食住の忘れていた当然のことを思

い返す旅だった。

古里まであと百五十キロ。雪がちらついてくる。同行二人とは、本当の自分とすれ違う旅。老人が喜久夫にありがたい仏に見えた。

第45話 内科診療室

内科医の藤島は今日もうんざりしていて、診療に身が入らない。朝は早くから、詰めかけるのはすべてばあさんはがりだからだ。一日老婆ばかり見ていると、(おれは医師として開業はしたものの、毎日何をやっているのだろう)という疑問も出てくる。それが仕事だと割り切れればいいのだが、半分以上の年寄りたちは実際の病気でもなんでもない。あちこちが悪いと一応来るのだが、精神的なものが多く、三十七度少し熱があっただけでもやってくる。一体、三十年前、四十年前はそんなに病院が繁盛したか。熱が出たくらいで来ることもなかった。みんな我慢して家で寝ていた。熱さましにネギや大根おろしなど、食べ物で直した。医者があまり暇で困ったから、各家庭を往診して歩いたくらいだ。それが、いまや、年金たんまり、老人の医療費ただ同然となると、暇で油売りにくる年寄りばかり。病院が老人の溜まり場になって、「あら、今日はどこが悪いの」と、病気を趣味にしている向きもある。やたらじゃらじゃらと薬ばかり飲んで、それも趣味なのだ。本当に死にそうな老人はそんな病院をうろうろしてはいない。年取ってくるとあちこち悪くなってあたりまえなのだ。

藤島は当然、老人を診察するのが面倒くさくいい加減になってくる。毎日来る老人もいるのだが、そう一日で変化することもなく、どうでもよくなる。「ああ、いいですね」と、ろくに聴診器もあてない。本人の胸をはだけて垂れた醜い乳を見て、歯の欠けた異臭のする口を覗いて何が判る。仮に判ったとしても、黙っていれば死ぬのだ。「いいですね」が、口癖だ。一人にものの数秒で終わる。数秒でろくに見もしないで、健保への請求は二千円を越えるから、一言二千円だ。いい商売である。

ただ、滅多にこない若い女性が来ると、必要以上の時間をかけて念入りに診察する。医者の特権だ。そのときばかりは医者としての使命に燃えるのだ。腕にしてもいい注射をわざわざ尻にしたりする。若い男性が来ても、滅多にこないから、「どうしました?」と、親密になって診察をする。働いている男性が来院するということが余程のことがある。みんな仕事を抜けられないから、かなり酷くなってから来たりするのだ。中には、すでに癌の末期で手の施しようがなく、紹介状を書いて即刻大病院に入院、手術の間もなく、十日くらいで死んだという患者もあった。病院に普段からかからない人ほど、やってくると手遅れが多い。だから、毎日来るばあさんは黙っていても長生きするのだ。

藤島は思った。これほど、昔と違って栄養もよく、食べ物も豊富で、いい薬もでき、医学は進歩した。にもかかわらず、患者だけは確実に増えている。これは何だろうか。文明の進歩と関係がある。便利になった分、ストレスが増えた。ストレスから心身症、パニック症候群が増えた。患者の多くは、たいしたことがないものが多い。不定愁訴する内容は医学では計測できないものが多かった。自律神経失調症、神経心臓、ノイローゼ、不眠症、鬱病、その精神的病の患者たち

が日々、内科を訪れる。調べればどこも悪くないのに、本人は病気と思っている。「どこも悪くありませんよ」と云おうものなら、敵意を剥き出しにしてかかってくる患者が多い。なんらかの病名が欲しい。病気を与えると安心して、どうでもいいビタミン剤を貰って喜んで帰るのだ。そうしたまやかしの診療をしている自分が医師としてのモラルを考えたとき、やりきれなくなる。いまは病院も倒産する時代で、患者が病院を選ぶ時代だ。医師が患者のいいなりになる、逆さまの世界なのだ。患者もいろんな本やマスコミからの浅薄な医学の知識を持っているものが多いからやりにくい。

「先生、本当のことを云ってください。風邪だなんて、どうして癌だって告知してくれないんですか」また、厄介な患者がきた。いろんな病院を転々と渡り歩く、医者不信者、買い物するように病院を変えるのでドクター・ショッピングという。自分が癌だと思いこんでいる。まるで、脅迫するように連日家まで電話してくる、困った患者だ。あまりうるさいから、とうとう降参した。

「判りました、わかりましたから。あなたは癌です」

一瞬、患者の顔色が変わったが、たちまち晴れやかな顔になると、訊いてきた。

「あと、どれだけ生きられるんですか」

「あと、十年の命です」患者は八十歳だったから、そんなものだろう。

「よかった。あと十年ですね」癌と云われて喜んでいる。いままで何十年も自分が癌ではないかと悩み続けた不信感にようやく終止符が打てる。

「先生、前の病院でこんな薬を貰いました。その前の病院からはこの薬ですが、中身は何なんでしょう」と、じゃらじゃらと自分の薬のコレクションをぶちまける。この患者は薬不信感。いちいち説明して相手しているほど暇ではない。藤島は適当に返答する。

また、ある患者は以前入院したとき、医療ミスがあって、その後遺症で苦しんでいるという。「胆石を手術したんですが、そのとき病院で携帯電話をお腹の中に忘れたんですね。ほら、聞こえませんか、着メロとかいう音楽が聞こえるでしょう」

こちらの患者はどうも行き先を間違えているらしい。内科の患者ではない。そんな患者ばかりでこっちが変になりそうだった。藤島は肉体ではなく精神が病んでいるものたちの相手を一日して、ついに狂った。

「先生、生きてゆくのが嫌になりました」「あっそう、青酸カリを出しておきましょう」「先生、健康診断の結果、どこも悪くないっていうんですか」「しいて云えばあなたは健康病です。健康であることが一番の病気です」「先生、眠れないんです」「寝なきゃいいんです。何日起きていられるか頑張って記録を作ってください」「先生、先生、どうしたんですか」藤島は診察中に硬直したまま動かなくなっていた。看護婦が先生を叩く。「すみません、またフリーズおこしちゃって」

世界遺産に登録されている白神山地の奥深くに、とり残されている村が発見されたというニュースはインターネットから突然広まった。昔から隠れの里というのはあったが、この二十一世紀の現代で信じ難い事実としてマスコミも騒ぎ立てた。何よりも、それを半世紀以上もの間、把握していなかった行政が驚いた。歴史的には平家の落人の部落であるとか、秋田、青森にまたがる白神山地には有名なマタギの里もあったが、すべて昔の話。現代文明に取り残されて、ひっそりと六百人、百世帯余りの人間たちが隠れ住んでいたのが誰にも判らなかったという不思議が世間を驚かせた。

ことの始まりは、山岳写真家で有名なK氏が、世界遺産に登録されてから入山許可のなかなか下りない地帯を深く入りこんで発見したのだ。昔は道路があったと聞くと、戦後はその道路も封鎖され、草木が生い茂り道の跡すらみつけるのが困難だった。村史によれば、戦前は部落が点在していたが、過疎が進むにつれて離農してゆき、分校も閉鎖、最後の部落民が四十キロ離れた町まで移住した昭和十六年で、その辺りは無人の村になったという。それがどっこい残っていた。K氏が地図にない村を山峡に発見したとき、無我夢中でシャッターを切り続けた。その画像を、モバイルを使い自分のホームページにアップしたことから発覚したが、以後のK氏の消息がふつりと消えていた。

ヘリコプターで捜索が続けられたが、見つかるわけがなかった。鬱蒼としたブナの原生林に隠されるようにして村は六十年間も見つからなかった。マスコミ、消防団、自衛隊、警察、どっとその村に押しかけた。家という家は蔦で覆われて、上空からは識別できない。村人は家々に引きこもって出てこない。戸にはしっかりと鍵をかけていた。犬だけが庭で吠えていた。見ると、電気もガスも水道もないが、商店はあった。銭湯も、床屋も昔のまま建っていた。仁丹の看板、カルピスのポスターもそのまま。いまは使われないポストもあるし、消防の古いポンプから火の見櫓も昔のまま。医院の看板もある。文字はすべて右から左へ。学校も木造校舎そのまま使っているようだ。麓の村から一日がかりで険しい難所を登ってきて、ようやく幻の村へと辿り着いた。

「誰か、おられますか」と、呼び掛ける自衛隊員の声に、ようやく老人が一人、家の中から出てきた。麻の粗末な服を着ている。白髭が顔中を覆っていた。

「わしは、ここの村長のイスルギと云います。わしらはみんな行方不明者から、その子孫なもので、戸籍がねえ。この日本を捨てて生活しているだ」

村長の合図でぞろぞろと村のものが家から出てくる。話を聞けば、戦前に強制労働の朝鮮人をかくまったことから、軍部に目をつけられ、村の若いものが次々と徴集されて行くのをなんとか阻止するために、ひとりひとりと村を去り、一時的に村を空にした。全員が流浪の民となって、以後行方不明。一年後に村の道が崖崩れで途絶えたことをいいことに、山ルートで村に戻っていた。戦争という気違い沙汰から、日本に失望した村人が、それから半世紀以上もの間、隔絶した生活をしてきたという。

続いて消息を絶ったK氏が元気な顔を覗かせた。

「ぼくは、この村にすっかり魅せられて、ここの住民になりました。村長、ぼくから、この村のあり方を説明してよろしいですか」

K氏が数人の村の若いものと村を捜索隊の先頭に立って案内した。村は農業主体の自給自足の暮ら

しをしていた。

「ここには貨幣がありません。税金もなければ通信手段もなく、六十年前で歴史も止まっています。ここは貸し本屋さんです。図書館のように、当時の古い本をただで村民に貸していますが、余計な知識の本はすべて燃やしてしまいました。紙も手漉き和紙を使い、医者もおります。先生もおります。大工さんも、機織もおります。外部から遮断されてもなんら不自由のない生活があるんです。味噌も醤油もすべて自家製です」

「困ることはないのですね」新聞社の記者が訊いた。

「全くありません。ここにいる人たちは外部の世界は汚染されていると信じています」

「戦争は終わったことは知っていますか」「それは知っておりました。朝鮮人の方もかなりここにいますが、強制送還されるのではないかと心配しております。戦後のくだらない日本を予感していたのですね。文明を拒否することで人間の本来の至福を得られるという村長の考え方に共感したものが、共同生活をしているのです」

「それじゃ、現在の総理大臣の名前も、テレビというもの、パソコンというものも全然知らないんですか」「そうです。ここには新聞もラジオも電話もありません。情報も入ってこないのです。それが却って幸いでした。ここには犯罪も病人も交通事故も貧乏人も金持ちもありません」「でも、子供たちはもっと広い世界を見たいと思いませんか」「どうですかね、不景気で失業者やホームレスが溢れ、政治家は収賄、戦争やテロが各地である、そんな世界を見てどう思うでしょうかね」

行政の担当官たちはしばし黙考していたが、ここに住む無国籍の住民をどうすることもできず、この村も世界遺産の中に永遠に封じ込めるよう、申し合わせた。マスコミには緘口令を敷いた。心無い人たちが押しかけてこないよう、村へのルートはすべて閉鎖し、入山許可を下ろさないようにと。

「ありがとうございます。これはぼくの腕時計とデジカメ、ノートパソコンです。一切を家族に渡してください。ここに骨を埋めるつもりでおります。もう帰らないと云ってください」K氏はそう云って、記者に文明の私物を手渡した。

記者たちはスクープを諦めた。この世に桃源郷というのは本当にあるのだ。まだまだ見捨てたものではないなど、ほっとした気持ちで、誰しも汚れきった娑婆へと戻っていった。

第47話 行 列

行列ができる店が脚光を浴びる。人が並んでいると並びたがる心理もあって、ますます行列は長蛇の列になる。宝くじ売り場でも、スーパーマーケットの先着何名様にも、ディズニーランドの乗り物にも、ラーメン屋にも、並ぶことで同化し安心する日本人が如何に多いことか。何がなんでも並んでおかなければ不安になる。並び屋という商売もあるという。アイスクリーム・ショップなどがわざわざ頼んでサクラに並んでもらうというもの。それにまんまと乗せられる群集心理が不思議だ。

高野の奥さんもチラシ片手にバーケンといえど突撃する。世間に遅れをとることが何千円もの損をした気がしてくる。われ先に人より先にお買い得を手にするのが、やり繰り上手な家庭の主婦なのだ。恥も外聞もない。こんな世知辛い世の中になればなるほど、人を押しつけて生きてゆかねばならない。そんなときは女が強い。

高野さんがデパート地下でタイムサービスの調味料をゲットすると、もうそれだけ買って引き上げる。絶対にわき目はふらない。余分なものは買わない。衝動買いが家計の大敵だ。それで満足そうに、デパートの裏のほうから次なる市場へと向かう途中、裏通りの何だかよく分からない商店に数百人の行列ができていたので、つい走った。行列に敏感で闘争本能が剥き出しになるのは性分か。行列のお尻はと捜したがどこまでも続いているようだ。賢い奥さん狡い奥さん、つい知り合いのように、見も知らぬ奥さんに親しげに声をかける。「あら、暫く、ここって新しくオープンした店でもなさそうね。ねえ、何か貰えるの」ちらりと高野さんの顔を見たきりでその奥さん、何も云わない。(変な人、でも、まあいいか、どさくさで割り込もう)高野さんは、平然とした顔で列に割り込む。ところが誰も文句も云わないし、睨む者もない。みんな無口で前方ばかり見ていた。一人、一人と店に入ってゆく。雑貨店風の店だが、看板がない。何屋さんなのだろう、高野さんは怪しい店だが、こんな無印の店ほど、実はすごいものを放出するというのを体験上知っていた。ここは匂うぞ、これほどの列も最近ないし、なんと云っても後ろが見えないほどの人だもの。高野さんはしてやったりと前列に割り込んで得した気分になった。並んでいる列の後方は路地を曲がって、このブロックの一角を取り囲んでいるようにも見えた。いろんな風采の人が並んでいる。電気工事の繋ぎを着た人、ビジネスマン風の人、学生さん、暇なお年寄りたち、主婦だけでない行列の構成は、女性のものではない、万人にお得なものに違いない。と、高野さんは思った。なんか、ドキドキする。開けてびっくり玉手箱だ。さあ、何が出てくるのか。

いよいよ高野さんの店に入る順番が来た。看板がないから、何を売っている店か判らないのが余計に気になる。みんな一步ずつ前進している。そう、何時間も並ばなくても自分の番は来るだろう。奥さんはいきいきしてくる。もともと、お祭り騒ぎ大好き、野次馬大好き、流行大好き人間だ。さあ、開け放ったドアから店の中に入る。期待していて、少しがっかりした。電器もついていない、商品も棚もない、がらんとした店だったが、その奥があって、まだ先に行列が続いている。先頭は見えないから、店の奥にきっと何かあるんだ。間口は狭いが、奥行きが長い店は、いくつもの部屋続きになっていた。入口から入ったフロアから、次のフロアへと前進したが、そこもがらんとした、何も置いていない。ただの空間だった。ポスターの一枚も貼っていない。コンクリートの壁だけの空間だ。高野さんは背伸びをして、前に何があるのかを見ようとしたが、見えない。

「ねえ、何が売っているんですか」前の紳士に訊いてみたが、黙々と並んでいるだけで、こちら何も云わない。そのうち、行列は建物の裏口から出てしまった。暗い穴倉から急に明るい戸外へ出られたという感じだ。それでも行列はさらに続いている。一步一步と前進して、路地を左へと曲がる。すると、デパートの裏通りに出た。さっきの通りだった。

「ええ、何なのよ、ねえ、何を並んでいるの」高野さんは苛々して、前の主婦を掴まえて詰問

した。主婦はようやく堅い口を開いた。

「わたしもよく分からないで並んでいるのよ。前の方に訊いてご覧なさい」

高野さんは驚いて、その前の老人の肩をゆすって訊いた。

「ねえ、何を目的に並んでいるの」

老人は面倒くさそうに重い口を開いた。

「わしに訊いても分らん。前の人に訊いてみなされ」

その前のサラリーマンも、その前のOLも同様の返答だった。その行列は先へ先へと進んでみれば、なんと、またあの何もない店へと入ってゆくではないか。高野さんは気が狂ったように、駆け出した。行列の先へ先へと走り、怪しい店へ入り、いくつものフロアを駆け抜け、裏口から路地へと出て、左へ曲りまたデパートの裏通りへと出る。

「この、行列は、繋がっているんだわ。先頭も尻尾もない、輪になっているんだ。どうして？」高野さんは息せき切らして、まるで自分だけバカにされたように腹が立った。

「一体全体、何なのよ、あんたたち。ぐるぐると同じところ廻って、バカじゃないのよ」

高野さんは泣き出しそうになって、叫んでいた。すると、一斉に行列の群集が高野さんを睨んだ。非常識を詰る異様な視線だった。

そして、行列は、また高野さんを無視し何事もなかったかのように一步一步と前進していた。

第48話 葬式ライブ

高津圭佑は末期癌の宣告を受けてから、あと二ヶ月の余命を実に忙しく動いた。身辺整理をして、死後の家族への行き方まで指示し、財産及び借金の取扱いから、遺言状の作成、仕事の引継ぎ、葬式の段取りまで、一世一代の己の幕引きを己の手でやることに、病む体も忘れてのめりこんだ。還暦になったばかりだから、まだ逝くのは早い。自分の葬式は自分で演出する。と、圭佑は綿密なプログラムと計画書を家族に渡して、役割を決めさせた。その計画書を見ただけで死んだら忙しくなると、みな一様に気落ちしてくる。事前に手配するものは手配し、いつ死ぬか分からないから、印刷物にしても日付だけ入れれば刷れるようにしておいた。そうして、段取りをつけ終わると高津圭佑は安心したように亡くなった。遺族は亡骸に抱きつくようにして泣いたが、泣いている暇はないと全員、予定通りに走り廻らねばならない。急に忙しくなってくる。

翌日、知人、友人親戚に高津圭佑からの招待状が届く。遠方の方にはeメールかファックス電報だ。

葬式ライブへのご招待

皆様、あのへそ曲がりの高津圭佑が亡くなりました。

つきましては故人の遺志によりまして、従来とは違うお葬式を執り行いたいと存じます。必ず左記の要旨をご理解の上、ご参会いただきますようお願い申し上げます。

と き 平成十四年三月二十日午後三時より

ところ 市民コンサートホール

会費 三千元(会費制ですので多く包まないでください、またくれぐれも御霊

前の袋な

どお使いになりませんように。御祝儀の袋をお使いください)

服装について 黒は厳禁です。できるだけ派手な洋服でおいでください。背広

もいけません。スポーツウエア、ゴルフウエア、カジュアル歓迎。

当日は宗教ではやりません。数珠などご不要です。

ご供物ご供花のご辞退 お持ちになりましてもお引取りいただきます。

みんな、何が始まるんだろうと、生前の高津を知る者たちは、そう驚きもしないが、前代未聞の葬式を心待ちにしていた。それでも心配なので、招待状を受け取った人たちは互いに連絡を取り合って安心したりしていた。

当日、コンサートホールの入口には風船のゲートができていた。ピエロが式次第を配っていた。受付の人たちも、ど派手な柄ものの洋装。にこやかに笑って、「いらっしゃいませ、ようこそ」軽快なマーチが流れている。遊園地かと思間違う。会場は色とりどりの風船で華やかだ。みんなバカンスにでも行く格好をしていた。冗談ではと恐る恐る来た者もほっとする。時間になり開演のベルが鳴る。幕が開くと、いきなりジャズのコンボがががん演奏し、どこから連れてきたのか外人のジャズ・シンガーが「詩人が死んだ」を明るく歌った。圭佑の大きな遺影が中央に飾られて、周りには花。演奏を続けながら、献花がなされた。全員に花一輪が用意された。線香の匂いも坊主の読経もない。献花をする人が改めて圭佑の遺影を見上げると、なんとそこには、赤んべをして、舌をながめている圭佑が写っているのではないか。みんな歯を食いしばり、あるものは自分の体をつねりながら、笑いをこらえて花をステージに捧げていた。非常に苦しそうだった。脂汗まで流れてくる。それが終わると椅子に座らせられた高津本人が白の結婚式用のスーツを来てステージに運ばれてきたから、一同ぎょっとした。目が開いている。と、見せかけるために瞼にうまく目を描いていた。それが、二人羽織のように、後ろに隠れている黒子によって、手を振ったりして愛嬌を振りまいていた。さらに、テープから本人の挨拶が流れる。まるで生きているようだ。いままで笑いを我慢していた一部の人から吹き出した。するとつられてみんな大爆笑となった。ブラックユーモアを通り越してあまりのくだらなさ一同大笑いした。喪主の長男と次男が挨拶がわりに漫才を披露した。そのようにシナリオに書かれていた。会場からゲタゲタと遠慮のない笑いが巻き起こる。

親族が全員ステージに上がって、ゴスペルを披露。最後に、友人たちがステージに上がって圭佑の遺体を胴上げする。そのまま昇天するような勢いで。会場から拍手が沸き起こった。会場の出口で抱きかかえられた圭佑が帰る参会者の見送りに立った。みんな握手してお別れをしてゆく。

。

「いやあ、今日は本当に楽しい葬式で」と、全員にこやかに満足そうに帰って行った。

その後、高津圭佑は火葬場へ。骨は砕いて自家菜園に撒かれた。一周忌にはそこで採れた野菜でバーベキュー・パーティーをしなければならない。すべて、高津の遺言で演出だった。死んで忘れ去られるより、いつまでも心に残り続ける。思い出し笑いをする。高津圭佑は笑いの中に生き続けるのだ。

アメリカと西側諸国連合軍がまた湾岸戦争を始めた。今度の戦争はイラクだけではない。イスラム諸国が連係しての戦いだから、すぐに収束はしなかった。紅海が機雷封鎖され、海峡や運河の出入り口も潜水艦攻撃で閉鎖されると、タンカーの横行が途絶えた。たちまち原油価格が高騰し、絶対量が不足するや、国内の備蓄も底をつくという非常事態となった。オイル・ショックが今度はもっと深刻に日本を叩いていた。戦争は第二のベトナム戦争と云われ、戦火は拡大し長引いた。

石油依存産業はすべて退廃し、デフレからインフレへ、経済はさらに混迷を深めた。企業倒産はほぼすべての大企業を中心に起こり、生き残る会社が珍しい状況となった。国民所得は三割まで落ち込んだ。インフレによる実質目減りで換算すれば、実質所得は二千年の一割にも満たない。ちなわち、月給五十万の人は五万円以下に落ちたということだった。ちょうど日本が四十年時計を逆戻りさせたような光景になってきた。

富樫家ではマイホームのローンを払えずに家を手放した息子夫婦が、実家に転がり込んできたので、孫も交えて急に大家族になった。まだ春先で寒かったからストーブは切らせない。とはいっても石油ストーブなど贅沢品で、薪ストーブだ。火種を起こして竈とストーブに入れる役目はばあさんだ。電気代も高くなったから、できるだけ電化製品は使わない。朝はラジオで我慢する。ラッパの音色で朝早くから豆腐、納豆と自転車で売りにくる。井鉢を持って買いに嫁が走る。コンビニもスーパーもみんな潰れた。郊外のショッピングセンターもすべて車がなくなってからは客が入らず倒産した。その代わり昔のように、近所に魚屋、八百屋がまた復活した。御用聞きも毎日顔を出す。重いものかさばるものはリヤカーで配達してくれる。上の孫は給食がないので、弁当持って学校だ。下の孫は幼稚園だが、マイクロバスの送迎がないので、嫁が自転車で連れてゆく。道路は広々としていた。信号も必要がない。一部のトラックとバスより走っていないから、町内のチビたちが道路の中央に座りこんで、アスファルトの上に石で落書きを書いていた。

国民すべてが貧乏のどん底に落ちてからは生活は実に質素になった。一汁一菜で、おやつも手づくり。インスタント食品は高価になった。以前のようにパックものを買うことがなくなった。料理も手抜きはできない。ゴミの量もどっと減った。醤油も酒も一升瓶を持って買いにゆく。クリーニング屋が来る。

「今日もないのよ。できるだけ手洗い、毎日アイロンかけて節約よ。お宅も大変ね」

「そうなんすよ、どこの家もそうでうちは廃業すよ」

テレビはあるけど無駄に見ない。全員揃っている夕方から夜まで時間制限している。テレビ局も昼間はテストパターン。

車庫に放置したままの車は納戸代わり。使わないものを仕舞っておく倉庫だ。どこの家も何年も車を使っていないので、街の空気も綺麗になった。夜は星座がくっきりと見える。その代わり

自転車がやたら増えた。

嫁とばあさんが駅前商店街に買物に出かけるときも自転車だ。ばあさんはママチャリ。郊外型の店が全滅してからは中心商店街がまた復活して、街の賑わいが戻った。市場も活気が出てきた。車がないので道路は歩行者専用。どこにこんな人がいたのかと思うほど人が歩いていた。商店は店頭販売にやっきだ。声を囁らして呼び込みしている。デパートやスーパーのチェーン店、大資本がすべて全滅したから、昔の商店が繁盛し出した。

「奥さん、まけとくよ。今日は特売だ、一本二千円の大根が二本で二千円だ」

「昔は大根なんか安くてね、いまじゃご馳走なんだから」ばあさんは溜息をついた。肉なんか、月に一度口に入ればいい。

「今夜はたまにスキヤキにしようかね」「義母さん、いいんですか」「構うことないよ、肉の代わりにじゃがいもと麩を入れるのさ」「そうね、今日はお給料日だから、奮発してね」「お父さんにビール一本だけつけようか」「そんな、贅沢して」「月に一度だけだよ」嫁も昔のようにぐいとビールが呑んでみたいと思った。食費が一万円じゃ、どんなに節約しても一家六人食うのも大変だ。八百屋から野菜屑を貰ってくる。

夕方になれば町内を太鼓が通る。孫がばあさんに五円をねだる。紙芝居が来たのだ。

お金のない子はガラクタで遊んでいる。昔、ノートパソコンと呼ばれたものや、ケイタイと呼ばれたゴミをどこからか拾ってきて遊んでいるのだ。

「御飯ですよ」と、お母さんたちが子供たちを迎えに家から出てくる。夕焼けが綺麗だ。子供たちの残していった石蹴りの石だけが道路に転がっていた。

第50話 同窓会

高山は高校を出てから寿司屋に丁稚奉公に行き、暖簾分けして貰うと、郷里の町でいま流行の寿司レストランを開店させ、成功した。いまは郊外の支店と二店をきりまわしている。その寿司屋に三十年ぶりに高校の同級生が顔を出した。

「高山、おれだよ、分るか」どっちもいい親父だ。頬髭のない、眼鏡を外した顔を検索していたが、分らない。

「立石だ」と、男はもどかしそうに答を白状する。急に高山は晴れやかに笑うと、「たっちゃんか。おい、どうしてた」と、同じ陸上部の旧友を迎えた。「おまえ、確か国立一期のいい大学へ行ったんだよな。それからその先が分らねえ」久し振りの友にビールを出した。「それから、友墨商事へ入ってな」「おう、あの一流上場の、いや、確か去年倒産したんじゃないのかい」と、高山は口に出して抑えたが遅い。

「そうだ、それから職を転々として、東京が厭になってな、故里に戻って来たというわけだ。そこで、相談だが、クラス会をやろうと思う」立石は寿司をビールで流しこんで云った。「クラス会かよ、みんなどうしているのかな」高山に坊主頭の旧友の顔が浮かんだ。

三十年経つと、卒業生名簿は怪しくなる。女子は嫁に行ったろうし、町名も変わっていた。それでも、何人かに連絡すると、年賀状のやり取りしている者もいて、連鎖的に所在がわかってくる。みんな故里に戻ってくる、お盆の頃に寿司屋の二階の広間でやることになった。

一クラス四十五人のうち、連絡がとれた三十六人がそれでも当日出席した。高校生の十八からいきなり四十八の中年になつて再会するから、互いが誰か判らない。面影が残っている者、がらりと変わった者、名前も思い出せない。

「高山か、すっかり寿司屋のおやじになっちゃって」

「そういうおまえは、宇野か。優等生だったな、大学も名門、都市銀行へ行ったんだってな」

「そうなんだが、今年リストラに遭ってな、いま、再就職に走っているが、この年じゃなかなか」急に宇野は暗い顔になった。高山は次の語が出ない。

「あらあ、立石くん、いま東京？」「ううん、今度は帰ってきた。こっちで働くよ」「そうなの、わたしね、いまこんな店やってんの、来てね」名刺を見るとクラブサッチモとある。幸子のあだ名がそのまま店名だ。ジャズ狂の亭主も先輩だったが、すでに離婚していた。クラス一の美人だった幸子もそれなりに美貌は保っているが、顔の影は不幸を映していた。

ビールで乾杯。級長の足立が挨拶した。担任の先生を招待したかったが、一昨年他界した。享年七十六だったという。いまさら、みんな自分の年を感じた。寿司に刺身、焼き物、酢の物と魚介類が多いがネタは新鮮特上。高山は今日のために奮発した。自己紹介と近況報告がひとりひとりなされた。

「わたし、旧姓山田です。美術部の素子です。あれから美大へ行って、卒業して同じ絵描きと結婚、彼ととニューヨークへ住んでいたんです。でも、あのテロで夫が死んで、わたし、わたし…」と、泣き崩れる。みんな慰めに回った。

「ぼくは、演劇部で脚本書いていた寺本です。劇団に入って、みなさん覚えてますか、覚醒剤で大量に捕まった事件、あのときぼくも務所に収監され、前科一犯です。いまはしががないどさまわり」

「わたしは新聞部にいた工藤です。いや、名乗らなくともみんな知っていますね。本当ならここに出てくるのも恥ずかしい」「どこかで見た顔と思ったら、出世頭の工藤豊じゃないか」「そうよ、外務省に入って、汚職で逮捕されたって新聞で騒がれた張本人じゃない」みんなひそひそ話していた。

「おれ、ドン亀、知ってるか。福田だよ。昔のまんまだよ。いまも、そのお、どんくさいのは同じだ。はははは」「おい、ドン亀よ、いま何やってんだ」「おれ、なんの才能もねえからよ、高卒で就職した会社の社長に見込まれて、ひとり娘と一緒にあってよ、いまは土建屋の社長しているよ」「すごい、丸建という隣町では大手だぜ。逆玉か、うまいことやったな」

「あの、わたし、いまも赤面するお福というと判るかしら、目立たない静かな生徒で友達も少なかった滝川早苗です。一浪して医学部に入り、いまは県病の小児科の医者をやっています。お子さんといってもみんなもう大きいからお孫さんがいる方は是非何かあったらお出てください」

「わたしは顔見れば判ると思います。みんなにブス姫と呼ばれていた、いまもそのままの三田です。こんなわたしでも貰ってくれる人がいまして、いまは子供三人に孫一人、夫は市議員で三期目、今度の選挙もよろしくお願いします」

高山は思った。高校のときに派手な目立つ優等生ほど墮落していた。逆に地味な、いるかいないか判らない生徒が出世していた。高山も高卒で劣等感があったが、いまは胸を張って生きている。学歴ではなかった。人間の幸不幸なんか、三十年後の結果を見ても歴然としている。同窓会とは人生の品評会のようなものだった。

「さあ、カラオケあるから歌おうぜ。懐かしのグループサウンズだ。がんがん行こうぜ」
スタートラインは同じだった。どこでどうみんなあみだくじを辿ってきたものか。

第51話 居場所不動産

「居場所不動産」は私鉄の駅裏にひっそりとあった。さっきから、サングラスをした四十過ぎの女がその前をうろついていた。怪しい看板を見て、女はふらりと不動産屋の事務所に入った。普通なら賃貸物件の紙をガラス戸に貼ったりしているものだが、全くそれがない。事務所の中にも机ふたと応接セットがとコピー機があるぐらい。ちょび髭に丸眼鏡の五十過ぎくらいの社長と、髪も手入れしていないくしゃくしゃした中年の女事務員がいるだけの、なんら変わったところはない。

「いらっしゃい」とちょび髭の社長。女はソファに座らせられる。女事務員はぬるいお茶を出した。

「どんな物件を希望しておいでですか」にこやかに対応する。

「あのう、わたし、居場所がないんです」おどおどと女は小声で云った。

「いいですよ、ここに来る方は皆さんそうした希望でおいでになるんだから、どうぞ、遠慮せずにおっしゃってください」

「わたし、主婦なんです、結婚して二十年、子供たちは高校、大学と手がかかりません。夫はステーションナリーの製作会社に勤務して夜が遅いもので、わたし、いつも一人なんです。自分の家なのに帰るところではないんです」女はぽろぽろ涙を流して訴えた。

「そうですか、あなたのような奥さんがよくおいでになります。いい、物件がありますよ」社長は分厚いファイルを持ってきて、ぺらぺらめくっていた。

「これなんかいかがでしょう。お宅から徒歩十五分、スーパーは近いし、ジャズ・ダンスの練習場付き、これは共同使用ですが、談話室もありますし、現在二十人が入居しております。部屋は三人部屋であなたと同じくらいの奥さんがすでに二人入っております。南向きでいい部屋ですよ」「条件はどんなでしょう」「月の使用料が二万円、他に共益費が二千元、敷金ふたつです。昼でも夜中でも寂しくなったらいつでも入れます」

女はもう一度考慮すると帰っていった。入れ替わりに品のよさそうな老人が入ってくる。

「定年退職して五年、うちのばあさんは趣味ごとに忙しく殆ど家におりません。息子夫婦は転勤族で、この年になって無趣味は崇ります。いつも居場所がなくてうろうろしております」仕事一筋で邁進してきて、退職したあと身の置き場がない。

「よくあることです。はりあいもないでしょう。気が抜けたようになって、ぽっくりと、いや失礼、人生六十過ぎあたりが一番危ないんですな。あなたにいい物件がありますよ。これなんか如何でしょう」

ファイルには「風呂屋の番台」とある。普通なら座るだけでお給料を貰えるのだが、ここでは逆に場所代がかかる。

「いいですよ、男の夢です。誰でも一度は座ってみたい。絶景ですよ。若返ります。生きる意欲が出てきます。座って、本を読んでいる振りをしていけばいいんです。それで本越しにちらちらと」社長はにやけた顔を咳払いで真面目に戻す。老人は乗り気だった。急に春がきたように、

顔が明るくなった。

「それですよ、それ。月五万円は安いですよ」老人は即決だった。

社長が午後の陽気でうとうとうた寝しているところに、ガラリと戸が開いた。アタッシュケースを手にした営業マンが入ってくる。どの客も一様に落ち着きがない。

「不景気でセールスしても売れません。それでも会社には帰れず、一日パチンコしたり喫茶店でコーヒーのんでサボっていますが、それも金がかかります。どこか時間潰しする場所で、しかもやりがいの出てくる場所を紹介してもらいたいのですが…」

「よろしゅうございます。お宅のようなビジネスマンにはもってこいの物件があります。大手町のオフィスビルの一室ですが、そこの机ひとつです。同室には異業種のサラリーマンたちが他に五十人くらい机を並べております。情報交換にもなりますし、仕事が入るかもしれません。電話も使えます。パソコンも使い放題です。お茶汲み、秘書も料金次第で使えます。別室にはサパークラブも附属していて、低料金で呑めます」会社とは別の机と場所が使える。それも誰も知らない隠れ家のように、机に伏せて寝ていても、週刊誌を読んでも上司から注意されることもない。

「それです。ぼくの求めていた空間は。是非契約したい」営業マンも即決だった。

世の中、人間が疎外されてくると居場所がないものがどんなに多くなってきたことか。五時になった。不動産屋は店終いだ。女事務員は金を金庫に蔵う。帳簿も閉じた。

「さてと、今度はわたしの居場所を捜しに行くかな」社長も落ち着きがなくなっていた。アフターファイブの身の置き場所がない。家に帰るには早すぎる、さりとて誘う相手もない。

「どこかに、いい物件がないものかなあ」

都会はいつも動いているように見えた。足早に歩いてゆく雑踏の中において、果たしてみんな目的があってどこかへ歩いてゆくのだろうか、と疑いたくなる。行き場がなくうろついている人間もかなりいるだろう。例えば、それはあなたかもしれない。

第52話 ひきこもりボックス

さあ、皆さん、これは何だと思えますか。テレビをご覧の皆さん、この空地に置いてある、縦横2メートルのサイコロのような黒い箱。東京の郊外ではこの写真にもありますように、ほら、たくさんの黒い箱が整然と並んでおります。実はこれは一人用の家なのです。この写真はすでに完成されている団地なのです。これぞ、わが社の新商品、名付けて「ひきこもりボックス」です。窓がありませんが、空調は完備しております。内部を外から見ることはできません。耐火ボードと強化プラスチックで出来ておりますので、火事には強いのです。地震で倒れることも、水害でも浸水いたしません。水には浮かびます。堅牢な作りと構造ですので、自動車が衝突したくらいでは壊れません。箱の下にはキャスターが付いておりますので移動も楽々です。

さて、箱の内部をご覧にいれましょう。機密性があり、外部の騒音もシャッタアウト、一年中

、室温が変わりませんので、快適な生活を保障いたします。少し狭いようですが、ドアを開けると、中は畳二畳ほどの空間になります。ベッドは天井近くに梯子で登ります。黒と白を基調にしたやわらかな布地を壁面に貼ってありますので、温かみとやさしさがあります。ベッドの下には食卓にしても勉強にしても使えるライティングディスクがあります。ノートパソコンを置いて、プリンターや音響設備など周辺機器をうまく収納するように考えられています。一人用の冷蔵庫、ハンドタイプの全自動洗濯機、電磁調理器も用意しました。ちょっと狭いですが、完全防水のトイレ兼シャワールームです。洗顔用の小さな流しも付いてあります。インターネットは使い放題なので、テレビ、ラジオは勿論のこと、映画も、音楽も配信してもらえば自由に楽しむことができます。勉強したい方のために、小学校から中学、高校、大学まで会議形式を採用したりアルタイムの通信教育も受講できるようになっております。

また、買物はすべてネットからの注文でスーパーからでもコンビニからでも定期的に配達していただけます。お支払いは口座引き落としで、まったく手を煩わせることはありません。ネット図書館からの無料貸し出しもやっており、四十万冊の本が現在データベースに入っております。新聞、週刊誌もすべてウェブで配信されますので、モニターだけで世界中すべての情報が把握できます。

配達を受け取りも、ドアをいちいち開けなくとも、メールボックスのような機能があり、サインも伝票を差し込むと自動的に行われます。外部との接触、受け答えの煩わしさが一切なく、対人関係が苦手なあなたのことを考えてすべてのシステムを考えました。

それでも外部の様子が見たいという方のためにオプションですが、三百六十度の回転監視モニターを装備することもできます。

これさえあれば、あなたは一日中、一年中、外に出る必要は全くありません。すべて、この箱の中で生活がまかなえるよう工夫されています。ひきこもりの方には最適な生活空間です。ダストシューターもついておりますので、ゴミは一箇所に集まるように作られています。ゴミの日も意識することなく、隣近所との付き合いも要りません。いまや、オールマイティのパソコンさえあれば、ホームバンキングも株の売買も、買い物も健康状態のチェックも、すべて居ながらにしてできる時代です。外に出る必要はまるでありません。運動不足が心配ですか。それも任せてください。このボックスの中にはアブトロニック・フィットネスの装置が標準装備されておりますので、体の筋肉は黙って寝ていても運動したことと同じでエクササイズが容易です。

また、旅行したい方のためには各国の観光名所を3Dで体験できるアイマスク・ディスプレイもパソコンから画像を引き出してお楽しみいただけます。この体験装置は人生体験の各種ソフトも利用できます。インターネットからダウンロードすれば、例えば恋愛プログラムはあなた好みの美人があなたとデートもしますし、セックスもします。あなたの両眼で見ているような立体的な視覚と臨場感溢れるサウンドでたちまちあなたは恋愛を体験できるのです。他に新商品のプログラムには、「会社の社長になろう」とか「学生に戻って」とか「あなたの老後」とかがございます。この箱の中にいろいろな人生も体験できるのです。

こんな危険でくだらない世の中に隠遁生活をしたいあなた、友達もいない寂しいあなた、自閉症のあなたにはもってこいの「ひきこもりボックス」さえあれば、もう外に出る必要もなく、一生箱の中で生活できます。箱から出るときは死んだときぐらいです。一週間のお試し期間も設け

ました。ただいま格安で購入できるモニターさんも募集しております。どうぞ、お宅の庭に一台、一家に一台置いてみませんか。

第53話 清掃課の反乱

ゴミ問題は深刻になってきていた。どこの自治体もゴミの排出量が処理能力を上回っていた。ゴミの分別は進んでも、その処理が追いつかない。消却場で燃やすとダイオキシンがどうのと、下の団地で騒ぐ。近くの農家は野菜が売れないと騒ぐ。燃えないゴミは最終処分場もなくなってきていた。谷という谷を埋めて、海も埋めた。海水汚染と漁師は騒ぐ。果ては、都会のゴミがどんどんやってくる。不法投棄も後を絶たない。住民はエゴ丸出しで、電話で市役所に文句ばかり云う。「回収が遅いからカラスを排除してくれないかしら」「産業廃棄物が道路に山になっている」「粗大ゴミはいつ取りに来るんだ」「今度の選挙では投票しないと市長に云っておけ」「うるさい」

とうとう清掃課は怒った。「いい加減にしろ。黙って聞いていれば、みんなおまえらのゴミだろう。このゴミを一体どこへ持ってゆけばいいというんだ」

清掃課長は市長と相談した。

「職員は半ばストライキも同然、動きません。下請けも手がいっぱい回収が間に合いません。そこで相談ですが、それをうまく口実にして、どうでしょう、いっそひと月の間、ゴミの回収をやめてみませんか。それは一時的には不法投棄も増えるとは思いますが、自分たちの住む町を自分たちで汚していい感じはしないでしょう。住民たちがゴミを極力出さなくなる工夫をするまで、じっと我慢してみたらいかがでしょう」

市長はじっと考えていたが、ようやく決断した。

「よし、やろう。最初は風当たりが強いよ、それに耐えてやってみよう」

市長はさっそく翌日のテレビ、ラジオの同時放送でひと月間のゴミの回収がストのためにできない旨を陳謝した。市の広報でもそのお詫びを速報で配った。案の定、マスコミだけでなく苦情の電話が市役所に殺到した。職員たちはその対応にてんてこまいしていた。

家庭では生ゴミが匂うので、庭に埋めたりしていた。なるべく生ゴミを出さないよう主婦は食べ残しも翌日の材料に活用するよう捨てないようにした。大根のしっぽからネギの先まで無駄に使わないよう、すべてを料理に使う。魚の頭もDHA。使わないものは冷凍しておく。

スーパーでは買い物袋持参で、タッパーまで持って行く。

「ゴミになるから発泡スチロールのトレーはいらないわよ」と、タッパーに移し替えて買ってゆく。スーパーでも二度手間なので、肉でも魚でもトレーに入れるのをやめた。すべて裸の量り売り。その方が経費がかからない。贈答品もめっきり減った。贈答は商品券で。みんな好きなものを量り売りで買える。瓶、缶、パック商品、インスタント、レトルトパウチは極端に売れなくなった。醤油も味噌も量り売り。みんなペットボトルを持って買いに行く。その容器包装分が安くなるから家計も助かる。

洋服も雑貨もすべてがノー包装。商店、デパート、スーパーがその消費者の要望に屈した。その市ではそれが当たり前になるにはひと月とかからなかった。ゴミ袋自体の売れ行きもがたと減った。自動販売機もさっぱり。

業務用のゴミも減らさねばならない。ビルの階段、踊り場がゴミでいっぱいになる。雪崩うって社長室までゴミが押し寄せる。会社としてもなんとかしなくてはならない。

「伝票は使うな、すべて電子決済にしろ。データもプリントアウトしなくてよろしい。すべてCD-ROMに保存するだけでよろしい。社内では禁煙だ」

上から下まで徹底的にゴミが出ないようにした。やればたったひと月でできるのだ。

そのニュースは全国を走った。県外は無論、海外からも視察にくる。その方式は他の市町村にまたたくまに飛び火した。メーカー、問屋、デリバリー、小売店が一丸となって取り組まねばできないことを、それからたった半年でやってしまった。人々の甘えがすべての原因だ。時には甘えや慣習、惰性をストップさせるには荒療治も必要だ。

清掃課はまもなく廃止になった。ゴミの収集がなくなった。ゴミ回収業者も困った。カラスも困った。ゴミを出すと十萬円の罰金もしくは一月以下の懲役という法律もできた。

コンビニにガムやチョコレートを買に行く。すべてガラスの瓶に入れて一個いくら。昔の駄菓子屋と同じだった。買う方も携帯の容器持参は常識となった。

サランラップも使わない。蓋があればすむことだ。生活にいろいろ工夫して、すべての機器もリサイクル可能となった近未来、ゴミという言葉も死語として辞書から削除された。

「と、いうことにならんものかな」清掃課の職員たちはストの最中、そんなことを夢物語のように話していた。

第54話 密室殺人

「助けて」という叫び声を聞いたのは一週間前の夜中だった。それを夢現に聞いた隣人が気になって、一週間のちに隣家を訪ねた。一人暮らしの婆さんが玄関に鍵もかけずに家の中にもいない。「おばあちゃん」と、呼びかけたが返答がない。あの叫びは夢ではなかった。確かにしたのだ。隣の奥さんはいつも婆さんが留守にするときは必ず「出かけてきますから何かあったらよろしく」と声を掛けるのに、そんな几帳面で用心深い人が、玄関に鍵もかけずに外出するはずがない。庭のほうから声が聞こえたと思った。離れは鍵がかかったまま開かない。内鍵なのか外側には鍵穴がない。ここが怪しい。奥さんは「おばあちゃん」と、何度も呼んだが中から物音もしない。絶対にここが怪しい。何かあったに違いない。奥さんは警察に電話した。

パトカーが一台やってきた。警官は庭の離れのドアを叩いた。かなり強く叩くと、ドアが少しだけ動いた。その隙間から異臭がするようだ。なにか生ゴミが腐ったような臭いだ。ひょっとして、警官は体当たりしてドアを蹴破った。四畳半くらいの小部屋の真ん中に婆さんが倒れていた。すでに死んで異臭がしていた。本庁から殺人課の刑事と鑑識、法医学の担当医師が駆けつ

けた。死後五日経っていた。その割に遺体の腐敗が進んでいない。やはり隣家の奥さんの聞いた叫び声は夢ではなかった。

「密室殺人ですね」若手の刑事がそう云うと、

「何が密室殺人だ。完全犯罪だと、安っぽいくだらな推理小説の読みすぎじゃないのか」

「でも、警部、この部屋は内側から最近流行のスライド式のロックがかかっています。被害者が掛ける意外考えられませんし、外からは開けられません」

「外傷はありません。薬物の痕跡も、嘔吐もありません」

「家の金庫もそのまま、タンスの中の財布もそのままあります。荒らされた跡がないので物取りの犯行ではなさそうです」

「被害者は何かトラブルに巻き込まれていなかったか」

「近所の人のお話では世話好きで明るい話好きな人のようで、とても人に恨みをかうような人ではないということです」

連絡を受けて親戚が駆けつけてきた。すでに姉弟は亡くなっていて、甥夫婦が同じ町に住んでいた。息子一家は遠方の町で暮らしていたので、今日中には来るということだった。

「怨恨でもない、強盗でもないとなると」警部は考えこんでしまった。被害者に争った跡もないし、着衣の乱れもない。

「警部、聞き込みで判ったのですが、この家は以前からビルを建てる建設会社の用地回収でもめていたそうです」

「なんだと、隣の空き地と、ここの家の敷地とでビルが建つ計画があったのか」

「ええ、けれど転勤で他県に行っている息子一家がいずれは古里に戻って一緒に暮らすと約束しているから売れないと拒んでいたそうです」

「それと、この死因と関係があるというのか」

「それは判りません。ただ、この工事を請け負っているのは最近、倒産かと噂されているゼネコン中堅のK社です。不良物件を抱えて、こちらも危ないと噂されている不動産会社が隣の土地を持っていました」

「怪しいな、何か匂うな」

日本はゼネコンと不動産会社で動いてきた。公共設備投資も、景気対策もすべてこの両者の懐が潤うように仕組まれていた。政治家との癒着も、見返りの政治献金、賄賂もすべての構図がその線で繋がって出来上がっていた。一人の命なんか、その大きなパイプの前には虫ケラのようなものだった。

「警部、おかしいことがあります。離れなんですが、窓も電灯もないんです。調べたら配線がまったくありません。内部に収納している物もないんです」

「それは、納戸に使おうと思ったんだろう。物置なら、懐中電灯でも物は探せる」「でも、不思議じゃないですか、夜中にですよ、真っ暗な離れに懐中電灯もなく入りますか。足下もおぼつかないくらい真っ暗闇ですよ」

「それもそうだな」この難解な事件がますます判らなくなる。

そこへ、飛行機で飛んできた息子夫婦がやってきた。ハンカチで鼻を押さえたが、婆さんに抱きつくようにして泣いた。死体はこれから大学病院に搬送されて、詳しい死因を調べる。そのた

めの救急車も来ていた。

「お母さんの遺体は司法解剖いたしますのでご了解ください」警部が云った。

「あれっ」息子は初めて気がついたように離れを見た。

「今年の正月に帰ってきたときは、この離れなんかありませんでした。いつ建てたんだろう」

「そういえば、今思い出したんですが、一週間前の夜、この家の前にトラックが止まって何か下ろしていました」隣家の奥さんがそう証言した。

「警部、この離れはプレハブですが、異常に密閉されています。隙間を埋めるパテは水回りに使うやつです。何もここまでする必要はないんですが、しかもまだパテは半乾きです」

「ということは」

大学病院からまもなく死因が何であったか連絡が入った。

「やはりだ、思った通りだ。死因は酸欠だそうだ。K社と不動産屋を手入れだ」

翌日の夕刊に大きく事件の真相が載っていた。婆さんをプレハブに閉じこめて窒息死させた建設会社の担当が逮捕された。内鍵はかけたまま、中にはあさんを押し込めて小部屋を造ってしまった。年寄りには開けられない仕組みの鍵だった。

今日もどこかで立ち退きの嫌がらせを受けている弱者がいる。非合法承知の上で生き残りをかける苦し紛れのゼネコンに殺されるのは次は誰だろう。

第55話 ホロコースト

「おまえは何が得意か」

「あっしですかい、靴の職人でさあ、それ以外はまるでダメ。靴作りなら三十年、誰にも負けねえ」

「分った、分った、おまえは工場だ。次一」

「おまえの特技を云ってみろ」

「はい、クラシック音楽のことなら何でも知っています。モーツアルトのケツヘル番号もみんな暗記しております。ブルックナーとマーラーの交響曲なら、スコアはすべて頭の中に入っております。ワーグナーの楽劇もすべてのパートを譜に書き写すこともできまして...」

「もういい、非生産的、ガス室。はい、次一。おまえは何ができるのか」

「おれは、生まれたときからの左官屋だ。親父で五代目だった。壁塗りなら任せてくれ。難しい話は分らねえけどな」

「よし、合格だ。おまえは野外作業場だ。はい、次。おまえは何ができるのか」

「ぼ、ぼくは、小説家を志しているものであります。最近読んだ本ではマラマッドの新作に心酔いたしました。ボリス・ヴィアンも捨てがたく、ビントーの戯曲からイヨネスコのエッセイまで...」

「はい、はい、分った。非生産的、ガス室。はい、次。おまえは何ができるのか」

「わたしですか、ずっとお針子をしていましたから、服を縫ったり仕立てたり、それぐらいしかできません、うっうっうっ」

「泣かなくともよろしい、合格、縫製工場へ行ってもら。はい、次、おまえは何ができるのか」

「わたしは人間のレーゾンデートルを解明するための哲学を専攻していまして、客観的形而上学のような存在を離れてアウフヘーベンする定理を窮理とするのではなく、アルケーとしての存在者を...」

「うるさい、何を訳のわからんことをごちゃごちゃと云っているんだ。非生産的、ガス室。はい、次、おまえは何ができるんだ」

「おいらは料理人だ。頭は悪いが、じゃがいもの皮剥き競争で、村一番になったことがあるんだぜ。おいらの得意料理はハッシュドビーフに蚕豆のスープだ。それに...」

「もういい、それはうまそうだな、合格。おまえは食堂室で働いてもら。はい、次、おまえは何ができるのか」

「わたしは、こう見えてもオリンピックで銀メダルをとったのよ。走り幅跳びなら、この国の誰にも負けないわ。国内のわたしの記録はまだ破られていませんもの」

「ほう、それはそれは、はい、非生産的、ガス室。はい、次、おまえは何ができるのか」

「実は、誰にも話したことはないんですが、特技って云うのかどうか」

「なんだ、もったいぶらずに云ってみろ」

「絶対、他言しないでくださいよ。あっしは泥棒でした。どんな金庫でも鍵でもこの指と針金ありゃ一発で、不可能はありません」

「そうか、泥棒か。こいつは使えそうだな。よし、合格。おまえは特殊工作員の下で働いてもら。はい、次、おまえは何ができるのか」

「わたしは僧侶です。神に祈り、生きるものに祝福を与え、死にゆくものの魂を慰め、悪魔の心と闘いながら、この世に平和と愛をもたらすために、ただひたすら祈り続けております」

「そうか、今度は、自分のために祈るんだな。非生産的、ガス室。はい、次、おまえは何ができるのか」

「おらあ、なんにもできねえ、もともと百姓だで、ただ、畑耕して、豆をつけたり、じゃがいも収穫したり、そんなことぐれいだ。おらあ、学校もろくに行つてねえから、文字も書けねえ、足し算もできねえ、できるのは畝づくりだけなものなあ」

「いいではないか、それで十分だ。合格。おまえは集団農場へ行ってもら。はい、次、おまえは、随分と太っているな、何ができるんだ」

「わたしは政治家です」

「なんだと、政治家だと、おまえに何ができる。私腹を肥やすことか、税金泥棒か。非生産的どころではない、一番先にガス室。はい、次...」

H氏は平均的なサラリーマン氏だった。三十七歳で独身というのも何かあると、専ら社内での七不思議のひとつに数えられている。一流大学を出て、家柄もよく、長身でマスクもいい。社内では出世頭だ。どこをとっても欠点がみつけれない。それなのに、女の匂いも噂もない。いろんな女子社員から誘われても、そそくさと退社するという。真面目で、同僚の呑みの誘いも断って、真っ直ぐにマンションに帰る。会社の同僚は誰一人としてH氏の私生活は知らない。女気がないのは女性から見ればすぐ判る。誰かが、住まいに何か秘密を隠しているに違いないと勘ぐる。女を隠して同棲しているのではないか、同性愛者なのではないかという噂はすべて否定された。日常の態度を見てもそんなところは微塵も感じられない。精悍で行動もスマート、仕事ぶりは精力的で、みんなの注目の的だった。鞆の中に何かを隠していると誰かが発見した。仕事中でもそっと鞆の中を開けて、何かを撫でて「にっ」と悦に入っているのを見た者が何人かいる。それがみつかり、H氏はうろたえて、あわてて鞆を閉めるというのだ。まるで動物か何か隠し持っているような、そんな様子に見えた。その何かは背広の内ポケットにも隠しているようで、常に肌身離さずお守りのように持ち歩いているらしかった。通勤電車の中でも、会社の昼休みでもいつも本を読んでいるインテリなH氏だが、別に変わったことはない。

そのH氏が帰宅する。十二階建のマンションの三階。2LDKは一人暮らしでは広すぎる。「ただいま、帰ったよ」と、誰もいないはずの部屋にH氏は独り言を云う。「別に変わったことはなかったかい。そうか、いまからシャワー浴びて、それから飯にするからな」まるで女房がいるようだ。H氏はバスルームに入った。リビングルームに何故かベッドまである。ソファと見ることのないテレビとキッチン。男一人暮らしにしては小綺麗にしている。

H氏は冷蔵庫から買い置きのデリカを出して一人黙々と食事をする。黒生ビールが一缶、サーモンのマリネにポークビーンズ。新聞を見ながらの夕食だ。それが済むと、ガウンを着たまま、H氏はいよいよ隣の二間続きの部屋のドアを開けた。

「さあ、みんな、おりこうにしていたかな」

二間には天井までびっしりと積まれた蔵書の山があった。本棚にも収納しきれない本は平積みになっていた。何万冊あるのだろう。H氏も数えたことはない。机がひとつ、パソコンとミニコンポも本の間に埋まっていた。

「さあ、今日は誰を可愛がってやろうかな」と、本の山から最近また買ってきた新刊を物色していた。その時点ですでにH氏は日頃の精悍なH氏ではなかった。嬉々として目は大きく見開き、別人のような笑いで興奮しているのだった。

「さて、今夜の相手はおまえか」と、『ゴンクールの日記』の分厚い本を選んだ。H氏はいきなり本に襲いかかるように、床に羽交い締めにした。本は身動きがとれない。強引に本に接吻をした。本を強く抱擁すると、それを抱きしめたまま床を転がった。「ああっ」と、H氏は恍惚の溜息を洩らした。涙さえ流している。まるで愛玩動物を抱いているようだった。H氏は本に性欲を感じる異常性欲者だった。可愛さ余って、どうすることもできなくなる。本がいとおしくてたまらない。どうにかしなくては気が狂いそうだ。

「こんなぼくの気持ちがおまえには分からないのか、こうしてやる、こうしてやる」H氏はとうとう、本を太いロープで縛ると、鞭で本をしばいた。それでも治まらず、本を嚙り出した。本に歯形がつく。激昂してきたH氏はついに本をばりばりと食べはじめた。人食い人種がいとおしい

ものを食べるように、佐川くんがそうしたように。本をめくる。活字の匂いにうっとりしていたり、破っては口に入れた。本を陵辱することで快感はエクスタシーを迎える。最後の儀式として、H氏は自分のペニスを本に挿入して、蠕動運動を繰り返した。本をレイプすることが最大の喜びだった。

H氏は果てた。書斎の真ん中に仰向けになりながら、汗びっしょりとなって愛の余韻の中に浸りきっていた。そうして、

「ごめんな、悪いことをした。でも、おまえを愛しているんだ」と、強姦されズタズタに引き裂かれた本の死体をやさしく撫で回した。振動で積み上げた本が崩れてきていた。

「そうか、みんなにすまなかった。今度、可愛がってやるからな、やきもち焼くなよな。おまえたちみんな、ぼくの愛人だ」

H氏は活字中毒から亢進して、病膏肓に入る。

H氏は翌日も会社帰りに、書店に本のナンパをしに行く。書店の匂いを嗅いただけでドキドキしていた。本棚から『指輪物語』を取り出すと、

「へい、今夜、ぼくと遊ばないか」と、本を騙すようにレジカウンターまで持っていった。

第57話 不老の島

わたしがその島取材に訪れたのは六月であった。フリーのルポライターをしていて、真夏の旅行記事を依頼されたためである。島は人口四千人の奄美諸島の中間に位置する半農半漁の村であり、夏は観光のメッカになる。いまはシーズンオフで、訪れる者は釣り人や商用で来る者だけであった。六月といっても島は三十度を越えて真夏並の暑さだった。飛行場はないので沖縄本島から連絡船が一日一往復就航しているのに乗った。

船が波止場へ着いたのは昼過ぎだった。ビーチには地元の若い女であろうか、ビキニの水着を着て泳いだり、砂浜で陽に焼けたりしているのが遠目に見えた。村といっても結構、リゾートホテルやペンションが立ち並び、商店街から土産物店も並び、賑やかな雰囲気の中になにかアメリカナイズされた雰囲気があった。看板が横文字である。カラフルな原色の使い方がどこか日本ではない。異国ムードを出すためにわざとそうしているのだろう。

わたしの前を猛スピードで改造したシャコタンのスポーツカーが走りぬける。あわや轢かれるところであった。箱乗りまでして、こんな島にも暴走族はいるんだ、と、わたしは自分の目を疑った。確か車に乗っていた連中は、みんな若者ではなかった。老人であったように見えた。まさか。

昼を過ぎたが、少し遅い昼食でもとろうと、海に向かってテラスを出しているカフェ・レストランに入った。サーフボードが立てかけてあった。レストランからサングラスにサーフパンツ姿の男女が仲良く腕を組んで出てきた。サーフボードを持った。これから浜に出るらしい。わたしの前で二人ともサングラスをはずした。ぎょっとした。明らかに七十は過ぎている老人だ。どうして、じいさんとばあさんがサーフィンなんか。信じ難い視線をいつまでも向けていた。

レストランに入ると白いテーブルで恋人同士がひとつのグラスに二本のストローで、いちゃつきながらトロピカルジュースを飲んでいた。髪は茶や金髪に染めて、着ている服も若者の格好だが、顔や手は皺だらけで、どうみても八十は越えている二人だった。

「ご注文は」と、オーダーを取りにきたウエイトレスも超ミニスカートで細い足に網タイツ。だが、どんなにどぎつい化粧していても、婆さんは婆さんだ。わたしは悪いと思いながら、とうとう嘔吐してしまった。カウンターの中にいるのは明らかにじいさんだ。と、いうことは一。わたしは裏のテラスからビーチに降りてみた。さっき、船のデッキから見たビキニのギャルたちは、砂浜にクッションを敷いて、甲羅干しをしていた。サングラスのお姉さんたちと思われたのは全員、婆さんだった。尻の肉が落ちて貧相だった。胸に至ってはとても直視できない。わたしは夢中でカメラのシャッターを切り続けた。これはいいルポが書けそうだ。

商店街を歩いてみた。竹下通りと変わらない若者向きのブティック、雑貨店がずらりと並ぶ。オリジナルTシャツを売る店のスタッフも客も婆さんだ。CDショップでいま流行の若者の歌を試聴しているのも老人だ。通りをごちゃごちゃと歩いているのはファッションは若向きだが、中身は老人ばかり。一体、どうしたわけか、六十以下の壮年も子供も、この村には姿さえみつけれないではないか。

「あら、近頃見たことのないイケメンね。あとでうちの店で遊ばない?」と、セクシーな格好をしている婆さんに声をかけられた。手渡されたカードにはピンサロらしい店名と源氏名。「若い人も珍しいから、うんとサービスしちゃうから、ケイタイに電話してね、きっとよ」多分、ホステスはすべて婆さんなのだろう。

予約していたビーチに面したホテルにチェックインした。フロントの老人にいろいろと取材させてもらった。

「この村はもともと長生きの村で、最高齢は百十五歳。かつては六十以上の老人が村の人口の五割を占めていました。働き手の若い者はみんな大阪や九州へと就職してしまい、残った者に税金の負担が重くかかりました。地方交付税もこの不況で減額されて、村の財政はピンチでした。働いても働いても税金で持ってゆかれるので、働き手は次々に逃げ出したというわけで、いまはこの村には六十前の人はいりません。平均年齢は八十を越えております。それでは村は破産してしまうので、村長は体の動ける者は全員働くという、定年を廃止したわけですね。いままで孫や子供が経営していた店を老人たちが引き継ぐことになったのです。ここでは死ぬまで現役です」

まさに老人天国だったが、ここでは医療費も交通費もちゃんと取る。全員無料であれば補助が続かない。老人だからと甘えてはいられない。ここでは六十、七十潰垂れなのだ。それは若者と呼ばれていた。中学も高校もあった。戦前、戦後にかけてろくに学校を出ていない人が通っていた。

「あっ、見て、超かっこいい子供がいるわ」セーラー服を着た女子高生たちが、ホテルの玄関に群がった。子供とはわたしのことだった。四十五は子供なのだ。外に出ると来るわ、来るわ、スカート丈をミニにして髪をアップにしたセーラー服の老婆たちが。

「ねえ、うちとエンコウしない」と誘われたりした。不気味さ、戸惑いもこの島の売りとなる。

わたしはホテルの部屋でルポを書き始めた。
—日本の未来が見える不老長寿の島にて、と。

第58話 四月の魚

ジャンは友人のピエールとメトロに乗っていた。車両の隅に見慣れない黒い箱が置いてあった。車両の清掃道具が入っているのを作業員が置き忘れたものだ。冗談のきつい、ジャンはピエールに耳打ちした。

「あの箱の中から時計の音がするんだ、きっとあれはテロの高性能プラスチック爆弾が仕掛けてあるんだ。過激派のTRSの連中の仕業に違いない」

「なんだって、爆弾だって？」ピエールは真面目で冗談が通じない。つい蒼ざめて大声を出してしまった。ピエールがわなわな震えて指さすものだから、乗客の視線がその得体の知れない箱に集まった。乗客はざわめいた。ひとりひとりとゆっくりと立ち上がり、隣の車両へと移ってゆく。そのうち、「時限爆弾だ」と誰かが叫んだ。キャーという物凄い悲鳴が走った。と、同時に車内はパニックになって、全員端の車両へと駆け出した。驚いたのはジャンのほうだ。

「皆さん、嘘だって、今日はポアソン・ダブリル(四月の魚)の日で冗談だってば」そのジャンの声はすでに誰の耳にも聞こえない。メトロは非常ボタンを押したものがいて、急停車した。非常ドアを開けて、全員線路に飛び降りて走った。反対車線から別のメトロが逃げる乗客を跳ね飛ばして、急停車した。凄まじい音と悲鳴、火花が暗闇に飛んだ。乗客は近くのモンパルナスの駅へと地下道を駆けていった。口々に「爆弾だぞ」「テロだ」「戦略核が仕掛けられた」「半径十キロは危ないぞ」「核爆弾だ」「非難しろ」と、話が大きくなって口から口へと伝わっていった。メトロの駅から外へわっと蟻の巣をつついたように人々が出てくる。車もこの騒ぎを聞いて我先に逃げようとするから、あちこちで接触事故を引き起こす。それでも車を押しつけてもという半狂乱の車もいて、あおりをくってガソリンスタンドへ突入するトラック。大爆発を起こした。それが核爆発と思ったバリの市民はビルからアパートマンからカフェから一斉に出てきて逃げ出した。ものすごい群衆のマラソンとなった。車はあちこちで衝突して燃え上がる。その火が引火して、たちまち道路は火の川となった。

大統領はそのテロをわが国への宣戦布告と断言、核弾頭ミサイルを海の向こうの国へ向けた。ジェット戦闘機がすでに何十機も燃えさかるパリ市上空を北の空へと飛び去っていった。消化ヘリコプターが消化剤を撒いているが効果はない。ブルヴァールの広い道も車で大渋滞。それもやがて火に包まれ、爆発を繰り返した。凱旋門まで火の川が続いた。

テロの濡れ衣を着せられたと、挑発を受けようと、TRSを擁護する国も立ち上がった。ドーバー海峡に戦艦が入り乱れた。

ヒトラーもできなかったことが、たったひとつの嘘で達成された。パリは燃えていた。

飛行機は成田空港に着陸した。海外勤務が長く、ようやく帰国できるようになった商社マンの室田は久々に日本の土を踏んだ。空港のロビーで荷物の受け渡しまで、一服していると、グラマーな女がモンローウォークで通りかかる。室田はにやりと笑って見ていた。すると女は悲鳴をあげて室田を指さした。近くにいた男が数人で室田を取り押さえた。くわえた煙草をぽろりと落とす。「なんなんだ、何があったというのだ」すかさず空港警備の警官が二人飛んできて、室田を取調室へと連行する。女も同行した。室田は何がなんだかさっぱり分からないまま、所持品を検査される。パスポートから身元の照会までしていた。女も調書をとられていた。てっきり指名手配の犯人に自分が似ていたのかと、室田は思っていたが、そうではなかった。「ええ、視線はヒップにありました」と、女はそう証言していた。「間違いないか、おまえはこの方の腰を見ていたな」「それで、にやにや笑っていたんです」室田は怒った。「それがどうしたというんです。わたしが何か悪いことをしたんですか」警官は物凄い形相で室田を睨み、机を叩いて云った。

「そうだ、おまえはこの方にセクハラしたんだ」室田は驚いた。「セ、セクハラって、見てもいけないんですか」「そうだ、刑法第何条にそう明記してある」「いつから、そんな馬鹿な法律ができたんですか。それじゃ、女性を見ないでどうして歩けと...」ロビーの通路を歩く男性はほとんどが下を向いて歩いているか、上を向いて歩いているのだった。変なマスクまでしている。

「初犯だから書類送検だけは勘弁してやる。空港の売店でアイマスクも売っているから、買ってゆくんだな」そのアイマスクは足元と天井より見えない。「以後、気をつけるんだな」

空港から電車で東京まで向かう。その電車が混んでいた。それもそのはず、みんなプラスチックの透明な筒に入っているのだ。男性のほとんどが宇宙人のように手を出していたと思うと、電車の中では手を筒の中に引っ込めていた。それは鮎詰めのラッシュにはいいかもしれない。自分の空間がしっかりと確保できる。ただ、その無駄なスペースのために電車はすぐに満員状態になるらしかった。室田は笑った。妙なものが流行るものだ。電車に乗り込むと、後ろから押されて、室田は反対側のドアの方へと押し付けられた。そこへ若い女性がいた。女性は筒をしていない。室田の体は否応なしに女性の体に接触した。

「キャー、痴漢」と、女性は金切り声を上げた。駅員が騒ぎを聞きつけて飛んで来た。

「痴漢だって、後ろから押すから仕方なく、おれは故意に触ったりしていないぞ」と、室田は弁明したが、鉄道警察へと引き渡されていた。また、今日二度目の取調室。

「痴漢なんかしていないって」と、警官に何度説明しても、聞く耳持たない。

「では、どうして、痴漢防止カプセルを付けていないんだ。電車では付けることが義務付けられていることを知らないのか」ここでも刑法が出てきた。女性の体に接触してもセクハラになるという。「ば、馬鹿な。たかが女の体に触れたぐらいで」と、室田は拳を震わせた。「貴様、いま、なんと云った」警官が立ち上がった。「ええ、女の体と」室田は狐につままれたように目が点になっていた。「『女』と云ったな。貴様を逮捕する」室田はうろたえた。「な、なんで女と云ったら悪いのか」「貴様、調子に乗りやがって、三回も云ったな。女性と云え、それはセクハラ用語なのだ、分らんのか」

とうとう、室田は収監されてしまった。独房の中で「セクハラ用語辞典」なるものを読まされた。女の前で身体に関する言葉もダメ。美醜の形容もダメ。年齢を訊いてもダメ。読んでいるうちに日本が厭になってくる。こんな国に帰ってこなければよかった。これでは何も云えない、見れない、触れない。すべての男は去勢されて、女の天国だ。

室田は一泊で出された。アイマスクもした。カプセルも購入して身につけた。さあ、これで万全、本社まで行かねば、みんな心配しているだろう。室田は電車で東京へようやく辿り着いた。カプセルは畳める携帯用だ。タクシーで本社ビルで降りた。一応、念のためにアイマスクだけは付けてゆこう。室田は正面から入ろうとした。すると、「キャー」とまた女の悲鳴、ガードマンたちがばたばたと駆けつける。室田の両腕はむんずと掴まれた。「今度は何をしたんだ。おれは、一体、何をしたのかな...？」

第60話 階 段

「それは高所恐怖症の一種ですな。よくあることです。気にすればまた囚われますから、徐々に克服することです」

精神科の医師はそう助言したに過ぎない。わたしが、階段を怖がるようになったのはいつからだろうか。小学、中学と学校の階段を二段づつ駆け下りたりした記憶があるから、それは社会に出てからだ。地下鉄の駅に降りる階段を踏み外して転げ落ちる妄想を、その度に思うので足がすくんでしまう。なるべくなら、エスカレーターも怖いのだが、目を瞑っていれば、連れて行ってくれるから、エスカレーターを探す。また、車椅子用のエレベーターを利用したりしている。医師の云った通りの高所恐怖症ではないのではないかと、自分では最近思ってきた。わたしの勤める会社はビルの七階。その窓から下を覗いても怖さはない。高さに対しての怖さではないのだ。それは階段に限られている。階段なら上りも下りも怖いと思う。眩暈がして、とても足が出せない。

わたしは都内の商事会社に勤めるOLだ。二十五歳でアパートに独り住まい。アパートを借りるときも一階にして貰った。

「幼少の頃、何か事故に遭われたとか、怖い思いをした記憶はありませんか」

医師はそうも訊いたが思い当たらない。それは公園のぶらんこから落ちたこともある。階段から落ちたことも何度もある。でも、それが原因となっていない。家は躰が厳しく、厳格な両親に育てられ、高校も大学もストレートに名門に入った。そして、会社も一部上場のコンツェルンの本社採用。給与も申し分ない。何故、いつからか階段を怖がるようになったのか判らなかった。

自ずとわたしの行動範囲には制約がでてくる。一階下まで書類を取りに行くときでも、エレベーターを使うので同僚に笑われもした。歩道橋も駄目だから、遠回りしても信号のある横断歩道を渡る。外食も地下や二階へ上がる店には入らない。バスの昇降口のステップも駄目。私鉄の駅

でエスカレーターのない駅はパス。日頃はゼロハンのスクーターで通勤している。

そんなわたしにも好きな人ができた。彼は取引先の営業マンだが、仕事の関係でたまたま一緒になり、誘われた。利発で男前、ラグビーで鍛えた強健な体軀は他の女子社員の噂にもなった。わたしたちは週二回、外のカフェで逢った。

「君はきちんとしているね、いつも仕草から態度を見ていれば判る。育ちがいいんだね」彼から何回かそう云われた。呑んでも崩れない。食事もきちんとマナーを心得ている。それはわたしの中ではあたりまえのことで、生活習慣になっている。

「君に欠点ってあるの？」彼は完璧なわたしを見てそう不思議がる。とてもあのことは言い出せない。

「どう、今夜、うちのアパートに遊びに来ないか」と、彼は初めて自宅へ誘った。甘く危険な匂いがした。

「いいですけど、あなたの住まいは一階なの」

「いや、三階だ」「エレベーターはついていて？」「三階建だからついていないよ。それがどうかしたの？」困った。せっかくお付き合いしていても、あのことが判ると、誰でも異常者と見るだろう。でも、彼の誘いは断れない。嫌われたくなかった。渋々ついてゆくことにした。

彼は二人で呑もうとワインやオードブルまで買ったのだ。彼のアパートに着いた。どきどきしている。

「さあ、どうぞ、ここがぼくの住まいだ。なんか、緊張しているね、考えすぎだよ。何もしないからさ。たまに私生活を見せたいと思うだけだよ。ぼくがどんな奴かってね」彼は優しい。「ええ」と、車を降りて、アパートの階段の前で躊躇していると、彼が笑って、背中を押した。

「ま、待って、動悸がするの」わたしは心臓を抑えた。

「大丈夫？ 病気じゃないの。早く部屋に上がって休もう」

彼は強引に手を引っ張って、わたしを階段に上らせようとする。階段の傾斜が見えた。だんだんと近づいてくる。咄嗟に自分の落ちる幻想が駆けめぐる。眩暈がする。吐き気さえもする。恐怖感で足が震え、言葉も呂律が回らない。

「やめて、やめてよう、お願い…」わたしは恥ずかしい話、失禁までしていた。その異常さに彼は気づいた。逃げようとして倒れかかるわたしを抱きかかえると、そのまま三階の自分の部屋にわたしを運んでいた。わたしは彼の部屋で顔をくしゃくしゃにして嗚咽していた。彼は信じられないものを見たというショックで呆然としているようだった。

泣きながら、わたしは彼の胸に顔を埋めて、階段恐怖症のすべてを話した。

「そうだったのか、君にもそんな弱さがあったんだ。完璧すぎて近づきがたかったけれど、ますます君が好きになった。ねえ、もう一度、ぼくと階段のところへ行ってみないか」彼は冷酷ではなく、まるでわたしに奇跡でも起こすようにやさしく云った。

「ええ、どうして」「いいから、さあ、おいで」わたしたちは抱き合うように階段の上に立った。わたしの恐怖感は同じだった。彼は云った。

「さあ、ゆっくりでいいから、怪我をしないように落ちてごらん。多少、足をすりむいたっていいから。君はずっと人生を上り詰めてきた人なんだ。まわりの人たちの教育で躓くこともしなかった。それを極度に恐れている。それが、こんな形で現れる。だから、一度は躓いて転んで落ち

てみたらいい。そうしたら、きっと君はすごく楽になれると思う」

彼はわたしの手を離した。あっというまにわたしは階段をずり落ちていた。彼が走ってくる。彼の顔が鬼のような母の顔になった。「また、百点とってこなかったわね」「ママ、ごめんなさい」

わたしはすべてを思い出していた。

第61話 遠慮

元美は二人の連れ子を連れて宏と結婚したのは六年前だった。家には舅の広治と姑の妙子が同居していた。共に八十を過ぎていた。元美は貧困の母子家庭から嫁にきたので、ある程度裕福な家の事情と対応が判らない。夫婦も互いにバツイチ同士の再婚だったので、今度は失敗したくないと慎重すぎた。宏には三人の息子がいたが、皆関東方面に就職して帰らない。古い体質の家でもないが、妙子の性格は厳格で、曲がったことが嫌い、綺麗好きな性格だった。そんな家に嫁いできて、元美は最初から萎縮していた。口数が少なくみんなに遠慮していた。宏は五十、元美は三十七、ひとまわり以上も違うので考え方も趣味もまるで違う。そういう前提で家庭は一応成り立っていたと思った。

朝、顔を洗いに妙子が洗面所に入ろうとすると、元美が朝シャンをしようとする。

「あら、お義母さん、お先にどうぞ」（こんな忙しいときに、年寄りも後でもいいでしょう）

「いいんですよ、あなた仕事でしょう、先にやって」（なんで、毎朝シャンプーしなけりゃいけないのよ。お湯も使うし勿体ない）

トイレでも義父とかちあう。

「お先にどうぞ」「いいえ、お義父さんからどうぞ」「どうぞ、どうぞ」と譲り合いで一日が始まる。

居間でテレビでも見ようとして、自分の部屋を開けると、同時に姑も自分のドアを開けた。実は見たい番組がある。同じ思いがかちあう。にこりと笑って互いにドアを閉める。（嫌だわ、義母さんたら、ご自分の小さいテレビで見ればいいのに）（どうせ、またうるさい歌番組なんですよ）静かになったから、今度こそと、ドアをこっそりと開ければ、また二人とも目が合った。どうして考えること、行動パターンが同じなのに、馬が合わないのだろう。

嫁がいつまでも家にお客のようにしているから、連れ子も他人のまま懐かない。懐かないから可愛くなくなる。内孫はみんな大きくなって就職したから、懐いてくれれば年寄りも嬉しいものだ。それを元美は線を引いていた。遠慮がとうとう家の中にも不可侵条約のような、目に見えない線を引いていた。夕食も家族揃って食べるということがない。「わたしたちは後で」と、いつも「わたしたち」と別に括ってしまいたがる。おかずが冷めるからとか、後かたづけがあるからという理由で一緒に食べさせても、食卓ではなく、三人だけいつも小さな座卓を取り囲んで、こそこそと食べている。その光景は舅が第一気に入らなかった。みんな一緒に楽しく揃って食べるべき夕食なのに、背を向けておかずも少しだけより取らないことに不服だった。食べ盛りの子供にもつと食べさせればいいのに、老婆心が反感へと変わってゆく。

宏の仕事は遅いので、帰る頃には年寄りたちは自室へ引っ込んで、寝ていることが多かった。みんなそれぞれがそれぞれの部屋にいて、宏は冷めたおかずを温めもしないで食べていた。結婚してから一度も御飯をよそおってもらったことはない。勝手に食べて勝手にさげて、皿洗いまでしている。それが引っ込んでしまう元美たちの遠慮からくる被害者とも思っていない。

宏が夕刊を読みながら、おかずをつついていると、妙子がパジャマ姿で回りを窺いながら、ダ

イニングルームへやってくる。

「お帰り、元美さんに醤油切らしているって云っというね」またかと、宏は思う。おれは伝言板ではない。なんでいつも二人とも云いたいことを直接話さないのだろう。すべて、宏が通訳している。ひとつ屋根の下で、馬鹿ではないかと思った。元美が二階から降りてくる足音がする。妙子はぱたぱたと自室へ逃げ帰る。入れ替わりに、回りを同じく窺いながら元美が入ってくる。

「遅かったのね。なんか最近怪しくない。どこへ寄っていたの」と、まるで信用がない。元来、やきもち焼きで宏がちょっとでも女の話をする、一日口も利かない。テーブルの上にせっかく買って来たネーブルがしなびていた。

「なんだよ、腐ってしまうじゃないか、食べさせなかったのか」と、宏が云うと、

「それって、お義母さんたちのじゃなかったの」とくる。その反対に、冷蔵庫の中にケーキがあっても、年寄りたちは遠慮して食べないので賞味期間が過ぎてしまう。会話がなかった。コミュニケーションがまるでない。

翌朝、また洗面所で「どうぞ、どうぞ」をやっていた。それじゃお言葉に甘えてと、二人同時に入ろうとしたので、ぶつかった。

「なによ、あなたがお先にどうぞ、って云ったから入ろうとしたら」「お義母さんこそ何よ、どうぞって云うから」と、とうとう二人とも爆発してしまった。

その頃、朝早くから車で仕事の宏は、町中の辻で止まっていた。信号はないが、停止線と停止の看板が四方向に付けられている不思議な辻だった。左から来て止まっている車と、「どうぞ、どうぞ」の譲り合いをしていた。優先車線のマークもない。いつもここでは、どっちが先に進めばいいのか判らない。向こうの運転手も遠慮して、手でどうぞをしている。宏もだった。それでは遠慮なくお言葉に甘えてと、二台の車が同時に交差点に入ったものだから、頭と頭を衝突させた。

「おれが親切に先へって云ってんだろう」と、短気な運転手が降りてくる。「こっちこそ、親切に...」と、宏も負けてはいない。

親は子に、子は親に、隣同士、会社でも遠慮か衝突か、人間関係の交通整理は難しい。

第62話 植 民 地

二〇〇X年、アフリカの奥地に、海外青年派遣で農業の指導に十年間行っていた北村は、自分の職務を全うして帰国した。日本の情報がまるで届かない僻地だったので、成田空港に降り立ったとき、北村はそこが日本であることを疑った。

空港だから、サインがすべて英語であってもなんら不思議はなかったが、空港でみかけたすべての日本人が英語で会話しているのだ。空港売店に寄っても、雑誌からあらゆる書籍が英文だった。新聞までが、英語版で売られていた。銀行の出張所で、ドルを円に替えようとしたら、笑われた。通貨はそのままドルでオーケーというのだ。

成田から電車に乗って、東京まで出るときも、切符の販売機はドル表示だった。いつからこ

うなったのか。東京に近づくにつれて、だんだん不安になってくる。街の看板もすべてアメリカではよく見かける名前ばかりだ。バドワイザーのビールの広告、バーボンの看板、スーパーマーケット、デパートまでがアメリカの大手の名前だった。乗客の可愛らしい子供までが、その母親に英語で話している。一体、この十年で何が起こったのだ。現地から手紙も電話もできずに、浦島太郎のように帰国して、信じ難い光景を見ていた。

東京駅から実家に電話すると、おふくろが出た。「ハロー」と、あのおふくろまでがと耳を疑った。おふくろと英語で話していた。いつ、どこで覚えたのだろうか。これから戻ると話した。街頭のテレビも英語の放送、コマーシャルもアメリカの保険会社の宣伝。走っている車もフォード、ゼネラルモーターズのものばかり。トヨタはホンダはどうしたのだ。タクシーでも運転手は英語だ。ひょっとしてチップもやらねばと小銭を捜した。

家に着いた。相変わらずの日本式的家屋で安心したが、表札は横文字。懐かしいおふくろが顔を出した。「フー・イズ・イット？」ときた。長年日に焼けて現地人と同じくらい黒くなり、歯だけが白いので息子も分らない。

「どうしたのさ、母さん、日本語を使えよ」と、笑いたいのをこらえて云うと、「しっ」と口を抑えて、小声で日本語で話した。「公用語が法律で英語になったのよ、滅多なことでは使えないの」そういえば、街を歩く者に白人が多く目についた。帰国の知らせで、兄や親父も帰ってきた。兄はわたしを見ると抱きしめて、頬づりをした。「よせよ、恥ずかしい」親父まで頬にキスをする。「どうしたのさ、みんな」と、北村は一人大声で日本語で笑った。ご馳走が並べられた。すべて洋食だ。それもアメリカ風のばかでかいステーキに大味の野菜スープ。

「久し振りで日本に来たのだから、寿司とか天麩羅とか和食がよかった」と云うと、「スーパーへ行っても、売っているのはすべてアメリカの農産物と加工品ばかりだ。米もなかなか手にはいらない。主食はパンになってしまったよ」と、親父はしょんぼりしていた。日本酒もないからビールだ。

「どうしてこうなったんだ」北村はなんとなく分ってきたが訊いてみた。

「平成恐慌が起こってな、銀行も商社もゼネコンもデパートも、大手はすべて倒産してしまった。それを待っていましたとばかり、アメリカの大会社が再建に乗り込んできた。いまある上場会社の殆どが外資系だ。純国産は下請けの零細企業だけさ。エグゼクティブが乗り込んできて、会社の業務を円滑にするために、英語を強要してきた。いまや、国会議員の大半も白人だ。農産物がほぼ輸入物になって、農家は解体、そこへ大資本のアグリ・ビジネスが農地を買収して、プランテーションにしてしまった。いまじゃ、日本人は奴隷と同じだよ。白人にアゴで使われている。兄も週給いくらかでコカコーラで働いている」

「日本語はどうなっちゃったんだい」北村は腹ただしい口調で云った。

「それは、かつての外国語のようになって、一般には使われない。何故なら、やつらの目的は一億二千万人をすべてアメリカナイズすることなんだ。日本語にいちいちパッケージを直さなくても、売れるように、翻訳しなくても買えるように、食生活から文化行政、教育すべてを、かつてわれわれが戦前に朝鮮半島でやってきたことを、やつらはやり始めた。パンを食べれば小麦が売れる。風俗習慣にまでいちゃもんをつけて変えさせる。そうしてやつらの商品を買ってもらうのだ」

家の中を見渡すと、電化製品も、家具も調度品も日本のものではない。電車の中から見た街はどこかエキゾチックであったと思ったのは、新築の家はすべてアメリカン・ホームなのだ。

「じゃ、畳もなくなるのか、床の間も」北村は叫んだ。「そうだ、いずれ、この家の建替えするが、そのときは外材を使って、土足で上がる家だろうな」兄も情けなくそう云った。

北村は物干しに上がって、東京の下町の夜を眺めていた。

かつてマッカーサーが日本人を十二歳の子供と云ったのは本当かもしれない。役人は汚職、政治家はくだらないことで恥ずかしいくらい低俗だった。経済も同様。それが自滅するのをアメリカは知っていた。ただ、じっと待っているだけでよかった。この市場をそっくり手にいれるには、大人の知恵で子供を騙す。経済の占領政策は着々と裏で進められていた。階下から全米ヒットチャートの歌番が聞こえてくる。変わらないのはここから見上げた星だけであろうか。北村はなにか哀しく思えた。

第63話 脱サラ

団塊の世代といわれた五十過ぎの松本武は、上がつかえて中々出世しないことに見切りをつけて、さっさと三十年務めた会社を辞めてしまった。鶏口牛後だ。小さくとも自分で商売をやって、働いた分の見返りのある仕事をしたい。そのためには、いつまでもサラリーマンという哀しい職業にしがみついていないで、ここ一番、男としての勝負をかける。家族は反対したが、信念で説き伏せた。

「いまに、もっといい暮らしをさせてやるから」松本には勝算はあった。商売はもともと嫌いではない。商売には地の利、人の和、天の時ということがある。たまたま家を建てたところが団地だったが、私鉄の新駅のまん前になった。営業が長かったので、客は知っている。この不景気にこそ、やり方ではチャンスだと松本は何かのセミナーで聞いてきた法則を鵜呑みにしていた。

退職金と預貯金をすべて注ぎ込んでも足りないのだから、公庫から事業資金を借りた。それで、自宅を改造し、カフェにするという。松本は一週間の喫茶開業コースを受講した。そこにはいろんな脱サラ組が真剣にエスプレッソコーヒーの抽出法を学んでいた。コーヒー豆の選別、焙煎、温度管理と、一週間で分るのかというほど専門的で大雑把。紅茶ひとつとってもそんなに簡単なものではない。家庭で出せる味を提供していたら、わざわざ五百円も払って飲みに来てはくれない。ひと味違うのがプロの提供の仕方だ。それと軽食。ここまでくると、日頃、台所に立ったこともない松本は面倒くさくなってくる。

「いいや、軽食は業務用の冷凍食品でゆこう」

店舗の内装、椅子テーブル、厨房だけでもかなりかかった。それにボンチャイナの食器も業務用となると何故かべらぼうに高い。問屋いわく「丈夫ですよ、名入れはサービスしますから」と、つい買わせられる。製氷機にエスプレッソ・マシンも高価なものだ。そうこうしていると資金が底をついた。

看板はキャンバスと真鍮を使い、パリのカフェ風に古い木を再利用して、アクセントにした。

最初は簡単な喫茶店ぐらいにと思っていたのが、だんだんエスカレートしてきて、予算オーバーになってしまった。足りない資金を女房の実家から工面した。

「あなた、大丈夫？」と、女房は次第に不安になる。借入金の利息だけでも返せるのか。当のカフェのマスターはもう夢に向かって走っていて、周りも見えない。メニューを考え、手書きするのもまた楽しい。ピッチャーは、トレンチは、レジスターも欧風でと、細かい什器備品も結構かかる。凝れば凝るほどかかるものはかかる。

「やる以上は、その街にないものをやろう。みんながあつと驚く店にするんだ」松本は業者にも乗せられてあらゆる什器備品をいいもので揃えた。

メニューの試作では何回も失敗しては、女房と子供たちに食べさせた。

「パパ、またピラフにカレーなの、もういいよ、ママの作ったほうが美味しいよ」

「何を、うるさい、パパのは冷食だが、隠し味にシェリー酒を入れているんだぞ。おまえたち凡人には分らないのだ」

開店チラシもカラーで作った。印刷代、新聞折込代もかかる。広告代理店を呼んで、テレビとラジオのスポットもやろう。ウエイトレスはバイトでいいか。近所の短大生と主婦を頼んだ。時給いくらが相場なのかも分らない。「えーっ、そんなにくれるんですか」と、二人とも大喜び。少し出しすぎたかな、と松本は云ってしまって後悔した。保健所にも届けた。営業許可証もきた。税務署にも開業届けを出した。これで、わたしは小さいが社長だと、松本は悦に入っている。

いろんな業者が開店を聞きつけてやってくる。有線放送は、電飾看板は、銀行ですが、売上金は是非当行に、とか。社長さん、社長さんと呼ばれて悪い気はしない。いままで、会社ではただの主任だった。そうだ、名刺も作らねば。松本にはもう目に薔薇色しか見えない。

「でも、ここは人通りは朝夕だけですよ」「飲食店があちこちにありますが、不景気で閉めた店もあります」という声には耳を貸さない。人はこの店で引っぱる。味がよければ口コミで広がって、わざわざ遠方からでも人は来るものだ。松本は自分のいいように解釈していた。失敗の種はいつも不安の中に隠されている。

さあ、いよいよ開店の朝がくる。友人から開店の花があがった。お祝いにあちこちから駆けつけてくる。酒や掛け時計のプレゼントも持ってくる。初日は知人、友人で満席になった。記念品の名入れタンブラーをみんなに配った。当日は女房も手伝って、忙しく走り回った。

「今日は、お代はいただきません。開店サービスです」と、松本は気を大きくして云った。「どうですか、お味の方は」みんなお世辞を述べるだけで、本当は不味かったとは誰も云えない。コーヒーもなにか味がおかしい。水道の水じゃダメなのか。

一日が慌しく終わった。松本は閉店した店の前に立って、開店の余韻に浸っていた。「いい店だよなあ、わたしもいよいよカフェのオーナーか」

だが、翌日、そのまた翌日も客はほとんど来なかった。不味いという噂が広まっていた。「どうするのよ、あなた、日銭が入るっていったから、全部出したのよ。レジに入っているのはつり銭だけじゃない。明日の米はどうして買えるのよ」四日目にして、女房が泣き言を云った。

一週間、一月、三ヶ月と経った。だんだんと、松本は蒼ざめてくる。

「こんなはずではなかったのに、ここはわたしの城になるはずだったのに」

六ヶ月があっというまに過ぎた。誰もいない締め切った店の入口に「住居付き売店舗」の紙が風にひらひら靡いていた。

第64話 郵便局

郵便局にはノスタルジアがある。言葉が旅に出る停車場だ。確かそんな意味の散文詩を若い頃に読んだことがある。誰の詩だったかずっと気になっていた。田舎の特定郵便局はいまだに古い民家を改造し、年数の経っているものがあり、剥き出しの天井から年季の入った黒光りする木のカウンターまで、重い歴史の匂いが染み付いていた。どこか窓口は昔の省線の切符売り場に似てはいまいか。切符と切手、鉄とスタンプ、乗車券の料金表のような、運送料表。そういえば、職員の制服も昔はどちらも似ているような気がした。

その郵便局も電子メールと宅配便に押されて、民営化になった。町のあちこちに私営の郵便局ができたので、お年よりたちは戸惑いを隠せなかった。看板が動物で分りやすく表示はしてあるものの、クロネコ、カンガルー、ペリカンとなにがなんだか分らない。ポストもやたら立った。みんな会社によって違うから紛らわしい。料金の価格競争まで発展して、生き残りをかけるため、元祖郵便局は新事業を始めた。

ある郵便局にラーメン屋から電話が入る。「2丁目の前田さんまでラーメン3つ出前」郵便局員はバイクに岡持を持ってラーメン屋にかけつける。配達業務の委託もやり始めた。また、ある郵便局には旅行鞆を持った婦人が窓口に入った。

「どちらまで」と、局員は尋ねる。「大人一人、東京まで」婦人はさりげなく云う。「速達にしますか」「ええ、急いでいますので」すると、局員は切手を婦人の頬にぺたりと貼った。「こちらでお待ちください」と、奥の待合室で婦人を待たせた。

「次の方、どちらまで行かれますか？」出張へ行く会社員一人。「横浜まで」その男性の頬にも切手をぺたり。やがて、郵便局に集荷の車が到着すると、婦人と会社員は袋に入れられた。「お二人とも、航空便だから、空港まで頼む」

東京まで旅行なら飛行機も高いが、荷物扱いなら安くなる。みんなそれを利用して荷物に成ります。空港では特殊な空調のきいた箱に入れられて羽田まで。安いから文句は云わない。

「すみません、ロンドンまでゆきたいのですが」海外は船便の方が逆に高くなる。

「こちらの体重計にお乗りください。五十キロまではいくら、それから五キロごとにこういう料金になっております。SAL便なら安くなりますが」

いろんな利用客が来るようになった。若い男が若妻を連れてくる。どうやら、結婚したばかりだが、お腹に別の男の子供がいるようだ。

「内容証明付きで実家へ返品したいんだが」

また、飲み屋のママが酔った客を連れてくる。

「この人、まっすぐに家に帰らないと、奥さんに頼まれているから、書留で家まで連れて行って頂戴」

そうして、郵便局の中はいつも騒然としていた。酔っ払いから、犬ネコのペット、牛や馬まで

いる。手紙は誰も書かなくなった。ケイタイとパソコンの普及ですべて安く、早く確実に became したので、モノやヒトを運ぶ業務に成りつつあった。

やはり、郵便局は人生の停車場だった。そこには悲哀や旅立ち、郷愁がいつも匂っていた。

第65話 藝は身を助けない

絵描きとピアニストと詩人が、ボエームという喫茶店をいつもの溜まり場にして、一杯のコーヒーでねばっていた。

「おい、どうだい景気のほうは、その後、一枚でも絵は売れたかい」絵描きのボナールに詩人のロートレアモンが訊いた。

「さっぱりな、世の中、こうも景気悪くなったら、なければなくてもいいものは買わなくなったよ。芸術なんざ、余裕のある者だけの道楽さ。油絵一枚で、手形も落とせない、酒の肴にもならない」ボナールはチビた鉛筆を耳に挟んでいた。近頃は画材にも事欠く始末。

「そう云う詩人の旦那はどうなのよ」

「おれはご覧の通り万年貧乏。古来から詩人で蔵を建てたという話も聞いたことはない。いつも貧乏で慣れてらあ。第一、当節、詩人という職業はないんだ。名刺に詩人って刷っているおれをまじまじと見て、大概の人は云うんだ。それでどうして食べているんですかって。活字離れで本は読まない。小説も売れない時代にどうして詩集なんか売れるんだ」

「そうだよな、コンサートのチケットも売れないで困っている。劇場のせめて半分でも埋まってくれば、とんとんなのだが、クラシックのソロで客動員はかるのも至難の業だ。興業主は逃げ出すわ、ポスターの印刷代も払えない有様」

ピアニストのコルトーも頭を抱える。三人、髭とメガネと五十という共通した年齢で気が合った。

「テレビを見て見ろ、連日のワイドショーの低俗さ、大衆とはそんな程度にしかないのだ。おれたちのアートを理解するものはだんだんと少なくなっている」ボナールが云うと、

「そうだな、政治が腐敗して、経済が荒廃してくると、おれたちのような高尚な芸術を理解しようというゆとりも意識も薄れてくる」と、コルトーも賛同する。

「おれたちの仲間が路上に座って手作りの詩集を並べて売っていたりする。まるで乞食と同じだ。同情して恵んでゆくが、詩集はいらない、読んでくれない。こんな世知辛い世の中に希望を灯す言葉はいらないのか」ロートレアモンは叫んだ。

「癒しというから、芸術家のお出ましと思いきや、おれたちに用はない。絵を見て癒される大衆ではない。コルトー君、音楽もそうではないかな」

「おれたちはただのBGM。CDまで買って聴くほどのものでなし、ましてやコンサートに足を運ぶなど、音楽はいつでもどこでも流れている無料のただの音なんだね。そこに著作権もあるものか。われわれは大衆のサーパントではないと云った、それでも世に迎合して、クラブやカフェで軽音楽を弾く仲間もいるがね、芸術の安売りはしたくないな」

プロまでゆかない芸術家の卵も孵化したが、売れない連中がこうしてくだまっていた。気負い

だけで生きていられる不思議な生き物だった。

「見る、今日も労働者諸君は資本主義というジュースに汗を搾取されるために働いている。われわれを養えない社会こそが間違っている」きりぎりすは蟻を馬鹿にし始めた。タバコも切らした。他のテーブルの灰皿から吸い殻集めてほぐし、インディアンペーパーで巻き直す。

「教育が悪いんだね。絵画にしても音楽にしても、情操に教育価値をあまり置かない。すべて実利だ。利に直結しない学問はすべて道楽だ」

「教養も教養で終わる。人生の楽しみにあらず」

「諸君、さあ、めげないで、今日も寄付金を貰いに企業訪問をしようではありませんか」

「高尚な芸術のために」

「高尚な芸術のために」

失業者やホームレスたちがうろつくモンマルトルの丘から、彼らは颯爽と街に降りてゆく。高らかに歌をうたいながら。

第66話 植物人間

どれだけ長い時間を眠っていたのだろうか。わたしは目が覚めた、と、思った。瞼を開けようとしても開かないことに気づいた。それだけではない。体が自分のものでないよう自由がまるで利かない。指一本動かせない。声を出そうとして、声も出ない。以前、これと同じ体験をしたことがある。金縛りだった。どうしたのだろうか。これはまだ夢か。わたしは半分眠っているのだろうか。いや、そうではない。テレビの音声が聞こえる。そばで笑っているのは確かにわたしの妻の声だ。ここはどこなのだ。わたしはすべてを思い出そうとしていた。

そうだ、交通事故だ。わたしは雨の夜、残業で遅くなって自分の車を運転して家に帰るところだった。時間は十一時頃だった。突然、反対車線から中央分離帯のフェンスを突き破って、トラックのようなでかい車体のヘッドライトが迫ってきた。それで記憶はふつりと切れている。わたしは多分、事故に遭ったのだ。それで助かったのか、ベッドのようなところに寝ている感触はある。耳だけが聞こえているが、瞼が開かないので見えない。足も手も必死に動かそうと試みたが、微塵だに動かない。

「どうですか、お変わりありませんか」「ええ、マッサージもさっきしてあげました」「そうですね、床ずれが大変ですからね」看護婦と妻の会話だった。ここは、病院に違いない。わたしの鼻穴に管が通されている。何か口で息はしていない。胸の辺りに痛みを感じず。モーターの静かな回転音が、空気を送る音と重なる。それは規則正しく繰り返されている。そうか、わたしは気管切開して、人工呼吸器を装着されているんだ。管を通して、流動食を流し込まれている。事故はかなりわたしの体を損傷したのだろう。体が全く動かないから、きっと脊髄から後頭部をやられたのだろう。意識不明になって、どれほどの日数が経っているのだろう。事故があったのは四月の確か、十日だった。妻はずっとわたしについていてくれたのか。テレビを見て笑っているくらい気持ちに余裕ができたとなると、日にちは暮らしているのかもしれない。いまは何時なのだ

。時間と日付を知りたいと思った。テレビでニュース番組をやり始めた。「九月二十日木曜日、六時のニュースです。今日一日のできごとを列島縦断でお知らせいたします」アナウンサーが九月と云った。わたしは五ヶ月余りも意識がなかったことになる。春から夏を過ぎていまは秋なのだ。「湾岸戦争は戦火を拡大させ、我が国の自衛隊も損害を被り、すでに戦死者が出ていることで麻生首相は…」半年の間にイラクと戦争が始まったのだ。日本も参戦している。これは大変なことになった。総理大臣も替わったようだ。

「お母さん、いいよ、替わるから。御飯のスイッチだけ入れてきたから」
誰かが入ってきたと思ったら、ああ、その声は娘だ。

「じゃ、お願いよ。お父さん、別に変わったことないけど、痰が溜まるといけないから時々とってやってね」

妻は食事の支度に帰った。代わりに高校生の娘が来た。家から歩いて近い病院とすれば、ここは市民病院だろう。おい、お父さんだ、意識が戻ったんだ、気づいてくれ。力をこめても、こめるところがない。わたしの意識だけがあって、肉体はまるで別のものだった。

娘はかりかりと鉛筆で書いては消していた。頁をめくる音もするから、テスト勉強を病室でしているのだろう。付き添いも大変だ。みんなよくやってくれている。妻がまた病室に帰ってきた。食事の支度をして、自分でも食べてから毎日、そうして付き添いにくるのだろう。代わりに娘が帰った。テレビは九時といていた。蒲団を敷く音がするから、わたしの隣の床に寝ているのだ。一家の主がいない家はどんなだろう。事故後の保障はあるのか、生活費と医療費は相手の保険から出ているのだろうか。いろいろと冷静に考えさせられる。それにしても体が痛い。硬直したように動かないから、凝っているようないじくらしさで気が狂いそうになる。自由に体を動かしたい衝動に駆られる。それにも慣れてくると、わたしはただ長い、夜とも昼ともつかない時間の牢獄の中に目を閉じたまま、じっとしていなければならぬ苦痛と恐怖を感じた。三重苦のヘレン・ケラーでもまだ体は動いた。わたしの自由なのは意識だけだった。

夜中だから眠るといってもない。うとうととするときもあれば、じっと妻の寝息に昔のことを回想していたりした。朝だ。看護婦が検温にくる。「熱はありませんね」妻も起き出して、洗面所に行ったりしていた。テレビでモーニングショーをやっている。耳だけが唯一のわたしの救いだった。午前中に医師の回診があった。

「どうですか、変わったことはありませんでしたか。顔色もいいですね。奥さんも無理しないでください」「はい、ありがとうございます。うちの人の意識は戻るんでしょうか」「さあ、なんとも判りません。脳波を以前調べたときは難しかったですね。意識が戻ることもありますから、気長に声をかけてあげてください」

「判った？ お父さん、早く目を覚ましてね」「そうそう、希望を捨てないことです」わたしは妻の問いに応えようとして、また意識だけでもがいた。

午後、中学の息子が学校帰りに寄った。妻に頼まれたものを買ってきたらしい。二人で部活の話をしている。「お父さん」と、息子がわたしの手を握った。手のぬくもりが伝わってくる。嬉しかった。こうなっている、家族がいるから救われる思いだった。

わたしは、なんとか意識が戻ったことを家族に伝えようと、あれこれと考えたが、それこそ手も足も出ない。どうしたらいいのか。「おおい、おれは意識が戻ったんだ。脳波を測定してくれ

。そうすれば起きているのが判るから」ありったけの意識で叫んだが、それも声にはならない。

このまま脳死状態として、棺桶に入れられて、焼き場で焼かれる者も中にはいるのだろうか。わたしはぞっとして生きたまま火に包まれる自分を想像した。「助けてくれ、おれは生きている、生きているんだ、誰か」

なんとか、伝達する手段はないかと考えても出てこない。少しでも首を振れたり、瞼でも動かせたら。神経を集中させても、ぴくりともしない。自分の体ではないように、ただの肉の塊に居候している感触だった。

何日かして、娘と息子も病室に集まった。わたしの兄夫婦も見舞いにきていた。久々に病室は賑やかになっていた。

「今日はお父さんの誕生日なんだ。ところで、いくつなんだっけ」

「なによ、父親の年もわからないの、ばかじゃない、五十一になったの」

「お父さん、よかったわね、誕生日だって、みんな集まってくれたのよ。バースディケーキも買ってきて、これからここでお祝いよ」

「声をかけてやってください。それで意識が戻ることもあるんですって」

みんな、替わりがわりわたしの手をとって、「お誕生日おめでとう」と、云った。いままでこんなに大事にされたことはない。家族の暖かさがたまらなく嬉しかった。わたしは感激のあまり涙を流した。

「あっ、お父さん泣いてる」「涙を流している」「先生を大至急呼んできて、意識が戻ったのよ、お父さん、よかった」妻はわたしに抱きついて泣いていた。わたしはみんなに触れられてどくどくと涙を流していた。言葉ではいい表せないありがとうとして。

第67話 できちゃった

「できちゃった」と、美津夫が友里から突然云われたときは、驚きのほうが先に立ち、実感もないので歡べなかった。それを女の勘で友里は態度を硬変させて、美津夫を攻撃した。

「歡んでくれないの、あなたの子ができたのよ、わたしとのことは遊びだったの?」

「そういうわけじゃ...」女は懐妊したことを男との愛情のリトマス紙にする。切り札のように突きつけて試験するのだ。

「驚いているだけさ、でも、病院へ行って見てもらったわけではないんだろう」美津夫はまだ半信半疑だ。

「いまは市販されている、妊娠が分るいいものがあるの。確率は九十五パーセントだって」「へい、そんなので本当に簡単に分るの」友里は、美津夫には証拠をつきつけなければならない、と思った。少し高い検査薬だが、友里はもう一度、美津夫の前で確かめてやることにした。

「いいこと、ここの窓をよく見ている、いま、わたし、ここにおしっこをつけてくるからね」疑えばいけないから、トイレでつけるところまで美津夫に立ち会ってもらった。白いペーパーの部分だんだん、微かに蒼い線として浮き上がってくる。神秘的だった。いま、二人の結びついた生命が、その存在を主張する仄蒼い線として尊厳をもって語りかけてくる。美津夫はしばし考え

が整理できないでいた。赤ん坊を作るなんて簡単なんだな。

「生理がこないから、おかしいなって思ってね。明日、ちゃんと病院へ行ってくるわ」

友里とつきあってまだ四ヶ月だが、そんなに早く「できちゃった」ことで、友里は嬉しそうだが、美津夫は戸惑っていた。

翌日、美津夫のケイタイに友里から結果を知らせてきた。「三ヶ月だって、予定日は来年の一月二十日って云われたわ」「そんな、こっちにも準備というものがあるから、そこをなんとか延ばせないのかよ」慌てふためく美津夫の声に、友里は笑いながら、「わたし、産むからね」と、きっぱりと宣言した。

当節、「できちゃった結婚」は何も恥ずかしいことではない。芸能人もまたかと云うくらいトレンドイなのだ。ただ、見苦しくないうちに式を挙げなくてはと、周りでばたばたと急がせた。美津夫は決心がつかないうちに、当然結婚するものと事が進んでいた。結婚というものも実に簡単なものだ、と美津夫は思った。

あまりお腹が目立たない五ヶ月で式を挙げた。花嫁は軽い性格で、美津夫は遊びのつもりでつきあっていて、それが子どもという罫に嵌ったという感じだった。式と近場の旅行も済むと、いつのまにかアパートに所帯道具も増えて、一名増員していた。実感が湧かないが、まあ、この人と一生やってゆくさと、ようやく美津夫は決意のほどを見せた。あれこれと子どもの名前も考え、将来の夢も二人で語るようになった。友里は赤ちゃんのケープなんかけなげに編んだりしていた。女もいつまでもギャルではない。それらしくなってゆくものだと、これも不思議に思ったりしていた。

あっという間の一年だった。予定日より少し早く女の子が産まれた。名前は美里と一字をとった。ぎんぎん、夜泣きする。おしめ、哺乳瓶、がらがらと、父親としての実感に浸っている美津夫だった。子どもはすくすくと育つ。はいはいから立ち上がる。

「わたし、あなたの収入だけでは将来に不安だから、また働くわ」と、いとも簡単に友里は云い、美里を託児所に入れる手続きをしてくと、友人の世話で自動車会社の事務をパートでやるようになった。いいのかなと、美津夫は思う。まだ子どもが小さいうちに離して。友里は母であることを忘れて、美津夫に子どもの世話を頼み、仕事だと云い、遅くなることがしばしばあった。

「あなた、託児所に迎えにいつてね、離乳食は冷蔵庫の中にあるから、ついでにお風呂にも入れてね、わたし、残業で遅くなるから」ケイタイは一方的に切れる。パートで残業はないだろうと、美津夫も怪しむ。友里のちゃらちゃらした尻軽は性格だから直らない。何か心配だった。

ある日、美津夫は美里をおんぶしてアパートへ帰ってくると、何か部屋が綺麗になっている。いつもあるべきものがない。おかしいなと、誰かが入ってきた形跡を捜した。灰皿にタバコの吸殻。友里はタバコは吸わない。そして缶ジュースの空き缶が二つ。すぐに、男だと美津夫は直観した。すると、美津夫のケイタイにメールがはいった。友里からだった。

「怒らないでね、わたし、男できちゃった。彼と暮らすわ。美里をよろしくね」

早い。男ができるのも簡単なものなのだ。怒る前に人のいい美津夫は妙に感心したりしていた。美里がぐずる。美津夫はあやしながら、台所に立った。

第68話 共同幻想

ぼくは去年、紐と結婚した。尻糸をよりあわせた太いものでロープといったほうがいい。彼女に海の匂いとしなやかだが強靱な頼もしさを感じた。それでつい惹かれて結婚したのはいい、騙されたと気づくまで半年もかからなかった。彼女の嫉妬深いのには辟易していた。どこまでもついてくる。信用がないんだ。女友達は、「あらあら、あなたは紐付きなのね」と、笑うこと。恥ずかしい思いをするのは沢山だった。それで、ぼくが紐に文句を云うと、紐は急に性格が変わったように、ぼくを鞭打つ。彼女そのものが鞭となって、ぼくをいやというほど打擲するんだ。ときには狡賢い蛇になって、ぼくの首に娼婦のようにまつわりつく。それは嫌いじゃない。女はそうもあるべきだと、何かの本で読んだ。妻で友達で姉で母で娼婦でと一人何役もやれる女ほど重宝だ。だが、紐ときた日にはそれが彼女の擬態のすべてだった。巫山戯るんじゃないって云いたい。ぼくは詐欺に遭ったように、彼女を引っ張って、裁判所へ向かった。今日という今日ははっきりさせてやる。

「それで、奥さんは何もしてくれないと」

「そうです、結婚してこのかた、掃除も洗濯もしたことはない、ましてぼくに労りの言葉もかけない」ぼくは憤慨してすべてを調停員にぶちまけていた。

「掃除はともかくとしても、洗濯ものを干すときは部屋の中でも庭でも奥さんは役に立ちませんでしたか」

それを聞いて、ぼくははっとした。そんなこともあったな。

「あなたは紐さんと、なにもかも結果が判っていて結婚したんじゃないありませんか。いま、あなたの前に相談に来た方は結婚相手が貯金箱でした。旦那さんはやはり怒って云っていました。一方的に金を貯めるだけで、何もしてくれないとね。旦那さんに云ってやりましたよ、いい奥さんじゃないですか、ザルと結婚してみなさい、とんでもないことになるよ。みんなどこかいいところがあるものです。それがよくて結婚相手にしたはずですよ。結婚する前は両眼で、結婚したら片目で見なさいとは、よく使われる格言ですがね」

ぼくは、紐との交際期間を思った。「死ぬまであなたと一緒によ」と、云った言葉を思い出して、もう一度だけやり直そうかと思った。

裁判所を出て、ぼくたちはまた以前の恋人同士のように絡み合いながら、出逢った公園へと足が向いていた。失った愛を呼び戻すには、あの頃に戻ればいい。すると、ぼくの学生時代の友人がやってきた。

「よう、どうしていた」彼は手にヘチマを持って歩いていた。

「こいつ、ぼくの奥さんだ。ナミというんだ」と、ぼくにヘチマを紹介する。

「ぼくも去年こいつと結婚してね」恥ずかしげに紐を見せた。

「お似合いじゃないか、ナミはこれでいて綺麗好きでね、いつもお風呂ではぼくの体中を洗ってくれるんだ」

「それはそれは、ソープランド、いや、失礼、羨ましい限りだ」

石鹸のいい匂いがした。あんな女房といつも一緒にいられるだけでぞくぞくしてくるだろうな。ぼくは、初めて人妻に好意を抱いた。それを紐に悟られたようだ。紐は急に怒ったように、ぼくをあらぬ方角へと引っ張ってゆく。

「それじゃ、たまに遊びに来いよ」と、友人は手を振った。

それからは平穩無事の生活が続いていた。ぼくは日増しにナミとかいったヘチマのことが忘れられなくなっていた。ぼくの性格からして、男勝りの乱暴な紐の方が性分に合っているが、あの献身的なヘチマもまた悪くない。男は欲が多様にありすぎる。これでいいということがない。

ある日、ぼくは友人の住所を調べて訪ねていった。たまたま友人は残業で遅くなると、ヘチマの奥さんがひとりで待っていた。二人でテーブルに向き合って、友人の帰りを待っていた。時計の音だけがする。気まずい空気が流れていた。奥さんのいい匂いがしてくる。高校の時に嗅いだ女子高生の髪の良い匂いだ。ぼくはたまらなくなり、ついに男の本性を露わにした。「奥さん」と、ヘチマに飛びつくと、嫌がるヘチマを無理矢理バスルームに連れていった。ぼくは焦っていた。うまく衣服が脱げない。ズボンに片足引っかけてつんのめった。ぼくは全裸になると、ヘチマの奥さんにぼくの勃起した男根にまで垢擦りさせようとしていた。何度も抱擁し接吻した。「ああ、奥さんのようなのが側にいてくれたら」ぼくは恍惚感でいっぱいになりながら、エクスタシーを迎えようとしていた。そのときだ、部屋にいきなり駆け込む足音。

「おまえたち、何をしている」友人がバスルームのドアを開けて仁王立ちしていた。何故か、紐まであとについて来ていた。

「これはただじゃすまないからな、慰謝料もかなり高いぞ。会社にも報告して、辞めさせてやる」友人はいきまいていた。

ぼくは、顔面真っ青のまま自分のアパートへ、紐に引かれて帰っていた。これでぼくの人生も終わりだ。出来心が何もかも駄目にした。紐も怒っているだろう。この噂はあちこちへ飛び回り、ぼくはこの街へも住んでいられない。いや、生きているのさえ恥ずかしい。「紐よ、助けてくれ。死ぬまでぼくと一緒だと云ったよね」紐はするすると鴨居に身をかけると、ぼくの首に巻き付いた。ぼくに椅子に乗れという。「何をやる気だ、紐よ」そして、椅子を蹴るんだと命じた。ぼくは無気力にも命じられるままに、椅子を蹴った。ぼくの体が宙に浮いた。首が絞まる。息ができない。血が上る。死ぬまで一緒だったよな。小便も涎も涙も出るものはみな出たあと、ぼくの意識はなくなった。紐とようやく一緒になれたのだ。

第69話 霊異記

中桐康夫は三十は過ぎていたが、なかなか理想の女に逢うことなく、独身を通していた。会社では評判のナイスガイなのだが、つきあう女の欠点ばかりが目について、結婚まで考えた人は現れないでいた。

退社後、地下鉄で帰宅するためにホームに並んでいると、混雑していた人波にいきなり後ろか

ら押された。前のサラリーマンと二人、あっという間にホームから落ちた。事故だった。そこへ地下鉄が猛スピードで入線してくる。康夫は数メートル先にある、車両のヘッドライトと、驚く運転手の顔を見たと思った。悲鳴が起こる。康夫の体はまだ宙にあった。もう駄目だろうと目をきつく閉じた。地下鉄は急ブレーキをかけて停車した。やってしまったという顔で、運転手が降りてくる。駅員も駆けつけた。野次馬が群がった。

「おかしいな、確かに二人落ちたのだがな、遺体は一人分よりありません」くまなく、車両の下を捜索したが、やはり一人分足りない。忽然と消えた。

中桐康夫は奇妙な空間に浮いていた。というより、重力が少ないのか、地面はあっても立っている感触がまるでない。—おれは死んだのだろう。ここはあの世か。それにしてもおかしいな。おれの体は生身のままだ。抓ってみたら痛い。確かに息をしているし、体のどこも損傷していない。薄明るい、この靄はなんだ。ここはどこなんだ。

電燈でもない、太陽光でもない、夜明けのようなしらじらとした明るさと冷気を感じていた。樹木が見えた。家もあるようだ。だんだんと、周りの景色が判ってくる。靄の中から白い人影が浮かんだ。康夫は駆け寄った。

「あのう、ここは、どこなんですか」人影は若い女だったが、妙に白い。透けて見える。足が薄っすらと消えている。驚いたのは女の方だった。はっとする美人で、康夫はどこかで見たことがあると一瞬思った。「キャー、出たあ、人間だわ、助けて」と、若い女は家並の方へと逃げていった。康夫は、いまは何だったのだろうと考えていた。どう見てもあれは幽霊だった。透けるような体。だが、幽霊が人間を見て逃げるかと、思い直した。

若い女は家に逃げ帰って、家人を起こし回っていた。「で、出たのよ、人間が」年寄りたちは、まだ眠い格好をして起こされたことに憤慨していた。「何なのだ、こんな時間に」「人間を見たの、すぐそこの柳の下で」婆さんは笑って、「おまえ、夢でも見たんだろうが」「違う、ちゃんと両足があったもの、あれは人間に間違いないわ」「人間なんか、いるわけがない。昔から、人間の正体みたり枯尾花ってな、何か、見間違えたんだろうよ」と、じいさんも相手にしない。すると、玄関のドアが叩かれた。「すみません、どなたかおりませんか」康夫が女の後をついてきて、玄関口に立った。「ほらあ、来たあ、わたしの云った通りでしょう」女はじいさんの陰に隠れた。じいさんは棍棒を手に、ゆっくりとドアを開けた。「誰じゃい、こんな夜中に」「すみません、夜分、お騒がせしまして、わたしは中桐康夫と申します」挨拶して、じいさんの足元を見ると、薄っすらと消えている。「あ、足がない」じいさんは逆に康夫の足元を見て、「あ、足がある」と腰をぬかした。「南無阿弥陀仏、娑婆へ戻ってくれよ」と、康夫を拝みはじめる。

「ちょっと、待ってくださいよ、わたしはなんの危害も加えませんから、安心してください。それより、ここはあの世なんですか」ばあさんが出てきて、「たわけが、この世でないか、あの世は人間どもの住む娑婆じゃ」「まあ、あの世から見ればこの世で、どうでもいいことか、ということは霊界なんですね。あなたがたはみんな幽霊…」若い女はようやく冷静さを取り戻したように話し始めた。

「そういう、あなたは どうして生きてまま、霊界に入れたのよ」「それがよく判らなくて、事故に遭ってから突然、別世界にスリップしたようなんです」「先刻、あなた中桐と云いませんで

した？」女が思いだしたように訊いた。見れば見るほど初対面にしては心ときめかせる女だと、康夫は思う。「ええ、そうです、康夫と云います」

「同姓同名にして、生きていれば同じくらいの年格好だわ、ねえ、おばあちゃん」

「そうだね。中桐さんとやら、あんたの住まいは？」「静岡の沼津です」三人とも驚いて顔を見合わせた。「それで、お母さんはどうしておいでです」焦ったように若い女は訊いてくる。

「母はぼくが三歳のときに病気で亡くなりました。よく覚えていないんです」そこまで云って、康夫ははっとした。そういえばこの若い女は仏壇の中の写真の人に似ている。二十五で死んだ母さんに。いや、そんなはずはない。若い女は涙さえ流していた。康夫の顔を意味ありげに見つめていた。綺麗な人だ。幽霊でなかったら、つきあってみたい。と、康夫は固唾を呑んだ。初めて異性に好意を持った。

朝が来たというが、まだ薄暗い。訊けば、霊界は一日こんな夜明け前のような暗さだという。若い女は霊界を案内してくれた。懐かしい戦後まもなくの古い家が建ち並んでいる。ビルなんかない。通りを浮遊するようにさまよう人に年寄りが多い。それは死んだ年のまま、霊界に入るので、幽霊はそのまま年をとらないからだという。年寄りが多いのも頷ける。

「すると、君はその若さで亡くなったんですか？」女は恥ずかしそうに俯いて、

「若いといっても子供がいたんですよ、生きていればあなたぐらいかしら」

と、云って自然と女は康夫の手を握ってくる。康夫はどきりとした。冷たい手だった。

「不思議な空間ですね。ひどく懐かしい感じがする。まるで夢の中を現実歩いているような、茫漠とした。それでいて、安心する暖かさがある。何か、君といるからかな。女の人にこんな感情を抱いたのは初めてです」

康夫がそこまで云うと、女は康夫に急に抱きついてきた。「もう、こんなに大きくなって…」と呟いて泣くのだった。康夫もきつく抱き留めた。幽霊にも実体がありそうだった。体温がないだけで。康夫は恋人に抱かれるというより、まるで母親に抱かれているような安心感を覚えた。女ははっと我に返ったように康夫を突き放すと、

「あなたはここにいてはいけない人なの。ここにはすべて食べ物も供えられた気持ちだけで、実際には人間が生きてゆく食べ物はないのよ。このままだとそれこそ死んでしまうわ」と声を震わせた。

康夫はこの人とならこのまま死んで一緒に暮らしたいとも思った。

「たぶん、あなたは春分の日の日没にわたしたちが出入りする空間の歪みから迷い込んだんだわ。彼岸にわたしたちが通る出入り口なの。さあ、急いで帰りなさい」

女は康夫の手を強引に引いて、康夫が初めて霊界に立った場所へと連れていった。地面に丸い池のような、よく見ると底なしの星雲が渦巻く奇妙な穴が空いていた。

女はしんみりとした口調で、「さよなら、康夫」と名前と呼んだ。康夫は女の目をじっと見つめていた。「母さん」と口をついて出た。すると、康夫の体は穴に吸い込まれるようにどこまでも転落していった。

康夫が気がつくと、ラッシュの地下鉄の駅にいた。到着した車両から夥しい通勤客がエスカレーターへと向かっていた。康夫も人波に押されるように改札口へと流される。いつもある定期を入れるところがない。いつも使う駅なのに変わっていた。みんな、そのまま通過している。康夫

も続けて出ようとする、駅員が走ってきた。

「お客さん、iカードは持っていないんですか？」

「いつから機械が変わったんですか、定期券ならほら、ちゃんと持っていますよ」

康夫が提示すると、駅員はひどく笑った。

「冗談を、そんな十年前の定期を出されても」「ジュウネンマエ？」

精算して、地上へ出ると、夜とばかり思っていたのが、朝だった。昨日の事故もあの世も夢だったのかと、康夫は眠りから覚めた人のようにぼんやり歩いていた。

街はがらりと変わっていた。歩く人のスタイルも違う。走る車もモーターショーで見たような斬新なものばかり。康夫は会社へ急いだ。ビルも改装して新しくなっていた。七階のオフィスに向かう。ドアには別の会社のサインがある。入ると見知らぬ顔ばかり。みんな康夫を見てくすくす笑う。

「あのう、ここは東洋企画ではないんですか」

すると、奥から責任者ふうの中年の男が出てきた。

「東洋企画といえば、七年前に倒産した会社ですな。確かに以前はこのビルの所有者でした。それがなにか？」

倒産した。カレンダーの日付は二〇一二年三月とある。

「どうも、失礼いたしました」

康夫はふらふらと未来の街を歩いていた。太陽の光が眩しかった。生きていられる実感にようやく包まれた。さて、これからどこへ行こうか。

第70話 うりふたつ

マークとジェニーがある朝、目覚めた空間は見覚えのないものであった。ふたりは恋人同士。昨夜は友人たちとパーティーがあってだいぶ呑んだように思う。かなり酔っていたが、タクシーで送ると、二人でタクシーに乗り込んだところで記憶は途切れていた。

「どこ、ここは、どこなの？」突然、ジェニーは飛び起きた。ネグリジェも、ベッドも部屋も自分のものではない。マークも起こされたが、てっきり、酔ってどこかのホテルへでもしけこんだぐらいにしか考えていなかった。ジェニーはクロゼットの中にきちんとかけてあるたぶん自分の服を何か嫌なものでも触るように、身につけた。（誰かが、私たちの服まで脱がせた。別のサイズの合っている服を用意している）いくら酔っていても、突然、記憶がなくなるというのも不思議だった。ジェニーは何かされていないか、バスルームに入って、鏡に全身を映すと点検しだした。耳たぶに傷を発見した。昨日までなかった小さな傷だった。シャワーを浴びると、着換えて、まだ眠い格好をしているマークの手を引いて、部屋を出た。何かの異常をジェニーは感じていた。ホテルのエレベーターから従業員が出てきた。おはようございますと云ったが、それはマークにそっくりだった。

「いまの人、あなたに気持ち悪いくらい似ていたわ」それは、世の中には三人くらい、うりふたつの人間がいるというから、おかしくはないとマークは云う。フロントに行って、また驚いた。受付の女性がジェニーそっくりだった。マークは見比べて大声で笑った。その笑い声も続かなかった。途中で止まる。ホテルに次々に入ってくる客が女はすべてジェニーに、男はすべてマークに似ていた。マークは口を半分開けたまま、「嘘だろう」と呟いた。

二人とも走って外へ出た。そこはロサンゼルス街ではなかった。同じような造りのビルがいくつも規則正しく建っていた。走る車も乗用車はすべて同一の型と色だった。それよりなにより、歩道を歩く男女はすべてマークかジェニーだった。着ている服まで同じだった。タクシーの運転手もバスの乗客も、ポリスマで沢山のマークとジェニーがいるのだ。

「おい、おれたち、タベ、覚醒剤やったか？」「ううん、幻覚なんかじゃないわ、これは確かな現実よ」ジェニーも呆然とつっ立っている。

「だったら、ここはどこなんだ。どうして、おれたちがいっぱい歩いているんだ」

気が狂いそうになり、通行人のひとりをつまえた。髪型まで同じ、ジェニーの偽物だった。

「おい、君はなんという名前なんだ」ブロンドのほっそりした若い女は相手にしない。ただ、笑って、

「何云うのよ、マーク、わたしはジェニーに決まっているでしょう」と、マークの手を払って行ってしまふ。今度は、向こうから来るマークの偽物をとっつかまえた。

「君はマークなのか」男はうんざりした顔して云った。

「はいはい、君もマークでしょう。ぼくもマークだ。これでいいですか？」

「だったら、おれの生年月日と血液型、好きな食べ物を云ってみろ」

男は信じられないという顔になり、

「どうして、ぼくのことを訊いてどうするんですか、あなた自身のことじゃありませんか。一九七八年九月三日生まれ、AB型、スタッフドトマト。これで満足ですか？」

マークは信じられない顔をした。みんな当たっていた。ジェニーもいろんな人に訊いてみた。自分の過去の秘密まで知っていた。それは誰にも話したことがないことなのに。

「そうだ、警察に行って、事情を聞いてこよう」

二人は街の警察署に入っていった。警官もすべてマークだったし、事務をしているのはすべてジェニーだった。

「この街はなんと云うんです。ロサンゼルスに帰りたいんですが。どうして、君はおれで、おれは君なんだ」対応に出た警官にマークはまくしたてた。

「あなたの云うことがよく判りません。ここはジェミニという街です。ロサンゼルスという街は聞いたことはありません」

「ここはアメリカだろう。巫山戯るなよ」頭にきたマークは警官のマークの襟首を掴まえて突き上げた。ばらばらと拳銃を片手にした警官たちがマークを取り囲み、「手を挙げなさい」と命じた。ボディチェックされて、床に伏すよう命じられた。ジェニーはかばうように泣き叫んだ。

「なによ、あなたたち、みんな同じ顔してて。おかしいじゃないの」

二人とも取調室で捜査官に尋問されていた。いままでの事情をすべてマークは話した。そのたびに、担当は側の別の捜査官に耳打ちする。「所長を呼んできてくれ」

「コーヒーがいいですか、それとも気付けにブランデーでも？」捜査官の態度が急に優しくなった。部屋にオレンジジュースとコーヒーが運ばれてくる。事務の偽ジェニーが、マークにウィンクした。「よせよ」マークは溜息ついて横を向いた。

やがて、研究所の所長という白衣の初老の男が入ってきた。初めてマークではない男だった。マークはほっとした。レスターという男は握手を求めた。

「いや、すまなかった。ホテルに迎えに行くのが遅かったもので、君らはすでに出たあとで、驚いたでしょうな」

二人はレスター所長と車で郊外の研究所に向かった。研究所といっても大工場だった。巨大な発電設備まで備えている。

「君らはロスから誘拐された。それは昨夜のことではない。すでに一年経過している。それまで眠らされていたのだ。コピー元としてね」

二人はレスター所長の言葉をすぐには飲み込めないでいた。

「それは、どういうことです」

「君らは国連によって選ばれた二人だった。完璧で優秀な遺伝子を持ち合わせていた。それで、この星の計画に使われたのだ。悪く思わんでくれ。人類を救う遠大な計画なのだから」

「それって、クローンというやつですか。とうとう人間でやったんだ」

マークが研究所の入口に立ったとき、そろそろと次々にコピーされたマークとジェニーが出荷されているところだった。

「おれたちが大量生産されている。記憶や性格までそっくりに」

「同一のものの方が社会の効率がいいのです。無駄がありません」

二人はその異常な光景を見たとき、まるで発狂したように、その場から逃げ出した。街を走る。大勢のマークとジェニーが振り返る。まるで、巨大な三面鏡の中にいるように、どこまでも同じ顔が連続している。

「いやだ、おれのアイデンティティはどこへ行った、おれを識別するものは。既製品ではいたくない。助けてくれよ」ジェニーも泣いていた。

「マーク、あなた、本物のマークなの」「そういう君も本物のジェニーなのか」途中で入れ替わっても判らない。何の支障もないことだが、それが許せない。

二人は、鏡の迷路の中でも必死で自分たちを見失わないように手だけはしっかりと握りあっていた。

第71話 自由への逃走

梶原茂樹は末期癌で余命三ヶ月と宣告された。全身に転移して、もう手の施しようがない。それでも一縷の望みを託して、放射線治療、手術をしますかと医師に云われたが、治療を拒否した。病院からホスピスを紹介された。最後は安楽に死にたい。

まだ五十過ぎたばかりで、家族も困るし、仕事もやり残していた。この世に未練はありすぎる。ホスピスへ入院しようと、その手続きに訪れたら、病院の庭先で真っ黒く日焼けした同じ年くらいの男が声をかけてきた。

「あんた、もう一度だけ人生やり直したくはないか」うさんくさい勧誘かなと思った。

「わたしにはもう後がない。秒読みに入っているんだ」不機嫌に梶原は返答する。「必ず直ると云ってもか。怪しい者じゃない。まだ実験段階だが、大勢の末期癌患者が生還している。あんたも協力すれば治療費はいらない」

梶原は半信半疑だが、ともかく男の話だけは聞こうということになった。男の差し出した名刺には、オキーノ野口と二世らしい名前で、住所が横文字でフィジーにある島の名前が書かれてあった。

「うちの療養所はフィジーの孤島にある。どうですか、これから一緒に行きませんか。珊瑚礁の青い海、いいところですよ」

それから二日して、梶原は機上の人となる。オキーノに云われた通りにした。仕事は退職届けを出した。妻とは離婚した。家族はすべて捨てること。

「今日からあなたは雑念を捨てるよう、頭の中を空っぽにするようにしてください。仕事も家族もいっさいを忘れるのです。どうせ死んだら元も子もない。生きるためにすべてを捨て去るのです。まず、そこから入りましょう」

飛行機の中で機内食が出たが、それは返した。

「これからはわたしどものメニューで食事をします。あなたの昼食はこれです」見ると紙袋に入った何かの粉と、ジュースだった。

「これは大豆の粉と野菜の粉末です。ジュースも無添加の野菜のミックスです」「こんなものをこれから食べるんですか」

「マクロビオティックって聞いたことがありますか。全世界に実践者がおります。すべて粉食で、

煮たり焼いたりしないのです。それも天然栽培された無農薬の農作物ばかりです。これからは酒、タバコ、嗜好品は一切口にしないと約束してください」すでに治療は始まっていた。

「現代文明の毒を浄化するのはです。精神的にはストレスをできるだけなくするよう努力しましょう。エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』を読んだことがありますね。名著です。人類がエデンの園から現代社会まで、楽園喪失までして、逃走してきた歴史というものの弊害が癌です。わたしたちはそう考えております。ですから、今度は自由へと戻るのです」

飛行機はコバルトブルーの海へと吸い込まれるようにして、平らな島の飛行場へと着陸した。そこから療養所のある島までクルーザーで行く。すっかり赤道に近い、南国だった。沖合に停泊したクルーザーに原住民たちがカヌーで乗り付けてきた。食糧や物資を下ろしていた。梶原とオキーノもカヌーに乗り込んだ。みんな口々に博士とオキーノを呼んでいた。医師には違いない。

どこまでも白い砂浜、椰子の林、女子供が浜辺で遊んでいる。ここは忘れられた楽園だった。海亀がのっそりと顔を出す。すべてが自然のまま残されている。「この島では貴金属は御法度です。腕時計、メガネは外してください。わたしが預かりましょう。入れ歯はしていますか」梶原は驚いて、

「入れ歯はないけど、そこまでするんですか」

「そうです。金属は人間にいい影響を与えていません。無理矢理、矯正しているところに害もあります」

オキーノが浜に着くと、子供たちが取り囲んで、大賑わいになった。

「あなたは、ここでは病人であることも忘れなさい。客人として、なんら気を遣う必要はありません。ただし、規則正しい生活と食事だけは守ってください」

それから、梶原の療養が始まった。人間を野生に戻すようなカリキュラムだった。朝は四時には起きる。日の出はそれからだ。食事はマクロビオティック料理の粉食。塩分、糖分、油脂は控える。適度な運動のため海で泳ぐ。現地人が梶原の全身をマッサージしてくれる。頭の先から足先まで、現代文明にどっぷりと浸って凝りに凝った体をやわらかくほぐす。瞑想の時間もある。呼吸法も実践で教えられた。何かヨガのような雰囲気もあった。

「病気の多くは気から生じます。すなわちストレスです。ここでは、人間の本来の自然治癒力を高めるために、忘れていた本能を呼び醒ます訓練を行います」

西洋医学、科学的療法では直せない、難病患者も何人かいて、共に共同生活を送っている。

「リラックスしてください。それからいつも笑うことです。笑うことで病気が後退します。けしって、過去のこと、日本のことは考えないでください。三ヶ月で、あなたの体は浄化されるでしょう」

梶原は現地の子供たちと遊びながら、自分も子供に還ったようにいつも楽しそうだった。コンピュータを駆使しての財テクにピリピリしていた仕事も忘れて、太陽をいっぱい浴びて、潮の香に包まれ、化学繊維ではなく、麻の腰巻きだけの自然に溶け込んだ生活。島には電気も、ガスも、第一、火というものがない。動物が火を使わないように、原始的生活に人間も野生に戻る。

梶原は気がつくともう半年もこの島で暮らしていた。あと三ヶ月の命と宣告されたのが嘘の

ように、体に痛みもだるさもない、健康そのものになった。

何日かして、オキーノ博士は、「そろそろ、日本に帰りませんか。多分、もう病巣はすっかり影を消していると思います」と、退院を促した。梶原はオキーノに、

「わたしはもう、原始人と同じです。とても、都会では生きてゆけない体にサイクルがなくなってしまいました。どうか、樂園追放することなく、ここにおいてくれませんか。せっかく貰った命です。これからはここで恩返しのために働きますよ」と、懇願した。梶原は文明を懼れるようになっていた。街へ行けばまた殺される。電磁波と汚染された食品と水と空気、すべてが毒のように思えてきた。

知恵の林檎を手にしてから、アダムとイブは羞恥を知り、服をまとい、火を使い、原罪をも抱いた。それが行き着く先が破壊と汚染と醜悪のソドムだった。

島に今日もアメリカから患者がカヌーでやってくる。

「ミセス・マヌー、イヤリングと指輪は外してください。ここは太古の国なのです。直立猿人にもなったつもりでお願いしますよ」オキーノ博士は高らかに笑った。

第72話 シシュフォスの街

仕事はなかった。ハローワークで紹介されたのは、道路工事の日雇いだ。それでも、それにありつければ恩の字だ。大学を卒業した生真面目は就職あぶれ組だ。文学部なんか出なければよかった。何の役にも立たない。

土木工事の下請けの土建屋で働くことになった。作業員の大半が中年以上の年寄りに近い。マイクロバスに乗せられて現場まで連れてゆかれる。ヘルメットと作業服は貸与された。水道管の点検ということで、歩道脇のコンクリを削岩機で起こしたあとを、スコップを使い手作業で掘るという作業に、生真面目も従事させられた。みんな、遠巻きにして、ただ見ているか、お喋りばかりしていた。働いているのは何人もいない。現場監督が指示を出して、図面を開いている。測量士が位置を確認、掘る範囲を測っていた。生真面目だけが、スコップで掘っていた。

「おい、新入りの若いの、いまから、そう励んだら続かねえぞ、マンマンデでやるんだよ」

ちびたタバコを加えた色の浅黒い貧相な男がにやにや笑って云った。

「学生さんかい」と、缶ジュースを呑みながら、別の作業員が訊いた。

「いいえ、就職がないので、遊んでばかりもいられませんから」生真面目は手を休めて汗を拭いた。ハンカチだった。

「おうおう、お上品なこって、汗なら腰に手ぬぐいだけ。まあ、汗をかくこともないがの」誰かがそう云って、みんなけたたましく笑った。

「どれ、そろそろ仕事にかかるかい」

朝の雑談が一時間をふいにした。みんな自堕落なのかと生真面目は思った。その分、ひとり発憤して黙々と生真面目は掘っていた。

「おいおい、少しゆっくりやらねえか、時間はたっぷりあるんだ。おめえだけ、せわしく働けば

、おれたちが怠けていると思われる。そう、目立った格好やめてくれよな、みんなと合わせるんだよ」仕事はしている振りだけでいい。長くこんな現場を渡り歩いてきた作業員のひとりが、生真面目に耳打ちした。

「でも、日没までここまでやれと監督さんから指示がありましたから」

「あんたは本当に生真面目だねえ、いい人だよ。こんな仕事、真面目にやってちゃ駄目よ。あんた、何にもまだ知らないんだからさ、とにかく時間稼ぎするの、時給いくらだから、だらだらやればそれだけ実入りがいいんだからさ」

ふくよかな体躯のおばさんもそう云って、生真面目を窘める。見ると、作業しているより、休んでいる方が多い。そんなものなのかなあ。生真面目はひどく腹ただしかった。みんな、こうして食べ物にしているから世の中よくなならないんだ。上は政治家から御輿にぶらさがるものが多く、このままでは日本は駄目になる。とまで考えていた。

生真面目にとって、じっとしている方が苦痛だった。仕事をしていた方が張り合いがあるのに、みんな何を考えているんだ。

お昼になった。弁当付きで、全員にマイクロバスから下ろした会社の弁当と缶のお茶が手渡される。その時間だけは遠足のように楽しかった。外で縁石に座って食べることもない。

「大変だねえ、いまの学生さんは、高卒でも三割以上も就職できんというとる」「わしらも、ここが終われば、あとは暫くないかもしれんで」

「公共工事も減ったしな」「土建屋も倒産するわ」「どこも大変だ」

そうして、夕方までで、予定より遅れているが、水道管が見えるところまで歩道を掘った。作業は終わり、またマイクロバスで会社へ戻った。

翌朝、現場監督は、その掘った穴を埋め戻すよう作業指示をした。生真面目は驚いた。小声で、仲間に訊いた。

「あのう、まだ水道管の点検もなにもしていませんよね、それでどうして、せっかく掘った穴を埋めるんですか」

痩せ黒の男はまたも声高に笑って、

「いいんだよ、云われたことをしていれば、いちいち不思議に思うなよ。予算が余ってやっただから」「予算？」訊けば、市の予算が余りそうになると、こうして駆け込みで仕事が入るといふ。業者もそこのところが判っているから、工事の振りをする。

「なあ、判ったか。真面目にやるこたあないんだよ」

予算が余れば削ればいい。税金を無駄にしている。それを食べ物にしている業者もいると思えば、仕事もしないでぶらぶらしている作業員。ますます、生真面目は世の中が判らなくなる。

掘るより埋める方が早いが決まっている。午前中には元通りにしてしまう。生真面目が足で踏み固めていると、みんな笑って、

「いいんだよ、固めなくても、やわらかい方がやりやすいんだから」と、意味が判らないことを云う。現場監督は、午後にまたやってきて、

「さあ、またここを掘るんだ」作業員たちは心得ているように、埋めた穴をまたスコップで掘り起こした。生真面目はものも云えずに立っていたが、むらむらとあまりの馬鹿らしさに怒りもこ

みあげてきた。

「監督、いい加減にしてください。同じ穴を掘ったり埋めたり、もっとやることはないんですか。もっと生産的な仕事が」生真面目はついに爆発した。

「なんだと、新入りが。文句があるなら辞めてもいいんだぜ、賃金貰いたいやつはいくらでもいるからな」監督も怒った。仲間が生真面目の手を引っ張って、監督に謝っていた。

「馬鹿だな、はいはいと云われたことをやってりゃいいんだよ。こんな仕事がないご時世にありがたいと思わんか」仲間にそう窘められた。

掘った穴をまた埋め戻す。そしてまた埋める。終わりのない仕事。倦怠感。ここはシベリアの流刑地だろうか。生真面目はドストエフスキーの小説を思い出していた。

「さあ、移動するぞ。穴掘りは飽きたろう。こんどは山を崩す作業だ」全員、マイクロバスで移動する。どうせ、崩した山をまた積むのだろう。今度は賽の河原の石積みか。バスの車窓から見る街の工事現場。生真面目は壊しては建て替えるビル工事にも、同じ思いで眺めていた。

第73話 ごく日常的な死体

FがK市に旅行に来たのは初めてであった。最近は地下鉄も開通する都会になっていた。美術館を見て歩くのが目的であった。街のいたるところに野外彫刻をさりげなく置いているあたりは、芸術の街といった感がある。

Fは人通りの多い歩道の脇で奇妙なモノを見てしまった。どう見ても人だった。始めは、人間が寝ているオブジェかと思っていた。近づくと、あまりにリアルすぎる。背広を着ている蒼白い顔をした男が、口から血を吐いてうつ伏せになっているのである。目は大きく見開いて、一点を睨んでいる。まるで本物のようだと、触ってみると、それはまさしく死体だった。

「し、死んでる」Fは仰天して、騒ぎ始めた。なのに、通行人は我関せずといったふうに通過ぎてゆく。都会はみんな冷たいものだ。関わりになりたくないのだな、と、Fはそっちの無関心さにも驚いた。急いで、近くの公衆電話ボックスに駆け込み、110番した。「警察ですか、し、死体があるんです。わたしは通りがかりのFといいます。第一発見者です。場所は...」

「判りました。そんなご用件でしたら、お近くの交番へどうぞ」冷たいもので一方的に切れてしまった。一体、どうなっているんだ。Fは相手にいたずらか何かと思われたことに、憤慨していた。

今度は、人に尋ねて近くの交番へ駆け込んだ。走ったので汗もかいた。息も切れた。

「あの、人が死んでいるんです。すぐ近くの美術館の前の歩道です」人のよさそうなんびりした警官が電話をしていた。

「まあ、そこにお掛けなさい」と、電話はどうでもいいお喋りで中々終らなかつた。Fは苛々して、椅子から立ったり、座ったりしていた。警官は笑ったりしていた。ようやく電話が終った。

「あのですね、死んでいるんです。死体がですよ」Fの声は荒くなった。

「まあまあ、落ち着いて、死体とはもともと死んでいるものです。お宅のお名前は？」

「そんなの、どうでもいいでしょう。さあ、早く行きましょう、殺人事件かもしれない」警官はちっとも立つ気配もみせない。いやに落ち着いている。

「それで、死体を捨てた人を見ましたか」「いいえ、歩いていたら、偶然発見したんです。それにしてもおかしいな、植え込みの中とか、みつきりにくい場所ではなかった。歩道の脇だから、大勢の人が見ているはずだ」Fはぶつぶつと口ごもる。

「困りましたな、いつも不法投棄です。ちゃんと決められている日があるのに」

「なんか云いましたか」Fは空耳かと思った。

「まあ、いまから車と係をやりますから」しびしび警官はどこかに電話しようとした。すると、電話がかかってきた。

「何、万引きだと、よし、いまから急行する。Hデパートですな」警官は血相変えて、帽子を取ると、外のミニパトカーに乗ろうとした。Fは信じられないといった顔をして叫んだ。

「死体と万引きとどっちが重大事件なんですか」

もういい、この街は狂っている。自分がなんとかしようと、Fはまた死体のある歩道まで戻った。すると、そこでもまた信じられない光景を見てしまった。通行人が死体を踏みつけて歩いているのである。中には、足でつかけて、転びそうになると、死体を足で蹴って、

「誰だ、こんなところに死体を捨てたのは」と、腹を立ててぷりぷりと行ってしまふ老人もいた。なんてことだ。Fはあまりの無関心さに、ついに激怒した。死体の傍に立つと、通行人に向かって大声で呼び掛けた。

「皆さん、これは死体ですよ、どうして見て見ぬ振りをするんですか。死んでいるんですよ、人間がですよ」誰もFの抗議に耳を傾けようとしない。頭がおかしい人ぐらいにしか思っていない。笑って通り過ぎる。

そのうち、ゴミ収集車が到着した。作業員が二名、死体を担いで、ゴミ車にぼいと投げ込んだ。見ると、他の死体もいくつかがあって、足や手が出ていた。

「まったく、今日はこれで十三体だよ」ぶつくさ作業員は文句を云っていた。

「ちょっと、それをどこに運ぶんですか」Fはぞっとしてゴミと同じく圧搾される死体を注視して云った。

「今日は死体の日でないんだ、頭にくるぜ、不法投棄ばかりで」作業員は舌打ちした。

「あなた、不法投棄じゃないでしょう。死体遺棄という立派な犯罪でしょうが」

「何をごちゃごちゃとさっきから云ってるんだ、こっちは忙しいんだ、まったく」

ゴミのトラックは血を滴らせながらどこぞへと走り去った。

Fが呆然と車の後を見送っていた。そんな馬鹿な。ありえないことだ。Fはみんなで自分を騙している、これは何かのテレビ番組だろうと、どこかに隠されているカメラを捜していた。すると、また死体を見つけた。今度はうら若き女性である。歩いてゆくと、その先にも老人の死体がひとつ、またその先にもひとつ。

「そうか、気にするから駄目なのだ」Fは思い直して、通行人と同じように、死体を踏みつけてゆく。

第74話 黄 砂

春先に中国大陸から季節風に乗って日本に降り注ぐ黄砂。今年は異常に多かった。車が毎日、火山灰でも浴びたように白くなる。春の残雪も黄ばんで見える。どことなく、日中の外の景色も黄味がかって見える。夕方のようなひどく懐かしい色合いはなんだろう。砂漠の砂が何千キロも旅して、空の色も変えてしまう。地球は面白いと喜んではいられない。連日、もの凄い量の黄砂が各地で観測されるにつれ、農作物への被害が深刻になってきた。森林や緑地への影響も懸念された。山は黄色というより白っぽく見えるようになった。太陽光が遮蔽されて、いよいよ作物は打撃を受け、米は皆無作に近くなった。川も海も濁り、魚や小動物の絶滅も囁かれた。

それでもどしどしと雪のように黄砂は降りてくる。街では商店の中もいつも埃っぽく、うっすらと商品に砂が積もる。毎日、掃除に追われていたが、追いつかない。道路も始めのうちは、清掃するトラックが出て、道路に水を撒き、ブルドーザーで砂を集めては、ダンプカーで谷に捨てにっていたが、それも間に合わなくなってきた。

夏というのに、人々はゴム長か、雪靴を履いていた。目にはゴーグルを付け、防塵マスクは外出用に欠かせないものとなっていた。車が走るたびに砂埃がひどかった。風の吹く日は外を歩けないくらいの砂嵐になる。歩道でも三十センチの砂が積もっていた。店の前だけを掃くぐらいで、もう砂の捨て場がない。雪なら解けることもあるが、砂はどんどんその堆積を増やしてゆく。海も川も砂で白くなり、魚の死骸が浮いていた。野菜も果物も全滅だった。山も木は枯れ、みるみるうちに緑がなくなっていった。いつもどんよりと曇っているような天気で、気温も下がっていた。時折、白い太陽が見え隠れするが、人々は、燃える太陽と青空を拝むこともなくなった。

海外へ移住する者、餓死する者、人々は食糧を買い溜め、家の中でじっと耐えていた。砂は家の中まで容赦なく入り込むから、どこの家でも隙間という隙間に目張りして侵入を防いでいた。黄砂量がテレビのニュースで毎日報道されていた。天気予報のように当たり前になってきていた。

「東京、八十センチ、名古屋七十五センチ、新潟、一メートル三十センチ...」

始めのうちは道路確保のために、除雪車が入っていたが、もの凄い量の砂の持ってゆく場所がなくなり、ついには行政側は排砂を断念した。そして、車は各地で立ち往生、ついには走る車は一台もなくなった。緊急車両は雪山で走るラッセル車か、スノーモービルだったが、砂を吸い込み、まもなく使い物にならなくなる。砂は各地で二メートルを越えた。重みで押しつぶされる家も出始めた。電気は止まり、水道も出なくなった。電話も使えない。車も動かなければ、列車、飛行機は無論のこと動かない。すべての経済、交通は停止したままだった。逃げ遅れた人々は、家の中で誰もが孤立無援の状態だった。外には出れない。歩くことも困難だった。家に閉じこめられたまま、水も食糧もなく、次々に死に絶えていった。

街はすでに蠢くものの影もない。鳥も飛ばねば、昆虫の姿さえも目にすることがなかった。植物は生態が変わり、草の一群も見つけれない。

日本は砂漠になった。国道も高速道路も堆く積もった砂で見えない。二階建ての家屋はようやく屋根が見える程度だった。ビルの三階から上が砂の上に頭を出している。工場もデパートも廃墟になって、砂漠の中に建っていた。

「おおい、誰か生きているかあ」

ハンドマイクで呼びかけながら、駱駝の搜索隊がぞろぞろと隊列を組んでやってきた。

「ここも全滅か。物音ひとつしない。よし、次の街まで出発だ」

搜索隊は赤十字のマークをつけて、砂の下に閉じこめられている住民を救出していたが、ところによっては、五メートルも砂を掘ることは不可能だった。

かつて、ここに街があった。中国の奥地にあった都のように、いつか発掘される日を無言で待っている、都市の墓場だった。

第75話 バスの乗客

富士山の樹海巡りのツアーバスは東京から東名高速を走っていた。五十人乗りのバスに乗客は半分にも満たない。中年男性客が多く、みんな暗く何か思い詰めたような顔をしていた。ツアコンは添乗していなかった。乗客はみんな初めて顔を合わせる他人同士だったが、インターネットで互いに連絡を取り合って、この旅行を企画していた。バスガイドが富士山について、いろいろと歌を交えて文学的に解説していたが、誰も聞いていない様子だった。時折、涙ぐむ者もいて、何か様子がおかしい。バスの乗客には発車寸前に飛び入りで参加した男子高校生が一人いた。夏休みにはまだ早い、平日に学校をサボって旅行とはそれもまたおかしな乗客だった。

御殿場近くになって、いきなり高校生はバスガイドの後ろに回ると、隠し持っていた刺身庖丁をガイドに突きつけて、

「みんな、おとなしくしろ」と、大声を出したが、乗客は始めからおとなしい。「いいか、このバスはぼくが乗っ取った。騒ぐとバスガイドを殺す」

誰も騒がないし、終始沈黙していた。運転手は全部のバスに装備されている、バスジャック用の警報ボタンを押した。バスの後方の警報ランプが点灯して、このバスはバスジャックされたと、後方の車に異常を知らせた。同時に、警察へ通報が入る仕掛けになっていた。

みんな少年を無視して、本を読んでいたたり、あらぬ方を見ていたりするので、少年は切れた。かなり興奮していた。

「おまえは殺されたいのか」と、前列の男に庖丁をつきつけた。男は落ち着いて、「ええ、殺してくれたらありがたい」と、首を出して、ここをひと思いに刺してくれとばかり差し出す。少年は少しひるんだ。隣の席の男に今度は庖丁を向ける。

「おまえも殺されたいのか、本当に刺すぞ」

隣の男も冷静で、「どうぞ、やってください」と、神妙だ。

「な、何なんだ、おまえたちは、みんな殺されたいのか」少年は金切り声を上げた。

「ぼうや、おじさんたちは全員、会社を倒産間近まで追い込んだ社長の集まりなんだ。これから

、全員で富士山の樹海に入り込んで、自殺するツアーなんだ。みんな死にたいんだよ。殺してくれたらありがたいんだ。なあ、みんな」全員、頷いた。バスガイドは初めて合点したように云った。

「どうりで、おかしなツアーだと思いました。樹海の入口までの片道だし、軽装だし、宿の手配もしていないし、何か怪しいとは思っていたのよ」

「みんな、インターネットのチャットで知り合った。一人で死ぬより集団のほうが心強いからね。ところで、ぼうやはどうして、このバスを乗っ取ろうとしたんだい」乗客の一人が訊いた。

「その、ぼうやってのはやめてくれよ。ぼくの親父は、この大東京交通の会長をしているんだ」とすると、後ろの席から溜息が聞こえた。「このバス会社だけではなく、デパートから鉄道までいくつもの会社を営んでいる棟方コンツェルンの御曹司だと」「そうだ、親父はあまりにも事業にばかりのめりこんで、家族は捨てたも同然、おふくろまで外に出して、二号を後妻に貰うやつなんだ。ぼくはそんな親父を絶対に許せない。資産は何百億もあるくせに、ケチで息子には小遣いも少ない。このバスを乗っ取って、五十億円を要求する」

「五十億か」全員、固唾を呑んだ。「そんな、馬鹿息子のために五十億も出すかな」「いや、五十億なんか端金だろう。息子よりも社会的信用のために出すだろう」ひそひそと乗客同士話している。

と、バスは高速からサービスエリアへと入った。というのも、高速は封鎖されていた。案の定、通報からバスの発信器を追跡して突き止められた。サービスエリアはパトカーと機動隊のバスで埋まっていた。報道陣の車やテレビカメラも見えた。上空ではヘリコプターが旋回している。ものものしい状況に少年は態度を硬化させ、震える声で乗客に指示を出した。

「窓のカーテンを閉めろ。みんな後ろの席に移れ」そして、自らも持ってきた目出し帽を被った。バスは駐車場の真ん中で停車した。

後ろの席で何やら乗客同士、相談しているふうであった。少年は外も気になる、後ろも気になる。苛々して、また切れかかる。

「何をこそこそ話しているんだ。これから、要求をする。もし、時間通り、運ばなければ、一人づつ刺し殺す」少年は声も震えている。ようやく、乗客の話は終わったとみえ、みんなが無表情な顔をして、前にやってくる。少年はガイドを楯にしながら、少し退いた。

「近寄るな、本当に刺すからな」咄嗟に二三人で飛びかかって、少年を押し倒し、庖丁を奪い取った。少年はあっさりと大人たちに取り押さえられてしまった。

「ありがとうございます。助かりました」バスガイドが涙を抑えながら、ドアから出ようとすると、乗客が手を引いて戻した。

「おっと、待ちな、お礼を云うのは早いぜ。いまからは、おれたちがこのバスをのっとる」テレビ中継に国民の目が釘付けになっていた。

「犯人はどうやら、バスの乗客全員のようなです。二十人はいると思われま。棟方コンツェルンのご子息とバスガイド、運転手を人質にし、大型ヘリと、約二十の銀行口座に合計五十億の振込金額をケイタイのメールで要求してきました。その振込先はいずれも中小企業で、資金に行き詰まり、今日が手形の決済日になっているということです、それぞれの社長はいずれも所在不明

ということで、警察はこの事件との関連を調べております...」

第76話 如不学

教科書のない高校があるというので、わたしは取材のため、東北の山奥まででかけて行った。バスも二度乗り換えて、温泉街を過ぎて溪流伝いに遡ったところに村があった。全寮制の高校で生徒が三百人はいるという。全国から入学希望が増えている高校だった。一応、私学になっていて、小学、中学と附属を持っている一環教育をしている。全校では千人を超える。村の人口の半分を占めている。大正時代の廃校をそのまま利用したということで、なかなか懐かしさがあった。周囲は山と畑、田圃に囲まれて自然環境はいい。校庭で数人の生徒に逢ったが、みんな「こんにちわ」と、ちゃんと明るく挨拶して気持ちがいい。都会の高校とはえらく違う。茶髪にしている者はひとりもない。門に『エミール高等学校』とある。

わたしは校長室に通された。とは云っても、職員室の隅を仕切っただけのことだ。六十過ぎくらいの方と聞いていたが、五十くらいに見えた。顎髭が山男のような、頑強な体格とマッチしている。名刺を差し出す。

「どうぞ、おかけください。月刊エスキース、ですか。お茶でもいかがですか」と、校長は自分で入れ始める。

「ここではお茶汲みは自分でやります。自分のことは自分でやらせております。どうです、おいしいでしょう。自然栽培のここで採れたお茶です」

物腰のやわらかそうで、それでいて強靱な信念に一本支えられている、そんな人柄だった。

「さっそくですが、ここではどうして教科書を使わないんですか」

「最近、教科書問題が起こっていますね。教育はいくらでも過ちを教えることもできる。それは作り手と行政の責任です。ここには図書館も、第一、本というものが全くありません」

「ええっ、どうしてですか、辞典なんかもないのですか」

「学問も高ずれば弊害があります。本を沢山読んで、さも自分が何でも知っているが高邁になりやすいのが人間です。本なんか読まない人でもいい人は沢山います。学問を積んで学歴だけ高く、人一倍勉強した人にこそ、人の悪い方がいるのを、わたしはこの目で見てきました。錯覚するんですね、知識は確かに人間にとって最低必要なものはありまじょうが、余分なものもありすぎる。それが人間を悪くしています。孔子は学ぶに如かずと云いましたが、ここでは学ばざるに如かずです」

校長は学園内を案内してくれた。教室はあっても教室にいないクラスが多い。「うちはフィールドワークが多いので、野外学習ですね、外にいることが多いのです」

二階の窓から、畑仕事をしているクラスが見受けられた。校庭で本格的な家を一軒建てているクラスもある。教室といっても作業室のようにいろんな機材が置かれている。織物をしている教室、手漉き和紙を作っている教室、料理実習の教室もある。男女共学で、男だから女だからと分け隔てた教育はしていないという。男にも料理、裁縫をやらせ、女にも大工仕事や畝造りのよ

うな土木作業をさせている。

「英語や漢字は教えないんですか。社会に出ても必要だと思うんですが」

わたしはカメラのシャッターを切り、メモと録音テープと忙しかった。

「そんなことは中学までで教えてしまいます。うちでは試験も宿題もありません。大学へ進学するために入ってくる生徒はひとりもおりません。仮にうちの生徒が、その辺の誰でも入れそうな大学を受験したとしても落ちるでしょうな。受験のための学問は一切教えておりませんから。まして、一流会社へ就職も無理なのです。試験でみんな落ちます。この社会の価値観からは、ずれておりますな」

「それでは、この子供たちの将来はどうなるんでしょう」

校長は大声で笑って、

「心配なさるな、ここの生徒たちの知能指数は高いんですぞ、一般の高校へ行った生徒と比べてもらえば判ります。応用と機転が利きます。常識はより以上に教えてあります。仕事、家の手伝い、社会的ボランティア、いろいろやらせてみるとその差は歴然としてきます。他の学校で英語の文法や数学の方程式を学んでいる間、うちでは、じゃがいもの皮むき、掃除の仕方、挨拶の仕方、道徳と教えております。どうですか、お宅の会社でも、人間は頭の善し悪しではなく、性格だと思いませんか。思いやり、やさしさ、強さ、それに人間が無人島でひとりになっても生きてゆける知恵です。いまの教育は人間にとっての最も大切な部分を教えておりません。酷い話が、缶切りも使えない大学生、庖丁を握ったことのない主婦というのもいるそうじゃないですか。お茶をおいしく飲むための入れ方を教えている高校はうちぐらいのものです」そう云って、校長は巨体を揺らせてまた笑う。

わたしは自分のことを云われたように萎縮していた。実際、二十五にもなって、リンゴの皮も剥けない。よく上司から、手紙の書き方も知らないのかと罵倒されたりした。そんなことは高校でも大学でも教えない。化学方程式なんか暗記しても仕事で役に立ったこともない。不必要なことを一生懸命、受験勉強してきた。ここの生徒はすぐにでも実践に移せるという。ここでは隔離しての純粹培養でもない。社会の仕組みの裏も教える。サラ金地獄という授業もある。外に出て待っている罫に嵌らないことも教えている。教師は教員免許もない、大工の棟梁、農業従事者とか、本職がついていた。ギリシャ・ローマ時代にはみんなそうであった。町が学校だった。

「門前の小僧ということもありますからな」

帰りに校長は校門まで送った。お土産だと、生徒が栽培した縄文米をくれた。校庭を走る生徒たちの掛け声が聞こえる。ここの部活は競技に参加しない。勝ち負けのためにはやらない。体と精神を鍛えるためにスポーツはあると徹底している。腐敗している日本にもこんなところがある。わたしは少し安心した。まだまだ見捨てたものではないと。土の匂いのする学校か。何度も振り返ってシャッターを切った。

いつからだろうか、家族は家族の顔をして家族ではなくなっていた。

大西久人は一回りの年下の若い女房を貰ったから、趣味も話も合わない。五十になっても小学生の子供がいるから、時折、孫と間違われたりする。女房はまた年の割に若く見え、連れて歩くと娘に間違われる。

まだ子供たちが小さいうちは、「おおい、ドライブに行くぞ」と、云ったら、悦んでついてきたものが、上の娘が中学に入る頃から様子が違ってきた。結婚はお互いの利害関係ができるだけ一致するところで一緒になればいいと、何かの本に書いてあったのは本当だと、結婚して十五年になる久人は最近になってそう思うようになった。

女房の美香はこれといった趣味はないが、インターネットの通販で購入する化粧品か、健康おたく向きのショッピングが趣味といえば趣味。休日はデパート、郊外の専門店巡りと決まっていた。久人は、自然派だから、たまの休みには海だ、山だとアウトドアに誘う。最近になって、女房の真似をして、中学三年の娘まで外に出ると日焼けするからと仰言る。小学六年の息子は次々に買ってくるゲームに余念がない。日曜でも部活だと、娘はいつも一緒には行動できない。

そんなバラバラな家族にも、ようやく全員が休みの日曜日がやってきた。久人は、土曜日の夕食時にみんなに提案する。

「そう、明日の日曜だが、どうだろう、花見に行かないか」

「パパ、花見は駄目だよ。今年は桜が早くて、公園はみんな散ってしまったって」小学六年がテレビを見ながらしらけて云う。

「そんなことはないだろう。八重桜は遅いし、まだ花も残っているだろう。パパが子供のときは家族全員どころか、親戚も一緒になってだな、重箱にお弁当詰めて、大人は酒、子供はラムネ、シャコなんか茹でて持っていったもんだ」

「うっ、ダセえ、お花見だって。ママ、重箱って何よ」娘は笑うこと。

「タッパーみたいな、塗り物の容器だわね。パパ、それより、ショッピングセンターで春もののセールやっているから、そっちへ行きましょうよ」

美香は買い物を主張する。

「そんなの、いつでも行けるだろう。花は今しかないんだ。また来年まで見れないんだし」久人も譲らない。

「わたしは、映画に友達と行こうかな、いま、いいの来ているのよ、割引券もあるしね」と、娘。

「ぼくは、家にいるよ。ゲームやっていた方が楽しいもん」意見が完全に分かれた。久人はじっと考え込んでいたが、急に、大きな声で、

「いい、明日はお父さんは一人で花見に行く。おまえたちは勝手に好きなことをやりなさい。その代わりにもう二度と家族では何処へも行かん」

とうとう、久人はへそを曲げてしまった。

こうなったら意地でも花見だと、久人は敷物と酒と弁当をコンビニから買って、電車で一時間の、桜で有名なお城まで出かけていった。久人が子供のときは毎年、そのお城公園まで来るのが楽しみだった。露店がずらりと並んでいる。ただ、ぼちぼち店仕舞いを始めていた。息子の云

う通り、確かに桜は終わり、路上がピンクの絨毯になっていた。観光客もまばらで、花の下での宴も少ない。場所取りに苦労するものが、がらがらだった。ゴミだけが山盛りになっていて、まさにゴミの花盛り。すっかりと葉桜だった。どこでもよかったが、なるべく集団から離れていようと、久人は適当な木の下に敷物を敷いて陣取った。

弁当を広げる。重箱ではない。哀しいかなコンビニ弁当だ。バナナも一本だけつけた。子供時代にバナナはご馳走だった。花見には欠かせない。それとシャコと毛蟹の茹でたのも、一人分だけ買って来た。ゆで卵も付き物だ。缶ビールに日本酒の小瓶で足りる。さあ、役者が揃ったところで華やかな宴会だ。

子供が大きくなったら、お父さんと遊んでくれない。寂しい限りだ。久人は酔うにつれ、独り言を云い始めた。昔はよかった。二十人くらい、親戚が車座になって、踊ったり歌ったり、楽しかった。わたしら子供は露店で玩具を買って貰うのが楽しみだった。大家族だったから、狭い家に沢山家族がいたな。六畳間に五人も寝ていた。いまじゃ、贅沢で子供部屋もひとり一部屋だ。核家族になってからは、みんな自分の城に閉じこもる。そんな子供たちが大きくなったらどうなる。人と一緒にやってゆくのが苦手になる。修学旅行を廃止する高校も増えたと聞く。みんな旅行もなくなった。会社じゃ、社員旅行に参加しない若い社員が増えた。宴会も嫌い。どうして、時間外にまで上司の機嫌として、お酌しなけりゃいけないのよ、ときたもんだ。家庭から会社までみんな個人主義という名のエゴがまかり通っている。

「なあ、そうだろう。何か間違っていないか」久人は掃除に来ていた公園の管理人に抱きついて泣いた。

「あんた、泣き上戸かい。だいぶ、呑んだんだろう。まあ、世の中いろいろあらあな。何があったか知らないが、お父さん一人で寂しいのう」

久人は号泣していた。人生、花のときは過ぎた。これからは葉桜の人生。枯れて散るまでせいぜい陽の光を浴びていたらいい。

久人は酔って帰り支度を始めた。

「菜の花畑に入り日薄れ…」ふらふら歩きながら歌も出る。

「てやんでえ、家族なんかくそくらえ。おれは一年一年生きた実感を花で確かめたかっただけじゃねえか。季節とはそんなもんだ、ばかやろう」

帰りの電車で大鼾で眠る久人。父とは永遠に悲壮な生き物だった。

第78話 アパルトヘイト

コツコツと都会の夜に靴音が響く。警官の夜警がオフィス街を見回っていた。懐中電灯を点け、携帯電話で連絡を取り合っていた。二人の警官が、ビルの隙間に何か黒いものの影をみつけた。異様な匂いを感じ取ると、そのビルの隙間を懐中電灯で照らした。

「誰だ、そこにいるのは」二つの影は驚いて逃げようとするが、袋の鼠だった。何かを慌てて揉み消していた。警官は二人の男を取り押さえた。

「むっ、この匂いは、おまえたち、タバコを吸っていたな、現行犯逮捕する」二人の男は証拠の吸い殻を拾われ、手錠をかけられて署に連行された。東京都二十三区では外でタバコを吸うと罰金もしくは懲役刑が科せられていた。二人の男は酔っぱらいで、隠れてタバコを吸っているところをみつけたのだ。

ヘビースモーカーの緒方は、業界の懇親会の円卓に座っていて、もじもじしていた。酒が注がれた。灰皿があるから吸ってもいいのだろうが、誰も吸っていない。手持ちぶたさで落ち着かない。すると、向かいに座っていた若い経営者が、

「あのう、タバコ吸っていいですか」と、みんなの顔色を窺って遠慮がちに云った。「どうぞ、どうぞ」と、待っていたとばかり緒方もタバコを取り出した。すると、円卓についていた八人全員が、ポケットからタバコを取り出して、ほっとした顔で喫煙しだした。

「いやあ、よかった。みさなん、喫煙者なんですね。それも隠れ喫煙者。日々、迫害を受けてお互い大変ですな」隣の社長がうまそうにタバコをくゆらした。

「本当に、世間のみなさんは禁煙者が増えました。回りを見ても吸う人は一割もいない。すっかり少数派で、肩身が狭い」

「わたしなんか、隠れてこそ吸ってまして、まるで高校生のときに隠れて吸っていたときと同じです」

「今じゃ、禁煙の場所が増えて、車両も分けられ、ホテルも、トイレまで喫煙者用となると汚いところと、あちこちで差別される始末」

「出世の妨げにもなるそうで、喫煙を辞められない意志薄弱なのは、経営者としても失格だと云いながら、こうして、喫んでいますね」

他のテーブルの人々がちらちらと緒方たちのテーブルを、軽蔑したように見ていた。露骨に「いやあね」と聞こえよがしに云う御婦人もいた。ここまできると、単に嫌煙というだけではなく、人間以下の取り扱いだ。

「みなさん、こうして、同じテーブルに偶然、喫煙者が集まったというのも、何かの縁だと思えますので、二次会にどうでしょう、みなさんで喫煙クラブに行きませんか」

「喫煙クラブ？ ほう、そんなのがあるんですか」

懇親会が終わると、八人の喫煙者はぞろぞろと提案者についていった。ビルの路地をくねくねと裏通りのさらに裏通りの、怪しげなビルの地下にその秘密クラブはあった。

「ここは、会員制ですが、会員がひとりでもいれば全員入れます。さあ、思う存分喫んでください」

ドアを開けると、もう視界一メートルではないかと思うほどの煙。さすがのヘビースモーカーもむせた。日頃の差別された鬱憤をここで晴らすとばかり、口に四本、鼻穴に二本、耳にまでタバコを突っ込んで、吸いまくっていた。酒とタバコとジャズと、みんなわいわい騒いでいる。中には感激して泣き出す者もいた。ようやく、知己と出逢った。同病相憐れむ連中がタバコの話で慰め合い、発憤していた。子供たちに石まで投げられた者の話に同情する者もいて、盛り上がっていた。

「おれは一日五十本」「いや、負けました。わたしでもせいぜい四十本ですわ」自慢話も入る。一日二百本吸った記録を持っているとか、すっかりニコチン中毒の集まりだった。肺の中はター

ルで真っ黒なのだ。毎年、会員の数名が、肺癌で亡くなる。懲りもせず、仲間が霊前に線香の代わりにタバコを上げて、追悼喫煙会をやり、寺の本堂が煙でもくもくになるという。

喫煙マニアは手巻きでタバコを作る。自分で葉もブレンドして、自分だけの味を出す。そんな手巻きの器具まである。世界各国のタバコをわざわざ買ってきて、パッケージをコレクターする者もいる。愛煙家は留まるところを知らない。

棟方は酔うと愛人の美佐子に逢いたくなってくる。電話して、「これから少し寄るから」と、マンションに連絡を入れた。

美佐子は三十代半ばのオールドミスだが、なかなかの美貌の持ち主。棟方の会社の秘書をやっていた。親子ほど年が違うが、女房より親身になってくれる。思いやりがある女だった。家ではタバコを吸えないが、美佐子のところでは吸える。女房は極端にタバコ嫌い。いつも庭に出て吸っていた。

「おまえだけだよ、わたしのことを理解してくれるのは」と、ブランデー片手に愛撫する。

「そろそろ、お帰りあそばせ、奥様が時計を見ている頃だわ」棟方は重い腰をあげた。

家に戻ると居間に灯りが点いている。女房の怖い顔がちらついた。

「嫌なやつだ。嫉妬ぶかいのは一生ものだ」

案の定、女房は鬼のように椅子に座っていた。完全に疑っているのだ。うすうす愛人がいるのも感じている。

「二次会まで行って、遅くなってね」「嘘、さきほど、その二次会でご一緒だったという方から電話が入りました。明日のご予定のことですね。二時間前に帰ったって。その間、あなた、どこへ行ってらしたの？」女房に詰め寄られ、棟方はしどろもどろ。徐にタバコを取り出すと吸い始めた。

「あなた、止めてよ、臭いわ」すばすば吸って女の匂いを消さなくては。棟方、そうして女房を煙にまく。

第79話 ロマンチストたち

顔中、髭だらけの青年、あだ名がキリストといった。目はいつもきらきらと輝いていて純粋な心を照らしていた。情熱家でもあった彼は近頃、異性のことで悩んでいた。どうしても好きでたまらない相手がいたが、どうも、女性とは口の利き方も知らないほどの純情家だ。男前でもてるのだが、いまいち退いてしまう及び腰で、恋人もできずに三十になっていた。

キリストの無二の親友で、会社の先輩の白戸は、最近、どうもキリストの様子がおかしいので退社後にカフェに誘って話を聞くことにした。

「なんか、大丈夫か。仕事中にじっと空を凝視めていたり、涙ぐんだりして、最近おかしいぞ。恋でもしたか」凶星だったので、キリストは赤面した。

「そうか、相手は誰だい。おれの知っている人か」キリストは首を横に振る。

聞けば、まだ手を握るところか話もしていないという片思いだった。相手は取引先の企画をやっている姫野緑といった。

「なんだ、あの姫野工業のお嬢ではないか。父上の会社にいるわけだ。悪いが彼女だけはよした方がいい。相手が格が上過ぎる。君は東北の水呑み百姓の三男坊だ。向こうは二部上場会社のお姫様だ。で、脈はありそうなのか」

口も利いていないが、仕事でうち合わせにキリストがよく、姫野工業を訪問するが、そのたびに、じっと相手はキリストの顔を見ているという。

「それは君の考えすぎではないのか。君の髭にみとれていたぐらいだろう」

白戸がげげだと馬鹿にしたように笑うと、キリストますます落ち込んで、酒を乱暴に呑みはじめた。

「判った。お主の真剣な気持ちは。拙者が手助けしようではないか。これは手抜かりなく、相手を射落とすための作戦を練らねばならんな」

白戸は詩人でもあった。同人に所属して長く書いてきた。恋文とは現代では古いが、書かせればお手のものだった。凶面引きの理科系のキリストにとって、文章は口べたよりもっと駄目。とても歯の浮いたような台詞も言葉も出てこない。「まずは、頻繁に相手と口を利く機会を設けることだな」

キリストは云われるままに、打ち合わせに行ったとき、緑さんにできるだけ声をかけるように心がけた。

「あのう、すみません、ト、トイレはどこですか」「いい天気ですね」相手はくすくすと笑うだけ。

「次はラブレターだ。おれが代筆してやる。変すい変すい緑さんとな」

白戸は美辞麗句を並べ立て、美文調で多少やりすぎた。もっとあっさりとするおな気持ちを伝えればよかったものを、レトリックを駆使し、読む方に不快感まで与えるようなラブレターであった。第一、今時、そんな古風な文体もあるまいに。それでも白戸は自画自賛、自分の文章に惚れ込んでいた。

そのラブレターを投函してから、急に緑さんの態度が悪くなったとキリストはしょげていた。挨拶しても口も利かないという。

「そうか、次は電話攻勢と行こうか。手紙は古かったかもしれんな。さあ、会社に電話して、一回デイトをしろ」

「そんな、いきなりデイトなんか...」

「世はスピード時代なんだ。最近の若いのは、いきなりホテルというではないか。わたらの時代はA B C D段階で、どこまで行ったとか、訊いたものだが、いまはいきなりDから始まる。ストレートの方がいいかもしれん」

キリストは白戸に背中を押されるようにして、電話した。相手がすぐに出たからキリストは周章てた。

「あの、あの、大東設計のキリスト、いや、栗須です。そのお、なんというか...」側で苛々して、白戸が小声で台詞をキリストの耳元で囁く。

「一目逢ったそのときから」「一目逢ったそのときから」

「ぼくは君のことが忘れられない」「ぼ、ぼくはき、君のことを忘れられない」

「ぼくと逢ってください。ぼくの暗い心を君の太陽で照らしてほしい」

「ぼくと逢ってください。君はぼくの太陽だ」

「違う、馬鹿、ぼくの暗い心をだ」「違う、馬鹿、ぼくの暗い心をだ」

「そのまま云うな」「そのまま云うな、あっ、切れた。先輩、電話切れました」「駄目だ、こりゃ」電話攻勢は失敗した。それでは直接、本人の自宅を訪ねて、思いを訴えることにした。

キリストと白戸は夜陰に紛れて塀を乗り越えていた。姫野家は豪邸だった。庭も広く、洒落た洋館の造りに出窓。ちらりと緑さんの姿が窓ガラスに見えた。ピンクのカーテンが引かれてある部屋がそうらしい。キリストは花束まで持ってきた。これも古いやり方だ。すべてが古風なのは、指南役が古典文学ばかり読んでいる白戸だからだ。二人は打ち合わせ通りに、草むらの陰から白戸が台詞を教える。その通りにキリストが云うだけだ。何回もリハーサルをしたから、今度はとちることもないだろう。BGM用のラジカセにセレナーデの音楽まで用意してきている徹底ぶり。それも古い。キリストは、緑さんの窓に向けて、キャンデーを投げた。ガラス窓にコツンと当たる。二度目に、カーテンが開いた。窓が開いて、緑さんが顔を出す。

「いまだ」と、白戸が合図する。音楽がかかる。窓の下にすくりとキリストは花束を捧げるようにして立ち上がった。

「キャー、誰か来て、変なのが庭にいる。ストーカーよ」もの凄い叫び声が夜に響いた。一瞬、何が起こったのか、二人とも判らなかった。バタバタと使用人が駆けつける。通報が入り、パトカーも急行した。哀れ、二人は塀を乗り越えようと、逃げる途中で御用となった。

恋はときに狂気と間違われる。求愛も犯罪とすれすれのところで、結婚と牢獄に振り分けられる。

第80話 誰が一番偉いのか

聡美さんと裕樹くんたちは小学校の課外授業で、テーマに基づいてインタビューをすることになりました。テーマは「誰が一番偉いのか」というのが与えられました。

さて、大変、大きな問題なので、みんな困ってしまいます。みんなで話し合いました。誰かが、「一番偉いのは天皇だってうちのじいちゃんが云っていたよ」と、云うから先生に、「天皇さんに逢うにはどうしたらいいんですか」と、訊きました。先生は笑いながら、「難しい相手だから、無理かもしれないが、宮内庁というところに行ってください」と、教えてくれました。聡美さんたちはさっそく、宮内庁という役所に行きました。厳重なところで、なかなか難しい感じがしました。天皇さんには逢えませんが、代わりに優しそうなおじいさんが相手をしてくれました。

「ううん、難しい問題ですな、天皇陛下はわれわれ国民の象徴と学校で習いませんでしたかな。そういう意味では上に立つとかそんな立場ではないのです。むしろ、国民の代表として偉いといえば、総理大臣かもしれません」

「ソウリダイジン…」何処に行けば、その人にインタビューできるのか、訊いたら、おじいさんは電話をしてくれました。云われたとおりに地図を持って、首相官邸に行きました。

「総理大臣さんに逢いたいんですが」と、そろそろと門のところで待っていると、秘書という人が出てきました。

「総理はいま、忙しく外出しているので、わたしが代わりに応えましょう。総理の考えていることと同じ答えを知っていますから、安心なさい」

「総理大臣が一番偉いんですか」裕樹くんは訊きました。

「人間はみな平等だと習いませんでしたか、福沢諭吉という人も天は人の上に人を作らずと云いました」

「でも、運動会で一等を取る人が偉くないんですか。通信簿で二重丸ばかり取ったり、テストで百点取ったり。なんのためにしているんですか」聡美さんは世の中には強い人と弱い人、できる人とできない人、お金持ちと貧乏な人、やはり偉いという人がいるんだと主張しました。

「そういう社会ですから仕方ありませんね。それでは、働いている人が一番偉いと云いましょう。働いて、税金を納め、そのお金で道路を造ったり、学校を建てたり、困った人たちを助けることができますからね」

次に、聡美さんたちが訪問したのは会社でした。働いている人が沢山いる中で一番偉いのは社長さんだということになりました。

「社長さんに逢いたいんですけど」大きなビルの受付で尋ねました。受付のきれいなお姉さんが社長室というところまで、エレベーターで案内してくれました。すごい立派な部屋に通されました。椅子も机も立派でした。応接室で緊張して座っていると、みんなにジュースとお菓子が出ました。

「すごいねえ、校長先生の部屋より立派だし、広いものね、きっと、社長さんが一番偉いんだ」
「わたしが社長です」と、恰幅のいい偉そうな人がソファに座りました。さっそく質問です。す

ると、社長さんも困った顔をしていましたが、

「そうですね、わたしより、ここで働いている社員の方が偉いかな、働くから会社にお金が入る。それでわたしもこんな服を着てられるんですから」

そうかもしれないと、みんな思いました。そこで、営業部というところに案内されました。電話が次々にかかってきて、みんなパソコンを叩いたりして、忙しく働いていました。そこにいるだけで目が回るようです。一人の営業マンがインタビューの相手をしてくれました。

「偉い人は、それはお客様です。うちの商品を買ってくれるから、うちの会社もありますし、わたしもお給料を貰えますから」

今度は、一階のショールームに案内されました。そこにお客様という人がおりました。

「すみません、一番偉いのはあなたですか」と、おじさんに訊くと、

「偉いって云われても困っちゃうなあ」と、おじさんは照れていて、みんな大笑いしました。おじさんは云いました。

「おれより、偉い人がいるよ。それはだな、うちの家内ちゃんだ」

聡美さんたちはおじさんの家を訊いて、それからまたぞろぞろと、お家の方に行きました。家は普通の一軒家です。玄関でベルを押すと、犬が吠えて、みんな恐がりました。お母さんみたいな人が出てきました。

「おばさんが、一番偉いって訊いてきたんですが」すると、おばさんも困った顔をしています。しばらく考えていましたが、

「そうねえ、わたしは毎日買い物に行っつくづく思うんだけどね、野菜やお米を作るお百姓さんが一番偉いんじゃないかしら。食べるものを毎日せっせと育ててくれるから、わたしたちはおいしい御飯も果物もたべられるんじゃない」

「そうか、一番偉いのはお百姓さんなんだ」

みんなへとへとに疲れて学校へ戻りました。今日はよく歩きました。

「先生、判りました。一番偉い人はお百姓さんだったのです」

先生も満足そうでした。

「みんなにおいしいものを用意したぞ」と、おにぎりをご馳走してくれました。「うわあ、おいしいね、お腹が空いたからね。こんなおいしいものを食べられるんだから、感謝しなくてはね」

でも、先生の答えの欄には「自分自身」と書いてありました。みんな、自分が一番偉いと思っているのです。その答えをみつけるには、みんながもっと狡い大人になるまで待たねばなりませんでした。

第81話 ある自殺

わたしが死ねばすべてが闇の中だ。死人に口なし。遺書もしたためないで、自殺しようと、いままさにビルの屋上から死のダイブをしたばかりだった。足が屋上のへりを離れて、体が空に舞ったとき、わたしは取り返しのつかないことをしてしまったと落下する自分を離れた位置で見て

いる自分を見た。もうひとりの自分がいる。

あの日、あいつさえ、来なかったら、すべてがうまく行っていたのに。あいつ、それは突然、わたしが教職に就いている中学校に訪れた。レクリエーション担当の先生はおりませんかと、放課後に訪ねてきた、痩せ型で白髪混じりの鋭い眼光の持ち主は、とても直視できない危険をはらんでいた。わたしが係りとして対応した。何か嫌な予感がした。名刺を交換した。オンブズマンの肩書き。何かを探りに来たのは判っている。

「突然お邪魔しまして、実は、修学旅行について、少々調べていたものですから。あるわたしの友人で大手の旅行会社にいるやつが、修学旅行が一番儲かると、口を滑らせてましてね、それで関心を持って調べて行くうちに、あなたの名前が出てきました」みるみるわたしの顔が青くなってゆくのが自分でも判った。動揺しまいと思えば思うほど、却って焦る。

「ほう、それはどういう意味ですか」尚も、わたしは惚けた振りをして、わざと横柄に構えていた。

「いいですか、ここに民間の旅行のパンフがあります。こちらでは東京へ二泊三日のコースでしたね。父兄から訊くと、それで八万かかると云いました。積み立て額もそのようでしたね。一般の個人向けの旅行でも同じコースで、同じホテルへ投宿して、旅費を入れてもせいぜい五万で見積もりは出ます。どうして、団体旅行、それも相手は子供ですよ、そちらの方が高いんでしょうね」

「あなたは、さっきから何を云いたいんですか。はっきりとおっしゃってください」わたしは気まずい思いを怒りで相殺しようとしていた。

「いいんですかな、はっきりと云ってしまって。ホテルの食事も大人は二の膳付きでビールも少し付きます。子供たちはそんな豪勢なお膳にお酒も付けているわけじゃないでしょう。高校も調べてみたら、沖縄が倍近い価格で父兄が負担していました。そればかりではないんです。トレパンも、市販されているものとデザイン、メーカーがほぼ一緒で、学校指定となると倍はかかっていました。電卓も、教材、制服すべてが、高いのは何故だと思いませんか」

「そんなこと、わたしに云われても困ります。これはPTAと一緒にやって毎年決めることなんです。公明正大に予算を認可してもらっている積もりです」

「そのPTAと先生がグルだとしたらどうなりますか。わたしは旅行会社のリベートも調べさせてもらいました。親というのはこと子供の教育となると弱いもので、大根一本が何円安いとスーパーへ走る感覚ではなく、桁違いに出し惜しみしないものです。その盲点について、業者が群がってきている」

わたしは震えがきていた。悟られまいとすればするほど、自然と声も震えた。

「第一、証拠があるんですか、あったら見せてください」

「あったところで、あなたがたのやっていることはすれすれの合法的でしょう。政治家どもと同じ手口だ。それは犯罪ではないんです。まあ、中には流用している犯罪者もいますがね。わたしが怒っているのは、教育を食い物にしているその長い習慣と、関係が許せないんです。PTAの会長は県会議員でしょう。業者の利権と政治と馬鹿な親と、すっかり構図が出来上がっている。その橋渡しが、まさか、聖職であるはずの先生だ」

「それで、あなたの目的は金ですか」わたしはとうとう白状してしまった。

「語るに落ちましたね。われわれは市民オンブズマンですよ。不正をただす方で、強請、たかりはあなた方のほうではないですか。すべての開示請求をして、父兄、世間に問うというのがわれわれの仕事です。われわれは警察ではない。それより、先生、新車の乗り心地はいいでしょう。最近、家も建てられたとか」

まるで、何もかも判っているように、にやりと意味ありげに笑って男は帰った。ときに、犯罪を嗅ぎつけるのは、官憲よりマスコミや右翼のほうが多いと聞く。最近はそれにオンブズマンだった。やがて、わたしのところまで警察の手が伸びるのは時間の問題だった。

それから三日、わたしは不眠に悩まされた。授業もできるわけではない。酒を呑んでも酔えない。気違いのように吠えたりもした。ひどく怖かった。いつ、警察が来るかと、怯えていた。電話もチャイムも死刑執行の合図のように心臓が縮んだ。裏帳簿も、フロッピーも密かに焼いた。身辺整理をする気力もないままに、わたしはビルの屋上に立っていた。

ふと、どうして飛び降り自殺する者は靴を脱ぐのだろうと、思った。それほど冷静でいられたのがおかしいくらいだ。海に飛び込むときも靴を脱ぐから、空を飛ぶときも同じようにするのだろう。

すべてを呑み込んでわたしは死のう。

わたしの体はスローモーションで地面に向かっていった。時間にしてほんの数秒が実に長く感じられた。高速でフィルムを巻き戻すように、その間、すべてが思い出された。クラブで酒を呑まされたこと、ホステスを与えられたこと、あの甘い一夜、海外旅行へも行ったな、持ったことのない大金を震える手で、隠したことなども。バラバラと画面がフラッシュ・バックしていた。わたしのいる不思議な空間。ここはどこだろうか。何故か家内と子供の顔が浮かばない。コンクリートがもうすぐだ。さようなら。

第82話 リース婚

直樹は由香利の顔を惚れ惚れと眺めていた。

「おまえは、いつまでも若くていいね。肌にしわのひとつもない。それにスタイル抜群で美人ときている。みんな羨ましいと云っているよ」

「いやだわ、そんなに見ないで、恥ずかしいじゃない。あなたったら、外でわたしのこと自慢しているのね。もう、新婚ではないのよ。そろそろ五年になるのよ」

「五年か、そんなになるか」

直樹ははたと思い出した。自室の書類入から大切な契約書を持ち出してきた。書類を見て、直樹は急に哀しそうな顔をして俯いた。

「そうか、おまえとはあと一月もないんだった。あまり幸せですっかり忘れていた」

由香利も書類に目を通した。それは結婚契約書だった。

「仕方ないわ。わたしたち五年のリース契約で結婚したんだもの。来月で契約が切れたら、リー

ス会社が引き取りにくるわ。そうしたら、また新しい、もっと若い奥さんを貰いなさい。わたしなんかより、もっと頭がよくて、才能のある型がいっぱいあるから」

「違うんだ。おまえでなくてはいけないんだ。こんなことだったら、あのとき、リースじゃなく、購入しておけばよかったんだ。リース会社のセールスが、おまえを勧めたとき、写真を見せながら、仕事兼用なら資産として買っても、減価償却できるからいいですが、耐用年数はせいぜい五年です。それを考えたら五年リースにして、月々の経費で落とされたほうが面倒ではないし、五年おきに新しい奥さんを貰うことができる、とかなんとかうまい話しに乗せられて、リースにしてもらったのだが、まさか、情が移るというところまで計算していなかった」

「そうね、いまの人はみんな割り切って考えるから、それもお勧めなんだけど、あなたは古いタイプの人間なのよね。お金で結婚が買える時代とあなたも悦んでいたのに」

「そうさ、ぼくのような、ぶ男のところに誰が嫁にくるものか。顔はにきびの跡だらけ、太ってぶよぶよだし、頭も悪いし家柄もよくない。とてもまともな見合いでも恋愛でもおまえのような素晴らしい嫁がくるわけがない」

「そんなに自分のことを卑下しないの。あなたの劣等感がよくないわ。心は顔に出るものよ。いつものあなたは男性的で素晴らしいわ。特に、あなたの精力には負けるわ」と、由香利は顔を赤らめて下を向いた。

「由香利、愛しているんだ。離れないでほしい」

直樹は由香利を抱きしめた。二人は朝っぱらからソファの上で愛撫しだした。きめ細かな由香利の白い肌が露わになった。「やめて、あなた、ねえ」由香利もすぐに反応して悶え始めた。性感帯を押すと敏感に身をくねらせる。ちゃんと濡れてくる。いつも、直樹は感心して、由香利の素晴らしい体を抱いていた。完璧だった。これ以上の女はいない。あそこのサイズも直樹にぴったりとフィットしている。まるでオーダーメイドのような女だった。しかも、セックスが楽しめるように、いろいろとあそこが変化するというのもたまらない。そこが由香利の売りでもあった。

由香利は頭の回転も速い。記憶力も抜群だった。直樹の話したことの一字一句を暗記しているばかりか、語学、雑学なんでも答えられる。料理もその辺のレストランのシェフ以上の腕前だし、第一、文句を云ったことがない。従順で絶対服従だ。自分の好みの女になるよう努力して、性格もそのように変えてきた。まさに直樹の理想の女そのものになっていた。いまさら、手放すことはできない。

この日は会社は休みだった。たまの休みに二人で、また新婚当時のようにデートでもしようと直樹は云った。

「映画がいいかな、それともどこか遠くへドライブしようか」

「嬉しい、あなた」由香利は直樹に飛びついた。

車で結局、ドライブすることになった。カーラジオから五年前に流行した歌が流れた。直樹は由香利と出会った頃を思い出して胸が熱くなった。初夏の風が潮の香を運んで開放的だった。やがて、車は海岸線を走っていた。全面に見える海。

「ねえ、あなた、ここの海って、五年前の六月二十日、日曜日の午前十一時三十七分十二秒に同じところを走っていたのよ」

「おまえは素晴らしい女だけど、その、いつもの細かい数字だけはやめてくれないかな」

「ごめんね、でね、あなたはこう云ったのよ。いつか、好きな人ができたらぼくの一番気に入った場所に連れてくるんだって。そのときのあなたは白いストライプのシャツにジーンズでサングラスも素敵だった」

車は海岸のテラスに停めた。二人で肩を抱くようにして、砂浜へ降りていった。誰もいない海だった。まだシーズンには早い。

「わたし、海に入りたい」と、由香利は靴を脱いで、ストッキングのまま波打ち際を走った。由香利の足下を波が洗う。

「あまりはしゃぐなよ。潮風はおまえにはよくないんだから」

すると、急に由香利は砂浜に倒れた。直樹は駆け寄って抱き起こした。

「わたしししししは、あななななたがすすすすすすすきよよよ」

「大丈夫じゃない。大変だ」

「わたししししはだいいいいいいいじょううううううぶ」

直樹はケイタイでリース会社に電話していた。

「うちの嫁さんが壊れちゃって。ええ、五年前の型です。いままで故障したことはないんですが。そちらに持ってゆけば部品交換してくれますか。ハードディスクが壊れて記憶がなくなるって、再インストールするんですか。仕方ないですね」

直樹は動かなくなった由香利を抱き上げて車まで運んだ。

「そろそろ換え買い時かな」

車は猛スピードで都心へと戻っていった。

第83話 うちてしやまん

裕美は中学三年生だ。三者面談では進学校の市で一番の高校を受験する。第二志望はないと、母親はきっぱりと云った。ぎりぎりのラインだが、本人の努力次第では安全圏まで成績を伸ばせるだろうと、先生も樂觀視。部活はバレーボールをやっていた。

朝練と称して、早朝より部活があるから、裕美は朝御飯も食べないで、六時半には登校する。母親の顔をちらりと見るくらい。父親とは顔も合わせない。学校では一時間の練習をしてから、授業にはいる。つい、練習疲れと寝不足から、一時間目はうとうとと舟を漕ぐ。裕美に得意な学科は音楽と美術と受験には関係がない。それ以外の好きな学科はひとつもない。勉強はしぶしぶやっているが、嫌いだった。学校は連日のテストだ。それが重荷になっている。毎日、緊張感で休まる暇がない。

昼休みにようやく友達とお喋りする一日で一番楽しい時間がくる。それも束の間、午後の授業が夕方までかかる。一時間の補習だと、受験生は全員残ってさらに勉強だ。五時になって、へとへとなのに今度は部活。体育館でランニングから始まり、柔軟体操、筋トレ、レシーブの練習。裕美は足がもつれて倒れた。コーチの先生は容赦なくボールを打ってよこす。ふらふらになって汗だくでも、受けなくてはならない。涙も出てくる。あちこちアザだらけだ。中学総体が間近だ

から、特訓に継ぐ特訓。コーチにも怒気が入る。

「そんなことで、強敵のK校に勝てるか。三年生は今回が最後の出場だ。有終の美を飾るためにはか非でも我が校に優勝旗を持ってこなければならん」と、檄を飛ばす。バレーボール部はこの中学は伝統的に強かった。県の大会でも何度も優勝している名門だった。勝つのがあたりまえ、負けると恥だった。

裕美はぐったりとなって汗くさいまま更衣室で着換えすると、走って今度は学校から歩いて十五分の学習塾へ急行する。時計は七時だった。数学と英語を二時間びっしりとまた勉強。模擬試験でウイークポイントを探す。机の上の腕時計と、試験問題との睨めっこで緊張感が持続する。それが終わる九時ようやく帰宅できる。お腹も空いた。体が歩いていても地震かなと思うほど揺れている。

九時半にシャワーだけ浴びて、遅い夕食。どうも食欲がない。ビールを呑んでいる父親が、心配して、

「ちゃんと食べないと試合にも受験にも勝てないぞ、一に体力だ」と、ここにも逃げ場がない。側でぐだぐだ云うからますます食欲がなくなる。

「ごちそうさま」と、さっさと二階の自室へ逃げてゆく。十時。テレビなんか見ている暇はない。本当は見たい番組が沢山あるのだが、どうしても見たいものは弟にビデオに録画してもらっている。MDラジカセで友達から借りてきたあゆのCDを録音する。それから宿題をする。プリントが各学科で四枚もある。それをやり終わると十二時だ。でも、まだ眠れない。塾の宿題まである。眠くて仕方ない。顔を掌で叩く。太股をつねる。やることはやらねば明日叱られる。ようやく終わったのは夜中の一時だった。倒れ込むようにベッドに入る。鉛のように体が重い。死んだように眠った。電灯は点けっぱなし。ラジオでは深夜放送が低く流れていた。

「おはよう」目覚まし時計と、共に飛び起きた裕美は、睡眠時間五時間で朝御飯も食べないで、また走って学校へ行く。十四歳。労働時間十八時間。日曜も祭日も部活で休みなし。家族でどこかへ行く話しもない。第一家族との対話もなければ一緒に御飯を食べるということもない。家族を、教育という戦争が破壊している。土曜日の午後は習いもので、ピアノ教室でしごかれる。月月火水木金金。自分の自由時間というものがない。日々、詰め込まれ、しごかれ家族からは頑張れと、背中押され、誰もゆっくりと休みなさいとは云う者がいない。眠い、疲れた、体はボロボロ、バラバラだ。

「私立の二股はかけさせませんからね、滑り止めなんか考えないの。絶対に志望校へ合格するんだと強い信念を持つよ」と、母親は狂育ママ。

「やればできるんだ。パパとママの子だもの。大学まで頑張るんだ」と、父親も応援。

「わが校のK高校への合格率は他校に負けない実績を年々積んでいます。今年は五十人を送り出す」と、校長はいきまいていた。その中に裕美も入っていた。

「休みたいと、甘ったれるな。そんな弱い精神で戦い勝てるか。我が校の名誉をかけて、おまえたちは選ばれたレギュラーではなかったのか。あの校旗に恥ずかしいと思わんか」

裕美に向けて、砲弾のようにボールが飛んでくる。ボールは次々に裕美の体めがけて飛んでくる。「ごめんなさい、ごめんなさい」裕美は泣いていた。もう立っているのがやっとだ。裕美はボールを抱えたまま、コートに倒れた。

一木口小平ハ死ンデモボールヲ離シマセンデシタ。

テレビニュースでは有事立法が法案可決したと騒いでいた。

第84話 不思議な眼鏡

昭和三十七年。あれはぼくが小学五年生のときだった。家の近所の貸本屋から借りてきたマンガの月刊雑誌の付録の片隅に、小さく目玉広告が載っていた。殆どが通販で、怪しげな商品の子供向けに売っているものだった。テレビに貼るとカラーテレビになるフィルムだとか、宇宙人の放送が聞こえるラジオだとかが、平気で売られていた。その中で、ぼくが欲しかったのは、何かの鳥の羽の魔力で、何でも透けて見えるという眼鏡だった。「見える、見えるはずかしいくらい見えちゃう魔法のメガネ」と謳っているのを信じたぼくは、せっせと月々五百円の小遣いを貯めて、二千元もする眼鏡をついに買うことにした。二千元分の切手をお金の代わりに送るのだ。

さて、心待ちにしていた眼鏡が小包でやってきた。ぼくは包装を開けるのさえ、どきどきして躊躇っていた。それはセルロイドでできた玩具のような眼鏡だった。鳥の羽が付いているだけで、掛けて見てもなんにも透けてみえない。騙されたと思った。当時からマセ餓鬼だったぼくは、その眼鏡をかけると、女の人のスカートの中が透けて見えると思っていた。

外を見てみたが、別に歩いている人の洋服は透けて見えなかった。ただ、遠くで判らないが、何かみんな顔が変に見える。おかしいなと階下に降りてゆくと、台所に母さんが立っていた。と、思った。

「あら、修ちゃん、遊びに行ってもいいけど、もうすぐ御飯だからね」と、横を向いた母さんの顔が狐だった。ぼくはたまげて飛び退いた。声も出ない。

「何よ、変な眼鏡かけて、付録かなんかかしら」洋服を着た狐がこっちを向いて、親しげに話している。ぼくは眼鏡を取って見た。すると、そこにはいつもの母さんが立っているだけだった。また、眼鏡を掛けると狐になる。これは面白い。

ぼくは外に眼鏡をかけて飛び出した。道行く人の顔だけがいろいろな動物になっているのだ。

「修くん、お母さん、元気」と、顔を覗くキリン。声で同級生のお母さんと判る。

「よう、あとでフラフープやらないか」と、寄ってきたのは近所の裕太だ。顔はあらいぐま。きれい好きだからからな。ぼくは得意満面だった。これは素敵な秘密だった。その人には必ず動物が付いている。後で、古代からの信仰でトーテムズム、カバラ、干支などもそうした流れかもしれないと習った。

駅前交番のおまわりさんが実は狼だった。町内会長さんは鼻の長い夢喰い獾だった。学校の先生とも会った。

「修平くんね、何、その眼鏡は」と、美人でやさしい先生の正体は針鼠。意外と棘がある。だから彼氏がないのだ。そのうちオールドミスになってしまう。いろいろと人間の観察ができた。

家に帰ると、夕食だった。父さんが帰ってきて、食卓で夕刊を見ていた。

「おう、どうした、その眼鏡」と、新聞の陰からひょいと出した顔は狸だった。そうか、父さんと母さんは狸と狐だったのだ。

あまり嬉しくて、ぼくは眼鏡を掛けたまま、寝てしまった。その眼鏡の説明書にはこう書かれていた。（長い時間使用しないでください。魔力がその人の目に入りこみますと、とれなくなります。）

あれから四十年近く経っていた。ぼくはあの眼鏡のことなどすっかりと忘れていた。子供のことだ。そのうち飽きてどこかへ捨てたりしたのだろう。あれからぼくの視力に異常が出始めていた。盲点という部分が広がってきているように、視界の一部が消えている。というより、本当にそこだけ透けて見えるようになったのだ。眼科で何度も検査をした。脳波も調べた。医者も判らない。

異常は中学に入ってから顕著になっていた。見る人間が幽霊のように透過してその背景が見える。人間だけではなく、壁や家まで透けて見える。まるで超能力の透視力がついたようだった。始めは点のような部分から透けて見えていたが、その範囲が広がり、ついにこの年になると視界のすべてが真っ白に見えるのだ。大地まで透けて見える。この世に形あるものはみんな透けて見えるから、何も見えないことと同じだった。どの医者も原因不明で治療の施しようがないと匙を投げた。

見えすぎることは見えないことと同じだった。何もかも判ってしまうと、世の中真っ白くなってしまう。

相変わらず雑誌のページの隅っこに小さい広告が載っている。

「摩訶不思議、何も見えない眼鏡。世の中の嫌なことを見たくない方にはうってつけ。姉妹品に聞こえないラジオ、映らないテレビ好評発売中。お子様の教育に最適」とか。

第85話 初月 給

五人目の息子が東京へ就職してしまうと、わたしはようやく親を卒業したと、気を抜いたのがいけなかった。どっと溜まっていた疲れが出て、一日寝込んでしまった。眩暈がして血圧も高い。病院で疲労だろうと、アリナミンを注射してよこした。点滴は断った。ちゃんと食べられるから、そこまで病人ではいたくない。

最後の子供が就職のために空港へ行ったとき、わたしは見送りに行った。背広にネクタイは馬子にも衣装。だが、何か不釣り合いでおかしい。就職祝いにスーツを買ってやった。上から下まで揃えてやった。

「おまえもようやく社会人か」紳士服の店でスーツを合わせているときの息子の身なりが信じられない。ついこの前まで子供だった。いや、赤ん坊だった。末っ子ほど可愛い。わたしはよく抱いて、海を見せに自転車で連れていった。一緒に歩くと、わたしの前に立ちはだかって、すぐ「抱っこ」と両手を伸ばしてよこした末っ子がもう大人だった。

「おやじ、ネクタイの仕方教えろよ」と、ネクタイの結び方を教えてやった。

「いいか、ホームシックにかかって電話かけてよこすなよ」と、わたしがからかえば、

「何云ってるんだ。おれを誰の子だと思っている。おやじの子供だぞ」

空港のレストランでコーヒーを呑んだ。出発までまだ時間があつた。一人ぐらゐは手元に置きたかつたが、五人関東方面にみんな就職してしまい、東北の田舎にはわたしとあいつらには祖父母の三人だけになつてしまつた。年寄りだけの家は寂しかつた。

出発時刻となつた。

「おやじ、初月給貰つたら、何か買ってやるからな」そう、健気なことを云つてあいつは飛び立つて行つた。

その後わたしはどつと疲れが出て寝込んでしまつた。いままで子供のために仕事でも張り合ひがあつた。何かうまいものでも食べさせようと思つたりもした。それがなくなる。母親のいない家で五人も育てたんだ。少しぐらゐ休んでもいいだろう。わたしは気の抜けたような日々を送つていた。

東京では兄弟仲良く互いに行き来しているらしい。たまにメールや電話が来る。近くに兄たちがいるから安心してゐた。向こうは楽しそうだつた。わたしはじじ、ばばのお守りをしながら、すでに老後の体勢にはいりつつある自分を思つた。

そんな、ある日、末っ子から電話が来た。

「おやじ、月給が出たぞ。初月給から何か買ってやるって約束したろう。明日まで考えておいて、電話くれよ。送るから、きっとだよ」

「無理するなよ」と云つておいたが、元気な声と息子が何か買ってけると生まれて初めて云つた言葉にじんときた。

だが、一日考えても欲しいものは別れない。新聞の折り込みチラシを見ても、これといつて欲しいものはなかつた。前に長男次男から、五十の誕生日に何か記念になるもの買ってやるから何がいかと、電話がきたことがあつた。そのときも別に何もなかつたので、「米十キロに味噌一樽」と、云うと、それは生活に必要なものには違ひないが、何かないのかと云うので、まあ、わたしより高給取りの息子たちだから、遠慮なく甘えさせてもらおうと、最新型のノートパソコン一式を買つてもらつた。高価なもので驚いた。

今度はどう考えても欲しいものなどない。いままで自分を殺して生きてきた。子供が優先で自分は後回しだから、我慢してきたのが板についたのか、あるいは本当に物欲がなくなつたものか。人間、欲がなくなれば終わりだつた。本人が折角何か記念になるものを買つてやるというのだから、残るものがあるのだけれど、考えつかない。

翌日、息子から電話だ。「決まつたか」と云うので、咄嗟に「それじゃ、旅行券でも買つてもらおうか」と、口をついて出た。思いもしない。自分で口から出まかせを云つてから、これはいい考えだと思つた。親の卒業旅行を貰おう。ここのところずっと旅行などしたこともない。いつも息子たちを駅や空港に迎えに行つたり、見送りに行つたり、いつも家にいて、残り続けるものが親だつた。

モノではなく思い出を貰おう。それがいい。それからまもなく息子から旅行ギフト券が送られてきた。

数日後、わたしはそれで久々の旅をもつた。関西方面に二十五年ぶりで歩いてみたいところがあつた。列車から見る景色は格別だつた。子供たちはいずれも浪費癖があつて、病氣はし、金

ばかりかかって育てた。まされる宝子にしかめやもではなかった。子は借金であり、いつも負債であった。それが社会に出ると心配することなくしっかりとやっている。そればかりか、親孝行の真似ごとまでしてくれる。これは、ひょっとして使えるかもしれないとわたしはある考えを思いついた。いままで、子供一人に世間では一千万ともいう金が注ぎ込まれた。親は社会へ出るまで身を粉にして働いてきたのだ。これからは回収してゆくのだ。どうせ、将来は年金など宛にならない。養親税を作って子供たちの収入から一定割合を仕送りしてもらうというものだ。これはいい考えだ。どうせ誰も一緒には暮らさないだろう。子供の世話になろうとは思っていなかったが、税金のつもりならいいかもしれない。わたしは熱爛をやりながら、駅弁のおかずをつついてきた。甘露甘露。子はやはり宝に見えてくる。

第86話 シンクロシティ

ぼくは数字にすごく拘泥わる癖を昔から持っていた。例えば、切符の番号を足してみても、9になれば、カブのように今日はいいことがありそうだと思うのだ。車のナンバーも四桁を足して、こちらは下一桁がゼロになれば事故を起こすなどという、一時流行したあらぬ噂を信じていたりした。

二十七歳で銀行勤務。数字にはうるさい仕事が病的にまでなっていた。神経質で強迫観念が強い。それで何事にも囚われやすいので何かが引っかかると眠れないまでになる。今日はぼくの誕生日だった。独身でアパート住まいのぼくにそれはぼくだけの甘い秘密だった。いまさら誰に祝ってもらう年でもない。2と7を足して9になるから何かいいことがありそうな予感がした。それで日曜日だから、交際しているM子と近代美術館にベン・シャーン展を見に行くことにしていた。テレビの占いでぼくの星座双子座はラッキーナンバーが27と云っていた。

M子と待ち合わせの駅まで行くに地下鉄に乗ると、切符の数字の合計が27だった。M子は27と大きくプリントされたトレーナーを着ていた。それまでは、ぼくはさして気にもしないでした。M子は大学の後輩で同じ考古学研究会に入っていた。互いに就職してからも交際は続いていた。M子はいつも男子ものを着ていた。スカートをはいた格好を見たことがない。言葉使いも男だ。ショートカットにした髪、ボーイッシュな顔、どこから見ても少年だ。

「いいだろう。おれは女々しいのは嫌いなんだよ」とは、M子の弁。自分のことをおれと云う。化粧もしないがさつなところが、ぼくは気に入っていたが。

「レストランで昼にしないか」と、ぼくが提案すると、

「けっ、そんな洒落たところでなくてよ、丼ものか何か喰いてえ」M子の云う食堂はその辺りにはなかった。目につくのは喫茶店かレストランだ。やむなく適当なレストランに入った。

日曜日で中は混んでいた。案内されたテーブルは27番。そのときから、ぼくは不気味に思えてきた。

「何を食べようか。ぼくはと、ペペロンチーノにしよう」

「ぷっ」と、M子は吹き出した。「何がペペロンだよ。おれは納豆スパゲティだな。ズルズルと

」よく見ると、ぼくの頼んだメニューの番号も27番だった。

「今日は、偶然の一致が続いていてね、27番に縁があるんだ」

「そうか、おまえの誕生日だったな。よし、お祝いにケーキもつけてやる」M子はデザートケーキも頼んだ。

「お祝いはケーキだけか、他に何かプレゼントなんか」

「笑わせるんじゃないねえ、いい年こいて、何が誕生日だ」みんな、周りが笑って見ている。顔も男みたいで、胸も小さかったらよかったのに。美人のくせして、言葉使いでぼくの方が恥をかく。それでいて本人はけろりとしている。

「君は性同一障害ではないのか、一度調べてもらったほうがいいよ」

M子はあたり構わずがはははと笑った。

展覧会はもの凄い人だった。人物画も多い、アメリカの良き時代の匂いのするポスターもベン・シャーンの作風だ。ぼくらが足を進めてゆくうちに、ぼくはある絵の前で釘づけになった。

それはぼく自身の肖像画だった。絵の下に27番と作品番号がふってある。ぼくはひどい恐怖に襲われた。次に何か起こるのか、周りの人間のざわめきが数字に聞こえてくる。天井から数字が降ってくる。壁という壁にも数字がびっしりと書かれていた。ぼくは耳を塞いだ。ぼくの絵がにやりと笑った。

「それにしてもこの絵、おまえにそっくりだな」M子の声がしたが、ぼくはすでに走り出していた。この場から、数字の魔力から逃げなければ自分は殺される、そう思った。後ろを振り返ると、もの凄い形相で人々が手を延べて追いかけてくる。すると、どうだろう、ぼくはガラスケースに体当たりしていた。ガラスの破片でざっくりと足を切り、辺り一面が血の海となった。何が起こったのか、自分でも判らなかった。M子がぼくを抱きかかえるようにして、急に女らしい声で泣きわめいている。

「どうしたのよ、急に駆け出したりして」

「やめろよ、女らしく泣くなよ、気持ち悪いよ」ぼくはそれっきり、意識をなくした。

意識が回復したのは病院のベッドだった。M子が側にいた。

「よかった、気が付いたのね。心配したわ」

「だから、よせってば、そんな女言葉、君らしくないじゃないか」

「あなた、疲れてるのよ。毎日、数字と睨めっこの仕事だから、ストレスが溜まっているんだわ」

看護婦が見回りに来た。

「気がつかれました？ 鎮静剤も打っておきましたから、ぐっすりと眠られたでしょう」

「あのう」ぼくは看護婦に訊いた。「ぼくの足の傷は27針縫いませんでしたか。それと、この病室は27号室でしょう」看護婦は驚いた顔で云った。

「どうして判るの。当たったわ」「ついでに、看護婦さんの年も」「そうよ、27よ。不思議な方ね。怖いくらい」

ぼくは、もう何があっても驚かない。ただ、何がラッキーナンバーだ。偶然の一致も何の意味もない。だからどうしたというのだ。

第87話 恋愛保険

会社に保険のおばさんがやってくる。毎年、春になると新入社員を狙ってセールスに来るのだ。高科康一は大学を卒業して、この春、四井物産に入社した。同じ系列の四井生命が当然と云った顔で入ってくる。

「あら、こちら素敵な方ね。四井生命の杉村と申します」と、名刺とティッシュを配っていた。「あなた、生命保険は入ってらして？」

康一は保険が嫌いだった。

「いいえ、必要ないんです。病気もしたことはないし、一人暮らしですから」

「でも、事故や怪我也補償してくれますし、いつ何があるか判りませんよ」

独身の若い人ほど保険に対する感覚が薄い。年金保険の話しなんかしても、まるで実感がない。

「そうそう、あなたにぴったりの保険があるわよ。若い人向けの保険でね、これなの」杉村が机の上に置いたパンフレットには「恋愛保険」と印刷してあった。

「恋愛保険？」康一は聞いたこともない保険に興味を持った。

「そうなの、新企画でね。一年間に恋人ができなかったら、掛け金の十倍を慰め保険料として支払うの」

「すげえ、それじゃ、ぼくのようにもてない男は得じゃん」

「いえいえ、あなたはもてそうだけど、万が一彼女ができなくとも安心ってわけ」康一は月々三万は痛いと思ったが、宝くじでも買うつもりで入ることにした。もし、彼女が一年後にできなかったら、三百万以上が転がり込む。悪くない話しだった。

「ありがとうございます。それで、特約はお付けになります？」

「特約って？」

「万が一、恋人が出来ても、ふられることだってあるわけでしょう。そんなときのために、失恋保険もあるのよ。両方入っていたほうがよろしいと思うけど」

「だって、彼女ができるのが先でしょう。まだいないから、それは後でいいでしょう。それに月六万の掛け金は大きいすよ」

恋愛保険とはうまいことを考えたものだ。彼女ができてもいいし、できなくてもいい。女をとるか、金をとるか。康一は安心した。焦らなくてもいいのだから。

康一は仕事にも慣れた。新入だから使い走りが多いが、それでも一流会社を走り回るのは悪い気がしない。係長から三菱商事との共同企画キャンペーンに若手を代表して康一に行ってもらう辞令が出た。短期のプロジェクトだった。フレッシュなアイデアを出してきてくれという命令だ。康一は勇んで三菱商事に乗り込んだ。エレベーターで慌てて女性とぶつかった。よろけたところを抱きかかえて康一はどきりとした。「すげえ美人」三菱の制服を着ている二十歳過ぎか、菊川怜をもう少し知的にした感じの人、くすくすと笑う。

会議室には四井から五名、三菱から五名出席。テーブルについたとき真っ正面の席でにこりと

笑う人、エレベーターの怜ちゃんだ。康一も会釈する。男女それぞれ組ませてコピーを考える班、デザインを提案する班と分かれた。康一は例の美人と組むことになった。

「相川奈々と云います。今年短大出たばかりの新入社員なんです」どこかで聞いたことのある名前だった。

「ぼくも新入りで、高科康一っていいいます」自己紹介が済んだ。奈々はくすくす笑ってばかりいる。「そんなにぼくっておかしいすか」康一はむっとした。

会議が嵩むたびに康一と奈々は親密になっていった。康一はうぶだったが、奈々のほうが積極的に踏み入ってくる。康一は高校時代から大学にかけても恋人らしい女性はいなかった。みんな片思いで終わったか、不発で自己完結してしまったか。奈々と何回かプライベートに誘われた。

「ところで、ワールドカップの位置づけだけど、わが社としては…」康一は仕事の枠からはみ出そうとしない。

「また、お仕事。つまんない。でも、奈々はそんな堅い康一さんが好き」ぎょっとする。「ちょっと、トイレ」と、カフェ・レストランのトイレに駆け込む。手洗いの鏡を見てみた。どう見ても男前からほど遠い。彼女ができる風采ではない。鼻はだんご、顔は下膨れ、目は小さく、どこが素敵なんだ。康一は奈々が好きだという自分が判らなくなる。

「奈々さん、ぼくなんかよりもっといい男が回りに五万といるでしょう」
「ううん、外見じゃないわ。あなたの男気がいいのよ。わたし、腰骨もないなよなよした男は嫌いなのだ」と、奈々は云うが、どうしても信じられない。康一は高根の花の奈々がよりによって、自分を選ぶなど、美女と野獣のゲテモノ喰いか、とも思った。康一こそ奈々を心底愛していた。生まれて初めて、胸が疼く感情を抑えきれずに、とうとう奈々に告白してしまった。

「奈々さん、ぼ、ぼくはき、君が好きであります。ぼくとつきあってください」すると奈々はまたくすくすしながら、

「何、云ってるの。もうつきあっているでしょう。そんなの初めに云ってくれる。わたしたちもう恋人同士じゃない」そう云って、奈々は康一の腕を組んでくる。夕闇の公園だった。あちこちのベンチではラブシーンが展開している。つい、康一もその気になって、奈々の腰に手を回して引き寄せた。

「駄目よ、こんなところで。その前にこれにハンコ押してくれなくちゃ」奈々が出した書類は「恋人契約書」とある。「拇印でもいいのよ」と、何がなんだか判らないまま、サインさせられてしまった。「これで、わたしたち立派な恋人同士なのね」「だったら、キスぐらい、いいだろ」「駄目、楽しみはあとに残しておくものよ」ぬらりくらりと奈々は体をかわす。「こんどね」と、康一の唇を人差し指で押した。

その翌日から奈々の姿が消えた。三菱商事ではそんな社員はいないと云う。康一はくっつかかった。

「プロジェクトにいました。髪の高い美人が」そのプロジェクトのメンバーも会社に訪ねてきていた。訊けば、つきあっている恋人が同時に失踪したという。康一と似ていた。プロジェクトはすでに解散。何かお見合いのように仕組まれていたように、いくつものカップルができていたが、どれも女に逃げられていた。

保険のおばさんが、また会社にやってきた。楽しそうに歌までうたっている。「あら、高科

くん、彼女できたんだってね、おめでとうというか残念ね、保険金はおりなくて」
「杉村さん、ぼく、彼女に逃げられたんです」康一はすっかりしょげていた。
「あら、だから云ったでしょう。失恋保険も掛けていたほうがいいって」
その杉村のおばさんのバインダーには、奈々の書いた「恋人契約書」が挟まっていた。

第88話 大混週間

ゴールデン・ウィークだなんて、混んでいるのは判っていたはずではないか。さっきから車は大渋滞に巻き込まれて、時速一キロ。歩いたほうが早い。隣の助手席に座っていても夫の苛々が伝わってくる。

わたしは反対したのに、子供たちがどこかへ行きたいと騒ぐので出てきたのだ。「人の行かないところなら、行ってもいいなあ」と、何もない辺鄙な田舎へでも行ってのんびり一日を過ごすのもいいとわたしが提案した。それは一対三で否決された。小学生の娘と息子はまだ遊園地がいい。夫もお祭り騒ぎが大好きで、隣県で開催されている博覧会へ結局行くことになった。混んでいけばいけないからと、少し早く出てきたにもかかわらず、昼を過ぎててもまだ半分も来ていない。片道二百キロだから、高速道路が大方だから三時間もあれば着く計算だった。ところが、博覧会を目指してインターチェンジが混んでいた。高速道路からしてのろのろ運転。終いには止まってしまった。

「嘘だろう。ここは高速道路なんだ。どうして止まる。金返せ」夫にはまだ余裕があった。降りるインターまでまだ十五キロもあると表示板が見えた。八時に家を出てきたのに、正午を過ぎても、まだ高速から降りれないでいた。

「ママ、喉が渴いた。自動販売機ないの」

「ここは高速だからあるわけないだろう。サービスエリアはこの先ないんだ」

「こんなことなら、車の中で食べるお弁当や、ジュースを持ってくるんだったわ」「ママ、トイレに行きたい」

「こんなことなら、尿瓶も持って来るんだったな」

カーラジオからは天気予報。一日中は各地で夏日を記録するでしょう。午前中に三十度を越えたところは次の...

「七月下旬の気温か。どおりでくそ暑いと思った」

「あなた、エアコンかけてよ」わたしもフロントガラスから射し込む日差しが暑くてたまらない。窓を開けても走っていないから風もない。

「エアコンはまだ早いと思って、ガスが切れたままで使えないんだ」

それを聞くと「暑いよう、暑いよう」と、後部座席がうるさい。窓は全開、太陽はぎらぎら容赦なく車内をオープンにした。四十度は越えているかもしれない。みんな、上着を脱いだ。じっとりと汗で全身が気持ち悪い。確かに水分が取られているから水が欲しい。コーラでもぐっと呑めたらと想像するだけで喉が鳴る。いまなら一リットルくらい呑めるだろう。

ようやく、インターの降り口が見えてきた。娘がついに泣きだした。

「ママ、おしっこが洩れるよう」

「おい、何かビニール袋はないのか、もう少し我慢しろ、いまインターを出るからな」

ところが、インターを降りても一般道も混んでいて先が詰まっていた。とても車を止めるどころではない。のろのろ運転で二車線がびっしりだ。娘は「出る、洩らしちゃうよお」と泣き叫んで

いる。脂汗も流していた。とうとう我慢しきれなくて車のシートもびっしょりと濡らした。泣きやまない。

「パパ、気持ち悪くなってきた。吐きそう」今度は息子だ。車に酔ったのだろう。こんなときのためにビニール袋くらい車に置いておくべきだ。時計は三時を回っていた。家を出てから七時間、ずっと乗りっぱなしで、運転している夫も疲れたろうが、うだる暑さの中、脱水症状を起こしている家族も疲れていた。息子もシートの上に吐いた。車の中はおしっこの匂いと反吐の匂いが充満してむんむんする。二人とも後部座席で服を汚して気持ち悪いだろう。着換えも持ってきていなかったし、タオルで拭いたくらいではとれない。水で濡らしたいが、車は脇道へ逸れることも停車することもできない。車は止まったまま動かなくなった。クラクションが苛々してあちこちの車から鳴らされた。前にオーバーヒートを起こした車が止まっているらしい。その車を脇にみんなで押して、なおも前進しているが、大きな通りにはまだ出ない。せめて、大通りに出れば、逃げ道もあるかもしれない。わたしは夫のナビゲーターを勤めていたが、まるっきり地図の読み方が判らない。女はとくに地図には弱いものだ。そのうち、娘が「具合が悪くなってきた」と、ぐったりと青い顔をして横になっていた。唇に血のけがない。一生懸命に名前を呼んだ。大丈夫だろうか。

「あなた、通りに病院があったら寄ってよ、何か様子がおかしいわ」

「病院があったところで日曜祭日は休みだよ。救急をやっている大きな病院でなくては」夫も苛々している。語気が荒かった。

「あなたが、博覧会に行こうって云ったからこうなったのよ。わたしはもっと静かなところに行きたかったのに」

「なんだと、うるさい、いまさらそんなことを云ったところで仕方がないじゃないか。文句ばかり云いやがって、運転している者の身にもなってみろ」つい、口喧嘩になってしまう。

「ママ、お腹空いたよ。喉もからから」

腕時計ばかり気になる。四時を過ぎた。かれこれ九時間は吞まず喰わずだ。

「我慢しなさい。向こうについたら何でも好きなもの食べさせるからね」

娘は眠っていた。わたしも眠いが夫に悪いから起きていた。口を開けば、苛々で喧嘩になるから、互いに気まずい思いで無言の行をしていた。ラジオでは交通事故の各地の暗いニュース。渋滞の道路情報も入ったが、どこも観光地は車でいっぱいようだ。

子供だけではない。大人も閉じこめられていればトイレにも行きたくなる。すでに下腹が張って痛くなっていた。我慢も限界だ。いますぐにでも車から降りたかった。夫もそれは同じだろう。指が悶え、足は貧乏ゆすりをしていた。

ようやく、博覧会のゲートが見えた。子供たちを起こした。

「みんな、起きなさい。着いたわよ。博覧会よ」六時を回っていた。ゲートは閉まっていた。前の車はみんなUターンして帰っている。六時で終わりなのだ。

子供たちは大声で泣いた。わたしだって泣きたい。何のために十時間もかけてここまで来たのか。車はまた帰りの車のラッシュの中に閉じこめられていた。

これから帰れば完全に真夜中になってしまう。何が黄金週間だ。遊びも命がけだった。最悪。

車は場末のきたらしい食堂に止まった。

第89話 何かがいる

「見ましたか？」

最近はそれが挨拶代わりになっている。

「ええ、今日も見ました。あなたもですか」「それにしても、すごいですねえ」巷の話題は専らそのことばかり。

「それって、何ですか」と、云おうものなら、みんなに白い眼で見られる。

「知らないそうですよ。見たことがないというのも信じられない」

「いまの若い人には見えないのですかね」

「どうでもいいのでしょうか」

「こんなすごいことが見えない。どうなっているのでしょうかな」

若者は、そう云われるとすごく気になりだした。

「それ、何なのですか」と訊くと、

「しっ、声が大きい。このことは公言してはいけません。最近はどうですかからな、見たものは見たものとして自分に秘めておくことです」

そこいらに暗黙の了解があって、たまにひそひそ話をしている人もみかけるが、誰かが来るとぴたりとやめる。見てもいいが、それを指摘してはいけないことになっている。いずれ、災いは巡り巡って自分の身の上に降り注ぐ。それほど怖いものでありながら、誰の心にも大なり小なりあるものだけに、警察に連絡することもできない。

それは堂々と日中から出現し、日常化してくると、やがて人々の口にも上らなくなるのだろうが、まだ珍しいうちは噂になっていた。

「ひどいものですな、あの醜さ。おっと、それ以上云ったら祟りがある。桑原、桑原」云った人は自分の声を手で祓って沈黙した。公然と「見た」と、訴える人も中にはいるが、それはとても勇気のある人で、自分の命さえ懸けている者の声だった。大抵は、見て見ぬ振りをするか、黙っていることが賢明と思うのだ。それだから、そのものはますます横行する。

留学生の金さんは、熱心なクリスチャンで、日本に社会学の勉強に来ていた。その彼が日本に来て、空港でそれを最初に「見た」のだった。啞然とした。あまりの恐ろしさに慌てふためいたが、周囲は冷たいもので気づかない振りをしている。その異常さにも驚いた。日本は、外人の方がよく見える、日本人論と同じで、変なものがあるのに知らん振りをしていることに憤慨さえ覚えていた。

「何なんだ、これは一体、とても信じられない」

金さんを迎えにきた、大学の研究生が、そんな動揺している金さんを笑った。

「カルチャーでもないし、何なんだろう。いまに感じなくなりますよ。もっともそっちの方が異常で怖いことですけどね」研究生は金さんに説明していた。

「あんな醜いものに慣れるというんですか」金さんはたどたどしい日本語でゆっくりと話した。「そうです。存在する以上、仕方ありません。若い人にはあれと同化するものまで出てくる始末です」

「あんなものに成りきるというのかい。許せない。とても。何を考えているのか」

「それが社会学の勉強の手始めですよ」

研究テーマにはいいかもしれないが、そこから分析はされても何の発展性があるというのか、モデルノロデオとしての単なる観察で終わりそうだ。

金さんが大学で研究しているときも、そいつはちらちらと目の前をかすめる。テレビのあらゆる番組にも堂々と出ている。買い物をしに街を歩いている、そいつはうるさいくらいうるろしている。日本に来て、一月、二月と経つにつれ、研究生の云ったように、気にならなくなる。それはやはり普通ではない。金さんだけは抵抗しつづけた。そいつを許容するから、非常識も常識になるように、醜悪なものはあくまで受け入れてはいけない。金さんは無視しながらも、自分の中の神にすぎり、戦い続けていた。それをイタリアから来ていた同じ研究生のマリオに笑われた。

「金さんは古い、堅い、もっと日本人的にナアナアよ」

それが許せない。マリオも完全にあいつに毒されている。マトンゴという茸を食べて全員、化物になったのと同じだ。おれはあいつの自由になんかなるものか。金さんはあいつにまるめこまれないよう、何が真実か、いつも冷静に自分も含めて洗脳されないように、常の自分にいつでも帰れるようにしておこう。そのためには、胸にはロザリオ、片手にバイブル、そして口では主の祈り。いつのまにか、あいつが入りこむかもしれないので、甘い隙を見せないこと、恒に信念を持つこと、エクソシストのようにあいつに敵対する気持ちが大事だと金さんは思う。それを日本人は捨てていた。信仰と思想とポリティカルなことのすべてを武器とし、楯としなければならない。あいつのいいようにされてしまうのは、それがいいからだった。

そんな金さんをあいつらは待ち伏せしていた。大学の誰もいない夜更の廊下で、あいつらがたむろしていた。金さんはわざと無視して通り過ぎようとしたそのとき、あいつらは金さんの背中から襲いかかる。

「何なのだ、こいつらは」渾身の力を振り絞って撃退する金さんにも力の限界がある。三十六計逃げるに如かずだ。金さんは走った。振り払い、振り払い走った。自分だけは違う。あいつらの思い通りになんかなるものか。追いかけてくる。逃げる。呑み込まれそうになる。そのとき、ふと、金さんに、いっそ、呑み込まれたら楽だろうなという危険な考えが浮かんだ。いやいや、自分だけは守るべき自分がある。逃げ切ってやる。夜のキャンパスからバス通りへ。そして、思惟の彼方へ。走る。

第90話 サラ金地獄

もう三ヶ月、給料が遅配されていた。女子社員の制服をクリーニングに出すどころか、当の女

子社員も洗濯をする余裕もないから、制服はどろどろに汚れていた。髪も美容院に行くお金もないから、乱れていた。化粧品すら買えないから、スツピンのまま。社員はもう何もする気がないから、支店の中も荒れ放題。掃除をする気持ちも起こらないから、蜘蛛の巣も張っていた。社長は不在。きっと、客の家に行っているのだ。

サラ金クライの支店に客が来た。

「あのう、初めてなんです、お金を借りたいので、どういう手続きをしたらいいかと」若い作業員風の男がもじもじしながら入ってきた。誰も無視している。対応しようとしな。一人は耳掻きでほじっていたし、もう一人はうたた寝していた。あとの一人はパソコンでアダルトサイトを見ていた。

「あのう、すみません、聞いているんですか」男はカウンター越しに声を大きくした。

「あん、聞こえてるよ。貸したいけど、貸す資金が底をついて、金庫は空っぽなの。判った？」男子社員はまた居眠りしだした。

「最近、アパート代溜め込んで、追い出されそうなのよ」

「わたしなんか、水道止められて、風呂に一月入ってないのよ」

女子社員から臭い匂いがする。

「社長は本当に客から貸した金取ってくるんだろうね」

その頃、サラ金クライの社長は数百万を借りて返していない客の家に行った。

「この通りだ、なんとか三分の一でもいい。返してくれないか」社長は、債務者の家の玄関に土下座して頼み込んでいた。

「社長さんよ、こっちだって、返したいのはやまやまだが、会社は倒産、家はすでに差し押さえ、今日のおまんまも喰えない有様だ。びた一文払えないよ」

開き直った債務者はヤクザよりまだ始末が悪い。

「お願いだ、社員にせめて十万、いや五万づつでも給料を払いたいんだ。なあ、頼む。わしも、ゆうべから何も喰っていないんだ。うちの家族も同じだ」

かつて鬼といわれたクライの社長もげっそりと痩せて、老いぼれた。昔日の面影はまるでなかった。

「無い袖はふれないね、帰りやがれ」乱暴に追い出され、ドアに鍵までかけられた。必ず金を取ってくるからと社員に約束した手前、手ぶらでは戻れない。

そうだ、サラ金に行って、金を借りてこよう。

社長は同業者のサラ金の支店を訪れていた。

「あのう、金を借りたいんだが」

「残念でした。うちは今日で廃業です。社長は行方不明。給料は未払い。せめて電話機か、椅子でも給料の代わりに貰ってゆこうかと考えているところですね」

そうか、ここも似たようなものか。

銀行からサラ金へ流れていた融資が止まった。所得番付の上位を占めていたサラ金もいまや落ち目。こんなに不景気になれば、こぞってサラ金を利用してどろんするやつや、計画倒産するやつ、金を借りまくって破産するやつ、みんな返さなきゃ怖くないと、返済不履行が極端に増

えた。銀行の倒産の次はサラ金の倒産ラッシュだった。クライの社長も自宅の豪邸を売り払い、高級車も売って貸付資金に回したが、みんな焦げ付いた。いまは、風呂もない安アパートに暮らしている。自転車で出勤という落ちぶれよう。

次の客のスナックのママのところへ行く。

「頼む、少しでいいんだ、返してくれ」社長はママの足下にすがって泣いていた。それをママは蹴飛ばして、

「うるさいんだよ、さっきから、ないものはないんだ。しつこいね、何回云ったら判るんだよ。貸すときは笑って貸してか、返してくれと泣いてすがって、ばかみたい」これだ。借りっぱなし、あとは野となれ山となれと、ケツをまくるのが実に多い。借りるときは仏の顔、返すときは鬼の顔。昔は逆だった。いまは借り手が偉いのだ。債務者の脅し文句は「破産してやるぞ」だ。安易な破産が増えて、貸した金が返ってこない。泥棒に近いものもある。法律は弱者と称して、借り手ばかり保護してきたが、それではどっちが被害者か判らないと、ついに消費者金融協会も立ち上がった。「サラ金経営被害者の会」を結成した。

社長は別のサラ金のドアを開いた。

「すみません。お宅には貸せません。いま、サラ金経営が一番危ない、われわれの貸し出しランクではCです。すなわち、貸せないということぐらい、同業者のあなたならよく知っているでしょう」と、どこのサラ金からも断られた。

「どうしたらいいんだ。どうしたら...」社長は橋の上で路頭に迷っていた。店に帰れば従業員の怖い顔、家に帰れば腹をすかせた女房子供の顔、そうだ、こうなったら最後の手段だ。

社長は密かに庖丁を隠し持ってきた。古いストッキングを頭から被った。そうして、細々と営業しているサラ金の支店のドアを開けた。

「し、静かにしろ。か、金を出せ」と、庖丁をつきつけた。

支店長以下、社員全員が大笑いした。そこも金庫は空だった。

「外の看板、見ていないで入ったんですか。ちゃんとよく見てください。うちはもう貸し出しはやっていないんだ」

社長は表に出て看板を見た。

「お金貸します。無担保で」が書き換えられていた。「お金借ります。無担保で」と。

第91話 スロー・フード

グルメブームは異常な加熱ぶりだった。「喰う」という最も生存に必要でかつ下等な欲求に人々は狂奔していた。行き着く先にもう、それしかないのか。人間界の墮落の究極にはセックスとグルメが、かつてのローマ帝国の末期のように専らの関心ごとだった。残るのは殺し合いをコロシアムで観戦することだけだ。

これでもか、と考え抜いた末に都会に出現したのが、この「スロー・フード店」。確かに行列がきている。ファーストフードに飽きた現代人が次に求めたのはこれだ。何も早く提供してもらわなければならない。世の中、不景気で閑になったら、時間が余ってきた。ゆっくりのんびり

が生活のリズムになったから、そう焦って食事をしなくともよい。そこに目をつけた商法だ。あまりにアメリカナイズされた食生活に辟易した若い人たちから、このヨーロッパ生まれのスロー・フードが徐々に浸透してきたのだが...

地方から都会に遊びにきた田原和美と岩田真理子は短大の友達で、春休みを利用して、いま話題の食事をしてみようと、月刊雑誌を片手にグルメツアーをしているといった、リッチな学生だった。

「ここよ、並んでいるわ、スローフードのドナルドダッグね。とうとう来たのね」
真理子は感激していた。

「でも、この情報誌にはさ、待たされるのを覚悟してと書いてあるわよ」和美はいつも額面通りには受け取らないタイプだ。

「いいじゃない、それだけ美味しいものが食べられれば」
諦めて途中で帰る人もいた。ここは、せっかく地方から来たのだから、根気強く待たねばと、二人とも腹をくくった。外にだけでも五十人は並んでいる。入口から中の待ち席にも三十人はいそうだ。さらに店内で待たされている客となると、いつになるのだろう。

救急車がやってきて、店の前で止まった。白衣の救急隊が担架を持って店内に入る。
「何があったのだろうか」和美は背伸びしたり、飛び上がって見ていた。やがて、客らしい男が運び出されてくる。「倒れるくらい美味しいのかな」と、真理子は呟いた。「まさか」と和美は笑った。ギブアップした客が店内からふらふらと出てくる。顔色がさえない。そんなに待たされるのか。二人とも躊躇しだしたが、せっかくここまで並んだ時間が勿体無いから、我慢していた。

ようやく、店の中の待ち席まで辿りついた。四時間経っていた。これでは昼飯を食べに来た人は夕食になってしまうじゃないと、和美が云うと、前に座っている客が、口を挿んだ。

「あなたがた、どうやらここのお店初めてらしいわね。そんな甘いものじゃなくてよ」と、余裕たっぷりにイジワルような笑みを浮かべて云うおばさん。

さあ、ようやく注文のカウンターまで進んだ。一見、ファーストフード店とやり方は同じだった。オーダーをとって、先に会計だ。

「いらっしゃいませ、こんにちわ。ご注文をどうぞ」と、メニューを渡される。メニューは一見してどこにでもありそう。情報誌によれば、ここの鰻のパイ包が絶品とか。

「これをください」と、真理子が注文すると、女子のスタッフがケイタイでどこかへ電話していた。「ええ、鰻ですが、はい、まだかかっていない、今週はまだ一匹もかからない、はい、判りました」スタッフはケイタイを切ると、「お客様、申し訳ございません。うちは天然鰻しか使わないもので、いま、利根川の上流で漁をしているうちの係に聞いたのですが、来週になるかもしれません。それまで、奥でお待ちください」「ええ？ それじゃ、注文変えます。牡蠣のリゾットね」「かしこまりました。ただいま伊豆で潜っているダイバーに連絡しましたら、大きいのが捕れたそうです。車で走って、そうですね、四時間ほどお待ちください。それまでライスも炊いておきますから」「よ、四時間も待つんですか、いままでも五時間待ったんですよ、夜中になっちゃうじゃないですか」和美は驚いて云った。すると、後ろの客が怒って云った。

「あんたたち、不満があるならやめたらどうなの。九時間で食べられるなんて、早いほうよ。さっき、救急車で餓死寸前に運び出された人なんか、十日間殆ど飲まず喰わずだったんだから」「

「そうだ、そうだ」と奥からも声がする。真理子も謝った。

「すみません、大きい顔しちゃって、それなら、ここで一番早くできるものください」

「そうですね、スパゲッティなら三時間で上がります」「なら、そのカルボナーラで」

「カルボナーラの卵一個お願いしまーす」と、どこかにまたケイタイで連絡していた。

「うちは地鶏の鶏卵しか使わないんです。いま、郊外の農家で産んだそうです。ただいまから、麺も打ちます」

「客のオーダーを聞いてから、野菜を取りに行ったり、魚釣ったり、御飯炊いたりか、出来たてだから美味しいのはあたりまえ。なんだ、そうだったのだ」和美はカラクリが判ってがっかりしていた。最近、食品のごまかし物が多いから、こんな採れたての天然ものを使う店に一週間も並んでも安心して食べられるのだ。

「それにしても、ここで待っている客ってかなりおかしくない？ みんな家庭や仕事がないのかな」

ようやく、注文したものがきたときは、夜中の一時を回っていた。すでに待っている客の大半はすやすやと寝ている。二人はようやくありつけたスパゲッティに舌鼓を打っていた。ひと皿二万円は材料の運賃も入っているのだろう。感激して食べた。待つ、待つ、意地でも待つ、ようやくありつけた感動。空腹が最高のシェフというのは本当だ。皿まで舐めった。

不信感がこんなへんてこな店を出現させた。あまりにごまかし食品が多いから、本物、自然の味に人々は飢えていた。

「いらっしゃいませ、ボルシチですね。ただいまから、トマトの植え付けいたしますから、どうぞそちらの椅子でお待ちください。収穫まで三ヶ月ぐらいかかりますが...」

第92話 文明の利器

パソコンという玩具が開発されてから、上から下までみんなそれに夢中だった。こんなこともできる、あんなこともできると、だんだんオールマイティの神に祀り上げていた。

高志も遅らばせながら、ようやく待望のパソコンを購入した。さっそく遊びにきた友達に自慢していた。

「これは、ラジオも聴けるし、テレビも見れるんだ」

パソコン音痴の友達は「ふーん」と、興味がない。「いまさら、ラジオやテレビが見れるって、すごいことなのかなあ、うちには戦前からラジオはあったって、じいちゃんが云っていたし、テレビなんか四十年前からあったって」

そう云われるとかちんとくる。

「電話もかけられるんだよ。このマイクを使ってさ」「ふーん、電話も戦前からあったんだろう。今は21世紀だよ。別に驚くことなのかなあ」くそっ、いまいましいやつめと、高志はこんなに

すごい最新型のパソコンに驚かない友達に苛ついた。

「この、パソコンについているテレビカメラで、テレビ電話ができるんだ。どうだ、今度はすごいだろう」それは友達が興味を示した。

「試しにやってみようか。親戚のお兄ちゃんと同じカメラ付きを持っているのがいるから」高志は嬉しそうに、従兄に電話していた。

「いまから、テレビ電話やるから、パソコン立ち上げておいてね、五分後だよ」

「よく判らないけど、いちいち相手に電話しなけりゃいけないの」

高志はむっとした。「そこが難点なんだけどね」

確かにテレビ電話だ。画面が小さい。相手の緩慢な動きが、パラパラマンガのようでおかしかった。

「どうだい、すごいだろう」

友達はなんの感激もなく、「別に」と冷静だ。高志だけがひどく興奮している。

「それじゃ、これはどうだい。メールを送るよ」高志はいちいち長い英数字の入り混じったアドレスを打ち込んでいた。

「随分と、アドレスっていうの、長いんだな。電話番号なら10個の数字だから、暗記もできるけど、こんなに長く複雑なら覚えきれないね。どうして、もっと簡単にしないのかな」と、友達。いちいちうるさいな、と、高志は頭にくる。

適当な文章を打って、送信アイコンをクリックした。

「なあ、簡単だろう。これで向うに瞬時に手紙が行くんだ」

「そんなにすぐ送れるの。本当に着いているのかな」と、友達に云われれば自信がない。高志はまた相手に電話していた。

「いま、メール送ったから、届いているか確認してよ」

「いちいち、電話で確認するなら、初めから電話したら。そっちの方が簡単だよ」

「くそっ」どうしたら、このパソコンに敬服するのか、高志はなんとしても友達をやりこめたかった。かなり向きになってあれこれとやって見せた。

「このエクセルという計算ソフトを使えば、いろんなことができるんだ」と、高志は一時間かけて、住所録を打ち込んだ。

「友達百人分の住所ができた。これをあいうえお順に並べ替えするよ」と、高志は別のキーに触った。すると、「強制終了」という警告が出た。どうやっても、動かない。仕方なく、せっせと一時間かけて打ち込んだ住所データを消してしまった。

「へえ、消えてしまうんだ。手帖に書いたものは消えないよ。それに、見ていれば、打つより、手書きのほうが早いみたいだ」高志はそこまで云われてすっかり自信をなくしていた。確かに、いままでもそんなことはたびたびあった。もう、泣きそうになっていた。

「じゃ、これはどうだよ」と、デジカメを繋いだ。

「いいかい、君の写真を撮るよ。それをパソコンに取り入れてと、プリントアウトする」今撮った写真がたちまちできることに、友達は驚きもしない。

「操作がいろいろあって、時間も手間もかかるね。ぼくの持っているポラロイドならもっと早く簡単だよ」

友達は写真を見て笑った。

「なんだい、これ、普通のカメラで撮った方がずっと綺麗じゃないか」と、すっかり馬鹿にするから、高志は泣きそうになった。

「このデジカメは高かったんだよ。四百万画素もある一番新しいやつなのに」

「メールが来たよ」とマウスが教える。それには友達もにこりと笑った。

「ちゃんと、教えるんだ。かしこいやつだろう。どれ、誰からメールが来たのかな」高志は、まだ何も知らないビギナーだったから、手ばなしでパソコンを信用していた。

メールは知らない相手からだった。添付ファイルがあったので、何かなと思いつい開いてしまった。すると、画面全体に花火が上がった。高志は度肝を抜かれた。友達は逆に、「わあ、綺麗だね」と、拍手をしている。

ウイルスに感染して、あとはやり方が判らないから、買った電器店に電話して出張サービスをしてもらった。高がついた。もう、半年くらいの小遣いは飛んでしまった。

たびたびパソコンは故障した。苛々して乱暴に扱ったのがいけなかった。まだ、一年も使っていないかった。買った店に行くと、

「これはもう型が古くて、接続ケーブルもないし、周辺機器もみんな取り替えないといけないですよ」高志は憤慨した。

「それはないでしょう。まだ一年も使っていないのに、お宅からバーゲンの特価で買ったんですよ」販売員は渋い顔をして云った。

「在庫処分セールで買われたんですね。この世界は三年経ったらただの箱だと云うくらい、めまぐるしく進歩しているんです」

「そんな…」高志は絶句した。これは詐欺ではないのか。時代についてゆくというくらい浪費はない。

アナログ派の高志の友達は、図書館でゆっくりと本を読んでいた。ノートにかりかりと鉛筆で書きとめていた。彼はパソコン、そんなもの無くても不便を感じたことはない。午後の陽射しの中で彼はうとうとと仮眠していた。

第93話 年中無休二十四時間勤務

昨日の明日は今日で今日の明日は明日なのだ。何を考えているか判らないほど、一日の区切りがつかない。曜日も日付も時間もどうでもよくなる。

わたしの勤めるF電工は巨大な有利子負債を抱えて、企業の再構築リストラを進めることとなった。希望退職者を募ると、会社経営の前途多難なことを察知した優秀な社員から、さっさと転職していった。残されたものも、肩叩きで老齢の技術のないものから辞めていった。残されたものは、どこへも行き先のない、どうしようもない連中が残った。それは会社にとって、人件費という頭数では計画通りの削減だが、その中身までは数字に出てこない。人的財産は人件費では測れない。含み資産を持つか、あるいは会社に損害を与える負債であったか、倒産寸前の会社にはその両極端の社員が残った。

わたしは入社して二十年、四十六歳の中堅だった。総務部に在籍していたが、ラインは生産能力を落とすわけには行かないので、スタッフ社員が削られることとなった。業務内容もろくに知りもしないのに、ぱっさりと半分に減らされた。当然、残った社員に負担がかかる。一人で二人分の仕事をしなければならない。それに耐えかねて一人、また一人と辞めてゆく。ますます残留組に業務が重くのしかかる。労働組合という言葉すら忘れるほど、骨抜きにされて、専従も何をしているのか判らないほど、活動は停止状態。よって、あとは会社側のやり放題。残業も打ち切りだから、定刻になると一度、タイムカードを押しに通用口へ降りて行って、また仕事に戻る。残業手当はなしのサービス残業だ。表向きは違法行為はない。だが、完全に労働基準法違反。それは自主的に社員がやっていることとなっていたが、なんのことはない、一日七時間の労働時間でとても処理できる内容ではない。最近はずっと家に帰っていない。会社に泊まりこみが多い。泊り込みといっても、仮眠室や休憩所で眠ることはない。殆ど寝ていないのが実情だ。机にうつ伏して少し寝るか、うとうとしているか、やたらコーヒーは飲まさる。それとタバコ。机の上は吸殻の山と、コーヒーカップと、椅子の脇には弁当の空の山。掃除、整理といったまどろっこしいサブ的な仕事はすべてオミットしなければ間に合わない。多少汚くても仕事に差し障りがなければいいことだ。

朝、やはり徹夜組の社員とモーニング・コーヒーをストレートで入れて飲む。数人の社員がいつも机で夜明かしをしていた。通い組、主に女子社員だが、出勤時間になってこぞってやってくる。差し入れのサンドイッチなんか、配られる。いつも悪いと思う。それをかぶりつきながら、パソコンと計算機の手は休めない。伝票は未処理が山とあり、まだまだ崩せないでいた。髪もぼさぼさ、無精髭もそのまま、第一、顔を洗ったり、歯を磨いたりするごく日常的なことが面倒くさくなる。眠気醒ましに、トイレで顔を洗うくらいだ。風呂にも十日以上入っていないから、臭いのだろうが、本人も周囲もだんだんと異臭に慣れてくる。別に訪問客が来るセクションでもない。ワイシャツの衿も真っ黒。体は汗でコビがたかっていた。

昼は女子社員が弁当を買ってくる。机から離れることが少ない。弁当を食いながらの仕事だから、昼の休憩ということも忘れている。夕食は出前をとることが多い。女房からたまに様子伺いの電話があるが、遠慮して手短かに要件のみ。それは無事生きているのを確認するに留まる。栄養ドリンクも気休めに飲んでいる。土曜、日曜もない。休日返上で仕事だ。

誰か椅子から仰向けに倒れた。女子社員が駆け寄って、介抱する。意識がないらしい。救急車が呼ばれ、担架で運び出される。また一人リタイヤ。これで何人が倒れ、何人が死んだか。労災が適用され、植物人間になった者もいるとか。次はわたしの番だろうか。

去っても地獄、残っても地獄。人間の限界をすでに超えている。耐久テストのように、何日寝ないで生きていられるか。腰が痛い。椎間板ヘルニアになったように、両足が痺れてきていた。肩も凝った。かちかちにこり固まっていた。腕は腱鞘炎になったように、痛んでキーボードを叩くのさえ辛い。それでも休むわけにはゆかない。

真夜中、三時頃だろうか、トイレに立とうとして、椅子から立ち上がることができないことに気がついた。足も動かない。下半身が完全に固定されたように動かないのだ。どうしたのだろう。焦って足元を見ると、わたしの足から根が伸びて、床に這い、床を破って潜り込んでいる

のだった。尻も同じく、椅子にくっついたように根が張っていた。わたしの手からも蔓のようなものが伸びて、パソコンに絡みついた。わたしはどうやら、生きたまま植物に変貌していったようだ。会社という土壌に長く居すぎたためか、まあ、それもまたいいだろうと、驚きもしない。わたしは元々会社の養分を吸って生きているサラリーマンなのだから。

第94話 セールス強盗

三田村夫婦は夜中に眩しい光を感じて目が覚めた。すると、寝室のベッドの脇に懐中電灯を照らしている男が立っていた。初めは夢かと思った。

「騒ぐな、殺すぞ。これが見えないか」と、ナイフを首筋につきつけていた。二人とも声が出ない。

「ひょっとしなくても、強盗さんですね」亭主は愛想笑いまでしていた。

「どちらからお入りになりましたの」と、奥さんも丁寧語。

「全く、不用心な家だぜ。堂々と玄関から入ったのよ」

「で、でも、鍵は確かに掛けたと思いました」奥さんの声は震えている。

強盗氏はゲタゲタと下品に笑うと、

「あんな、単純な造りの鍵なんか、ピッキングをするものにはちょろいもんだよ。一昔前の鍵じゃねえか。お茶の子さいさい、二十三秒で開けてやったよ」

「すごいもんですね」と、亭主は拍手までしている。

「いやあ、それほどでもねえが」と、おだてに乗る強盗氏。

「ばかやろう、調子に乗りやがって、こんな金のありそうな豪邸にしては、セキュリティ・システムがないというのがおかしいんだ。屋敷の周りをぐるりと見回したが、いくらでも侵入できる隙だらけだ。いままでも泥棒に入られたろう」

「いいえ、あなた様が第一号、何か記念品でもあげたいところです」

「うるせえ、こっちは真面目に強盗しているんだ。茶化すな。よくもこんな危ない家を建てたもんだ。おれが家主なら安心して眠れないぜ。以前はみんな金は銀行で手持ちは少し、カード時代だから、家に忍び込んでもキャッシュはなかった。空き巣も泥棒も商売にはならなかったが、最近は違う。銀行の金利が下がってからは、株も土地も投資はいっさいが先行き不安、タンス預金の方が安全確実だと、家に現金を隠し持っているのが多くなった。それで、また強盗大流行りってわけだ。金庫も隣の部屋にあったが、あんな剥き出しで目につきやすいのも、どうかしているぜ。ここに金を蔵っていますと見せびらかしているようなもんだ。もう少し安全対策を考えたらどうなんだ」

これは、昔話題になった説教強盗と云うのではないかと、亭主は思った。商売とはいえ、なかなか含蓄がある。守る側より攻める側の方が、その弱点を研究し見抜いている。たいしたものだと、ひどく感心したりしていた。

「判りました。金庫の中のお金は上げますから、どうぞお引き取りください」と、亭主が云うと、
「馬鹿にするな。おれは金などいらぬ。こんな金持ちのくせに、世間の怖さを知らない神経に腹が立つんだよ」

「では、命だけは助けてください」二人とも強盗氏の剣幕に懼れ戦いた。
「おまえらを殺して何の得になるんだ。それより、ドアの鍵ぐらい取り替えてよ。たまたまいま、外に鍵の最新式を持ってきている。ここにパンレットと説明書があるから、いま取り替えてやるよ。市販されているより三割引にしてやる。いまはなあ、鍵なんか使わないんだよ。カード読みとりシステムで開くようになっている」

と、強盗氏はいとも簡単にドアの鍵の金具を外すと、そこになにやら機械を埋め込み、セットしていた。

「どうだい、やってみな、これではピッキングなんかできねえ。この値段じゃ安いぜ。取り付け費用も口ハにしてやらあ」

亭主は強盗氏に代金を支払った。

「それとよ、動産保険は入っているのか」

「何ですか、そのドウサンってのは」

「ケッ、何にも知らねえのか。家財なんか泥棒に盗まれたり、地震で壊れたりしてもちゃんと保険金が出るのよ。ここは、ざっと値踏みして、三千万くらいは最低掛けておいたほうがいいぜ。なんだったら、ここに契約書もあるから、ここに住所、お名前、ハンコ、それと自動引き落としの銀行口座」

「はい、判りました。ここと、ここですね」と、亭主は保険に契約。

「それから、おれは、警備保障会社の代理店もやっているのよ。門や、勝手口には赤外線防犯通報装置を付けた方がいいな。窓ガラスにも衝撃で通報が行くシステムをセットにしてやらあ。これは月々のリースだから、支払いも楽だぜ。お宅なら、一階の窓とドアで、これぐらいの見積もりだ」と、いつのまにか、警備システムのパンフレットを広げて、電卓を叩いている。

「そうですね、だんだんと世の中物騒になってくるようですから、テレビで宣伝しているあれですね。いいでしょう、契約しましょう」

「そうこなくっちゃ、あとで会社から工事にくるから、希望の日をここに書きな」二人は啞然としていた。用意周到すぎるのがおかしいくらい。

「そうそう、それから合鍵とか、鍵を落として車なんか使えないときな、出張サービスもやっているから、このケイタイ番号に電話しな。距離によって料金は上がるが、県内ならどこでも行くぜ」

「はあ、すごいもんですね、多角経営でいらっしゃる」

「そうよ、強盗だけじゃ喰ってゆけないからな。まあ、これでここも絶対に安全だ。誰も入れやしねえ。強盗歴二十年のおれが保証するから間違いねえ」

強盗氏は契約書だけを持って悠々と引き揚げてゆく。

「どうも、ありがとうございます。いろいろとお世話になりました。たまに遊びにお寄りください」と、亭主も人がよく、自分で云って口を押さえた。

警察に電話することも忘れて二人とも手を振ったりしていた。

第95話 テレビを見るな

息子の隆生の様子がおかしくなった。中学三年で受験を控えているというのに、全く勉強する気力もなく、家にいればテレビばかり見ている。そんな子供が増えていた。学校から帰ると、吸い寄せられるようにテレビの前に座る。食事のときだけ、無理矢理連れてこなければ動こうともしない。眠くなるまでテレビだ。消しても、取り上げてもし泣いて騒いで煩いので仕方なく見せている。そのうち、隆生のテレビを見ている様子が異常になってきた。口をあぐりと開けて、涎を垂らし、目も虚ろ、不気味な笑いを漏らしている。勉強しないし、塾にも行かないから成績はがた落ちだった。母親は困り果て、何かノイローゼではないのかと、隆生を病院に連れて行った。

病院の待合室には、驚いたことに同じ症状の子供たちばかりか、大人まで長椅子に腰掛けて、口をぽかんと開けて、虚ろな目。ずらりと並んでいる。

「先生、どうなってしまったんでしょう」

「これは、いま流行のテレビ症候群ですな。隔離すれば直ります。最近の低俗な番組が多すぎますね、番組のあほらしさが感染するんです」

芸能ニュース、歌番組、政治ワイドショー、フードファイター、グルメ番組、若い人向けのバラエティ番組は目も当てられない。他国へ見せられないくらい恥ずかしい番組が多い。日本人の品性と知性が疑われる。

母親は学校にも呼ばれていた。担任の先生から注意を受ける。

「何もお宅の隆生くんだけではありません。学校に出てこなくなった重症のテレビ病の生徒もおります。隆生くんはまだ学校に来るからいいのですが、授業中に携帯テレビを見ているんです。他に、保健室登校ではなく、視聴覚教室登校とあって、テレビのある教室に入り浸りの生徒もおります。成績は全体的に落ち込んでおります。知能指数も十年前の平均と比べても三割落ちています」

「では、これは個人の問題ではないんですね」

「そうです、社会問題、公害ですね。いままで野放しだった政府もそろそろ規制してもらわねば、教育委員会に働きかけているんですが、その委員会のメンバーにも口を開けている人がいます。じわじわと汚染されているのですね。うちの教師にもいました。もう辞めさせましたが、そのクラスでは授業もしないで朝からテレビを教室に持ち込んで、先生以下生徒全員が口を開け、涎垂らしてテレビばかり見ていました」

父兄の相談もだんだんと減ってきた。何故なら、その親たちもテレビ症候群に感染していた。親子で口を開け、涎を垂らしてテレビの前に仲良く座っている光景は珍しくなくなった。テレビ

をそんな患者から取り上げようものなら、「あうあう」と意味のない讒言を云いながら、痙攣を起こして倒れるのだった。テレビから離れると禁断症状が出て、すっかり中毒になっている。

いまや、隆生の母も並んでテレビの前。家事もしないから、洗濯物も溜まり、部屋は汚れ、台所は黴だらけ。父親は困り果て、病気の家族のために家事もしなくてはならない。台所からちらちらとテレビを見ていた父親も、笑いに引き込まれてテレビの前に座ったが最後、もう離れることはなかった。会社へも行かず、起きている間は親子三人テレビの前だ。

電通鬼の十則というのがあった。捨てさせろ、飽きさせろ、という高度成長時代の狂信的檄である。いまは時代錯誤もはなはだしい。それをいまだにやっているのがテレビ局だった。

「視聴率を上げるためなら、スレスレ、ギリギリのところで馬鹿をやれ。批判なんのその、下劣結構、猥褻結構、売れるものならなんでもやろう」

プロデューサーたちはあの手この手。BSやスカパーなどの競合が増えて、各局の視聴率が軒並み下がった。一パーセント下がると、スポンサーから文句が来る。

たった一パーセントでも、百万人単位の間人を見ていないという勘定だから、広告効果に跳ね返ってくる。すべてメーカーの言いなりだった。視聴率の高い番組、時間帯でスポットCM料金単価も違う。ゴールデンタイムの特Aから深夜早朝のCタイムまで。それだけではなく、テレビ局の格差もある。広告でもっている局が視聴率戦争でしのぎを削るのは当然のことだ。

以前、人間の目には留まらない瞬時に広告を見せる、心理的に残像を与えることが禁止になったが、実はそれに似た暗示で、局は内密に心理学者や催眠術師と組んで、どうしたらテレビの前に釘付けにすることができるかという研究がなされていた。テレビを見ている人が画面の中に入り込んだ錯覚を覚えるように、深層心理に訴える信号と光を開発していた。それを〇・〇〇一秒くらいの一瞬で日に何千回と番組の中や、いろんな時間に流す。そして、とうとう国民をテレビ症候群にさせることに成功した。

ところが、スポンサーから疑問が出てきた。確かに視聴率は上がった。だが、新商品の売れ行きはさっぱりで、従来の商品まで売上は落ちていた。それは簡単なことで、みんなテレビの前から動けなくなったので、買い物へ行く頻度が減ったからだった。

それが週刊誌ですっぱ抜かれた。消費者団体が動いた。テレビの不買運動から、テレビを処分する家が続出。学校でもテレビを見ることを禁じた。いままで、茶の間で大きな顔をしていたテレビが消えた。一家の中心がテレビではなくなったら、また家族の団欒が戻ってきた。親子の会話がある。本も読むようになった。

いいことづくめで、日本人は一億総白痴から脱却できたのだ。テレビ局は軒並み倒産。ばか騒ぎは終わった。

嘘だと思ったら、一日でいいからテレビを消してみたらいい。時間とは静かなものだということがよく判る。

第96話 社長と乞食

長引く不況で地方都市にもホームレスや乞食が増えた。高度成長時代以降、物乞いする乞食の

姿など消えたと思ったが、最近はまだ目につくようになってきた。

街で一番立派なホテルの裏口で、生ゴミを漁っている乞食がいた。初夏だというのに、薄汚れたジャンパーに穴の空いたコール天のズボンをはいていた。裸足に履き潰されたズック靴をはいて、体にやかんやら、鍋やらをがらがらと括り付けて、髭ぼうぼう、髪もべっとりくっついていて、体全体が垢だらけ。五十過ぎているだろうか。

そのホテルのオーナーで、他にいくつか会社を営んでいる東野慎三は、何か思いつめた様子で、ホテルの裏へタバコを吸うためにやってきた。そこで、慎三は乞食と目が合って、驚いた。それは自分とそっくりな乞食だった。乞食は慎三に気兼ねして、こそこそとダストボックスをかき回していたが、黴のはえたチーズの塊と、飲み残しのワインの壺を見つけると、そそくさとズタ袋に蔵った。慎三は乞食に声をかけた。

「おまえは、ここで仕事がしたくないかね」
乞食は何を云われたのか理解できなかった。

「仕事、ですかい、こんな大きなホテルで、ですかい。旦那さん、からかうのは止めてくださいませ」

「いや、本当だとも、わしはこの社長をしている東野というものだ。おまえは、わしと似ている、そんな人間はこの世に三人としない」

「そりゃ、そうですが、おらあ、乞食で、とてもこんなところで仕事なんざ...」

「いや、できる。おまえしかないのだ。わしの代わりに務めてくれるのは。そうだ、それだ」慎三は何を思いついたのか、乞食の手を強引に引っ張っていった。

「旦那さん、勘弁してくれろ、おいらは仕事なんかなんも出来ねえ」ずるずると、乞食はホテルの一室へ連れて行かれた。昼のホテルは人の出入りも少なく、誰の目にも止まらない。乞食は何がなんだか判らない。立派な部屋にきよろきよろしていた。

「さあ、その服を脱いでくれ、わしの服と交換しよう」慎三は脱がせにかかった。

「そんな、蚤しらみ、臭いこと夥しい、それにひきかえ旦那さんの背広なんか、とてもとても...」乞食はすっかり裸にさせられた。体型も似ていた。腹が少しへこんでいるくらいだ。

「よし、バスルームで体を洗え。ついでに髭も剃れ」

乞食は命じられるまま、一年ぶりで風呂に入った。お湯がすぐにどろどろになるので何度も取り替えねばならなかった。

「いいか、よく垢を落とすんだぞ」

やがて、乞食が白くなって出てきた。髭を落としたら、ますますそっくりだ。慎三は我慢して乞食のどろどろの服を着た。もの凄い悪臭に慣れるまで大変だった。何か痒い。蚤がいるのかもしれない。乞食は慎三のスーツを着た。疑いもなく、もうひとりの慎三が立っていた。

「いいか、おまえは今日から東野観光の社長だ。東野慎三だ。胸ポケットに名刺入れがあるだろう。わしは今日から乞食になる」「そんな、おらあ、とても社長だなんて...」

「その、おらあは止めてくれ。わしと云いなさい。言葉使いには気をつけるように。いいな、自分が社長であることを忘れるな」

二人はこっそりとホテルの裏口から出た。隣のビルの地下にある床屋へ乞食を行かせた。戻ってくると、もうそれは間違いなく慎三その人だった。

「いいか、このホテルの十二階に社長室がある。そこへ行くだけで、あとはすべて秘書がやってくれる。うんとかすんとか云っていればいい。できるだけ堂々としているよ。おまえは社長だ」

慎三はこれで自由になれると小躍りして裏通りを走って逃げた。何も知らない乞食はエレベーターで社長室へ向かう。すると、秘書が血相変えて飛んで来た。

「社長、どこへ行かれたんですか。隣の会議室に皆さん、お集まりです。急いでください」
広い会議室に二十数名のやはり恰幅のいい紳士たちが集まっていた。乞食は秘書に案内されて、中央の席についた。全員、社長を睨んでいるような鋭い視線を向けていた。

「社長、今日の午後三時、いや正確には明朝九時までに手形を落とすための不足資金一億六千万、どうやって手当するか、ご説明願います」

「一億…」と聞いて、乞食はたまげた。たしか、ズタ袋に拾った百円玉があったはずだと、腰に手をおいて、服を交換したことに気がついた。財布が代わりに出てきた。鱧革の財布にはカード以外お札は入っていなかった。床屋のお釣りが三百円出てきた。乞食はそれをテーブルの上に並べた。

「社長、何の真似です。ふざけるのは止めてください。我が社の存続がかかっている重大局面ですぞ」

乞食は謀られたと思った。

「おらあ、いや、わしは、ただの乞食だ。人に頭下げて金を貰うより能がない」

「よし、それでは社長にメイン・バンクの本店に行ってもらいましょうか、副社長、専務が頼み込んで駄目だったのですから」

外車がホテルの前に回された。社長に経理部長が随行することになった。二時を廻っていた。

「一億六千万の話は通してありますが、すでにご存知のように枠外融資をお願いしているんですから」と、訳のわからない話をされてもさっぱりだ。「うん、すん」としか云えない。

メイン・バンク本店の支店長室で、幹部同志の話し合いとなった。

「おらあ、いや、わしは難しいことは判らねえども、どうかお金を恵んでくれろ」と、乞食は支店長の前で土下座して頼んだ。いつもやっていることだから、慣れている。一同、驚いて直立不動になった。あの、プライドの高い東野慎三が土下座している。こんな真摯な社長の姿を見たことはなかった。支店長は感動して、

「東野さん、どうぞ頭を上げてください。判りました。そこまであなたが誠意を見せたからには、きっと返済も間違いありません。追加融資いたしましょう」

その噂は取引先から従業員に至るまで広まった。社長に頭を下げさせてなるものかと、社員も幹部も団結して会社の危機を乗り切った。

乞食はホテルの厨房に入ると、生ゴミを漁ってまだ食える残飯を食べていた。

「社長、何をされているんですか」秘書は驚愕した。「まだ、喰えるもんだで、勿体無い」

「だそうだが、これからはモノを粗末にしないように、職場単位でQCサークルを作るように」と、役員から大号令がかかる。ロスを減らして利益を出す。

「社長は頭が低くなった。人が変わったようだ」と、好感を呼んだ。

一方、本物の慎三は段ボールハウスに寝泊りしながら、気楽な生き方をしていた。乞食は三

日やったら止められないというのは本当だ。金の苦しなくていい。人間関係の煩わしさもない。もう、会社に戻る気はさらさらない。コンビニの裏口で賞味期間の過ぎた弁当を貰って公園のベンチで食べていた。好きなときにごろりと寝て、気楽でいい。

「こんなにも寝て楽しむ時あれど浮世の馬鹿は起きて働くか」拾った新聞を掛けて、草はらで鼯かく。こんなにぐっすりと眠れたこともない。

第97話 当節若者事情

ある日、青木治郎のところに赤紙が配達されてきた。五十円の料金別納のハガキには、「召集令状」と書かれてあった。防衛省大臣の名が印刷されてある。突然の訳のわからないものが舞い込んだので、そのハガキを市役所に持って行って窓口で訊いてみた。

「あのう、こんなものが自分宛できたんですが、これって何なんですか？」すると、市民課の職員総立ちになって、笑顔で全員拍手しはじめた。

「おめでとう」と、口々にお祝いを述べる。

「あのう、何か当たったんですか」と、治郎はまだ飲み込めないでいた。

「そうです。あなたは選ばれたんですよ。よかったですね」

「何かいいことでもあるんですか？」

「あら、新聞とかニュースとか見ていないんですか」

「そんなもの見たことないっすよ。マンガや、歌番は見るけどね」

「ああ、知らないんだ。あなたは二十歳から二十五歳までの若者から抽選で選ばれて、民間自衛官になれるのよ。戦争へ行けるの、おめでとう」

「あのう、おめでとうって、云われても。おれにはコンビニのバイトあるし。戦争って、ひょっとして、弾やミサイル飛んできて、戦死することもあるわけでしょう、それが、めでたいって...」

「何云ってるんですか、あなたも定職がないんでしょう。なかなか入りたくても入れない国家公務員になれるんですよ。バイトの収入よりいいし、ボーナスは出るし、戦地手当も付くし、お国の名誉で死んだら、あなた、勲章もらって、遺族は恩給が付くんです。こんな待遇してくれる仕事ってないですよ。しかも三食昼寝付き。入隊する前に身体検査はありますが、あなたならA種合格間違いなし」と、職員に羨ましがられたが、治郎はどうも納得がゆかない。いつからこうなったのだろう。

新聞も読まない、政治には無関心、そんな若者が増えている中、治郎のような無知丸出しは珍しくない。国会議員の汚職を次々に国民の目に晒し、生贄として関心を逸らせている作戦を政府はとっていた。その裏では着々とある準備が進められていた。教科書問題から、君が代、日の丸、靖国と既成事実をどんどんこしらえて、有事立法を成立させると、防衛庁は省に昇格。国家総動員法が通過すると、もう怖いものはない。他国の非難なんのその。ついでに煩いマスコミの口をメディア規制法で縛り付け、果ては言論の弾圧にまで乗り出して、レッドページにまで進んでいった。あれよあれよと云う間に戦前へ逆戻り。

「ということでよお、おれ、自衛隊に入らねばならなくなったんだ」

治郎のバイト仲間は、みんな羨望の眼差しで治郎を見ていた。

「いいなあ、戦車や戦闘機に乗れるんだぜ、超カッコイイじゃん。おまえのプレステで鍛えたシューティングゲームの威力を見せてやんなよ」

治郎の彼女は大反対だった。

「ねえ、なんとかそのヘイエキというの拒めないの」

「兵役拒否すれば懲役だって。おまえ、刑務所行きだぜ。それも辛いなあ」
「なんかいい方法ないのかなあ」と、彼女も彼氏が戦地へ行かないことを考えていた。
「そうだわ、こんなときはいつもの仮病よ。あんた、いつも学校、そうしてサボったじゃない。得意でしょ」

「で、どんな病気にするんだ。風邪くらいじゃ、免除にしてくれないぜ」
「そうねえ、ノイローゼが昂じて精神障害ってのはどう。半分地でゆけるし」
「うるせえ。でも、それは使えそう」

兵隊検査の日、治郎は練習した通り、視点の定まらない目をして、涎を垂らし、わざとボケっとした顔をして、意味のない笑いを浮かべていた。係官が面接した。

「名前は」「へへへへ」「住所は」「へへへへ」何を訊かれてもへらへらと笑っていた。係官は怒った。

「誰だ、こんなやつを招集したのは、家に帰せ」すると、治郎の馬鹿は急に晴れやかな顔になり、

「真面っすか、おれ、帰れるんすね」と、云ったものだから仮病がバレた。兵役拒否とみなされて、刑務所へ護送されてしまった。刑務所はそんな若者で溢れかえっていた。どこの刑務所も満杯をとうに越していた。定員の倍以上詰め込んでも収容しきれない。

政府は大きな誤算をした。いまの若者たちが戦争に向いていないということの読みの甘さがあった。ここまで酷いとは思わなかった。ただで飯が食える、働かなくてもいい、刑務所の住み心地も悪くない。第一、国が守ってくれるので危険がない。そこは若者たちの天国だった。みんなで踊ったり、歌ったり、だらだらと遊んだり、日がな寝ていたり。

「これでは、敵国の若者一人に、わが国の若者十人がかりでも負けるでしょう。スポーツを見てもお判りのとおり、最近は根性もなく、ふやけて、小国にも勝てません。そんなだらしのない若者で刑務所の予算は使い果たしました」

政府はとうとう徴兵制をやめた。第三国から傭兵を募ることにした。金だけはある。

治郎は彼女とゲーセンにいて、戦争シュミレーションゲームをやっていた。

「五機撃墜したぜ、まったく、戦争はゲームだけにしてもらいてえ」

第98話 ワークシェア

とうとう、週休五日制になってしまった。

工務店に勤める高杉は、給与が半分以下になったことに不満もあるが、どこもそうだから我慢していた。ワーク・シェアリングが叫ばれてから、各会社にも要請があった。特に役所の仕事を請け負っているこの工務店では、上からのお達しには逆らえない。しぶしぶ必要のないパートを導入した。一日一時間の者もいる。週に一日だけの人もいる。それに比べたら、週に二日働ける高杉はいい方かもしれない。

ドアを取り付けてくれという一般家庭からの依頼があった。たったドア一枚のことに、車が家

の前に六台も到着。十人くらいの作業員が殺到する。依頼主は恐れをなして、

「ドア一枚ですよ、そんな人手で高い請求じゃ払わないからね」と釘を刺した。「大丈夫ですよ、工賃は二人分だけよりいただきます。みんな自分の作業を終えたらすぐに帰ります」

「と、云ったって、十人も必要なんですか」

「いま、ワークシェアで仕方ないんですよ。一人は穴を空ける役、もう一人はネジを締める役、もう一人は運搬というふうに分業しているんです」

一事が万事こんなことだった。仕事を分け合うということは大切だ。何年も仕事がなく困っている失業者も多いから、笑えない。

ビーカーの中に細菌を入れて培養していると、あるところまでは増殖してくるが、満杯になると、その小さな生命たちは、自分たちの消費を抑えて全員が生きるよう、繁殖を止めて、生きる糧を分け合うのだという。自然界でもそんな本能のようなものが働く。いのちの原始共産制だった。それがいま人間界で仕事の上で分け合うことをし始めた。ただ、それは底辺の現場での分けあいだから、苦しいものがさらに分け合う貧者の一灯にも似ていた。

許し難いものはそんな時代に天下り、退職金を一億近く貰うやつ。それだけあればどれだけの人が仕事につけるか。

高杉は新聞を見て、憤慨していた。高級官僚だけがいい思いして、何がワークシェアだ。三百万も月の報酬貰って、それをワークシェアすると、二十人が働ける。と、高杉は想像していた。

「相談役がゴルフするのはいいが、途中で六人がピンチヒッターで代わるそう。一人三ホールづつ回るワークシェアと云うんだ」

「夕食会の途中ですが、相談役は別の人と交代になります」豪華な食事を目の前にして、立ち去る者は恨めしそう。代替りの者が着席して、食事の続き。

「あら、いつもの相談役さんよりお若い方、素敵ですね」と、銀座のクラブのママ。すごい店だ。おれたちの月給なんか一晩でふっとんでしまうだろう。出てくるのもコニヤックの上物、ホステスもピカー。手を首に回して、いいところまでいったところで、交代が来る。二時間交代だから、ゆっくりも吞んでられない。こんな接待ばかりの楽な仕事して時給にしていくらだ。と、計算する者もいた。さすが、高級官僚は平民と違う。夜更けて、愛人のマンションへ。シャワーを浴びてベッドインする間に交代がくる。そこまでワークシェアするか。

高杉は仲間を集めて、会社を作った。名づけて「ワークシェア株式会社」。一種の人材派遣会社だが、仕事がない者の技術、得意分野を登録させて、各会社へピンチヒッターで送りこむというもの。「残業請け負います」「繁忙期のお手伝い、プロがやります」「決算、棚卸し業務の応援隊」「倒産、残務整理の後始末やります」

もっと積極的に打って出れば、いくらでも仕事はある。隙間を狙うのだ。人の手薄な時間帯、真夜中でも早朝でも、日曜でも元旦でも、必要な頭数を揃えます。というキャッチでいくらでも仕事は回ってきた。みんな楽な仕事ばかりしたがるから、仕事がない。高杉の会社は二十四時間年中無休の体勢だが、電話は鳴りっぱなし。一時間でもやりますが、助かっている。急に社員が休んだ。店員が遅刻して店が開かない。いろんな仕事が舞い込む。仕事の穴埋めもそれは立派な仕事。

生涯、代打でもいい、おれの代打をするやつがいないうちはと、高杉、自らバイクで急行する

。さる工務店からの電話で急場の御用。

「どうしました。ドアが壊れたんですね。これでもわたしは工務店に二十年いたんです。すぐに直しましょう」

第99話 静かすぎる生活

音のない世界に住んでいた。目を閉じていれば、心臓の鼓動の他は、しーんとしている。あまりに静かすぎると「しーん」という音さえ聞こえる。この音はなんなのだろうどこから来る音なのだろう。「しーん」でさえ煩いと思うようになる。自分の血液が体内を巡る音であるものか。だが、何かのもの音がすれば、その「しーん」は実に些細な音であることに気がつく。

わたしが誰もいない、遠いところに一人で暮らすようになったのは、耳鳴りがする音に対するノイローゼを克服するための療養生活のためだった。

かつてはどれほどの音に囲まれて生活していただろうか。わたしの住まいは国道から近いから、真夜中でも暴走族や長距離トラックの騒音が絶えない。電車もすぐのところを走っているから、特急、貨物は夜昼を問わずに走っていた。それは音だけでなく振動までも伴っていた。家の近くには踏切もあったので、電車が通るたびに警報が鳴る。日中は子供らの遊ぶ声も聞こえた。うちは大家族だったので三世代九人がひとつ屋根に暮らしていたが、わたしの息子たちも遊びさかりで煩い。テレビゲームをやっている音が、電子音や、リフレインされる、同じテーマが半日聞かされることもあった。わたしが自宅療養で寝ていた部屋の階下では年寄りたちがテレビを見て大笑いする声がいとも聞かれた。耳が遠いので自ずとボリュームは高くなる。隣の部屋では長男がロックをステレオでがんがん鳴らしている。何度煩いと怒鳴ったことだろう。電話は五分おきに鳴ったし、玄関のチャイムはセールスが引きも切らずに鳴らす。出るまで鳴らし続けるのは始末が悪い。洗濯機、掃除機、電子レンジの音までが気になる。ケイタイの着メロも誰かのだろう。ストップボタンを押していない目覚時計が夕方の誰もいない部屋で鳴ったりする。近所の子供たちが遊びにくると、家中が大変だ。廊下を走る音、階段を上ったり降りたり、トイレの水洗の音も、ドアを開ける音もいい加減にしてもらいたい。

わたしは以前はこうではなかった。音楽はクラシックとジャズをよく聴いた。CDやMDのライブラリーもかなり揃っている。アナログ・ディスクも結構持っていて、音響にもうるさかった。カートリッジはどこどこ、アンプは真空管、スピーカーシステムはと、オーディオマニアでもあった。FMを留守録音までして聴いている熱の入れようだった。外を歩くときも、MDをヘッドホンで聴いていたし、車の中でも音楽を切らしたことはない。

それが、病気になってからは音楽も煩わしく、うるさいと思うようになった。音という音が騒音に聞こえる。耳の奥で残響する。頭痛や眩暈までしてきた。苛々して、「うるさい」とむやみやたらに叫ぶので、周囲が異様な目で見えるようになった。テレビもラジオもステレオもいらない。それどころか雨音、風の音まで気に掛かるようになった。どんな些細な音でも耳障りになって眠れなくなる。時計の秒針を刻む音までがうるさく感じられた。癩癩を起こして、いままで何個

の時計を壊したか。

とうとう、わたしは部屋の壁に防音壁を張り巡らし、窓も二重にするという大かがりな工事までやらせた。床にも二重三重のシートから絨毯まで敷いて。かなり、周囲の騒音は減った。だが、今度は自分の心臓の音が気にかかる。ドクドクも何とかしなくてはならない。どうしたら止めることができるか。うるさい。わたしはカッターナイフで自分の胸を刺した。心臓には達せず死ぬことはなかったが、家族は心配して、わたしをこの保養施設に入れた。

いつからこうなったのだろうか。気にすればするほど、人間の感覚はその部分だけを増幅させる。強迫観念が強い性格なのだが、低周波や電波までも聞こえると、騒ぐほどの気遣いではない。自分では普通の人間だと思っている。音に対して人一倍敏感なのは、聴覚が優れているせいなのか。絶対音感の持ち主は、どんな些細な音でも聞き分けられるというが、わたしもそれに近い。この世界の半分、いや、大半がいまや音で構成されていると云っている。小さな、虫が息するような音にでも過敏に反応し、びくりとする。じっと耳を澄ませる。いつもびくびくしていること自体が病気なのだろうか。

それにしても、ここはいいところだ。何も音がしない。わたしはカプセルの中で寝て、一人用のコテージで生活していた。窓から外を見れば、そんなコテージが無数に建っている。そろそろ食事の時間だった。大きなドームが食堂や病院になっている。そこまで宇宙服を着て、歩いてゆく。重力は六分の一だから飛んでゆくような感覚。真空だから音を伝えるものがない。だから外はしんとしている。各コテージから、わたしと同じような患者が食事のためにやってくる。夜空に地球が明るく蒼く輝いていた。

第100話 亡命

日本人の若い女性だけが十二名、格安ツアーで中国へと旅立っていた。全行程食事、観光なしだから、航空券と宿泊費だけの自由行動が多い旅行だった。希望者は別にオプションを申し込めば、桂林や万里の長城への一泊旅行も参加できる。実は、格安で海外へ連れてゆき、オプションで儲けようというのが、旅行会社の魂胆であったが、このツアーの申込み客は全く一人も参加しないので、添乗員はふて腐っていた。一様にみな肥満の女性ばかりなのも申し合わせたようでおかしかった。

彼女たちは別に知り合いでもなければ、一人一人が日本各地から集まっていて、偶然にこのツアーに参加したように見えた。ただ、どうしても気になるのが全員が百キロ近いが、それを超える体重の客ばかりだということが、添乗員には何か解せないところだった。みんな、機内食には手もつけない。食べたいのに我慢をしているふうで、じっと目を閉じている人もいた。スチュワーデスも首をかしげる。「どこか、具合でもお悪いんですか」と、訊いていた。別にそんな様子もなく、一同外の景色を見たり、雑誌を眺めたりしていた。

飛行機は北京の空港に着陸した。旅行会社のホテルまで全員を引率する。旅行会社のサービスで軽いウエルカムランチとドリンクが振舞われた。それも全員が拒否した。

「これは、費用の中に入っていて、お代金はいただきませんから」と、勧めても意志強固で、口を付けようとしめない。添乗員は、ひょっとして、これはダイエットのための旅行なのかなと、思ったりした。

この女性たちはホテルのロビーでは親しげに話したりしていたから、他人同士でもなさそうだ。旅行に来たという開放感も感じられない。ショッピングに走る女性客とは別に、ホテルから出る気配も見せない。暗く、静かに部屋に閉じこもっていたりするの、何か不気味なくらいだった。

その翌朝、事件は起こった。十二名のツアー客全員が、なんと北朝鮮の領事館に亡命を求めたのだった。そのニュースは全世界を六時間以内に駆け巡った。臨時ニュースから、号外まで出た。人間が犬を齧る以上に衝撃的なニュースだった。逆のケースでも最近は新聞テレビを騒がしているのに、ヨド号事件以来の大ニュースだった。しかも、若い女性たちには政治的背景は全くない。赤軍や、過激派、犯罪者といった影はまるでない、ごくふつうの女性たちであった。ツアー参加者名簿から全員の身元は割れた。顔写真と履歴が翌朝の新聞に公表された。亡命するような理由が判らなかった。日本より所得が低く、餓死者まで出ている北へ行く理由が判らない。

十二人の接点が判明した。あるメーリングリストの中に全員の名前があった。肥満で悩んでいる女性たちの会があった。彼女たちはその中で交信しあっていたものらしい。同じ悩みを抱える女性たちが、こんな行動に出るのが判らない。

北朝鮮の領事館で、十二人の女性たちは涙ながらに訴えていた。

「わたしたち、このまま日本で暮らしていれば、殺されます。テレビではおいしそうな料理番組、コマーシャル。買い物に出れば、おいしそうな匂い、ついつい買ってしまおうんです。それでも痩せたいから、エステに通ったり、ダイエット食品を買ったりしていますが、どれもインチキで高く、借金も増えました。日本は誘惑が多すぎるんです。成人病になって、このままでは長生きもできません。恋人もできないし、結婚なんて無理です。生活も太いからやりづらいし、なにかならなまで将来のことを考えると暗くなります」

「なるほど、それでダイエットのためにわが国に亡命したいと」

「いいえ、テレビでマスゲームを見ていて、みんなほっそりしていて、綺麗な人ばかりでしょう。食糧事情も大変なんだろうが、わたしたちもああ成りたいって、みんなで話し合ったんです」

「判りました。あなた方を受け入れましょう。その代わりに、いまのおっしゃったことを全世界に宣伝してもらいます。いかにシホンシュギというものが、人間を墮落させ、果ては殺しにかかるかということをおね」

女性たちは、確かに北朝鮮に亡命してからは、過酷な労働と、日に一度だけの食事のみでみるみる痩せた。それを互いに悦んだのも初めのうちだけだった。痩せすぎになった。そのうち、喰えるものは雑草でも木の皮までも煮て食べた。ふらふらになっても軍事教練はある。犬や猫は食べられてすでに姿はみかけない。隣り近所でばたばたと餓死者が出る。

「こんなはずではなかったのに、ここまで痩せたいとは思わない。日本へ帰りたい。まだ太って、おいしいものをたらふく食べていたほうがよかった。こんな骨皮では恋人どころではないわ」

果てはすっかりと栄養失調になって、道端へ倒れた。その脇を陸軍の戦車と歩兵が通りすぎて

ゆく。

第101話 アナログ同盟

和田と敦賀と木村は月一の飲み会を設けていた。互いに本好きが、古書店で頻繁に顔を合わせるうちに、なんとなく酒の席で本について語ろうということになった。五十過ぎて、アナログ人間を頑固に守り通すという同盟を作っていた。三人だけだから会というのもおかしいが、ちゃんと会則もある。時代に逆行して、パソコンは持たない、ケイタイは持たない、CDは聴かないという徹底してデジタルを敬遠しているという同志だった。

人前で、堂々と大きな声でケイタイで話しているのも、何か違和感があり、許されない行為に思っていた。まして、電車の中でもホームでも、みんな同じような格好でケイタイを眺めながらメールか何か打っている仕草がとんでもなくおかしいものに思っていた。

パソコンもあの小さな薄いノート型の中にいろんな機能が入っていて、いまはパソコンぐらいできるのが常識になっているが、さも、わたしはパソコンができると誇示しているところが気に入らない。それがなんなのだと反感と抵抗を示していた。

歩きながら、ヘッドホンでMDを聴いているのも許せない。人と話するときぐらい外せよと、無礼に怒りすら覚える。片時も耳から音楽を離さない神経も、なんとなく音楽中毒患者のようで受け入れ難いものがある。

いまは、七十過ぎの老人でも以上の三点セットを使いこなす者もいるが、年に関係なく、文明に流されまいとしている三人だった。もともと流行は追わない性質だったが、必死で不便にしがみついていた。

飲み会の知らせだけでなく、連絡はすべてハガキでやる。会社でも仕事ではできないと、パソコンは使わないから、白い目で見られている。電卓も使わないでそろばんだ。徹底している。三人にとって、デジタルの見えない世界は、地動説ぐらいの不可解だった。判らないもの、見えないものは許せない。

「この前、特注のアームをようやく手にいれたんだ」飲み屋で三人の定例会で木村が話していた。アームはレコード・プレーヤーの針を付けるあれである。アナログ・ディスクに凝っている。カートリッジはどこどこの、スピーカーはJBLのフルレンジと、ひと昔前のマイノリティのマニアだった。

「今度、キース・ジャレットのレコード貸してくれよ。録音したら返すから」

「まだ、アカイのオープンリールは動いているのかよ」

時代はカセットから、CD、MD、DVDと進んでいるのに、五十年前のテープデッキに狂っている。

飲み屋で若い連中がケイタイで話している。三人とも嫌な顔をして相槌を打った。電話はプライベートな部分だと思うのに、公言するような大声。さも、わたしは友達がいるんだぞと誇示しているような嫌らしさに身震いする。

だが、この三人にも共通の悩みがあった。アナログ貞操を護るために、出世を棒に振っていることだった。上司からは、いまどきパソコンができなくてどうすると、イヤミを云われ、部下からはケイタイを持っていないオジンと、馬鹿にされ、社内のコミュニケーションのネットワークからも外されていた。

「そうなんだよ、家では女房、娘からまで馬鹿にされて、なあ」と、慰め合う会でもあった。

敦賀が会社に出社したとき、事務所の中は騒然としていた。会社にあるすべてのパソコンがランで結ばれていたが、ことごとくウイルスにやられて、データが破壊されていた。顧客情報から経理、給与計算まですべてがパーになった。ただ、全員が呆然と立ちつくすだけだった。仕事は何もできない。そんな中で、敦賀だけが、いつものバインダーを開いて、顧客名簿からあちこちへ電話しまくり、仕事をしていた。

「無傷なのは敦賀さんだけか」と、みんな羨ましそう。

時を同じくしてテレビや新聞で携帯電話から出る電磁波が癌になると大々的に報道していた。そして、会社のパソコンや計器類を狂わせるというので、社内では使用禁止となっていた。人体に対する影響から、ケイタイを止める者が続出。実際に病気になった者から損害賠償裁判があちこちで提訴されると、メーカーは製造中止せざるをえなくなった。

突然、いままで手から離れなかったモノが消えたから大変。手持ちぶたさで、不安を訴える者が次々に病院を訪れる。コミュニケーションが断たれて孤独になり、自殺する者まで出た。禁断症状が社会現象にまでなった。行き場がなくうろうろする連中は神がいなくなった信者たちだった。

「今回のウイルスはすごいらしいな、全世界で最大の被害をもたらしたって。どんどん脱パソコンだと、昔の手作業に戻っているというじゃないか。いい気味だ」

アナログ同盟の月一の定例会が飲み屋で行われていた。氣勢をあげているのが、いつにない三人。

「ケイタイも法的規制がかかって、ざまあみろだ。これからはおれたちの時代がまたやってくるさ」と、和田もご機嫌だ。

街の郵便配達人がふうふうって配達していた。手紙がまた倍以上に増えた。ポストの前に行列ができるほど。井戸端会議もあちこちで見かけた。また人々の会話というものが復活した。人間関係までオンラインからオフラインに切り替わった。ようやく相手の顔が見えてくる。

第102話 新檜山節考

神社の境内に年寄りたちがたむろしていた。どこか様子がおかしい。よく見ると寝間着姿の者もいる。スリッパをはいたままの者もいる。片足がゴム長で片足が下駄の者もいる。お位牌を握りしめてうろうろしている老婆もいた。かなり痴呆が進んだ者ばかりだった。

そこへ市役所のバスがやってくる。市の職員たちが数人降りてくると、手慣れた態度で老人た

ちをバスに収容すると、どこかへ走り去って行ってしまった。職員はみんな不機嫌な顔をしていた。

この辺りの町内で一番金持ちの山田さんのお屋敷の前にも老人たちがうろうろしていた。見ると裸足の者もいる。蒲団を抱いていて、門の前で寝込む者まで出てきた。山田さんのお手伝いさんは、のら犬でも追い払うように、しっしっと老人たちを四散させると、門の前に大きな貼り紙をした。

『家の前に老人を捨てないでください』

果ては、ゴミ置き場に老人が立っているときがある。年寄りをなんだと思っている。犬猫のように捨てるのだ。街中、そんな老人たちがうろうろと歩いていた。中にはのら老人もいて、ホームレスと区別もつかない。

というのも、老人が人口の割合で三人に一人になると、介護保険だけでもやりくりつかず、家族へ負担がしわ寄せしてきた。老人ホームも満員、入所料も需要と供給のバランスで何倍にもなり、とてもその辺のサラリーマンでは払えない。まして年金でも賄えない。社会的入院もベッドが足りず、病院もお断り。ホームヘルパーさんもかなり高くなっている。共稼ぎでなければ子育ても家のローンも払えないときに、ボケ老人の面倒なんか見ていられない。てっとり早く捨てるに限る。

新聞にこんな記事が出ていた。

「コインロッカーグランパ、家族逮捕」

人目につかないコインロッカーの大きい方に、ボケ老人を押し込めようとするところを、見回りの警官に見つかって現行犯逮捕されたというニュースもいまは驚かない。あちこちでやっていることだった。昔はコインロッカーや神社に赤ん坊を捨てた。いまは老人を捨てる。

桐山の家でも恍惚の人が一人いた。今年八十四になるじいさんだ。アルツハイマーで健啖家、御飯は丼で二杯もおかわりする。元気すぎるから手に負えない。「克子さん、朝ご飯はまだかな」克子は長男の嫁だ。

「何云ってるの、おじいちゃん、いま食べたばかりでしょう」

「そうか、あんた、わしを餓死させる気だな、そんなに邪魔かい、御飯も食べさせないで殺す気なんだな」じいさんは本当においおいと近所に聞こえるような大声で泣く。仕返しに小便をわざと廊下に撒き散らす。徘徊病もあって、裸足で下着のままとんでもない遠くで保護されたりする。そのたびに家族はじいさんを探しに駆け回る。

「あなた、もうわたし疲れしました。あなたは会社だから何も見ていないのよ。女の力で抑えられるおじいちゃんでないのよ、ものすごい力で振りきるのよ。あなたも一日、おじいちゃんについてごらんさい。よちよち歩きの赤ん坊より始末が悪いんだから。目が離せないの」克子は毎日の格闘でぐったりしていた。

「おれだって日曜日は見ているだろう」「それは、車でどこかへ連れて行ったらおじいちゃんも大人しいわ。家にじっとしている人でないから大変なのよ」

亭主の洋次も平日一日だけお守りをして、その実態が判った。外へ出たいと暴れるのが尋常ではない。冷蔵庫の中は荒らして喰い散らす。止めるまで喰っている。半日でギブアップした。

洋次はショックを受けたように居間でひとり夜中、酒を呑んでいた。克子も起きてきた。

「あなたには一日のことでも、わたしは毎日なのよ。どれだけ大変か判ったでしょう」

「おやじも力だけは昔とった杵柄で衰えていない。アルツハイマーも進んでいるんだな。このままでは家庭も破壊されてしまう。老人ホームへでも入れるか」

「そんな、いくらかかると思っているんですか。よほどの財力がなければいまは入れないの」

「じゃ、どうすればいいんだ」ついに洋次も弱音を吐いた。

「捨てるのよ」克子は冷たく云いきった。

家族でドライブしようと、子供二人とじいさんも乗せて、高速道路を走っていた。後部座席では子供たちがはしゃいでいる。じいさんは神妙な顔で窓の外の景色を見ていたが、ときたま「おおっ」と、意味もなく驚いて指をさしていた。洋次と助手席の克子はしんみりと口数も少ない。じいさんを捨てに遠くへ行くのだ。近所では戻される。誰も知らない他県まで行かねば。

大きな街に着いた。デパートの駐車場に車を止めて、店内を見て歩いた。子供たちはアミューズパークで遊んでいた。じいさんはベンチでぼんやり座っていた。今だと、夫婦で子供たちをそっと連れ出して、駐車場まで走った。洋次は何度も未練がましく後ろを振り向いていた。克子も涙を流していた。

「あなた」と、克子が洋次にもたれかかる。「いいんだ、これしかないんだ」

「あれ、おじいちゃんは？」と子供たちは不思議がる。

車に戻ると、そこにちゃんとじいさんが待っていた。

「遅い」と、威張っていた。「あんなに走ってきたのに、どうして」

二人はへなへなとその場に座りこんでしまった。

今度は、ドライブインで昼食をとったとき、じいさんがトイレへ入った隙を狙って急いで出てきた。車に乗ると急発進した。「おじいちゃんは？」と、子供たち。五十キロのところを八十キロで走っていた。すると、後ろからパトカーが追跡してきていた。「ヤバイ」と、洋次はスピードを落とした。パトカーが停止させるように、洋次の車の前に付いて止まった。洋次はスピード違反で捕まったものと観念していた。すると、そうではなかった。パトカーから降りてきたのは警官とじいさんだった。

「こちらは、お宅のおじいさんですね。ドライブインから車種が通報されました。まさか、捨てたわけではないでしょうな。老人の遺棄は一年以下の懲役、もしくは五百万円の罰金ということになっていますが」

「いいえ、急に見えなくなって、こちらも探していたんです…」と、克子がごまかす。じいさんはご機嫌に鼻歌までうたっている。

また未遂に終わった。車の中で孫と遊んでいるじいさんを二人は眺めていて、だんだんと幼児化してきたじいさんを微笑ましく思っていた。

「まあ、子供が三人いたと思って諦めようか」

「そうね、大きな赤ちゃんがいると思って、わたしも頑張るわ」

二人とも捨てるという緊張感と罪悪感から解きほぐされて、悪夢から覚めた人のようにほっとして帰途についた。

目が覚めたとき、その恐怖がおれを圧迫していた。頭ががががんとしている。二日酔いのような、後頭部をしこたま殴られたような痛みと朦朧とした感覚の中に、おれは起きていた。目覚めた場所はビルの際間のダンボール箱が積んでいる上に仰向けになって寝ていた。おれの靴と思われるものが一足近くに落ちていた。着ている服にも見覚えがない。ラフなスポーツウエアを着ていた。朝、早いせいか、街はまだ始動していない様子だった。

それよりなにより、おれは頭の中が空だった。昨日もおとといも、一週間前も一月前も十年前も、おれの過去がない。一時的な記憶喪失なのかと、ぼんやりとビルの上を見ていた。あそこから落ちたのか。起きあがって、体を見てみた。どこにも異常はなさそうだ。頭痛がするだけだ。思い出そうとするとズキリと脳の奥深いところが疼く。

靴をはいて、おれはオフィス街のど真ん中に立っていた。ここはどこだろうか。場所だけではない。時間も日付もおれの中から抹消されていることに気が付いた。ポケットを探ってみると走り書きしたメモが出てきた。数字とアルファベットの羅列で、意味不明の内容だ。首からはネックレスのような金属片がぶらさがっていた。見ると、そこにも数字と英字の不明の番号が印字されている。所持品は他にない。おれを示すなにもものもない。おれは誰なんだ。ここはどこなんだ。

ビルのガラス窓や看板にはおれの知らない横文字が書かれている。英語ではなさそうだ。薄暗い街がどうやら動き出したようだ。地下鉄の出口から通勤客が続々と湧出してくる。車も走り出すが、見たこともない地味な車が走っている。ここは外国には違いない。みんな、おれを異様なもののように見てゆく。ガラス戸に映る自分を見ていた。黒々とした髪、目の鋭い精悍な顔、見知らぬ他人が立っていた。おれは、指で顔をなぞっていた。これが、おれか、おれの顔か。

広場に出ると、中央のモニュメントに赤い大きな国旗がはためいていた。

おれは、通行人を掴まえては質問していた。

「ここはどこです。いま、何時ですか」日本語だから通じない。みんな避けるように無視して過ぎ去る。

そのうち、黒塗りのノーズの長い車が三台、おれの立っている歩道脇に停車すると、バラバラと赤い腕章をした軍服の男たちが数十人でおれを取り囲んだ。おれは、あっというまに両手を抱えられて車に乗せられた。通行人の野次馬の輪が出来ていた。

おれは、政府のある建物に連行された。警察署でも陸軍の建物でもなさそうだ。おれは建物の地下室にある、かなり嚴重なドアをいくつも開けた部屋へ目隠しされて連れてゆかれた。目隠しをとったところは裸電球がぽつんと点いただけのコンクリート剥き出しの冷たい部屋だった。椅子と机よりない。そこに数人の軍服の男たちが立っていた。おれは椅子に座らせられていた。

「○▲×●□？」

と、理解のできない言語で詰問してくる。おれの首から金属片のネックレスを外すと、それを机の上に置いて、それを指さして何やら、おれに訊いているようだ。「判らない、判らないんだ。ここはどこだ。おれは誰なんだ」

おれは、また頭痛がし出したから、頭を抑えるようにして叫んだ。すると、若い女が部屋に入ってくる。黒のタイトスカートに昔風のブラウス。

「あなたは、どこから来たのかと訊いています」と、女は綺麗な日本語の発音で話しかけた。通訳らしい。ようやく、おれは言葉のはけ口をみつけたように喋り出した。

「ここはどこだ。おれは、自分が誰だか判らないんだ」

「ここは、モスクワです。あなたは日本人ですね」

「モスクワ...、ロシア、なのか。日本、おれは日本人なのか」

通訳は軍服の男になにやら話していた。

「あなたは、記憶喪失になっているか、診断いたします。シベリアの捕虜収容所からの脱走兵かもしれないので、写真で照会もいたします」

「捕虜だって、このおれが」「あなたの年齢を訊いています」「判らない。何も判らない」「年齢不明、推定四十歳。日本人。髪の色、目の色、黒、身長一七三センチ、体重六十七キロ...」多分、そんなロシア語で書類に書き込まれていった。スケールで体のあちこちを測り、上半身どころか、全裸にさせられて調べられた。ポケットからさっきのメモが出てきて、それも机の上に並べられた。おれの何か証明するものは、首から下げられた認識票のようなものとメモだけだった。

医務室のようなところに連れてゆかれた。白衣の医師がおれの検査にあたる。診察室にどこかで見たことのある手を挙げた男のポスターがあった。カレンダーもあった。ようやく日付が判る。今日は、一九五一年の五月十九日なのだ。

「血液型A B型」多分そんな身体検査の結果が書類に書き込まれた。

レントゲン撮影もした。特に歯が念入りに調べられていた。検査が終わると、おれは、またさっきの取り調べ室へ連行された。

「あなたにスパイの嫌疑がかかっています。正直に白状すれば、ひどいことはしないそうです。それと、あなたの着ていた服の繊維ですね、そして、歯の治療のあとに科学者たちが非常な興味を示しています。日本の隠された技術に驚いています。さあ、教えてください。なにもかも」通訳は机の上の二枚の謎の英数字を指で示した。

「これは、なんという意味ですか。この暗号の解読法を教えてくださいと、上が申しております」通訳は急に強い口調になった。おれはちんぷんかんぷんで、その記号の意味すらも判らないと主張した。軍服の男は机を叩いて、ロシア語でなにやら叫んでいた。おれもそれに対抗するように、叫んで立ち上がった。

「おれが、誰か教えてくれよ。おれの名前、おれの家、おれの家族を教えてくれ」

それからの日々は独房と尋問の繰り返し。「おまえは誰か」「おれは誰だ」自分で自分を捜さねばならない。それは実に長い旅に思えた。

メモ用紙にはこんな文字が書かれていた。

kitamura-taku@hotmail.jp

そして認識票にはこんな文字が印字されていた。

<http://www.mmjp.or.jp/kikamura-taku/>

第104話 秘境の最高峰

チョモランマの西、二十キロにK14という人跡未踏の山が発見された。八千メートル級の山では、二十一世紀に入ってからみつかるということが、驚きでもあり、不可思議であった。

一番乗りを目指して、各国の登山隊が一斉にその山をめがけて登頂していった。日本からもベテランのエベレスト登頂経験者で組織するチームや、大学の登山隊など、三チームが参加していた。さすが、秘境と云われるだけあって、四方を絶壁で囲まれて、風の強い難所が行く手を阻んでいた。また天候の悪いところでも有名で、いつも黒い雲で覆われていた。それで、山頂が見えなかった。一年で見える日は何日もないという隠された神の御座として原住民には懼れられていた。その山の存在は伝説にだけ語り継がれていたが、実際、目にした者は皆無だったのがおかしい。全世界の山という山は征服され尽くし、山男を寄せ付けない山はないと思われていたから、世界の山男たちにその知らせは国の名誉までかけて狂奔させた。

現地のシェルパたちは、その神の山に登るのだけにご勘弁をと、どんなに日当を積んでも首を縦に振らなかった。総勢、何千人という登山隊が押し寄せる。ヘリコプターで、資材や、必要機器が麓のベースキャンプ地まで続々と運ばれた。ちょっとしたキャンプ村ができて、賑やかであった。

登頂ルートは各国とも違い、できるだけ直登が少ない楽なルートを探る。一番乗りは時間との戦いでもあった。一昔と違い、現代の登山は通信機器から医療、服装、パソコンとハイテクの援護を受けて、より安全で計算された登山を可能とした。

大学の合同チームに参加していた、日本隊の菅原は、二十五歳と一番の若手だった。頂上までの踏破の三人に選ばれていた。第二、第三とキャンプ地が高くなるにつれ、高山病、呼吸障害が出てくる。酸素ポンペを運搬するだけでもかなりのカロリーを消費するのだ。最終キャンプ地からは下の支援を受けながら、三人だけで頂上を目指す。気候の穏やかな時を選んでいたものの、それでも山頂付近は風速二十メートルというシュミレーションが出た。瞬間最大風速はどれくらいになるか判らない。いつも風の強い地形と気候で、それは覚悟していた。それと、雲に覆われて視界がきかないことだ。衛星通信によるナビゲーションシステムで互いの位置はキャンプでも確認できるようになっていた。酸素は予備も入れて四時間が限界だ。雪と氷がさらに足下をすくう。山頂付近の気温は零下三十度。特殊な耐寒服でも長時間は限界がある。なにより体力の消耗が劣悪な環境の下では早いということが心配された。

菅原たちは、ザイルとハーケンで最初の岩盤にとりかかっていた。それを上れば比較的風除けにもなるテラスが見える。三人とも暴風に耐えながら、切り立った岩にへばりついていた。ところどころ凍りついている。交信はワイヤレスマイク付きのケイタイ電話でなされた。

ドイツの登山隊がすぐ脇の岩盤を試みていたが、先頭を登っていた隊員の体が突風で浮いたと思ったら、すでに滑落していた。叫び声が風で掻き消された。あおりをくって仲間一人も道連れにされた。二つの体は岩に激突して止まった。多分、命はないだろう。第一の関門を無事通過したチームは半分もなかった。

それからは第二の壁がある。風はさらに強く、下から持ち上げるように吹いている。ガレ場や尾根がないとらえどころのない山が永年、人間たちを寄せ付けなかったのだ。死は一瞬にして訪れる。体を支えているのは三点の僅かな窪みにかかる足と手。どんなにハイテクになっても登るのは人間の力だ。

途中のテラスで別の隊が動けなくなっていた。なんらかのトラブルが発生したようだ。先頭を登るのは菅原だったが、二番手がザイルの先に彼を確認できないほどの雲と雪に方向感覚さえ失われる。手足は痺れるほど冷たくなっていた。凍傷にかかっているのかと、菅原はさすっていた。息が切れる。焦ってはいけないと、自分に云いきかせていた。できるだけ冷静に周囲を把握すること。

菅原は壁を登り詰めた。そこから頂上まではそう遠くない。まだ、どこの国のパーティーもやってきていないようだ。菅原と、あとの隊員二名は互いの体をザイルで縛りながら、頂上を目指した。もう、一番乗りは間違いがない。世界初の快挙はもう直だ。三人とも日の丸の旗を立てるよう、ポールも伸ばした。雲が切れてくる。風も止んだ。

山頂が見えた。三人とも、啞然として立ちつくした。

「あれは、なんだ」菅原は蜃気楼でも見ているような気分だった。山頂には山小屋が建っていた。確かに建造物に間違いがない。麓のベースキャンプに連絡をいれた。「家が、建っているんです」「ばかやろう、しっかりしろ。幻想だろう。空気が薄いから、気を確かに持て」下では笑っていた。三人とも、建物に近づいた。プレハブでできていたが、かなり堅牢な造築だ。看板まで出ている。ドアが三重になっていた。三人が中に入ると、温かい空気が流れてきた。

「いらっしゃいませ」女の声がして、中は喫茶店と売店になっていた。販売員の女が笑っている。店長のような男も愛想よく、

「お疲れだったでしょう。どうぞ、お休みください。熱いコーヒーも入っています。お帰りには石に登頂記念の日付も彫ってお土産にどうぞ。酸素ボンベも売っています」

「な、な、なんなんだ、ここは」とうとう狂ったかと、一同、頭を叩いていたが、これは現実なのだ。

「本日より開店しました。世界各国からみなさんがお出でになるというので、急遽、売店と食堂をヘリコプターで運んだんです。下界は不景気で、人のこうして集まるところに店を出さねば、商売も大変でして」

アメリカ隊が続いて店に入ってきた。みんな呆然自失と立っていた。

「メイアイヘルプユー？」店長ひとり俄然張り切っていた。

第三次考古学ブームというものがやってきてからは、各地で遺跡の発掘調査が行われていた。地方の大学と教育委員会、マニア、ボランティアを交えて、新たな歴史の発見に胸をときめかせて、加熱していた。

特に、日本のような造山活動の活発な火山列島では、地震や地殻変動も大きく、隆起、沈降が長い歴史をとんでもない方向に運ぶ。そして、湿気が多く、降雨量も多い気候が、地中の微生物をも活性化させ、そのために腐敗ということが砂漠の国より起こりやすい。木と紙の文化は腐って土に還り、化石の前にその原型を留めないから、歴史はよりミステリアスに証拠も残さない推測の余地を与えることになる。

北日本大学の飯尾教授と研究生の平井は東北の縄文時代の遺跡が続出している地区で、ある奇妙なものを発掘した。薄い円盤で、掌に乗るサイズのものだった。ケースに入っているから、比較的保存状態もよく、一万年前の地層から出てきたものとは思われない高度な文明の匂いがした。

さっそく大学に持ち込んでの調査が始まった。まず、これが何であるかという議論が各助教授の間でなされた。現代にはない素材で、なにやら円盤の上に文字が書かれていたが、古代の日本語でもなさそうだ。判るのは英数字だけだった。「これは、飛ばして遊ぶ、子供の玩具なのではないか」と、ある助教授は云う。「ケースに保管されているから、傷がついては困るものだろう。ということは、この中に何か重要なものが隠されている可能性がある」

議論百出したが、薄いプラスチックの円盤は結局、磁気を読みとるという方向で一致した。あらゆる最新の機械を使って、コンピュータにデータを取り入れようとしたが失敗した。現代と全く方式が違うから、読みとることができない。

ようやく、磁気の解析に成功して、モニターに不思議な文字が縦書きで現れた。どうやら古代の言語らしい。画像らしいものも入っていたが、そのファイルは変換できずに出てこない。文字情報だけが、映し出されていた。その言語は一万年前の古代人が使ったものであろうが、その研究はなされていなかった。初めてその全容がくっくりと現代に現れた。研究チームは、頻りに繰り返し出てくる文字をてにをはと分析した。主語、述語の形から、固有名詞なども特定し、ヒエログリフを解読するように読み進めていって、なんとか意味を汲むまでとなった。

それは叙事詩のようなものであった。かつて、この地に人口三十万の都市があった。第三の戦争が起こった。海を越えて隣国が攻めてきて、国民の虐殺が始まり、空から飛んできたものが、火を起こす神殿を破壊した。神は怒り、死の元素を空中に撒き散らし、人々は次々と不治の病で倒れてゆき、狭い国を逃げまどう。やがて、神の怒りは山を動かし地を震わせ、海を高くした。街は海と燃える土に吞まれ、人々は死に絶えた。

そんな内容であることが判明した。

「もし、これが本当なら、この円盤の出たところを掘ったら何かが出てくるかもしれません」平井が提言すると、みんなは笑って相手にしない。

「これは、小説かもしれないし、創作だったら、あなた、どうします。発掘には莫大な資金を使うんですぞ。軽はずみに云ってもらっては困る」

大学も委員会も信じなかった。一万年前にこんな超文明が存在したことを学会としても認めるわけにはゆかない。我が国は、縄文、弥生から空白の時代はあったが、現代に至るまで、高度な

文明など存在した証拠はいままで出なかった。何ものかのいたずらか、でっちあげだろうと一笑にふされた。やむなく、飯尾教授のグループだけが、私的に動くこととなった。

「日本は今も昔も中央集権だ。歴史も信仰の一種で真実をも排斥する。学会が認めないものはすべて偽書となるのだ」と、飯尾教授は嘆いた。東北の古代都市が単なるロマンであってもいい。掘ってみる価値はありそうだ。みんなは雨の日も合羽を着て発掘作業を黙々としていた。そして、一月が経った。

「どうです、何か出ましたか先生」と、他の教授が皮肉たっぷりに云う。みんな笑っていた。

「先生、何か金属片が出ました。三メートルの地点です。うっすらと文字も見えます」一同興奮していた。作業は連日行われていた。

「先生、こんなものが出てきました」みんな、女子学生の元に集まった。掌に乗るような二つ折りになっている機械だった。アンテナのようなものがついている。開けると、数字がボタンの上に印字されて、小さな画面がある。

「何なのでしょうね」続いてノートの大きさの薄い、これも二つ折りになっている機械が出てきた。開こうとしたが、錆びてなかなか難しい。こじ開けようとして、

「慎重にやれよ、壊さないようにな」教授は声も震えている。ようやく開けると、英数字がキーに印字されて並んでいる部分と、プラスチックの画面のような部分とで構成されている。みんな、不気味なものを見守っていた。

「先生、これは何に使ったものなのでしょう」

その知らせを学会に報告すると、政府の偉いさんから埋め戻すように指示があった。理由は、歴史を覆すような騒動を起こしてはならない。定説は定説だ。それをみだりに攪乱してはならない。誰かがわざと埋めたものに違いない。と、いうことだった。平井たちは憤慨していた。

「この地層は掘り起こした跡はありませんでした。炭素の分析もしてもらいましょう」すると、教授は力なく立ち上がると、

「いや、いいんだ。このことはみんなの胸に秘めておこう。見なかったことにして埋め戻そう」飯尾教授はスコップで土をかぶせた。「先生」平井はただ悔しそうに拳を震わせていた。

その頃、研究室では例の円盤の文字の解読が進んでいた。

「一万年前の地層から出たというのは本当だろう。この物語の年代が書かれてある。二千十年とある。いまは一万年だから、ほぼ一万年前になる。紀元二千年頃に高度な文明が存在したとなると、これは大変なことだな」

外では夏の豪雨がやまなかった。歴史を沈め、腐らせる雨が、容赦なく地上に降り注いでいた。

第106話 気のせい

ビールはラガー、ワインはボディがしっかりしたもの、酒は幻の純米酒とうるさいやつほど味盲が多い。十二歳くらいが舌の感覚が一番冴えている。あとは下り坂。微妙な味を見分けるのは、ソムリエ、利き酒、その道のプロは別として、目隠しテストで正解者は自称グルメにどれほどいるか。気のせいというのが大方の見方だ。

新潟のどこそこの限定の仕込み酒も、実は他県の酒造メーカーから樽買いでなければ間に合わなかったり、ホテルメイドの自家製ケーキも冷凍の業務用であったり、それが、喫茶店で食べるの不味が、煌びやかなホテルのレストランで出れば、同じものも美味しく感じられる。食器ひとつ、サービスの仕方、雰囲気随分違うものだ。人は雰囲気という気を食べている。

世はラーメンブームだった。街のあちこちにラーメン屋が出没し始めた。さも昔からあったようなご当地ラーメンも村おこし、町おこしのこじつけラーメン。伝統も歴史もない。元祖札幌ラーメンでさえ、戦後も戦後、ラーメン自体がそう古いものではない。不景気になればなるほど、ラーメンでも食べようと、外食産業は価格の安いものに走る。

大阪の下町で最近人気沸騰のラーメン屋「極道」は、マスコミでもときたま取り上げられ、わざわざ遠方からも噂を聞きつけて客が並ぶ店だった。店主の並平は昔ほんまもののヤクザだった。足を洗ってからは、テキヤでならした夜鳴きそばの腕をそのまま店にした。威勢のよいタンカも切ると、またそれがこの店の人気になっていた。ただ、一度食べただけでは美味しいかどうか判らないという評判が、この店の実は秘密だった。食べた人は大概、首をかしげて帰る。まずいのか、美味しいのかよく判らない味だった。三回以上通って食べると、やがてやみつきになるという噂だった。だから最低、三回はこの店に来ることになっていた。「おっちゃん、すこうし薄味にしてんか」と、何も知らない客から注文。

「なんやて、喰いもせんで文句あるんやったら、いてこましたるでえ」並平のタンカが出た。みんな怖々と出されたものは黙って食べなければならない。

週刊ショックが取材に来た。

「みなさん、スープがごつい美味しいいいまんねん。なんや秘訣があるう思うんですが、ちょっとだけ教えてくれはりまへん？」

「そないなこと、企業秘密でんがな。従業員にも教えてないもん、云えまへんな」 常々、並平は客を馬鹿にしていた。

「何がグルメや、わしは貧乏したさかい、腹いっぱい喰えたらそれでええと思うている。それをなんや、最近の風潮は」

元々客を客とっていないところがあつたが、この世界、頑固で一徹、風変わりなほうが、客を呼ぶ。

並平自ら色紙に書いて額に入れた社是社訓のようなものが店に飾ってある。

店が客を選ぶのだ

客を客と思うな

食べさせてやると威張れ

絶対頭は下げるな

並平はいまどき珍しく哲学を持っているヤクザだった。

井に指が入り、客に、「ゆ、指が入ってます」と云われると、「大丈夫だ、職人の指は熱さには慣れている」という有名な笑い話はこの店から広まった。

「それにしても、おかしいな。この店にもう、九回くらい来ているんやけど、美味しいのか不味いのかよう判らん」今日も首をかしげて客が帰ってゆく。スープは確かに余所の店とは違う変わった味がする。それが何なのか、同業者も秘密を知りたがった。並平だけが知っているその味とは。

客の呑み残したスープは、残飯と一緒に大きなポリバケツに入れられていたが、それを閉店後に捨てるのはいつも並平の仕事だった。従業員が帰ったのを確かめると、並平は、残飯を漉してスープだけを取り出す。それをまた煮詰めて、新しいスープと合わせるのだ。客の涎と鼻水が適当に隠し味となって、絶妙の味を醸し出している。これは誰にも真似のできないノウハウだった。

朝から客がラーメン「極道」に並ぶ。今日こそ、美味しいと思うだろうか。美味いか、不味いか答えの出ない曖昧なところが、リピーターを並ばせる。

「なんやろね、くせになるんよね」と、判ったような判らんようなあほなグルメたちが、通の意地で答えを出そうとするうちは、並平の店は繁盛するのだった。

第107話 ブロンド・ブランド・ブラインド

若い人が茶髪金髪に染めて、外国のブランドものに身を飾る。福沢諭吉の頃から海外礼讃が始まり、戦後は日本精神が死んでから、ますます西洋信仰が高まった。外人に弱い日本人、英語文化が巾を利かせる。

それが最近少し変わってきた。無印良品、ノーブランドからシンプル指向、ブランドはすでにステイタスではなくなった。ピエール・カルダンもイブ・サンローランも特価台でバーゲンするようになってからは、着るのも恥ずかしい。猫も杓子というが、本当に猫まで着ていた。

アパレルメーカーは困惑していた。日本人は一律民族、単一民族、右習え民族でやりやすかったのに、最近個人主義が罷り通って個性を打ち出すことが流行。ブランド商品にも翳りが出てきた。

「人気アイドル歌手を使うのも、もう通用しなくなった。スタイル、素材で売るのも限界だ。何かいいアイデアはないものか」

企画会議でみんな腕組みして考え込む。もう出尽くした感があった。何を提言しても陳腐な気がした。そこへ、商社マンが共同企画で参加していたが、プレゼンテーションの資料を配布した。

カラー写真には赤い靴にバッグ、赤いジーンズ、赤いスーツとすべてが赤。商社マンは説明する。

「これらはすべて中国製です。かのユニクロが製造依頼していたメーカーで試作させたものです。赤い下着がはやりました。赤は幸運を呼び込み、健康にいいという縁起物です。日本でも中国からの影響で古来からめでたい席は紅白、まんじゅう紅白、還暦赤いちゃんちゃんこ、娘の初潮めでたい赤飯、いや、失言。ということで、どうでしょうか。占い、風水、縁起ブームにかこつけて、赤を大々的に売り出すというのは。こんな暗い不景気な時代には、企業も赤字、いや、失言。派手な赤で景気回復というのは強烈です」

一同、出されたイメージがショックな赤で、当たれば大きい、外れれば倒産。これは大きな勝負だと思った。

「よし、これだ。乾坤一擲、背水の陣で取りかかろう。デザインはDCブランドのフランス、イタリアのトップに頼む。派手にパリコレに乗り込もう。CFに起用するタレントと、テーマソング、一括上程だ」

会社のトップも売上下降線の折り、珍しく燃えていた。赤に全員牛のように興奮していた。これで、赤字脱却、各メーカーともタイアップと、ひとつの方向に全員が走っていた。

商品企画部は、自動車メーカーに呼びかけて、トータル・コーディネート戦略に参加してもらうこととなった。赤い軽自動車を各社が売り込むこととなった。加えて、化粧品メーカーもルージュ、チーク、ヘアカラー、ペディキュアそれすべて赤。家電メーカーも便乗して、赤い冷蔵庫から電気釜、赤いトースター。流行というものはアパレルひとつだけでは弱いものがある。生活全体をアピールする。

それは見事に当たった。街に走る赤い車、そこから降りる女性も赤いワンピースに赤いストッキング、赤いポシェット、赤いパンプス。ケイタイもストラップも赤、すべてが赤、赤、赤。女性だけではない。男性も赤。ネクタイも綿パンもカッターシャツもパソコンもジャケットも赤。赤い住宅まで建ってきた。周囲がすべて赤なので、ひとりだけ青を着ていると、目立って恥ずかしい。みんなに白い眼で見られる。赤いブランドは日本をまさに席卷していた。

中国の首脳たちは会談の最中だった。

「主席、日本はとうとう、我が国の目論見通りに、赤い人民服を着始めました。国を挙げて赤化しています。あとは思想的洗脳ですな。赤に対する永年のマイナス、敵対イメージ、アレルギー払拭を図る戦略がまんまとうまくいったわけですからな」

「日本人というのは、実に単細胞。乗せやすい民族だということが判りました。流行に走る民族性というのは戦争にも走りやすいので怖いですが」

「いまや日本人の九割が中国製の服を着ています。アメリカに汚染され、ブロンドが好きになった日本人が、次第にアジアに目覚めます。次なる流行の発信地は中国です」

「さあ、赤く染まった隣国を次にマイクロソフトから奪いましょう。ウイルスは準備できましたか。衛星放送から音楽まで、文化を支配するものはその国を植民地にできるのです。主体性のない日本人は群盲と同じです。われわれが香港を手に入れたとき、国策としてのブランド輸出を考えました。一億二千万のお客さんに、何をどう売り込むかとね」

華僑の国は侮れない。赤の次は青を考えていた。その翌年は当然黄色だった。

ハンバーガーからヤムチャへ。日本人は操り人形のように踊り出す。

第108話 ぼんやりした不安

それはある日突然に人間に感染する。平凡なサラリーマンの吉森氏は働き盛りの四十代だったが、通勤ラッシュから解放された駅前広場に立ったとき、それは襲ってきた。六月のどんよりと曇ったノイローゼ日和だった。吉森氏はいえも云われぬ不安に包まれたのだ。体の変調かと思った。とても、寒く、哀しくなる、不安定な精神状態にいる自分をどうすることもできないでいた。仕事ができる状態ではない。

ともかくも会社のデスクに座ったが、なにも手につかない。ただ、女子社員から出されたお茶に手もつけず、じっと凝視しているだけ。おはようございますの返事もないことに、同僚が気づいて、肩を叩いた。

「ひょっとして、君も課長と同じ病気なのかもしれない。病院に行ったらいい」課長はもう二週間欠勤だ。空席のデスクを吉森氏は見ていた。症状が似ていると云う。居ても立ってもいられない、不安が全身を覆っていた。理由は判らない。最近、そんな病気が蔓延していると週刊誌にも出ていた。

近くのビルの階上にあるクリニックに午前中に行ってみた。待合室は似たような目つきの人間でいっぱいだった。ぼうとしている。生気がない。それでときたま涙ぐむ。おどおどしたりそわそわしたり落ち着かない発作が起こる。吉森氏が呼ばれた。

「あなたもですか、不安症候群ですな。一応、精密検査をしてみましよう。みなさん、どこも悪くないんです。精神的にも異常がない。あとで結果が判りましたら大学病院を紹介しましょう。だいぶ研究が進んでいます」

内診、血液、尿検査、心電図と調べたが、やはりどこも悪くない。ストレスから来る不定愁訴でもない。血圧、脈拍正常。身体的症状は何も出ない。ただ、なんとなくぼんやりした不安に包まれている。

大学病院に紹介状を持って、吉森氏が行ったとき、新聞にその病院のことが記事で出ていた。『ついに発見、現代の奇病、不安症候群の病原』どうやら、新種のウイルスのようなものであるらしい。病室で問診があった。医師がいくつかの質問をした。

「会社の業績はどうですか」「どこも同じなのですが、下降気味です」

「家庭内ではトラブルはありますか」「娘が少し不登校になりました」

「今の社会についての不満はありますか」「じわじわと税負担が大きくなってきます」

「あとはございませんか」「何か、出口のない不景気といいましょうか、政治は腑抜けで頼りなく、みんな自分勝手に税金泥棒、加えて戦争の足音が聞こえてくるようで不安です」

「ふむふむ、みなさん、答えは同じです。かつて、昭和初期にも同じ病気が発生しました。状況

はいまと似ています。人間の持つあらゆる罪悪が蔓延る社会に追い込まれた純粋な人間が罹患しています。俗悪に付和雷同すれば、直る病なのですが、われわれはパンドラの筐に喩えて、パンドラ症候群とも呼んでいます。多少、荒っぽい治療になりますが、入院することなく、数時間で病原菌を出してみましよう」

「痛いんですか」「それは、やむをえません。原始的治療法よりなかったのです」 吉森氏はパンツ一丁で、ベッドへ仰向けに寝かされた。

「いまから、電気をかけます。少しショックがありますが、我慢しててください」と、蘇生に使う、電気ショックを足から手まで心臓から遠いところにかけた。弱い電流なのだろうが、ものすごい衝撃を感じて、吉森氏は、電気椅子で死刑になる囚人の気持ちになっていた。

「おっ、出てきたな。袋に入れろ。慎重にな」

医師と看護婦たちは、厚手のビニール袋に何かを取り込んでいた。素早く口を閉じると、

「終わりました。不安の原因のもやもやを除去しました」と、ビニール袋を見せてくれる。タバコの煙のような、エキソプラズマが捕獲されていた。

「これが犯人ですか。何かすっきりしました」吉森氏は袋の中で蠢く煙を見ていて、吐き気がしてきた。

「これが、人間の中であらゆる悪を唆す迷いの種ですな。どうです、真っ直ぐと歩けるような気がしてきたでしょう」

吉森氏だけでなく、ぼんやりと街を歩いている病人が急速に増えた。株価が暴落、銀行破綻、失業、借金増加、倒産、リストラ、人間関係、犯罪、自殺、憲法改正、有事立法、テロ、戦争…。出口のない状況下で明日が見えない人間が殆どだ。ふっと自殺したくなる鬱病もその一種だという。世は昭和余年に逆戻り。じわりじわりと病の種を撒き散らす。

昭和二年

渡辺銀行倒産 金融恐慌 鈴木商店倒産 台銀休業 取付騒ぎ 芥川龍之介自殺昭和三年
張作霖爆死 社会主義者大検挙 治安維持法強化 特高全国に設置 娘の身売り……

第109話 無料体験

中部地方に巨大なテーマパークがオープンする。関東、関西から客動員を図ろうと、かつてない規模で、不思議な異空間を実現させるテーマで遊園地を造った。

オープン前に先立ち、各界からの招待者を交えてのセレモニーが大々的に披露された。国会議員たちも多数、その招待席に花をつけて列席していた。国務大臣をしたこともある地元選出の議員、原黒三もその中にいた。テーマパークを誘致した立て役者で一番威張っていた。工事業者からかなりの謝礼が回ったという噂もある人物だった。

知事、市長の前に黒三が来賓挨拶をしたのは功労者というわけだが、その巨大な遊園地の顧問

にまで入り込んでいた。マスコミも取材に忙しい。芸能人もかなり招待されたからだ。黒三はわが庭を案内するように、先頭を切って歩いていた。行く手にパピリオンがあり、その入口で兎のぬいぐるみを着た呼び込みが、黒三の手を取って、強引に中に入れようとした。

「さあ、ここは何にでもなれる体験の部屋ですよ。今日は無料体験していただきます。とくに国会議員の先生方には是非とも入ってもらいます。あなたの希望の人生を只で経験できる未来の体験マシンです」

「それは面白そうだな。どれ、先生方もひとつどうですか」

黒三は他の議員たちを誘って、兎の案内するパピリオンの中の穴に入っていった。地下にいろいろな部屋があり、いくつもドアが並んでいる。不思議の国のアリスの世界を模したものだ。ドアの上には、「学校の部屋」とあるもの。先生にも生徒にもなれる。「農家の部屋」農業の体験ができる。そして「商人の部屋」。

「わしはここがいいな、金儲けが好きだから、ここにしよう」

黒三はひとり「商人のドア」を開けて入った。入るといきなりそこは汚らしい事務所だった。狭い物置のようなところに机が二つ。痩せぎすの女事務員が一人だけ、電卓を叩いていた。

「社長、どこへ行っていたんですか。こんな非常時に」と、事務員はぷりぷりしていた。

「そうか、わしは社長なんだな。それにしても、ちっとは立派な会社にして欲しかったな。なんだか、貧乏くさいのお」黒三はいつか、自分の格好が八百屋のおやじであることに気づいた。

「あれ、いつのまに着換えたのか」事務所のガラス窓から店内が見えた。小さい食品スーパーらしい。誰かがやってくる。人相の悪いちんぴらかといった風采の男。

「おい、社長いるか。とうとう掴まえた。逃げ隠れしやがってよ」

男は近くの椅子にどっかりと座ると足を机の上に上げた。

「なんだ、君のその態度は。無礼にもほどがある」黒三は侮辱されたように怒った。男は急にかい声で笑い、急変したように怒鳴った。

「なんだと、いつも小心者のあんたが、随分となめた口を利いてくれるじゃねえか。先月末に払うと約束した利息分はどうしたのよ。今日は、全額貰うまで梃子でも動かねえぜ」女子事務員は顔を伏せて震えていた。

「そのお、借金というのはいくらあるんだ」黒三は、体験であることを思い出してにんまりした。

「元金で二百万。利息延滞分で百万しめて三百だ。判ってんだろ」

「なんだ、たったの三百万か、端金ではないか。それしきのことで大きい顔しとるのお」黒三の方が今度は笑った。

「よし、よくぞ云った。いますぐにみみを揃えて払ってもらおうか」

「わしを誰だと思っている。馬鹿にするな。原黒三だぞ」

「原？ さあ、知らねえな」黒三はむかついた。「社長、ふざけないでください。後が怖いから、ここはうまく」と、事務員が耳打ちする。「金はないのか」と、事務員に訊くと、「あるわけがないでしょう。従業員の給与も先月から遅配されているんですよ。金庫は空どころか、今日の小切手、手形を落とす資金も不足しています。後で銀行から電話きますよ」「で、いくら足りないんだ」「資金ショートは二百万です」

「よし、電話を貸せ、名古屋銀行は何番だ」黒三は銀行に電話を入れた。「原黒三だが、頭取るか。繋いでくれ」「どちらの原様でございますか?」「何を寝言云っている。いいから、出せ」望月頭取が電話に出た。「望月だが、代議士に原というのはおらんが」「どうなっているんだ、先週、一緒にゴルフをやったろう」電話はいきなり切れた。別の電話がくる。

「社長、出てください。わたしはもう出ませんから」事務員が受話器を手渡す。

「電力会社ですが、約束した期限は過ぎましたので、明朝、電気は止めます」

「社会保険事務所ですが、差し押さえをする手続きを」「うちの人の給与どうしてくれるんですか、家のローンもあるんですよ」「判った、判った。なんとかする」黒三は電話攻勢に参っていた。

「あなたー」と、今度はすごい剣幕で太った中年女が入ってきた。

「娘の学校から授業料を滞納しているからと、職員室に呼ばれて大恥かいたよ。いつまで、こんな赤字のスーパーやってんだい」

「ところで、あなたは誰だい」黒三もだしだしになった。

「おうおう、女房の顔も忘れたか。すっとぼけんじゃないよ」黒三は女房に首ねっこを掴まれた。そのまま、トイレに引っ張りこまれた。頭から水までかけられた。黒三はいままで人にここまで罵倒されたり、侮辱されたことはなかった。人に頭は下げられても下げたこともない。トイレの鏡に映った自分の顔を見て、驚いた。それは別人だった。黒三の顔ではない。すっかりスーパーのおやじの顔だった。「まさか、こんなことがあるか」黒三は首を振って、現実を否定していた。

「もう、体験はたくさんだ。ここから出してくれ。おや? この壁にドアがあったろう。ドアはどこだ。テーマパークに出るドアだよ。わしは商人の部屋に入っただけなんだ。助けてくれ」事務所には電話がばんばんかかってきていた。手形が不渡りになると銀行からだ。町の金融のちんぴらが怒鳴る。NTTが電話を止めにくる。取引先が集金におしかける。女房が仁王立ち。完全に逃げ場を失っていた。

「どうしてこんなことになったのだ」黒三は泣き声になっていた。

「大手スーパーがいっぱいできたからだろう。お陰で商店街は全滅。誰が悪いって、政治家が一番悪い。陰で私腹をこやして、街は墓場になっている。大企業と癒着しているやつらだ。ところで、半分でも今月入れてもらえませんか」と、食品問屋の集金係。全員がじわりと黒三を追いつめる。

「わしが悪かった。大手スーパーを世話した見返りも確かに貰った。すまん。助けてくれ。助けて...」

「原先生、大丈夫ですか。原先生」原黒三は椅子の上でようやく目が覚めた。汗びっしょりだった。秘書がそばで額の汗を拭いていた。

「なんだ、夢だったのか」黒三はほっとしていた。

「この椅子に座れば、即座に脳に幻覚を見せて、プログラム通りのストーリーを体験させるというものです。いかがでしたか、お楽しみいただけましたか」

兎の案内人が解説していた。学校の部屋から戻った議員は、いじめられて、おいおい泣いていた。

「学校行政をなんとかしなければ」「中小企業の救済策も考えんとな」普段から豪語していた議員先生もそれからは何故か大人しい。

第110話 シャッター商店街

いまや、車社会で駐車スペースのない、街の中心商店街は全滅。郊外型店舗が巾を利かせる時代となった。商業のドーナツ化現象が進んでいる。それはまた見えないところで悲劇を生んでいる。

地方都市のK市もまた人口二十万で、郊外に大きなショッピングセンターが三つも進出してきてからは、中心部の老舗のデパートが倒産、廃墟のままみすぼらしい姿を晒していた。アーケードを綺麗に直し、歩道もカラフルに整備したのはいいが、その負担金も各商店では馬鹿にならない。環境整備したわりに、年々通行量が減少し、売上も比例して落ちてきた。倒産、破産する店が相次いだ。商店街は歯が抜けたように、シャッターを下ろす店が増えた。売り店舗、貸し店舗の張り紙があちこちにみかけるようになったが、そんな不景気な街の物権に手を出す業者はいない。いつまでも売れないで固定資産税だけを払い、家賃も入らないから、夜逃げ、心中する店もかなりある。

きたむら銀座商店街もそのひとつだった。近くに大きな寺があり、門前町として栄えた古い街だった。アーケードの下に大きなぼんぼりのような街灯を象徴として取り付けていた。歩道には石畳のような素材を敷き詰めた。駅までの通りを挟んで、両側にかつては栄えた街だったが、いまは人も車も通らない。商店街はシャッターを下ろした店ばかりがずらりと並んでいる。大手ほど撤退は早い。銀行の支店も旅行会社の営業所も生保の支店も、いち早く逃げてしまった。貸し店舗で営業していた店は家賃が払えずにさっさとやめてしまう。残っている店は代々そこで商いを続けていた者だけだったが、店を開けていても経費はかかるわけで、みんな商売をやめてしまった。

第一、名前が悪い。いまどき銀座はない。どんなに通りを綺麗にしても、店自体が変わらないから、魅力がなく、客離れは止まらない。風が吹くと古新聞紙が飛び、のら犬がうろついている。人っこひとり見えないゴーストタウンだった。都市開発は郊外へと延ばすことばかり考えて、結果はこの様だった。まるで役所は無策に近い。商店だけのせいでもない。まして、大店法を撤廃した国はもっと悪い。どんどん、チェーン店が進出してきて、自由経済だ、負けるやつが勉強不足で悪い、潰れるものは潰れてもいい、という理論が罷り通ると、後は力関係で自然淘汰。大手栄えて地元滅びる。

二百を超える商店が空き店舗となっていたが、ただ一店だけは店が開いている。創業、明治四十年という地元では知らない人がいない北村食堂だった。ずらりとシャッターが下りているとこ

ろに、そこだけがぼっかりと開いている。

ゴーストタウンを何か、雑誌の背景に使おうと、出版社のカメラマン氏がふらりと、この商店街を訪れた。半ば崩れかかった店、破壊された自販機、壊れた窓ガラスなどが悲哀があって使える。。ぼちぼち昼だったが、この辺りに喫茶店も何もない。と、食堂の暖簾が見えた。入口が開いている。朝から何も口にしていないカメラマンは、北村食堂の暖簾を潜った。入ってから、驚いた。中は薄暗い。埃まみれだ。引き返そうとすると、店のばあさんと目が合った。じっと、カメラマンをみつめている。次第にばあさんの目が懐かしさで潤んでくるのが判る。奥にいるじいさんを大声で呼んでいた。

「おじいさん、お、お客さんだよ、お客さん」ばあさんは感激して泣いていた。

「おまえ、嘘だろう、からかっちゃいけねえ、客だなんて」と、じいさんがステテコ姿で店に出てくる。じいさんは、カメラマンを見ると驚いて、近くへ寄っていった。二人とも、カメラマンの体に遠慮がちに触ろうとしている。

「ほら、触ってごらん。本当に客だよ。本物だよ」「そうだね、おまえ、何年ぶりだろうね、客だなんて」じいさんも感涙にむせている。カメラマンは仰天して、逃げ出そうとしたが、しっかりと二人の手はカメラマンの服の裾を握って離さない。仕方なく、埃を払って、椅子に座ることにした。そして、おしながきを眺めていた。

「この店、暗いんじゃないのかな」と、カメラマンが云うと、

「節電のために切っているのではないのだよ。電力会社から止められてるの」と、じいさん。大丈夫かなとカメラマンは思ったが、ともかく腹が減っていたので、注文をすることにした。「親子丼ください」

すると、何やら二人でひそひそと内輪もめしている。「親子ってどうやって作るんだ。もう長くやってないから、忘れた」「ばかだね、卵と鶏肉じゃないか」「それはいいんだが、材料がないから、どうやって作るんだ。金もないし」「それじゃ、いまから、スーパーまで自転車で走って買ってきな、客から代金貰ってさ」ごちゃごちゃと話している。

「すみません、お客さん、お代は先になっておりますが」「いいですよ」と、カメラマンが渡した小銭を受け取ると、じいさんは店をすっとんでいった。

「どこへ行ったんですか」と、カメラマンは気になってばあさんに訊いた。

「お米と、卵と鶏肉を買いにいったんですよ」つらっと答えるので、カメラマンは口を開けたまま。

「と、いうことは、これから御飯を炊くということですね」一時間以上はかかるのだろう。カメラマンは覚悟して、その辺にある新聞紙や週刊誌を読んでいた。新聞の一面に、大きく湾岸戦争のニュース。

「ええ、ついにやったのか、イラクと戦争を」よく見ると、十数年前の新聞だった。

「びっくりさせやがって」店内のカレンダーも昔のまま。時間がここだけは止まっていた。

じいさんが少しの米をビニール袋で持って帰ってから、ぱたぱたと火をおこしている。煙が店の中に充満して、カメラマンはむせていた。「キャンプじゃないんだから」と、苦笑していた。ともかくも飯にようやくありつける。食べてみて、何の味もしない。醤油を買う金がなかったのだろう。うんざりして、食べ残すと、欠けた茶碗の濁ったお茶に口もつけずにカメラマンは出

ていった。

カメラマンは駅まで歩いて、切符売り場で駅員に、さっきの北村食堂のひどい話を何気なく云うと、駅員はぎくりとした顔をしていた。

「そんなはずはないですよ。あそこの老夫婦は十二年前に首を吊って死んだはずだが。店の中は荒れて、ゴミだらけだったでしょう」カメラマンはそれを聞くと、背筋に冷たいものが走った。

「そんな、確かにぼくは、親子丼を食べた」

カメラマンはまた自分の目で確かめようと、商店街の入口まで走って戻った。不気味な風の音だけがする。街の入口のアーチの大きな看板に、「売り街」と書かれていた。

第111話 ジェンダー・フリー

恋人たちが別れを告げるのは、どんなシチュエーションが多いのだろうか。港であったり、夜の公園であったり、人気のない静かなところが選ばれた。

薫と有紀はいつものデートが無言のまま、どこか場所を選ぶように、人のいない夜の片隅へと歩いていった。いつか都心の墓地へと入っていた。ビルの林立する中にぽっかりと空いた空間。それでいて、通る人もまばら。眠る死者たちの上で、恋が囁かれる。結構、アベックがいるのに驚く。

「おまえとは今日限りだ。ここで別れよう」薫は云った。

「そうね、仕方がないのね、わたしがみんな悪いんだわ」有紀は顔を伏せた。光るものがいくつも零れた。薫と一緒に一年が重く二人の間に横たわっていた。楽しかった思い出が多ければ、それが別れの枷になる。

「おまえのせいじゃないって。おれがはっきり告白していれば、こんなことにはならなかった。覚えているか、おれたちが出逢った五月」

「ええ、沈丁花がどこかに咲いていた。甘い香りがあなたの顔と重なって、何かときどきする予感がしたわ。あれは、去年の五月七日ね。夕方だったわ。合コンで紹介されたのね」

「よく、日にちまで覚えているね」「わたしたちの記念日だもの、忘れない。それで、あなた、こう云ったのよ。一君の鎖骨って素敵だねって。骨を誉められたのって初めて」「おれは、いまでも胸元の空いた服を着ていると、胸の谷間より、ほっそりとした鎖骨が好きだな」

「それで、洋風居酒屋へ行ったでしょ。君の骨ばったところが好きだなって、また骨の話しばかりしていた」

「そうだったかな、あのときは仕事がうまくゆかなくて、ストレスが溜まっていた。カルシウム不足だったんだな、きっと」二人は笑った。すると、暫くの沈黙があったが、有紀は薫の腕に縋ってきた。

「駄目、別れたくない」女が男に見せる決意はときに握り返す指先で伝わってくる。薫はどうすべきか、揺らぐ気持ちで受け止めていた。

「有紀、おれだって、まだ、おまえを愛している。きっと、つい先週まで二人は熱烈だったね。その恋の絶頂で別れるなんて、生木を裂くようなものだよ」

それでも、告白される前よりは二人とも抱き方がぎこちない。どこかに線が引いてあった。

「わたしたち、ずっと、第一線を引いたプラトニックな愛し方でいたら、ずっと恋人でいられたのに」

「それはやむをえないことだ。男と女の行き着くところは、セックスしかないんだ。それに至るまで、ずっと待つという駆け引きの中で、余計に燃えた。セックスだなんて、見てしまえばお終いだ。その関係に至るまで登り詰める長い一年だったが、楽しかったよ」

「もう、すべてが過去形で話されるのはかなしい」

薫は有紀の骨ばった骨盤を引き寄せた。そして、夜目に光る有紀の瞳をみつめていた。互いに裏切り、騙していたことが発覚して、恨みっこなしで別れるのだ。「それにしても、有紀、綺麗だよ。とても信じられない。この髪も柔らかいし、肌も曇りなく、大きな目も食べてしまいたいくらいだ。どうして、そんなふうに生まれたんだ」薫はひしときつく抱きしめていた。

「あなたも、凛々しい目が好き。それとさっぱりした性分ね。いつまでも抱かれていて安心してしまふ。どうして、あなたはあなたなの」

有紀はいとおしいものを指先に記憶させるように、顔をなぞっていた。もう、そうして愛撫することもなくなるのだ。お互いに見てはいけないものを見てしまった。あるところにあるものがなくて、ないところにあるものがあつたなんて。そして、ないところにあるものがあつて、あるはずのところにあるものがなかったなんて。

有紀は目を閉じて顔を上げた。薫はそんな有紀を突き放すように後ろを向いた。

「キスはやめよう。どうしても嘘になる。このまま、綺麗なままで別れたら、思い出も風化するのが早いだろうね」

「ねえ、どうして、どうしてあなたは女なの？」

有紀は泣き叫んだ。

「云うなよ。そんなおまえも男だったなんて。よりによって、相性の最悪なお鍋とお釜の恋愛なんて喜劇だよ。おかしいよ」

「さよなら。今度は相手を間違えないでね」

「そういうおまえも、最初に指で確かめてから好きになれよ」

二人はまたぽっかりと空いた胸の隙間を、別の愛で埋めるために違う方角へと歩いた。薫は本当の女を求めに。有紀は本当の男を求めに。愛にジェンダー・フリーはない。男の代わりにする女がいたら教えてくれ。女の代わりにする男がいたら教えてくれ。

第112話 エゴとエコ

エゴがこの地球を汚している。みんなから点を取ってエコにする。多少の不便を我慢して分け合うことでだいぶクリーンになるのだが...

ゆっくりとした自然淘汰の進化もあるが、突然がらりと変わる進化もあるという。産業革命が

それだった。大概は、何かの重要な発明か、エネルギー革命が産業進化を加速させる。

201X年はその意味では歴史の転換点にもなるべく、エゴがエコに変じた年だった。フランスと日本の合同研究チームが太陽エネルギーの画期的な蓄電システムを開発したことから始まった。それは安価に量産できる素材であり、地球の未来のためにと、チームは一切の利権を排除し、特許も申請することなく、そのシステムを全世界に公表した。各社がそのシステムを使った様々な機器を製造して、先を争うように新製品を発売したため、第二次産業革命は二年で、地球をがらりと変えることとなった。

まずは自動車はすべてソーラーカー。無公害で空気が澄んだ。ガソリンスタンドは閉鎖に追い込まれていった。各家庭では屋根にソーラーシステムを取り付けたので、電力会社との契約を切った。電磁調理器でガスも使わない。電気温水器で灯油も使わない。家庭での光熱費節約は大変なものがあった。しかも安全でクリーンだ。困ったのは電力会社。収入は各社、二年でゼロになった。発電所はすべて停止。原発はどうしてくれる。停止状態で人も誰もいない。無人となって、子供らが侵入して遊んでいるから危ない。電力会社はこぞって破産したから、前世紀の遺物は、遺棄されていた。

電車も船舶も工場もすべてがソーラーシステムを導入したから、石油、ガスはどここの国も依存率がゼロとなった。油田も停止状態。砂漠の国はまた遊牧民族に逆戻りしていた。石油を巡っての戦争もなくなり、中東に平和が訪れた。

エコ住宅が新築の基本になった。ソーラーで電気とお湯は勿論のこと、井戸や雨水を浄化して各家庭で生活水の確保をする。排水や下水、汚物の処理もバクテリアで行い、家庭菜園に向ける。ゴミもだんだん出なくなり、生ゴミはゼロ。公共料金という言葉も死語になる。すべての家庭が自立していた。ケイタイ電話も全家庭に入ると、街から電信柱が消えた。道路を掘り起こすこともない。マンホールも珍しくなり、税金も随分安くなった。

ところが、若いカーキチ、暴走族は、音のしない静かな電気自動車などでは若さを発散できないので、闇ルートでわざわざ高いガソリンを入手すると、排気ガスを撒き散らし、騒音を出して、昼から国道を突っ走る。パトカーに追いかけられるスリルを味わっていた。

パソコン、ケイタイの普及が僅か数年でがらりと世の中を変えたより、このエネルギー革命は多岐に渡り急速な変革を成し遂げた。当然、倒産するメーカーが続出する。ついてゆけない会社、乗り換えられなかった会社が永年の歴史の灯をあえなく消していった。

国民の負債として残ったのが、原発と関連施設だ。原燃が破産したあと、株主の電力各社も倒産したので、政府と自治体は難題を持ってあまして責任のなすりあいをしていた。推進派の知事はとっくに辞めていた。裁判所で原発の用地ごと、入札したが、当然誰も買わない。困った、困ったと先送り。

そこへ不動産会社のやり手が進言した。うまく、売った暁には、定められている報酬以外に成功報酬を貰うという約束付きで。みんなは、売れると思っていない。一度、新聞に広告も出した。

原子力発電所売りますー坪たったの一円

それでも問い合わせすらなかった。営業マンはそんな危険な遺物を大企業に売ろうなどと考えてはいない。ひとり暮らしのばあさんを狙った。

「こんにちは、〇〇不動産ですが、おばあちゃん。預金金利も下がって、大変ですねえ。ほら、あの原発ですよ、安いってものじゃなくてね、一坪一円がいまなら十坪で一円ですよ。おばあちゃんのタンス預金で買えちゃう。この家の何千倍もの広さの土地がですよ。可愛いお孫さんの名義にしておけば、いい財産残せますよ」言葉巧みに売りつけに成功した。

後で、そのばあさんの息子が遠方からやってきて、そのことを聞いて呆然としていた。

「おふくろ、なんてことしてくれたんだ。あの原発と核処理施設は全部解体して、元通りにするまで三十兆円かかるんだ。何か事故があったらどうするんだい」

それを聞いてばあさん、泡を吹いて倒れた。

石油タンクも、火力発電所も、かつて地上を汚しまくった工場の煙突もみんな用がなくなって錆び付いていた。

東京の郊外でも星空が綺麗だった。天の川なんか見たことのない都民が夜空を仰いでうっとりしていた。

「ごめんください。夜分すみません。〇〇不動産ですが、高圧電線の鉄塔付きの山はいかがですか。いまなら安いですよ」「そんなもの何に使うんだ。いらん、帰ってくれ」

例の営業マンはめげないで売り歩いていた。

「どこかに、ひとり暮らしのばあさんがいないかな」

第113話 大運動会

村の唯一の小学校の今日は大運動会だ。孫子の応援にかこつけて野外宴会のため、村中どこか遠い村からも親戚が集まってくる。この村、南北に長く、忌神川を挟んで昔は仲がよかったが、いまは北郷と南郷でなにかと諍いが絶えない。それというのも、村会議員が北は革新、南は保守と二分して戦ってから、睨み合いが続いていた。北は山地で貧しかった。南は平野で米どころ、いつも南は北を稗、粟喰って飢饉も多かったのでケカズと馬鹿にしていた。南は銀シャリばかり食べて裕福な農家が多い。それがまた貧富の差を生み、差別が日常茶飯事となって反目しあっていた。ただ、小学校だけは、村の中心に役場と並んで建っていて、北と南が一緒に勉強しているのだ。子供たちだけは仲がよかったが、親同士は永年の恨み辛みが積もり積もって、対立感情はそうそう治まらない。それが年に一度の運動会となると...

五月の農繁期が一段落した日曜日、快晴。打ち上げ花火が鳴ると、どこからともなく、小学校の校庭に村人たちが莫蔭を手に重箱、一升瓶、クーラー、折り畳み椅子、バーベキューグリルまで持ってくる。朝、まだ未明のうちに場所取りと、敷物を敷いて陣取り合戦。遅れて行けば、いい場所は名前書いて占領されている。当の子供たちは何故かうんざりしている。運動会が楽しみではない。恥ずかしいという子が多い。親たちがはりきっている。いや、殺気立っている。先生方も落ち着かない、そわそわ、うろうろしている。何もなければいいがと校長先生もゆうべは眠れなかった。

校庭は万国旗、白線も目に痛い。全校児童五十人。一学年十人もいない。北は赤、南は白組と毎年決まっていた。始まる前からグリルに火を入れて焼き肉、焼魚、もう酒がはいつて氣勢を上

げている。酒盛りが目的なのか、孫の応援なのか。年に一度の村のレクリエーションというより、娯楽の少ない村のメインイベントだった。

校長の挨拶なんか誰も聞いていない。わいわいがやがやとボルテージが上がっている。いよいよ、一年生の徒競走。一学年一クラス、六人よりいないから、よういドンも二回で終わり。ピリでも三等。おやじたちが、腕を振り回して興奮していた。マイクで、白線の内側に出ないように、注意していたが、聞くものではない。

「おお、けっぱれ、太一、ほれ、南に負けるな。蹴散らせ、押し倒せ」
まるでプロレスの観戦だった。

玉入れは、二年生。なかなか入らないのにやきもきした父兄が飛び出してくる。
「北のやつらが出だど、おらだちも遅れるな」とばかり、親が競って玉入り。
「父兄のみなさんは観客席へお戻りください。これは子供たちの運動会です」
興奮した父兄はもう目にもものが見えていない。二年生たちはただぼんやりと立って見ていた。

「玉入れなら、任せてくれろ。とっちゃんの玉、いっつも入れでるからな」かっちゃんも頑張る。
学校側はそろそろ雲行きが怪しくなってきたから、隣り町の警察に応援を頼んでいた。機動隊のバスが到着すると、会場は騒然となった。

綱引きも、「どける」と、子供を脇へ寄せて親同士の対戦となった。
「米の飯喰っていねえ北のやつらに負けでたまるか」
「楽な生活してる南の連中に根性なんかあるもんけ」
綱引きは力の均衡でどちらにも動かない。そのうち、双方ともダウンして引き分けとなった。騎馬戦に至っては、興奮が最高潮に達した。最後の一騎打ちとなって、南が負けた。北の応援は大喜びで南へ快哉のシュプレヒコール。頭に血が上った南が腕まくりして押し寄せようとするところを機動隊に阻まれた。

借り物競走では父兄が出番。もう、子供そっちのけで主客転倒。一体誰の運動会だか判らなくなる。郷の名誉をかけて戦うのだ。ひとりくらい死んでもいい。とっちゃんは走る。我先に並んだ紙を拾うと、中に書いてあるモノを借りるに走る。

「なにに、バズーカ砲」「ダッコちゃんの人形」「骨箱」「お位牌」「卒塔婆だど」
「そんなもん、あるわけねえ」

応援合戦も子供たちが日頃から練習してきた成果を披露する。南はどうも揃わない。北は得意のマスゲーム。

いよいよ、クライマックスのリレーだ。そのころには酒もかなり入り酩酊する者がいる。頭に手ぬぐいで捻り鉢巻のおやじ、裸足になってコース脇に並ぶ。赤が負けていた。白がダントツで抜けていた。それを酩酊おやじ、何を思ったか、走っている子供に足払い。倒れた子供を押さえ込み、「早く、いまのうちだ。追い抜け」と反則。「北のやつら、汚え真似しやがって、もう許せねえ、やっちまえ」両方の応援席からどっと走り寄る。いつのまにか、手に手に竹竿や棍棒を持っていた。マイクで先生が叫ぶ。

「やめてください。今日は子供たちの楽しい運動会です」
機動隊も警笛を鳴らして間に入るが、ものすごい勢いに踏み倒される。場内乱闘になった。鼻血

が飛ぶ。入れ歯が飛ぶ。とっくみあいの喧嘩から殴り合い。倒れる者に馬乗りになって殴る蹴る。怒号、悲鳴入り乱れ。いつかマイクで流していた曲がオッフェンバックの天国と地獄に変わった。

今度は応援席に子供たちが座って観戦していた。

「そこだ、危ない、とっちゃ負けるな」「かっちゃ、後ろ。やっちなまえ」

救急車も待機している。校長、教頭はテントの椅子席に座って仕方なく眺めていた。

「毎年これだ。怪我で済めばいいが。困ったものだ」

「校長、やらせておきましょう。年に一度のレクリエーションですから」

第114話 眠る男

F氏は三十八才、独身。長く自動車販売会社の事務をやっていたが、車が売れないので、借り出されて営業に回された。セールスなどやったことはない。地味な内勤から急に営業に行っても、顧客リストがあるわけではない。一から自分のお得意を掴むため飛び込みをしなくてはならない。営業畑を回ってきた者にとってはあたりまえだが、やったことがない者にとっては、訪問販売などかなりの抵抗がある。どこからどう回っていいものか皆目検討がつかない。ともかく、住宅地図を塗りつぶすように、特に古い車のある家の玄関に立った。下取りを勧めるのだが、F氏は口べたで中々旨く相手をその気にさせるまでゆかない。しどろもどろで門前払いが関の山。

ただ、歩いて疲れた。歩合給ではないが、ノルマがある。今日も手ぶらで帰ると、上司の怖い顔が待っている。初めのうちは真剣に一軒ずつ戸を叩いていたが、断られることに恐怖すら覚えるようになると、そのうち、セールスもしなくなった。日々、ただ喫茶店でサボっているか、天気の良い日は公園のベンチでごろりと横になった。

F氏はこの年になるまで、つきあった女性もいない。友人も少ない。働く意欲もなくなっているので、何のために生きているのか判らない。営業に回されてから一台もまだ売っていない。それを、夕方、営業所に帰ると、只飯を食っているやつがいると、詰られるのだった。ただ、それに耐えているのが辛い。趣味でもあれば、逃げ場があるのだが、F氏にはとりわけて趣味もない。実にぐうたらな人間であることを自認していた。オブローモフそのままだった。

陽気のいい誰もいない公園のベンチでいつものように、車のパンフレットを顔に乗せF氏が午睡していると、なにやら指に止まるものがある。白いモンシロチョウだった。氏は目が覚めてじっと蝶を見ていた。胡蝶の夢の故事を思い出した。自分はいま、現実という夢を見ているのではないか。本当の自分は夢の中の自分で、これは虚構の世界なのではないか。

精神的にもくたくたに疲れてボロアパートに帰ってくる。殺風景な部屋で、タンスと食器棚よりない。流しに食器が山積み、カップラーメンの空や空き瓶が山になっていた。掃除もしていないので埃とゴミもすごい。本も読まない、音楽も聴かない、ギャンブルもやらない、つきあいもない。

そんなF氏にもある楽しみがあった。それは眠ることだった。何が幸せかって、眠るときが一

一番幸せだった。逆に朝起きるときが一番辛い。毎朝、目が覚めるとそこは現実という名の地獄だった。現実逃避のために眠るのだ。夢という映画館では、自分は旅行にもゆけるし、スーパースターにもなれた。いつも会社でも目立たない存在が、夢の中では主役で華やかだった。眠ることが趣味といえば趣味かもしれない。だから、枕や蒲団には頗る拘る。一日の半分を過ごすということは、人生の半分を捧げる睡眠のために、蒲団には贅沢をしたい。まるで、うきうきと恋人にでも逢いにゆくように、ふかふかの蒲団に潜りこむ。

絶世の美女がF氏の足に縋り付いて泣いた。

「お願い、捨てないで」「すまない、ぼくにはどうしてもやらねばならないことがあるんだ」「わたしより大事なことってなんですか」「大事なこと？ はて…」格好いいセリフを吐いたはいいが、夢の中でもしたいことがみつからない。

ファーストクラスの機内で、コニャックを片手にノートパソコンを叩いていた。

美人の秘書が、「社長、デトロイトのクライスラー社からメールで、合併会社の方で、新車二万台をアメリカで大々的に販売したいと云ってきました」

「何だ、たったの二万台か」

女優の青木瞳がベッドでF氏を待っていた。

「わたし、もう我慢できないわ。もう十日もあなたを待ったのに。いつも仕事だってじらせて。本当は、別の女の人と一緒にだったりして。悪い人ね」

「そんなことはない。ぼくには、もう君より見えていない」

F氏は全裸でベッドインした。瞳の形のいい乳房がくるんと飛び出した。F氏はそれを慣れた手つきで愛撫する。濃厚なディープ・キスで瞳は濡れていた。と、目が覚めた。いいところまで行ったのに。あと少しだったのに。F氏は悔しがった。股間が濡れていた。急に現実世界に起きると、今日のセールスの予定が頭の中で回転しだし、部長の怖い顔まで浮かぶ。うんざりしてくる。

F氏は夢の中ではドン・ファンであり、億万長者であり、財界のボスでありえた。ときには部長より偉い役員になって、部長を怒鳴り散らす夢をみてすっきりすることもあった。すべて、夢は願望であり、現実と対照的だった。

眠るときが、こんなにも幸せなのに、どうして目が覚めるのか。少し考えて、そうか、永遠に覚めなければいいんだ。きっと、死ぬときが最高の幸せなんだろう。もう起きる必要も、仕事で厭な目をみなくとも、一人ぼつんと寂しい思いをしなくともいいんだから。F氏はそう思うまでになった。

不眠を理由に睡眠薬を入手したF氏は、その夜、ひと瓶の睡眠薬を飲んでしまうと、蒲団に入った。これで、ずっと夢を見続けられる。瞳、逢いに行くぞ。今日こそ、君を抱くぞ。F氏はそのまま闇の中に落ちていった。

第115話 フーリガン

不敵な笑いを見せて、屈強の男たちが、アムステルダム航空のジェット機で成田に着いた。腕にはサッカーボールのタトゥーが彫ってある。到着ロビーから空港の玄関まで、夥しい数の機動隊が警備していた。

ワールドカップが日韓併催で行われるので、その二日前になると、続々と各国からフーリガンが来日した。パンナムからはチャーター機まで用意して、アメリカのフーリガンたちが降り立った。いずれも猛者揃いで、前科のあるもの、性格凶暴なもの、元プロレスラーからテコンドーの選手までいた。マスコミ各社は競って、取材合戦を展開していたが、どの局も面と向かってインタビューするものはいないほど、迫力があつた。

一両日中には、ドイツからカナダから、アフリカ、南米各国からフーリガン専用機が到着した。空港で、フーリガン同士の鉢合わせもあり、一触即発の場面もあつた。みんな、強い酒を浴びていた。腕がむずむずする連中で、蒸せかえっていた。

フーリガンご一行様のために、ホテルも貸し切りだった。他の宿泊客に迷惑がかかればいけない。機動隊は必ずホテルの玄関、フロントに配備することになっていた。戦争の前夜のような緊張感と、恐怖感が国民に走っていた。怖いもの見たさも手伝って、どの競技場の入場券も完売だった。いつものようにダフ屋が券を十倍で売って摘発された暴力団は数知れず。

フーリガンを入国させたことで、国際世論は日韓を強く非難していた。人道上の問題を宗教団体も抗議文を政府につきつけていた。それでも、ワールドカップはやめるわけには行かない。外貨獲得だけでなく、この不景気の折、各国から観戦のために訪日する観光客は、実に平年の倍に及んだ。その経済波及効果は計り知れないものがあつた。

すでにデパートなどではフーリガンのプリントトレーナーや、記念グッズをいろいろと販売していたし、若者を中心に、フーリガンが格好いいとする風潮まで出てきていた。アウトローを賛美するのは、時代が刺激を求めている証拠だった。

いよいよ、第一試合の当日となった。サッカー競技場は七万人の超満員。全国の警察から応援を頼んで、機動隊の数も三万人と、異例の警備体制となった。死傷者が出るのは覚悟の上だから、救急車も三十台、ヘリコプターは五機、病院もベッドを空けて待機していた。

取材陣がカメラの砲列を競技場に向けている。ヘリコプターが何機も旋回していて煩かった。観客席では、とばっちりをくわないために、お土産としても売られている、フーリガン防御ヘルメットがカラフルで売れ行き好調だった。殆どの観客がプラスチックの色とりどりのヘルメットをかぶっていた。競技場の柵には高いフェンスが金網で造られて、張り巡らされていた。

第一試合は強豪のブラジルとイギリスだ。観戦のために、両国からかなりの応援団が来ていた。各々の国旗がヘルメットについている。花火が上がった。場内マイクで試合開始前の注意事項が、英語、ポルトガル語、日本語で繰り返し行われていた。

一絶対にフェンスの内側には出ないようにしてください。火災も発生する恐れもありますので、観客席には消化器が置いてあります。場所を確認しておいてください。また、興奮して競技場内

にはけっして物を投げないようにしてください。十八歳未満の方は入場できないことになっております。過激な暴力シーンを伴いますので、お子様連れの方も退場していただきます。

審判の格好も今日は特別だ。プロテクターを体中に巻き付け、不格好に太い。手に手にショットガンを持っている。万が一のときは撃ち殺してもいいことになっていた。

さあ、いよいよ選手たちの入場だ。様々な格好のフーリガンたちが、西と東のゲートからグリーンの上に続々と集結していった。両国からそれぞれ三百人ずつの同数のフーリガンが数をチェックされていた。そして、飛び道具は一切が禁止されているので、持ち物検査も控え室で行われていた。その他はどんな凶器を持ってきてもいい。ルールは、相手が半分殺されたら試合終了。もしくは生き残った全員が白旗を掲げて降参したときだ。みんな手に手にナイフや、チェーン、鉄パイプなどを持っていた。フーリガンのワールドカップの火蓋は切って落とされた。競技場の中央で選手たちが激突する。血潮がグリーンを赤く染め始めた。

第116話 真夜中の電話

真夜中に電話が鳴っている。それが浅い夢の中へと侵入してくると、わたしはいつものところがない電話機を探していた。いつもは玄関に置いてある電話があるべきところがない。居間を探していた。トイレの中にもない。タンスの引出しもひとつずつ開けてみるが、みつからない。どこだ、どこで鳴っているのか。音を頼りにだんだんと近づいてゆくと、どこか狭い空間に閉じ込められて、籠もった音がするのだが、その音源までの距離感を掴めないで焦っていた。台所から聞こえるようだ。耳を澄ませば、鳴っているのはどうやら、冷蔵庫の中らしい。3ドアの上の冷凍庫を開けると、あった。凍りついている電話機がけたたましく鳴っている。

と、夢から覚めた。階下の玄関で電話が本当になっているのだ。わたしは枕もとの時計を見た。二時半を示している。誰だろう、こんな夜中に。不吉な予感を抱きながら、階段を降りてゆく。受話器に手をかけると、電話は切れた。人の迷惑も考えない。それとも、緊急の知らせか。また、二階へ戻ろうとすると、電話は再び鳴りだした。わたしは恐る恐る受話器をとった。

「北村です」声は不機嫌で、まだ眠い声をしていたろう。

一裕士？ わたしだよ。それは田舎の母だった。

「何だよ、こんな夜中に何かあったの？」

一忘れちゃいけないと思ってね、思い出したんだよ。土地の権利書だがね、仏壇の下の引き出しに入っているから。引出しの裏にテープで貼り付けているから、開けても見えないようにしてあるんだ。

「何を云ってるんだ。こんな時間に。そんなこといつだっていいことだろう。要件があったら明日また電話してくれよ、まったく」

一ごめんな、いつも気になるものだから、悪いね。

わたしは一方的に電話を切った。まだ呆けたとは姉から聞いていなかった。夜昼も判らなくなるような母ではなかった。八十になって姉夫婦が面倒をみていた。わたしはウイスキーをグラスで一杯だけ空けてまた寝室へ戻った。妻は、「いまごろ誰なの」と、不審そうな声で訊く。「うん、おふくろからだ。たいした用事ではないのに、呆けたのかな。人騒がせな」何か、起こされて眠りにつけないでいた。

翌朝、今度は姉から電話だ。

一裕士、母さんが死んだの。泣き声でよく聞きとれない声だ。

「なんだって、今朝か」一ううん、お医者さんが駆けつけてきたけど、おそらく昨日の八時前だろうって。心臓発作よ。

「そんなはずはない。夜中におふくろから電話があったんだ。確かに二時半ころだ」

死者からの電話か。それとも歩いていたのか。ともかくも、わたしは妻と飛行場へと急いだ。正月に帰ったときはあれほど元気だったのに。

通夜の後、わたしの電話のことが話題になっていた。兄弟や親戚はまるで信じない。夢でも見たんだろうと云う。わたしは確かに起きていた。ウイスキーまで飲んだ。母の電話の内容を思い出して、仏壇の引き出しを開けて、その裏を引っくり返して見た。権利書の入った茶封筒がテープで止めてある。一同、声も出ない。

母の初七日を済ませると、わたしは家に帰ってきた。留守番に次男と娘がいるだけだった。疲れがどっと出てくる。

真夜中に電話が鳴る。またか。一おれだよ、おれ。と、若い男の声。次男の友達からだった。親子で声が似ているから、相手も間違っていた。二時頃だった。まだ起きている息子に繋いだ。最近の若者は礼儀を知らない。人の迷惑も考えないで、真夜中に平気で電話を掛けてよこす。息子もヘッドホンで音楽聴いて、勉強しているから、電話が聞こえない。これで、また布団の中で悶々としていると、また電話だ。時計は三時。もう、頭にきた。受話器を取るなり、怒鳴ってやった。

「あのなあ、今、何時だと思っているんだ」

一ごめん。お父さん。どうしても伝えておきたいことがあって。

他県で働いている長男からだった。

「なんだ、おまえか、どうした」ぶすっとした自分の声が判る。

一怒らないで聞いてね。できちゃったんだ。そのお、彼女にコドモ。

「な、なんだと。おまえ、いくつになった」

一二十一だよ。彼女は二十歳。もう、六ヶ月で墮せないんだ。

「既成事実というやつか。死んだり、産まれたり賑やかなことだな」

長男は至急入籍したいという。勝手にしろ。二人とも若いが、子供ではないんだ。まあ、めでたい電話なら真夜中でもいいか。わたしもじいさんになる。完全に眠れないから、ウイスキーを居間でやっていた。

我が家系ではちょうど世代交代が行われていた。年寄りたちはみな高齢で、いつ逝っても不思議ではない。孫たちが年頃になって、こちらもいつ結婚しても不思議ではない。ひとり死んで、ひとり生まれる。きっと定数のようなものがあって、輪廻転生しているんだ。

また、真夜中に電話が鳴る。

「今度は何だ」わたしは怒り心頭に発し、ハサミを手に階下へ降りていった。

第117話 思い出検索エンジン

パソコンの便利なところは、膨大な世界のデータから、瞬時に言葉を捜してくれる機能があることだ。それを検索エンジンと云い、どんなパソコンからでも、小さな窓口へ調べたい言葉を入れると、該当するデータをすべて出してくれる。

わたしは家に帰って、女房が寝たあとも、調べものをするために、毎夜パソコンに向かい、インターネットに繋ぐ。仕事関連のホームページを見ていたら、ある地名が目についた。小樽。すると、わたしの脳の中の検索エンジンが回り出す。ひとつの地名が時間と画像と結びついてくる。そしてひとりの女の名前...

わたしは小樽の商科大学に三十年前在籍していた。坂の上の海に見えるアパートに女と同棲していたのだった。彼女は高校を中退して、旭川から家出てきた不良で、札幌の薄野でコンパの夜に拾った。わたしを金のある学生と思ったのか、ストリートガールをしていて、誘惑したのだ。相手にしない者が多いのに、わたしは、「そんな事をしていちゃいけない」と、真面目に向き合っていた。じっと、目を見ていた。すると彼女は急に大声で泣き出したものだから、わたしのほうが狼狽えた。その夜、彼女はどこまでもわたしについてくる。「自分の家に帰りなさい」と、諭しても、チンピラのヒモがいて、客をとらないと殴られると、怯えているのが不憫で、アパートまで連れて帰ってきた。そのままいついたのが、河村菜穂子だった。

菜穂子は三十五キロしかない痩せ細った体で、よく寝込むことがあった。栄養をとれなかったので弱かったのだ。パーマをかけて派手な化粧をしていたのが、一緒に暮らすようになってからは、長い髪もストレートになり、素面のままだが若々しく綺麗に見えた。わたしも家庭教師のバイトをし、菜穂子もスーパーのレジ打ちのパートをやりはじめた。

菜穂子はいつか、わたしがレポートをまとめているとき、じっと横顔を眺めていて、何か書いていた。

「さっきから何を書いているんだい。見せろよ」

菜穂子は嫌がって見せない。後ろ手に隠した紙を強引に取り上げると、わたしの机に座り書きものをしているデッサンだった。驚くほどそれがうまいのだ。

「絵を描いていたの？」と、訊くと、「中学の先生からは美術部に入らないかと勧められたけど」と、まるで意欲がない。他にもいろいろと描かせてみたが、この子には天分があると確信するに至った。わたしは市内の絵画教室へ菜穂子を通わせた。本格的に勉強させようと思った。

どんな人間にも何か隠れた才能があるようだ。それを本人ですら気が付かないことが多い。菜穂子は水彩から油絵に進んだ。作品を先生の勧めで日展に出品したら一発で入選を果たした。マスコミも騒いだ。新聞に載った途端、わたしたちに災難が降りかかろうとは思いませんでした。

夜中に何者かがアパートのドアを叩く。菜穂子が出たが、何か男と云い争いをしていたと思った。「こんなところにいやがったか」と、聞こえた。「さあ、来るんだ」と、強引に菜穂子の手を引いてゆく。わたしは、起きてきて、男がチンピラのヒモであると直感すると、男に体当たりした。ところがもう一人の仲間がいた。わたしはしこたま後頭部を叩かれて、その場に倒れた。気が付くと、菜穂子は連れ去られた後だった。それからは、虚しく薄野辺りを探したが、ついにみつからずじまいだった。

そんな三十年前の思い出の名を、わたしは検索エンジンの窓に打っていた。札幌の雪の中を宛てなく探し回ったあのころの気持ちで、検索のボタンをクリックした。すると、河村菜穂子が一番で出てきた。ホームページがある。世の中は広いから同姓同名もあるだろう。そのアドレスをクリックすると、モニターの画面いっぱい、一枚の風景画が映し出されていた。

その絵は窓と題する絵で、窓枠とカーテンの向こうに、家々の屋根が低く垂れ込め、その先に港が広がっていた。停泊している商船や、クレーンが見えている。紛れもなく、小樽のアパートから見る景色だった。

第118話 振り向くもの

爆撃の音が町のあちこちに反響していた。住民の多くは国境の村まで避難して、隣国への難民として逃げていった。大学の建物も砲撃で一部が瓦礫と化していた。その地下室にある研究室には、まだ二人の男が残っていた。

「ケリー、書類を焼いたら、CD-ROMだけはどんなことがあっても持ち運ぶんだ」ジュリアード教授は助手のケリーに命じて、敵の手に渡っては大変なことになる研究資料と論文を焼却炉にくべさせた。大方のデータはCD-ROM三枚に収まっていた。逃げるときにどんなに楽しめない。

「プロフェッサー、二十四号はどうしますか。もう、直に完成するのですが」ケリーは、電極に繋いでいる卵型のカプセルを指さしていた。

「やむをえない、破壊してゆこう。もう時間がない。敵軍は町の郊外まで侵攻してきているだろう。このままではわれわれが危ない」

「なんとか持ち出せないものではないでしょうか。折角ここまで漕ぎ着けたのに、何年かかっていますか」

「それどころではないだろう。このばかでかい装置をどうやって運び出すのだ。サンプルの遺伝子はすでに隣国の国立大学に届けてあるんだ。向こうでまた実験を続ければいい」

そのとき、何かが近づく音が空を走ったと思うと、建物にロケット弾が命中した。一瞬、照明が消え、地震のように揺れた。すぐに自家発電が作動して、またモーターが回転する音がした。天井が一部壊れてコンクリートのブロックが落ちてきていた。

「急がねば。瓦礫の下敷きになるぞ」

二人は地下室から一階の床に通ずる鉄板を開けた。手にはノートパソコンと、DVDなどが入っ

たトランクだけを持った。通りに出た途端、敵の戦車がまさに迫ってきたところだった。二人は反対側に向けて走り出した。戦車から走る人影を追うように機銃掃射が行われた。ジュリアード教授の背中に数発が命中した。白衣がみるみる血で染まってゆく。「プロフェッサー」と、ケリーが駆け寄る。抱き起こすと、顔がない。後方から貫通した銃弾は顎から抜けた。ケリーは震える手でトランクを二つ持つと、気が狂ったように泣き叫びながら、銃弾の飛び交う中を走り抜けていった。

建物は火に包まれていたが、地下室は無事だった。ずしんずしんと、爆発のたびに揺れはしたが、装置は働いていた。カプセルの中には人口羊水が循環してあった。臍の緒も酸素や栄養分を胎内に運ぶ管に繋がれ、それも直に役目を終えようとしていた。透明なカプセルの内側には、明らかに新生児とはいえないグロテスクな生き物が、いままさに生まれようとしていた。遺伝子組み替え技術をもって、他の動物の秀でた機能を人間に組み込むといった、恐るべき神の領域を冒涇した研究の成果が、いま誕生しようとしていた。

聴覚と嗅覚は犬の優れた機能を植え付けていた。それによって、人間が聞き分けられなかった音のレンジが広がるばかりか、遠くの物音でさえ聞くことができる。運動神経はチンパンジーから、腕力はゴリラから、成長の早さは馬から得た。新種の人間は走らせても、跳ばせても、ゴールドメダリストの記録をあっさりと破るだろう。知能指数も掛け合わせの結果、最高水準を得ることができた。

その結果がこれだ。頭部は異様に大きく、手と足が長く、胴体はそれに比較すると短い。目もぎょろりと大きく。望遠レンズと広角を兼ね備えたように、視力でも人間の能力を超えていた。耳は狼のようにぴんと立ち、その集音パラボラアンテナは、自由に音の方角に意思によつて動くのだ。鼻も犬のそれに似ていた。より複雑な造作ができるように、指も細く長く、猿のように一日、木にぶらさがってもいられる。跳力、速力、握力、背筋力、あらゆる人間の平均的能力の倍以上は確保できた。

史上最強の哺乳類がいままさに生まれようとしていた。母のいない、父の姿も見えない、機械の中でもぞもぞと蠢く、もっとも醜悪で、能力だけを高めた奇怪な新人類が戦争の副産物でこの世に生誕する。

カプセルはタイマーによつて、割れた。自動的に破水する。と、同時に臍の緒も切断。肺の機能が活動し始める。耳の下にはエラもある。水中で生活できるように、エラ呼吸まで備えた、水陸両用だった。その赤ん坊が、割れたカプセルの中ですくりと立ちあがった。産まれてすぐに立つ馬と同じだった。立って歩くまで一年以上かかる人間の子育てを短縮できる。そればかりではない。産まれた時点ですでに十才児の知能をも持ち合わせているので、急速な暗記力と、学習能力で、瞬く間に脳も成人に達する。

「おおい、ここに地下室があるぞ」

階上で靴音と声が騒がしい。崩れた瓦礫を掻き分けながら、地下室への重い鉄の蓋が開けられた。その階段を、数人の兵士たちが、軽機関銃を手に降りてきていた。

「何かの研究をしていたようだな。ここだけは自家発電で照明が点いている」

兵士たちは、もやもやと煙のたちこめている割れたカプセルの中から、何者かが動いている影を見つけて立ち止まった。

「キキキ、キキキ」と、猿のように鳴く頭の異様に大きく、目がやたらに大きい生き物が二十一世紀の悪夢として兵士たちを振り向いた。

第119話 美人の条件

マリアは自分の誕生日を呪っていた。この世に生を得たことの感謝を両親に感じたことはなく、むしろ産まないでくれたらよかったものをと、自らの不幸を嘆いていた。マリアは恨みがましい目で鏡をみつめていた。何故か回りと違う金髪だった。皮膚の色が雪のように白い。鼻も細く高く、醜かった。目も大きく、ちっとも魅力がない。第一、痩せていてスリムなことが嫌われた。二十五にもなって、恋人もできない。男たちには笑われはしても、相手にされないでいままできた。友人も同情だけで話しはするが、心からの親友はいない。どこかでみんな馬鹿にしているのが判るから哀しい。

テレビを見ても、映画を見ても、女優は歌手は、マリアとはすっかり対照的だった。スワヒリ語版の女性ファッション雑誌を見ても、スーパーモデルは生きている躍動感に包まれていたし、丈夫だった。それにひきかえマリアは弱々しく、とても重労働には耐えられないし、家事にも向いていないような華奢な体型だった。マリアはついに意を決して整形外科の門を入った。高い手術代を払っても、差別されずに、普通の結婚ができるなら、借金してもいいという覚悟があった。

「あなたは、アメリカ人ではないんですか」

医師は体の特徴をカルテに書き込みながら、マリアに訊いた。

「いいえ、両親ともに黒人です。わたしのひいおばあちゃんがアメリカに住んでいたと云ってました。多分、血が混じっていて、突然、わたしのような奇形が生まれてきたのだと家族は云ってました」

「確率は低いですが、ありえることです。それで、どうされますか」

「皮膚の色を黒くしたい。髪の色も黒く天然パーマのように」

「それは色素の問題で無理ですが、日焼けサロンである程度は黒くなります。髪の色は脱色して染めることで回りと区別はつきません」

「あと、この鼻を上を向いて、小鼻を大きく、鼻穴を広げてください。額は膨らませて、目は細く、唇をだらりと厚くしたいのです。そして、体重をいまの二倍にしたい」

医師は難しい注文に頭を抱えていた。

「ううん、外科手術でできるものとできないものがあります。体質改善が一番難しい。痩せ気味のあなたが、デブになろうとするのは至難の業ではありません。これから無理して食べるという苦行に耐えられますか」

「ええ、わたしは普通の女になるためなら、なんだってやりますわ」マリアは悲壮なまでの決意で唇を噛んだ。

マリアは小さな頃を思い返していた。町の子供たちに石を投げられ、仲間はずれにされ、ホワイトとからかわれて、どんな辛い少女時代を過ごしてきたものか。学校でもそれは続いた。何度

も学校をやめようとも考えた。就職もどこを受けても落ちた。理由は、水汲みの桶を担げる体ではない、川で洗濯をしたり、バッファローを捌く力もない。女として一通りのことができないと判断されたのだ。確かに、足も細く、腕も細かった。周りはみんなどっしりとした太い手足に子供が沢山産まれても大丈夫な体力もありそうだ。マリアを見ると、みんな口を揃えて、「とても、ハイエナや豹と闘える体ではない」と云う。家庭を護るということは、自分の子供を外敵から護れなくてはいけない。町から一步外へ出ると、そこは野獣の王国だった。その風土に機能的であるということがもっとも美しい体型を造る。人工的に歪曲させた美は美ではない。

マリアの整形手術が始まった。それ以前にカロリーの摂取を多くして、プロテインなどで筋肉をつけるようエステに通っていた。アフリカのエステは太るために行くのだ。全身の日焼けサロンで見違えるように黒くなったし、髪の色も染めた。ちりちりにパーマもかけた。目は細くなるよう、目元の肉を盛り上がらせ、唇も広げた。鼻はだんご鼻で鼻穴を大きく開いた。

一週間。いよいよ包帯のとれる日がやってきた。マリアは緊張と興奮で、朝から落ち着かない。成功してくれたらいい。包帯を看護婦が取り始める。

「まあ、美しいこと。鏡をご覧くださいませか。もう、あなたはミスアフリカ間違いなしですよ」
恐る恐るマリアは差し出された鏡を見た。すっかり黒人の美人だった。理想的な顔に生まれ変わっていた。

「ありがとう、先生。これで自信を持って生きてゆけます」

マリアは十日ぶりで外へ出た。サバンナの日差しが眩しかった。これで、友達もできるし、恋人もできるかもしれない。もう、みんなと同じなんだわ。

だが、どうしたことだろう。町を歩く若い女が十日前とがらりと変わっているのに、マリアは驚いた。一様に、髪は金髪に染めていた。顔は白く塗っている。目は大きく、唇は細く見えるように化粧しているではないか。逆にみんなはマリアを軽蔑したような顔で見る。会社の同僚とすれちがったから、問いただしてみた。

「わたし、マリアよ」

「まあ、美容整形したって、変わるものね」その同僚も金髪にガンシロ。

「みんな、どうしたのよ」

「あら、あなた、知らなかったのね。いま、この国はアメリカン・フィーバーですごいのよ。映画と歌がヒットしてね、連日、大スターや歌手が来ているの。もう、そんな黒い髪と顔は流行らないわよ」

マリアは愕然とした。美人の条件は流行でも歴史的にも変わるのだ。たかが、顔の皮一枚のことで、女は右往左往しなければならない。すべて商業主義の策略だということに気づきもしないで。

二十代の男がふらふらと都心のコンビニに入ってきた。もう何日も食べ物を摂取していないかのような、げっそりとした頬と、窪んだ蒼白い目をしていて、棚から十個くらいの弁当を両手で抱えるようにしてレジへ持ってゆくと、ポケットからありったけの札と小銭を取り出して、無造作に置いた。

「温めますか？」と、販売員が訊いたが、彼はもう店の床に座りこんで、弁当を食べ始めていた。客も笑いながら遠巻きにして見ていた。彼は唐揚げ弁当をたいらげると、カレーライス、焼肉弁当、いなり寿司、サンドイッチと、わき目もふらずガツガツと食べまくっていた。ペットボトルのお茶まで飲み干していた。三十分のうちに十人前を胃の腑に収めた。じっと見ていた客の多くが拍手までしていた。テレビでよくやるフードファイターと思っていた。それだけ喰っても、彼の腹は満足しなかったとみえ、店内のキャッシュディスプレイから金を降ろすと、またレジに叩きつけるように置いて、棚から菓子パンや海苔巻、うどん、そばも生麺のまま持ってくると、茹でもしないで袋から取り出すと口に押し込んだ。咀嚼しているのではなく、ただ飲み込んでいるのだ。強引に詰め込んでいる。その頃には、勤め帰りの人たちで、野次馬の輪ができていた。二十食は食べたろうか。「駄目だ、まだ腹が減ってしかたない」男はふらふらとコンビニを人を掻き分けながら、また夜の繁華街に出ていった。面白がって、後をついてゆく者もあった。男の目は食堂、レストランの店頭に出ている看板を探していた。『バイキング食べ放題二千円』の看板を見て、ビルの階段を上ってゆく。店内は若いグループで混んでいた。サラダからスープ、大皿のイタリア料理から、ケーキ、アイスクリームまで食べ放題。彼はいきなり、自分の席に大皿ごと持ってきたので、ウェイターに注意されていたが、聞くものではなかった。小皿に摂るのではなく、大皿を次々にたいらげては持ってくるので、店内の客も大喜びで、彼の席に人だかりができた。応援の手拍子まで一斉にしている。店長は忌々しい顔をしていた。大皿をどんどん重ねてゆく。どこに入るのか。だんだん人間技ではないところに、周囲も不気味がる。もう、店ごと食べられてしまう勢いに、店長はとうとうストップをかけた。「お代はいりませんから、どうぞお引取りを」すっかり今日は赤字だった。いままで、一人でこれほど食べた客はいない。化け物だ。

男は、まだ満たされていない。食べても食べても、空腹で死にそうだった。痩せの大食いとは云うが、彼ほど短時間に食べた者はいないだろう。その彼が、突然、繁華街の歩道で倒れた。通報を受けてまもなく救急車がやってくる。救急隊員に通報した店員が話していた。

「食べ過ぎですよ。一人で三十人くらい食べていましたからね」

男は病院に担ぎ込まれたときは、すでに息を引き取っていた。食中毒も考えられたが、調べれば調べるほど、死因は考えられないものだった。男の家族が遠方から駆けつけてきていた。死因に不審な点があるので解剖したいと了解を得てから、医師三人が立ち会って、男の死体解剖が始まった。

数時間経って、真夜中になっていた。医師から家族へ説明がなされた。

「息子さんの死因なのですが、どう考えてもおかしいんです。よく、若い女性に見られる、精神性拒食症にも似ていますが、本人の胃腸の内容物を見て驚きました。限界を超えて食べているんです。それが死因でもないんですね。現代の医学では病症例がいまだない奇病とでも申しましょ

うか。とても信じられないことですが、息子さんは餓死したのです」

そのニュースが世間を驚かせたのも、数日の間だった。同じようにたらふく食べても餓死する者が各地で出回り始めてからは、原因解明が急務となった。発病から死に至るまでひと月とかからない。その間に食べる量はものすごいものがあったが、栄養として吸収されていない。どんどん痩せていって栄養失調で死ぬのだ。

コンパで酎ハイを何杯か飲んだOLはみんなと別れて、ひとりアパートに帰ろうと、駅に向かっていった。なんだか、喉がカラカラだった。女は、そんなに飲んだのかな、と首をかしげる程度だった。構内の自動販売機でビタミンCの炭酸飲料を買って飲んだ。一本飲んでも、喉の渴きは収まらない。もう一本と。今度はカロリーオフのコーラ。それでもきりがなく水分を体は求めている。売店で今度は一リットルのミネラルウォーターを買って、その場でラッパ飲みしたから、通りかがり的人是くすす笑う。可愛い顔した若いOLの酔っ払いを、指さして行く。女はそんなことには構ってられないほど喉の渴きが酷かった。もう何リットル飲んだろう。歩くとザブンザブン音が聞こえるほどだ。

女はこうしていったって仕方ないと、我慢して電車に乗り込んだ。家までそうかからないからと思っても、堪らなく水が欲しい。喉が焼け付くように痛い。ひょっとして、喉の奥も渴いて、早のように地割れをおこしているのではないかと思うほど、声まで嘎れてきていた。体中の水分がどんどん蒸発してゆくようだ。立ってもいられない。意思朦朧となってくる。電車からようやく降りた。また、駅の自動販売機で大きな炭酸飲料を買った。一気に飲み干すが、まるで体が吸収していないように、どこかへ水分が奪われていた。ふらふらになって歩いていた。地面が砂漠に見える。商店街が蜃気楼のように揺らめいて見える。もう、何リットルの水分を補給したろう。次第に痩せ衰えてゆく自分が判る。幻想まで見ているほど弱ってきていた。

住宅街の路上で女は倒れた。通行人が駆け寄って抱き起こした。

「水、み、ミズを、く、だ、さい」女は手を空に伸ばしたまま、息絶えた。

このニュースも現代の奇病として大々的に報じられた。すべてが原因不明。

研究者はみな頭を抱えていた。これほど、食べ物が豊富で、餓死するなど思いもしない現代の人間社会で、何かが欠乏しているのだった。その何かが発見されれば病因が突き止められるかもしれない。大都市の荒涼たる干魃地、人間世界の砂漠、そこで飢えている人々の不足している何かだ。

「この飢渴病と名付けられた恐ろしい伝染病は地方へも拡がっております。政府は研究チームを編成し、海外にも支援を要請しました」

カーラジオからニュースが流れている。路肩に停められている車のドアが開いて、運転手が体を半分路上に投げ出すようにして死んでいた。歩道にはそんな死体が点々とどこまでも足跡のように続いていた。

真田正幸は市役所に三十年勤めた真面目で平均的な職員だった。同僚が課長に昇進しているときに、正幸だけはいまだ補佐である。福祉課に勤務していたが、一日の大半は苦情処理係のような、聞き役だった。各団体の長が毎日のように訪れては、行政に対する不満をぶちまけてゆく。要望も多い。電話もひっきりなしだ。それを受けるのはいつも正幸だった。課長は外出、出張が多いから、住民の様々なトラブルから文句から、へいこら頭を下げて真摯に受け止めるので、難題山積みとなる。それが、正幸のストレスとなって溜まっていった。前任者はノイローゼになって、精神病院行きになった。

役所というところは外見では判らないが、意外と人間関係が複雑で、厭らしいところもあった。辞めてゆく者は大概それが原因だ。酒が全然駄目な正幸はつきあいも悪い。麻雀もやらない。ゴルフも知らないから、上とのつきあい、接待もできない。

家にバスで定刻には判で押したように帰る。一分と毎日の行動パターンが変わらない几帳面な日常を送っていた。六時には家だ。それから風呂に入る。女房とは結婚二十五年、冷戦状態であり、お互い何をしているのか皆目検討がつかないばかりか、干渉もしないし、話もしない。たまに話すと愚痴から喧嘩だ。息子は大学浪人三年。いつまでもぶらぶらしていて、勉強している素振りも見せない。何を考えているのかこちらも判らない。娘は高校生だが、暴走族とつきあっている手のつけられない不良。ただいま停学中で、外泊が多い。

なんら趣味もない正幸にとって、黙って夕食時にビールを飲んで、テレビでナイターを見るか、新聞に目を通すぐらい。家族もバラバラで、家に帰ってきてても安らぎはない。なんのために仕事をしているのか張り合いもない。家のローンもあと少しで終る。定年まで七年。ものすごく長く感じられた。

朝、正幸はいつもの出勤のバスに揺られていた。ふと、バスの行き先を見ると、隣町まで行くことになっている。市営バスも三十キロも走るのかと、ぼんやりと考えていたが、このバスの終点はどんなところだろうかと思うと、行ってみたくなった。ワンマンカーの車内放送が入る。「次は、市役所です。お降りの方はお報せください。次、止まります」市役所前で乗客の大半は降りてしまう。ひとり後部座席に残ったのは正幸だけだった。

いい天気だった。六月の初夏の清々しさがあった。こんなに晴れていて、仕事をするのも勿体無い。バスは市の郊外を海辺へと出ると海岸線をのんのんと走った。途中、部落から老人たちが乗ったり、降りたりしたものの、殆ど空気を運んでいるようなものだ。これでは市営バスも赤字なわけだ。バスは終点の隣町の役場へと着いた。

三十年で初めての遅刻、いや、無断欠勤だ。この町からさらに隣町までのバスが出ようとしていた。正幸は慌てて飛び乗った。私営バスに変わった。かなり古いオンボロバスだった。コルタール臭い匂いが、板張の床から漂っていた。車窓から見る海は眩しかった。窓から潮の香りが届けられていた。

乗ったバスは海辺から山に入った。今度は森林浴だ。きらきりと木の葉が光る。いいなあ、と

正幸は旅行気分浸っていた。やがて、バスは山を越えた盆地の町に到着した。そこはもう県境に近い。隣県のバス会社のバスが待機していた。隣県の某市まで行くバスだった。正幸が来たこともない山の中をバスは走っていた。地図が頭の中にだいたいはあるが、未知の領域には違いない。何か少年のように心躍る。こんな気持ちはもう何十年もなかった。新鮮な冒険心がむらむらと頭をもたげていた。

バスは山かいの温泉場を通った。ばあさんたちが、タオルを髪に巻いて、方言ですさまじいお喋りをはじめた。よく笑い、よく喋るが、意味が判らない。湯上りのいい匂いがした。

峠を越えると、隣県の某市へと入っていった。小さな城下町でどこか気品がある町だった。駅前で降りると、正幸はすでに昼過ぎていることに気が付いた。寂れた食堂の暖簾を潜って、この名物の稗めし定食を頼んだ。川魚と山菜、どこか鄙びていて懐かしい。お茶もおいしかった。正幸は、久方に食事がおいしいと思った。いままで、市役所の食堂も、近辺のレストランもありきたりの、カレーや丼ものばかりで飽きていた。何か、晴れ晴れとした自分にも驚いていた。鬱積していたものが取れていた。

食堂のおばあさんに訊いて、この市から一番遠くまで走るバスを教えてもらった。どうしてバスでなければならないのか判らない。電車の方が早くて安いのに、バスを乗り継いで、どこまで遠くへ逃げられるか、正幸はそんなばかげたことを考えていた。行き先が判らない旅というのが面白い。しかも、決められたレールの上を走り、終着駅が見えるような旅はもうしたくない。はちゃめちゃに生きてやろう。正幸は行き当たりばったりの旅をする、いままでにない別の自分を見ていて笑っていた。

バスはさらに古里を離れて遠く走った。バスという日常的な身近な乗り物でも、ここまで来れるのだ。ばかにしたものではない。稲がすくすくと青く伸びている田圃の中の本道をバスはノンストップで走る。乗客は正幸ひとり。途中のバス停に人影もないから、バスは貸し切り。日が暮れてゆく車内で、正幸は鼾をかきながら眠っていた。もう、家に役所にあの市に、戻る気はなかった。

第122話 危険物

青森県六ヶ所村が核処理施設にフランスからだけでなく、全世界からの使用済み核廃棄物が船で持ち込まれていた。その中にどさくさに紛れて、ロシアとアメリカの小型の核弾頭が入っていたのを作業員も受け入れの政府の係員も知らなかった。何か、ボンベに似た形をしているが、そんな容器に入っているのだろうぐらいにしか考えなかった。核の削減が決まって、その処理に困ったロシアが知らん顔して廃棄物に混ぜて送ってきたものだ。

船からダンプカーに積まれた廃棄物は、処理施設工場まで運搬されるのだが、厳重な警戒にもかかわらず、一台のダンプカーが盗まれた。大騒動になった。テロの仕業か、マフィアかと、新聞では書き立てた。ダンプカーだけを狙った犯人は、積み荷がなんだか判らない。適当な道路端に全部ぶちまけて逃げた。

三沢から八戸に抜ける国道沿の町、百石町。そこの小学生三人組は仲良しで、いつも一緒に下

校していた。国道脇を歩いていると、何か金属の筒に入っているものが転がっている。重いから、三人で抱えて家まで持って帰った。

「中に何が入っているか、開けてみよう」「うん、宝物が出たら三等分しようね」

農家のおばあちゃんたち、漬け物石探して道路端へ出たら、いいものが転がっていた。

「ちょっと長いけど、重いからいいかな、よっこらしょ」と、二人がかりで円筒型の鉄の塊をねこ車に載せた。

三沢の米軍基地からの払い下げは、マニアの間では高値で取引される。それを商売にしている東京の業者が、基地での仕入れの帰り、道端で面白いものを発見した。トラックを停めて、回収していた。

「産業廃棄物もこんな目立つところに違法投棄してよ。なんだか判らんが、砲弾か爆弾みたいな形をしている。こいつも払い下げだごまかして売ってやるか」

業者はその筒を何本か拾うと、トラックの荷台のガスマスクやヘルメットの入ったダンボール箱に収めた。

「さあ、おなじみ米軍の払い下げだよ」と、業者はスーパーの店頭で、アーミールックなども販売していた。軍隊の靴や帽子も人気だった。その中古品やガラクタの中に例の筒があった。一本千円の値札が付いている。

「おじさん、この重い筒って、大砲の薬莖にしては重いね。中になにか入っているみたいだし、一体、なんなのさ」と、若者たちが持ったり、叩いたりしていた。

「そいつは、不発弾なんだよ、ドッカーン」

「わあっ、脅かすなよ」「冗談だよ、なんでもミサイルの部品らしい」と、業者は嘘を云う。それらしい形をしているから、瞬く間に売れてしまった。

青森の百石町の子供たちが、変なもので遊んでいると、その家の父親が、叱って取り上げた。「こんなもの、どこで拾ったかしらんが、危険なものだったらどうする」父親は賢明で、警察へと届けた。警察から、爆弾処理班へ。それから自衛隊へ。米軍の専門家まで見に来た。小さい町は騒がしくなってきた。聞きつけたマスコミも「不発弾を拾った小学生、おもちゃにする」と書き立てたが、それどころではなくなった。米軍の鑑定結果、旧ソ連製の核弾頭だと判明したからだ。さあ、大変、上や下への大騒ぎとなった。原燃の社員が、同一の形のもを数十本、フランスからの廃棄物の中に見たと証言した。その運搬するダンプカーが盗難車として、岩手県内で発見されたことも。

マスコミには箝口令が敷かれた。パニックになってはいけない。秘密裡のうちに調査、回収をする方向で進められていた。

国会議員の秘書の息子が、スーパーの店頭でミサイルの部品を買ったというので、これは国会で取り上げようと、野党議員が証拠品として、国会議事堂へと持っていった。

首相が、野党議員の質問に答えていた。

「我が国は、非核三原則という鉄則がありまして、いまだかつて、保持したことも、持ち込んだこともありません」

そこで、例の野党議員が筒型のものを秘書に持ってこさせた。

「これは、米軍基地からの払い下げということで、スーパーの店頭で堂々と売られていたミサイ

ルの部品ということです。こんなものですよ、平和日本の子供のおもちゃとして...」

議員たちはざわざわと、そのモノを見てから騒ぎ始めた。議員たちに先ほど緊急の報告書で、写真入りで回された行方不明の核弾頭とそっくりだったからだ。

「核弾頭だ」と、誰かが大声で叫んだ。すると、議会はパニックになった。大臣たちも我先に入口に向かって殺到した。逃げまどい、倒れ、踏みつけ、国会は大混乱となった。悲鳴、怒号、雄叫び...

第123話 神経質時代

「おれを殺す気か」と、村上邦夫は朝食のハムエッグを床に叩きつけた。妻の彩子は、いつものことなので、気にしないで黙々と床を拭き始めた。邦夫は怒りで震えている。

「見ろ、目玉焼の縁にコゲが黒くついているだろう。コゲは発ガン性物質なんだぞ。判っているだろう」

彩子が見ると、一ミリかそこいらのコゲがあるぐらい。ばからしくて料理を作る気にもなれない。どうしてこんな人と二十年も連れ添ったのだろう。家で作る食材はすべて無添加、自然食品でなければならなかった。健康には頗る気を使かう邦夫は、病院にかかったことがないことを自慢にしていた。

電車で出勤するときも吊革にはいちいちティッシュを巻いて掴む。どんな人が触ったか知らない。病原菌だらけかもしれない。まして、このラッシュの中で咳き込む者もいたりする。邦夫はなるべく息を吸わないよう、堪えていた。

自ら自然食品のメーカーに勤務していた。家にも会社にもその類の本や資料がかなりある。邦夫は何十年もその勉強もしてきた。当然、タバコも酒もやらない。不健康なことは一切やらない主義だった。会社のトイレの大の方も洋式であれば、便座に紙を敷いて座る人だ。ドアのノブもティッシュ掴み。徹底している。

昼は会合がホテルであって、邦夫は代理出席する。昼食にオムライスが出たが、ボーイに訊いている。

「卵はどこの産地で、地卵かどうか、ケチャップは市販のものか、米は有機栽培のものを使っているのか」

あまり煩いのでボーイも閉口していた。いちいち質問を厨房に内線電話していた。邦夫は答えを聞くまで、口をつけないで待っていた。コックがわざわざ出てきて説明するまでとなる。すべて、業務用で有名メーカーの最高のものを使っているが、添加物だけだ。

昼を摂れなかったので、邦夫は近くのスーパーへ行って、会社で食べることにした。パンを選んでいたが、どれも着色料使用とある。どれを手にとっても表示には保存料、香料、エトセトラ。唯一、天然ニガリの有機栽培の国産大豆を使用したとする豆腐があった。それとミネラルウォーターを買って帰社した。女子社員たちはひそひそと遠くから見て笑っていた。豆腐をつついて

、ペットボトルを飲む奇妙な食事もいまに始まったことではない。

「また、村上係長の自然食が始まった。あれじゃ、奥さん大変でしょうね」

会社の廊下が喫煙場所になっていたが、若手の社員たちが休憩時間にたむろして、スパスパやっているところへ邦夫が通りかかる。

「なんだ、なんだゲホゲホ、この煙は。迷惑だ。吸わない人でも肺癌になるというぞ。少しは遠慮しろ」と、口を抑えてゆく。邦夫は喫茶店に行っても、水道の水で出したコーヒーは飲まない。出されたお冷にも口をつけない。それを判っているマスターが特別に邦夫のためのコーヒーを用意してくれる。カップも邦夫のためにキープしていたし、絶対に洗剤では洗わないことと条件は厳しい。その分、多少高くても、変なものが口に入るよりはいいのだ。

妻は、夕食を細心の注意を払って作る。塩分の摂り過ぎは体に良くないから、控えめ、それも奄美の天然物と煩い。砂糖もできるだけ料理には使わない。糖分の摂取を抑えるため、天然の甘味料を使う。味は二の次で、健康第一。多少、不味くても文句は云わない。今夜のメニューの炒め物を邦夫が口にしたとき、いつもの味でないことを感じ取っていた。

「おまえ、炒めるときの油は何を使った」と、邦夫は凄い形相で妻を問い詰める。妻はしまったと口の中で云って目を閉じていた。

「ごめんなさい、いつもの油は切らしていたから、つい、コンビニで買ってきて間に合わせたの」と、小声で謝るが、邦夫は激怒して、また皿ごと引っくり返した。

「おれを殺す気か」

それから、三ヶ月が過ぎた。邦夫は健康診断で、大腸ポリープがチェックされた。さらに精密検査をしたらすでに癌があちこちに転移していることが判った。

「ご主人は長くて半年です」そう妻は医者に宣告を云い渡されていた。放射線治療もするので、本人にも告知しなければならない。邦夫は半狂乱になって医者や看護婦に詰め寄った。

「そんなはずはない。おれは、絶対に癌になんかなるような食品を口にしていないし、恒に健康に留意してきたつもりだ。そのおれが、どうして癌になんかなるんだ」

邦夫は、呆然と病院の待合室で気持ちの整理をしようとしていた。すると、後ろが賑やかだ。振り向くと、百歳になった老人が、看護婦さんに囲まれている。健康診断に来たがどこも悪くないという。体はまだ六十の老人と同じだと医者も驚いていた。

「おじいちゃん、どうしたら、そんなに長生きして丈夫でいられるの」と、看護婦が訊いていた。おじいさんは得意満面となって、嬉しそうに答える。

「そうさなあ、毎日、好きなタバコをくゆらして、酒を好きなだけ呑んで、若いおなごの手を握ってな、なんにも気にせんことだ。ははははは」

邦夫は話を聞いていて、人生は不平等だと思った。好きなだけ遊んで、不摂生をした人間が長生きして、自分のように生きようとすることに真面目な人間が早死にするなんて。

病院が牢獄に見えた。すぐ釈放される者もいれば、自分のように死刑宣告される者もいる。窓辺に向かって邦夫は呟いていた。

「おれの人生とは何であったのか、水清ければ魚住まずか」

メス化する自然のなかで、無精子の男たちが増えつづけていた。ダイオキシンは増殖しすぎた人間たちを抑制するための、自らが撒き散らした毒だった。地球は自家中毒を起こしていた。

そんな絶滅に向かう地上に新たな覇権が歴史的に登場してきた。かつてのナチスのように、人々を震撼させる団体が姿を変え、強大な組織力と発言力でみるみる台頭してきていた。

夜の繁華街。時間は十一時を回っている。路上に座りこみ、タバコを吸っている女子高生たち、ゲーセンでいつまでも帰らない中学生軍団、あきらかに女子中学生と判るグループが、ナンパしに改造車でやってきた暴走族に声をかけられていた。

「モデルやんない？ バイト料高いよ。ちょっとだけ写真撮るだけ。おいしいものもご馳走するし、みんな一緒にやってくれればいいんだ。ケイタイのお金も払うの大変でしょ」

断ると、半ば強引に車に引き入れようとする。

「ね、ね、すぐに終るからさ、家まで送ってゆくし」

中学生たちはなんとか抵抗して逃げようとしていた。

と、遠くからザックザックと歩いてくる足音が響いてきた。暴走族と中学生たちが、闇の中から現れた三人組のおばさんの怖い顔を見た。腕には「PTA」の腕章がしてある。

「ヤバイ、逃げようぜ。ナンバー見られないよう、消して走れ」族たちは、エンジンを空ふかししながら、ものすごいスピードで走り去っていった。

「あんたたち、こんな時間に何をやっているの」

普段はスレている不良中学生たちも、マッポ(警察)より怖いPTAには神妙になっていた。追いつめられた子羊だった。

「さあ、観念しなさい。一人ずつ、名前、学校名、学年、云いなさい」

哀れ、少女たちはPTAの夜回りに捕まってしまった。みんなはゲシュタポと呼んでいる懼れられている最強のおばさん軍団だ。

町のある小学校で、土曜日はPTAの学校清掃の日になっていた。お母さんたちが、集まって、トイレから廊下、窓拭きまでしていた。新任の先生は何も知らないものだから、つい「掃除当番は決められていますから、児童にやらせたらいかがでしょうか」と、云ってしまった。すると、お母さんの一人がキッとその先生を睨むと、

「いまの問題発言ね。わたしの可愛い息子に便所掃除をさせると云うんですか。あなた、人の子供を何だと思っているんですか、可哀想じゃないですか」と、噛み付いてくる。最近では児童誘拐もあり、怪しいやつらがうろついているというので、車で送り迎えする親も多いという。

PTAの会合となると、先生の吊るし上げは裁判と同じだった。

「うちの子の授業態度が悪いからと、A先生は怒鳴ったんですよ。それですっかり萎縮しちゃって、かわいそうに、学校へ行きたくないと泣いて、そんな怖い先生にうちの子を任せるわけにはゆきません。先生を代えていただくよう要望します」

「この前なんか、廊下に立たせたそうですよ」

「まあ、ひどいことをするのね、とても人間のすることじゃないわ」

「部活のことですけど、PTAの了解もなしにトレパンを替えたそうですね。どうして学校側で勝手に決めるんですか。デザインとか、いろいろと相談もしないで」先生方は小さくなって、顔を上げられないでいた。校長が一番哀れで、おろおろしている。果ては、給食の献立から運動会の行事にまで口出しをする。

家に帰ると、子供には先生の悪口。

「何かあったら、みんなお母さんに報告するのよ」

「うん、わかった。お母さんの方が先生より偉いんだもんね」

子供たちもますます増長する。先生の云うことを聞くわけがない。

また何事か問題が起こった。市役所の前に車が何台も止まった。車から腕にPTAの腕章をしたおばさんたちが、物凄い形相で降りてきた。ザックザックと整列して、市役所の中に入ってゆく。

「来たぞ。敵機来襲だ。椅子でバリケードを作るんだ。みんな手伝え」

役所の階上にある教育委員会では騒然となっていた。おばさん軍団が階段を一様に無表情で上がってくる。職員たちは心臓を抑えながら、近づいてくる足音に目を瞑っていた。

第125話 結婚願望

酔っているって、あたりまえよ。こんなときに酔わずにいられますか。それは、あなたはいいわよ。あたしはどうかしてくれるの。男ってみんな身勝手、自分のことしか考えないんだわ。よく、判りました。騙され続けていたあたしが馬鹿だったのよ。男はお利巧で女は愚かと世の中相場が決まっているようだけど、あたしはそんな女でないと、いまのいままでそう自負してきた。ひとりで生きてきたわ。あなたを心のどこかに支えと思ってね。覚えている？ あなたと初めて出逢った日のことを。忘れないわよ、忘れないけどね。

あれは、デパガをしていたときだったわ。しかも、テナントのオートクチュール売場。高級品の舶来生地が展示してあってね、客種は上流階級ばかり。あたしも、スタイルは自信あったし、口もうまかった。それが見込まれて採用されたんだけどさ、まったく、くたびれたわ。お金持ちのおばさんのご機嫌取りって。二十五歳だったから、もう花は過ぎたけれど、まだ、その辺の女の子には負けない若さは持っていた。そんなとき、あなたが、デパートのフロア主任で転勤してきたのね。あたしより五つ年上で、ハンサムで背が高くて、珍しい大学出だった。そして何故か独身。みんな店員同士騒いだわ。あなたの素性を知りたがってね。あまり、自分のことを云いたがらないあなたは、ミステリアスな存在だった。積極的な女の子たちは、あなたに近づいて、情報を聞きだそうとしていたわね。血液型は何、生まれ月に星座、出身地はどこ、好きな俳優は、好みのタイプはと煩くね。でも、あなたは笑っているだけで取り合わなかった。軽い男でなかつ

ただけに、ますますみんなを熱中させた。あたしもその中の一人だった。あたしだけは、他の女の子とは違うというところをなんとかあなたに見せたかった。それで、あたしは英会話を必死で習ったの。デパートにはよく外人客が来るから、いいところを見せようと思ったのね。なんとか、会話ができるようになると、他の売場からも頼まれたりしてね。それが、あなたの目に止まったのね。

ある日、あなたの方からさりげなくお昼のお誘いがあった。それが始めて口を利いたときよ。あたしは、内心やったと思った。デパートの近くのフランス料理店に連れて行ってくれたね。あなたは、あたしの上を行って、メニューでフランス語も読めたのね。男勝りの性格だから、たとえあなたにも負けるのが嫌いだった。それからはフランス語も勉強したわ。あなたは、ワインの名前もそらんじていたし、アラカルトもどんな料理か知っていた。普段、定食か、うどんより食べたことのなかったあたしは、最高に頭にきてね、それからは料理の勉強もしなければと、対抗意識を燃やしていた。

ドライブにも連れて行ってくれたわね。友人から借りてきたというオープンカーに乗るのも初めてで、すごく緊張した。湘南海岸を江の島まで行ったんだわ。夢のようだった。男運がなかったというか、時代が時代だったから、年頃の男が少なかったから仕方がないけど、デートなんかしたこともなかった。ドキドキしたわ。あなたは、あたしの肩に手を回して、片手で運転していた。白いスーツが素敵だった。まるで、映画の中のシーンみたいだった。でも、あなたは紳士だったわ。あたしの手を握ったり、肩を抱いたりしたけれど、それからつきあっている間中、それ以上のことはしなかったわ。あたしの体が目当てではないということが判ってくると、ますますあなたのことが好きになってきた。男なんか、送り狼もいて、女の子の体だけがすべてだと、普通は最初に疑うのね。あなたはそこいらの男たちとは違って。女の三十八度線を越えなかった。けどね、あまりにも紳士過ぎたのが欠点だった。

仲間の女の子たちはみんな結婚していっちゃったし、あたしもあなたも婚期はとっくに過ぎていた。多分、正直なところ、あなたもあたしも結婚願望はあったと思うのよ。それをどちらからも云えないでいただけなんだわ。嘘ではなく、本当に相思相愛だったんだと思うわ。男と女なんて後でいろいろ理屈つけて別れるけど、そのときは互いに本気だったと思うの。すべて裏返しにされても、どうしても返せない札って一枚はあると思う。いいえ、そう思いたいなのよ。判る？

あたしのほうからじれったくなって、あのとき、求愛したのに、あなたの答えたらそっけないものだった。「五十年待ってくれ」その言葉を信じたあたしは処女のまま、あなたを本気で待ったわ。そうしたらどうなのよ。あなたときたら、老衰で死んじゃうなんて。それで、今夜があなたのお通夜だなんて。あたしももうじき喜寿の祝いするばあさんよ。どうしてくれるのよ。

あなたができない人だと後で知ったけど、そんなことどうでもよかった。い友達で生涯いられただけでもよかったかもしれないけど、あたしはね、やはりバージンロードをいまでも歩いてみたいのよ。それが女よ。どんなにつっぱっているキャリアウーマンでも、どこかで待っているものなのよ。できないくらいなんだ。一緒にいるだけでよかったのに。ヒック。少し、飲み過ぎたかな。今夜は積もり積もった愚痴をまとめて聞いてもらいます。五十年返せとは云わないが、また、若いあなたとあたしに戻りたい。あの戦後復興の夢のある町に。いいの、ほっといて頂戴。今夜はあたし骨箱抱いて寝るの。ヒック。歌があったね、映画があったね、進駐軍のジャズも

、ナイターも、レストランも、蓼科高原も、あれも、これも…。

第126話 チョコレートパフェ

甘党の男性が確実に増えている。糖尿病が増えていることも、ストレスが増えていることも、男性の女性化も、微妙に関係があるようだ。

倉内健次郎は、当年五十二歳。国家公安委員会の要職に就いているエリート中のエリートだった。結婚が遅かったので、まだ子供は小さい。上が小学四年生、下は幼稚園の年長さんだ。孫と云ってもおかしくない年だった。中年になってできた息子たちだから可愛くてしかたがない。

たまの休みには家庭サービスを欠かさない。日曜祭日もない仕事だから、子供たちと接する時間は大事にする。妻の買い物につきあいながら、郊外のショッピングセンターなどへ車で行ってみた。久しぶりのことで、息子二人は大喜びで、健次郎の腕にまつわりつく。それが健次郎には嬉しくもあり、気恥ずかしくもあり、人目を気にしながら「家族」を感じていた。妻も鼻歌混じりで機嫌がいい。女は買い物さえしていればそれでいい。

健次郎は休日でも地味な背広にネクタイ姿だった。いつ、呼び出しがかかり、出勤するかしれない仕事を抱えている。夜昼ない職業だからこそ、月に一度のショッピングくらい楽しみたいと、妻もいつもより生気が漲っている。

ショッピングセンターは日曜の人混みでごった返していた。健次郎自身はあまり妻にくっついて婦人服など見て歩くタイプではない。まして、ショッピングカートを押しながら、食品売場を歩くなど、部下にみつかっては恥ずかしい。まだ、子供と一緒に食べたり、呑んだりしていた方がいい。パーラーのテラスに座り、外を歩く人波を眺めながら、健次郎はコーヒーを、子供たちはチョコレートパフェを食べていた。妻は買い物に余念がない。

職業柄、健次郎は目つきが悪い。じっと怖い顔で人を凝視する癖がある。いかめしい雰囲気人が圧倒するところがある。そんな健次郎が小さい子供の相手をしていること自体が不釣り合いでおかしかった。

「どうだ、おいしいか。おいしいだろうな、おいしそうなものな」

「うん」と、子供たちは夢中でスプンを舐めっていた。健次郎はごくりと喉が鳴った。健次郎には誰にも話せないある秘密があった。それは、チョコレートパフェが大好物だった。ただ、食べたくても食べられない哀しさがあった。

「うまいか、うまいだろうな、本当にうまいだろうな」

未練たらたらで子供の食べるのを見ている。スプンで生クリームホイップとアイスクリームを口に運ぶ。とろりとしたチョコレートを絡めたアイスとバナナを口に入れる。いちいち、健次郎は自分が食べているように、息子の口に合わせてあぐりと無意識に口を開けていた。ダメだ、我慢ができない。食べたい。こんな残酷なことがあるか。美女の裸をベッドに見ながら、ただっ立っている男の心境だ。健次郎はじっと、スプン運びを注視していた。視線で追っていて、そのたびにごくりと空気だけを呑み込む。子供が食べ残さないかなと、思っていた。いや、食べ残

すよう念じていた。

「パパ、お腹いっぱいになってきた」と、上の子。しめた、食べ残すか、と、健次郎は笑いをこらえた。

「パパにあげるよ」そら、来た。と、パフェグラスを渋々受け取る態度をする。

「仕方ないなあ、全く、食べ物は粗末にははいかんのだ」周りに聞こえるような声でわざと云う。うんざりしたような顔を演出するのも難しい。けっしてにこにこ笑って食べてはいけないのだ。と、グラスの底を見ると、少しだけ残している。（なんだ、これっぽっちか、ケチ）と、健次郎はロングスプーンで一舐めだけ。その少しが堪らなく食欲を刺激した。美女の唇一センチ手前で匂いだけという拷問にも似ていた。本当は、誰も見ていなければ、グラスの底まで長い舌を入れて舐めるところだが、ぐっと我慢した。

下の子はぐすぐすといつまでも、見せびらかすように、ちびりちびりと舐めている。健次郎は苛々してきた。

「早く食べなさい。ほら、端から解けて垂れているだろう。ほら、そこだ、あっ、垂れる、早く舐めなさい、左だ、いや、今度は右の方」まるで、実況中継のように煩い。それでも、たらたらと、テーブルの上は解けたクリームで汚れた。勿体ないと健次郎は幼稚園児を睨んだ。そのうち、グラスを持ち上げて口をつけて一気に呑み込む真似をしたものだから、チョコレートパフェの半分が床にぼたりと落ちた。

「あーああ、やっちゃった。だから早く食べなさいと云ったんだ。勿体ない」

下の子はじっと、床に盛り上がっているクリームの塊を恨めしそうに横目で見ていたが、ぐずり始めた。健次郎はティッシュ取り出すと、床にしゃがみこんだ。見れば見るほど勿体ない。周囲を見渡す。人は大勢歩いているが、別に誰も気にしていない様子。まして、誰も見ていないと健次郎は知ると、床に這い蹲い、アイスを拭く振りをして、なんと、落ちたクリームを犬のようにペロペロと舐め出した。

「あなた一、何してるんですか」と、いきなり遠くから妻の叫び声がした。すると、いままで歩いていた買い物客の足が一斉に止まった。健次郎は口の周りにクリームをつけて見上げると、そこに大勢の視線があった。

第127話 犬 介 護

ジロウは十五になった。人間でいえば八十か。食糧事情がよくなったので、人間と同じく、犬も寿命が長くなった。

主人は子供がいない人なので、ジロウはこの家に貰われてきたときから子供同然に可愛がられて育った。数年前には中年太りから成人病になった。いいものばかり食べさせられてコレステロールが溜まり、糖尿病から心臓病、高血圧症になった。主人は、ぶくぶくと太り、歩くのも大変

なジロウにダイエットをさせようと、低カロリーの犬用ダイエットフードを与えていた。犬のエステにも通わせた。エアロビクスもやらせたが、ジロウの肥満は解消しなかった。血糖値などの数値は健康診断で調べると下がってはいたが、運動不足から足腰が弱っているのはいたしかたない。都会の犬も人間同様、車ばかり乗って歩かないからだ。主人も老齢化してくると、なかなか散歩にも連れてゆかなくなった。あとは喰ちゃ寝でますます健康によくはない。

主人はジロウのためにぶら下がり健康機や、室内ランニングの機械まで購入した。ペット用まで売っていること自体驚きだった。あまり、我が子のように大事にしすぎ、一時は室内犬として、家の中で飼っていたものだから、外を走ることも忘れてしまった。若いときからそうして育てたものが、年とると覷面だ。人工の骨なども売っていたが、主人はそれを与えなかった。嚙むという犬本来の本能をそがれて、歯がダメになった。顎も弱って、咀嚼したり噛むということができなくなり、最近のジロウはドッグフードや缶詰を粥状にして食べさせられていた。

犬用の入れ歯は高価で手が出ない。

ジロウはとうとう寝たきり犬になってしまった。失禁するから、犬用のパンパースをしてもらい、下の世話まで主人にして貰っていた。

たまに外の空気を吸わせようと、主人はジロウのために車椅子ならぬ乳母車まで買ってきた。天気の良い日は、その乳母車にジロウを乗せて散歩だ。主人は七十を過ぎている老夫婦だった。県境を流れる一級河川の土手を歩いていた。子供会の草野球大会が行われていて、白球が気持ちよく青空に飛んだ。

「ねえ、あなた、ジロウとわたしたち、同じように年とっていったけど、もし、わたしたちが先に死んだら、ジロウが可哀想だわね」

「そうだな、こんなときに家族がいたらなあ。ジロウも一生独身で通したから、せめて、子供でも作っていたらよかったのかなあ」

「犬の世界でも年とったら子供が親の面倒みるのかしら。聞いたことがないわ」

「いまでも、月に何回か動物病院に連れていっているが、保険もないから、医療費もばかにならんしな。第一、わたしたちの手に負えなくなったらどうするかだ」

「そうねえ」老夫婦はジロウの行く末も心配していた。

どこにでもある老人問題が、老犬問題にまで及ぶ。お犬様も病院からパーマ屋、ホテルからお墓まである時代だ。人間と変わりはない。生類憐れみの令のあの綱吉でも、現代を見たら驚くほどのペットブームだ。

ジロウは昼間遠吠えをしたりしていた。夜中に起きて、日中眠っていたり、主人に歯を剥いて呻ったりしていた。

「どうしたんだ、ジロウ、わたしだよ」まるで、人が、いや、犬が変わったようにジロウがおかしくなっていた。そうかと思うと、一日中、ぼんやりとして餌にも口をつけない。老夫婦は、行きつけの動物病院にジロウを連れていった。

「ああ、もう十五歳でしょう。これは完全な老犬性痴呆症ですな。つまり、ボケです」と、獣医は云う。

「ええ？ 犬もボケるんですか」

「人間と同じです。恍惚の犬というのが最近とみに増えています。犬も長生きしましたから、老

齡化が進んでいるんです」

老夫婦は嘆いた。犬は三日飼うと、一生恩を忘れないと云うが、十五年も飼うと、逆に忘れるのだ。

その夜よなかも、ジロウはがさごそと起きていた。そして、かなしそうに遠吠えをする。掠れてどこか空気の抜けるような遠吠えだった。この都会の中、コンクリートの森の中では、遠吠えをしてもそれを聞いて返してよこす犬はいない。それより、近所迷惑だった。たびたび、近所から苦情が入るようになった。

「どうでしょう、あなた、今朝もお隣りからジロウのことで小言です」

「うん、困ったな。病人を抱えているようなものだからな」

「ジロウは可愛いけど、わたし、もう介護に疲れました」

「しかたないが、老犬ホームへ入れようか。他の老犬たちと一緒に話しもできるし、ジロウもそのほうが寂しくないだろう」

「そうね、いずれ、わたしたちもそれぞれが老人ホームへ入るときが来るものね」

老夫婦は、ジロウを近くの老犬ホームへ入所する手続きをとった。多少、費用はかかるが、ジロウの余生を思えばその方がいいと、二人して決めた。

そして、いよいよジロウをホームに入れる日が来た。園内はふらふらと散歩しているボケ猫や、所構わず吠えたてるボケ犬たちでいっぱいだった。

「ご心配いりません。獣医もついていますし、ベッドや風呂も完備しています。おやつの間もあります。いわば完全看護で、うちのホームは二十四時間対応しています」と、園長はおだやかに笑う。

「面会にはいつ来てもいいのですね」老夫婦は未練たっぷりに云った。

「勿論ですとも、寝たきり犬も喜ぶますよ」

老夫婦、深々と頭を下げて、ジロウの寝ているベッドから離れた。ジロウはいつまでも、目ヤニを溜めた哀しげな目で見送っていたが、思い出したように遠吠えを始めた。玄関から出た老夫婦の背中にいつまでも吠える声が縋りついていた。

第128話 回送切符

「あんた一、台所がかたづいたら、ゴミを出して一」と、食器を洗っているぼくに、女房から命令が下る。当の本人は朝の紅茶を入れて、テレビの前でゆっくりとモーニングショーを見ている。結婚して十年。いつからこうなったのだろう。娘は小学生高学年だが、女房に輪をかけて口が悪い。

「忘れ物ないか」と、まるで母親のように玄関まで見送る。

「ほら、髪が乱れて」と、直してやると、

「うるさいな、くそ親父」ときたもんだ。かかあ天下に娘横暴、亭主は奴隷。それで家庭円満。ぼくがおとなしいからだ。ぼくも会社へ、すごすごと出勤。

「帰りにトイレットペーパーとナフキン買ってきて」女房の追い打ち。またか。亭主ともあろうものが、スーパーから家まで商店街を大きなトイレットペーパーぶら下げて歩いて帰る。生理用品まで買わされる身になってみる。こんなはずではなかった。

会社の近くの路上にホームレス風のじいさんが倒れている。寝ているのかもしれない。それにしても不自然だ。通行人は関わりになりたくないと無視して通り過ぎる。朝の忙しい時間帯だから、急いでいる人ばかりだ。ぼくは、ほっておけないので、汚らしいじいさんを抱き起こしてやった。

「大丈夫かい。救急車を呼んでやろうか」じいさんは首を横に振る。

「腹が減っているのかい。いま、駅から買ってきたぼくの弁当だけど、これ、やるから食べなよ」と、ほっか弁をやると、じいさん、涙まで流していた。

「ありがと、親切な方だ。この切符をお礼に差し上げます」じいさんの差し出した切符には「回送切符」と印刷してある。

「この切符の真ん中に、行き先を書く欄があるから、そこにあんたの人生で戻りたい日付を書いてな、夜寝るときに胸にあてて寝ると、その日まで戻れるんだ」

じいさんが何を急に云い出したのか、ぼくは咄嗟には理解できなかった。冗談や悪戯にしては真面目な様子だ。ぼくは、笑って受け取ると、ポケットに入れたまま忘れていた。

家に帰るとまた地獄が待っている。掃除、洗濯、皿洗い。専業主婦のはずの女房はサークル、カルチャーに忙しい外様だ。奥様ではない。こんなに何もやらない、できない人だとは思わなかった。あの、結婚前のしおらしい会話を思い出して、すっかり詐欺に引かかったような気分だ。あなたのために、腕を奮うわと云ったのが、目玉焼きだった。料理はぼくの方が得意だ。だんだん、自堕落に動かなくなくなり、スマートなスタイルは崩れすぎて、横に成長した。体重はいまやぼくを遙かに超える。力では負けるだろう。勿論、口でも。いつから逆転したのだろうか。新婚、六ヶ月で騙されたと気がついた。

ぼくは、家事を終え、蒲団に入るとき、あの切符のことを思い出し、その行き先の日付欄に、女房と出会った日を書いた。多分、夢に見るということなのだろうと思った。人生がやり直してきたらいいだろうが、せめて夢だけでもいいと、胸に切符を載せて眠りに落ちていった。

目が覚めたら、天井から裸電球がぶらさがっている。ぼくは、驚いて飛び起きた。そこは、新築のマイホームではなかった。古くさいアパートの一室だった。忘れもしない、十一年前の独身時代のぼくの部屋。窓を開けると、中央線の電車が走っていた。頭を叩いたが痛い。嘘ではない。部屋のカレンダーは平成三年六月となっている。二十七歳のぼくに戻ったのだ。テレビを点けてみる。七時のニュースをやっていた。昔の総理大臣が会見している。事件も覚えのあるものだ。ぼくは洗面所に立った。鏡に映った顔は若い。やった、これが夢でなければ、ぼくはもう一度、人生をやり直せるのだ。

会社に行くと、みんな仲間が若いから、何かおかしい。そうだ、今日は花金で、呑みの誘いが

、友達からかかってくるのだ。それがそもそもの過ちの始まりだった。デスクの内線電話が鳴る。そら、かかってきた、あいつからだ。

「おお、今夜、ジュリアナに行かないか。呑んで踊って盛り上がりようぜ。」

お立ち台か、懐かしいな。喫茶店で昼のランチを摂っていると、みんな景気のいい話しをしている。いまに、どっと落ちるから、株には手を出さないほうがいいのに。「ラブストーリーは突然に」が頻繁に流れていた。

ジュリアナに行くと、金曜の夜なので、若い勤め帰りで満員だった。友達は、二人の女性を連れてきていた。一人は友達の彼女、のちに一緒になる奥さんだ。もう一人が彼女の親友というぼくの女房になる女だった。若くて、綺麗で、スタイル抜群で、しおらしい恥じらいなんか見せて、おっと、また騙されるどころだ。無視、無視。

「紹介するよ、彼女の親友でな...」と、友達が引き合わせる。思えば作為的だったのだ。女はにこりと微笑んで、ぼくを興味深そうに見ていたが、ぼくはあらぬ方角を見て、できるだけ目を合わせないようにしていた。口笛なんか吹いていたりして。

「変なやつだな。まあいいか、踊ろうぜ」友達は彼女を連れて踊りの中へ入った。ぼくたちを二人きりにする計算なのだ。

「あのう、料理が得意なんですってね」と、話しかけてくる。ぼくはコークハイをぐっと呑みながら、

「それが仇になるんだ」と云った。「えっ? ...わたしも料理大好きなんです」

ぼくは思わず口から呑みかけたものを吐いた。(嘘を云うな、目玉焼きだろう、目玉焼き)ぼくは、女をひとり残して踊りの中に入っていった。そして、全く知らない女に声をかけた。派手な化粧していて、セクシーなボディコンでしおらしくはない。あの女とは対照的な女だった。

「ひとり?」と、ぼくは誘った。「うん、そうだよ」明るいはっきりした子だ。こっちの方がまだましだな。

それから瞬く間に十年余りが過ぎた。ぼくはジュリアナで出逢った別の女と結婚して、娘がひとりにマイホームと、女房が変わっただけなのだが。女房はもっと酷い女だった。浪費癖があり、知らないうちにカード地獄に嵌っていた。浮気性で、公然と男を連れてくる。家事はしなくてもよかったが、ぼくの亭主としての存在は丸潰れだった。娘は不登校で暗い小学生。母親の乱行が原因だった。

「あなた、きょう、帰らないかもしれないからよろしくね。冷蔵庫におかず作って入れているからチンしてね」毎度のことで気にもならない。ぼくはやさしすぎた。

会社へ行く駅までの通り道、毎朝、ぼくはあのじいさんを目で探していた。倒れていたら、弁当をあげようと思いつきながら。

第129話 公開処刑

昭和十三年一月 南京

日本軍が南京入城してから、暫くして、わたしは戦地から南京へと赴いた。日日新聞の従軍記者

として、大陸へ渡ったのは去年の暮れだった。まだ、町のあちこちに屍が放置されたまま、町は死臭に満ち満ちていた。

銃声が辺りに響き、町は戦場から抜けきっていないほど、治安も悪かった。町外れに大きな穴が掘られ、トラックや荷車で運ばれた死体が、穴に放りこまれ、火で焼かれていた。一体、何があったというのだろう。女子供の痛ましい惨殺死体もあった。わたしがその穴にカメラを向けようとしたら、わたしに下士官が歩兵銃を向けて、

「撮影はならん。商売道具を没収されなくなかったら、ここから立ち去れ」と、許可が下りない。新聞社へ送る写真もすべて検閲が入るので、これからのこともあるので、あまり軍部を刺激しないようにした。命令には絶対服従だ。子供や老人の中国人の物乞いがやたら多い。家を焼かれ、冬空の下、住むところは家畜より劣る藁の中だ。食料がないから、何を喰って生き延びているのだろう。市内の難民区はそんな食料を求める市民でごったがえしていた。食物屋が露店を出していた。わたしは、そこで五十銭のギョウザを喰った。じっと、腹を空かせた子供たちの視線が集まる。同情はきりもない。

歩兵第四十七連隊の司令部が市内の官舎に置かれて、日章旗が翻っている。歩哨と、見回りの兵隊、戦車やトラックの出入りが激しく、わたしは、宣撫班が宣撫工作をする場面と、この司令部を行ったり来たりしながら、カメラを写して歩いた。日本軍の恥部は写させない。すべて報道はそのトリミングを日本軍が決めるのだ。

中山陵がまっすぐに眺められる広場で、国府軍のスパイの公開処刑が行われるというので、行ってみることにした。

大勢の中国人たちが人垣となっている一角があって、その場所はすぐに判った。みな、市民は同朋が無惨に殺されるので、口々に「アイヤー、アイヤー」と歎き悲しんでいる様子でもあった。人垣を掻き分けて前列に割り込んだ。報道の腕章をして軍のヘルメットをしているので、みな道を開ける。五人の中国人の若い男たちが、一列に広場の中央に座らせられている。手足が後ろで太いロープで縛られているから、逃げることも立つこともできない。「クイン・ユアンリアン」許してくれ、助けてくれ、何もしていないと、泣き喚く男もいれば、顔面蒼白で、呆然と座っている男もいた。見せしめのために処刑するので、スパイかどうか裁判もなにもあったものではない。怪しいものは連行され、たちまちのうちに処刑された。

一人目の男は、すさまじく暴れて抵抗した。兵隊三人がかりで動かないように抑えていた。一人が髪を掴んで首を出させる。日本刀がきらりと空に光った。必死に動いていた胴体は動かなくなった。髪を掴んでいた兵隊が高々と斬り離された生首をみんなに見えるように掲げた。胴体の首根っこから血潮が数尺噴射した。辺りはまもなく血の海となった。生首の目は凄まじい末期の苦しみで、飛び出るほど大きく見開いていた。わたしはその光景を数枚のフィルムに収めた。軍刀は水で洗われた。隣りの男はがたがた震えている。その震え方が異常だった。全身を大きく揺らせているものだから、また取り押さえねばならなかった。

カメラマンは恒に冷静に第三者の目で被写体を捉えねばならない。けっして相手に感情移入してはならない。事実だけを突き放して撮影するのだ。もし、わたしが捕虜だったら、ああして、処刑の列に座らされたら、と考えるだけでも手が震えてくる。だが、大抵の人間は人の不幸に遭遇しても、他人事のようにしか見ない。自分でなくてよかったぐらいにしか感じないものだ。

虫ケラのように中国人が殺されてゆくとき、わたしもまたそんな兵隊たちの高さの視線で考えるようになっていた。

わたしは、カメラのファインダーを覗いていて、四人目の男に注視した。わたしの方をじっと凝視しているのだ。カメラから目を離して、四番目の男を見ると、間違いではない、わたしを何か知り合いでもあるかのように見ている。そして、あとの処刑者たちは尋常でないのに、一人だけ落ち着いて、笑っているのだ。どこか他の中国人とは違うような、不気味な雰囲気を持っていた。わたしは彼から目を逸らそうと思ったが、どうしたわけか、視線が離れない。瞬きすることも、手も足も金縛りに合ったように、全身が動かなかった。一体、どうしたのだ。あいつの目だ。催眠術か何かやるのか。あいつの不敵な笑いの割に目だけは鋭く冷たかった。わたしは、吸い込まれそうになる。一瞬、気を失いかけていた。目の前が真っ暗になった。

どれだけの時間が経ったのだろうか。ようやく、光を感じずようになった。なんだろう。なんなのだ。わたしは、後ろ手に縛られていた。足も同じロープで結わえられているから、動かない。大勢の中国人たちの人垣が見える。隣の男がまさにいま、首を斬られるところだった。立とうとして立てない。どうしたのだ。わたしの目の前の人垣の前列に、わたし自身がいるではないか。カメラを手にして、にやりと笑っている。嘘だろう。入れ替わっているなんて。あいつのわたしは、すくりと立ち上がると、人垣を掻き分けて見えなくなった。一瞬、悲鳴がしたと思ったら、隣の男の血が噴き上げた。

「助けてくれ、自分は日本人だ。日日新聞の従軍記者だ」

わたしは叫んだ。周囲から笑い声が洩れる。「記者だとよ、ふふふ」「頼む、司令部へ連絡してくれれば」「うるさいやつだ。早くやれ」わたしでないわたしの髪の毛がむんずと掴まれた。体は押えつけられた。頭上で光るものを感じた。冬晴れの空がやけに蒼い。

第130話 緩やかな時間

不老不死は今も昔も万人の希いだった。不幸は早く過ぎ去ることを希い、幸福はできるだけ留まることを希う。

時任光晴は、大学で野球部に入っていたスポーツマンだった。大学対抗試合ではいつも負けている弱いチームで、それでも野球好きな光晴は勉強よりもバットを握っていたほうがいい。四年だから、そろそろ就職のことも考えなければいけないし、卒業論文の準備もある。最後の大会まであと一月。それで部を勇退するのだ。恋人もいた。高校の後輩で、学部は違うが、ちょっとみんなの視線を集める美貌の可奈子だった。何をしても燃えていた。いまが、人生で一番熱中でできて楽しい時だった。

大学では法律を専攻。講義が終ると、グラウンドへ出る。二時間、トレーニングして、シャワーで汗を流してから、可奈子と待ち合わせのカフェへ。借りた本も返しに行く。

「待った」「ううん、いま来たところよ」甘い会話がレモンスカッシュの沫のように弾けた。じっと、凝視めているだけでよかった。多くの言葉はいらない。十分、伝わってくる熱いものがあった。テーブルの上の指と指は絡みあっていた。

「この時間が止まればいい。そうでなかったら、もっとゆっくりと時計の針が回って欲しい。君が若く綺麗な絶頂で、ぼくとできるだけ長くいられるように」

「そうね、だんだんおばさん化してくるから、いまのうちにわたしをホルマリン漬にする？それとも押花？」きらりと光る顔。可奈子はつややかな長い髪も、健康な肌もすべてが輝いて見える。それは光晴も同じだった。

「この本返すよ。面白かった。象の時間と蟻の時間って違うんだな。同じ空間に住んでいて、質量と時間というのはその早さに関係するということか、可奈子はぼくより二十センチ背が低いし、体重は半分くらいだから、時間は短く感じないか」

「まさか」と、可奈子は笑う。理工系の可奈子のたまに貸してくれる本は興味深い。互いにバイトもやっているからデートもその隙間で僅かな時間だ。余計に時間が勿体なく思えてくる。

朝から変な天気だった。雨が降ったり、からりと晴れたり。雷注意報が出ていた。光晴は試合を明日に控えて、最後の調整に入っていた。どうせ、六大学には負ける。出ると負けは毎度のことだが、せめて一勝ぐらいしてみたいと部の全員が思っていた。グラウンドで光晴は金属バットの素振りをしていた。すると、俄にいままで照っていた日差しが雲で遮られたと思うと、雨だ。同時に近くに雷が落ちた。近いなど、みんな走ってベンチに逃げていた。光晴だけがまだホームにいた。と、強烈な引き裂く音が真上でしたと思う間もなく光晴に雷が落ちた。光晴の体は光の帯の中にいた。「やったー」と、ベンチから絶叫が聞こえた。光晴はその場に転倒したまま意識がない。みんな部員が駆け寄り、救急車を呼んでいた。

光晴が目覚めたのは、病院の中だった。ベッドに寝ている。心配そうに可奈子が顔を覗きこんでいた。

「せーんせーい、気ーがーつーきーまーしーた」と、太く低い可奈子の声がしていた。可奈子の動きも緩慢だ。まるで、スローモーションで再現しているかのようだ。看護婦や先生もゆっくりと光晴の方に歩いてくる。

「なんだよ、みんなふざけて」と、光晴が起きあがって云うと、

「どーうーしーたーのー、はーやーくーちーでー、なーにーをー云ーっーてーいーるーのーかーきーきーとーれーなーいー」看護婦たちも驚いていた。光晴が普通に起きて、立ち上がる動作が普通の人間の十倍はあろうかと思われるスピードだったからだ。声も早口で甲高く聞き取れない。それで、信じられないといった顔でみんな見ていた。光晴にはみんなの声も動作も十分の一のスピードに見える。どうしたのか、雷を直撃したショックで光晴の中の時間が狂ったのか。

光晴は可奈子の話を聞いていて、苛々していた。あまりにも話しが長い。三分の会話が三十分もかかっている。それも問の抜けた男のような声だから色気もそっけもない。逆に、光晴の声は小鳥の囀りのようにうるさいのだ。互いに笑っていた。

いよいよ、野球の第一試合が開始された。最初の二人は空降り三振。三番を光晴が出た。動きが早いのでみんな信じられないといった顔をしていた。バッターボックスに入った。ピッチャーの第一球。時速百キロの速球も、光晴には時速十キロのへなちょこ球に見える。簡単に当てら

れる。当たるとまた勢いよく飛んでゆく。光晴はできるだけゆっくりと走ったつもりが、時速十キロで走っても車より速い。みんなにはあっというまにホームインしたように見えた。相手チームは呆然としていて、悪い夢でも見ているように、すっかり度肝を抜かれた。光晴が盗塁すると、目にも止まらぬ速さで姿が見えなくなる。応援団もチアガールもただ呆然と立っていた。大学開設以来の記念的一勝に全員大騒ぎした。

その夜、可奈子は光晴とお祝いに食事した。会話は可奈子はできるだけ早口で話す。光晴はわざとゆっくりと話す。動きもゆっくりとしなければ周囲に怪しまれる。食事も口の中に入れたものをふやけるまで噛んでいなくてはならない。いろいろと不便があるが、それがおかしい。

二人で夜の公園を歩いていると、チンピラが数人絡んできた。

「よーおーよーおー、まーぶーいー姉ーさーん、あーそーばーなーいー」

野球部員は喧嘩してはいけない。関わりになりたくない。以前の光晴なら、がたがた震えていたろうが、今は違う。相手の一人が可奈子に触れたので、その手を払った。相手は光晴に殴りかかってきた。そのパンチもゆっくりとしたもので、いくらでもかわせるばかりか、相手の後ろに回ったり、別の男のパンチの前をわざとかすったり、そのうち、殴りかかる相手を同士討ちさせてみたりして遊んでいた。

「なーんなーんーだー、こーいーつーはー、ばーけーもーのーだー」

チンピラたちは逃げ帰った。可奈子は大喜びだ。

光晴はアパートでごろ寝しながら、退屈なゆったりとした時間に生きていた。確かに、いまの一番いい時期を長くいられるのは幸せなことだが、これからのことを考える。あと、五十年生きるとして、光晴の時間は五百年だ。そんなに長生きしたら気がおかしくなるだろうと、光晴はこれからの人生を案ずるようになった。テレビもつまらない、音楽も聴けない、授業も飽き飽きする。満員電車で何時間も乗っている辛さ。快樂も長く続くが、苦痛も十倍なのだ。太く短くのほうがいい。一瞬で過ぎ去るから青春は強烈なのだ。感動も間延びしてふやけてしまいそうだ。光晴は元に戻りたいと願うようになった。

野球部は日曜でも練習だ。雨の降り出しそうな雲ゆき。グラウンドに出た光晴は金属バットを手にしたまま、空を仰いだ。そうして、いつまでもあの不思議な雷が来るのを待っていた。

第131話 病気をください

心身症、自律神経失調症、神経心臓、最近ではパニック症候群という。母は三十五年前からその精神的病気に罹っていた。まだ四十代の母は、父の浮気が原因で、生涯、そんな面倒な病でない病を囲うことになる。母も苦しいだろうが、一番の被害者は周囲の人間たちだった。本人と家族が得体の知れない病気と三十五年もつきあわされるのだ。今年八十になる母は、多少の惚けも

入り、その病がますます突出したものとなっていた。

症状は心臓発作らしきもの。胸が急に苦しくなって、手足が冷たくなり、眩暈もする。動悸がして、心臓が止まりそうになる不安に襲われる。それは精神的なもので、実際の心臓病ではなかった。

「全く、頭にきたよ、あの医者ときたら、わたしに向かって、うるさいと、背中を向いてしまったんだよ。もう、二度とあんな医者にかかるものか」かかりつけの病院から戻った母は怒って一日中、同じことをみんなに説明していた。精密検査ではどこも異常がないのに、医者に不定愁訴するから、嫌われる。これで、市内の内科を何軒替えたらうか。医者不信で、いろいろ患者が医者を替えることをドクター・ショッピングというのだそうだ。

「人がこんなに苦しんでいるのに、どこの医者もヤブばかりで、どこも悪くないと云うんだ。やはり、田舎の病院はダメだね。東京の大学病院にでも行こうかしら」

母はいままで狭心症だとか、心筋梗塞だとか、勝手に自分に病名をつけていた。その心臓の発作が三日に一度はある。年に百回。三十年で三千回。医者でなくとも、この話しをまともに聞くものはいない。そのたびに、いまにも死ぬような悶えかたをして、救急車も何回呼んだものか。大騒ぎして、夜中に家人を起こして助けを求める。いい迷惑なのは連れ合いだった。家族がそっけない態度をとると、「みんな冷たい人間ばかりだ。判ったよ。こんな家にいたら殺される」と、嫁まで攻撃して、依怙地になっている。死ぬ死ぬといいながら、なかなか死ななかったばかりか、毎日病院通いで、養生しているから長生きだ。騒ぎ慣れている周囲はいつものことで気にもしない。

母はまた病院を替えた。

「今度の病院はどここの大学を優等で出た腕の確かな若い医者だった。親切に調べてくれたよ」と、また性懲りもなく精密検査をしていた。母は一日中、体のことばかり云うので、初めての人は辟易する。家人は新聞を読んだり、テレビを見たり、馬耳東風。頷いているが聞いていない。嫁なんかは「義母さん、大変ねえ」と、無意識に出る会話。誰も本気で同情するものはいない。それが、母の病気だと知っていたからだ。たまに、家に客が来ると、被害者になる。半日も掴まえられて、病気のことをくぐぐと聞かされる。またよく喋る。頭は惚け、手足は衰えても、口だけは老化しないのだろうか。

そもそも、母が病気になりたいと思うようになったのは、若いときからの父の浮気だったが、自分に父が戻ってくるためには病気になればいいという願望だったものか。よく、幼い子供が、自分が構ってもらいたくて、病気になれば、みんな親切で優しく、おいしいものが食べられるというそれと似ていた。老後になるまで、父は母によって復讐されていたのだ。

母はまたぶりぶり怒って病院から帰ってきた。

「あの医者もへぼだね。なんにも判っちゃいない。面と向かって、あなたはどこも悪くありません。異常なしだと云うんだよ。こっちがこんなに苦しんでいるのに」精密検査の結果、当然のように心電図も正常だった。それを測る時間もあるとか、不整脈があるとか、心臓が痛いのか、愚痴でまたうるさくなる。

息子のわたしが、一度、担当の医師に相談に行ったときがある。心臓の薬だと栄養剤を処方し

たのが母にばれたときだ。母はいちいち、薬の名前まで事典を買ってきて調べていた。家には病気にする本がずらりと並んでいる。

「先生、おふくろが煩いので、なんとか病名を与えてやってくれませんか。どこも悪くないというから、不信感で家族が疲れます。病気だと云ってくれさえすればそれでいいんです」

「それは、わたしのような内科の仕事ではありませんね」と、精神科を勧める。強迫観念、被害妄想それらは精神病なのだろうが、母は異常性格からして、それに近いものがある。

わたしは、高校の同級生で医院を開業しているやつを訪ねた。

「頼む、おふくろを病気にしてやってくれ」頑固で真面目な医者が多いのに、旧友はあっさりとして引き受けてくれた。

数日して、母は上機嫌でその医院から戻ってきた。

「やっぱり、わたしが長年思っていた通りだったよ。おまえの紹介してくれた医院の先生がね、とうとう云ってくれたよ。これは立派な病気ですとさ。嬉しくて嬉しくて、先生の手をとってわたし、泣いたよ」家族は全員溜息。

「そうか、よかったね、おふくろ。これで安心して眠れるだろう。今日は、みんなで病気祝いやろう」と、女房に話して、刺身などご馳走を買いに行かせた。

母は病名を貰ってから、急に元気になった。毎日が晴れやかな顔をしていた。その母が廊下で倒れた。みんなは、また態とらしく大袈裟にと思い、相手にしなかった。そんなところに寝ていれば、歩くのに邪魔だろうというぐらいにしか思っていなかった。中には、態と踏んづけてゆく者もいた。いつものことだから、気にもしない。誰も助け起こしてくれないから、僻んで起きないのだろうと思っていた。演技もそこまでくればたいしたものだ。

「判った、判った。さあ、もう起きて、ちゃんと自分の蒲団で寝てください」と、わたしが起こしにかかるのと、目を剥いたまま、本当に死んでいた。狼は三千五百回目に出たのだ。

第132話 別居

家庭内別居。女房と別々に寝るようになって、三ヶ月が経った。五十を過ぎたら、わたしの男もめっきりと衰えて、女はいらない体になっていた。何よりも、自分の書齋というものを二十一年ぶりで持てたということだ。三人の息子が上京して、それぞれが社会人になると、十数年前に建てた家も部屋ががらがらと空いた。老父母とわたしたち夫婦と大人だけになったら、子供部屋が空いたので、自分の書齋を造ることにした。息子の置いていった机や書棚はそのまま使い、壁のロックバンドのポスターを剥がし、綺麗に掃除した。そこにノートパソコンとあちこちへ分散して置いていた本を集めた。電器屋でMDコンポなるものを買った。いつのまにかカセットテープはなくなりつつあった。MDを恐る恐る使ってみたが、これがなかなかいい。いままで、パソコンのCD-RWで焼いていたものが、音楽CDアルバムがMD一枚に四枚も入るので、それに切り替えた。コピー時間も短い。好きなクラシックとジャズのコピーをずらりと並べた。

学生時代に鳴らしたギターも出してきて、弦を張り替えて、たまに奏くようになった。パソコンの周辺機器も並べ、雑誌、資料が並ぶと、そこはもう自分の城だった。わたしの居場所がよう

やくできた。この家の主人でありながら、子供優先、年寄り優先で、夫婦の部屋でごろりと寝転がって、邪魔にされながら本を読んだり、部屋の隅で小さくなってノートパソコンを打っていたのが、ようやく、まともな格好で打てるようになった。音楽を聴き、本を読み、ギターを弾く。もうそれだけで「ひきこもり」たくなる。

というわけで、書斎に蒲団まで敷いてそこで寝るようになって家庭内別居が始まった。夫婦仲も最近では冷たくなっていた。子供がいれば子供のことで夫婦という関係が親という共通項目で一致した。子供がいなくなれば夫婦だけが残った。壊れそうな夫婦はそれからが恐ろしい。改めて夫婦だけで意識しあい向き合ってしまう。

それは老父母も同じだった。孫が中心で気にもしなかった存在が、孫という垣根が取り払われると、そこに老父母がいた。気まずい二世帯の夫婦同士が向き合うことになる。姑も孫の手前、云えなかったことを最近では嫁にずばずばと云うようになった。子供たちがいて、なにかと潤いのあった家庭が、子供という潤滑油がなくなった途端、ぎすぎすと錆びてきていた。

「今朝、シャワーからお湯が漏れていたわよ。どうして毎日朝シャンするのかしら。人間なんて一ヶ月お風呂に入らなくても死にはしない。わたしゃ、満州で一年も風呂に入らなかったんだから」と、世代の不理解が誤解も生み、憎しみ、些細なことから亀裂を生じていた。

「鍋に蓋もしないで、埃が入るでしょう」「豆電球も点けっぱなしで」「冷蔵庫でモノが腐っていたわよ」いちいち、ばあさんは重箱の隅をつつくように女房の非を咎めて回った。それが、この半年だった。

喧嘩はだんだん派手になり始めた。互いの悪口をわたしに云うから、こっちもストレスが溜まる一方。多少惚けたじいさんは、口煩いばあさんを避けるように家にいないことが多い。日中は町をうろつき、月のうち半分は娘、孫のいる関東方面に旅行だ。わたしも、煩わしいことに関わりたくないから、本の世界に逃げている。ヘッドホンで音楽を聴いて、家庭の雑音を遮断していた。

それがある日突然切れた。

「いいでしょう。明日、この家を出ます」「いいえ、わたしが実家へ帰ります」と、嫁姑の冷戦からとうとう決裂することになった。

「どこへ、出てゆくんだ。わたしはここがいいぞ」と、じいさんはうろろう。

「あんたは黙ってわたしについて来なさい。荷物をまとめましょう。運送屋に電話して、親戚のアパートを借りました。もう耐えられません」ばあさんは、荷造りを始めた。仏壇の金具を新聞紙でくるんだりしていた。嫁は嫁で実家に帰る支度を始めていた。じいさんはおろおろ、わたしは勝手にしたらいいと怒って読書と音楽。

「いいだろう、さっぱりする。みんなこの家から出てゆけばいいんだ」わたしはあまりにばからしい事の始まりからして、家庭内の争議というものが些細な感情のもつれであることを知っていた。夫婦間もそうだが、合わないということが総てだった。

結局、老夫婦は市内のアパートに引っ越して行った。嫁は実家へ帰って行った。がらんとした家にわたし一人いて、食事の支度もする気になれない。会社の帰りにコンビニ弁当を買ってきて、ひとり遅い夕食を缶ビールで摂った。テレビを点けても面白くもない。誰もいなくなったということがこんなことなのだと、家のローンの残りを返すことも虚しく思えてきた。そもそも、こ

の家を建てたのは、姉のところに行っていた老夫婦を呼び戻すためと、子供たちも大きくなったから、家でも建てようと思ったものだ。わたし一人で暮らすためには広すぎた。

明日、不動産屋に行って、この家も売ろう。わたしは世の中のすべてが急にばかばかしく思えてきて、何もかもなくしてやろうと決意していた。

庭に植えた栗の木も、この家に越してきたとき記念に植えたものが、大きくなっていた。庭というものはその家の歴史を伝え、幸福を象徴するものであった。それすらも虚しい。人間にはどれだけの土地がいるか—というトルストイの民話を思い出した。棺桶では足りないが、書斎一間あればいい。わたしもどこか四畳半の部屋を借りようか。息子たちには帰る家がないということは寂しいかもしれない。ここが古里であり実家なのだ。家庭崩壊したいまとなっては、誰を待つということもない。墓と書斎一間、それだけあればいい。思い出もみんな売っ払ってさっぱりしよう。ひとりを感じながら、昔の写真を広げた上でいつの間にか酔って寝てしまう。写真の中だけに家族が笑っていた。

第133話 漂流

ガラガラと油の切れたような扇風機がさっきから煩く頭上で回っていた。今夜のような蒸し暑い夜は人を狂わせてもおかしくはない。一日中、三十度を下回らないのを、この大阪にきて、ぼくは初めて熱帯夜という寝苦しさを体験したんだ。

「何を黙っとるんや、素直に白状したら、さっさと帰したる」警官は、暑さも手伝って、苛々しているのが口調で判る。ぼくは、たったさっき自転車泥棒の容疑で捕まったのだった。いまは暮らしに困って自転車なんか盗む者はいないだろう。古いイタリア映画のような悲哀はない。

「いつまでも、そうしてたって、帰れへんで。調書に書けば済むんじゃない。名前は、住所は、電話番号は。こんなことで黙秘したかてつまらんで。それとも、ほかになんかやっ取るのか。全部、喋ってしまえば楽になるで」

全部、話していいのか。ぼくのような、どうしようもない男のすべてを聞いてくれる人が、いま、目の前にいる。

「おまわりさん、全部、喋りますが、聞いてくれますね」

「おし、その気になったか、聞いたる」

何かの羽虫が交番の光りに集まってきていた。外を涼みに歩く人の下駄の音がする。

「ぼくは、さっきから何回も云っている通り、住所不定無職なんです。ポケットの中を調べても何も出てこなかったように、無一文で、ぼくを証明するものなんかありません。免許証もなければ、カードなんかも作ったことがありません。社会的信用がゼロですから、どこの馬の骨なんです。名前もあります、怪しいもので、ぼくは自分の本名を知りません。戸籍謄本を第一、見たことがないんです。ぼくはどんな両親に育てられたのか記憶がないんです。一応の名前は、戸村淳とついていますが、じゅんはさんずいの一文字です。それも後で親戚の人がつけたような名前でした。ぼくは、生まれてすぐに両親に棄てられたんです。借金に追われて、逃げていた父と、返済のためにバーに勤めていた母と、それぐらいしか知りません。写真も残っていないのは、親戚の人たちもかなりの被害に遭ったらしく、破り棄てられたのです。ですから、ぼくは憎い両親の子どもでしたから、親戚をたらい回しにされて、その子たちより低い生活を強いられました。叱られてばかりいるから、いつも人目を気にするような卑屈な目つきをするようになりました。それが、また親戚のおじさんは無性に嫌いであつたようで、よく殴られました。みんながおやつを食べているのに、自分だけが居候で、食べたくても食べさせてもらえなかったんです。それで、つい、子供の頃から万引きをする癖がついてしまいました。モノ盗むということが罪悪だとは思いませんでした。金目のものには手を出しませんでした。盗るものはきつと食べものに決まっていた。腹が堪らなく減っていたんですね。

ぼくは、中学もろくに出ていません。家出したんです。叔父の家は石狩にありました。知ってますか。北海道の石狩川の河口にある田舎町です。なんにもない町で、巾広い河と、茫漠とした砂浜のどんよりした海だけがありました。昔は鮭で賑わったといいましたが、叔父の家も漁師で、よく昔の大漁の話しを聞かされました。町は寂れて、若い人はみんな札幌に働きに行ってい

ます。ぼくも中学三年のときに、万引きで捕まって、叔父にしこたま殴られてから、家を出ました。育てて貰った恩もなにもありませんでした。辛い思い出よりありませんでした。なにより、空と海の色のように暗い家庭でした。

ぼくは、歩いて札幌へ出ました。職人見習い募集の貼り紙を見て、飛び込んだのが、パン屋でした。高校中退と偽って、なんとか潜り込みました。その職人さんがいい人でぼくの事情も聞かないで、アパートと一緒に住まわせてくれました。聞けば、その先輩も家出だったそうです。なんとなく、ぼくの目を見て判ったと云いました。パン屋は朝早いのが辛かった。毎日、成形の仕方、温度管理、ホイロの使い方を習いました。デニッシュ・ペストリーって、生まれて初めて食べました。パイのように、パン生地にバターを織り込んで、発酵させてからラードで揚げるんです。それにラムシロップを掛けてシナモンを降ったものが、好きでたまりませんでした。アゴつきで喰う心配もなかったし、失敗したり売れ残ったパンは食べさせてもらいましたから、給料が少なくとも、腹いっぱい喰えるのは嬉しかったんです。ただ、そこに一年もいないうちに、事件で調べにきた警官から、家出人捜索願が出ているということがバレてしまい、ぼくはその店にしばらくなくなり、また飛び出してしまいました。金は少しありましたので、函館まで汽車で行きました。函館ではラーメン屋での洗い場で偽高校生のアルバイトとして働きました。時間帯が夕方から夜遅くまででした。一日一食をそこで思いっきり食べて、食い溜めしたんです。夜は寝袋買って、廃屋の中で寝ました。日中は図書館へよく行きました。そこで本を読むことを覚えたのです。日中ぶらぶらしていれば誰しも怪しむのですが、図書館の中は安全で静かでした。そこも居心地はよかったです。冬が雪と寒さで大変なので、もっと南へ行って働いてみよう、溜め込んだ金と寝袋だけ持って、内地へ入りました。生まれて初めての本州でした。旅行なんかしたこともなく、それはわくわくする連続でした。青函連絡船で青森へ入り、夜行の急行列車で東京へ出たのが十八の冬でした。

東京には一週間といませんでした。金はみんな不良に巻き上げられ、拳げ句の果てに顔面にかなりの傷まで負いました。ほら、この額の傷がそのときの痕です。」

「判った、もっと手短にせえ。おまえも苦労したんやな」警官は制するように口を挟んだ。

「はい、それでははしよります。東京から名古屋までヒッチハイクをして行きまして、パン屋にいた経験を生かして、小さなケーキ店に入り込みました。おやじさんが本当にいい人だったので、住み込みで二年もいてしまいました。名古屋は偉大な田舎とばかりにされますが、都会という気負いもなく、住みやすい街でした。そのケーキ屋の娘さんが、短大に行きながら店を手伝っていたんですが、お互いに好きになりまして、ただ、おやじさんは両親も判らないぼくとのつきあいをいいふうに思っていなかったようで、彼女とおやじさんが口論するたびに、ぼくは心痛いたしました。それで、またそこを去る決心をしたのです。今年の春にこの大阪に来ました。いまは西成区のドヤ街に暮らしています。ベッドだけの簡易宿泊所です。アパートを借りるより安いし、アパートは保証人やら、敷金やらいますでしょう。そんな面倒なことが要らないところが大阪なんです。日雇いで一日なんぼの仕事をしました。なんでもやりました。...自転車は盗むつもりはなかったんです。その辺に乗り捨てられていたものと思い、それに乗ってもっと南へ行こうと思いました。広島から山口、そして、九州へと流れてゆこうと」

「道産子のおまえが南へ行く理由はなんや？」警官は親身になっていた。

「零下二十度の寒さと雪です。家のないものにとって冬は大敵です。やはり雪のない温暖な南国へは憧れました」

「そうか、おまえも大変なんやな、今日のところは勘弁しちやるから、もう二度とせえへんようにな。とにかく頑張れ」警官は涙を拭いている。しめたとぼくは思った。手応えありだ。

「なら、今日は帰っていいんですか」「ええ、これからどこへ行くんや」「とりあえず、泊まる場所探します。あしたまた来ますから、今夜の宿泊費少し貸してくれませんか。必ず返しに来ますから」人のいい警官は財布から五千円を出した。「ほれ、これで足りるやろ」

顔では真面目に頭を下げて交番を出てきた。やった、これで今日は三人目だ。この同じ話しを三回もするのは疲れるが、簡単に人を騙せて、収入が得られる。万引きよりリスクは少ないし実入りはいい。

ぼくは隠していた二万円を懐に、悠々と姫路行きの最終電車に乗った。今日は姫路の駅で寝よう。明日はサウナで汗を流して、図書館にも行こう。城も見学しなければ。さて、明日は何人から金を巻き上げられるか。ホームのゴミ箱を漁って、今日のスポーツ新聞と、週刊誌を何冊か拾った。それで電車の中は退屈しない。新聞は敷き布団になる。週刊誌の束は枕だ。ぼくは確実に南へと向かっていた。

第134話 添加物

大正生まれの親父は堅物で、曲がったことの嫌いな性格だった。役所勤めが長かったせいか、妙に威張っている。

近くに暮らしている次男のぼくは、たまに親父のご機嫌伺いに酒を持って訪ねる。そこで、おふくろの愚痴を聞きながら、実家の手料理で親父と差しで吞んでくる。今日は彼女を紹介するために連れて行った。真美とは結婚することになる。両親はまだ真美の顔も見たことはない。

「隆生、わたし、おかしくない？ 最初、なんて云えばいいの？」と、真美はぼくに服装のことなど気にして訊いてくる。

「普段の真美でいいよ。あとはぼくが話すからさ。親父が一番潔癖で難しいんだが、酒があればご機嫌なんだ」

真美はリクルートスーツに決めていた。なにか面接に行くような格好だ。わざわざ茶髪も黒く染め直して、化粧も薄くした。ケバイ女のイメージでは通らない厳格な家柄と真美に教えていたから。

戦後まもなく建った古い家は庭が端正に整えられ、歌舞伎門に小柴垣、ぼくはここで二十五年暮らした。彼女ができてから、去年、家を出てアパートを借りていた。兄貴は転勤族で関西にいるし、姉は四国へ嫁いだ。老夫婦二人きりの家だった。真美は緊張して、ぼくの陰に隠れて玄関に立った。おふくろがあれっという顔をして、意味深に笑って真美を見ていた。電話して、紹介したい人がいるからと事前に話していたから、居間に座っていた親父もいつもとは違う。

「同じ会社の人で」「高瀬真美と云います。二日者ですが」「おほん、それを云うなら、ふつつかもものだろう」と、ぼくは訂正。親父は興味あるのだろうが、いつもの苦虫を潰したような顔で、ちらりと気にして見るだけ。おふくろは始終にこにこで、真美に話しかける。

お茶のあとに、おふくろの手料理が運ばれた。

「親父、今日の酒は幻の純米酒だぜ」

ぼくは越後の日本酒を手土産に渡した。

「なんだ、純米だと。酒は米から造るに決まっているだろう」

「そうじゃないんだ。ほらっ、別の酒の表示を見てみたらいい。米こうじ、糖類、糖類、酸味料とあるだろう。いろいろと混ぜられているんだ」

親父は急に不機嫌になった。

「許せん。いままで騙しておったのか」

「コマーシャルでも、ウイスキーの宣伝で、何も足さない、何も引かない、というやつがあるだろう」

「何、ウイスキーも麦だけで造るのではないのか、何かを引いたり掛けたり割ったりしているのか」

「水で割ったら水割り」

話しが関係のない所に行ってしまう、真美は立場がない。

「そうそう、最近、新聞で騒いでいる添加物の問題ね。消費者が悪いんですってね。かまぼこも黒ぼこなら売れ行きが悪いんだそうよ」おふくろもその話し。

「見てくれで買うやつがいるからだ」見てくれと云って、親父は真美を見た。やはり気になるのだろうが、気まずさからわざと話題を別に持って行く親父。

「第一、最近の牛乳はなんだ。いつまでも腐らない。昔のは二日で酸っぱくなっておった。おまえたち、酸っぱい牛乳を飲んだことはないだろう」

「酸化防止剤とか防腐剤とかいろいろ入っているんでしょうね」おふくろも親父の話に乗っている。

「それは、でも仕方ないんだよ。流通の問題で、ロングライフでなければならなくなった。輸入品も多いから、添加物で保存させないと、消費者に行き渡らない」

真美は難しい経済の話しになって退屈していた。

「それじゃ、親父は添加物否定論かい」

「あたりまえだ。自然のままが一番いい。初々しさだな。造られたものはたとえ美貌でもだな、化けの皮が剥げる」と、ちらりとまた親父は真美を見る。薄化粧にさせてよかったとぼくは思った。第一印象が大事だった。

「ところで」と、ぼくは本題に入った。「こちらの高瀬さんと結婚しようと思うんだ」

親父は口に含んだ酒を吹いた。

「で、急いで式を挙げたいんだ。来月にでも」また親父は吹いた。

「な、何を急に云うんだ。物事には順番というものがあるだろう」

親父は焦って云った。

「でも、時間がないんだ。ぐずぐずしていると、お腹が目立ってくるし...」と、ぼくが云うと、

「あら、あなたたち…」と、おふくろも絶句した。

「そうだよ、彼女のお腹に添加物が入っちゃって、その、六ヶ月で墮せないんだ」
ときに、その添加物は既成事実というやつで、結婚までの賞味期間を逆に短くする。

両親とも、考えがまとまらない様子で狼狽えていたが、思い直して、

「まあ、呑め、おまえも父親か。真美さんと云いましたな、隆生を支えてやってください。それじゃ、忙しくなってくるなあ」

孫の顔を想像して親父、不気味ににやりと笑う。

第135話 原稿犯

あるビルの一室で、小説の同人誌の合評会が行われていた。七人の同人が互いの作品を批評しあう場を密かに設けていた。同人で一番年若い橋本女史が遅れてやってきた。ドアが叩かれる。ドアの内側でメンバーが合言葉を求める。「サルトルと云えば」「ボーヴォワール」「よし、入れ」主宰の服部がメンバーを確認する。窓にはカーテン。電灯も薄暗くしていた。

「おかしいな、一人足りない。湯田が来ていないな。欠席すると云っていたか」

「いいえ、何か事業が大変らしく、資金繰りに困って、合評会どころではないのかもしれませんが」何か嫌な予感がみんなの間を走った。また、ドアがノックされた。

「湯田かもしれん」一応、念のためにメンバーがドアの内側から云った。「サルトルと云えば」「ロカタン」全員、立ち上がった。ドアが蹴破られ、完全防備の警官隊が雪崩れ込む。

「全員、動くな。逮捕状だ。連行する」メンバーはすべて手錠をかけられた。

「くそ、あいつだ、湯田が裏切った」「われわれを売ったのだ、ちくしょう」

新聞記者が駆けつけて、フラッシュをたいていた。

メディア規制法がさらに改正されてからは、おおっぴらに言論の弾圧が始まった。政治が右傾化してくると、レッドパージが始まり、それを非難する文を次々にマスコミで発表してきたペンクラブの会員は悉く捕まった。それで収まりはしなかった。地方の同人誌に至るまで、政府を非難する文章を公表したものは、危険分子と判断され、即刻逮捕される。詩も、短歌も川柳も、結社自体が違法になった。同人誌は秘密結社となり、地下出版で活動を続けていた。世論に対する影響力が大きいということで、短詩型も含めた文学者たちは、断筆しないものすべてが、投獄され、転向を迫られた。文芸雑誌は廃刊に追い込まれ、文学自体が必要のないものとして排斥された。

同人が解体されてからは、文学愛好家はなべて隠れ人間として、闇ルートで入手した小説を読んでいた。笹田もその中のひとりだった。表向きは普通のサラリーマンで、軍事教練となると率先して町内の組に入って活躍する振りをしていた。批判したり、非協力的であれば、各町会長よ

り憲兵隊に報告が入ることになっていた。

だが、彼の反骨精神は上から抑えつけられても、裡では激しく燃えているのだった。彼は、職場では模範的な愛国心を見せつけ、国旗に向けて朝晩の礼を欠かさなかった。家に帰ると、書齋に閉じこもり、カーテンを閉め、読書灯だけにすると、家人にも内密に原稿用紙に向かって意欲的に反戦の小説を書きまくった。以前にもまして、規制されればされるほど、憤懣のはけ口を書くことに求めた。その原稿用紙もいまでは発売禁止項目に入り、市販されていないので、闇で密かに売買されているのだ。誰しも孤立していた。昔の同人仲間と文学談義を好きなだけしてみたいが、電話は盗聴されているかもしれないし、メールは読まれる可能性が大きい。さりとして、新聞に大きく取り上げられていた服部先生の同人のようにはなりたくない。

図書館で貸し出しできるのは、無害な図書か、すべて右よりのものばかりで、検閲合格の大きな判が軍部の名前で押してあり、とても読む気にはなれない。新聞も、雑誌もすべてが戦争讃美、戦意高揚の美辞麗句でばかばかしい。過去に遡って、文豪の作品までが、不許可対象となり、焚書された。プロレタリア文学はもとより、リベラリストの文学まで不許可、不許可の判が押された。

笹田は、また退社後に、児童公園の公衆便所に立ち寄った。そこが、闇の売人たちの取引場所だった。笹田は、小便をしながら、隣で連れションしている男に声をかけた。サングラスをして、帽子をかぶっている見慣れない男。

「いつものやつ、ありますか」

男は辺りを見回して、「ひょっとして、これのことか」と、原稿用紙の束をまるめたものをコートのポケットから取り出した。

「それだ。四百字詰、五十枚入。よし、千円だったね」

笹田は男に千円を渡すと、原稿用紙の束をシャツの内側に隠して、公衆便所から出ようとした。すると、黒いコート姿の男たちが、ばらばらと笹田を取り囲んだ。いきなり、笹田は腕をねじられ、手錠を掛けられた。

「原稿犯逮捕する」と、黒い警察手帳を提示した。「しまった」と、便所を振り返ると、サングラスの男は刑事たちと親しげに笑いながら話していた。「嵌められた。囮捜査だったのか」

「署に連行しろ。他に仲間がいないか、もう少し張り込んでみる。今日はこれで三人目だ」

笹田がパトカーに乗せられると、後部座席に手錠を掛けられた木村がしょげかえっていた。昔の同人仲間だった。「斎藤もやられたらしい」と、木村が云った。「何、孝之が」二人とも呆然としていた。

文学はそうして、根絶やしにされた。第二次世界大戦に文学の影が薄れていったときのように。

第136話 海に見える家

二階のベランダに立つと温泉街越に海が見えた。島も見えた。十年前に、わたしは海に見える

家に棲みたいと山懐の土地を買って、瀟洒な家を建てた。

事業が破産して、一家離散していた頃に、何もかも失ったところから這い上がろうとしていた。女房も三人の子供を置いて出ていった。あの頃は意地だけで生きていたような気がする。東京の姉のところへ世話になっていた両親も引き取った。

家の裏は小高い山になっており、海まで歩いて五分とかからない。すぐ近くに水族館や遊園地もあり観光地の中で暮らすのも奇妙な日常だった。引っ越してから庭にマムシが出た。下が岩盤なので、マムシが住み着きやすい土地だった。庭にも黒土を運んでもらい、仕事が終わってから、夜更けて畑を作ったりしていたが、土盛りが浅いせいか、植えた樹木はことごとく根づかず枯れていった。

子供たちが育てていた文鳥も、この家に越してきてまもなく死んだ。小動物も次々に死んだ。生き物が育たない土地であったものか。わたしは何か嫌な予感に囚われた。

破産者としてのレッテルを貼られたままだった。父は終の棲家がようやくみつかったと悦んでいた。アパートでは死にたくない。老いてくると死に場所を求めるのは人間も同じだった。ここなら町から遠い。蟄居するには丁度いい。町には債権者が沢山いたし、いまでも多額の迷惑をかけたことで、いつ誰に出逢うかもしれないと、恥の罰はわたしたちの背負った十字架として甘受しなければならなかった。本当は、もっと人里離れた山奥に棲みたかったが、子供の学校のこともあった。下はまだ小学三年だ。参観日は父に行ってもらった。わたしは仕事と家の往復だけではなく、買い物して、弁当を作ったり、朝晩の賄いもやっていた。洗濯掃除と主夫として家事をしているときも、心臓病の気がある母は寝てばかりだった。病人も抱えていた。

わたしは、いつも一人の部屋で寝ていて、このまま子供を育て、老人の世話をしながら一生を捧げてしまうのかと思った。確かに目が回るほど忙しい毎日で余計なことを考えるゆとりはないが、ふと、独りを感じるときがあった。まだ三十代で、男としても終わっていない。ただ、子供と老人のいる家に誰が再婚すると入るかと思った。一時、わたしは遊び回った。遊ぶことでわたしの男を鎮めた。いろんな女を通過した。年上から人妻、そうして行き当たったのがいまの後妻だった。当時、四歳と七歳の姉弟を連れてきた。バツイチ同士の再婚だった。

一挙に九人家族になって賑やかになってきた。上は高校生、下は幼稚園、子供だけで五人になった。部屋を造築して対処した。

家族は時間と共に変化してゆく。子供は成長する。親は老いる。その中で様々な誤算が生じてくる。一周り以上の年下の、老父母にとっては孫のような嫁を貰ったので、ジェネレーション・ギャップは大変なものがあった。相互理解の許容範囲を超えている。全くの新人類で、老父母にとってやることなすこと不可解だ。嫁姑戦争が起こる。どこにでもある話で、テレビの中のホームドラマには違いなかった。

年寄りたちが最初に悲鳴を上げた。

「なんで、こんな不便なところに家を建てたんだい」と、ばあさんが文句たらたら。足腰弱ったら、病院に毎日通うのが辛い。朝はわたしが車で連れてゆくが、帰りはバスか自動車だ。バスで一時間近くかかるところだ。引っ越ししてきたときは七十のばあさんも八十になった。内科、耳鼻科、整形外科と通っていた。病院も小さなところが一軒、食品店もかなり歩いたところの一軒という不便なところだ。味噌、醤油を切らしたというだけで大騒ぎになる。病院も市内まで連れ

てゆかねばならない。ばあさんの甘えもあったが、確かに歩くのは困難だった。冬になれば、吹雪の厳寒の戸外で遅れているバスを半時も待たねばならない。年寄りには過酷かもしれない。それでもわたしは反論する。

「もっと辺鄙なところに棲んでいる老人たちはどうするんだよ。エスキモーは、ネパールの病院もない山奥に生まれ暮らす老人たちはどうするんだよ。それに比べたら、この文明社会の日本の田舎と云っても、車で三十分も走れば病院が沢山ある町外れに棲んでいることは贅沢かもしれない」

最近、二人とも東京の姉のところに暮らしていたときを懐かしく思い出していた。少し歩けば病院もあるしスーパーもあった。遊ぶところは沢山あるし、交通の便もよかったと。こんなことじゃ、東京から呼び戻すんじゃないかと、わたしは憤慨していた。

女房も、来年高校受験の娘の通学のことでも悩む。わたしだって、会合や友人との呑み会でも、はしご酒を辞退して、最終電車で帰ってきていた。十時を過ぎれば家には戻れない。タクシーはべらぼうに高くつく。

みんなそれぞれ愚痴を云うようになっていた。勝手にしろとわたしは怒った。

二階のベランダに立つと、港から海峡を渡ってゆくフェリーの船影が見えた。白い帆のヨットも快走している。潮の香が仄かに漂ってくる。自然派のわたしは、子供の頃より海が好きで、毎日海を眺めながら暮らせたという夢が実現したと思ったら、持ち上がる現実的な問題に悩むことになるうとは。街を憎み、街には棲みたくないとするイデーが、都会志向の家族によってねじ曲げられようとしていた。

木も草も枯れ、動物は死に、人までも住み着かないこの何かの因縁のある土地。

わたしはある決心をして、知り合いに電話した。

「東日流不動産の社長さんおりますか。ええ、自宅を売却したいと思ひまして。それで、市内の病院が近いところにいい物件があれば紹介していただきたいと...」

第137話 たらい回し

老人問題は突然に空から降ってきた。いままで新聞であれこれと取りざたされている、余所の話と思っていたのが、ある日いきなり我が家の非常事態となったのだ。

わたしは四人姉弟の男一人だから、当然両親の老後はみなくてはならない。あとの姉妹は嫁いでいるから、他人と同じだった。七十代は両親とも、元気で病気もなく、いまだに愛人問題で夫婦喧嘩が絶えないなど、生臭い老人だった。互いの年を考えてみると、わたしが叫びたいほど、浮気でもめていた。どこの世界に八十近い老人の浮気に噛みつく老婆がいようか。元気過ぎて困っていた。威勢がよく、半分惚けた分、頑固で依怙地で扱いにくい年寄りだった。十数年前まで現役で中小企業の社長夫妻だったので、いい暮らしから抜けきらないし、名士様とのつきあひも

多く、いまだにこのわたしの建てた家では主導権を握っていた。わたしも五十を過ぎていたが、いつまでも子供であり、親であった。全く信用がなかった。両親は、どっしりとした存在感を持って、主の席に君臨していた。わたしが中途半端で、この家の居場所がない。いつまでも息子を押しえつけようとするから、老いても子に従う親ではない。

だから、親が老人であったことをすっかりと忘れていたのだった。じいさんは多少、耳も遠いがボケがはいっていた。ばあさんも口やかましいが、かくしゃくとしていた。

それはある晴れた朝、突然に降ってきた。ばあさんが脳梗塞で倒れたのだ。右半分が動かなくなった。ひと月入院して、自宅で介護することになった。入院中は姉たちが交代で病院についていたが、自宅に移ってからは、それぞれ帰っていった。わたしたち夫婦は夜遅くまで話し合いをした。

「どうするのよ、あなた、わたし、仕事辞めたくないわ。この家のローンだってあるし、子供たちもこれから金がかかるのに、共稼ぎでなければやってゆけないでしょう。おじいちゃんがボケたので、おばあちゃん、面倒みるのに疲れちゃったのね。そのおばあちゃんが寝たきりになったから、おじいちゃんの面倒もみなければいけないし、ホームヘルパーさんは高くつくし、あなたの事業も赤字で大変なときに」

「そうだな、昨日までは平穩無事な家庭が、一挙に奈落の底に突き落とされたようなものだからな。二人同時というのも過酷だ」

「老人ホームへやるにも、親戚姉妹からかなり攻撃されるわね」

「でも、おまえだって、かなりの収入があるんだ。おれの稼ぎだけでは家計のやりくりがつかないだろう。ともかく、おれも協力するから、二人でやれるだけやってみようや」

翌日から、妻は休職願を出して、役所に出るのをやめた。ばあさんは寝たきりだから、下の世話から、風呂に入れるのも、夫婦二人がかりでなければ重くて大変だ。床ずれもしないように、マッサージも毎日欠かせない。ばあさんは口もきけない状態なので、何があっても言葉で伝えられない。

ばあさんは大人しいから扱いやすいが、問題はじいさんだ。

「あなた、おじいちゃんが見えなくなったの」と、妻から電話で、わたしは仕事を切り上げて、夕方、二人で手分けして、町内を探し回った。履き物は玄関にあったから、勝手口から裸足か、スリッパで出ていったと思われた。徘徊はいままでもあったが、ばあさんがついていたから安心だった。小さい子供より目が離せない。交番にも連絡した。どこかで保護されても、ここの住所も電話番号も云えないのだ。果たして自分の名前も云えるかどうか怪しい。この二年で急速にボケが進行していた。

「おれは、郊外を車で回ってみるから、おまえは自宅で電話がくるかもしれないから、待機している」

小学と中学の娘たちも「おじいちゃん」と、公園などを探していた。

「あなた、みつかったわよ」と、わたしのケイタイに妻から連絡が入った。「どこにいた？」「前の家よ。昔、人手に渡した家にいたんです。ここは、わしの家だと」

わたしは事業で失敗したとき、差し押さえにあった生家のある町まで向かった。いまは、新築して、別の家族が暮らしていた。じいさんは、ステテコにスリッパとサンダルを履いて、バジャ

マの上に背広を着ていた。わたしは謝って、じいさんを引き取った。人の家に上がり込んで、昔話をしていたという。ボケても子供時分のことは不思議と忘れてはいない。

わたしたち夫婦はすっかり疲れていた。妹に電話して、じいさんだけでも引き取ってもらうよう実状を話した。妹も専業主婦ではあるが、病気の姑を抱えている。うちと経済的なことを除けば条件は一緒だった。ただ、同じ市内だったから、行ったり来たりしてもいいという安易な考えがあった。

じいさんは妹の家に棲むことになった。これで、半分の負担が減った。子育てと老人介護と両方同時進行というのがきつい。ふつうは、子育てが卒業したときに老人育てが始まるのだが、婚期の遅い風潮で、四十過ぎて結婚するものはわたしのように沢山いるわけだ。人生なんてうまく噛み合わない。

妹から相談があって、じいさんを持ってあまして、東京の姉のところに連れてゆきたいと云う。頑固がボケると、云うことを聞かない。威張って梃子でも動かない。子供より始末が悪い。とうとう、じいさんは東京の姉のマンションに連れてゆかれた。それも半年と続かない。夫婦仲が悪く、離婚寸前の姉夫婦の家は今度はじいさんの問題で荒れているらしい。姉も義兄の稼ぎが悪く、裕福ではないので共稼ぎだ。子供たちはみんな社会人だからいいとしても、日中、マンションに閉じこめておいて、火事を出すところだったという。あちこちにタバコの焼け焦げが発見されていた。湯を沸かすと、ガスは点けばなし。ガス漏れもしていた。もう少しでガス中毒するところだったという。

姉も持ってあまし、北海道の上の姉のところにじいさんをやることになった。北海道の姉なら、家も広いし、子供たちはみんな出てしまい、一人暮らしの未亡人だ。姉妹たちは、これで安心と思っていた。北海道で何が起きているか知りもしない。

ある日、夕食を家族でしているとき、ドアのチャイムが鳴った。

「宅急便で一す。北海道からです。ハンコ下さい」時間指定で夜でも配達が来る。妻が玄関に出て、悲鳴が聞こえた。何があったのだろうと、家族全員、玄関に飛び出した。

玄関に大きなタライが置かれてあり、その上にちょこなんとじいさんが胡座をかいて座っていた。

第138話 醤油とソース

こんな女と結婚するんでなかった。と、飛鳥は後悔しはじめていた。まだ、半年も経っていないので、新婚なのだが、すでに不一致が見えてきて、ぎくしゃくした関係になっていた。妻の茉莉もそれは同じこと。どうしてこんな男で妥協したんだろう。それぞれがちらりちらりと、朝食時に目を盗みみていた。

結婚はできるだけ利害関係が一致する相手を選べば問題ないが、性格は合っていても、決定的な違いは食生活にあった。共同生活だから、同じ釜の飯を喰うわけで、それが極端に嗜好が違えば、大変なトラブルが待っていた。交際している間は外食が殆どだから、好きな食べ物は知っていても、それぞれの好みだぐらいにしか考えていないのだ。だが、この二人は決定的に食い違

っていた。飛鳥は和食党、茉莉は洋食党だったのだ。

食卓の上に見えないラインが引いてある。黙々と二人は日曜の朝食をとっている。飛鳥は御飯に味噌汁、納豆に海苔、茄子の漬け物。茉莉が味噌汁の作り方を知らないで、自分一人分だから一杯分入ったインスタント味噌汁で我慢している。茉莉はバターロールにミネストローネスープ、フレンチサラダとベーコンエッグだ。じっと互いの食事を異質な文化を蔑視するように眺めながらの食事だ。

飛鳥は納豆をゴネゴネと掻き混ぜて、糸をたたせると箸でネバネバを得意げに上に伸ばした。「やめてよ、味噌汁の匂いも嫌いだけど、納豆の臭いなんか大嫌いなの知っているでしょう。わざと嫌がらせみたいにするの、やめて」

茉莉は我慢の限界のように体を震わせていた。

「そうかなあ、ぼくは納豆が一番の好物だから、この匂いがたまらなく好きだな。うん、まさにこの匂い、なんていうか、汲み取りの公衆便所のあのアンモニア臭なのだな。人間のもっとも人間たる原初の臭いだ」

と、飛鳥はくくん納豆の臭いを嗅ぎながら、陶醉していた。

「最低、ばっかみたい」

「納豆はね、いきなり混ぜもしないで醤油をかけるのは邪道なんだ。こうして、糸を引くだけ引いて粘りを出してからだな、薬味を入れる。ぼくの薬味のベストスリーはほうれん草、大根おろし、たくあんの細切れの順番だな」

茉莉は全然話しに乗ってこないばかりか、聞いていない様子。

茉莉はフォークとナイフでベーコンを切って口に運ぶ。ベーコンはできるだけカリカリに炒めなければならない。目玉焼きは半熟がいい。茉莉は茉莉で拘りがある。

たまの休みが合ったので、二人は買い物に都心まで出ることにした。共稼ぎだけど、なかなか仕事柄休みが合わない。飛鳥は貿易会社に勤務していたが、取引で日曜もなにもない。茉莉はOLだからきっちり土日はお休み。

ショッピングで見て回るうちは、仲のいい新婚さんだった。それが、昼食を食べる段になると、敵対してもめるのだ。

「おいしい更科蕎麦にしようよ。ここのは繋ぎが山芋なんだ」と、飛鳥がそば屋に誘えば、茉莉はイタ飯。

「何云ってるのよ、パスタ専門店に決まってるでしょ。百種類のメニューが揃っているのよ。わたしはあっさりバジリコのスパゲッティね。デザートにティラミスもいいな」

「蕎麦だの！」「パスタ！」

仕方なく、二人はファミレスに入ることにした。そこなら和洋いろいろメニューがある。たいして美味しくないけど、妥協せざるをえなかった。

飛鳥はカツプレートを頼む。「ライスにしますか、パンにしますか」と、ウエイトレスが訊く。飛鳥は御飯党だ。

「どうして、カツとじにパンなんだよ」と、怒っている。茉莉はピザにサラダのバイキング。好きな野菜を自分で選べる。

「全く、頑固なんだから、日本は戦争に負けたのよ、いい加減に降伏したら？　まるで、離島でいまだに戦っている兵隊さんみたい」

「なんだよ、その時事新聞みたいな比喻は、ぼくは国粹主義者ではない。単に好みの問題だ。君だって、昔なら西洋かぶれ。東洋のヘルシーなことも忘れていくせに」
また食べ物の事で口論が始まる。

ウエイトレスがチラシを配っていた。

「如何ですか。新メニューの一口ステーキは、ただいまご試食価格でサービス中です」
見ると、美味しそうな写真が載っている。狂牛病で人気の落ちたステーキを安全な外国産で訴求しているのだ。

「おいしそうね、食べてみましょうよ」と、茉莉がオーダーした。「ええ？　また食べるの？」
女の胃袋はいくつもあるのかと飛鳥は思った。

「ぼくは食べないからね」と、飛鳥は洋食拒否。

さて、出てきたコロコロステーキは大根おろしが上に乗って、シーズニングの醤油ベースのソースがかかっていた。飛鳥は肉は嫌いだが、大根おろしに食指を動かされた。茉莉は醤油の焼け焦げる臭いが嫌いだった。二人とも恐る恐る箸とフォークを近づける。そうして、口に運んだ。

「うまい！」ここで初めて結婚して意見が一致した。

第139話　実況中継

横浜にこの春、就職した息子からたまに電話がくる。何か、まだ職場にも馴染めない、オフにつきあう彼女もいなければ、友達もまだできない。東北の田舎から都会に出て、あいつも寂しいのだろう。よく、長々とケイタイから電話してくる。ホームシックまでゆかなくとも、慌ただしい当初の都会生活にも落ち着くと、都会特有の疎外感にさい悩ませられる。

—おやじ、おれだよ。

—なんだ、父の日のプレゼントならまだ受付しているぞ。いま、どこからだ。

—横浜西口からだ。

—仕事か。

—休みだ。

—いい若い者が休みにひとりでぶらぶらしているのも勿体ない話だな。西口か。

わたしは、三十数年前のことを思い出していた。わたしも十九のときに横浜に住んでいたときがあった。西口は懐かしい思い出がある。

—西口五番街というのはまだあるか。

—あるもなにも、いま、そこを歩いて話しているんだ。

—そうか。突き当たりの袋小路になっている手前に五階建のビルがないか。上から下まで喫茶店になっている。「古城」といったな。マンモス喫茶だ。お父さんはそこで、十九の年にバイトしていた。

—おれと同じ年じゃん。それも奇遇だな。どれ、歩いていってみるか。ちょっと待ってね。

街の雑音が聞こえる。女の子の笑い声、車のクラクション、いま流行っているアイドルの歌などが、電話の向こうから生々しく聞こえてくる。

昭和四十五年十二月。わたしは大学生であった。学生運動華やかな年で、親に勘当されたわたしは、横浜山下町の中華街の裏に下宿していた。仕送りが停止されたので、夜中一時近くまで喫茶店「古城」でバイトしていた。夕食が付いたのが嬉しかった。騎士のような制服を着せられて、寒い風が吹き込む中、ドアボーイをやらされていた。いまのような自動ドアが普及していなかったもので、格調高い店はドアの開閉も人が立ってサービスしていた。時給二百円とはコーヒー一杯分の値段だ。夜は学生アルバイトで仲間ができて楽しかった。

何故、わたしが横浜に来たのかというと、横浜の大学に好きな女の子がいたからだ。文通していて、訪ねていった。逢いに行くにも、東京からだとは交通費もかかるので、東京から引っ越してきた。それがおやじが与えてくれたマンションを理由もなく出たというので喧嘩になったというわけだ。

「あら、喜多村くん、来るんだったら、前もって電話してからじゃないとね、これから美術部で西口の古城という喫茶店でコンパがあるのよ」

彼女は一途なわたしの言動を避けるように、予定を入れていった。すっかり片思いだった。彼女に拒絶されればされるほど、逢いたくなり、アパートの近くをうろついたり、いまでいうストーリーカー行為を繰り返していた。どうしようもない男だった。絵画に打ち込む彼女はしっかりした目標を持って生きていた。わたしは、授業もボイコット、本も読まねば勉強もしない、ビジョンもまるで白紙、自分をどうしたいのか持てあまし、掛け持ちのバイトに走り回っているだけのノンポリ学生だった。

彼女の口から聞いた、「古城」という喫茶店。そこでバイトを募集していたので行ってみた。彼女が来るかもしれない期待感で、半日、ドアに立って待つという長い時間を消耗していた。若さを無駄使いしていたものだ。

—おやじ、突き当たりにビルはあるけど、ゲーセンになっいるな。

—その向かいに間口一間の小さなラーメン屋があるはずだ。そこで、バイトの先輩からよくラーメンを奢ってもらったものだが。

電波が急に途切れた。聞こえが悪くなった。息子の声が遠くなった。

—おい、聞こえが悪いぞ。

—あったよ、「古城」と、書いてある喫茶店だ。あれ、みんな超ミニスカートはいているぞ。おかしなファッションだな。あれれ、街も急に昔になったみたいだぞ。おやじ、少しおかしいぞ。止まっている車がみんなクラシックカーばかりだ。レコード店だって。ヒットチャート上昇中のゴールデンカップスって誰だ。なんだかおかしいぞ。あったぞ、ラーメン屋。二百円だって、激安だ。喫茶店のドアに、おやじの若いときの写真そっくりなやつが立っている。中世の騎士の格好しているぞ。

—おい、何をさっきから云っているんだ。おまえはどこにいるんだ。おい、聞こえるか。

電波がだんだん遠くなって声が掠れてゆく。聞き取れないほどの細かい息子の声がついに途切れた。

わたしは心配になり息子のケイタイに電話を掛け直してみた。

一コノ電話ハ電波ノ届カナイトコロニイルカ、電源ガ入ッテオリマセン。
何度掛けても通じなかった。それっきり息子は行方不明になっていた。

第140話 断 崖

何もない村だった。リアス式海岸の入江に小さな漁村がありはしたが、海士たちが潜って貝を捕る零細な漁を続けていた。海はそそり立つ崖に阻まれて、景観も海からでなければ見えないので、観光もいまいち不振だった。崖の上の松林を過ぎれば、畑が広がるが、これといって村の特産はない。若い者はみな都会へ就職してしまう。

村長はじめ村議会では、村の振興のために、イベントをうち立てたり、村祭りを復活させたりして、近隣の町からの観光客の動員に予算を使い果たしていたが、その割りに効果もなく、単発で終わるものばかりで後が続かない。

「村おこしがないか、いいアイデアが」と、村民にも聞いたが、じじばばかりで出るものは欠伸しかない。

そんなとき、スポーツカーでサングラスの若い男がふらりと村にやってきた。老齢化した村に都会の若い男は目立ちすぎる。みんな農作業の手を休めて、注目していた。若者は車を農道に止めると、何か思い詰めたように、車の中でタバコを喫っていたが、車を降りると、松林の方へと歩いて行ってやがて姿が見えなくなった。

翌日、海士が岩場に俯せになくなってうち寄せられている若い男の溺死体を発見した。崖の上から身投げしたのだ。垂直に切り立った崖は五十メートルはある。それがただの自殺であれば地方紙の片隅にも載らないだろうが、中央紙の三面トップに大きく載った。スポーツ新聞各紙はトップニュースだった。

『人気ロックバンドMAJIのボーカルMAMORU自殺』

人口二千弱の村は翌日から、報道陣と花を抱えたファンたちで、何倍にも膨れあがった。名前も出てこない日陰の村が一挙に日本全国に名を知られることになった。狭い村の道路はマイカーや野次馬でごったがえして、村のおまわりさんでは足りず、県警から応援の警官が交通整理に来るほどだった。

「村長、いままで、いろんなことやってきたが、こんなに人が集まったことはねえだな。ファンが後追い自殺して、若けえ娘っこが昨日も三人飛び込んだとよ。自殺の名所だと週刊誌には書かれるわ、騒がれて有名にはなっただが、暗いイメージはますますだあ、不名誉なことだな」
村議が役場でそう話していると、役場の若い職員が口を挟む。

「そったらだことねえ、こんなに有名になったのをみすみす放っておくことは勿体ねえですべ。逆手に利用すってのはまいねえべが」

「なんだ？ そりゃ、おめえ、仏様だちば馬鹿にすっのか」

「んでねえ、要は村さ客を入れればいいんだべ。そして、村さ金を落として行けば」

村長はさっそく企画委員会を作らせ、その村おこしを実行するための計画を練らせた。最近では自殺者が増えている。景気が悪いから交通事故の三倍はいるというが、実際はひた隠しにしているのが多いので、その何倍も自殺していると思われた。かつて、足摺岬、東尋坊と全国に自殺の名所は多い。それを我が村で大々的にこれからも宣伝してゆく。旅行会社と手を組んで、自殺ツアーを企画して団体も呼ぶ。海士が多いから土左衛門の収容はしやすい。いつも崖の下で当番が待機していればいい。いろいろとアイデアが飛び出した。

会社経営に失敗した中年の社長がふらりと村にやってきた。駅で降りると、駅前にサインタワーが立っていた。

『ようこそ自殺の名所飛鳥絶壁へ』

男がうろうろしていると、タクシーの運転手が声を掛けてきた。

「お客さん、自殺しに来ただか。案内すっぺ」駅前の売店では供養の花と、線香なども売っている。名物「おっちゃん団子」も売れている。みんなやけに明るい。男はタクシーで崖まで連れていってもらった。降りるとき、「南無阿弥陀仏」と、運転手に合掌されたので、男は嫌な気持ちになった。「おれはまだ生きてるわい」

崖までの道順が、葬式会場までの指先矢印と同じものがあちこちへ貼ってある。ゲートが白黒の縞模様でできていて、蓮華が描かれていた。男はますます嫌な感じがした。崖の入口というところに受付まで村で用意していた。

「すみません、この用紙に署名していただけますか」

見ると、保険会社の契約書だ。受取人は村になっている。

「この保険金で捜索費用にいたします」男はしぶしぶサインした。

次のテーブルでは、葬儀会社のパンフレットが置いてあった。

「あの、お客さんの遺体を収容する棺桶ですが、いろいろとサイズ、デザインがありまして、ちょっと、身長と横幅を測らしてください」と、男は係りの女性に命じてスケールで測っていた。役場では火葬場も拡張した。いい収入源になる。

役所の係が火葬場の説明もする。骨箱や骨壺も売っている。地元の陶芸家や彫刻家の手工芸品も並んでいる。自殺する人に選んでもらうという趣向だ。遺族より、自分が入る箱だから、入る人の好みに合った方がいいという話だ。それも契約させられる。

最後に役場の係が一人立っていた。引き留め役だった。

「死ぬの考え直したらいかがですか」と、一応云ってみる。自殺幫助罪にならないよう、引き留めたことにする。

さあ、男はいよいよ崖の上に立った。さすが、足が竦む。真下遙かに海が見えた。待機している海士たちが岩場で休んでいるのが小さく見えた。

「あのう、わたし、こんな者ですが」と、この後に及んでまだ用事があるのか、名刺を渡された。見ると、リサイクルセンターの営業マンだった。革靴と背広を買いたいという。査定して幾ばくかの代金を貰っていた。貰っても使う予定もない。三途の川の渡しにやる金子と思ってポケットに入れた。男が飛び込もうとすると、後ろの方からスピーカーでお経が流れてきた。頭にきた男は、振り向くと、怒りで震えながら、叫んだ。

「人をおちよくるのもいい加減にしろ」もう死ぬ気分にはなれなかった。

すると、足を滑らせて仰向けに崖から転落していった。

役場の係は記録簿に五十三番目の男の名前を書き込んでいた。その名前は崖淵の記念モニュメントに刻まれることになる。

第141話 サポーター

第二次朝鮮動乱が勃発した。いつ起きても不思議ではない緊張状態の中、北側が三十八度線を越えて押し寄せてきた。その勢いはただならぬものがある。中には軍隊だけでなく、難民たちも混じっていた。いわば、北側の全国民が雪崩をうって南下してきていた。ぎりぎりの限界まで国民を飢えさせ、我慢の限界まで抑えつけてから、国境を解いた。南の村々は略奪され、食糧が奪われていった。前の朝鮮戦争では釜山まで南下するのに何日もかからなかった。その勢いを止めることはできなかった。あつというまに韓国全土が占領されて、一部は日本海を渡ってきている。韓国の中枢や軍隊も日本へ一時撤退を余儀なくされた。米軍も日本へ集結して、国連軍まで体勢建て直しのために日本海沿岸に布陣していた。そうになると、国土防衛のために、自衛隊だけでは足りない。憲法改正をしている暇もない。どうするべきか、政府は小田原評定をしているときではない。

日本の若者の不甲斐なさを案じて、いまから徴兵制を敷いても遅いし、第一、気の弱い若者たちが志願するはずもない。政府は何かいい手だてはないかと、思案していた。国土防衛のためには二百万の予備兵が必要だ。

「つい、この前のワールドカップにはあれほどの若さが爆発したんだがなあ」と、官房長官が嘆いていると、

「それだ。それですよ」と、次官が膝を叩いた。

「戦争サポーターと称して募集するのではなくて、そういう風潮を作ってしまうのです。歴史的にもそれはあります。ナポレオンの帰還でも、ジャンヌ・ダルクのときもそうでした。民衆というものは、ムードでいくらでも盛り上がるものです」

さっそく、防衛庁長官と関係閣僚が首相官邸に招集された。大手広告会社のプロがガイダンスの説明に参上していた。

「...ということで、かつての戦争のイメージを払拭しなければなりません。格好いいと若者層にアピールすることに重点を置きました。イメージソングもつんくに急いで作ってもらいました。モー娘が歌をうたいます。CDは今週中に発売します。モー娘たちがヘルメットをかぶって銃を手にしていますね。ヘルメットも迷彩色ですが、派手にトップデザイナーにデザインしてもらいました。全国のデパートで一斉に発売します。今年の流行色とデザインが迷彩ルックです。ポスターも地下鉄、電車、街頭と視覚的に訴求します。イメージキャラクターもアニメプロに作らせました。どうです。可愛らしいでしょう。猫ちゃんが迷彩服を着ている名付けてニャンコロリンといいます。そのバッジからぬいぐるみ、トレカ、お菓子まで作らせています。アニメの映画も作成中です。迷彩服のTシャツも作ってみました。ジョギングシューズからバッグまで、あら

ゆるものにこのデザインを起用いたします」

頭の固い政治家たちは、怒るものもいれば、呆れるばかり。

「天皇陛下ではないのかね。何故、猫ちゃんなのだ」

ある大臣が質問した。

「いまは誰もお国のために、天皇陛下のために死ぬものはありません。これを最大のイベントにするのです。スポーツです。勝負のゲームです。そのためにお膳立てです。こうでもしなければ、いまの若者は乗ってきません」

予備兵募集と云っても誰も志願しないのに、サポーターとボランティア募集には若者たちが殺到した。募集広告も政治家がするのではなく、人気ロックバンドがテレビスポットで呼びかけた。サポーターたちにはバイト代も出るというので、この大失業時代、殺到した。三食付きで格好いい制服も支給され、即席で銃の使い方も教えた。新たなハイテク武器が用意された。照準を見て、敵を狙い撃ちするのではなく、テレビモニターを取付け、十字キーと操作ボタンをコントローラーに付けた、まるでプレステのような格好の銃器だった。モニターに映し出された敵をしとめると点数が表示され、位が上がるようになっていた。ゲーム感覚でやらせる。

イメージやムードを五感に訴えて、ワールドカップのような興奮を植え付けたら、国中、盛り上がってきた。若者たちは自衛隊のサポーターとして日本海沿岸に配備された。海岸線はまるでお祭り騒ぎになった。連日のタレント、アイドル歌手たちの慰問を受けて、フィーバーしまくっていた。

そんな中、日本海を小型船舶が無数に近づいているのがレーダーに捉えられていた。監視衛星もその数を把握していた。日本海沿岸は無防備に近い。どこからでも上陸できる。警護にあたる自衛隊と予備兵のサポーターも分散配置だから、一カ所に集中攻撃されると、どこでもすぐに突破できる。

敵も反撃をまばらにするために分散して上陸作戦を決行した。敵が射程距離に入った途端、砲撃が互いに始まった。ミサイルも飛び交う。戦闘機も飛び交う。サポーターたちはシューティングゲームをするようにコンピュータを駆使した操作画面で敵に命中させていた。

「ちよろいもんだよ。あっ、また当たった。二十点になったぞ」と、戦争の実感が湧かないでいた。そこに敵弾が炸裂した。破片がゲームをしていたサポーターたちを直撃した。ひとりはずが飛ばされ、胴体から血が噴水のように飛び出した。もうひとは腹に大きな穴が空いて、内蔵がどろどろと流れ出していた。腕をもぎ取られて泣き叫び、転がる者、全身に細かい破片が突き刺さり、血みどろになって倒れる者、即死した者はその多くがもの云わぬ肉片となって飛び散っていた。

仲間が次々に倒れた。それを冗談だと思っているか、映画の特撮と思っていた若者が、笑いながら、仲間を起こした。顔がない。脳髄がでろりと出ている。

「うわっ、本物の血だ、助けてくれー」と、腰が抜けて立てないでいた。

生きている者は謔言のように、

「ママ、助けてよう、ママー」と、泣き叫んで地べたを這い蹲っていた。無傷の者たちは、そんな残虐な死に様を目の当たりにして、悲鳴を上げて一目散に逃げ出した。

敵の部隊は日本海沿岸のあらゆる浜から上陸してきた。米軍も国連軍も後退して、迎え撃つ戦闘員はいなかった。みんな我先に逃げてしまった。ゲームもお祭りも終わった。これから、歴史に残る民族の大虐殺が始まろうとしていた。

第142話 無脳人

医師は、西瓜の中身を調べるように、連れてこられた患者の頭を叩いていた。コン、コンといひ音がする。

「一応、レントゲンを撮ってみましょう。多分、無脳症候群とは思いますがね」

レントゲン写真ができあがって、家族に見せていた。

「やはり、ほら、ものが見事に空っぽでしょう。頭蓋骨の中には何も入っていません」
ぼうっと、ただ座ったり、立ったりしている息子を見て、家族は心配して医師に訊いた。

「このまま、考えることもしないで一生終えるのでしょうか」

「大丈夫ですよ、お宅の息子さんは、何が得意でしたか」

「こうなる前はパチンコばかりしていましたが」

「それなら、息子さんは、指先で考えています」

そう云われれば、指先が何か思案しているような、迷っているような動きをしていた。

現代人が本を読まなくなり、考えることもやめたとき、脳は退化していった。使われないものは急速にその活動を停止したばかりか、酸素も栄養も吸収が鈍くなると、どんどん縮小していった。

人間の体というものは実に便利にできていて、胃を切除しても、腸がその代わりにするという。脳がなくなっても、その人がどこの機能をよく使ったかによって、その部位が代行することになる。

超肥満のBは喰うことばかり考えているので、脳が退化してからは胃でものを考えるようになっていた。人に馬鹿にされたりすると、食欲がなくなり、胃がしくしくと泣いた。機嫌のいいときはビールでもデザートでもどっさりと受け入れる。大食漢のくせにデリケートな神経を持っている。ただ、視覚、味覚が無反応なため、おいしいかどうか判断がつかないのが残念だ。そのBが友人の、やはり脳が退化して、子宮で考えるM子と交際していた。M子は淫乱で、彼氏を作っても三月と持たない。遊び好きないい加減な性生活が祟り、もう、女性器でしか考えなくなっていた。彼女の思考法則は単純だった。「するか、しないか」のどちらかだった。セックスしているときだけ、妙に哲学者になる。快樂の追求で、工夫を凝らし、その一点に神経が集中しているので、会話も子宮でするというものだから、Bとはうまく行くはずがない。喰う以外何の興味もないBはM子の相手はできなかった。胃と子宮は相性が悪いらしい。

M子はBと別れてから、自分を満たしてくれる相手を捜し回った。次に、街でばったりと逢った相手は、やはり脳が空っぽだが、肛門で考えるKだった。Kは対人恐怖症で、極端な恥ずかしがりやだった。女性を目の前にしては口も利けない。人知れず苦しんだり、悩んだりする。その悩みはKというだけで、みんな笑って真剣に相談を受けるものはいない。Kは詩人だった。鳴いて血を吐くほととぎす。言葉の糞を垂れ流す。M子にとってKは近い存在だが、正反対の性格だった。

「はっきりと云いなさい、ぐすぐすしている男は大嫌い」と、つきあう以前の問題だった。

次に図書館で出逢ったのは、いつもヘッドホンをして耳にしている音楽気違いだった。それも、一日中、音楽ばかり聴いていたせいで、頭が空どころか、スピーカーボックスの代わりにして、いい音が響いた。Gといった大学中退の男は、三半規管で考える。楽器マニアで、ギターからドラム、サクソ、バンドネオン、キーボードといろいろな演奏して楽しんでいる。M子は退屈しはじめていた。音楽の話ばかりで、人の話なんか聞いていない。いつも耳から音楽が離れないから、

彼の世界に閉じこもっているようなものだった。こんな男もつまらない。

M子はセクシーな超ミニをはいて、カフェの二階で、近づく男たちを待っていた。二階はガラス張り、下からはM子の形のいい足が組まれているのが見える。M子の理想の男性はペニスで考える人だった。どこかに、逞しいラスプーチンか道鏡のような方がいないかしら。抜群のテクニックと持続力のゼツリンがないかな。と、M子はちらりちらりと近づく男たちに誘惑の眼差しを送っていた。

すると、M子のテーブルに、背の高いがっちりとした体格のスポーツマンがやってきた。マスクも精悍でいい。

「ここ、空いてますか」「どうぞ」M子は久々にどきどきした。子宮が疼いてくる。もうすっかり準備万端、受け入れ体制はできている。

「ねえ、いまからホテルへ行きましょう」と、初対面の男をいきなり誘う。M子はもうそれよりなかった。

「馬鹿にするな」と、男は寄り添ってくるM子を足蹴にした。それでも縋り付くM子をフットワークで交わしたりしていた。

「わたしを振った男なんて初めて、ねえ、あなたは足がよく動くけどひょっしてスポーツなんか」M子が訊いた。

「サッカーをずっとやってきた。やりすぎて、頭の中は空っぽだが、君とは違う。いや、みんなとは違うんだ。おれは人間だ。唯一人間なんだ」

「わたしたちだって、欲望が思考する部位になったけど、あなただって同じじゃない」M子は憤慨して反論した。

「いや、違う。おれは人間だと、哲学者が云った。人間は考える足だと...」

第143話 コンビニ通り

いつから、こうなったのだろう。誰が目論んだだというのだろう。ぼくたちは、便利だというだけで、利用してきたのだが、誰もこんなに沢山のコンビニを作れとは云わなかった。

見ろ、このコンビニ通りの両側を、ずらりと並んだコンビニを。びっしりと、隣りもその隣りもまたその隣りの隣のまた隣りもコンビニ。向かいの隣のまたその隣りもコンビニ。かつて、普通の商店街だった。通りは、うちもうちもとコンビニにしてしまったせいで、長さ五百メートルの商店街の端から端まで、百軒のコンビニで埋まっていた。便利が不便になった。コンビニ以外

の店を探してもないからだ。

客が似たような店のどれかに入る。

「いらっしゃいませ、こんにちは」と、どこも同じ接客マニュアル。スタッフの笑顔も制服も顔まで同じに見える。置いている商品もみな同じ。その隣りに入っても、

「いらっしゃいませ、こんにちは」

「いらっしゃいませ、こんにちは」

「いらっしゃいませ、こんにちは」

「いらっしゃいませ、こんにちは」

客は怒り出した。

「一体、何の意味があるんだ。まるで、リピートじゃないか」

判で押したように、スタッフの行動も同じ。全員が外に出て、店頭を掃く。窓を拭く。その所作の一部始終がまるで訓練したように一致している。この街に入りこんだ客は自分が鏡と鏡に閉じこめられた世界へ迷いこんだ錯覚を覚える。

ぼくは、近くの町で経営コンサルタントをしている。それで、この商店街の診断を頼まれた。元々古い商店街だったが、煙草屋がコンビニにしたら、客がどっと入った。それを見ていた向かいの酒屋が真似してコンビニにした。すると、その隣の雑貨店も、そのまた隣の食品店もというふうに増殖していったものだが、異常に加熱して、コンビニ戦争の激戦地となった。結果、どこも売上低迷、四苦八苦している。それで、ぼくが指導に招聘されたというわけだ。

端の店から回ろうと、店を訪問した。

「アルバイト賃も払えないんです。電気も消して節約しています」と、オーナーは青息吐息。品物は売れないから棚に申し訳程度に並んでいる。

「こんなに同じ店が並んでいるから、このままでは共倒れになってしまいます。商品とサービスでセグメントしなければいけませんね。差別化戦略です」

「はあ？」

ピンとこない。それはそうだ。すべて本部から供給される決められた定番商品だけしか扱えない。余計なことを考えなくていい。考えないようにして、いままできたのだから、応用がまわらない。どうしていいのか判らない。

「他店で置いていない商品を取り扱い、この店の個性を打ち出すんです。いままで、お客さんから、置いていませんかと、云われてなかったものはありませんか」

オーナーは首をかしげて、

「そういえば、以前、思い詰めた人が来店して、ロープがないかと探していました。その方は自殺したらしいですが」

「それです。自殺用の首吊りロープを袋詰して売るんです。体重、年齢に応じてサイズいろいろ。これはどこでも売っていません。全くのオリジナル商品です。ついでに、自殺用品コーナーを新設しましょう。ガスボンベから睡眠薬、カッターナイフといろいろと並べます。自殺マニュアルの本も置いてください」

ぼくは隣のコンビニでも同じ質問をした。やる気のない年寄りのオーナーは、

「アルバイト任せだからなあ…。そうそう、そう云えば、好きそうな奥さんが、ズッキーニがな

いかと云ってきて、後でみんなで何に使うんだらうなって、笑ってまして。ここいらは結構、一人暮らしの女の人が多くて」

「それです。胡瓜と茄子も売りましょう。ズイキを各地から取り寄せて張り型コーナーを設けるのです。携帯マッサージ機もいろいろ出回っているのをそれように売りましょう。さりげなく並べておくのです。けっして、なになににお使いとかはショーカードに書かないように」

さらに隣のコンビニにも同じ質問を試してみた。

「さあねえ、別にないわね」オーナーの奥さんがじっと天井を見ていた。

「この店でお客様に喜ばれたことはありませんか」ぼくは云い方を替えた。

「それはあるわよ。わたしはこの町内の情報発信源ですからね、近所の奥さん方が何かと噂を聞きに来る。買い物帰りはここで井戸端会議よ」

「それです。奥さんの情報を売りましょう。何もコンビニはモノだけ売る場ではないのです。情報も売ります。簡単な装置で、百円玉を入れれば、受話器から町内の噂が三分間聞こえるように、奥さんがテープ録音するだけでいいのです。これはみんな気になるから受けますよ」

またさらに隣のコンビニへ行った。

「はてさて、裏の婆さんが、昨日だが、蛭がないかと云ってきたなあ」

「ヒルってなんですか」

「ほら、川にいるやつで、昔から肩懲りに利くといつてな、悪い血を吸ってもらうんだ」

「それです。全国広しといえども、蛭を売っているコンビニなんかありません。なんでも話題性です。さっそく蛭を捕ってきましょう。農家の人に頼んで、一匹いくらで仕入れしてもいい。あなた自身が、顔や手に蛭をぶらさげて、いらっしゃいませとやるのです。実演販売が一番です」

次のコンビニもやる気がない。すっかり意気消沈している。

「ただ、待ちの商売はダメですよ。積極的にうって出ないと戦い勝てないですよ。ここはどんな客層が多いんですか」

「そうさな、裏がアパートばかりだから、学生さんが一番利用しているかなあ」

「それです。とびきり可愛い女子高生をバイトで使いなさい。多少、時給を上げてもいい。それで、店主は奥にいないで、外で立ちんぼするのです」

「客引きですかい」「そうです。お兄さん、いい子がいますよって、通行人を呼び込むんです」

暫くして、あまりあほらしい品揃えにテレビ局が取材にきたりしたが、不気味すぎると客はいよいよ近づかない。コンビニは続々と閉鎖していった。

ぼくは、商工会議所に報告書を書いていた。

一便利も氾濫すれば便利でなくなる。自由経済の末路は相打ちである。と。

第144話 道路がない

車が増えすぎた。東京都区内の道路という道路はすべて車で埋まった。国道も、首都高速も、住宅街も、小路でさえ、ぎっしりと車が渋滞して立ち往生していた。交差点の中まで入り組んで

、隙間もないほど車だらけ。右折、左折直進関係がない。どの道路も車が繋がっているから、行きも戻りもできない。そうやって最初のうちは、クラクションを鳴らしたりしてみんな苛々していたが、微塵だに動かないので、そのうち故障する車、ガス欠になる車が続出。レッカー車も入れない。動かない車を脇へ寄せるスペースもない。道路は車でびっしりだ。

ひとり、ふたりと諦めて車を乗り捨ててゆく。歩いた方が早い。中には、もう一週間、じっと待っている者もいたが、殆どが車を放置した。車で生活する若い人も多い。車の中で若妻が待っている。「あなた、お帰りなさい」と、バッテリーで御飯も炊いていた。

都民はマイカーをやめて、地下鉄・電車に切り替えた。バスもダメ。救急車も消防自動車もダメなので、すべてヘリコプターになった。パトカーの代わりに自転車かゼロハンのバイク。宅配便も困った。リヤカーを引っ張って配達だ。タクシーは悉く廃業したが、生き残った会社は江戸時代に逆戻り、籠を用意した。

「新宿東口まで」「ようがす、旦那。えいほ、えいほ…」と、半纏を着たいなせな若衆が籠を担ぐ。郵便配達も飛脚になった。走ったほうが早い。すでに自動車は人間の乗り物ではなくなっていた。

政府は、この事態を打開しようと、あれこれ模索したが、解消策は出てこない。抜本的に交通体系やシステムをがらりと変えなければならないところまで車社会は追い込まれていったのだ。シンクタンクから委員会まで、関係団体が新交通システムを五年で導入する計画を早急に策定し、実行に移すことにした。このままでは、物価は高騰し、流通が滞り、経済的打撃はさらに拍車をかけることになる。

新しいシステムとは、コンピュータとソーラーシステムとモノレールのリニアモーターカーを利用した二十一世紀の乗り物だ。テストはすでにこの二十年でデータがあるから、実用化は早かった。考えてみれば、自動車というものが、この世に出現してから一世紀余り、大きな進歩もなく来ていること自体不思議だった。ダイムラーも昔から人間がハンドルを握り、ガソリンでエンジンを動かし、タイヤが回る。百年、それをやってきた。その間、プロペラ機はジェット機になり、ロケットになり、宇宙まで飛び立つというのに、車だけは旧態依然とした乗り物だった。人間の意志によるところが大きいので危ない乗り物には違いない。

各地で工事が始まった。自動車が売れないので、メーカーは倒産間近まで追い込まれていたが、その救済策として、メーカー各社にその工事を依頼した。道路を造るより意外とコストがかからない。広い道路はいらない。狭いスペースでいい。信号も交差点も歩道橋もいらない。各家庭から、小路へ、小路から県道へ、県道から国道へ、そして高速道路へと、一本の高架レールで全家庭と繋いでしまうというものだ。乗り物はソーラーだから電気も石油もいらないクリーンなエネルギー。家族構成に応じて、各家庭一台乃至二台は必要に応じて購入しなければならないが、いまの車よりは安価だ。独身者は二人乗りから、家族の多い家庭は八人乗りまで、業務用は荷台付からトラックサイズまでといろいろ型がある。いずれも横巾は狭く長いのが特徴だ。免許はいらない。すべての車両が、中央のコンピュータに連結していて、制御されている。体の不自由なお年寄りが車椅子のまま乗り込むと、マイクで行き先を云うだけ。コンピュータが認識して、寝ていても目的地まで連れて行ってくれる。渋滞はない、交通事故もない、公害もない、高速だけ有

料だが、各家庭の車に対する費用も、道路を掘ったり埋めたりしている社会的費用もかなり少なくて済む。交通機動隊も暴走族も出る幕がない。人間の裁量で運転できない、すべて中央の自動制御システムだ。交通量の多いところは二車線、三車線となるが、従来の道路の中より狭くて済むから、かなりの車の量でもスムーズに流れる。割り込みも、譲り合いもいらない、人間のエゴは反映されないようになっている。

タクシーもバスもある。運転手はいない。救急車は家の前まで従来の半分の時間で到着する。高架の下は公園になっていて、子供たちが遊んでいる。車の騒音もなくなったので、街は驚くほど静かだった。人々の渋滞による苛々もなくなり、ストレスも減った。日本のような過密な国こそもっと早く取り組むべきだった。

十年ぶりで、日本に帰ってきた、移住者が、愛車を船に乗せて横浜の港に着いた。船のデッキから暫くぶりの日本を見ていて、おかしいと思った。やたら電線のようにレールのようなものが四方八方に張り巡らされている。船から車も降ろされる。自慢のランボルギーニだ。みんなに見せびらかしてやりたいと、彼はエンジンをふかした。ところがである。

「何なのだ、道路がない」

第145話 サングラスの男

男が優しくなった。というより気弱になった。強いだけが男ではないが、優しいだけでも男でない。

加納誠志郎は、名前負けするぐらい意気地なしだった。なんとか強くなりたいと、常日頃から思っていたが、か弱い性格は直らない。殊に彼女ができてからは、いざというときに守ってやれなかったらどうしようと不安がいつも先に立つ。

一度、合気道の道場に行ったが、最初から関節技で締め上げられ、恐れをなして行かなくなった。武道はどれも痛そうだった。ボディビルならいいかもしれないと、ジムに筋トレに通った。上半身はみるみる筋肉がついて、マッチョな体つきにはなったが、見せかけだけで、凄まじるとすぐ泣く。その弱さは彼女にだけは知られたくない。

誠志郎は、自分の弱さを克服する方法を聞くために、ふらりと占いの館に入った。若い男女が並んでいる。魔の巣窟のように薄暗く、不気味だった。誰も並んでいない、不人気な占いのドアを叩いた。中は赤い電灯が点いていて、現像の暗室のようであった。老婆がひとり客を待っていた。日本人ではないようだ。かたことの日本語が、色の浅黒い老婆をよりミステリアスにしていた。

「あのう...」と、椅子に腰掛けて誠志郎が占ってもらいたいことを云おうとしたら、老婆は言葉を制して、

「判っておる。強くなりたい、ですか」と、すでに読まれていた。黙って座ればびたりと当たった。

「その通りです。ぼくは度胸もなく、喧嘩もしたことはありません。どうしたら強くなれるかって」

老婆は机の中を掻き回していたが、古いサングラスを取り出した。縁が錆びている。いつ頃のものなのだろうか。

「このサングラスをあげましょう。正真正銘、ハリマオが付けていたサングラスですぞ」

「ハリマオって誰ですか」

「戦時中にマレーの虎として恐れられていた男じゃ。このサングラスには不思議な力が宿っておる。掛けると人が変わるくらい強くなる」

誠志郎は怪しい老婆から見料だけ支払って、サングラスを手に入れた。ドアを閉めて出てくると、ビルの管理人に呼び止められた。

「あんたは、納戸に入って何をしていたんだ」

「ええ？ 納戸って...」誠志郎が振り向くと、いましがた出てきたドアには清掃用具というプレートが貼ってある。「嘘だろう」と、もう一度ドアを開けると、そこは人ひとり入れるような、狭い物置で、モップやバケツが置いてあった。

「いままで、ここにおばあさんがいて...」と、ポケットに手を入れると確かにサングラスがある。管理人はにやにや笑いながら、誠志郎から離れていった。間違いと思ったらしい。

誠志郎は不動産会社の営業をやっていた。管理しているマンションにヤクザが入りこんで、住民とのトラブルが発生していた。丁重にお引き取り願うよう、上司とでかけることになった。誠志郎の一番嫌な仕事だった。筋肉だけでも相手を威圧するだろうと、連れていったのだが、見かけ倒しとはいまさら云えない。まして、同じ職場の彼女の手前もある。

「なんだとお、契約書かなんか知らねえがよ、出てゆけとはなんだ。人にもものを頼むときは手ぶらでくるんかい。落とし前はどうかけてくれるんだ」と、ヤクザは凄んだ。誠志郎はすでに血の気なく、がたがた震えている。

「さあ、君も土下座するんだ」と、上司に云われて、おしっこをちびりそうなのを我慢して、部長の隣りで土下座した。

「おい、そこの若い、そんな見えすいた演技で満足するとでも思っているのか」

ヤクザは迫力ある野太い声で怒鳴った。

「ゆ、許してください。ぼ、ぼくは上司の命令で、た、ただついてきただけで...」誠志郎の髪に火のついた煙草の灰をわざと零した。誠志郎はサングラスを思い出した。顔を伏せながら、そとサングラスをかけてみた。すると、どうしたことか、急に気が大きくなって、世の中が小さく思えてきたではないか。誠志郎はすくりと立ち上がっていた。

「お兄さんよ、頭に灰が零れたから、取ってくれねえか」声も誠志郎の声ではないほど、凄みがあつた。

「なんだ、なんだ偉そうに」と、ヤクザが胸ぐらを掴んだから、その手を軽く掴み返したつもりなのに、相手は悲鳴を上げた。「痛え、なんて馬鹿力なんだ」

「おい、今度は耳を引きちぎられたいか、灰を取れと云っているのだ。聞こえているのか」

その誠志郎の迫力にヤクザはひるんだ。冷静さといい、態度といい、これは大物に違いない。ヤクザは急にぺこぺこし出して、灰を取ると、ついで背広の埃まで取ってやると、

「今日中にここは引き払いますから、へい」と、気持ち悪いくらいの低姿勢。ヤクザは力には滅法弱い。

その武勇伝は社内中に広まった。

「あの気の弱そうな加納さんが、実はものすごく強いことを隠していたらしいの。ああ、あんな人に抱かれてみたいわ」誠志郎を見る女子社員たちの視線が熱くなっていた。誠志郎は一挙に営業から社長室付の秘書に昇格した。

チンピラがサングラスをするのは、現実にはシャをかけるから少し距離を置いて見えるため、気持ちが大きくなるのではないだろうか。誠志郎はそれに自己暗示がついた。いつも虐げられている気持ちが逆に出る。

電車の中で両足をでんと通路に投げ出して、隣の若い女にちょっかいを出している街のダニを、乗客は見ても見ぬ振りをしていた。関わりになりたくないのと、とぼっちりが怖い。誠志郎も、どきどきしていたが、サングラスを掛けると、男の前に進んでいった。わざと足を踏みつけた。男は足を押さえて痛みを堪えていた。

「何をしやがる、いててて」

「ああ、失礼、こんなところに足があるとは思わなかった」

「ちくしょう、てめえ、殺されてえのか」と、殴りかかってきた腕をひょいと掴むと合気道で少し習った三教を掛けた。「ぎゃあー」と、男は苦しさに油汗まで流していた。

「殺されるのはどっちだろうな、足と手を折ってやろうかい」

男は電車が駅に着いたので、手を押さえ、足を引きずりながら、逃げ出した。車内から拍手が沸き起こった。

何日かして、誠志郎が彼女とデートしているときだった。夜の公園で、アベックばかり狙う不良グループに囲まれた。ボスはプロレスラーのようにがたいが大きい。あとはいかれている連中で、手にヌンチャクやナイフをちらつかせていた。彼女は誠志郎の後ろに隠れた。

「何よ、この人は強いんだから、いまにあんたたちは、全員ボコボコにされるわよ」と、彼女はいきまいていた。

「ほう、それは面白れえ、見たいもんだ」連中はアベックは襲われても届け出を出さないのが多いことに目をつけて、金目当てのアベック狩をしていた。誠志郎はサングラスをかけた。

「さあ、坊やたち、怪我したくなかったら、いまのうちに立ち去りな」誠志郎は余裕持って静かに云った。

「野郎」と、誠志郎に掴みかかる。はずみでサングラスが飛んだ。誠志郎は焦った。「サングラス、サングラス」と、地べたを這うように手探りで探していると、

「あんたの探しているのは、ひょっして、これかい」と、ボスが片足を少し上げて見せた。靴の下に粉々に割れたサングラスがあった。

「ああ、ぼくのサングラスが...」誠志郎は狼狽えていた。

「それで、どうやって怪我させるんだ？」不良グループは指をぽきぽき鳴らしながら誠志郎たちに迫ってきた。

第146話 反 転

ある日黒い太陽が昇った。空もどす黒く輝いている。夜ではない、朝だということが判る。黒い太陽はそれなりに眩しかった。雲は真っ黒で、人々は何事起きたのかと、窓という窓から顔を出していた。いつもなら、朝の出勤時間で車の音がひっきりなしにする団地も、この朝はひっそりとしていた。

テレビでは臨時ニュースを流していた。

「これは、錯覚や目の病気ではありません。自分だけがおかしくなったと思わないでください。みなさんをお願いいたします。警察や病院には電話をかけないでください。朝から電話回線がパンクしています。繋がりにくくなっておりますので、電話のご使用は控えるようにしてください。繰り返し、臨時ニュースをお知らせいたします。本日、未明より、全世界で、原因不明の自然現象が起きました。すべての色彩、明暗が反転するという異常事態が発生いたしました。混乱を防ぐために、学校は休校となりました。各職場でもできるだけ休業にするよう、政府として指導しております。お車で外出の方もできるだけ控えるようにしてください。信号は赤青が逆に見えます。ネガフィルムのように、すべてが逆の色彩で見えますのでご注意ください...」

道路では恐る恐る車が走っている。信号が逆に見えるから、スムーズに流れるようで流れない。逆に覚えて止まる車と、発進する車と、目の不自由な人は、音の出る信号を頼りに横断歩道を渡るから、たちまち交差点は入り乱れて混乱を起こした。警官が出動して、交通整理をしてなんとか交通麻痺は回避したものの、すべての交差点に警官が四六時中張り付く訳にもゆかない。

女性たちは鏡を見て悲鳴を上げた。朝、目覚めたら自分の顔が黒く、髪は真っ白になっているではないか。着ている服もすべて黒っぽく、おかしな色柄ばかりで、とても恥ずかしくて外へ出られない。歯磨きも真っ黒、歯もお歯黒を付けたように真っ黒。冷蔵庫の中から牛乳を取り出すと、それも黒い不気味な液体。ケチャップは青、マヨネーズはモスグリーン、新聞は黒い紙に白抜きの文字、テレビを点けると、アナウンサーもタレントもすべて黒人の年寄りに見える。

ある女性は、靴墨を顔に塗った。と、なんとか白い、見られる顔になってきた。髪は逆に白く染めた。手足も黒く塗って、白く見せた。それで、恋人に逢いに行った。待ち合わせ場所にいた彼を探すのも大変だった。みんな一様に黒くてよく判らない。

「あのう、わたしですが」と、よく似た格好の男に声をかける。彼は腹を抱えて笑った。

「何、君の瞳、白目が黒く、瞳が白くて気持ち悪いぞ」

「それは、あなたも同じでしょ。何よ、その青い舌は」

人々は一週間ぐらいは混乱していたが、次第に慣れてくるとみんなそんなものだと思うようになり、笑う者もいなくなった。ただ、これは商機だと、ひと儲けしてやろうと、美白クリームや、白髪染めを売る者が出てくる。本当は逆なのだが、洋服屋も品揃えをがらりと変えなければ、あまりにも売場が暗くて地味だ。食料品も売れないので、人工着色料で色を整えた。牛乳にイカ墨を入れた。蒲鉾も黒くして白く見せた。砂糖も黒砂糖がよく売れた。コーヒーは白くして黒く

見せる。新聞や雑誌は読みにくいので、墨ベタに抜き文字にしなければならなかった。これはインク代がものすごくかかる。製紙会社は黒い紙を製造しなければならなかった。トイレトペーパーにしても、書籍用紙にしても黒くして、白く見せる。印刷のインクは逆に白いインクを使う。そうしてコストを抑えた。テレビ局も画面の背景を黒くしなければ、暗くて見えにくい。ありとあらゆるところで逆になった。これはギャグではすまされない。

南アフリカ共和国で異変が起こった。黒人と白人が逆転して、白人が黒人に差別されていた。積年の恨みをいまこそはらそうと、アバウトヘイトも逆転していた。立場が変われば人間はみな同じ。

黒くて不吉とされていた嫌われもののカラスも、白く見えるので、白鳩のように可愛がられた。餌のポップコーンを与える者も出てきた。前はカラスに餌をやる者などいなかった。

醜いと云われたものが美しく見え、美しいと思われていたものが醜くなっていた。世の中すべてが逆転していた。色とはこの世のすべてを支配している基準であったと認識させられた。われわれはそれに迷い、うわべだけの色に惑わされる。実にくだらない社会だったのだ。

ところが、ある日、真っ赤な太陽が上がってきた。空は以前のように青く、雲は白い。反転が元に戻ったのだ。

あちこちで、若い女性の悲鳴が聞こえた。鏡の前に顔と歯が真っ黒で、目にカラーコンタクトを嵌めて、瞳の白い薄気味悪い女が立っていたのだから。

第147話 夢みる年頃

経営セミナーがホテルで開かれていた。会員獲得のノルマがあるというので、友人に無理矢理誘われて、わたしはあまり気が進まないが顔を出すことにした。SKUという中小企業の経営者の全国組織が運営していた。ホテルは三十代から四十代の若手経営者でむんむんしていた。二代目もいるだろう、起業家もいるだろう、いまはやりのベンチャービジネスか、名刺交換にあくせくしていて、わたしも貰ったが、横文字の職種で何をやっているのか皆目見当がつかない。

わたしの仕事は名刺を配るほどのこともない。自費出版を細々とやっているが、文学関係専門だから、ここに集まっている人種とは何か疎遠だ。とても文学とは縁のなさそうな生臭い連中のような気がした。みんなすぱっとしたダブルの背広を着て、ノートパソコンを携えていた。わたしはといえば、ジーンズにトレーナーといったラフな格好でひとり浮いている。広間の会場に椅子が並べられ、壇上に講師の経営コンサルタントの有名な先生と、会の偉いさんたちがずらりと座っている。演題は、「ピンチはチャンスだ」。会場はすでに熱気が溢れている。

いよいよ講演が始まる。大きな拍手が沸き起こる。

「みなさんの中で、これからお話しすることで、新たな飛躍へと発展したくないと思う方は即刻退場していただきたい」と、講師は最初に威圧高になって上から来る。

「ここでは、マイナスの話しは厳禁です。プラス、前進よりありません。ここにお集まりのひとりひとりが、時代に関係なく必ずや売上増進、利益率向上するものと信じて疑いません」

わたしは帰ろうとした。講師の熱弁がかつてのヒトラーのように、何か演技くさい。講師の目も、会場の会員の目もどこか狂信的でのめりこんでいる。周囲が見えていない。きょろきょろと周りの顔を窺っているのはわたしぐらいのものだ。みんなは言葉に引き込まれ、集団催眠に罹ったように吸い込まれている。

話しは、桶狭間の戦いで如何に小が大を破ったかとか、歴史から戦略を説く。わたしは欠伸を堪えて、つい居眠りをしてしまう。多くはパソコンを開いて、メモしていたり、録音していたりするの。

「みなさん、一番上等の背広を着なさい。最高級の車に乗りなさい。貧乏性、苦勞性はいけません。形から入りなさい。そのためには、SKUに出資することです。多くを出したものが、より多くを還元されるのです。世界は確かに閉塞していますが、ここにいるみなさんだけは違います。儲かって儲かって仕方なくなります。さあ、この中からどれだけの長者が生まれ、来年の番付に載るでしょうか」

危ない、とわたしは感じた。これは新興宗教と同じ手口だ。熱くさせて、投資という名目で金を集める。異様な世界だった。その暗示にかかった単細胞の経営者たちが大きな拍手をする。儲けるという字は信者と書く。まさに狂信集団だった。

講演のあと、逃げようとする、友人に捕まってしまい、懇親会まで出席させられた。こんな連中と話しをする気にもなれない。みんな大風呂敷の誇大妄想。こんな不況の世の中にまだ自分だけは成長すると信じて疑わない。会社は火の車だったりして。

友人はわたしを入会させる魂胆らしかった。幹部に紹介すると、講師にも面通しさせられた。アメリカ式に愛想よく握手を求めてくる。馴れ馴れしい。

「ほお、出版社ですか。どうですか、年商十億、百億の会社にすぐさせてあげますよ」と来た。あまりにも馬鹿げている。

「いいえ、結構です。いまのままで満足していますから」と、わたしは皮肉っぽく云った。幹部や友人は偉い人を前にはらはらしている。

「でも、いま以上の生活と地位を望んでいるでしょう。内部留保がたんまりあって余裕のある経営ですよ」

「そんなに金には執着していませんね。収入が沢山あったところで、ラーメンが二杯食べられるわけでもないでしょう」

すると、講師の先生は顔を真っ赤にした。ここに異端がいる。誰だ、こんな異教徒をここに連れてきたのはと云った顔をしていた。

「いや、あなたは自分をごまかしている。そんな綺麗ごとで世の中渡れないでしょう。欲望があって経済は動いているものです」講師は反論してきた。みんな止めに入る。わたしも熱くなってきた。

「そうでしょうかね。幸福にはそれぞれの器の大きさのようなものがあって、必ずしも大きなものを望んでいません。それぞれが与えられた器で満足して生活しているんじゃないですか。それを無理にリスクを背負い、ストレスと引き替えに確率の低い勝ち戦の名誉を手に入れたところで、それがなんなのですか。あなたたちのようないい加減なカリスマがいるから、犠牲者が増えるん

です。この時代、縮小して生き延びて何が悪いんです。潰れないようみんな必死でしょう。守勢は難しというときに、人を騙すような説法して、金を巻き上げるやり方は実に卑劣だ」わたしの声は会場いっぱい響いていた。みんなしーんとなって聞いていた。周りに人だかりもできていた。講師先生はわなわなと震えている。

「まあ、いい背広を着て、いい車に乗って、せいぜいいい格好していたらいい。それより、社員にボーナスは払いましたか、借金は減りましたか。みんなばかげた妄信ではないですか。幻想です。日本は、世界はこの先、よくなりません。みんな潰れるまで目が覚めないんです。アナクロニズムも甚だしい。もっと、現実をみつめることです。戦時中と同じで、敵前逃亡、後退は卑怯なりというのは、軍国精神の亡霊ではないのですか。マイナス思考がいけませんか。それとも、全員、突撃して玉砕ですか。経営とは細々とながらも続けることです。花火ではないんです。目を覚まさない」

わたしは日頃の鬱憤をここで吐き出した。そして、会場をひとり出でいった。ドアの向こう側からはなんの応答もない。

第148話 文学なにするものぞ

駅前の食堂に昔の同人仲間が集まった。小説家志望の溝江、彼は出版をなりわいにしていたが、自分のロマンを仕事にまで求めて、多額の借金を抱えていたが、現実から目を背けている。山代、彼は間屋だが、ヤクザのような口ぶりで無頼派を気取る。横田、役所にいる、反体勢派でうだつがあがらないが、ストレスの捌け口を文学に求める。甲山女史、奥様だが、詩人でつっぱり、男を足蹴にする女傑である。古河、無職、ドラマを書いているが、次点でいつも泣き、賞ならず。そして、わたしは古本屋で、文学批判を密かに抱いている。

六人がたまに集まって呑むだけなのだが、十年以上前からこうした寄り合いを続けていた。北のさいはての駅から、このうちの誰が東京へ行くのか。だが、五十の齢を過ぎても誰ひとりとして新人賞をとることもなく、相変わらずこのひなびた町にいて、町から出られないでいた。駅前食堂は旅人が汽車の時間待ち合わせのために利用している。大きな旅行鞆を手に暖簾を潜り、ビールと鍋をやっていたりする。そんな旅人を羨望の眼差しで見ている。いつか賞を得たら、この町を出てやる。みんな、そんな思いで自分の才能を信じて挫折を知らない。

「八十枚書いたよ。文学界に出した」「メ切はいつだ」「おれも、新聞社のシナリオ大賞に出した。七十枚、一ヶ月で書いた」また、青臭い話が始まる。わたしはそろそろこの会に辟易していた頃だ。

「北村はどこかへ出したのか」と、山代がわたしに訊いた。

「いやあ、もう辞めたんだ。新人賞という年でもないだろう」

「そんなことないわ、この前のミステリー大賞は七十の老人が受賞したのよ」と、甲山女史。「賞金は一千万なものな」みんな溜息をつく。ここにいる全員が投稿マニアで新人賞を狙っていた。わたしも十年前までは出していたが、古本屋としてやってゆくに連れ、何か小説を書いたり、

本を自費出版することに虚しさを感じずようになっていた。月に売れない本をどれほど処分してきたか。その中には知り合いの出した本もある。自費出版の創作ものは売れない。店頭で二束三文のゾッキ本で出しても売れない。ついにはゴミになってしまう運命にあった。それを毎日見ていると、うんざりしてくる。いまは小説が一番売れない。過ぎてしまえば終わりのものがどんなに多いことか。筆で飯を喰っている作家という名のついた人の本ですらそうだ。まして、地方のアマチュアや同人誌なんか誰が読むか。

どこそこは百万だ、五十万だと、賞金の話しをするときもわたしは嫌な気分になった。酒が不味くなるばかりか、酔えないでいた。

「メ切ぎりぎり八十枚出したよ」と、何十回も落選して、二次予選も通過したことがないのに、さも、自分はこれだけの小説を書き上げた、満足げに云う会話も耳を塞ぎたくなる。

溝江は、書齋を二間持っている。天井までびっしりと積まれた本に囲まれて、自分の原稿用紙まで印刷させて、太い万年筆で両袖の机に向かって書いている。丸い縁のメガネにしても文豪気取りだった。それほどの本を読んでいるわりに、書くものは身辺小説で、私小説だった。ミーハーの書くやおい小説で、何の感動も与えない。評論家として書いてゆけばいいやつだった。創作向きではない。

古河も失業中だが、奥さんに働かせて、せっせと自宅に閉じこもって書いているのはいい。家のローンはどうするんだ。子供たちもまだ小さい。一家の主が仕事もしないで、何が小説だ。と、小言を云いたい、じっと聞いているだけだった。みんな現実をも虚構の世界にしているものか、そこに生活感がない。生活がないから喜怒哀楽がない。みんな嘘になる。

「おれの短編読んでくれたか」と、横田がわたしに訊いてくる。

「ちょっと、言葉使いが難しいかな」とだけ評を延べたが、云いたいことは山とあった。

「わたしの詩はどうだった」と、甲山女史も訊いてくる。みんな同じだった。自分の作品は読んだかと気になるくせに、人の作品は読もうともしない。人のことはどうでもいいのだ。自己顕示欲、自己愛の塊のような連中。そんなやつらの作品なんかこっちが払い下げだ。

現代詩はすでに一般読者のものではなくなった。小説もそうなりつつある。現代音楽や、現代のアブストラクトの絵画が、大衆から乖離したのは、それを理解するには、かなりの年季で読解力を研鑽しなければ、面白味が判らないところまで高まっているからだ。だから、詩でも絵画でも音楽でも売れない。娯楽であった文学が娯楽でなくなったとき、活字離れを起こしたのだ。もつと、判りやすい言葉で、もっと気軽に普段着で読める小説や詩がないか。わたしはいつもそんなことを考えていた。

作家気取りの青臭い文学青年の会話をこうして十数年やってきた。それでも誰も賞どころか、芽も出ない。誰が先に東京の土を踏むか、と、駅前の食堂で湯豆腐をつつきながら酒を酌む。土を踏むとは、新人賞を取り、作家として中央で活躍することを意味していた。山代も横田も甲山もみんな、空を見ていた。五十過ぎて、みんなに焦りもあった。このまま地方に埋もれて終わりはないという気概だけで生きていた。

あれから十年があっという間に過ぎていた。甲山女史から久々に電話がかかってきた。駅前の食堂に集まらないかと。食堂も代替わりしたが、暖簾はそのまま残っていた。暫くみんなと逢っていなかった。わたしは相も変わらず古本屋のおやじでいたし、下手な小説を趣味の域で書いて

いた。どうせ誰も読んでくれないので、日記のつもりで自分の老後の暇潰しのために書いていた。

甲山も老けた。六十半ばを過ぎて、すっかりばあさんだ。わたしも年金を貰う年が近づいていたし、孫がすでに六人もいた。甲山はいつも同人誌で難解な詩を発表していたが、中央の賞は取っていなかった。

「暫くね、溝江君のお通夜以来かしら」

「そうだな、五年経っているのか」

「溝江君の遺稿集を本にするって話、とうとう空中分解したわね。いまは本も売れないでしょう」

「古本は一部のマニアのものになってしまった。溝江の蔵書はすべて奥さんから貰ったが、いまだ店の棚で埃をかぶっているよ」

少し遅れて山代が来た。彼も定年退職して、いまは悠々自適の生活をしていた。

「とうとう、三人になってしまったわね」甲山女史がぼつりと云った。

「横田が病死、溝江が自殺、古河は行方不明か。この町に残っているのはわしら三人だけだ」山代もすっかり白髪になっていた。

「かあさん、と呼ぶには若すぎるか」食堂はかあさんが死んで、娘が継いでいた。

「お姉さん、湯豆腐三人前とお銚子、だら潤でね」

もう、夢を見るには遅すぎる。六人の誰もが東京の土を踏めなかった。旅行客が列車の時間待ち合わせのために、一杯やるように、われわれも人生の待ち合わせのためにお銚子を傾ける。

第149話 遺失物

電車の中での落とし物、忘れ物は意外なものがあったりする。お骨を忘れた人もいたという。珍しいところでは入れ歯や、赤ちゃんというのものもある。うっかりでは済まされない。雨上がりの傘の忘れものは傘屋が何軒もできるくらいの量らしい。

大きな駅の遺失物係はちょっとした倉庫だ。そこには係が張り付いていて、落とし主が現れるのを待っている。公安委員会の隣に、係員のおばさんが座っていた。そこに勤務して二十年以上になるベテランだ。六月、七月の梅雨時になれば、傘で倉庫は溢れてしまう。他に傘を持つと、手がふさがって、別の手荷物を忘れてりするから、遺失物の棚は賑やかになる。

駅の地下コンコースに面したところに、おばさんは座っていた。駅員や清掃員が忘れ物を届けに来る。乗客も親切に届けてくる。いろんな人が、落とし物が届いていないか訪ねてくる。結構、一日中、その対応と電話だけでも忙しい。

「あのう…」と、風采の上がらないレインコートの中年男が、訪ねてきた。

「おれの名前が届いていませんか」髪がぼさぼさ、寝て起きたばかりのようだ。

「ネームプレートかなんか落とされたんですか」と、おばさんは訊ねる。

「そうじゃなくて、おれ、自分の名前、落としたんですね。それでね、自分が誰だか、判らなくなっちゃったんですね」「...?」「それでね、いつもは、大事にポケットに蔵ってあるんだけどね。ないんですよ、名前が」

「それって、自分の名前を忘れたってということですか？」

「そうじゃなくって、あんたも、持っているでしょう、名前です」

おばさんは啞然としていたが、ようやくばかばかしいことに気がついた。

「そんなもの、届いていません。そんな大事なものだったら、顔にでも書いておいてください」おばさんは、ぶすっとして横を向いた。梅雨時になればおかしな人が増える。

「すみません、忘れ物捜しているんですが...」今度は気品ある妙齢のご婦人だ。

「ふるさとを無くしてしまって、困っているのです」「何ですって?」「ですから、故郷をなくしたんです」また、変なのが来た。おばさんは、忙しいから気違いには構ってられない。できるだけ、目を合せないように、無視していた。すると、ご婦人は涙を零して、その場にうずくまってしまった。

「大丈夫ですか、ご気分でも悪いんですか?」おばさんは、慌ててご婦人の背中に手をあてた。

「ありがとうございます。もう、ずっと捜していて、疲れてしまいました。この東京に出ると、どなたか知っている人がいるのではないかと、毎日、尋ねて回っているのですが、故郷喪失してからもう五十年になりますもの。知っている人もいなくて」

おばさんは、ちゃんとした人に見えてもどこかおかしいご婦人に、どう対処していいか迷っていた。

「あなたの故里なんか、誰も知りません。どうして知るはずがありますか。戸籍謄本をご覧になれば、本籍が書いてあるじゃないですか。市役所に行ってみなさいな」

すると、ご婦人はきっと目をむいておばさんを睨んだ。

「違うんです。そんな、役場に届けるようなものではないんです。それは、わたくしが帰る場所なんです。それをなくしたんです」強い口調で云うものだから、勝手にしてくれと、おばさんは真面目に取り合わないようにした。

「全く、今日は変な人ばかり来るよ」ぶつくさと、おばさんは独り言。

また変なお兄さんがやってきた。

「ぼくは、何を忘れたか、忘れてしまったんです」また、ややっこしいのが来た。と、おばさんは知らん顔。

「すみません、ぼくが、何を忘れたか捜してくれませんか」

「さあね、あなたの胸に聞いてみたらいいでしょう」と、つらっとした顔。

「それがですね、胸の中が空っぽなんです。いつもは詰まっているんですが、それをどうやら落としたか、無くしたらしいんです。ほら、ぼくの胸に耳をつけてみてください。風の吹く音が聞こえるでしょう」

おばさんは、お兄さんの胸に耳をつけた。確かに中はとてつもなく広い空洞なのだろう。寂しくてたまらない風の音がしていた。

「ぞくっとするね。心をどこかに落としたと云いたいんだろうがね、そうした喪失感は病気なんです。ビョーキ。こんな遺失物室に届けるというモノではないんでしょう。病院に行きなさい。ビョウインへ」

おばさんは、もう何が来ても驚かないと、腹を括っていた。

「あのう、わたしの初恋、届いていませんか」「それはどんな形しているんだい」

「わたしの思い出は落ちていませんでしたか」「こんなもの落ちていましたが」と、手首を持ってくる。人間の切り落とされた生々しい手首。

「あっそう、そこに置いて、この紙にお名前とおところ書いてください」

「改札口に、こんなものが置いてありましたが、中から時計の音がするんです」

「ひょっとして」「ひょっとしたら、この箱は」ついに、おばさんは爆発した。

「みんな、ばかにしないでよ。なんだと思っているんだい。もっとまともなもの持ってこい。病人ばかりじゃないか」

おばさんは、遺失物室のドアを閉めて内鍵をかけた。

「ああ、わたしも、自分を見失いそうだ」おばさんも、自分自身を落とすのではないかと不安にかられ始めていた。

第150話 首

首が路上に転がっていた、というより横断歩道をどうやら、渡ろうとしていたらしい。目撃者はそう証言していた。警官はその首を保護して、暑に連れて行った。首は死体の一部ではなかった。首は首そのもので生きているものであった。

首は取調室の机の上に置かれていた。刑事はその生首をおどろおどろしいものとして少し離れて見ていた。髪は七三に分けられて、メガネをかけている。サラリーマン風の男だった。目だけが、きょろきょろと動いていた。

「あんたの名前は？」刑事は調書を取りだした。

「志賀内男と云います」首は喋った。

「生年月日は？」「昭和二十六年七月五日です」「住所は？」「板橋区東新町一の一の二十一」「仕事は？」「いまは、失業中です。前は空調設備の会社に勤めていました」首は目をくるくる回しながら、ぺらぺらと喋っている。

「それで、どうして胴体がないんだ」いよいよ本題に入った。

「話せば長いことなんですが、聞いてくれますか。どうして、わたしがこんな体になったのかと」「聞いてやる。お茶は飲めるのか」「はい、ストローをつけてください。下から漏れますので、わたしの下に布巾を置いてからにしてください。いろいろお世話かけます。...わたしは、エアコンの会社に勤めていたのはお話ししましたね。三十年そこに勤めました。バブルの崩壊前は景気もよく、消費税導入以前も大型家電も売れましたね。住宅も建築ラッシュで、わたしどもの納

期が間に合わないくらい、嬉しい悲鳴を上げていました。三Cという生活の三種の神器にクーラーも入っていました。それまでは、クーラーなんか金持ちでなければ設置しなかったんですね。庶民は扇風機で我慢していたんです。それが、大量生産の大量消費、技術革新とコストダウンで、低価格が実現すると、あっという間に普及したんですね。二十年くらい前に猛暑の夏がありましたが、連日三十度の真夏日が続くと、在庫切れを起こすくらい売れに売れましてねえ。われわれ社員は販売店のオーダーに応えるために休日返上で走り回りましたよ。仕事が終わって家路につくのはいつも終電でした。若かったんですね、いまじゃ、考えられないくらい働きました。会社の株は上がるわ、営業所、支店は増えるわ、売上、利益ともに記録更新留まるところを知らない快進撃でした。マンションの建築や、戦後のビルの増改築工事にも伴って、大手ゼネコンからの発注もすごいものがありました。寝食忘れて働いても見返りがあったから、やりがいがあったんですね。それが、大きく方向転換を始めたのが、十年前でした。バブルの崩壊、株の暴落、売上は創業以来初めてダウンしました。新工場の設備投資を終えたばかりだったんですが、それが後に足を引っ張ることになったんです。工場は操短を余儀なくされて、パート社員の一時帰休もありました。まだ、労働組合も健全でしたので、ユニオンショップで解雇まではゆきませんでした。労使双方にまだ幾ばくかの余裕があったんですね。それが、まさか、ここまでひどくなるとは、当時は誰も予想もしておりませんでした。わたしも労組の支部長をしていました。横浜営業所の組合員百十名の頭をしていました。ところが、連合ができて、世の中、あれよあれよというまに、弱体化してきましたでしょう。組合は若い無関心層の社員の不参加が目立ち、かつての闘士は高齢化して、組合の体質自体が変化してきていたのです。それに加えて、上部団体のだらしなさ。会社は赤字転落で、労使共に疲弊していったんですね。誰にも止めることはできませんでした。組合はあってないようなものでした。御用組合から形骸化して、専従も去り、解体寸前までゆきました。労使交渉がないから、一方的に会社側で決めてゆきます。工場の閉鎖、営業所も撤退です。資産売却が思うように捗らず、売上減による資金繰り悪化、元金棚上げしての時間稼ぎ、どこでもやっていることです。ただね、それからですよ、方舟は定員オーバーだ、助かるためにはリストラだと、人員削減を中堅からやっていったわけです。経費の三割の人件費を抑えれば、会社は助かる。役員はそのまま居残りです。役員一人分の報酬で、何人の若い社員を助けられますか。上は温存、下はトカゲのしっぽです。どこかの自動車会社がそれをやりまして、二年後には数千億円の利益を出した。それが人件費ですか。とんでもない。辞めさせられた人々は、その新聞記事をどんな思いで読んだでしょうね。働き手の社員は残して、上を切るべきなんです。戦力を切ってブレーンかどうか判らない年寄りばかりのうのうと生き残る。戦争中と同じじゃないですか。うちの会社も人員が半分に減りました。肩叩きと、子会社への出向、部門の独立と、あの手この手ですね。残った社員は以前の倍以上働かされました。業務は半分にはならないのです。休み返上、残業手当もない、賞与もない、過労で倒れるまでへとへとになって働きました。すべて、労働基準法違反です。監督署もあまりに日常化してしまい、見て見ぬ振りです。文句を云うと、嫌だったら辞めてもいい、仕事をしたい者は五万といる、と、会社側は高飛車です。いまだかつて、労働者がこれほど、劣悪な環境で酷使されたことがあったでしょうか。まるで奴隷です。それが、さも自分たちの手柄のように、利益を出す体質になったとマスコミに発

表していますが、その陰では何人自殺し、何人病死し、何人狂ったでしょうか。バタバタと社員が倒れてゆくなかで、会社側はまだ第二次リストラ策と、名簿を突きつけてきました。わたしは我慢の限界を感じました。人間以下の扱いを受けて、それでも怒らない社員にも落胆しましたが、ここまできると、社内一揆しかない、マスコミに現状を訴え、パフォーマンスのために、一人、鉢巻をして、檄を書いた立て看を本社前に立てて、ハンストを決行しました。賛同する古参の同僚がいて、共に座り込みを続けました。もう、忘れるほど歌っていなかったインターナショナルや、労働歌が涙と共に出てきました。女子社員は密かに側面援助ということで同盟罷業を続けてくれました。ハンストが終わり、会社側が監督署の調査に入られたと、でかでかと記事になりましたのは、みなさん記憶に新しいと思います。そのあとです。わたしは、役員室に張本人として呼び出され、解雇予告を手渡されたのです。その意味が呑みこめずにいると、上司は、大声でわたしを指さしながら叫びました。『おまえは首だ！』ってね。『わたしは首ですか』と、わたしは自分が首だということを知ったのです。すると、どうしたこと

第151話 古本屋

台風が近づいているようだ。雨風が激しくなってきた、昼から客は誰も来ていない。元々、古本屋というのは閑な商売だから、雨のせいにはできない。ことに喜多村のやっている桜桃書房は学術書などの専門書ばかり扱うから、客は、極少数の大学の先生や学生相手だ。マンガ本は置かないことにしていた。万引きが多くて、店もうるさくなる。喜多村は子供は嫌いだった。入口にわざわざ「高校生以下の方は入れません」と、貼り紙がしてあるほどだ。

喜多村は今年ようやく五十になった。町の変わり者としてつきあいもない。古本屋はだいたいにして偏屈者が多い。田舎町の裏通りでひっそりと商売やって十五年になる。勤めた会社が次々に倒産して、自分の蔵書で始めた古本屋だった。結婚にも失敗し、女房は子供を連れて出ていった。すべて貧乏が原因だった。いいことの何一つとしてなかった人生をヨブのように恨むこともない。子供がひとり死んでいる。金さえあったらあるいは助かっていたかもしれない。大きい町の大学病院にでも見せたらと、いまだにそれを思う。家も会社の保証人に立って差し押さえられ、建て付けの悪い、古びた貸店舗で古本屋を営みながら、その奥の六畳間に暮らしている。ひとり分だから、喰う分を稼げばよかった。なんのことはない。建物の奥には倉庫があり、それがまた以前、祭りの山車を仕舞っておくためのものだとか、かなり広くて大きいものが付随していた。喜多村はそこに青いシートをかぶせて、誰にも見られないようにあるものを隠していた。

「喜多村さん、小包です」と、郵便配達人。「何が入っているんですか、毎日来ますね、ロシアからですよ」配達人は訝しがる。「古本ですよ。ロシア文学専攻の教授から頼まれていましたね」と、喜多村は顔色も変えずに小包を後ろに置いた。「それにしても、すごい本だ。どれぐらいあるものですか」配達人は古色蒼然とした背表紙を眺めていた。「七万冊はあるだろうね。棚卸しはしたことがないんだ」

雨が上がると、客がひとり、ひょっこりと顔を出した。常連の画廊のおやじだ。

「なんか、入ったかい」「いや、なんにも。最近は何もなくて」風だけは衰えていないので、ドアががたがたと鳴っていた。喜多村は客に茶を入れる。

「この前のオイルは役に立ったかな」と、画廊は油絵に使うオイルを喜多村が譲り受けたときの話しを持ち出していた。

「あんなの何に使うんだ」「ちょっとな。それより、おまえのここでは、蔵書票は扱わないか。古沢岩美のエッチングの裸婦だが、これがなかなかいい」喜多村は話しをすり替えるために、帳場の横から額装した蔵書票を見せた。

「こんなもの、本と一緒に入るのかい。悪くない。古沢の女は格別だ」

画廊はいつもそうして油を売ってゆく。画廊が帰ったあとは、喜多村は帳場の椅子に正座して、本を読んでいた。ラジオでは暗いニュースばかり流していた。国会議員が芋蔓式に贈賄で逮捕され、官僚の汚職、株価の暴落、失業者が増え、中小企業の倒産が地方都市を不況のどん底にたたき落としていた。この町でも、スーパーが潰れ、デパートが閉鎖、商店街は軒並みシャッターを下ろしている。若い人たちは就職もなく、将来ふるさとで親と暮らすこともできない。自殺者

が急増していた。悲劇は見えないところからじわりじわりと押し上げてくる。下がその状態で喘いでいるときに、上は私腹を肥やすことばかり、政治はすっかりと腐っていた。それなのに、国民は怒ることも忘れ、自分の身の上に降りかかった火の粉を払うに忙しい。政治不信は戦後最悪となった。国政選挙の投票率は急激に下がり、アナーキーな若者が増えた。喜多村はそんな故国を悲しんでいる一人だった。

客が来た。大学の講師をしている瀬川だった。喜多村とは以前、文学仲間だったが、喜多村の方が文学の無力さと高邁さに諦観を持って離別した。専ら、電子工学の勉強をしていたが、文化系が理科系へ転向するという変わり様もあまりない。

「相変わらず、難しい本を読んでいますね」瀬川はやはり人の読む本が気になるようだ。

「なんの、瀬川さんこそ、専門分野をお持ちで、われわれ好奇心で読んでいるのと違います」

「最近、うちの学生たち、来ますか？」

「そう云えばとんとみかけません」「そうですね。学生も本を読まなくなったので、叱っていたところですよ。世の中、本を読まない人間が増えて、どうなるんでしょうね」本を買いに来る客は定年退職した老人ばかりだ。それもどんどんと減っている。深刻な死活問題だった。

「買う人が少ないのに、売る人は多いから、自然と本が店に積もります」

通路にも平積みで歩くのも困難になっていた。

「先週、この棚に大塩平八郎関連の本があったと記憶するが、ご主人、売れましたかな」喜多村はぎくりとした。

「それでしたら、わたしがいま読んでいるところです。読み終わったら出しますから」瀬川は笑った。

「さすが、古本屋の主人、いろんなものを読むんですね。電子工学と大塩平八郎か」実は、大塩関係の本は裏の六畳間の本棚にずらりと並んでいた。

「どれ、今晚は台風で荒れますな。早く帰りましょうか」瀬川先生が本を二冊買って帰った。

喜多村はぼちぼちと店じまいにかかった。レジを締め、シャッターを下ろした。夕食はひとり者だから、朝のうちにスーパーでできあいのお総菜を買ってくる。御飯だけ炊いておくのだ。小さな卓袱台にぼつんと座って、きんびらをつつく。これから、またひと仕事だから、酒は寝る前と決めている。余った御飯にお湯をかけて、佃煮でさらさらと流し込んでやる。味気のないものだった。

夕食を済ませると、喜多村は、今日、ロシアから届いた小包を開けた。中は本の格好をしているが、そのくり貫いた中から合金の何かの部品が出てくる。そいつを喜多村は点検して、裏の倉庫に持っていった。倉庫にはいろんな工具から、パソコン、資料などが並んでいる。喜多村は大きな設計図を取り出して、広げた。部品はローターの部分だった。青いシートをロープで天井まで持ち上げると、そこには、未完成の地上攻撃用のロシア製の小型ヘリコプターが、ミサイル四基を搭載して出現した。

第152話 使い走り(ぱしり)

喜多村組は、東北の田舎町を島にするいまは希少価値のあるヤクザだが、表向きの看板はかたぎを装うソフトバンクという会社組織になっていた。事務所にはパソコンがズラリと並んでいて、一見すると真面目な会社に見える。かつてのチンピラたちも丸暴のために、みかじめ料やショバ代稼ぎができなくなり、さりとて、この景気の悪いときにバッタものを泣き売するチー公もはやらない。テキ屋もさっぱりだ。三代目組長は国立一期の大学出のインテリだった。

「これからは、ヤクザも時代に乗り遅れないよう、ハイテクの方向に向かわねばならない」と、足し算、ローマ字もろくにできない組員たちに、一台ずつパソコンを与えて、ネットで稼ぐよう指示したのはいいが、キーも触れないでいた。そこで全員が、パソコン教室に通う羽目になったが、普段は華やかな教室も、ダボシャツ、腹巻の一団が入ると雰囲気が一変した。講師の先生の声も震えている。なんとか、三ヶ月で基本を覚えると、組ではプログラマーとインストラクターを外部より導入して、どうにかこうにかサーバーを立ち上げることができた。

慣れてくると、単純作業だから、指一本で怖々とキーボードを触っていたものも、ブラインドタッチでパチパチと真剣な顔でやっている。ところが、やっている仕事はスレスレから違法、児童ポルノ法に引っかかるエロサイトを海外に開いて、実はその収益は組に入ってくるという仕組みだった。エロサイトをさも、シロウトの女の子が（メル友になりませんか、わたしのホームページを見て）という、大量のメールをあちこちに配信する。それにひっかかった客をメンバーに勧誘する。ひとりは、メーリングリストに入りこみ、アドレスを蓄える作業を一日中していた。ただ、服装がすっかりヤクザだった。

組の中で一番頭の悪い安男は、それこそみんなにヤスと呼ばれていたが、使い物にならない。せいぜいお茶汲みか、使い走りである。

「おい、ヤスよ、モク買ってきな」上に云われてタバコを買いに行く。「オッス、兄貴、ピースでしたっけ」と、ヤスは自信がない。「ばかやろう、いつになったらわしの吸うタバコの銘柄覚えるんだ。ピアニッシモだ」

「おい、ヤス、電器店に行ってな、CDロムのメディアを50枚買ってきな」今度は組長からの頼まれものだ。

「オッス、シーデーラムネのウメイヤを40枚、だったかな」

「シーデーロムのメディア50枚だ。判ってるんか。メモしてやろうか。いや、字が読めないから、駄目だしな」

「大丈夫す。口の中で繰り返してゆきますから」

ヤスは、昔話にあるように、「シーデーロムのメディア50枚」と、口の中で念仏のように唱えながら、事務所を出て行った。

「大丈夫かい。ヤスにはちょっと難しいおつかいだったかなあ」組長は歎いていた。

「おっし、極道のおつかい、一時間で頼まれたもの買って帰ったら百万円てのはどうだ、賭けるか」

「それより、ちゃんと帰ってくるんだらうな、あいつ、鉄砲玉だからな、金を持たせると寄り道せんかな」みんな事務所でヤスのおつかいを心配していた。

当人のヤスは、口でごもごもと唱えながら、片道十五分を商店街の方へと歩いていった。途中、飲み屋の旦那たちが、三下のヤスにも一応挨拶はする。

「ごくろうさんです」ところが、ヤスはそれどころではない。まっすぐに前を向いてぶつぶつと歩いてゆくので、みんなとうとう頭にきたかとクルクルパーを指でする。ヤスのよく行くCDショップで懐かしいシンディ・ローパーの歌を流していた。「シンディ・ローパーのメディア50枚ください...シンディ・ローパーの...」

「ヤスさん、生きていたの、死んだと思った。もう怪我のほうは大丈夫なの」と、スナックのママがすれ違いざまに声をかけた。「寄ってゆかない、ヤスさんなら口ハで飲ませちゃうよ」ヤスはそれも無視して通りすぎる。

「死んで口ハ50枚ください...死んで口ハ...」

通りの向こうから、いつも世話になっている刑事がやってきた。と、ヤスは刑事にぶつかった。「気いつける、ヤス」ヤスはよろけたが、相手が悪い。「ご、ごめん」と、ぺこりと頭を下げた。

「何を考え事して歩いているんだ。真面目に仕事しているようだな。組長に云っておけ、そのうち遊びに行くとな」

ぶつかったショックで、ヤスはいままで考えていたことをすっかり忘れていた。

「ご、ごめん...あれ、ご、ごめん...」

やがて、電器店の前に着いていた。ヤスはパソコンコーナーに入ってゆくと、電器店の販売員にこう云った。

「ごめんください」

第153話　　デフレ

海岸でフリーマーケットが行われていた。数々の品物がずらりと並べられ、ものすごい人だかりで賑わっていた。

「そら、ロレックスとオメガの腕時計だよ。」

みんな手に取って見はするが、首をかしげてまた返す。

「一個一万円だが二個で五千元だ、どうだ」

それでも、みんな笑って買わない。

「じゃ、次は、シャネルの超高級バッグだ。新品同様、十万円とゆきたいところだが、破格の一万円、くそっ、負けた五千元だ、どうだ」みんな無関心といった顔で首を横に振る。じっとしゃがんで見ているのは子供だけだ。

「貧乏人ばかりだな。ブランド品はダメか。それでは、ソニーのバイオのノートパソコンはど

うだ。今年出たばかりだ。それがたったの二万円。おっと、反応がないか、それでは捨て値の一万円だ。持ってけ泥棒」

みんな知らん顔して通り過ぎるだけ。男は考えこんでしまった。どうして、こんなに安いのにみんな買わないんだ。

隣りでは仲間の男が、砂浜にシートを広げて、やはり、いろいろなものを並べて売っていた。

「こっちは最新型の七百万画素のデジカメだ。三倍ズームで、画面は綺麗、これがたったの五千円。嘘ではない、信じないな、本当に五千円ぽっきりだ」

こちらもまた、朝から一個も売れない。東京の原宿のフリーマーケットなら、またたくまに売れるものが、ここでは無反応。景気が悪いのか。どうなっているんだ。みんなは、心の中で焦っていた。

「よし、そうすれば、買ったばかりのケイタイはどうだ。テレビ電話ができるやつ。カラーで写メール、動画再生なんでもできるよ。これを今日だけの大特価、千円だ。千円」

珍しいものに子供たちだけが、玩具と思って触ろうとしている。

「あっちへ行け、これは玩具じゃないんだ。しっしっ。大人は本当に金がないのかな。誰も買っていない。信じられない。出しものが悪いのか。もっと実用的なものの方がいいのかもしれないな」

男はごそごと袋から、別の品々を取り出して並べ始めた。

「さあさあ、お立ち会い、今度はすごいぞ、またとない掘り出し物だ。よおく、ご覧あれ、ここに取り出したるはかのグッチのペンだ。一本が五百円。うん？ 驚かねえな。それじゃ、ルイ・ヴィトンの財布だ。婦人ものだが、男性でも洒落ている。これが投げ売り、なんと三百円だ。...これもダメか。それなら、ケイタイのストラップの限定もの、ウタダヒカルオリジナルものが、もう、百円だ。これ以上は負けられない。どうだ、どうだ、...どうなっているんだ。なんで、みんな驚かないんだ」

「偽物と思っているんじゃないのか。余り安いから疑っているんだ。偽ブランドが横行しているから、警戒しているんじゃないのか。安すぎるのもまた問題だな」

「そうか、困ったものだ。これを売らねば、飯が喰えない。明日からどうやって、暮らしてゆけばいいんだ」

ついに弱音を吐いた。フリーマーケットも新鮮味がなくなりつつある。デフレが進み、百均ショップには大抵のものが売っている時代だ。安いものには驚かなくなっている。みんなそう、思っていた。

「ここが、東京だったらなあ」

「そうだよな、ここが日本だったらなあ」

みんな、青い珊瑚礁の海を見て、嘆いていた。沖合に座礁して転覆した船の残骸が、無惨な姿を波間に見せていた。船から、物資を運んで、生き残った船員たちが、砂浜で原住民を相手に物売りをしていた。

「どだい、無理なんだな、電気もない、裸の島民にこんなもの売りつけたところで」

「第一、言葉が通じない、貨幣なんか持っていない」

「こんなもの、ここではただのガラクタなんだ」

「腹が減ったな。助けの船が来ないかな」

文明が役に立たないときもある。それに勝る手つかずの自然が眩しいばかりに広がっていた。

第154話 脱電気宣言

土田舎村は人口三千人の農業の村だった。これといった基幹産業はない。ないから、とりわけて中央にしっぽを振る必要もなく、取り残された村として、住んでいる人たちも、自分たちの村が今後よくなるとは思っていない。その村長は革新系で、自然志向の緑の党に属していた。ただ、その山奥にダムを作ることで、村議員が大手ゼネコンについて、そう必要でもないダム建設を推進しようという動きがあった。そのために部落が三地区八十六戸が立ち退きをくうという計画だ。村では先年、原子力発電所の誘致をしていた村長が再選されずに、反対派が現村長を担ぎ出したのはいい、推進派の議員、村の有力者は今度はダムときた。要するに金が動けばお零れ頂戴の組なのだ。どこの村にもいるあさましい亡者たちが暗躍していた。

長野県に続いて、この小さな村も脱ダム宣言をしたということで、マスコミが飛び付いた。連日の取材攻勢はすごいものがあつた。お祭り騒ぎに等しかった。

一躍時の人になった村長が、いじわるな記者の質問攻めに遭っていた。

「村長、原発もダメ、ダムもダメと主張しますが、その代替案はあるんですか」

「代替の必要性はありません。自然を破壊して、それで電気を売る、そこから税金を取り立てる。破壊された自然は値千金です。税金などどれほどくるでしょうか。村の財産は景観です。一度壊したら二度と戻ってはきません」

「それでは、今後、村の財源をどのように確保してゆくおつもりなんですか」

「山の木を切り売り、山を崩して土砂を売り、果ては谷を産廃業者に売り渡してゴミの山。すべて金と引き替えです。そんなに金が必要ですか。自然も人も金の亡者たちのいいようにされて、百年の大計でものごとは考えなければならぬときに、いまいまのおにぎりが欲しいから、柿の種と取り替える。おにぎりは食べたら終わりだ。明日の米もないときに」

「それは村長の個人的な口マンではないんですか。具体的な案がなにもない」

村長はむっとして記者を睨んだ。所詮話しても無駄な連中と思っていた。根底から考え方が違う。到底理解はできまいと思ったが、ここで一発ぶちかましてやれという気持ちでつい話してしまった。

「わが村はダムどころか、電気もいない村を作ろうと思います。脱電気宣言をいたします」

そのニュースはかなりの衝撃的な話題性で海外にも走った。

「村長、まだ時期尚早だと思いますよ。あんな看板おっ立てて」

腹心の助役が案じて進言した。

「すまん、つい売り言葉に買い言葉でマスコミの連中に乗せられた。こうなったら、あの計画を

実行するまでだ」

「やりますか」

村の外れの鎮守の杜に樹齢三百年の大木があったが、すでに幹は朽ちて、角材で支えていたが、危険なものとして切り倒したほうがいと樹医が診断していた。その老木は少しの力でも倒れそうだった。近くに高圧電線と変電設備があって、倒れる方角にも問題がある。それを今夜、倒しに行くというものだ。それも自然に倒れたように見せかける。しかも変電設備めがけて。

そもそも、村長の計画は極端なものとして一笑にふされていた。理解しているのは一部の側近だけだ。田舎とはいえ、すでにずっぴりと電化製品に浸かっている生活をしている。いまさら電気を止めることはできない。

「そうかなあ、切ってみれば判ることだ」と、最近になって村長は過激な発言までし出した。村長には小手先ではない遠大な計画があった。

その夜、村の長年の守り神として信仰を集めていた老木がものすごい地鳴りと共に倒れた。高圧電線を切り、変電設備をめちゃくちゃに壊した。村の電気は止まった。さあ大変だ。村長派は各家庭にろうそくを配って歩いた。

「神様の木が倒れて、電気の設備を壊された。これはダムを作ろうとした祟りだ。天罰だ」と、触れ回った。老人の多い村だから、みんな祟りを鎮めるために、神棚に祈った。当分、電気を使ってはならない、という噂も広めた。みんなそれを信じていた。次に何が起こるか判らない。あつというまに電気のない生活に村人は入った。

役場ではパソコン、電話が使えない。

「これからは手作業で帳簿につけるように。メールの代わりに手紙。何？ 手紙の書き方を忘れてしまったというのか」

停電になったから、子供たちは怖がるものと悦ぶものがいた。テレビが見られないから、居間に全員集まってきていた。子供部屋はひとりで怖い。また昔の団欒が戻ってきていた。ろうそくの灯をみつめていると不思議な世界に入ってゆくようだった。マンガ本も読めないので、お父さん、おばあちゃんが昔話を話して聞かせる。怖い話も受けた。親子の会話もそこにある。家族が固まって暮らすようになった。

「居間にみんなで蒲団持ってきて雑魚寝しようか」

「わあい、林間学校みたいだ」と、子供ははしゃぐ。

「さあ、ろうそくが勿体ないから早く寝よう」と、八時には床に就く。

「宿題があるのに」と、子供が云うから、

「朝、早く起きてやればいい」とお父さん。朝は実際、日が昇る前に起き出した。ぎりぎりまで寝ていたのが嘘のように、たっぴりと朝の爽やかな時間が使える。電気のない時代はそうした生活パターンだった。動物と同じで、暗くなると寝て、夜明けと共に活動し出す。人間の体にはそれが一番いいリズムとなっている。

自動販売機が使えないので、昔ながらの氷屋さんがリヤカーを引いてやってくる。商店もレジが使えないから井。冷蔵しなければならぬものは売れない。いつも新鮮なその日のものを売る。買って行く人もその日その日にできたてのものを食べてしまう。電子レンジも電気釜も使えないから、各家庭で外に出て、七輪で焼いて、竈を用意して釜で飯を炊く。いい臭いが夕方になれ

ば漂っていた。

家々ではランプの生活が始まった。ランプのホヤを研ぐ仕事は子供たちにやらせる。ススがつくから毎日だ。人々の生活は明治時代に戻っていた。初めは不満や苦情が役場に寄せられたが、慣れてしまえば快適だ。電気なんかなければなくてもいい。

村長は自分の思うような村になってきたところで、マスコミに村をPRする手紙をばらまいた。

「電気のない、ランプの村においでなせえ。民宿あり。明治時代そのままの生活体験」と、ぶちまけた。何も資源のなかった村が、全国の脚光を浴びるようになった。連日、観光客が訪れる。村は観光で蘇った。村人の着る服まで昔ながらのものにし、村をわざとレトロな雰囲気ですりつけた。

「田舎を都会的にする必要はない、田舎は田舎だ。日本のふるさとだ。それを売りにする。電気なんかくそくらえ」

村の名物が続々できた。釜で炊くお焦げの御飯も、お土産のランプも、囲炉裏で焼く味噌餅も、昔話を聞かせる婆様も、村を走る馬車も、すべて昔のまま、田舎のままが受けている。

村長は役場で団扇で扇ぎながらついボヤいてしまった。

「それにしても暑いなあ、エアコンがあればなあ」

「村長」と、助役は窘める。舗装もやめて土の道路に丸いポスト。行灯に灯を入れる点灯夫も名物になった。車は乗り入れ禁止にした。

「村長、記念写真を撮りたいと団体さんです」

「そうか、今日はこれで十二回目だわい」

忙しそうに村長、カイゼル髭を鏡で直して役場の前に出ていった。

第155話 宙（そら）の指

ハワイ。マウナ・ケア天文台。

その朝、大変なことが天文台の研究チームの間で沸き起こっていた。百億光年先も感知する赤外線検出器に、とんでもないものが写し出されていたからだった。

「所長、これなんですがね、ものすごいスピードで地球に接近しているものを捉えたんですが、あまりにも巨大で、しかも形が異常なんです」

教授が青ざめて報告していた。どうみてもそれは惑星でも彗星でもない、かなり歪な格好をしていた。

「距離は？」

「冥王星の軌道を通過しました。スピードは三十万キロに達しています」

「なんだと、光速じゃないか。そんな速い天体はありえない」

「このままでは直に地球に衝突します」

「大きさはどれぐらいなんだ」

「それが、測定不能なのです。先端部分だけでも、四十万キロはあります。その奥行きは二百五十万キロ。さらにその先に続く説明のしようがない平板な形のものがあり、さらにその奥に伸びるものへと続いている、なんともグロテスクで巨大なものです」

「所長、先端部分と同じ形をしたものが二つになったり三つになったりしています。全部で五つあるようです」

「信じられん。直径四十万キロの円筒形のものが五個だって。木星より大きなものが五つもこっちへ向かっているなんて」

「解析した写真をコンピュータで3Dの画像にしてみました」

助手がその物体をモニターに映し出したとき、全員、沈黙した。それは明らかに人間の巨大な指であった。

「オーマイゴッド、これは最後の審判に違いない」と、教授は気が触れたように頭を抱えて床にひれ伏した。

「みんな、冷静に、われわれは科学者だ。科学的に解明できないことはない。神の領域はそれはまた別の問題だ」

所長はそう云いながら、タバコを逆にくわえていたし、コーヒーカップを持つ手が震えていた。

その報告は速やかにホワイトハウスに流された。全世界の天文台から続々と報告が入っていた。どこもパニック状態になっていた。世界中の学者たちが集まって、国連で協議していた。みんな頭を抱えていた。どう説明したところで、明らかに人の指なのだ。それが、次第に一等星のように夜空に輝いて見えるようになった。家庭の天体望遠鏡でもくっきりと形が判明するようになると、もう、秘密にしておくことはできなかった。連日、マスコミや文部科学省に問い合わせの電話が殺到した。だんだんと大きくなって、月ぐらいの大きさに見えてくると、日中でも五本の指の格好が判る。指紋まで見えているからリアルだった。

人々は空を仰いで戦いた。二千余年に人類が滅亡するといった予言の書が巷では飛ぶように売れた。街角では、宗教家が、マイクを手に、叫んでいた。

「最後の審判のときが近づきました。いまこそ、悔い改めなさい。懺悔しなさい。清められ、生まれ変わった者だけが、神の国へ入れるので一す」

いままでさんざん威張っていた政治家も、資産家も自分一人の小ささと非力さに、小動物のように怯えていた。金も武力も地位も何も関係がない。巨大な物体の前には、どんな理屈も教義も通らない。すべての哲学も科学も、人間の存在そのものが無力なものとして、ただ、次に何がくるか断罪を待つだけの死刑囚の心境で、空をみつめるしかなかった。

ある者たちはエピュキュリアンになり、残された短い時間に快楽を求め、ある者たちは、暴徒と化して、破壊、陵辱、略奪の限りを尽くしていた。また、ある者たちは、地中深く掘った、洞窟やトンネルの中に逃げ込み、また科学者や政治家の一部はスペースシャトルで地球脱出を試みていた。

もう、神の存在を否定するものはいない。われわれは単に生かされていたにすぎない。すべて、掌の上で遊ばれていたのだ。昼はぼんやりと、天空に巨大な掌が見えた。夜はもっとくっきりと、太陽の当たる半分の指が近づいてくるのが見える。

道路という道路、公園という公園に人々は集まって神にひれ伏した。無神論者も、偶像崇拝者たちも、いまこそ、目の前に出現した神を崇め、俄信者となって、名前のない神に祈祷した。広場では薪の大きな焚き火を取り囲み、生け贄の少女たちが投げ込まれていた。

街角では免罪符を売っていた。それに人々が群がって買っている。神に願いが届くように、太鼓が叩かれ、人々は一斉に音楽に合わせて両手を仰ぎ礼拝していた。この期に及んで物欲の虚しさが判らない連中は、車に財産を積んで、逃げようとしていた。どこへ逃げられるのか。気が狂うもの、家族でひっそりと抱き合うもの、次に何が起こるのか、誰も想像がつかないでいた。

神の指の格好が変化してきた。いままでぼんやりと伸びていた親指と、人差し指が円を描くような格好になってきた。親指の上に人差し指が立っていた。みんな、それと同じ形を作ってみた。地上から見えるのは人差し指の巨大な爪だった。

「ひょっとして。あの形は、われわれがよくやる指で、まるめた鼻くそをはじく、それではないか」と、一様にそう人々は思った。

次の瞬間、地球は巨大な人差し指にはじかれていた。鼻くそのように、太陽めがけてはじき飛ばされていた。

第156話 フリーター

デパートのお中元の配達に、学生アルバイトが殺到していた。就職難がアルバイトにまで及んでいる。昔はアルバイトといえば、学生と決まっていたが、いまは就職あぶれ組から失業中のものまで、年齢も高くなっている。

高井利明も五十近いのにアルバイトだ。彼の場合はみんなと少し違う。進んでアルバイトをしているのだ。フリーターといえば格好いいと思う若いうちはいい、年とってくると、いい年してアルバイトと馬鹿にされる。横文字の仕事でもフリーターはいただけない。社会保険はない、退職金はない、賞与はない、身分保証がないので、サラ金から金も借りられないし、マンションに入居もできない、結婚する相手の親から反対される、履歴書にも書けない、人にも云えない。仕方なくやっている人が殆どだ。けっして自慢できる仕事ではない。

それが、高井はどっしりとした存在感があり、強い意志を持って仕事に励むので、周囲からは一目置かれていた。普通なら、自分の年下にアゴで使われるのは侮辱とを感じるのが、高井は息子ほども年下の若者に、低姿勢でいつも望んでいて好感を与えていた。自分の身分というものを心得ていた。

三十過ぎでふらふらしているバイト仲間が、休憩時間に高井に話しかけていた。

「どうして、高井さんはこんなバイトでも一生懸命やっているんですか」

「そういう、おまえはどうして一所懸命やらないんだ」

「だって、いくら真面目にやっても出世するわけでもないし、ボーナスが出るわけでもないでしょう。時給いくらと決まっているんだから」

「そうか、おまえは一生、おれは一所、ここが違うんだな。何をしても無駄なことはないと思っている。どんなつまらない仕事にも何か教えられることはある。目的さえ持って生きていたら、バイトでも構わないが、おまえのようにいまという時間を無駄にしているのは勿体ないな」

三十男は高井の云っている意味が飲み込めないでいた。噂では、高井はひとつのバイトを半年以上やらない主義だそうで、二十歳の頃からそう決めて、履歴書の裏面まで書いても書ききれない職業を経験してきた。三十年近くで百を超える仕事をやってきた。高井の真面目な仕事ぶりを使って、本採用したいという会社が多かったが、断り続けてきた。高井にはある目的があった。ただ、大工場の単純作業だけは、何日も続かないでやめていたし、自分でもそんなバイトは選ばない。時給が安くとも、どんな場末の町工場でも、ラーメン屋でも、人の嫌がる仕事でも、技術が身に付くものであれば快く引き受けた。一日一日が勉強と思っていた。毎日、バイト日報を付けていて、大学ノートにびっしりと色々な職場のノウハウが書き込まれていた。それが、高井の戦歴だった。社会がおれの大学だ、と、高井は常々口にしていた。下積みでも案外、奥が深い仕事がある。技術職でも、大工場は分業されていて、部品の一部になっているから、全体が見渡せない。高井はわざと、小さな町工場を選んだ。

パソコンもこなす。運転免許は大概是持っている。資格は取れるだけ取った。司会も観光案内のガイドもお手のもの。家庭教師もできる。造園から建築、自動車の整備までいろいろやれるので、どこの職場でも重宝がられた。一社に一台のなんでも屋がいると助かる。電化製品なら、分解修理も任せられた。厨房に入れば大抵のメニューはこなす。ホテルの宴会からパン職人、洋菓子、ラーメン屋から板前の真似事まで、やれと云ったらになんでもやる。時に、社長の代理で会合に出席させられることもあった。道路工事、清掃作業、死体運搬、農作業と多岐に渡って仕事をしてきた。

ひとつの会社で十年一日のごとく同じことをするのが嫌いだった。一穴主義というのもいただけない。色々な空気を吸いたい。同じ町に何十年も棲みたくない。同じ友人と何十年もつきあいたくないし、結婚も二度しているが、二度目の離婚のときに心に決めた。おれは家庭を持つべき人間ではないと。以来ずっと独身を通してきた。孟母三遷を地で行くと、いままで、北は北海道から南は九州まで、二十でできない土地に暮らした。長く海外でも生活した経験もある。一カ所に二年とこない。女も友人もとっかえひっかえ、色々な人間と語らい、交際し、寝た。

モノを持ったり、買ったりすることはあまりない。移動して歩く人間にはモノほど邪魔なものはない。その代わりに、自分の体験や旅行には金を出し惜しみしなかった。金はすべて自分のために、見たり聞いたりするために使った。体ひとつでどこにでも行くが、その体にすべて蓄積させているのだ。図書館にはよく通う。暇さえあれば本を読んでいた。アパートの四畳半にはノートパソコンだけあった。情報はネットから得たし、メルマガもいくつか購読していた。ニュースは欠かせない。また、毎日の日課で五カ国語をマスターするためにずっと会話の勉強も欠かしたことはない。高井はマルチ人間を目指していた。

いつか、仲間に訊かれたことがあった。

「高井さんは専門職になろうとは考えたことはないんですか」

「ダメなんだ、浮気性だし、尻軽だから、じっくりとやる学究タイプではないんだな。一通りで

きるとみんな思っているが、包装ではデパートの女の子には負けるし、どんな職場の一年生と仕事のできを競争しても負けるだろうな。プロにはなりたくないんだ。広く浅く、ひとつもものにしないでいい。それでいて、最低のことはできるようになりたい」ますます高井のことが判らなくなる。この人は何を狙っているのか。

五十になったら遅蒔きながら独立する。高井は自分の人生に区切りをつけていた。五十になったらじたばたしないで、居を構える。そう周りに宣言した通り、高井は安住の地を故郷に求めた。突然、フーテンの虎が戻ってきたので、彼を知る地元の間人は驚いた。しかも、家と事務所を建て、看板も上げ、商売をする準備をしていた。アルバイトばかりして、あちこちを点々とした風来坊が、何をやるのか、みんな興味津々で事務所に集まってきていた。その立派な事務所にはこう書かれていた。

「便利屋お助けマン、なんでもやります。ベビーシッターから介護、増改築から機械の修理、引っ越し運搬、店員、調理...」

第157話 蒼ざめた老人を見よ

いま一番元気なのは老人たちだった。

「年金は来るし、喰う心配ないし、バスは只だし、医療費は安いし、老人福祉の施設は立派なのが建っているし」

その反対にいま一番元気がないのは働き盛りだ。

「年金は貰えないかもしれないし、明日の米代もないし、教育費はかかるし、家のローンも大変だし、税金ばかり高くなって手取りは少ないし」

政府だけでない、知事も市長も村長も、すべて投票率の高い老人層にごますり政策を打ち出して、やたら税金を使って、福祉センターや、保養施設をデラックスに建てていた。老人農園に老人大学、趣味事から介護まで、甘やかすすぎて、のさばる老人たち。「老人栄えて国亡ぶ」という本も出た。それもこれもいまのうちだけだった。

国債がさらにランクを下げたとき、すでに国債に投資するものはいなくなった。県債も同じで、資金が廻らなくなった。それは突然やってきた。長引く不況で税収はがた減り、すでに歳入と歳出のバランスは崩れていた。公務員の給与カットでも足りない。あらゆる大幅増税で凌ごうとしたが、国民の猛烈な反対どころか、税金滞納者が増えて、それどころでもない。ついに日本もアルゼンチンの二の舞になって、日本は破綻した。

「すべての支払いを停止いたします」と、モラトリアムを行わざるをえない異常事態になってしまい、内閣は責任をとって総辞職。当然、年金は支払い停止になった。

それが、ある日突然政府の発表とともに、ニュースというニュースで破産した株式会社日本の閣僚たちが平身低頭謝罪するという場面から始まった。まさに青天の霹靂だった。ショックで脳溢血で倒れたり、心臓発作を起こした老人が五万といた。救急車が走り廻っても間に合わない

ほど、衝撃が全国を走った。健保も破綻したから、病院は現金のみ。いままで、毎日社交場としての病院に通っていた老人たちは、ぴたりと行かなくなった。

「まあ、仕方がない。戦前は年金も社保もなかったのだから、昔に戻ったと思って、生きてゆかない」と、強かに考える老人もいた。昔人の知恵をもう一度、生活に取り入れるだけでよかった。風邪をひいたら大根おろしにネギと蜂蜜とか、火傷にはアロエがいいとか、胃腸にもその汁を飲む。生薬が生活の中にいくらでもあった。

無ければ無いなりの生活をしたらいいと、戦時中を思い返していろいろ工夫する老人たちはまだ生きる自信に満ちていたが、甘やかさせすぎて、贅沢病に罹った老人たちは始末が悪かった。悲観して、心中するものたちが後を絶たない。一挙に昔の生活に戻れないのはあたりまえだった。働ける者は内職をしたりして、少しの収入を得ていた。昔とった杵柄で、いろんな技術を持っている者は漢方薬や、代用食品をこしらえ、それを売って糊していた。寝たきり老人を見捨てるわけにはいかないと、親戚、孫子たちが、面倒をみるようになった。核家族でバラバラに生活していた家族も、また昔のように一緒に暮らすことで、生活防衛をしなければならなくなった。病院にかかる費用が莫大になったので、出産も死ぬのもみんな家で済ませる。いまから四十年前までみんなそうしていた。

困ったときはお隣りさんと、また隣り近所の助け合いがあたりまえになってきた。もう、国はあてにならない。遠い親戚より近くの他人だ。食費を削るために、玄米が復活した。肉や魚より野菜中心の粗食になってきた。すると、いままでカロリー一過剰で、成人病で苦しんでいた人たちも、肥満で悩んでいた人も食生活が自然と改善されて、血糖値などが正常になるなど、国民の健康状態もいい方向に向かっていた。

新政府が発足した。国の財政を立て直すためには、いままでと同じことはできない。福祉国家の行く末を見てしまったわれわれは、もう国を頼ることはやめなければならない。国もまた、いままでのような馬鹿な予算の使い方はできない。小さな政府となって、国民の自主性に委ねるところが大きいから、税金も極力少なくしなければならない。年金制度は見直されて半額支給、社保や国保は五割負担となって残った。雇用保険は廃止。民間の保険会社がその業務を代行した。おんぶにだっこ行政はすべて全廃された。

それでも棚上げした借金はなんとかなくても、国債を発行できなくなると、新政府でもやり繰りがつかない。体質的に赤字なのだから、その体質を変えねばならないときに、官僚と政治家は相も変わらず温存し続けていた。それにくっついている大企業も同じだ。何も変わっていない。ただ、国民に我慢を強いただけのこと。

「はてさて、どうしたら新たな財源確保ができるかな」と、予算審議委員会も首をひねっていた。

「老人はますます増える一方で、四人にひとりの高齢者が、三人に一人になりつつあります。これでは養えないわけでして、どんどん寿命が長くなるのも考えもので、老人問題を解決しないで先には進めません」

大臣たちは名案を求めた。若手の議員から、とんでもない発言が飛び出した。

「老人税を新設するのです。六十五から年金の支給が始まると同時に税金も取り立てます。そして、一年づつ高くするのです。長生きすればするほど税金が高くなる仕組みです」

「そんな、年金を半分にして、さらに税金を取るとなると、何が起ころか」
自分たちのことは棚に上げて、いつも政策は国民への負担で落着する。老人税の導入のことが新聞にでかでかと載ったのは翌日だった。

平日なのに、いつもはラッシュで渋滞している千代田区の道路は、不思議とその朝は車が一台も走っていなかった。永田町から国会議事堂までの道路はひっそりとしていた。人っこひとりいない。ビルというビルはシャッターを降ろしていた。耳を澄ませば、遠くから地響きが聞こえてくる。何かがやってくる。

やがて、国会議事堂めがけて、四方の道路から黒い人間の塊が押し寄せてきているのが、見えてきた。だんだんと近づいてくる。よく見ると、それは老人の暴徒化した集団だった。婆さんは手にハタキやすりこぎ、爺さんたちは杖や孫の手を手に手に、議事堂めがけて押し寄せてきているのだ。もの凄い迫力だった。

「打倒政府、革命だ。一揆だ。打ち壊しだー。年寄りを馬鹿にするなー」恐れをなして、機動隊は出てこない。相手が年寄りだから手も足も出ない。年寄りは大事にしなくてはならないと、一応、教育は受けている。

何千何万という爺婆の軍団は、国会の門を押し倒し、蹴破り、雪崩をうって議会に押し寄せていった。いま、元気なのはやはり老人ばかりだった。

第158話 遭難

アフリカのサハラ砂漠上空を飛行中の旅客機が、戦闘機と空中接触した。ジェット戦闘機は空中で爆発。パイロットは脱出する間もなかった。旅客機は操縦席に大きな穴が空いて、操縦士らが即死という事態になった。突然の事故で、通信機もやられたのでどこにも連絡はつかないまま、旅客機は高度を低くして、墜落していった。滑空するように落ちて行ったので、機体は砂漠に胴体着陸するものと思われたが、操縦不能の状態で、起伏の大きい砂漠に機首を突っ込むような格好で墜落した。機体は猛火に包まれて爆発、機体はばらばらに飛び散った。

広大な砂漠のどまん中で、目撃者も誰もいない。砂の中に潜るように機体の一部が地上に露出していた。尾翼や主翼は跡形もない。エンジンは離れたところに転がっていた。乗客の遺体も無惨に飛び散っていた。腕や、首だけとか、破損も著しく、荷物も散乱していた。

事故から三時間が経って、火も自然と消えて、煙だけがくすぶっていた。生存者の姿は見えない。座席のシートにいくつかの遺体が血みどろになってみつけられたが、あとは人間の形をしていない。肉片となって広範囲に散らばっていたのだ。

だが、ごそごそと動くものの影がある。かすり傷だけで奇跡的に助かった少年がいた。ひとりだけではない、座席の下敷きになって、助けを呼ぶ声がしていた。少年は、その空をまさぐるような手を掴んで引いた。同じ少年だった。ふたりともイギリスからナイロビへ両親とともに向かう途中に遭難したものだ。空港からすでに二人は同じ十二歳ということで、仲良くなっていた

のだ。

「大丈夫かい。トニー」と、少年はどこも怪我をしていないことを確認していた。

「マーク、助かったのはぼくたちだけだろうか。ここはどこだろうね」

「墜落するまで窓から見ていたけど、サハラ砂漠のまんなかじゃないかな。どこまでも町も緑も見えなかったもの」

「どうしよう」二人はようやく恐怖を思い出して、抱き合っただ泣いた。

砂漠は日中は五十度くらいまで気温が上がった。二人とも、ショックから立ち上がれないでいたが、そのうち、救援が来るものと信じて待つことにした。夜は逆に冷えた。二人は夜具になるものを捜した。タオルが沢山みつかったので、それに包まって眠ることにした。「なんだか、お腹が空いたね」「喉も渴いた」外は真っ暗だ。機体の座席が斜めになっていたが、それをベッド代わりにして潜りこんでいた。電気もなにもないから、相手の顔も見えない闇だった。焦げくさい匂いと、死臭が漂っていて、なかなか寝付けずにいた。

翌朝、二人は怯えたように目覚めた。ショックがまだとれないでいた。太陽は容赦なく照り付けてくる。気温はまた上昇してくる。二人とも喉がカラカラだった。

「マーク、残骸の中から食糧を捜そう。きっと何かあるはずだから」二人は厨房のあった部分を捜していた。破片が大小、散らばっているが、それがどこの部分なのか判らない。スチュワーデスの足だけが砂の上に飛び出していた。片足よりない。他の乗客の内臓か、砂の上に長い腸を伸ばしていた。思わずトニーは口を抑えた。吐こうとして、胃に何も入っていなかった。酸っぱい胃液だけが逆流してきた。

「なるべく見ないようにしていよう」汗をびっしょりとかいていたが、二人とも顔も髪も砂まみれだ。見ないようにしても赤いものは目につく。そのうち、風が出てきた。だんだんと激しくなってくる。空が黒く見えてくる。二人はまだ砂嵐の怖さを知らない。砂が目や耳や鼻に入る。

「痛いよう、前が見えない」トニーがしゃがみこんでしまう。もの凄い砂嵐が起こった。息もできないほどだ。赤い血肉は砂に埋もれてゆく。機体の破片も砂の中に消えてゆく。何もかも砂が呑みこんでしまうかのようだ。二人はシートに潜りこんで、砂嵐がおさまるのを待った。

暫くして、嘘のように風が止んだ。また獣のような太陽が吠え立てる。二人は砂を掻き分けながら、埋もれた食糧を捜さねばならなかった。

「マーク、あったよ。缶ジュースが出てきた。一ダースはあるよ」トニーは喜んで駆け寄った。確かに、それはグレープフルーツジュースらしかった。ただ、何かで開けなければ呑めない。

「缶きりとか云ったね、こんなものを開ける道具だよ」

「うん、知っている。ママがいつも台所で使っていた」

「そいつも捜さないと、呑むことができないぞ」

二人はまた、砂を掻いて、どこかに缶きりがないかと、捜し続けた。喉の渴きはふつうではなかった。昨日から丸一日、呑まず喰わずだから、腹は減る、喉は渴く。熱さで体力もなくなっていた。

缶ジュースが見つかった辺りを重点的に掘り返してみた。すると、ストローが出てきた。スプーンも見つかった。

「この辺りにきっとあるぞ」

まもなく、缶きりは見つかった。

「助かったぞ、これでジュースが呑める。喉が痛いくらい渴いているから、早く呑もう」

「ぼくが先だよ、じゃんけんで決めようか」「よし、じゃんけんぽん」

旅客機が突然レーダーから機影が消えたことで、空軍と地元の捜索隊が陸と空から遭難した旅客機を捜していた。戦闘機がようやく、それらしい残骸を砂の上に発見したのは事故が起こってから五日が経っていた。直ぐに空軍のヘリコプターが現場に急行した。それと同時に陸路からも救急隊員とトラックの捜索隊が走った。

ヘリコプターが事故現場に到着したとき、砂の上にかすかに破片が認められるだけだった。間違いなく、行方不明になった旅客機の残骸だということを確認すると電話で報告した。

「生存者はいない模様です」「いや、待て、少年が二人倒れているぞ、どうやら無傷らしい。缶詰らしいものが回りにあるから、生きているかもしれん」隊員がうつ伏せに倒れている二人の少年に近づいた。

「おい、救出に来たぞ、大丈夫か」と、隊員が抱き起こした。

「駄目だ、死んでいる」「こっちもだ。つい昨日まで生きていたようだ。外傷はないから、どうして死んだのだ」

隊員は首を傾げて、その状況を考えていた。まだ、開けていない缶ジュースが一ダース、死体の脇に転がっていた。一人の少年の手にはしっかりと缶きりが握られていた。缶の蓋のところに、開けようとした跡がいくつもついていた。

第159話 ガラスの少女

ガッシャーン、というガラスの割れる音がした。職員室の方から聞こえたようだ。校長が飛んでいった。放課後の職員室は先生方も帰ったあとで、残っている先生は二人よりいなかった。

「どうした」と、校長が立ち尽くしておろおろしている男の数学の先生に声をかけた。

「壊してしまいました、どうしたらいいか...」先生の前の床には、たったいま壊れたガラスの欠片が色とりどりになって散らばっていた。もうひとりの家庭科の先生も駆けつけてきて、塵取と箒を持ってきていた。

「いいか、このことは内密にしておこう。見なかった、知らなかった、いいな、後はわたしの方でうまくやっておくから」

壊れ物のシールがぱらりと落ちていたのを校長は咄嗟にポケットに隠した。

「他にも、要注意生徒がいるだろう。きちんとマークしておくように。そして、取扱いには何度も云っているように、細心の注意をはらってな」

「まあ、北中学の女子生徒が行方不明ですって。うちの中学の生徒じゃない」

台所で朝刊を見ながら、三田村匡子は朝食を食べている主人の裕士に話し掛けていた。二階から、制服を着た北中三年の春香がふらりと音もなく降りてきた。裕士は匡子に、しっと、指で口を抑えた。

「春香ちゃん、おはよう。今日はお弁当の日なのよね」「春香ちゃん、ゆうべは遅くまで勉強していて、大丈夫かい、あまり根を詰めないようにしてね」両親はひとり娘に異常に気を遣っている。

「わたし、少し熱があるみたい」と、春香が倒れこむように椅子に座ると、両親共に心配して、傍に寄ってくる。

「どれ、熱なんかないようだけど」と、額に手を当てて何気なく匡子が云うと、

「あるのよ、熱が...」と、春香は悲しそうな目をして見上げた。両親共にしまったという顔をして、

「うん、ある、ある。無理しないで学校休んだら」と、云い直すと、春香はまた難しい顔になって、

「どうして判るの、熱があるとかないとか」と云うから、匡子は焦って、体温計を出してくる。

「いいの、わたし、試験があるから、休めないし、学校には行く」

「そうだね、行ったほうがいいね」と、実に主体性のない父親だった。

春香はスープだけ飲んで玄関に出た。二人ともお見送りだ。

「いってらっしゃい、具合が悪かったら、保健室から電話してね、ママ、迎えにゆくから」

春香はちらりと匡子を振り向いた。匡子はどきりとしたが、無理ににこりと笑い返した。

娘が学校に行くと、二人は玄関にへなへなと座りこんでしまった。

「ようやく、行ったか、やれやれ」

北中学の春香の教室では、午前中の実力テストがすべて終り、昼食の時間になった。みんな様

々なお弁当を出して食べ始めた。春香は弁当を取り出して、箸が入っていないことに気がついた。春香は急に泣き出しそうな暗い顔になると、弁当の蓋を戻して、じっと机に座っていた。それをクラスメイトが発見する。

「どうしたの、春香ちゃん」春香はいまにも涙が零れそうなのを我慢して、小声で、「お箸がないの」とだけ云った。春香の係りをしているクラスメイトは至急、職員室に駆け込んだ。

「先生、大変です。春香さんが、箸を忘れたそうです」職員室ではやはり弁当を食べていた先生方が総立ちになった。

「何い!」大変なことになった。大至急、何とかしなくてはならない。みんな右往左往していた。「わたし、近くのコンビニから買ってきます」と、保体の先生が走っていった。ものの三分で先生はさすが、体育で鍛えた健脚で、春香の教室に滑りこんだ。

「はい、春香さん。お箸ね」と、買ってきたおニューを差し出すと、ぐすりと、春香は目を伏せて、

「わたし、食べません」と、いじけていた。

「そんなこと云わないでね、お願いだから食べてください。もっと早く持ってこればよかったのだけど、先生、足が遅いから」と、云いながら息を切らせて汗をどっぴりとかいていた。それが、いまは冷や汗になっていた。校長も教室にやってきて、春香の机の横に座り込んで、謝った。

「お母さんも、うっかりしていたんだね、何も悪意があつてのことじゃないんだと思う。わたしからも謝るから、食べてくださいね」

春香はようやく、機嫌を持ち直して、こっくりと頷くと、弁当を頬張り出した。

先生方は、職員室で、大きな溜息をついていた。

午後は普通の授業があった。社会科の授業だった。

「りんごの生産高が一番多いのは青森県だが、二番目の県はどこだろう。判る人は手を挙げて」クラスの殆どが手を挙げていた。

「そうだな、こんな簡単な問題、判らないほうが、どうにかしているよな。判ってあたりまえ、判らないのはよほどのバカだ」と、社会科の先生は全員が手を挙げていると思っていた。だが、違っていた。みんな手を挙げながら、ちらりと後ろを見る。次々に後ろを見てゆくと、そこに小さくなって震えている春香だけが手を挙げていない。クラスの生徒全員が青くなつた。先生はご機嫌で、まだ気がついていない。「バカ」を強調していた。

「先生」と、前列の生徒が小声で先生に後ろを指さして教えていた。先生の視線が挙げた手の林の中の窪みにいった。三田村春香だ。しまったと、先生は口の中で叫んでいた。なんとか交わさなければ。

「いやあ、これは難しい問題だったな。足立、答えてみろ」と、前列の生徒に当てた。

「は、はい、それは秋田県です」と、足立もわざと間違った答えを云った。

「ほら、間違っている。難しい問題だろう」「ほかにどうだ」「岩手県です」「群馬県」「北海道で一す」みんな春香に気を遣って、間違った降りをする。それが却って春香は侮辱されたと思って、傷ついていたのをみんな知らない。ナイーブな性格が病気に近い。みんなして馬鹿にして

いると、ひとり孤立していた。ぷるぷと震え始めた。体が赤く発光してきた。

「先生、春香さんが」と、男子生徒が異変を教えた。先生は慌てふためき、春香の机の前に走ってゆき、土下座した。

「すまん、先生が悪かった。あんな難しい問題を出した先生がみんな悪い...」と、頭を下げてみると、春香の体にヒビが入ってきていた。バリッバリッと音がする。「ああ」と、みんなの悲鳴がした。春香は突然、割れた。粉々に砕け散って、椅子の上と床に色とりどりのガラスの破片が散乱した。

「あーあ、やっちゃった」クラス全員が口を揃えてそう云った。

第160話 通販生活

「関口さあん、宅急便で一す」

「そら、来たわ」関口美智は玄関に出ていった。一日三回は宅配便が来る。近所でも有名だった。美智の友人の藍子が遊びにきていて、

「今度は何が来たのよ」と、呆れて見ていた。

「ヘレナのコスメよ。輸入品だけど、どこでも売っていないの。通販でなければ手に入らないのよ」

「ふうーん」

関口美智は評判の通販マニアだ。買い物はいっさい通販です。デパート、スーパーでは買わない。デパートでは買いたくないものまで薦められるし、スーパーでは買いたくないものまで衝動買いしてしまう。カタログや、インターネットなら、じっくりと冷静に選ぶことができるし、以前買ったことのあるものなら、手に取って見なくとも判るから、安心して買える。しかも、流通過程を省いている分安くなっている。いろいろ特典までついている。自分の欲しいものを、足を棒のようにして捜し回らなくてもいい。

「ほら、検索窓口に自分の捜しているものを入力するとね、ばらばらと出てくるでしょう」と、藍子にパソコンで買い方を教えていた。

「しかも、一発で、いろんなお店の商品が並ぶから、比較購入が一目瞭然できるのね。より安いものを選べるってわけ」

「お米や、野菜なんかもこれで買ってるの？」機械音痴の藍子にとってパソコンは魔法の箱だ。何がなんだか判らない。

「そうよ、近くのスーパーでもネットで配達やってるし、市場の魚屋さんもやってるわ。ネット通販で買えないものはないわね」

「関口さーん、山猫で一す」

「また、来た」「今度は何かしらね」「ホテルメイドのランチよ」「へえ、そんなものまで宅配するの」「だって、ピザやラーメンも出前しているでしょう。通販なんて、昔からあるのよ。電話一本で配達。いまはネットで出前ね」

美智はグルマンでもある。家にいて、あまり外に出ない専業主婦だから、ぶくぶく太っていた。そのくせ、部屋の中には足踏健康機からランニングマシン、ぶら下がり健康機とか、ペットの檻の中のように所狭しと置いてある。それも通販。他に通販からダイエット食品も数々取り寄せているが、全然痩せる傾向が見られない。

藍子が帰ったあと、昼下がりの情事という会社から訪問客があった。ぴしっと白いスーツを来て、メンズノンノから出てきたようなダンディな青年が立っていた。ホストクラブの出張サービスだった。これもネットで予約できる。顔写真どころかビデオで話している美青年のリストから選んで注文するのだ。

「奥様、一時間だけでよろしいでしょうか」と、美智の前に跪く。子供のいない美智は昼間の退屈凌ぎに、浮気の出前も時々とっていた。

「今日はまた素敵な方ね。わたし、こんなおでぶちゃんだから、外ではまるで相手にされないのよね」

「いいえ、奥様、肉体派はそれはそれでファンがいるものです。ぼくもふくよかな胸で窒息されてみたい一人です。奥様、失礼いたします」と、カーテンを締めた部屋で美智の服を脱がせ始めた。

知らぬは亭主ばかりなり。何にも知らない亭主が帰宅する。

「あなた、お帰りなさい。週末の旅行の切符と宿泊の予約はネットで手配しました。それから、あなたに頼まれた、ガルブレイスの経済学全集は検索して、書店に頼んでおきました。ニューヨークタイムスの先月の七日号も、和歌山の梅干しも、角館の納豆も、エルメスの財布も、お中元で配る百年の孤独の焼酎も、鮫のエキスも、みんなネットで注文しておきました」

「そうか、助かるな。我が家の資材部長だからな。居ながらにして世界のものが手に入るとは便利な時代になったものだな」

「そうよね、買えないものはないくらいね。支払いはクレジットですぐにネットで決済できるし、このままで行けば、デパートや商店はいらなくなるわね」

「おまえのようなズボラな人間が増えればね」

一見、仲のいい夫婦のように見えて、仮面夫婦。亭主も外で何をしているか判ったものではない。子供のいない分、自分たちの趣味事に可処分所得は使える。いつも旅行したり、いいものを食べたりしている。美智はそれで百キロ近い体重になってしまった。いよいよ、外に出るのが恥ずかしい。

「あの人がねえ」「突然、心臓発作で死んでしまうなんて」「随分と肥満でらしたものだ。なんでも、インターネットで買い物ばかりして、外を歩くこともしていなかったみたい。完全に運動不足だって」「棺桶も特製の大型。ネットで頼んだそうよ」

関口美智の葬式の日、お悔やみに列席していた美智の知人がこそそと話していた。四十前で心臓に負担が掛かりすぎて美智は死んだ。

葬式はいまはやりで暗いイメージがなく、すてきな演出がされていた。

「この葬儀も、イベント会社にネットで頼んでいたらしいわよ。生前にすべて自分の葬儀のスタイルを選べるんですって、それにー」みんな、遺影の前で読経する坊主の姿形も見えないのを不思議そうに眺めていた。「ーお坊さんの座る席にノートパソコンが置かれているでしょう。ほら

、モニターに坊さんの背中が映し出されているのよね。あれも、ネットで読経サービスを予約したみたい」

世は通販時代、死ぬまで面倒みてもらえる。

第161話 三代目

唐様で売り店と書く三代目、とは江戸の昔。いまならさしずめ「横文字で売り店と書く三代目」だ。

どこの三代目も元気がない。商売はこの長引く不景気でどこもいい話はなく、老舗と云われる商店ほど苦戦を強いられている。

創業者が戦後、焼跡に建てた間口一間の店が、高度成長時代に乗かって、みるみる大店になっていった。子飼いの番頭さんも専務になって、小僧もそのうち営業部長なんかになっていたりする。戦後まもなく、竹の子生活の中から生まれた二代目たちが、産めよ増やせよのベビーブームの申し子となりつつあった。その子供たちが社会に出たときも、まだ日本は景気がよかった。石油ショックというものがあつたが、物価が高騰したぐらいで、まだまだ日本は景気がいい。二代目も後継ぎとして、高校を出て、同業者の店に修行に出され、他人の飯を喰って帰ってくる。二代目は親父と同じくらいの苦勞をしなければ、甘いと云われていつまでも創業者の社長を抜けないでいた。その二代目も結婚して、子供ができる。ベビーブームの子供たちが二世を創るから、第二次ベビーブームがやってくる。その産まれた子供が三代目だ。

話しは平成に入る。三代目の古池拓春は大学を卒業して、大手洋酒メーカーで営業をやってきたあと、後継ぎとして家に帰ってきた。家業は、造り酒屋だ。店の古い従業員も定年退職して、社員も入れ替わっていた。じいさんは会長に、これは多少のボケも入り、もうすっかりと隠居で、商売には口を出さない。二代目が目下の社長。二代目といっても叩き上げだから、体質は創業者に近い匂いを持っている。両親の苦勞を見て育っていたから、なんとか店を潰さないように、守勢に回る。

拓春は、三流の私立大学で経営工学などというものを一応勉強してきた。本当は四年間、びっしりと遊んできた。経営、営業が専攻で、醸造学とかはまるで齧っていない。その点、二代目の父親は職人気質だ。原料の選別から仕込み、品質までうるさく覚えさせられてきた。従業員三十人の小さな酒造メーカーだった。

「ええ、き、給料はたったそれだけ？」と、拓春は帰ってくるなり、親父である社長と云いあいをしていた。

「東京で貰っていた半分じゃない、マジでかよ」まるで詐欺にでもあったように拓春は噛み付いていた。

「あたりまえだ、おまえのいままで働いていたのは一部上場会社だろう。ここは東京ではないんだ。田舎は田舎の相場というものがある。しかも、うちは零細企業だ。勘違いしてもらっては

困る」

「なら、ボーナスはいっぱい貰えるんだろうな」

「おい、うちでボーナスは出るのか」社長はわざと女子事務員に訊いていた。

「さあ、ボーナスって何ですか。忘れるくらい頂いていません」と、事務員も笑っている。

「そらな、うちはここんとこ、ずっと赤字で出せないんだ」

「それじゃ、また東京に戻ろうかな」と、気弱になった三代目を社長は叱咤する。

「情けないことを云うな。何のためにおまえを戻したと思っている。おまえも直に三十になる。おれの後を継いで社長になって貰わねばならん。そして、この会社を建て直すんだ。うんと利益が出るようにして、ボーナスもいっぱい出してみろ」

そういうことか、どうりで話しが違ふと思った。三代目は、しらーとした顔になった。ボーナスはない、給料は半分。これでは結婚資金なんかは蓄えられないし、車のガソリン代とローンも出るのかと不安になる。

「まず、おまえの一番目の仕事だ。来年度の予算を作成してみろ。財務諸表はお手の物だろう。おれの前の机がおまえの席だ。肩書きは、そうだな、総務課長でいいかな」

拓春は渡された過去三年間の決算書から、予算案の作成にとりかかった。別に新しい事業をやる予定もないらしい。現状維持というところで、経営政策もなにもない。数字にはそうした目論見が一切反映されないで、数字だけで作成してみた。ところが、大学で習った、計画の方程式をセオリー通りにあてはめてゆくと、来年もマイナスになる。売上減の赤字が増える予算になる。

「親父」と、計算途中で相談に行く。

「ばかやろう。社長と云え。公私混同するな。なんだ、課長」

「し、社長」なんだかくすぐったい。「このままでゆけば、我が社は十年後には売上ゼロになります。そして、なんと十一年目にはマイナスの売上で...」

「あのなあ、どうしておまえは、そう教科書通りなんだ。努力目標というのがないのか。今年の売上に5パーセントぐらいは上乘せしろ」

ところが、実際は大手メーカーに樽買いでは買い叩かれて、さりとて、自主ブランドは年々売れなくなり、新商品は失敗するわで、だんだんジリ貧になってくるばかり。

「やればできる。かつては製造が間に合わんくらい売れたものだ」と、過去の栄光に社長はまだ夢を見ているところがあつた。精神論でがんがんくる。それに比べて、三代目は、自分が社会に出たときから、バブルは崩壊して、世の中はすべてマイナス成長。下がるのが当たり前だと思っていた。昔の話が嘘っぽく聞こえるくらい、現実味がないと、しらけていた。何をやってもうまくゆかない。すべて裏目に出て失敗する。動けば動くほど泥に足をとられる。まるで、いくら玉をはじいても出ないパチンコ台のようなものだった。たまに出るからやる気が出てくる。三代目は、出るのを見たことがなかった。いつも出ない台に座って、いい加減やる気をなくしていた。

同級生もUターン組で、家業を継ぐために故里に戻ってきていた。たまに、スナックで会ったりするが、みんな静かで口数も少ない。やる気が一様でない。どこも同じだった。最近の仕事をするのさえ苦痛に思え、時間の無駄のような気がしてきていた。だから、みんな三代目は、社長、従業員がまだ残業して頑張っているときに、五時になればさっさと帰ってしまう。そうして、酒

に逃げたり、バンドをやったり、スポーツジムに通ったりして、鬱積を晴らしていた。

社長は社長で嫌なことは三代目に押し付けて、自分ではゴルフに行ったりしていた。

「財務もちゃんと見ろよ。資金繰りは任せたからな」さっぱりした表情で社長はどこかへとんずら。さて、どう計算しても足りないものは足りない。拓春は、こっちを削って、あっちへ払ってと、やっていたが、どうしても明日の手形は落ちない。

「手形をどうにかしたいけど」と、女子事務員に訊くと、

「ジャンプよりないですね。一月飛ばしてもらおうんです」それではと、早速、取引先に電話する。
一ええ？またですかい。先月も、先々月もやってあげたでしょうが。そんな三度はいけませんな。

と、拒否された。

「先々月のは、ポップでした。先月のはステップでして、今回が本当のジャンプです」と、拓春が云うと、一ふざけんな。と、電話は切れた。事務員はくくくっと笑っている。

銀行に相談に行くことにした。融資はすべて目いっぱい貸せない状態。

「追加融資なんて、冗談でしょう。そんなことより、月々の利息だけでもきちんと払ってくれませんかねえ」と、相手にされない。拓春は啞然とした。そんなに酷い会社だったのか。

「それでは、どうしたら貸してくれるんですか」と、食い下がる。

「社長さんに何度も話している通り、本店を売りなさい。資産売却より逃げ道はありません」

三代目、こんなおんぼろ会社いらぬわと思っていた。事務所に帰って、早速、大きな紙にSOLD OUTと書いて店頭に貼った。工場にも貼った。社長がゴルフから帰ったら驚くだろう。だけど、明日は手形の不渡りでもっと驚くだろうな。三代目は、口笛を吹いて、仲間の待つカラオケボックスへと急いだ。

第162話 虐め

中学校の校門前にタクシーが停まった。授業中で、校庭にも生徒の姿はなく、学校は一見静かだった。五十がらみのご婦人が車から降りると、校庭を真っ直ぐと歩いてくると、玄関に入っていた。職員室の窓から、先生方がそれを見守っていた。

「校長先生、おりますか。校長を出しなさい」夏の着物を着た、お伎姉さんといった迫力で、玄関で叫んでいた。そのヒステリックな声が廊下に響いていた。一斉に教室の窓という窓が開いて、先生と生徒が顔を出した。いままで鳴っていたピアノの音色もピタリと止んだ。

校長、教頭がばたばたと何事かと玄関に出てきた。

「校長先生ですか。わたくし、近藤高志の母ですの」

「はあ」と、二人は顔を見合わせて、来るべきものが来たという苦虫を潰した顔をした。

「お判りですね。今日は決着をつけに来ました。虐めのことです」

近藤夫人が、あまりに声が高いので、それを制するように、「まあまあ」と、婦人を校長室に招

き入れた。廊下に出て茫然としていた女先生に、

「き、君、お茶」と、どこか慌てふためいていた。

校長室には歴代の校長の肖像写真がずらりと掛けられていた。近藤夫人はつんとすまして応接用のソファに腰掛けていたが、いきなり、巾着から取り出した書類をテーブルの上に叩きつけた。

「電話では埒があきませんから、今日はきちんと学校側の誠意を示していただきますでしょうか。これは医者診断書ですわ。全治一週間。弁護士先生にも依頼してありますのよ。ほほほほほ」

近藤夫人は帯に挟んだ扇子を開いて、ぷいと横向いて扇ぎだした。麝香の匂いが漂った。

「その問題はですね。すでに終わったことで、解決したものと…」と、校長が云うと、夫人はその言葉に噛みついてきた。

「終わった？ とんでもない。揉み消しでしょう？ 警察沙汰にしたくないから穏便に済まそうという先生方の常套手段ではないんですか。そんな、何をびくびくしているんですか。教育委員会が怖いんですか。出世の評価点かなんかあるんですか。大過なく過ごせると思ったら大きな間違いですよ。今回のことは、マスコミにでもなんでも、バラしますからね。これは脅かしでもなんでもありません。学校側の態度に問題があるからです」

「そうおっしゃられましても、向こうの生徒の親ごさんも謝りに行っていますし、これ以上のことは、どう云われましても…」校長も歯切れが悪い。

「まだ、解決しておりません。現に、うちの高志ちゃんは学校に出てきていませんでしょう。可哀想に、学校には行きたくないと、毎日泣いて、部屋に閉じこもったまま出てきません。完全に登校拒否しております」

「お言葉ですが、いまは不登校と…」

「うるさい、登校拒否も不登校も同じです。どうして言葉だけの小手先で問題を変えようとするんですか。その辺が教育の弱体を象徴しておりませんこと」

教頭も反論ができない。ただ、項垂れているばかり。「ご尤も、ご尤も」と。

「なんですか、虐めた生徒がPTAの会長の息子だから、表沙汰にしなくなっただけですか。他に、数人いた悪餓鬼も、町の有力者の息子だからですか。市会議員、スーパーの経営者、医者一人息子。それがどうしたんです。悪いことは悪いこと。傷害事件ではないんですか。うちの高志ちゃんが、何をされたか知っているんですか。パチンコで授業中、狙い撃ちされたり、入口に置いていたバナナの皮で滑ったり、バケツの水をかけられたり、終いには殴る蹴るの暴行を集団で受けたんですよ。怪我は治っても、心の傷は治りません。ひどいショックを受けたまま、このまま自閉症になったらどうするんです。ひとりの人間の一生をめちゃくちゃにした学校側の監督責任はどうするんです」

校長、教頭、麦茶をひと息に呑みほし、ハンカチで汗を拭った。

「では、どのようにされるとお気に召すのでしょうか」

夫人は核心に迫った問いにキツとなって答えた。

「当然、生徒の処分です。少年法も変わったことですし、虐めをしたらどういうふうになるか、生徒自身にも親にもこの際、きつく教えるべきです。それで一気に学校側が隠していたことが世間にバレます。校長は更迭、教頭は左遷。いいじゃありませんか」

「わたしどもはどうなっても覚悟はできていますが、生徒たちは将来があることです。あの子たちは確かにやんちゃで乱暴ですが、いまだけの気むずかしい年頃に往々にしてある、見境がないと申しましょか、何と申しましょか...」

「あら、うちの高志ちゃんには将来はないんですか。どうなってもいいんですか。問題の生徒たちは全くお咎めなしだから、悪いことをしたという意識がないんですよ。誰も叩かない、誰も叱らない。だから、反省もなく、ただのさばって、また繰り返し虐めをするだけのことです。増長して、エスカレートして行って、今度は別の先生が標的にされるでしょうよ。生徒にとっては単なる遊びなんです。ゲームなんです。なんですか、昔は先生は偉かったものだけど、最近は生徒の方が威張っていて、おかしいじゃありませんか。うちの高志ちゃんも大学は優等で出ましたし、勤務成績もこの学校の先生になってから問題なかったじゃありませんか。ただ、優しい子だから、生徒になめられただけの話しですわ。先生を殴る生徒は昔なら考えられなかったものですわ。さあ、返事のしようでは、わたくし、この足で新聞社へ行ってもいいんですよ。さあ、さあ」

「さあ、さあ、困った」校長は父兄にも生徒にも世間にも頭が上がらない。いまほど虐めに遭っている校長もない。わしも不登校になりたい、校長はひ弱にそう思った。

第163話 予言者

「われわれに未来はない。地球は神の手によって破壊され、人類は絶滅するであろう。われわれはあまりに信仰を疎かにし、奢侈に興じ、私利私欲に走りすぎた。その罰は死をもってあがなうよりないのだ。政治家は権力を金のために使い、官吏は税金を湯水のように使い、私物化し、女は流行に走り、消費を美德とし、若者はふしだらで軟弱、無関心でエゴイスト、戦火は地上に絶えず、飢えるものらは弾の飛び交う砂漠で死んでゆく。神はしくじられた。この地上に人間を造ったことを後悔された。いまさら、悔い改める必要はない。もう遅いのだ。何をしても無駄だ。われわれは過去の過ちを死をもって報いなければならない」

白い衣をまとった髭を蓄えた、髪の高いキリストのようなユダヤ人の予言者、ヨハネが、集会所でテレビを見ていた人々に訴えていた。看護婦が小走りに近寄って、ヨハネを連れ戻した。

「はいはい、おじいさん、病室に戻りましょね」

「全く、あのじいさんは疲れなくて喋っているよ。毎日まいにち同じことばかり」

集会所で歓談していた紳士たちは憐れむような視線を向けていた。

ヨハネはまた精神病棟の鉄格子の部屋に入れられた。

「わたしの云うことを聞け。何故、誰も信じない。天変地異が起こるのだ。大地震が起こり、大地は沈降するのだ。火山という火山は活動を始め、火を吹き、町は灰と溶岩、火山弾で壊滅するのだ。海は壁となって押し寄せ、海の襲った町は畑は津波の引いたあとは何も残さない。降灰が全世界を覆い、空はいつも暗く、黒い太陽が昇る。気温は下がり、作物は皆無作となり、ために

食物を奪い合う戦が各地で頻発するであろう。愚かな人間共は武力によってしか、平和が勝ち取れないと思いついてる。平和とは、奪い合い、勝ち取ることの謂だ。神はいよいよ嘆き悲しみ、最後の審判の準備はなされた。それで、悲劇は終わりはない。小惑星が地球に衝突することに比べたら、いままでの前座は単なる余興に過ぎない。かの恐竜絶滅のときも、アトランティスが海底に沈んだときも、いままた人類が絶滅しようとするときも、たった直径一キロの小さな星を地球にプレゼントするだけでよかった。われわれは衝突の瞬間、地上に立っているものを確認することはできないであろう。すべてのものは倒れ、火と水に吞まれ、生きているものの影はみつけれない」

「うるさくて眠れん。あの気遣いを黙らせろ」

他の病室から文句が来る。ヨハネは疲れて眠るまで、そうして朝から夜、夜中まで喋り続けるのだ。それは三十年間、そうしてきた。一九九九年が過ぎ、二千年問題が過ぎると、誰もエドカー・ケイシーやノストラダムスのことは口にしなくなり、その予言の書は返本され、古本屋でも売れなくなっていた。もう、誰も世界の終わりなど信じない。予言は悉く外れ、テレビで熱弁を振っていた予言者たちは世間から失脚して、マスコミにも出なくなった。そんなときでも、ヨハネだけは、世界の終わりを訴え続けていた。街頭に立ち、終末論を演説していたが、誰も相手にしない。その間、世間を拐かす罪で何度も牢獄にぶちこまれたかしれない。そのうち、あまりにもうるさいので、精神病院に無理矢理、収監してしまった。

牢獄からでも、病棟からでもヨハネは訴え続けた。

「ノアの方舟を造れ。空を飛ぶ巨大な船だ。そして、火星に新しい国を創造するのだ。この地球は失敗した。もうじき、失敗作品は創造主の手によって壊されるであろう。新しい星では、二度とこの過ちを繰り返してはならない。選ばれた人々だけが移住するのだ。そこに貴賤はない。キリストの云うように、持てるものは駱駝が針の穴を通るより難しい。財産のないものだけが助かるのだ。いまからでも遅くはない。裸になって神の国に入れ」

巨大地震が来るだの、山が噴火するだの、空から大王が降ってくるだの、いろんないかさま師たちが、危機を煽って金儲けに狂奔したせいで、もう誰も耳を貸さなくなっていた。

だが、そうした杞憂を持っている一部の人がいた。すべて起こりえないことではなかった。長い地球の歴史の中ではすべてが何千回と起こってきた。ただ、そのサイクルが人間のあまりに短い歴史の長さの中ではありえない、ばかげたこととしてすべてがSFの世界のこととしてかたづけられてしまう。

神も信じない、予言も信じない人間たちは、怖いものがない。この地上ではやりたい放題だ。人間を超えるものが必要だ。彼らを押さえ込み、ひれ伏させる恐怖が。全人類のメモット・モリを警鐘としてこの世に使わされたのがヨハネだった。

「船を造れ、造るのだ。地上のあらゆる動物をつがいにして船に乗せろ。そして、善き人々と、それだけでいい。新しい星では環境を破壊するな。生き延びるために戦うな...」

看護婦がヨハネの病室にやってきた。

「はいはい、もう寝ましょうね。皆さん、お休みになっけていますからね。明日また聞かせてくださいね」

看護婦は詰め所に戻った。

「今日は、あの患者はいつもより興奮しているわね」

別の当直の看護婦が話した。

「でも、あの方は本当の予言者だったのよね。云ってみれば救世主、わたしたちを救った方なんですわね」

看護婦たちは巨大なドームの上に瞬く銀河を仰いでいた。この火星のマーキュリー・ポリスに移住してきて三年が経っていた。酸素を供給する樹々も確実に育っていた。

第164話 迷走台風

日本は台風銀座だ。今年はとみに台風の当り年で、七月からすでに台風が猛威を振るっている。ようやく六号が行ったと思うと七号が、そのすぐ後には八号と、渋滞していて、順番を待っている有様。整理券を発行しなくてはならない。

そのうち、九号台風というのは、暴風域が狭い、超小型の台風だった。それでも中心より半径十キロは風速三十メートルはある。この小型の台風はすばしっこく、進路が定まらないので、どこへ行くのか予測がつかない。

相沢と池田は土日の休みを利用して、会社の同僚とキャンプに行く予定を立てていた。他に、足立と柳沢も引き入れた。四人は同期入社で、部署は違うが呑み仲間だった。車二台で野郎だけで行くのもつまらない。当然、女はということになる。現地調達で行こうという話もあったが、バーベキューの肉じゃないんだ、そう売っているものでもないし、もし、いいのがいなかったら、せっかくの夏の一泊も面白くない。やはり、社内から安全確実な線で連れて行くべきだ。という話になった。みんな、今年の新入社員の面々を思い出していたが、今年是不作のようだった。ならば、外食するときいつも一緒になる、隣のオフィスビルの商事会社のOLなんかどうだろう。

話がまとまって、調子のいい相沢が営業にでかけた。近くのビルの地下にあるレストランによく女の子たちはランチを食べに来ていた。こっちは相沢について、おとなしい池田も連れてゆく。わざと、隣の席についた。

「チーズ入りニョッキか、なんだこれ」ちらりと隣りを見る。スタイル抜群の二十代前半の四人組がパスタを食べている。いずれもピカーだ。相沢はごくりと生唾が飲んだ。

「彼女たち、何を食べているのかな、おいしそうだね」「フェットウッチーネ・アル・ブッロよ」にこやかに笑って教える。

「そのフェットーチアルでなかった、同じものください」あやうく舌を噛むところだった。くすくす笑っている。これも作戦。

「イタリアンジェラートを食後に奢ろうか。宝くじで当たってさ」と、金のあるところをわざと見せてお隣を誘った。「わあ、本当、嬉しい」あとは、とんとん拍子で、キャンプへのお誘い。相沢の営業は定評があった。

ということで、男四人の女四人がランサーとRVRに乗って、キャンプに出かけた。台風が来ていたので、台風の進路に合わせて行き先を決めようということになった。いずれにしても海に行くのだが、日本海にするか太平洋にするか、迷うところだ。台風が太平洋沿岸を北上しているので、みんなで話し合っ、日本海の方面に走ることにした。

車の中ではもうビールを飲んでいる。運転手二人が犠牲者だ。あとは呑めや歌えやの酒宴。ラップの音楽もがんがんカーコンポで鳴らして走った。なんとなく、自分の好みの子をそれぞれが選んで隣りに座らせていた。すでにカップルは誕生していた。蒸し暑くなってきた。風も出てきて、雨も横殴りだ。

「おかしいな、台風は反対側じゃないのか、ラジオのニュースかけてみるよ」
一小型の台風九号は、ジグザクに日本列島を迷走しています。太平洋側から日本海側に向かっています。依然勢力を弱めておりません。

「本当かよ」みんな後ろを振り向いた。真っ黒いぶ厚い雲が追いかけてくるような気がした。やがて、高速道路から降りて、一般道を走る。ものすごい暴風雨になった。昼間でもヘッドライトを点けて、ワイパーはハイだ。車体が揺れるほどの強風だ。景色も何もあったものではない。どうやら、豆台風の暴風圏内に入ったようだ。

先頭の車がドライブインに入った。後続がそれに続いた。台風をやりすごそうということらしかった。時速五十キロと車と同じスピードでびたりとついてくる台風を追い越しさせて、お先にどうぞとやらねば、いつまでもついてくる。ドライブインはがらがらだった。車から降りて、入口まで走っただけでびしょ濡れだ。

「一体、どうなってるんだ。誰か雨男がいるんじゃないのか」「台風男じゃないのか」みんな、それぞれが少し早い夕食を頼んだ。この雨では外でバーベキューもできない。

「方向を変えようや。ここから太平洋の方に戻ろう。同じルートを走ってもつまらないから、少し北の方から国道を山道にとるんだ。ここからなら、三時間もかからない。暗くなる前にテントを張らないとな」

さっそく、二台の車はスピードを上げて、進路を東にとった。土砂降りの雨と強風は変わらない。そこから抜け出すように、走ったが、一向に雨も風もやまないどころか、ますます強くなっている。大きな川までくると、雨合羽を着た警官がライトを振っている。

「橋の一部が破損して通行不能だから、ここから北へ十キロ走ったところの橋を渡るよりない」と迂回路を指示され、地図にもない未舗装の道をはたがた走らねばならなかった。至るところで道路が川のように溢れた雨が流れていた。どこが道路か、判らなくなる。そのうち、先頭のランサーが前輪を側溝にとられた。側溝も道路もない。何も見えないのだから。男たちが四人して、豪雨の中、車から降りて、脱輪した車を押した。膝まで水に浸かり、靴はずぶ濡れになっていた。みんな泣きそうになる。ようやく脱出すると、今度は慎重に運転していた。そろそろとゆっくりしたスピードで、なんとか橋まで辿りつく。橋のすぐ真下をものすごい速さで川が流れていた。

「怖い」と、女の子たちが震えていた。橋を渡るのも怖かった。堤防はいつ決壊するかしれない。音楽なんか聴いてもらえない。普段あまり聴いたことのないNHKのニュースをずっと流していた。みんな真剣で、ニュースに耳を傾けていて、誰も笑わない、無駄話もしなかった。心配し

て四方の風景を眺めていた。ナビゲーションシステムもいい加減で、地図にない道路を走ってからは、民家もない山道へと入っていった。途中まで舗装していたが、砂利道になると、乗り心地もよくない。おまけにくねくねと曲がる山道だ。ようやく車一台走れるほど狭い道になった。それでも、先頭車は信じてどんどん先へ先へと走ってゆく。木の枝や藪が道路の両側に迫っていた。道のまん中にも雑草が生えているから、その道路は長く車が走っていなかった道路らしかった。

「大丈夫かい。この道でいのかなあ。さっきから道路標識らしいものが見えないじゃないか。それにガードレールもない」だんだんとあたりが暗くなってきた。ヘッドライトを点けても、カーブだからその先が見えない。片側は崖のようだ。もう片側は切り立つ斜面で、なんだか林道のようだった。外は雨風がおさまらない。

一台風は今度は進路を山側にとりました。太平洋の方に向かっています。

「嘘だろう。どうしておれたちに付いてくるんだよ。台風って確かアメリカでは女の名前を付けるよな。誰か、おれたちの中で惚れられたやつがいる」そんな冗談にも笑わない。とんだ休日になった。台風をバカにしてはいけない。

車はできるだけゆっくりと山道を登っていった。もし、向こうから対向車が来たら、どこですれ違うのだろう。運転手はそんなことも頭をかすめていた。すれ違う場所がない。道路に余裕がなかった。いつもは賑やかに喋りまくる相沢も静かだった。柳沢も足立もそれは同じこと。女の子たちはもっと不安で、おどおどしていた。風で枝が車をこする。傷がつくとかつかないとかそんなこともどうでもよかった。早く、この場所から抜け出したかった。道路は川になっていた。そのうち、ヘッドライトにこんもりとした岩や土の塊が浮かびあがった。道路は行き止まりに見えた。いや、そうではなく、崖崩れなのだ。道路は完全に塞がれていた。雨は止むどころか、いよいよ激しくなる。ときおり、片側の斜面から石が転がってくる。車から運転手が降りてきた。池田と足立が話していた。

「ここには危険だ。崖崩れに巻き込まれるかもしれない。引き返そう」

「引き返すって、Uターンはできないんだぜ、一時間以上走ってきた山道をバックで戻るってのか」

二人は呆然として、雨の中で立ち尽くしていた。

第165話 大人を逃げるな

年金を貰える日は郵便局はいつも混んでいた。

「おや、高橋さんじゃないかね」「そういう吉田さん、いつもお元気そうで」二ヶ月に一回は、郵便局で昔の同僚が会う。二人とも県庁を退職して十年。すっかり年金生活者だ。「年金も楽しみにならなくなりましたな、右から左ですわ」高橋老人が歎く。

「おやま、どうしました」

「うちのバカ息子にすっかり送金せにやなんのです。リストラに遭ってから二年も無職。家のローンを代わりに払ってやってるのです。どうしてか、ふてくさりおって、仕事もせんと、ぶ

らぶらパチンコばかり。嫁さんに働かせて、どうしたもんかのう」

「それはそれは、うちも似たようなもんじゃな。三十過ぎて、一人娘が結婚も仕事もせんで、いまだに大学へ入っている。大学なんか二度も入るところかいな。年金から仕送りしなけりゃならんとは情けない」

その話を聞いていた隣りに座っていた婆さんも話に乗ってきた。

「うちもじゃ。全く、困ったもんで、三人もいる息子のうち、長男は四十面下げて、家にいるんじゃ。わしが養っているもので、小遣いまでせびるのよ。仕事はないからいうてな。次男、三男は家売って、早く財産分与しろって煩いし、これもいい年こいてアルバイトだ。仕事もころころ変えて、ナニ考えているだか」

「似た話はどこにでもあるものな」と、また隣のじいさんが話に加わる。「うちでも、夫婦で転がり込んできて、サラ金に追われてな、結局こっちで田畑売った金で始末したはいいが、家のこともしない、仕事もしない、夫婦して居候とはごきぶりが住み着いたも同然」

「最近の中年は何を考えているんだか」声を揃えて溜息まじりに云った。

いつまでも子は子、親は親、子供が中年になっても子育てが終っていないとは、大変な世の中になったものだ。

吉田老人は連れ合いを早くに亡くしているから、老人の独り暮らしだ。少ない年金から大半を仕送りしたあとは、まあ、家賃がかかるわけでもないし、病気をするわけでもないからと、月に二万円をやりくりしてなんとか生活している。独りだから飯の仕度も面倒くさい。スーパーの開店と同時に他の年寄りたちと競争して、お惣菜コーナーへと走る。昨日の売れ残りが、三袋どれでも百円になっている。それだけあれば、あとは御飯だけ炊いていけば、年寄り一人充分食える。一日二百円の食費で済む勘定だ。好きな酒も安い焼酎をちびりとやっているだけ。タバコは節約のため止めた。光熱費も使わないから基本料金で済む。あとは図書館通いで好きな本をただで読む。

親がそこまでして息子のために節約しているのに、そのバカ息子がふらりと家に戻って来た。「どうしたんだ」「おれたち離婚したから、子供は向こうが引き取った。それで、家は売っ払って、養育費代わりにあいつにみんなやった」「何も聞いちゃいないぞ。そんな大事なこと、相談もせんで」「相談したら反対するだけだろう」「仕事はする気がないのか」「ろくな仕事がないだろう。洗い場とか、掃除とか、旗振りとか」「おまえも早稲田大学まで出てなあ」「一文なしだから暫く家に厄介になるよ。いいだろう」

蕩児の帰宅だった。聖書では温かく迎え入れるところが、吉田老人は裕福ではない。

本当なら働き盛りの男が、ぶらぶら家にいる。よくも疲れないものだと思うほど、いつか買ってきたコンピュータゲームで朝から遊んでいる。

「たまに、外の空気を吸って来たらどうだ」と、老人が勧めると、息子は手を出す。パチンコ代をせびるのだ。働かないくせに文句だけはつける。

「親父よ、もう、スーパーの見切り品の飯なんか喰いたくねえよ。もっとましなもの喰わせろよ」そして、云うだけ云って、自分だけは高いウイスキーを買ってきて飲んでる。金は次々に出てゆく。

息子の乱費はいまに始まったことではない。育て方が完全に間違った。それは親の責任だと、老人は年取って、息子に復讐されているように思った。知らないうちに、学生時代のように、年金をせびって、パソコンを買ったり、DVDを買ったりして、勝手に愉しんでいた。ただ、大変なのはケイタイからクレジットから、月々の支払い請求がどっと上がったことだ。「親父、親父」と昔のように甘えてくるのはいいが、この先どうするつもりなのだろうか。何度息子と話し合いしても埒があかなかった。

「そんな、運転手なんかしてられるか。親父の友達の会社なんか、ツテで行きたくねえよ。おれの教養が邪魔してな。もっと頭を使う仕事ないのかよ。県庁に口利いてさ。それより、おれ、車買うからな」

吉田老人はいい加減頭にきて、わなわな震えていた。

「その金は誰が払うんだ」「決っているじゃないか、親父だよ」

息子がパチンコに行っている間にセールスが来た。

「こちらに大きなゴキブリがいると近所で聞いてきたのですが...」

「なんですか、その大きなとは失敬な」老人は慄然とした。

「わたくしどもは本来はゴキブリ駆除の会社なんですけど、家の中にいるダニのような居候とか、大人になりたくないピーターパンとか、大人を逃げているモラトリアム人間も退治して差し上げております」

吉田老人は目を丸くして、いろんな商売があるものだと感心して聞いていた。

「簡単に駆除できます。この居候ホイホイを使うのです。火のないところに水煙。害は全くありません。三日間、騙されたと思って使ってみてください。息子さんは必ず、自分が嫌になってこの家を出てゆきます」

「どんな成分が入っているのだ。最近はインチキ商品が多いからな」

「それは企業秘密で申し上げられませんが、匂いを嗅ぐうちに、いてもたってもいられない気持ちになります。煙で精神的に焦らせるのです。やる気の出ってくる匂いの成分も発散させます」

本当かどうか、吉田老人は三日分の居候ホイホイを購入した。高い買物だった。

「また負けたよ」と、バカ息子が夜、パチンコから帰ってくる。密かに、老人はホイホイを水の中に浸しておいた。煙が、なんだか懐かしい匂いとともにも漂ってきていた。

「親父、飯はまだかよ。うん？ なんだよ、この匂いは、ううっ、苦しい」

息子は床に倒れて苦しみ悶えていた。あまり苦しむので使用方法を間違ったかと、老人は説明書を見てみた。

「使用説明書 この薬品は、絶対に四十才以上の方には使用しないでください。四十過ぎて、ぶらぶらしている人は死ななければ治りません」

第166話 世代交代

橋本尚太郎は五十過ぎて思うことがある。最近の親戚を見れば長生きしてきたから、自分の人

生の折り返しは今ではないのかと。つい一昔前なら、四十が折り返しかもしれないが、このままでは平均寿命も五十年後には百歳になるかもしれない。あと半分と思うと、自分の子供の頃らいままでを振り返って、人生の長さを知るのだ。ここまで来た分をまた戻る時間なのだ。

橋本家の親族の中でも尚太郎の位置はまんなかにある。今年に入ってからでもすでに親戚の伯父叔母が三人も亡くなっていた。いずれも数えで九十五とか九十とか長生きだった。曾祖父は八十九で、祖父は九十で、祖母は九十七で亡くなっている。長生きの家系だから、自分もそれ以上は生きられると思っている。

父尚一は今年八十五になる。母みさは今年八十一と健在だ。まだまだ死にそうにない。尚一は老人大学へ熱心に通って勉強しているし、みさもその年で英会話を習い、パソコンまでやろうとしていた。着る服も若い。まだきゃぴきゃぴしたところがあって、とても老人には見えない。

「橋本一族で次に迎いが来るのは誰だろうね」母と尚太郎が食後に話していた。

「年の順番からいって、明石の叔母が九十二、田部の伯父さんが八十八、造道の叔母が八十七…」と、数えてゆくと十指に収まらない。

「一番の長老を忘れていないかい」と、みさが思い出す。

「そうか、森の叔母がいた、今年で九十六だったかい。それと連れ合いの岩五郎さん、九十九だ。白寿の祝いしたのかな」

「ほらね、まだまだ予備軍が控えているだろう」

これから十年経つと、親戚の伯父叔母がバタバタと一ダースも死ぬ勘定になる。忙しいなど、尚太郎は思った。それと、自分の娘息子を含め、姪や甥たちの結婚式が目白押しだ。これから十年間で尚太郎の三人の息子と娘ひとは年頃になるからいつ結婚してもおかしくない。姉妹の子供らも九人順番待ちだ。やはり一ダースはゴールインするのだ。礼服喪服の準備をしておかなければならない。いつ、急に必要になるかもしれない。

そんな話をしていた矢先に最長老の九十九の森忠兵衛がぽっくりと逝った。夏の暑さの中で肺炎といったが、老衰に近い。天寿を全うしたのだ。悲しいというよりめでたいのかもしれない。ただ、せめてあと一年生きて新聞にでも出てもらいたかった。

忠兵衛の草焼きでみんなが火葬場に集まっているとき、ケイタイが鳴り、千葉にいる次男から電話だった。

「お父さん、実は同棲していた彼女に子供ができちゃって、六ヶ月だというんだ。向うの家には知らせておいたけど、まあ、いずれ一緒になろうと思っていたから、入籍するから。」

「なんだよ、そんな大事なことをケイタイで話すなよ。しかも、これから骨上げするということに。」

「森のおじいちゃん、とうとう亡くなったんだってね。それでも、こっちには時間がないから、来週、そっちへ帰って、式を挙げるから。」

「なんだって、披露宴をやるってのか。」

「うん、略式でね、友人と親戚だけ集めて、簡単にね。お腹が目立ってきているから、いましかないんだ。式場は八月の暑いときはガラガラだって、親友がみんな手配しておいたよ。」

世はスピード時代とはいえ、まるで犬猫同士のように、来週やると簡単に云ってくれた。尚太郎は考えがまとまらないでいた。当節の若いものたちは何を考えているのか判らない。とてもつ

いてゆけないと、尚太郎は溜息をついた。

結納もない、仲人も立てない、印刷物はパソコンですぐ出来る。会員制だから持ち出しなし。招待状を貰った人は日付を見て驚く。すぐに返信しなければ間に合わない。あとはすべて発起人の友人たちがやってくれるという。

一応、葬儀が終ってから、尚太郎夫婦は次男の嫁の実家に挨拶に行った。初孫が今年には産まれるのだ。その準備やお祝いも考えねばならない。その足で、森家の納骨、法事に尚太郎と両親も出席した。初七日、二七日と身内だけできちんとやる。田舎だから、親戚も散らばってはいないので、すぐに集まれる。

結婚式の当日がやってきた。朝から尚太郎はそわそわしていた。礼服は貸衣装で正装することにした。女房は和服だ。美容院にでかけていない。初めての子供の結婚式だから、両家を代表しての挨拶を紙に書いて、暗記したりしてもおちつかない。他県に就職した息子たちもみな帰ってきて、家の中はそれだけでなく賑わっている。娘も、何を着たらいいか、とっかえひっかえ、ファッションショーをしている。遠い親戚も列車で到着する。車で駅まで迎えに行った。昼は出前に寿司でも取る。

と、そのとき、家の電話がけたたましく鳴った。尚太郎が出た。一なんだって？ 森のおばあさんも亡くなったって。急に、昼前に、判った、いまから行くから。大変だ、婆ちゃん、爺ちゃん、森のばあちゃん、先刻、死んだって。

居間で寿司を食べていた家族は口に寿司をつっこんだまま立ち上がった。尚太郎は老父母を車に乗せて、森の家に急いだ。結婚式は三時からだった。まだ、時間はある。森の家には近所の親戚がさっそく詰め掛けていた。じいさんが死んでまだ二七日も過ぎていない。

「こんな忙しいときにすみません」と、従姉妹たちが出てくる。

「おまえ、ネクタイが白だぞ」と、尚一に注意される。そう思って、黒のネクタイを持ってきていた。玄関で黒のネクタイに替える。エンビ服は少しおかしい。

「このたびはおめでとうございます。息子さんが結婚するそうで」と、お悔やみに行って祝福される。

「ありがとうございます。今日はお日柄もよく、何を云っているんだ、叔母さんは残念なことをしました。ご愁傷様です」尚太郎も混乱していた。

「ばあちゃんね、じいちゃんの後を追っていったのよ」従姉妹が泣きながらそう云った。「そういうことってあるんですね。仲のいい夫婦ほどそうだとか」

亡骸はやすらかに眠っているようだった。すでに葬儀屋がきて、日取り時間などを事務的にてきぱきと決めていた。線香をあげて、尚一夫婦は読経までしていた。親戚が続々と集まってきていた。ネクタイが白いものがある。式に呼ばれているのが多い。白黒入り乱れていた。お茶を啜りながら、突然の死をみんなで悼んでいた。腕時計を見ると時間がない。「もうすぐ三時だ、向うの親戚との顔合せがあるんだ。式場の別室でね。もう、みんな待っているだろうね、急ごう」

尚太郎と出席する親戚たちはそれぞれタクシーなどで会館へ走った。バタバタと、会館に着いた車から降りて、別室へと急いだ。真夏の三十五度もある日だ。どっぴりと全身に汗をかいていた。息も切れて、はあはあと、みんなの集まる席についた。花嫁の家族親戚がずらりと並んで

いる。尚太郎は向かい側の席の中央に妻と座った。そして、尚一夫婦とすでに来ていた息子たち、尚太郎の姉妹と着席した。向うの家族全員の視線が、尚太郎の黒のネクタイに集まっていた。「あなた」と、妻が横からどつく。尚太郎は慌てて、黒いネクタイを、ポケットから取り出した白いネクタイと替えた。それから、咳払いして挨拶した。

「本日はどうも、ご愁傷様でした」

第167話 死んだ子の年

長い間、眠っていた弟のことを書かねばならない。書いてはならないこととして、秘めてきたことも、年月が許してくれそうだ。

わたしは四人姉弟の三番目で男一人だった。上に姉が二人、妹がいる。女ばかりの姉弟に男一人だから何かと不便もあった。小さいときは姉のお下がりのネッカチーフをつけていた。女の子は頭にマチ子巻きとしてかぶるのが流行った。「君の名は」がラジオでヒットしたときのわたしの写真がある。後日、みんな姉だろうと譲らなかったが、ネッカチーフはかぶっていても、コール天のオーバーオール胸にカーボーイの刺繍があるのは、紛れもないわたしだった。幼稚園でも女言葉を使うからと母親が呼ばれて注意されたほど、両親共稼ぎで忙しかったせいで、わたしは女の子として育てていた。ままごとをしたりお人形さんと遊んでも何の違和感もない。姉はだいぶ後に、「うちは、若草物語と同じだから」と、わたしを女にしていた。人間にはアニマもアニムスもあるというが、幼児のうちはその境もない。

わたしは弟がたまらなく欲しかった。それはもっと大きくなってからで、仕事のこと、親のこと、いろいろあると思出すのは死んだ弟の茂のことだった。

おふくろは八十になっただけでも、毎年、祥月命日になると、茂のことを言い始める。女はいくつになっても母親であることを忘れない。今年は、生きていれば四十六になるんだねと、死んだ子の年を数える。

弟は昭和三十年の三月に生まれてすぐに死んだ。いまなら助かったらしいが、妊娠中毒で産まれてきた哀れな子だった。

わたしは四歳だったが、そのときの嬉しさは判然りと覚えている。当時はあたりまえだが、産まれるのも死ぬのもみんな家の中だった。生と死がいつも身近にあり、その騒々しさも子供ながらに強烈な記憶として残っている。

わたしたち子供は、うるさいからと、産まれてからは母と子のいる部屋には入れないでいた。数日してようやく許されて入ることができた。弟が産まれたのがよほど嬉しかったとみえて、近所の子供たちも沢山引き連れて見せていた。赤子はおふくろの側で白い布を顔に被せられて眠っているようだった。わたしは近所の子供たちに、いちいち白い布を取って、茂の顔を見せて自慢していた。おふくろは泣いていたのか、笑っていたのか、そんなわたしを「ばか」と云った。すでにそのときは弟は死んでいた。

喜びが悲しみに変わる落差は大変なものだったろう。親父はあまり泣くことがない人だったが、そのときばかりは大声で泣いたという。

その夜、わたしたち姉弟は六畳間の隅に屏風を立てて寝かされた。屏風の間隙から姉と覗いていたのを覚えている。僅かな祭壇を作り、そこに赤ん坊の遺影まであった。階下で喫茶店もやっていたので、コーヒー豆の入ってくる木の小さな樽に茂が産着を着せられたまま、玩具やクッキーと共に入れられていた。夫婦だけで寂しい通夜をしていたのだ。一晩中、電灯を点けていたから、屏風を遮光のために立てたのだ。

「おまえたちが、うるさくするから亡くなったんだよ」と、よく云われた。出たり入ったりよく騒いだのは本当だった。長く、わたしが殺したと思いこんでいた時期もあった。そうではなかったことが、後に判ってくる。

「あの子は死ぬべきして産まれてきたんだよ」と、おふくろはいまになって話した。茂はアンドロギュロスだった。女陰と男根を両方持って産まれてきていた。奇形児が産まれたことは、昔はその家の業だといって、けしって口外しなかったことだ。だから弟がいたとは親戚でも知らない者がいる。

死んだ子は親と共に年をとる。生きていればあの人ぐらいと比べる。母親の習性は老いてもなお悲しいものには違いなかった。

第168話 切れる 一鉄しきは四十九歳

四十九歳の抵抗という小説もあった。父は永遠に悲愴という詩人の名言もあった。父とはどこかでいつも孤りで闘っている。

「レントゲンは別状なしですな。血糖値が異常、コレステロールも多いと、血液検査ではひっかかりました。」

医者は健康診断の結果と胸部レントゲンの写真を前にわたしに説明していた。

「血圧が高いのと目眩もそれが原因ですか？」恐る恐る訊いた。

「まあ、それだけではなく、ストレスもありましょうが、少し体脂肪が多いようなので体重を落としてください。肥満が原因にもなります」

わたしに食事制限の紙が手渡された。肉ダメ、卵ダメ、菓子類、酒、油…。食べられないものが多い。その上煙草まで、死んだほうがまだ。

会社に戻ると緊急役員会が開かれていると戦々恐々としている。

「課長、部長が呼びです」そら、来た。何か悪い予感がする。前回の第二次リストラ策の数値目標と進行状況で注意を受けるのは目に見えている。部長は応接室にひとりいた。

「総務課長、君の提出したリストラ案はありゃなんだ。パート社員を切るだと？ むしろパート社員は残すべきだろう。古参の年齢と給料の高い順に切ってゆくのが本当ではないのかね。頭数ではないんだ。機動性を残した人件費削減という意味が判っているのかね」

判りすぎるほど判っている。憎まれ役はいつもわたしだ。

「わが社はすでに沈没しかけたノアの方舟だよ。このまま全員乗せて心中するか、荷を軽くして半分でも助けるか。もう悠長なことは言っていられない。今週中に解雇辞令を持ってくるんだ」この人は判っているのだろうか。現場の苦しみを。いつからか残業打ち切り、わたしでさえ休日返上で働いている。人員削減のしわ寄せがひとりひとりにかかってきている。昇給賞与なし。会社は赤字。遊休資産は売れない。労組があってもすでに腑抜けのご用組合。いま、どこの会社も

従業員に負担がかかっている。人間が一番粗末に扱われている。

わたしはその夜、部下を集めて、

「今日は大事な話があるから、わたしの奢りで居酒屋にでも行こうか」と、滅多にないことを口にした。

「真面っすか。課長の御馳になるのも悪くないっすね」去年入社したばかりの新人も、いつものタメ口で返す。年功序列も愛社精神も崩壊して、口先だけで汗水流して働くことのない若者と、コツコツやって報われない中堅社員との空回り。

酒がはいるがあのかことは発表できない。みんなカラオケ居酒屋で歌い騒ぎ、聞く耳も持たないだろう。わたしは無理にがぶ呑みして酔いにまかせた。

「課長なんかいつも演歌でしょう。ロックなんか知らないよね、ラルクとかグレイとか」

「馬鹿にしちゃいけない。わたしだって若いときはピンク・フロイドやビートルズを聞いた。いきなり四十九になったわけじゃない」

わたしがむっとして言うと、

「そうよ、課長ってさ四十九なのよね、切れやすいから怖いわよ」女子事務員にまで馬鹿にされる。明日、失職するとは夢にも思わず。何を言ってもいい、許してやる。すまん。

酔ってご帰宅。血相変えて女房出てくる。「あなた、こんなときにどこへ呑みに行ってたのよ、孝弘が大変なの、万引したって警察から引き取りに来いって」女房はおろおろしている。まさか長男の孝弘が。

夫婦で夜遅く、タクシーで警察に赴いた。「一体どんな教育しているんですか、態度が悪い、反省の色もない、初犯でなければ書類送検しているところだ。十七歳で来年受験でしょうが、こんな大事な時期にゲーセンで夜遊び、挙げ句の果てにゲームソフトの万引き、付き合っている連中は暴走族の札付きですぞ」

わたしたちは深々と頭を下げて、息子を引き取った。あんなに素直な孝弘が裏でこんな悪事をしていたなんて、我が子に限ってという常套句が出てくる。知らぬは親ばかりなり。あまりのショックで本人を怒る気にもならない。

それでもこんこんと説教をすると、孝弘は人が変わったように、わたしを押し倒して、

「るせえんだよ、ケイタイの金欲しかったんだよ。おまえのような安月給じゃ可哀想じゃん」

「なんてこと言うのお父さんに」

親子三人で揉み合う。食器棚が滅茶苦茶に割れた。

会社に女房から電話。今度は娘の中学に呼び出しだ。病欠とは嘘で虐めによる不登校。いまは先生の指導で保健室登校はしているとのこと。知らなかった。

一あたりまえよ、日曜も休みなしで、夜遅く帰ってくる父親に何が判りますか。親子の会話どころか、子供の顔もろくに見ていないくせに。それで、わたしの教育が悪いですって。ようやく判りました。しばらく実家に帰らせてもらいます。女房も珍しく怒っている。

「課長、この辞令は何ですか。わたしたちがどうして辞めなきゃいけないんですか」古い社員が詰め寄ってくる。しどろもどろの不甲斐ない自分。血圧が上がってくる。震えと怒り。弱く大人しい自分に対してか。

「うるさい、みんな黙れ、ばかやろう」わたしは爆発した。すると、頭の中で何かがぶつんと切れた。殴られたような痛み。目の前が暗くなると、「課長、大丈夫ですか、誰か救急車」という声も遠くなり、わたしは倒れながら、自分が消えてゆく。死ぬとはこんなことなのかという思いも薄れてゆき。

第169話 浅虫怪談

浅虫名物といえなくじら餅と幽霊と言ったら怒られるだろうか。いろんなミステリーゾーンを紹介した本の中でも浅虫はよく怪奇スポットとして取り上げられている。陰湿なイメージで観光地の売り込みにはマイナスだとおっしゃらずに、逆にそれを売りにしたらいい。昔から出る出ると言われている名所のわりにはそんな噂は聞いたことはない。

わたしはミニコミ誌の編集を仕事にしていた。来月号の特別企画がこの浅虫の怪談を取り上げようと、取材に海辺の湯煙の町を訪ねた。浅虫温泉駅で列車を降りたのが、夕方。サンセットビーチに夕焼け橋か。確かに陸奥湾を茜色に染めて綺麗だった。海水浴場帰りの若い人たちとすれ違う。誰か地元の子供にでも聞いてみたほうがよさそうだ。ちょうど浅虫のネームのはいった小学生の女の子が歩いていたから、それとなく尋ねてみた。

「幽霊が出るっていう場所知らないかな」

女の子は妙に強張った顔をまっすぐ向けて、「うちにいるよ」と言った。冗談を言うような顔ではない。「犬猫じゃなく、あのね、幽霊なんだよ、幽霊」「そうよ。誰も信じないんだから」女の子はむくれたように顔を背けた。「だったら、おじさんに見せてくれないかな。雑誌の取材で来たんだ」「いいわよ、近くだからついてきて」とことごと女の子は先に歩き出す。本当かな。元来わたしは幽霊なんか信じない。占いも、宗教も。きっと何かカラクリがあると勘ぐるほうだ。この二十一世紀になろうというときに、科学的に解明できないものはない。

女の子の家は水族館の近くにあった。新築の家で、白いいま流行りのテラスつきの家だ。途中、近所の子とすれ違っても挨拶もしない。変わっている子だった。玄関からどうぞと通される。女の子から話を聞いて、奥から若い母親と老婆も出てくる。わたしは名刺を差し出し、匿名にして名前を出さないと、こちらの取材の仕方を一方的にまくしたてた。

「それでわざわざ娘に付いてきて」と、若い母親は突然ケラケラ笑う。老婆も笑っている。やはり騙されたんだ。赤面しながら玄関につっ立っている自分がバカらしい。帰ろうとすると、この家の主人がご帰宅だ。奥からは中学の息子も出てくる。じいさんまで顔を並べる。取り囲まれてしまった。話を聞いて、勤め帰りの主人も笑った。一斉にみんなどっと笑った。もういい、失礼しますとドアのノブを掴みかかると、

「いいでしょう。お見せしましょう」

急にみんな押し黙って、主人から切り出してきた。「まさか、もうからかうのだったら帰ります」わたしは半ば不機嫌になっていた。「でも、見える人には見える。あなたは幽霊を信じていますか？」主人は真面目な質問を向けてくる。

「そうですね、見たら信じます」

「そうですね。みなさん同じ答えです」

主人は信じてもらえない失望感を顕わにした。

「それでは暗くなってきたんで、外を案内しましょうか。出るところへお連れしますよ」「あなた、いいんですか」と、母親が制止しようとした。「いいんだよ、どうせ誰も信じないんだから」何か訳がありそうな会話が気になった。

庭から出したワゴン車に主人と娘と三人で乗り込んで、車は旧道のトンネルの方へと向かった。

「ほら、あのトンネルを出たところで、昔、交通事故がありましてね、一家三人が花火大会の帰りに亡くなったんですよ。有名な話です。何が有名かと言うと、その後、夜中にここを通るタクシーがよくその三人を拾うんだそうです。あまり不気味なんで、坊主を集めて、供養をし、事故現場には、ほら、地蔵さんが祀られた。これは当時、全国ニュースにもなりましてね」

墓地を過ぎて坂を上り、やがてトンネルにさしかかろうとするとき、突然娘が苦しみ出した。「パパ、パパ」と助けを求めている。「そら、おいでなすった。感じませんか。強い靈気です。娘はここに来るといつもこうして金縛りに合います」わたしは見えない靈気に対してむやみやたらにカメラのシャッターを切った。背筋が逆撫でされたように、ぞくとした。

車をUターンをして猛スピードで引き返した。すると娘は汗びっしょりになってはいたが、終わったように息をついていた。

「次に、水族館に行く山道です」

「そこはさっき来た道でしょう」「そうです。道は一本しかなかったですね」主人の説明通りに車は水族館までの坂道を大きくカーブして上っていった。するといきなり後方から暴走族の車が三台、ワゴン車をクラクションを鳴らしながら追い抜いてゆく。林の中に道路は二股に分かれていた。黒い三台の車は左へ入っていった。ワゴンもその後を追ってゆく。「解りますか」と主人は冷静に話しかけてくる。「さっき一本道と言いましたね。途中からこんな左に入る道なんかないんです」また、からかわれている。でも、確かに一本道だった。ワゴンは何十分も出口のない山道を走り続けた。こんな道はあったろうか。やがて、ワゴンは死亡事故現場という看板の前で止まった。花が添えられてあり、巨大な観音様がバックミラーに映っている。辺りは林で、ぽつりと一軒だけ古びた医院が建っている。

「ここは、どこなんです」怖々とわたしは主人に訊いた。

「さあ、どこなのでしょう。さっきの暴走族ですがね、彼らは平内で事故死した連中ですよ。帰りたくても帰れないでああして死んだ場所まで誰ということなく連れてくるんです。」ワゴンはどこをどう走ったものか、気が付くと遊園地の交差点に降りてきていた。「今夜は家に泊まって、ホルターガイスト現象をご覧になりませんか」「それは」「ドアが勝手に開いたり、廊下を走り回る物音がするのよ」娘も慣れているように冷静だ。

「け、結構です。これだけ取材できれば」

わたしは途中で降りてもらい駅の方に一目散に駆けた。旅館の中から、床屋の婆さんも、町の人々が一様に笑ってわたしを凝視している。駅員までが、意味ありげな笑みを浮かべて。「青森まで一枚」「ふたりですね」駅員は言った。「一人です」「ふたりでしょう」えっ？ とわたし

しは後ろを振り返った。

第170話 語り継ぐもの

太宰治は嫌いな作家の一人だった。

芥川賞を懇願する手紙や、太宰の書簡集を読めば、女々しく、とても読むに耐えず閉じてしまう。それに私小説作家全体が嫌いなので、自らの周辺を何度もこねくりまわしては形を変えて恥を晒すのも、読んでいてこちらが逆に赤面してくる。青森は私小説作家の生まれる風土があるのか。代表する作家が三人もいる。

何年も前に趣味で書いていた小説が佳作に選ばれたことがあった。そのときの選者が私小説作家で、新聞の評に「どうして体験したことのない戦争ものが書けるのか」と、批判していた。わたしの父の戦記を書いてみたかったのだが。体験しなければ書いてもいけないのか。戦国の時代小説はどうなんだ。太平洋戦争だけは歴史の中で特別なタブーでもあるまいし、虚構に置き換えて悪いのか。わたしは憤慨した。

わたしの友人で小説の新人賞を狙ってせっせと書いているやつがいる。彼も私小説で、自分の浮気をしっかり同人誌に書いてしまったので、それを読んだ奥さんから離婚届を突きつけられたというやつだった。自分のことは自分では面白いかもしれないが、他人が覗いてもつまらない方が多い。みんなそれぞれ自分だけの小説を生きるのに忙しいのだ。

それでもテレビのワイドショーと同じで、聴衆は人のプライバシーを覗きたがる。読書家も小説に飽きれば、小説家の日記や書簡を読みたがる。生々しい、どろどろした部分は太宰もそうだが、あまり期待ではない場合が多い。何故ならすべて書いたものは発表されることを意識して書かれていることが多く、いわば業務用の日記であり手紙なのだ。それゆえ、残って困るものは自らの手で焼却する。太宰も随分原稿を焼いたに違いない。作品と生き方が錯綜し、死んで完成をみると言った人生＝小説を生きた作家ほど本当の恥部は見せないものだろう。すべて狡猾に計算されて自分のショーを終えるのだ。

その嫌いな太宰の本をよく読んだのは、大阪に就職した若い時分だった。父と小野正文先生は昔から交友があり、先生よりいただいた本を大阪に持っていったので、滅多に読まない太宰をひもとくことになる。郷里を遠く離れているノスタルジアもあったが、仕事が忙しくねぶたも正月も帰れないでいた頃、青森の作家の本を読みあさった。四畳半で寝ころんで太宰を読んだとき、涙さえ出た。精神的に弱っているときは不思議と太宰に共感するのは、そこに太宰の秘密があると思う。

わたしの周辺には太宰の証人たちが沢山いた。亡き叔父は後輩であったし、太宰に芸者を紹介した玉屋の親父さんは卒中、家に来ていた。浅虫に住んでいるので、近くにいる小館善四郎さんにはよく呼ばれて、商売の本を届けに行ったりしている。皆、九十近くになってしまった。おふくろとソロプチで一緒だった園子さんですら半世紀を越えて、太宰を知る者はだんだんいなくな

ってくる。彼を知るものがいなくなって作品だけが語り継ぐ。それだから私小説作家はこの世に自分を残そうと書いている。アリバイは不在証明だが、作家のそれは存在証明なのだ。

わたしは現在、青森で古本屋を営んでいる。店の入口の五十円均一の特価本の中に、太宰もいる。三島も井伏も三浦哲郎も。石坂洋次郎は売れない。読まれなくなった。これから活字離れも進んで、二十一世紀にどれほどの作家が生き残るだろうか。太宰だけはいまでも若い人たちがそれでも買ってゆく方だ。作家が死して本を残し、さて、風化しないで百年それ以上残し続けるものはどれくらいあるか。近年、小説は売れない、読まれぬ。店の片隅に追いやられ、仕舞いには潰される運命を辿る。残るとはどういう意味があるのだろうか。最近、そのことばかり考えている。

第171話 猫を踏むな

ドクター中里は、たまの連休を愛妻を連れて、一泊でドライブに出かける。町医者は急患があれば、日曜も祭日もない。それで、患者には事前に知らせておき、連絡がつかない隣県にドライブするようにしていた。歴史に興味があり、史料館や史跡を訪ね歩くのが趣味でもあった。子供のいない夫婦も五十を過ぎて円熟してきていた。いつも、旅行には愛犬のナマステを連れてゆく。

高速道路を使うと隣県も一時間足らず。高原の町には夕方頃到着するだろう。古い城跡と石畳の坂のある、風雅な町だった。小京都と呼ばれている人口一万人弱の町だった。標高五百メートルのところにこじんまりと町が見えてくる。対向車もないのが不思議だった。車は殆ど走っていなかった。寂れたドライブインがあったが、電気が消えているので、潰れたのだろうか。すると、いきなり、黒い猫が車の前に飛び出した。車は急ブレーキを踏んだ。ドクターは目を瞑った。

「やったかな」と、何か跳ね飛ばした衝撃を感じて、車を止め、車の下を覗いてみたりしていたが、どこにも猫の死体はない。

「おかしいな、確かに轢いたような気がしたんだが...」

町の入口にあるガソリンスタンドで給油しようとして入った。電灯が点いているからやっているのだろう。ところが、誰も従業員が出てこない。クラクションを鳴らしたが、トイレでも入っているのだろうか、暫く待ってみたが、出てこないで、痺れを切らして、ドクターは事務所に入っていった。

「誰かいないのか。ガソリン満タンにしたいのだが」

事務所内のテレビは点けっぱなし、漫才で笑っている。

「なんだ、無用心だな」ドクターは諦めて、町へと入っていった。不景気な町だった。街灯は点けていない。殆どの商店はシャッターを下ろしていた。人も歩いていない。あちこちの小路にきらきら光るものが、いくつも見えた。

「あなた、怖い、何よ、あの光は」

すると、ナマステが突然吠え出した。光るものは一斉に見えなくなった。

「猫じゃないのか。目がいくつも見えた。城下町、石畳、坂のある町には何故か猫が多いんだな」ドクターが云った通り、あちこちの軒先に猫がたむろしている。人影がないのが気になる。

「ともかく、宿にチェック・インだ」

旅行会社を通して予約してあった和風旅館は武家屋敷の一角にあった。車が路肩に停まっているから、住民はいるのだろうが、日没になっても、どこの家も電灯が点かないのが不気味だった。人の気配がしない町だった。

宿には電灯が点いている。フロントに男の人がひとりだけ立っていた。目がつり上がっている毛深い男だった。

「中里様ですね、お待ちしておりました。食事はもう用意してございます。シャムの間です」キラキラと目が異様に光る。

「武家屋敷を改造したんですな。風情があっていい旅館ですね」

と、ドクターが誉めると、「ありがとうございます」と、男は嬉しそうに、ごろごろと喉を鳴らした。

他に客はいないようで、何故か仲居さんもいない。男がひとりで行っているような気がした。お膳に並べられた料理は、山菜もあるがマタタビの漬け物に川魚、魚料理が多いのが気になる。

「それにしても、この町は静かですな。みなさん、どこに棲んでいるんですか」

ドクターは飯をよそおう男に尋ねてみた。

「ここは、観光でも最近の不景気で商売にならず、若い人は都会へ、出稼ぎも多いんで人口はめっきりと減りました」

「猫が随分と多いんでびっくりしましたけど…」中里夫人が訊いた。

「町長が動物愛護協会をやっておりまして、近頃の加熱したペットブームの反面、捨て猫も多いのに嘆き、全国に呼びかけたんです。捨てたり、殺したりする猫を引き取ったんですよ。それでやたら多くなりまして。人間共は動物の命をなんとも思っていない。玩具のように扱って、飽きたら捨てる。そんな人間たちを許すわけにはゆきません」男はいつか、髪の毛を逆立てて、ふうと息を荒くして怒っていた。

「今夜も、少し煩いかもしれませんが、我慢してお休みください。ひとつだけ、注意しておきますが、猫を刺激しないようにしてください。くれぐれも、猫のしっぽを踏むなどということのないように、お願いいたします」

中里夫妻は云っている意味を理解していなかった。

宿の風呂に入ろうとしたら、中里夫人の悲鳴が聞こえた。ドクターが女湯の脱衣場に入ってゆくと、風呂の中まで猫でいっぱいだった。

「なんて旅館だ。猫を風呂に入れるなんて」ドクターは怒った。廊下にもうようよといつのまにか猫がいる。好奇心の旺盛な猫たちは、どんな客が来たか、わざわざ集まってきたのだ。

仕方なく寝ることにした。外の通りで猫の大合唱が始まる。春先でもないのに、フギャー、ゴロゴロと何百匹かしの猫の逢い引きだ。それだけではなかった。天井裏をバタバタと走る猫から廊下を何かネズミでも追いかけるような足音が夜中ひっきりなしに聞こえた。眠れない。完

全に頭にきたドクターは、廊下に出ると、その辺にあった棒で、猫を追い払った。

「煩い、あっちへ行け」

猫はフギャーと鳴いて散らばったが、姿勢を低くして遠くから襲いかかるような仕草をしていた。襖を閉めてまた眠ろうとした。

真夜中に、何か側にいる気配で中里夫人が目覚めた。部屋の闇の中に無数の光るものがこちらを睨んでいるのではないか。

「あなた、ねえ、起きて、おかしいのよ」と、ドクターを起こす。ドクターはがばっと飛び起きると、電灯を点けた。夫人は悲鳴をあげてドクターに抱きついてきた。

「何なのだ、これは、一体」猫が数え切れないほど、すでに部屋に侵入してきていた。襖は開いていた。猫は前足で襖を開けるのだ。隙間から見ると、廊下も猫でびっしりといっぱいのようにだった。すぐにフロントへ電話を入れる。通話音がしない。電話線は噛み切られていた。ドクターはそっと障子を開けて、外の様子を伺おうとした。窓ガラスにいきなり猫の顔が張り付いていた。旅館の屋根も、庇も庭も塀の上も、外の通りも猫で身動きがとれないほどだった。旅館の二階の窓から見ただけでも、何千、何万の猫がいるものか見当がつかない。

「いいか、いまから、ここを脱出する。この町は明らかにおかしい。猫を刺激しないようにして、そっと抜け出すんだ」ドクターは小声で夫人に云った。猫たちは襲う様子もなく、毛づくろいをしていたり、じっとこちらを見ていたりしていた。

二人はこっそりと音を立てないように、洋服に着替えた。旅行バッグを持つと、ドクターが先頭に立って、そろりそろりと猫の間をすり抜けるように、歩を進めて行った。

（くれぐれも猫のしつぽを踏まないように）と云ったフロントの男の言葉を思い出していた。廊下から階段も猫たちでびっしりだ。夫人はドクターに縋り付くように後ろからついてきていた。フロントのカウンターの上も、玄関も下足棚まで猫だらけ。静かにドアを開ける。外も猫で足の踏み場もない。目をランランと輝かせて二人をじっと睨んでいる。足で猫を踏まないように進ませるのが困難なほどだった。車まであと三メートルだった。車のドアに手がかった。車の屋根にまで猫が座っている。車の側で、愛犬のナマステが体を引きちぎられて血まみれになって死んでいた。夫人は目を覆った。ドクターもあまりの無惨さについて、声を上げそうになって、口を押さえた。なんとか、ドアを開けて、車の中に滑り込んだ。夫人も後に続いた。車に乗ってしまうと、ドアにロックして、エンジンをかける。カーラジオが、深夜のニュースをやっていた。一〇県の△町はすでに住民の避難は終わった模様ですが、国道は閉鎖して、△町への道路はすべて封鎖いたしました。未確認の情報ですが、数名の旅行者がすでに△町に入ったということで、警察は確認を急いでおります。猫の異常発生は、ペットを捨てた人間への報復であると、全世界が注目しております。猫の駆除に自衛隊が出動している模様です。尚、今回の犠牲者は二千人を超えて、行方不明者の搜索も、夜明けと共に進められるようですが...

車はゆっくりと、猫を轢かないように、前進していた。通りは真っ暗で、ヘッドライトを点けると、道の向こうが見えないほどの猫が浮かび上がった。

笹田さんはリストラに遭ってからは、全く仕事をする気がなくなって、専業主夫になった。奥さんの方が、保険会社のセールスレディのベテランで稼ぎは前よりよかった。同い年の友達夫婦だったが、建築会社を二十年勤めて出されるころも奥さんの方が高収入だった。亭主が平社員のとときに奥さんは営業所長までやっていた。

「いいよ、家にいてもいいんだよ。子供も来年は中学だし、暫くあなたの好きなようにしていれば。焦りと腐るのが心配だから、仕事はチャンスというものがあるのよ。それまで、じっくりと探そうよ」と、云ってくれる奥さんの言葉に甘えて、暫くは家事をすることにした。

この市で一番大きい製紙会社がやはり操業短縮と人員整理を打ち出した。人口の二割が、なんらかの形で、製紙会社で働いているから、いきなりその半分のカットされると云えば、人口の一分が失職することになる。この市では大変なことだった。女子のパート社員は現場が多いから極力残すことになった。切られるのは男子社員でも賃金の多い中堅以上。奥さんがパートで残り、亭主が失業という現象が各家庭で起こった。

「あらあ、瀬川の旦那さん、チラシ商品を買いに来たんですね」と、笹田さんはエプロンをつけて、近くのスーパーに朝一で並んでいた。

「笹田さんは、何を狙って来たんですか」

「卵38円だろう。先着五十名様様の洗剤198円、缶詰どれでも5個で360円」笹田さんはしっかりとチラシの特売に赤丸をつけてきていた。

「これも安いよ。ナフキン夜用290円、化粧水も頼まれて」瀬川さんは少し顔を赤くした。

「奥さんのものばかりか、レジに出すの恥ずかしいだろう」

「そんなこと、もうプライドは棄てたから、みんな」と、照れ笑い。

「おお、先を越されたか。一番乗りと思ったのに」と、云う声で振り向けば、赤ん坊をおんぶした敦賀さん。こっちも恥ずかしげもなく、奥さんのピンクのエプロンをつけてきていたが、お守の赤ん坊まで。

「おお、大きくなったな。何ヶ月だい」

「八ヶ月だよ」

「伝い歩きするか」「いや、まだだ、おれに似て頭が重い。色男だろう」赤ん坊が寝ていたのが起きて泣き出した。「おお、よしよし」「騒がしいから起しちゃったな」

「今日は、離乳食とミルクに紙おむつのタイムサービスに来たんだ」

「みなさん、買出し部隊ですな」と、自転車でやってきたのは市役所を首になった橋本の旦那さん。

「今日の目玉は中国産の鰻の蒲焼ですな。大三匹がタレ付で780円」

「それは、土用の丑の日の売れ残りでしょうが」と、みんな笑う。

ずらりと開店前に並んでいる顔ぶれに主婦の姿はなかった。殆どが中年の男性だった。

四人はこの市の高校の同期生で、よく井戸端会議もするし、互いの家を行き来していた。

「午後、家に集まらないか。四人揃ったところで、たまに麻雀でもやろうよ」

ということで、笹田さんの家にエプロン姿の主夫たちが集まった。アイスコーヒーとクッキーが出た。

「このクッキーうまい。笹田さんの手づくりかい。よく大儀がらないで造るよなあ」

「ああ、その白ボン」「毎日まいにち、何を造ろうかとそればかりが大変だよなあ」「その中ボン」「そうなんだよなあ、料理番組ばかり見ているが、あんなの材料が高い。ところで、菓はまだパイも出ていないよなあ。持っていたりしてな」

「まあ、敦賀のところは結婚が遅かったから、まだまだこれからかかるし、先が長いよなあ」

「仕事、みつかったかい」「やめようや、そんな暗い話」「ツモ、大三元」「ほらな、友達がいないやつもいるし、みんな自分のことしか考えていない」

なんだかんだ云いながら、ちらりちらりと時計を見ている。そろそろ夕食の仕度に取り掛からねばならない。

みんな帰ったあと、笹田さんは家庭訪問に小学校の先生が来るのを思い出した。息子が帰ってくる。ランドセルを玄関に放って遊びに行く。

「こら、待ちやがれ、ランドセルは自分の部屋だろう」と、追いかけてようとしたら、ドアが開いて担任の先生。まだ若い綺麗な先生。

「どうぞ、中にお入りになって、お茶でも」

「いいえ、玄関で結構です。どうぞ、お構いなく。謙一くん元気でいいですよ」

「全く、乱暴なやつで、イジメなんかやってないでしょうね」

「いいえ、みんな仲がいいですよ。ほら、この前、参観日にお出になりましたでしょう」

笹田さんは、父親ばかりぞろりという参観日を思い出した。

「うん？ 何か匂いませんか」と先生が云うから、「しまった、鍋かけていたんだ」と、笹田さんは慌てて台所へ走った。手遅れで、煮魚が真っ黒。そのうち、外の方からオルゴールの音色がした。幼稚園バスの到着だ。

「すみません」と、笹田さんは家の前に幼稚園バスのお迎え。近所の旦那さんたちがみんな出て待っていた。年中さんの娘がぱたぱたと走ってくる。

「こんにちはは？」と云う言葉も聞かないで、先生の間をすり抜ける。靴も揃えないで居間に入っていた。

「おやつはクッキーとプリンだよ」と、笹田さん。先生はくすくす笑っている。

風呂の掃除もして、お湯を入れた。いつもは七時には帰ってくる奥さんも帰ってこない。おかずに冷める、お風呂が冷める。時計だけが気になる。

「宿題やったか」と、息子の勉強もみてやっている。娘とはテレビゲームを一緒に遊ぶ。時計が気になる。十時だ。

「さあ、みんな寝るんだぞ。おしっこしてな」すでにソファで寝ていた息子を起こして、洗面所に連れて行く。歯磨きもねぼけてもさせる。

笹田さんは、奥さんを疑っていた。仕事の接待で午前様になることはたびたびあったが、何か夫婦生活がなくなってからは、笹田さんを拒絶する性の向うに見知らぬ男の影がぼんやりと見えていた。笹田さんは、冷蔵庫からビールを出してひとり、つまらないテレビを見て呑んでいたが、零時を過ぎてからは、ウイスキーのストレートに切り替えた。

一時を回ってから、タクシーの停まる音が外でした。奥さんの声で、誰かに、楽しかったとか

なんとかお礼している声がしていた。タクシーが行ってしまうと、玄関が開いて、酔った奥さんがご帰宅。笹田さんは怒って、食卓の椅子に座ったまま、動かなかった。

「あなた、ごめんね、待っていたの、先に寝ていてよかったのに」

笹田さんは奥さんの顔も見ないで背中で冷たく云った。

「お風呂もぬるくなかったけどあるから、おかずは冷蔵庫」

「食べてきたから、お風呂にするわ」奥さんはハンドバッグとジャケットをソファに投げるようにすると、シャワーを浴びにバスルームによろけながら行った。笹田さんは、投げ出したハンドバッグから使い捨てライターが出ていたのをみつけた。手にとってみると、有名なホストクラブの店名が印刷してある。亭主が収入がないことをいいことにして、自分だけ遊び歩いていた。子育てに炊事洗濯、掃除と毎日報われない家事をしている自分が恥ずかしく惨めなものに思えてきた。そして、いままた奥さんに男の匂い。少なくとも証拠の品をつきつけられて、笹田さんは動揺していた。

「ああ、さっぱりしたわ」と、奥さんがバスタオルを体に巻いて出てくる。笹田さんは、無言で使い捨てライターをテーブルの上に置いた。

「遅くなるなら、電話くらいしたっていいだろう」

「そんな、取引先の専務さんたちと一緒にだったのよ、旦那に電話すると云えないじゃない」

「男と一緒にホストクラブへ行くのか。おかしいじゃないか。どうしていつも嘘をつく」

「何よ、こっちだって毎日ストレス溜まる仕事しているんですから、たまに息抜きしたっていいでしょう」

笹田さんは、もう日頃の不満が限界まで高まって、爆発寸前だった。

「わかった。もう沢山だ。実家へ帰らせてもらう」そう笹田さんは云い棄てるように二階に上がっていった。

「勝手にしたら」と、奥さんも怒ってウイスキーをぐいと呑み、乱暴にタバコの煙を吐いた。

女は一人でも生きて行けるが、男は一人では生きてゆけない。いつも弱者は男。女に頼る男が増えていた。ジェンダーフリーが行過ぎて、世は女性社会になりつつあった。

「パパ、出ていったの?」と、翌日、娘が奥さんに訊いた。

「そうよ、もう帰らないかもしれない。でもね、心配いらないの、ママね、もっと料理の上手なパパを連れてくるからね」

「ほんとう、もっとジャニーズ系のパパね」と、娘も嬉しそう。

そんなものだった。

北村家のカレンダーは一日ずれている。それは昔からの習わしのようなものだった。時計を進ませておく人がいるが、あれと同じだった。いつも時間にルーズな人はわざと五分、時計を進めておく。それでも一日遅らせておくのは大変だ。貰ったカレンダーを曜日はそのままに、日にちだけ一日ずらすよう、母親の秀子は鋏を入れて切り貼りする。

北村家では貧乏人の子沢山で上が中学、下が保育園の今時珍しい六人の子供がいる。亭主は長距離トラックの運転手で、月に何回もアパートに帰ってこない。運送屋も以前は高給取だったが、過渡競争になってからは、東京までの箱ひとつが百円になるなど、ガソリン代も出ないほど旨味がなくなる。高速道路の費用が出ないので、下の国道をのんのんと走る。渋滞に巻き込まれないよう、昼はパーキングエリアで寝て、夜中走る。そんな亭主を持っているので、生活費もままならない。秀子は内職にハンカチの縁かがりや、DCブランドの名入なんかしていた。ブランド商品も種を明かせば、こんなボロアパートの一室で、内職でやられているのだ。それも一枚につき何円にもならない。時給計算したら、スーパーのレジ打ちの方が倍以上は貰えるだろうが、子供が小さいから、家を空けるわけにもゆかない。

家計を維持してゆくためには、ケチに徹しなければならない。

「お母さん、やめてよ、近所の人々が笑っているから、お願いだから、やめて、サランラップを洗って干してまた使うの」とは、中学の長女の弁。

「いいじゃないか、スーパーに行ったら、袋も余計に貰ってくるし、割り箸もスプーンも、貰えるものはなんでも貰ってくる。その分、おまえたちに少しでも栄養あるものを食べさせてやれるじゃないか」と、云いながら、エプロンのポケットから、ビニールに包んだ総菜などを出してくる。

「まだやってるの、恥ずかしくないの、そんなこと」

あちこちから出てくるビニール包みは、スーパーの試食品を素早く包んできたものだ。それは、長女の弁当のおかずにもなる。

「何云ってんだい、悪いことをしているわけじゃあるまいし」

「それだけじゃないでしょう。ペットにあげるからと、大根の葉っぱ貰ってきたり。わたしたちペットなの？」娘は泣き出しそうな顔をしていた。

「大根の葉っぱは味噌汁に入れたら美味しいじゃないか。栄養もあるし、母さんはね、いつもおまえたちの健康を考えているのさ」

「嘘、お母さんはケチなだけよ」と、多感な年頃の長女は泣いて外に出る。

近所でも評判だが、当然学校でも話題になり、それで長女はクラスのみんなから笑われている。秀子は溜息をついた。「まあ、そのうち、判る年になるさ」

小学校六年の長男もだんだんと判る年頃になって、気むずかしくなってきた。騙しがきかなくなる。

「母ちゃん、おれ、今日さ、学校で恥かいたよ。子供の日は昨日だったんだね。友達と今日だって云い合いして、先生にも聞いたんだぜ」

「世間は世間、うちはうちだよ。地球がどっちに回ろうが、うちはうちの暦なんだよ」

長男は何か解せない。

「さあ、みんな、ちまきだよ。今日は端午の節句ってね、鯉のぼりの小さいのも買ってきたからね」

秀子はそっと半額シールを剥がしていた。すると、長女が学校から帰ってきて、皮肉っぽく云った。

「あんたたち、騙されちゃいけないよ。昨日が子供の日だからね。うちのカレンダーが一日遅れているのは、お母さんが半額に値下げするのを待っているからなんだ。うちは、クリスマスは二十六日、元旦は二日、雛祭りは四日なんだ。クリスマスケーキもお節料理も、ひなあられも、みんな売れ残りの半額以下で買ってくるためなんだ。でもね、お母さんは狡いから、誕生日には本当の日付は云うの。—あら、昨日だったの、来年は忘れないからねって。覚えているかい、正月も、お年玉をせびると、本当の日付で、過ぎてしまったと云うだろう」

「そんなこと云いでないよ。父ちゃんの仕事もうまくゆかないし、おまえたちもこれから金がかかる。爪に灯ともしてやらねば喰えないんだよ」

「北村さーん」と、玄関で呼ぶ声。秀子が出てみると、電力会社の人。

「六日が収納期限で、電気を止めますから」

「今日は五日ですよ。明日には払いますから。ねえ、おまえたち」

「そうだよ、おじちゃん、子供の日のお祝いやっているんだよ、いま」

「あれ、おかしいな、連休続きで判らなくなったかなあ」と、電力会社は首を傾げて戻っていた。

「ほらね、いいときもあるだろう」と、秀子は得意げ。

翌日、次男が、引き出しを開けていると、宝くじが出てきた。

「母ちゃん、こんなもの出てきたよ」すると、秀子の顔が明るくなった。

「どこにあったんだい。ずっと捜していたんだよ。十万円の当たり籤。これで電気料金が払えるよ」

引き替え期限は六日だった。

「よし、ぎりぎりだ。さっそく取り替えてくるとするか」秀子は勇んで出て行こうとする。

「母ちゃん、今日は本当は七日だよ」三男が後ろから間の抜けたように云った。

第174話 カリキュレーター

最近また見合いが増えているという。出逢いがなく、婚期を逃したものの、バツイチの再婚組、ケイタイ、メールばかりで、オンラインは得意でも、オフが苦手な人が多くなっているから、結婚・見合いビジネスは大繁盛だ。

樋口正夫と、浜田晃子もその口で高い会費を払って、見合いに漕ぎつけた。正夫は三十六歳。年収八百万、家も車もないが婆もいない。国立大学を卒業して、銀行でコンピュータのプログラマーを長くやっていたが、測量会社に転職した。痩せ型、ど近眼らしく、牛乳瓶の底のような眼鏡をかけていた。一見して真面目で、堅物、神経質と直立不動人間だった。女に縁があるようには見えなかった。

一方、晃子は三十三歳。フリーでライターをやっている。女子大は出たが就職難で、バイトで出版社を渡り歩くうちに、そのツテができていた。ときには体も張る。男も何人踏み台にしてきたかしのれない。遊びすぎて、気がついたら、みんな周りは結婚して子供までいる。焦りはしないが、まあ、してもいいかな、ぐらいの気持ちで見合いした。美形で寄ってくる男はばっさばっさと斬るタイプ。知的で冷たい線が挑む男を構えさせる。実は資産家のひとり娘で金には困らないが、家風が嫌で家には帰っていない。自由気儘に生きたいタイプだった。近づく男にろくなのがないから、会に依頼してみたというわけだ。

お見合いは会の係が設定してくれて、都内のホテルのレストランで夕方から始められた。正夫はかちかちになっているようだが、係の人に「緊張していますね」と、云われても、それが正夫のポーズだから仕方がない。反対に晃子は足を組んで、斜に構えてくれたポーズだった。短めのスカートから生足が伸びている。晃子は初対面の男を試すように、足を組み替えたりして、その視線の動きをテストしていた。それでも、正夫は全く反応を示さない。二人の自己紹介が終ると、係が帰り、二人きりになった。

「タバコ、吸っていいかしら」と、晃子は相手に一応断る。

「どうぞ、自分は吸いませんが、構いません。タバコ一本の煙に含まれるニコチンの含有量が、ふかす場合だと、その周辺に及ぼす影響を計算しますと、セブンスターのマイルドで六畳間の換気の悪い密室で至近距離にして、0.004mg。致死量に達するためには...」

「いいわ、タバコは嫌いなんでしょう」と、晃子は揉み消した。

「いいえ、すみません。自分はただ、つい癖で計算をしてしまうもので、嫌われます」

「あなたは何月生まれなの?」

「自分は、六月七日生まれであります。計量記念日で、それもなんらかの縁があるものと思います。測量の仕事もそれで与えられた天職とっております。浜田さんは何月生まれですか」

「わたしは、九月一日よ」

「二百十日ですね。そうすれば、...生後12353日目ですね。時間で計算すると、296.472時間になります」

「あら、すごいわね、暗算でねえ、面白い。わたしのサイズは判るかしら?」

正夫は、ちっともいやらしい目つきではなく、まるで物体を目測するようにじっと見ている。

「はい、身長163センチ、BWHはそれぞれ88.58.92、足のサイズは23センチ。それから質量をざっと計算すると、体重は52キロ」

滅多なことでは赤面しない晃子も、このときばかりは少し紅潮した。

「すごいよね、ズバリだわ」

晃子はなんだか、この男に奥の奥まで実測されているようで、気味悪かった。

フルコースが運ばれてくる。晃子はすでに正夫は結婚相手ではないと思っていた。ただ、たまに珍しいやつとして、友達に玩具として紹介するのはいいだろうと思っていた。「ねえ、ほかに何か面白い趣味とか、特技なんかないの」と、晃子はすでに甘えた口調で玩具にしていた。

「自分ですか、そうですね、カロリー計算が得意です。このポタージュスープは180カロリー、サーロインステーキは800、ロールパンにバターで190、サラダが105、ブランマンジェのデザートが240、食後のコーヒーが70、締めて1585カロリー、この夕食だけで、成人の平均的摂取量のすでに66パーセントを摂ることになります」

「便利な方」晃子は一家に一台のコンピュータ人間もいてもいいかなと、少し心を動かされていた。

「銀行をどうしてお辞めになったの」

「銀行も財テクを始めて、トンネル会社や、幽霊会社と汚いことをしていたのが許せなかったのです。もっと安全有利な投資をするべきでした。いまにどんどん潰れるのが目に見えていましたから」

堅い男だ。真面目で信用ができそうだ。こんな人になら、将来、浜田家の財産を管理させてもいいかもしれない。男たちの中には少なくとも、晃子に入る財産目当ての男もいたのだから、正夫のような無欲な堅物が配偶者には向いているのだと、晃子は確信していた。夫婦生活は面白くないかもしれないが、それはいままで通り外で遊んでいればいいことだ。とても、嫉妬したり縛ったりする人には見えない。亭主は恋人とは別ものだ。分けて考えると、樋口正夫は自分の夫に適格者かもしれない。晃子はそう思うようになっていた。プレイボーイタイプの男は周りにいくらでもいる。飽き飽きしていたところだ。

「浜田さんはどうしていままで独りでいられたのですか」

「自由が好き、囚われることなくね。でも、田舎の両親が煩いのね」

「それは自分も同じです。でも、女性の場合は38年の耐用年数があります。初潮から閉経までの女性として認められる子孫繁栄の受精可能賞味期限ですね。ホルモンの分泌及びお肌年齢も含めて、定率法でゆきますと、毎年0.0263の指数で逡減してゆくことになります」

晃子は頭の中が混乱して、この男の思考回路にとっても付いてゆけないと笑っていた。

「わたしは、あと十五年しかないわけね。あなたには負けたわ。今度、またお逢いしましょう。楽しかったわ」

晃子が心底そう云うことは珍しかった。二人は次の約束をして、見合いの席で別れた。

晃子を見送ってから、同じホテルのバーにいて、正夫はある人物にケイタイで連絡をとっていた。いつのまにか背広とネクタイを取ると、ラフなカジュアルに替えていた。髪形もきちんと

七三に分けていたのをトイレでオールバックに直していた。牛乳瓶の底のような眼鏡を取ると、そこには全く別人の樋口正夫がいた。

「おれだよ、おれ、今度のカモは案外簡単に引っかかるような感じだぜ。いつもとパターンを替えてみたんだ。ちょろいもんだよ」

バーに待ち合わせしていた派手な女が入ってきた。

「正夫、待った」と、後ろから声がかかった。正夫はケイタイを切ると、女の肩に手を回して、「いいところへ行こう」と、バーをあとにした。

第175話 夜食症候群

女だけではない。寂しい男も夜肥るのだ。最近の子供も四割は朝御飯抜きだった。夜中まで夜食を食べ続け、胃が翌朝にもたれるから、どうしても朝は食欲がない。食事のパターンは完全に現代は夜型になっている。

桜田貴志は、朝はギリギリまで寝ていた。目覚時計は出勤の十分前に鳴るようにセットしてあった。夜が遅いから、朝はどうしても起きれない。台所続きの六畳間に万年蒲団、台所の流しには食器が山積み、それをどけて洗顔。髪を直す時間もなく、ネクタイを締めてばたばたと出かける。朝御飯は食べている時間はない。駅まで歩いて十分。体重百キロ近いから、歩いているだけで、汗が流れてくる。運動不足もあって、駅の階段を駆け上がるのも辛い。満員電車で貴志の存在は敵視される。余計、車内を暑苦しくしている。

会社はパソコン・ゲームの制作会社。一日中、パソコンに向かったの仕事だから、デスクワークでますます肥ってくる。会社のほかのゲーム・クリエイターにも肥満は多い。どうしても、ストレスが溜まる仕事だし、頭を使っても体を使うことはない。しかも、仕事中でもポテチやコーラがぶのみは普通だった。個室に閉じ込められて、ブロイラーや豚のように飼育されているような感じもしていた。苛々した分をおやつで解消しているのだ。デスクの引き出しには、ブロックチョコや、タバコばかりやたら吸うから、のどアメも欠かせない。そうしたスナック菓子がびっしりと入っている。

昼は会社の近くのバイキングの店に入る。昼から千円くらいで食べ放題が嬉しい。朝、食べない分、昼にどっとくる。三人前はぺろりと平らげているのだが、食べ放題はいくら食べたか本人は分量が判らない。

桜田貴志は肥っているから、女性には縁がなかった。スポーツもしないから、趣味といえばグルメ志向で食べ歩きくらいか。自分でも料理を作る。食べるということ以外には何の関心も示さなかった。二十代ですでに不健康な生活にずっぴりと浸かっていて、成人病にならないのが不思議だった。

仕事は残業も多いが、八時には終る。それから駅裏の定食屋に同僚と駆け込む。おかずは一皿いくらと決っているから、勘定して食べられる。御飯だけは食べ放題なのがよくて毎晩そこに寄っていた。貴志はそこでも丼飯を三杯はお代りする。おかずがなくなったら、最後の一杯は胡麻塩だけかけて詰め込む。初めはみんなは、貴志の食欲を何か馬か牛でも見ているように危険さえ

感じたが、慣れてしまえば気にもしない。呑み込まれそうな口を見なければいいのだ。

貴志はアパートに帰ってくるのが、大概是十時を過ぎる。部屋は乱雑で掃除もしていない。食べカスや殻が屑入れに山になっていても平気だった。パソコンと周辺機器がある。雑誌が平積みになっているが、すべてアニメ系か食べ物関係。それと、テレビとゲーム機が畳の上にべたりと置いてある。蒲団の中で寝そべってやっているのだ。

あれほど食べても、夜になると腹が鳴る。いつもなら買い置きのカップラーメンなどがあるのに、このときは切らしていた。冷蔵庫を開ける。冷凍、冷蔵庫いずれももの見事に食べつくされて空っぽだった。入っているのはドレッシングや味噌だけ。食器棚の中も探してみる。米も一粒もない。外食が多いから、自炊はあまりしない。

食べるものがないとなれば、貴志の食欲はますます強く、食べ物を求めるようになる。仕方なく、二十四時間営業の唯一のコンビニまで歩いて行くことにした。腹は悲しげに泣く。スーパーでの買出しは日曜しかできなかった。金曜日になると在庫が切れることはたびたびあったが、綺麗に食べ尽くしたのは珍しい。コンビニまでわざわざ出かけてきたのに、店内改装のため三日間休業の張り紙。自動販売機はドリンクとタバコだけ。困った。足のない貴志は遠くまでは行けない。近くに飲食店はあっても九時頃にはみんな閉店だ。深夜までやっている店はない。仕方なく、貴志はまたアパートに戻ってきた。

こんなときは、諦めて寝るに限ると、蒲団に潜りこんだのはいい、空腹感とたまらない食欲でなかなか寝付けないでいた。頭の中をご馳走がくるくると回る。あれも食べたい、これも食べたいと空想が余計拍車をかける。がばっと飛び起きて、電灯を点けると、何かないのかと、家捜しが始まった。口に入るものなら何だっていい。ないとなると無性に食べたくなり、自制心さえ失いかける。

「ない、ないのかよ」と、気違いのように大きな図体で台所に這いつくばう。ようやく、食糧らしきものを見つけた。片栗粉だった。それも袋に少量。それでもいい。なんでもいい。貴志は、お湯を沸かして、カップに砂糖と片栗粉を入れて、葛湯を作った。それもたった二口分よりない。却って食欲を刺激して、その苦痛は増大するばかり。ごきぶりの死体とともに、とろろ昆布の袋も出てきた。「これは、いつのものだろう。まあ、腐るものではないだろう」と、お碗にダシ醤油を入れて、とろろ昆布を加え、お湯を注いで、お吸い物をこしらえた。それがまた格別にうまかった。

「ダメだ、ないのか、ないのか、何か喰うものが、ないのか」こんなことなら、もっと賑やかなところにアパートを借りるのだったと、いまさら後悔している。空の冷蔵庫を何度も開けては閉めた。体がふらふらしてくる。口の中が渴いてくる。いてもたってもいられない。部屋の中を檻の中のカバのようにうろろしていた。

「食べ物、食べ物」と、うわ言のように云い続けて、もう目にモノが見えない状態になっていた。

桜田貴志は総合病院の一室に入院していた。両腕は拘束衣で自由が利かない状態で隔離病棟に転がっていた。医師が二人、彼をガラス窓を隔てて様子を窺っていた。

「最近の若い男性に急激に増えた精神性過食症でしょうが、それにしても困った病気ですな」

「断食療法で、克服してもらうように治療中ですが、これといった薬がみつかりません」肥満の彼の体は幾分か痩せてきていた。それでも、食欲の意志はまだ強く残っているようで、獣のように、「ガウ、ガウ」と唸りながら、のた打ち回っていた。貴志の指は食いちぎられて、五本ともなかった。

第176話 親父狩り

夜更けて、私鉄の駅に降りたサラリーマンたちが、帰る方角が一緒のものたちが、ひとつの集団を作り、まとまって歩いていた。集団下社が始まっていた。小学生でもあるまいし、いい年をした中年族がまとまって帰宅するのも、親父狩りが増えたからだった。

最近、不況の煽りをくって、若い者たちの就職がなくなった。とみに柄の悪い若者は土木建築の不況で、ますますなくなってきていた。手っ取り早く、遊ぶ金欲しさに親父狩りをするのが、巷のチーマーたちの間に流行した。酔っ払って、ひとり歩いているサラリーマンが一番危ない。やつらには格好の獲物だった。親父も地震、雷の怖い番付から落ちも落ちた。優しい親父たちが増えて、いまでは、母親より下にランクしていた。まだ、子供の方が怖い。暴走族はじめ、無謀な若者が社会からオミットされ、アウトローになる。仕事がないのが一番の原因だった。権威失墜した親父たちが狙われるのは、いままで誰も考えなかった、穴だった。襲ってみると、案外弱い、それでいて金は持っている。若者にとって、親父たちへの不満解消にもなる。こんな社会に誰がした。大人への敵意がそのまま、親父に向けられていた。

その日、斎藤孝史は取引先と呑んで、終電で帰ってきた。二軒梯子したので、メートルも上がっていた。真っ直ぐに歩けないほど酩酊していた。駅のベンチで一服している間に、集団下社組はみんな帰ってしまい、斎藤一人取り残されていた。駅の階段を降りるのも辛い。よろけ、掴まりながら、ようやく暗い住宅街に出た。周りはまだ新興住宅街で、空地が目立つ寂しいところだった。駅から自宅までは歩いて十分。よろよろと鞆を抱いて歩いていた。歩いてゆく先に、エンジンをかけたままの、車が三台停まっていた。いずれも、黒のツヤ消しで、シャコタン、エアロをつけた改造車。ナンバープレートも斜めで見えないようにしてある。数人の男女が道路を塞ぐように立っていた。髪は色とりどり、穴の開いたジーンズ、ツナギ、迷彩服、いずれもサングラスをかけているが、いかれた若者たちだった。

斎藤は、彼らを気にもせず、間を通り抜けようとする、
「おっさんよ、金、貸してくんねえか」と、七人に囲まれた。
斎藤は、かなり酔っていたが、その言葉が意外だった。

「なんだと、金を貸せってか。嬉しいね。いままでそんなことを人に云われたことがなかった」と、その場でおいおいと泣きだした。泣き上戸でもあった。そして、リーダーの男に抱きついて、

「ありがとう、そんな目でわたしを見てくれて、大変ありがとう」と、親愛の情たっぷりに頬づ

りまでした。

「何しやがんでえ、うえー、酒臭え。何なんだ、こいつは」

普通なら、ひるむ相手が逆に出たから一同後退りして、身構えていた。

「いやあ、すまん。おじさんは嬉しいんだ。金を貸してくれと、いままで、どんな思いで銀行の窓口へ通ったことか。どこも冷たく貸し渋り。あちこちへ貸してくれと頭を下げて、土下座までしたんだ。いつも惨めな思いをしてばかり。それが、どうだ、こんな潰れかかった零細企業の親父に、金を貸せと云ってくれる。嬉しいなあ。いままで誰にもそんな言葉もらったこともなかった。金を持っていると思われたことが嬉しい」

斎藤はそう云いながら、背広の内ポケットから財布を出して、逆さにして振っていた。空財布からは埃も出ない。

「残念だが、無一文でな、貸してやりたいところだが、今日も、取引先に励まされて、只酒だ。一度でいいから、自分の金で呑みたいよ。ヒック、たまにはなあ、おまえたち日本を背負ってゆく、若者たちに奢ってやりたいよ」

と、斎藤は若者のひとりにまた抱きついた。そして、ほっぺにぶちゅーと接吻した。

「うわー、汚ねえ」若者は飛びのいた。

「おじさんは、若者が大好きだ。若者よお、体を鍛えておけー」と、歌まで出てくる。

「ざけんじゃねえ、やっちまおう」と、リーダーが拳で殴りかかった。酔っている斎藤は、ふらりとストレートパンチを交わして、倒れそうになる。その足に躓いて、リーダーが路上に倒れた。

「野郎」と、切れた若者たちが、一斉に四方から殴りかかろうとした。斎藤はうっと口を押さえて、その場にうずくまったから、全員相打ちになった。頭にきた一人が斎藤の胸倉を掴んで立たせると、顔面めがけてパンチをくらわせようとした。そのとき、斎藤は気持ち悪くなって、相手の顔面に反吐の先制攻撃。ゲーッと、四方八方にゲロを撒き散らした。若者たちは一斉に離れて逃げ惑う。

「うわー、汚ねえ」辺りに異臭が発散して、みんなパニックになった。

「ごめん、ごめん。ズボン濡らしちゃったな」と、斎藤は、その場でズボンを脱ぎはじめた。下はステテコだ。しかも、夏でも腹巻き。

「これは、かあちゃんに叱られるなあ。うっ、悪酔いしちゃった」ズボンのポケットから、何日も洗濯していない、くしゃくしゃになった汚いハンカチを取り出すと、

「顔にかかったものは誰だったかな、すまなかった、拭いてやるから」と、ぺっぺっと、ハンカチに唾をかけて、近くの若者を捕まえて、顔を拭こうとする。

「やめろ、やめろったら」若者は半狂乱になって、斎藤を振り切って逃げた。

「何で、みんな逃げるんだあ、おじさんが嫌いなのか、なあ、うちの子供たちも汚いって嫌うが、おまえたちもか」と、よろよろと若者たちに寄ってゆく。今度はボリボリと頭を搔いていた。すると、辺りにフケが撒き散らされた。

「おい、今度はフケだぞー、寄るな、寄るな、あっちへ行け」みんな叫んで逃げ惑う。

「おじさんも、人間なんだ、どうして逃げる」

「うわー、おやじだ、おやじだ」と、まるで化け物でも見るように、若者たちは怯えていた。

全員、車に乗り込むと、エンジンをふかして、急発進して逃げた。

それから、この附近ではめっきりと親父狩りは減ったような。

第177話 孤独なコレクターたち

モノは所詮モノ以外の何物でもない。という理屈はコレクターたちには無意味な命題だった。彼らにはモノはそれぞれ命以上に大切なものであるから、自分以上のものであり、親より子供より、時には神以上のものでありえた。

役場を定年退職した間山にとっては、それは本である。自宅を改造して図書館まで作るという蔵書家だった。郷土史を中心に三万冊の本を分類して目録まで作っている。四十年かけてせつせと蒐集したきこう本もあった。

医師でやはり息子に病院を継がせて、自分は趣味事に没頭している太田はオーディオマニアだった。広いリスニングルームに巨大なスピーカー・システムを何基も設置して、アンプやプレーヤーが所狭しと並べられ、アナログ・ディスクからCDなどが壁面にびっしりと収納してあった。数百万するシステムを海外から取り寄せたり、医者でなければできない道楽を生涯してきた。

ホテルのオーナーの西田は、やはり二代目に経営は任せて、自分は好きなカメラいじりをしてきた。クラシックカメラの蒐集では全国に名を知れているコレクターだった。自宅にガラスケースの展示場まで設けていた。その中にはマニア垂涎の的の貴重なライカがずらりと並んでいる。

この三人は同じ市の高校の同級生で、七十近くなっても、趣味は合わなくても、よく集まり、呑み歩いた。

どんなに仲がよくても、お互いの趣味には無関心で、理解しようとしめない。読書をする人間が百人にひとりいるかいないかという今日び、ビブリオマニアは超マイノリティだった。

オーディオも、中年から年寄りの趣味になってしまい、やれ管球式がどうのという、アナログ派でも骨董品になりつつあった。

カメラもデジカメになってからは、従来のカメラは一部のマニアのものになってしまう。それを蒐集するとなると、金がいくらあっても足りない世界で、余程裕福な人でなければ入りこめない。

いずれの趣味も周りを眺めても友達がいらない。せっかくコレクションを持っていても自慢する相手がいらないのだ。手当たり次第に声をかけて、家に遊びに来るように誘う。言葉に乗せられてお邪魔した人が犠牲者になる。いる間、自慢話で欠伸びが出てくる。一応、口では、

「すごいですなあ、このカメラは三百万で出ていたそうで、われわれ凡人には判りませんなあ」と、感心してみせているが、どうでもいいから、早く帰りたい。一度、呼ばれた者は二度とお邪魔しない。判らない者にどう自慢しても、そのよさや価値が判らない。どう見てもガラクタにしか見えない。そんなモノに大金を費やすのがバカに思えるだけだった。

そこで、この三人が集まって、勝手に自慢話をするだけのことで、そこには被害者はいない。

「この前、思わぬ掘出物があってな、手作りのアームを二十万で買いました。カートリッジもいいのが付いていましたよ」太田がそう云っても、あとの二人は相槌を打つが、聞いていない。

「武井の豆本が函付で、限定十部のものが偶然、目録に出ましてな、さっそく注文しました。五十万は安かった。半値で落手しました」

「ふむふむ」と、あとの二人は空耳。

「わたしなんか、ハッセルブラッドの名機を、あなた、インターネットのオークションで落札しましたよ」

そう各自勝手に喋りあいながら、酒を呑む。誰にも迷惑はかからない。と、突然、太田が下を向いたまま黙りこくった。

「それにしても、虚しいなあ、趣味とはなんなのだろう。自己満足かなあ。誰かに見せてやりたいのだが、誰も興味のある者が周りにいない」

「同感、同感、ですなあ」

その太田老人がぽっくりと亡くなったのは、翌月だった。みんなの専らの話題は、時価数千万ともいうオーディオ機器と、一万枚は下らないSPLPレコードの行方だった。太田の葬儀一切が終わったある日、太田の家の前に大型のトラックが横付けされているのを二人は目撃した。太田未亡人がてきぱきと若い者たちに指示していて、いろいろと家から運び出していた。何事かと、二人は夫人に訊いてみた。

「ステレオやレコードは、どなたかに譲るのですか」

「いいえね、邪魔なものだから、リサイクルセンターを呼んだんですよ。そうしたらバカにしているじゃないですか。全部で、たったの五万円というじゃありませんか。主人は、これらを買集めるために、いままで家を三軒建てられるほどの投資をしていたのに。業者の云い分では、壊れたら部品もないし、修理もできないとかなんとか」

二人とも啞然として、コレクションの最後を見送っていた。

コレクターの配偶者は、どこもコレクションに対して、理解あるどころか、敵対視しているのが大方。それらは生活を脅かし、愛情まで奪った、憎き存在でしかなかった。夫が死んだら、どっと棄ててやる、大概はそう思っていた。

「ああ、せいせいしましわ」トラックが行ってしまうと、夫人は両掌をぱんぱんと叩いた。

間山老人は、商売をやっている息子の保証人になっていたが、息子が事業で失敗して、一緒に破産した。家屋敷を手放さねばならない。親子揃ってアパートに引っ越した。本は処分価値がないのか差し押さえにはならなかったが、三万冊の本をいままで二間の広い書庫に収納していたが、アパートではそんなスペースはない。無一文になった間山老人は、息子のために年金も担保にして銀行から金を借りていたから、向こう一年は生活費もない有様。やむなく、古本屋に蔵書を処分することになった。

ダンボール箱に本を入れたり、紐で縛る作業だけで、何日もかかった。奥さんは呆れて、

「この本はどうするんですか」と、手伝おうともしない。

「ものすごい量だ。動かすときになって初めて、膨大な量に気が付いた。モノを集めて、いまになり、モノに復讐されているのだね」

古本屋がきた。東京の大手もきた。間山は、目録を開きながら、
「この白秋全集は署名入だよ。目録では五十万している」と、煩く云うので、
「いまは全集ものは売れない時代です。はっきり申しまして、以前は売値の三割で買いましたが、いまはそれではやってゆけません」と、古本屋は二束三文で買い叩いた。買えない本が半分近くあった。みんな持ってゆかないから、残った本は、紙屑だ。回収業者を電話で呼んだら、
「処分料がかかります」と、多額な費用を請求された。

夫人は冷笑して、

「あなたが、一生かけてせっせと集めたのはゴミだったのですね」と、このときとばかり皮肉る。

西田の家が火事になった。タバコの火の不始末だ。豪邸がべろりと焼けた。西田老人と夫人は命からがら裸足で逃げて、夜空を焦がす火を眺めていた。

「ああ、わしのカメラが、わしのカメラが…」と、西田老人は狼狽えていた。

「何を云ってるんですか、家が燃えたんですよ。家の方が大事でしょう。明日からどこで寝ればいいんですか」夫人はヒステリックに叫んだ。

「家は保険金で、また建つだろう。わしの集めたカメラには、この世に一台しかないものもあるんだ。金では買えないものばかりなんだよ」

二人ともへなへなとその場に座り込んでしまった。消防自動車は何台もかけつけて、水をかける。野次馬もすごい。燃えてなくなるのは数時間もかからない。屋根が落ち、柱が倒れ、家が崩れてゆく。

間山と西田は落ち着いてから、飲み屋で一杯やっていた。口数も少ない。太田が死んだショックに、家の差し押さえ、火事と、立て続けに起こった不幸に、打ちのめされていた。

「あんたは、これからどうするんだい」と、西田が訊いた。

「そうさなあ、婆さんと老人ホームへでも入るよ。本は図書館だ。もう買うこともないだろう」
間山はやつれた顔で笑った。

「わしも、もうカメラ道楽はやめたよ。どうせ、棺桶まで持ってゆけないんだし、所詮、モノはモノでしかないことが判ったよ。この世に残るものなどひとつもないのだ。形あるものはなくなる。それに気づくのが少し遅かったがな」

間山と西田も相次いで、それから二年後にぽっくりと死んだ。欲がなくなったら、枯れたようになってすっかり老けた。あの生き生きとしていた三人も、いまは語り草でしかない。

第178話 夏休みの健全な過ごし方

しちがつにじゅうはちにち にちようび はれときどきくもりところによりにわかあめ
あさはごじはんにはおきます。どうしてかということ、となりのあきらくんがむかえにくるからです。らじおたいそうはろくじはんからなのに、いつもはやくおきてあそぶのです。まだめやに

をつけておきたばかり、もやがかかっている、そらもねぼけています。らんになぐしゃつにすてことげた、きんじょのおじさんもとらんじすたらじおをもってきて、らじおたいそうだいいちだけみんなしてやります。ちゃんとでているひとにははんこをいっこもらえるのです。

とおりにかねをからんからんとならして、にまめやさんがてんびんぼうかついでやってきます。ぼくは、おばあちゃんにたのまれてどんぶりばちもってかいにゆきます。あさごはんはきうりにみそつけてぼりぼりたべます。

ごぜんはきんじょのともだちがべんきょうしにやってきます。なつやすみのしゅくだいはぼくたちはみっかでさきにやってしまいます。あとであそぶのです。ところが、ほかのこたちは、あそんでばかりでなつやすみのおわりにおかあさんになきながらてつだってもらっています。ただ、ぼくたちはえにつきもみっかでかいてしまうので、みらいにつきになります。てんきなんかちょうきよほうです。ありもしないことをかくので、ぼくはしょうらいしょうせつかになろうとおもいます。

しょうてんがいがみせをあけると、みんなほどうにうちみずをします。みずをほ一すでまいたりして、きもちいいです。らじおのこえがそとまできこえていて、いまはやっているあいじょーじのうたがきこえます。ぼくとあきらくんは、てらのかくちにしのびこんで、せみをとりにゆきました。らんになぐにはんずぼん、むぎわらぼうしにむしとりあみでなつやすみのしょうねんになります。せみはひとがちかづくつとぴたりとなきやみます。しょうべんをひっかけられるのでちゅういしなければなりません。ぼくたちはせみのからをたくさんとりました。なつやすみのしゅくだいで、こうさくかしゅうしゅうひんをださなければならないので、あきらくんはこんちゅうさいしゅうをしていました。あかいろとあおいいろのちゅうしゃえきをこんちゅうにさすと、くさらないでぴんではこにさしてならべられます。ぼくは、えのぐでおえかきするか、じおらまをつくるかまよっていました。

おひるごはんは、きのうのあまったごはんをみずであらって、つけものだけでさらさらといただきます。ごごはうみにおよぎにゆくと、おねえちゃんともだちときしゃでふたつめのこうえんまでゆきました。ぼくはまだおよげないので、なみとあそんだり、すなにあなをほっていけをつくったりしてあそびます。おねえちゃんは、おっぱいがでてきました。ぼくがふざけてさわろうとすると、すけべとってにげました。

ひにやけてまっくろのこがくろんぼこんてすとにちょうせんするのだとってっていました。めとはだけがしろくて、おかしいです。かいすいよくのあとは、ろてんでかきこおりをたべます。ぼくはいちごみるくがすきなんだけど、みるくがかかるとたかいのでがまんしました。みみのなかにうみがいり、なみのおとがします。すなもあちこちについて、ひにやけてあかくなつたうでをなめると、しょっぱかった。

いえにかえるとしんせきのおばさんが、すいかもってきてくれたのでたべました。ぼくはたねをだしません。みんなに、へそからすいかのめがでるとおどかされました。ほんとうかな。で、おばさんからおこずかいをもらったので、いもうととふたりでむかいのだがしやさんにはしてゆきました。ぼくは、なにがはいつているかおたのしみのおもちゃぶくろをごえんでかいました。いもうとはふんまつじゅーす。あまったおかねではなびもかいました。

ばんごはんをたべたら、げんかんでみんなではなびをやりました。ぼくはねずみはなびがすき

です。せんこうはなびのようなおとなしいのはきらいです。ちりちりとながくもえるよりはくるくるまわってばーんとばくはつしたほうがすきです。

まどはあけてねるので、ふとんをしいてからかやをつるのはおとうさんのしごとです。ぼくたちはかやのなかにはいるのがすきです。きゃんぷのてんとのなかにいるようで、たのしいのです。かとりせんこうのにおいもすきです。ぼくはなつがとてもすきです。おかあさんがうちわであおいでくれるのでいつのまにかねてしまいます。

とおりをあるくげたのおとがします。ねぶたのおはやしのれんしゅうが、とおくからきこえます。なつのよるはこわいまものになってぼくのゆめにでてきました。

第179話 売れない村

白河以北一山三文。その悪口は芭蕉の奥の細道のその昔。北の最果ての村では、開発に失敗したら、大手が手を引き、それこそ荒地が荒地のまま、買い手がつかない。二束三文でも誰も買わない土地がごろごろあった。江戸時代といまも変わりはない。資産価値ゼロと以前から云われていたが、観光資源の名所史跡も、温泉もなければ、交通の便も悪く、山地だから、国有林ばかりで、細々とした半農半漁の部落が点在するといった、人口三千人の田舎村の話である。

いまは、畑も漁もやるものがない。後継者がいないから、畑は荒地になる。村も年寄りばかりになった。若いものは都会へ出て、親父たちも夫婦で出稼ぎ。子供の数もめっきりと減ったから、人口の七割が年寄りだった。主だった産業がない。工場もなければ会社もない。事業がないから税収は少なく、年寄りが多から介護保険のやりくりも大変だ。地方交付税をあてにしていたが、それも国が大変だから削られて、村の財政は毎年赤字。累積も増えて、再建団体へと転落していった。

田舎村の村長は、七人の村議と、膝を交えて連日話し合いしたが、打開策は出てこない。隣り町との町村合併も断られた。隣りも赤字で、貧乏な借金付きの嫁は貰えぬと。

「村長、んだらば、とうちょうさ合併の話持ってゆげば、どんだべ」村議も年寄り、逆さに振ってもいい案が出ない。見合いの話がないから、こっちから押しかけてゆく。

「ふむ、とうちょうの石原知事と逢ってくるべいか」村長はようやく重い腰をあげた。

役場は電灯も消している。経費節減だった。村長の出張旅費も苦しい。まさか、ヒッチハイクでは行けまい。たまたま隣り町から魚を都内へ運搬するトラックがあって、乗せていってもらうことにした。村長には自身がなかった。「東京都田舎村」どう考えても響きがよくない。それに、飛び地の村と合併しても管理が悪くなる。東京都にとっては何のメリットもない。なんとか騙す手はないか、と、村長、ない知恵を絞る。

田舎村は、戦前に建てられた小学校の廃校になったのを役場にして使っていたが、都庁の前に立った村長はぶったまげた。42階もある、超高層ビルを欲張りにもツインで持っている。石原知事とコンタクトをとっていたが、接見の部屋に辿りついて、また驚いた。合併の話を持ちかけ

たのは、田舎村だけではなかった。全国各地の過疎の村から、村長たちが押しかけて、順番待ちをしていた。

「整理券は貰いましたか」と、受付まである。「どうやら、抽選になるらしいで」と、ある村長の声を聞いて、田舎村村長はがっかりした。対抗馬の面々を見れば、特産品はある、平野があり、米どころだ、原発予定地がある、美人の産地だ、といろいろあった。それに引き替え、わが田舎村はこれといって自慢できるものも、村の売りが無い。ものの見事になんにもないところだ。どう説明しても決定的にセールスポイントがない。

「知事よ、話し合いに応じろ!」「ダイオキシンをこれ以上撒くなー」なにやら、エレベーター前が騒がしい。警備員と小競り合いをしている団体があった。市民団体の苦情直訴だろうか。ハンドマイクでがらがん騒いでいる。

「ゴミを持ち込むなー」「風評被害を賠償しろー」どうやら、お隣の埼玉の農家と住民らしい。何気なく聞き逃していたが、村長にある考えがひらめいた。

村長の接見の番になった。

「おらの村を買ってけろ。じじ、ばばしかいねえ村だども、広い原野と谷がある。東京都のゴミ捨て場にはうってつけだじゃ。どんだべ。自然が破壊されってか、それは心配ねえ。国立公園でもなんでもねえ、酸性の痩せ地で、農業にも適さねえ、村をゴミ箱にしても勿体無くもねえ。そのかわり、村人ば、ゴミ処理施設で働かせてくれろ」

知事は、考えておくという返事で、前向きだった。手ごたえはあった。こうなったら、ゴミでもなんでも持ってこい、村長はやぶれかぶれだった。村議はすべて村長派の保守だから、物事はすぐに決る。

東京都から暫くして、その条件で合併したいと正式な申し入れがあった。村民の一部の反対はあったが、みんな金には弱い。ふるさとを棄てて、金を選んだ。そのニュースは全国を走った。北の最果ての県知事も乗り気で、こうなったら、赤字財政の県ごと東京都に買ってもらおうと、意欲を見せた。「東京都青森、うん、悪くはない」かつて、ど田舎の代名詞で、なにかあるとバカにされたものが、東京と合併すれば、田舎者と誰もバカにしないだろう。

知事同士の会談があった。

「こうなったら、わが県に、ゴミでも核燃料でも、原発でもなんでも持ってきていいです。都民の反対するもの、嫌がるもの、すべて引き受けましょう」と、大きく出た。県を大きなゴミ捨て場にしてしまう遠大な計画をぶちまけた。石原知事は願ってもない話だが、それで県民が納得するかどうか、危惧していた。

「ダイオキシンの発生も発生しますし、蠅も大量発生、臭いも大変ですよ」
知事はけろりと答えた。

「大丈夫です。わたしは田園調布にでも家族で引っ越してきますから。ふるさとは遠くにありておもうものです。近くにいれば臭いたまらぬ、ですからな」と、からからと笑った。

「見たんです。わたし、本当に、見たんです。確かに銀色に輝いて、上空に停まっていたんです、空飛ぶ円盤が!」

「おたくもですか。どうも、幽霊の話と円盤の話は似通っていますね。片や非科学的、片や一見科学的、でも、どこかで共通している妄想ですな」

「やはり、あなたも信じてはくれないんですね」

「信じるという方が無理というものです。宇宙人はこの世にいるのは、わたしも否定はしません。いるでしょうね、この広い銀河系だけでなく。他の星雲のどこかに、何千何万という高度な文明の存在があるということは、科学者たちもそれは認めています。ただね、一番近い恒星でも、光速で七年かかります。光と同じ速度の乗り物はまだこの世界には存在しません。仮に、光速の乗り物ができたとしても、どうでしょう。異星人のいるような惑星と、行き来するには往復で、どれだけの時間がかかるでしょうね」

「でも、あなたは可能性はゼロとは云わなかったわ」

「ゼロに限りなく近いでしょう。この世に神がおられるとすれば、この奇蹟の惑星を他にこしらえたとしても、それぞれの世界を隔離するために、かなりの距離を置いたのです。われわれは実に孤独な生物なのです」

「それは判ります。でも、現実にはわたしはこの目で確かに見たんです。説明がつかないと云われても、どうやったら信じてもらえるんですか」

「そうですね、幽霊でも、円盤でもここに連れてきてくだされば信じましょう。どちらも、一部の特殊な靈感の働く人にだけ見えて、凡人には見えないということが、何か宗教的ではありませんか。巫女などの古い信仰そのものです」

「そうかもしれませんが、わたしの他にここにいる三千人の中で、この近くにもたくさん見たという人はいます。別に特殊な能力の持ち主でもなんでもなく、極普通の人たちですわ」

「一見すればね、でも、見たという幻覚を信じたものたちが、信じない多数に迫害されることによって、被害者意識で団結いたしますね。それ自体が宗教と同じものです。まさに中世的ではありませんか。異端裁判のように、見たものたちを魔女にしたてあげる社会も狂っていますが、あなたがたも病気であることを認識しなければいけません」

「やはり、あなたも同じですね。落胆しました。社会通念から外れたものはすべて、間違いとして処理してしまうんですね。それは手っ取り早いやり方でしょうよ。気功も、予知能力も、インスピレーションも、あなた方には計測不能で説明のつかない、その他のものとしてかたづけられてしまう」

「それはそうでしょう。この世界には計算できないものはありません。すべて、核と電子、プラスとマイナスで作られているのです。あなた方は、交流できるわけのない、宇宙人を見たと言って、リアリティに欠くイラストを書いたりしていますね。髪の毛というものがあり、目が二つ、鼻というものがあり、口がその下についている。生殖器が男女ともに、同じ下半身の位置についている。手が二本に足も二本とね。どれも、同じです。想像は伝播するんです。われわれが手が四本あり、足も四本あるのをわざと少なく表現することによって、グロテスクな生き物として描いてみせます。目だって、われわれは三つあるのに、二つという無気味な生物を地球人と、云

いましたね。あなた方の云う、太陽系の土星をたったいま過ぎたばかりです。隕石の環が美しい。この先にあるという地球まで、あと一日で到着します。われわれのこの科学の粋を集めた円盤でも、他の恒星に辿りつくまで、八年かかりました。さあ、あなたのいうのが本当なら、これから行く地球という星には、高度な文明があるのでしょうか。楽しみですな」

「きっと、おりますわ。わたしたちの宇宙船の上を通過していったのは、彼らの探査機だと信じています。わたしたちは孤独ではなかったと証明できますわ、きっと...」

第180話 軽トラ

軽トラとは軽自動車のトラックのことと断っておく。ドライバーの間では、邪魔者の代名詞でさえある。大概、運転しているのは年寄りだ。制限時速以下で走ってくれる。安全運転もあまりしすぎると周りの迷惑になる。五十キロ制限の道路をちんたらちんたらと四十キロで走ってくれるから、追い越し禁止車線では、後続の車が苛々して、センターラインまで出てきては、先の車を覗いているのが、後ろをふらふら走ることになる。

その悪名高い軽トラに乗っているのが、大工の棟梁の惣助じいさん。運転免許とって四十五年、無事故無違反ではない。事故歴六回、違反は数知れず、免停五回、警察の厄介になったこともあるという戦歴の持ち主だ。

惣助じいさんは還暦過ぎて、いまま現役のばりばりで、大工道具をトラックの荷台に載せて、シートをかぶせると、建築現場へのろのろと走る。後ろからライトチカチカの嫌がらせも平気、クラクション鳴らされてもなんのその。

「こちとら、安全運転で何が悪い」と、平気の平座。

最近の住宅は、工場でプレ加工された材木を現場で組み立てるだけ。棟梁の出番もめっきりと減った。若い者に教えられることもあり、世の中変わったのだ。カンナ、ノコギリもだんだんと出番が少なく、ネジ回しも電動だ。柱立てもしない家が信じられない。壁を張り合わせ、ツーバイフォーだ？ とてもついてゆけない世界になった。若いものは外人のような髪にピアスして、女だか男だか判らない。男気のある連中がいなくなった。ましてや、ちょっとでも叱ると、ふいと翌日から来なくなる。若いものには不満だらけの棟梁だった。

棟梁は仕事が遅くなり、夜更けて軽トラで帰宅する途中、若い娘たちが乗っているランエボが、暴走族の改造車二台に嫌がらせの幅寄せや煽りをされているのを目撃した。からかっているだけでもなさそうだ。そのうち、バイクが三台、蛇行運転しながら、女の子たちの車を道路脇の茂みへと誘導していった。危ないなと、棟梁は、あとをついて行った。女の子たちの泣き声、悲鳴が聞こえていた。族たちは、車から、女の子たちを引き吊り出そうとしていた。そこへ、棟梁の軽トラがヘッドライトを上向きにして、クラクションを鳴らしながら、突っ込んで行った。てっ

きり、パトカーだと思った族たちは、ラッパを鳴らしながら、逃げて行った。女の子たちは、一斉に恐怖から解放されて、どっとその場に座りこんだ。やってきた車が軽トラだったから、またびっくりした。降りてきたのが、禿頭に捻り鉢巻の年寄りだったから、もっと驚いた。

「ねえちゃんたちよ、怪我なかったかい」半被にニッカボッカの棟梁だ。

「おじいちゃん、ありがとう。助かったわ」

女の子たちは棟梁を見て、少し笑った。

「なんの、今の暴走族はトウシロを襲うほど落ちたもんだ。わしらの若いときは仁義というもんがあった」と、棟梁は気取ってみせた。

「あら、おじいさんも暴走族やっていたの？」

「暴走族とは云わなかった。カミナリ族と云ってな。オートバイで湘南海岸をぶっとばしたもんだ」

「格好いい。でも、髪の毛なんかは？」くすくす笑う。

「そんな、生まれたときからじいさんであるものかい。わしの若いときは、赤木圭一郎に憧れてな、そうだな、太陽族というのもあった。『太陽の季節』のな。流行ったもんだ。髪なんかグリース塗って、てかてかよ。ロカビリーで女の子はキャーキャーだった」

「信じらんない。おじいさんが？」みんな笑うから慚然として、棟梁の自慢話は続く。

「バカ云っちゃいけねえよ、誰だって、若いときはあらあな。あんたらの特許じゃねえんだ。わしだって、今で云うナンパもしたし、もててもててもてまくった。いまのかあちゃんも、若いときは、星由利子そっくりだった。寄ってくる女を除けながら、逃げるのに苦労したが、かあちゃんには泣かれてのう、女の涙には滅法弱いときたもんだ」

「おじいちゃん、今度、つきあってね、助けてもらったお礼がしたいから」

若い娘っこにそう云われると、悪い気はしない。

「あんたたちも、あまり夜中、歩き回らんようにな」

そう云って、棟梁はまた軽トラに乗ってさっそうと走り去る。

ところが、またさっきの暴走族たちと遭遇した。また、やつらは新たな獲物をいびっていた。棟梁は頭にきて、またヘッドライトを上向きにして、クラクションを鳴らし続けた。ミニパトカーと間違ったか、族たちは、またスピードを上げたり、蛇行運転を繰り返しながら、逃げた。よせばいいのに、棟梁は昔の癖が出て、軽トラであることも忘れて、百キロ以上のスピードを出して追いかけた。若いものには負けねえ。喧嘩でも、運転でも、力でもだ。暴走族たちは、ラッパをぱおぱおと鳴らし続けながら、深夜の国道を猛スピードで走り去った。棟梁は夢中で追いかけた。こんな年寄りでも怖いのかと、かなりいい気になっていたが、後ろから来る本物のパトカー数台には気づかない。前からもパトカーがやってきて、サンドイッチにされた。棟梁の軽トラは、パトカーに挟まれる格好で停車した。

「なにしやがんでえ、危ないだろうが」と、棟梁は窓から首を出して叫んだ。警官が軽トラを取り囲んで、呆れていた。

「免許証を出せ。なんと、じいさんか。暴走族も高齢化したのかな」

「なんだと、わしはいま暴走族を追いかけていたところだ。もう少しというところで邪魔立しておっからに」

「まあ、詳しい話は署に来てから聞きましょう。五十キロオーバーですからな」
惣助じいさんの戦歴がこれでまたひとつ増えた。

第181話 バカンス

「来月から二ヶ月のバカンスを我が社でも実施する」と、全社員を工場の集会所に集めて、社長の野田は驚くような発表をした。社員の多くは、社長がおかしくなったかと思い、意味を飲み込めないでいた。ザワザワと騒がしくなってきた。

「静粛に。諸君も感じているであろうが、最近の工場の稼働率が落ちていて、夏場はどうしても我が社の業態は弱いのは毎年のことである。そこで、諸君を会社で遊ばせておくわけにはゆかないので、外で遊んでもらうというわけだ。日本はバカンスという生活習慣はないが、欧米では昔からあることで、目新しいものではないが、ことにこのような不景気が続けば、だらだらと仕事をするよりは、すっぱりと一斉に休んで、工場の光熱費を節約したほうがいいのではないかという結論が出た。この長い夏休みで、有給も、溜まった休みもまとめて取ってもらいたい。そして、秋からは、英気を養って、より一生懸命仕事に励んでもらいたい」

野田工業は、従業員パート併せて百人足らずの中小企業だった。大手電機会社の下請けを三十年やってきたが、下請けも国際的になって、東南アジアからの輸入に追いやられて、会社の経営は楽ではなかった。

「社長は、あんなこと云っていたが、生産を止めて大丈夫なのかな」と、中堅社員たちは不安だった。

「ボーナスも出せないから、せめて休暇をやろうということなのだろう。それにしても二ヶ月は長いなあ、何をしたらいいものか」

みんな、動揺していたが、一番の心配は時間の使い方だった。いまだかつて、二ヶ月も休んだことはない。七月一日から実施、八月いっぱいお休み、出社は九月一日だ。

若手の社員たちは、思い切って海外旅行をすると云う者もいた。田舎に帰って、ゆっくりのんびりしてみるという者、会社には内緒で、夏だけのバイトをするという女子社員、運転免許をとる者、若い者たちは割り切って、夏休みを大いに利用しようと張り切っていたが、呆然と、考えがまとまらないのが中年以上の社員たちだ。ずっと休まず、仕事をしてきて、別に趣味もない熊谷係長などは、バカンスというものを歓迎していない。そんなものはないかと思っている。

村井課長もその口だ。「あのう、わたしだけでも工場に出てきて、生産日報の集計などやってもいいでしょうか」と、部長に頼むと、

「工場は封鎖されるんだ。誰であろうと、立入禁止にすると、社長からの通達だ」と、そっけない返事。村井課長は真面目な男で、日曜でもいままでは工場に出てきて、ひとり仕事をしていた。それが、仕事をするなという。困ったと、頭を抱えることとなった。

いよいよ、野田工業のバカンスに入った。村井課長は、どうしても朝五時半には起きてしまう。今日の仕事の段取りを考えながら、庭で体操までする。夫人が、雨戸を開けて、寝ぼけて云った。

「あなた、今日からバカンスでしょう。もう少しゆっくりと起きたら？」

いつもの生活習慣が抜けない。それでも、寝ているなどというフシダラなことはできない。いつものように、時間通りに朝食。夫人は一言、

「あなたもわたしも夏休みしましょうよ、いままで三十年間、ゆっくりした朝は経験したことはありません。これは神様が与えてくれたご褒美です。いままで休まず働いてきたんですもの、ゆっくりしていても、バチがあたりませんよ」

そう云うものの、村井にしてみれば、落ち着かない。時計だけがやたら気になる。午前中は新聞を何回も読んだりしていたが、それもつまらない。テレビのワイドショーもくだらない。本を読む習慣もない。パチンコや賭け事はしないことにしていた。立ったり、座ったりして、居場所がない。庭弄りも好きなほうではない。

「おい、何かすることはしないのか」と、夫人に訊いた。

熊谷係長も同じだった。こんな生活を三日もすれば、完全に病気になる。体を動かしていなければ落ち着かないのだ。そこで、家の窓を拭いたり、柵を塗装したりして、なんとか仕事の延長みたいに動き回ることでごまかす。それも二日あれば、することはなくなる。女房と結婚してずっと見たこともない映画を見に行ったりした。女房と外で食事したり買物したりするのも、だいぶなかった。熊谷係長は、周囲の目を気にして、そわそわしていた。仕事もしないで、日中からぶらぶらしているのに、罪悪感がある。

「あなた、少し、落ち着いたらどうですか。せっかくおいしいもの食べているときに、不味くなっちゃうじゃないのよ」

熊谷にしても判っているのだが、体が長年の仕事中毒で禁断症状を起こしていた。じっとしていても、指先が動く、知らず貧乏ゆすりが出てくる。

「あなた、いいことを思いついたわ。村井課長さんも確か昔、釣りをしていたわね。あなたも、趣味なんかやっている暇もなく忙しくやってきたけど、釣りは好きじゃなかったかしら。あなたのお兄さんの田舎の家、空家のままでしょう。村井さんの奥様に声をかけて、四人で釣りに一週間行ってくるというのは、どうかしら」

「釣り、か」熊谷は宙をみつめていたが、ようやく自分のしたいことがみつかったように、晴れ晴れとした顔になった。「よし、釣りだ、決めたぞ」

村井課長の車に四人が乗って、子供に還ったようにはしゃいでいた。息子たちはいずれも社会人で夫婦二人きりの家だ。ドライブということも暫くしていない。人間、目的があれば生き生きとするものだ。釣り道具の錆びているのは、新しいリールなどを購入した。こんな嬉しそうな夫の顔を見るのは結婚以来だった。

車は常磐道を北上して、海の傍の小さな村に着いた。夫人同士、食糧などを買出しにいて、今日からの長期滞在の用意をしていた。空家のすぐ近くには親戚も多い。いろいろと、足りないものは貸してくれた。磯釣りですっそく釣り上げた海の幸を、刺身にしてい杯。夜は昔の釣り仲間の自慢話に花が咲く。

野菜、果物も採れたての新鮮なものを親戚から貰った。船を出してもらった、漁師の親戚の家に呼ばれて、ご馳走と地酒に舌つつみを打つ。毎日が宴会だった。こんな楽しい思いをしたこと

もない。仕事のことは二人ともすっかりと忘れていた。日に焼けて真っ黒くなった顔で笑う夫の顔に両夫人も安心してた。

八月に入り、バカンスも半分があつという間に過ぎた。そろそろ遊ぶ資金もなくなりかけて、村井課長は、近くの銀行で給料を下ろそうと、キャッシュカードをいれてみたが、入金されていない。考えてみれば、経理も総務もみんな休みだった。給料くらいは入れているだろうと、安心してた。心配になって、会社に電話してみた。誰かいるだろうと。ところが、何度電話しても、(この電話は現在使われておりません)だった。嫌な予感がして、村井と熊谷はバカンスを切り上げて、野田工業の工場へと、車で急いだ。

すると、工場の門の前に、社員たちが何人か集まっているではないか。

「おい、どうした」と、みんなを掻き分けて門の前に出てみると、門どころか会社は差し押さへの張り紙。破産管財人弁護士の名で、封印されていた。事情を確かめた社員の話では、社長、専務が会社の金を引き出して行方不明とか。取引先が、破産申請したのだそうだ。

村井課長と熊谷係長は、わなわなと怒りで震えてきた。そして、口を揃えて、怒鳴った。

「バ、馬鹿んすな」

第182話 出口がない

快適な旅行だった。すべてがうまく行っていた。高杉と外崎は、会社の夏の休暇を利用して、それぞれナンパした彼女を連れて二泊三日で長野を一周するドライブに出た。白馬から南下して、菅高原、上高地とペンションを泊り歩いての帰りだった。二人は同じ会社の同僚だが、女の子たちは行き道でヒッチハイクしていた女子大生を一日でものにした。男同士、女同士はそれを期待する旅であることが多い。たまたま、互いの好みに合った相手を見つけることができた。夏のボーナスで購入した、新型のRV車もひと役かっていた。「なんていう曲?あまり聴いたことがないわ」

「韓国から取り寄せたんだ。コヨーテというロックグループさ」

すでに、助手席の女の子と高杉は、ギアを握る手で、指を絡めあっていた。そこから、互いの信号が交流しあっていた。後部座席はさらに熱烈だった。頭からすっぽりと二人してジャケットをかぶって寝ているようだが、その中では長いキスをしていた。自然と手は体の下半身を求めてスカートに入っていた。だんだんと暗くなってきていた。一般道から高速に入れば、今夜中には東京へ帰れるだろう。山道の国道だが、対向車がないのが気になった。ナビゲーションシステムに狂いはなく、確かに、この道路で間違いはない。後ろから、一台だけ、ワゴン車がついてくるから、安心して走っていた。

前方にトンネルの入口が見えた。名前のないトンネルだった。最近できたのか、オレンジ色の照明に路面が滑らかな走りだった。トンネルの出口が見えないくらい長い。ヘッドライトを上向きにしても、対向車の姿も見えない。どこまでも続いている。後方からはさっきのワゴンがぴたりと付いてくる。急に、ナビゲーションシステムが静止したまま、動かなくなった。

「おかしいな、誤作動を起こしている」高杉がいくらやりなおしても同じだった。

「随分と長いトンネルね」と、後ろの女の子も夢から醒めたように云った。トンネルに入って、二十分くらい走っていた。時速八十で飛ばしていたから、二十五キロは走っている勘定になる。「嘘だろう」ようやく、高杉が異常に気がつきはじめた。「日本にこんな長いトンネルができたというニュースがあったかい」それでも、道路設備はいつも見ているものと同じだった。トンネルの天井には送風のためのジェット機のエンジンのような巨大な扇風機がぐるぐる回っていたし、非常電話、消化設備なども、ところどころに等間隔で設置してあった。四十分くらい走って、なにかおかしいことにみんなの思考が混乱しはじめていた。高杉は車を停止した。後続のワゴンも停止した。トンネルの先は無限に続くように、一直線の道路がどこまでも伸びている。

女の子たちは車に乗っていたが、外崎も車から降りてきた。後続のワゴンからも中年の運転手と、その妻が降りてきた。ワゴンには小学生くらいの兄妹が不安げに乗っている。「こんなトンネル、ありましたか」と、ワゴンの中年男が高杉に声をかけてきた。

「いま、地図で調べたんですが、どこにもないんですよ。ひょっとして、まだ工事中の未完成のトンネルかもしれない」外崎が云うと、

「それだったら、入口は封鎖して入れないはずでしょう」中年男はタバコに火をつけた。

「こんなときは、戻るに限るよ、Uターンしましょう。道を間違えたようだから」運転手同士、意見が一致して、今度はワゴン車を先頭にして、来た道に戻りはじめた。真っ直ぐで、同じパターンの繰り返しのトンネルの中を走っていると、目がおかしくなる。吸い込まれそうになり、時間と空間の感覚が歪んでくる。

「ラジオを点けてみよう。こんな長いトンネルでは、交通情報を知らせるために、ある周波数で流しているはずだ」今度は外崎が助手席だ。女の子たちはものも云わず、おとなしく後部座席にいた。ラジオの選局をどこに合わせても、雑音ばかりで何も入らない。

「やはり、まだ未完成のトンネルなのかなあ」

これほど長いトンネルなのに、対向車は一台もない。走っているのは二台だけだった。一時間は走った。それでも、入口にも辿りつかないとは。

「おかしいじゃないか、入口から入って、四十分で引き返したんだぜ、それで一時間走っても出れないのはおかしくないか」行く手は同じく、一直線の道路がどこまでも続いている。やがて、ワゴンが停車した。ガス欠だった。高杉の車もガソリンはあと少しよりない。二台はまた停まって、運転手同士の話し合いとなる。

「むじなか、動物霊に騙されたかな」中年男はまたタバコを吸った。

女の子たちとワゴンの母親も降りてきた。みんなおどおどした目をしている。全員ケイタイを持っていたが、どれも電波が届かない。

「困ったな。今日中に東京へは帰れそうにないな」腕時計は九時半を示していた。

「非常電話をかけてみようか」男三人で、百メートル先にある、非常電話まで歩いた。電話機も新しいもので、まだ使っていないようだった。受話器をとっても、うんともすんとも云わない。通話音自体しないのだ。

「まだ、回線が繋がっていないのだろう」中年男は思案に暮れていた。

「よし、最後の手段だ。火災報知機を鳴らして助けを呼ぶんだ」ずっと先に赤いランプが点灯し

ている。三人がそこまで歩いて行って、赤いボタンを押した。こちらは何の反応もない。男三人で話し合い、今日のところは車の中で寝て、工事作業車か、別の車が来るまで待ってみようということになった。時計は十一時を回っていた。

予定がすっかりと狂ってしまった。楽しいはずの旅行も最後におまけがついた。みんな、車の中で眠った。

翌朝、それでも事態は変わらなかった。外の光が届かないので、夜か朝か判らない。すべてオレンジ色の光の中だ。時計は七時を示している。

「SF小説で読んだんだけど、四次元の世界に紛れ込んだんじゃないのか」

「まさか、電気は通っているし、おれたちの走ってきた道路は一本だった。このトンネルだって、みんな人間の手で造ったものだろう」女の子たちも起きていたが、すっかりと怯えている。腹も減ったし、喉も渴いた。トイレにも行きたいが、何もないところだ。ワゴン車の中で子供たちの泣き声がしていた。親も不安なら子供はもっと不安だった。

「どうしましょう。このまま待ちますか」中年男が相談に顔を出した。ぐずぐずしている間にも、正午を過ぎていた。トンネルに入って、十七時間が経過していた。

「そうだ、こんな長いトンネルには、火災に備えて、緊急脱出の通路が必ずあるはずだ」

「そういえば、昨日見ましたよ、ここから二キロ後ろに、非常口のようなドアがあったのを。人が走るようなイラストがマークとして貼ってあったから、あれだ」

高杉はだけでなく、みんな閉じ込められている恐怖に怯えていた。一刻でも早く、ここから脱出したい。

「よし、非常口から外へ出ましょう。外へ出れば、助けを呼べるから。ここにいても埒があかない」

全員、貴重品だけ持って、そろそろとトンネルを一行で歩いた。まだ明るいのが救われる。非常口のドアはすぐにみつかった。ドアを開けると、中は非常灯がぼんやりと点いているくらいで、薄暗かった。人の背丈くらいの斜坑がずっと続いている。中年男を先頭に高杉が続く。一番後ろを外崎が来る。それもまたやたらに長い登りのトンネルだった。すると、斜坑は行き止まりになった。突き当たりに鉄の梯子が見えた。

「どうやら、出口らしいぞ。助かったぞ」女の子たちも抱き合って歓声を上げていた。高杉が、梯子を上ってゆき、出口らしいマンホールの蓋に頭をぶつけた。そこに、手動で回す鍵が付いていた。そいつはたいした力もなく回すことができた。重い鉄製の蓋を上を持ち上げると、風が吹き込んできた。光が少しだけ入ってきた。

「出られるぞ、外だ」高杉は蓋を思いっきり開けて外へ出た。中年男と、子供二人、母親と続いた。最後に外崎が梯子を上ってくる。

全員、外に出て、絶句していた。空は紫色だった。木も草もない、黄色い岩と砂が荒涼とした溶岩の原野を展開し、空に見たことのない大きな天体が浮いている。月の何倍も大きく、赤い衛星のようだった。

六畳一間くらいの独房に、鉄枠のついた電球だけがぼつりと点いている。木製の堅いベッドに毛布が一枚。あとは便座がひとつだけ。天井は高く、小さな鉄格子の嵌った窓が、手の届かない上にあった。

中野勇治は独房に移されて、一月というもの、外の空気を吸っていない。鉄の頑丈なドアには、食事が入られる差出口があるだけで、周りには人の声もしない。ここが、刑務所の最後の場所だということぐらい、判っていた。高等裁判所で上告が棄却されてからは、刑が確定した。再審の道は閉ざされて、また中野自身も長い牢獄生活に耐え切れず、これ以上の無駄な延命を望んでいなかった。あとは静かに、自分の番がくるのをじっと待つだけの日々だった。覚悟ができているという嘘になる。いつ、複数の足音が、この独房の前までくるのか、そのときは自分の刑の執行日なのだということを、他の囚人から聞かされていた。

林檎箱を引っくり返したような座卓で、中野は気を鎮めるために、いつからか般若心経の写経を続けていた。何かに没頭していなければ、気が狂いそうになる。いつも足音を耳にしながらいまかいまかと待っている時間がたまらなく長く感じられる。それが、今日かもしれない、明日かもしれない、一週間後かもしれない。判らないということが不安だった。ただ、判ることは、一月後の自分の意志はこの世に存在しないということだった。中野は、それが不思議でならなかった。いま、ここに生きて、息を吸い、指を動かし、壁を眺めている自分の意志が消えてなくなることが信じられなかった。

一時たりとも、中野は己の犯した罪を忘れたことはない。犯罪者は一瞬にして作られる。それまではごく普通の善良な市民であった者が、たった数秒で、自分の運命を決定しまうのだ。

あの夜、蒸し暑い夏が中野の判断を狂わせていた。夜道で暴漢に襲われていた。武道を嗜んでいた中野は、咄嗟に相手のナイフを取り上げていた。それでもひるまずに襲いかかってくる集団に、恐怖すら感じた。何者かも判らないまま、暗がり、相手を刺した。次々に刺していた。血か何か見えないしぶきが顔面にかかっていた。ぐう、という押し殺したような断末魔の音がした。一瞬だった。親父狩りの少年たちが、五人路上に倒れているらしかった。残りのひとりが負傷して逃げた。ナイフはべっとりと血糊で濡れているらしい。中野はナイフをその場に捨てて逃げた。翌朝、新聞だけでなく、テレビでも朝から、殺人事件を大々的に報じていた。中学生四人殺害、ひとり重症、逃げたひとは軽傷だったと。凶体の大きい暴漢が、中学生とは思わなかった。ナイフからの指紋で、中野は直に逮捕された。真面目な工員、三十六才。アパートに七十の老母と二人暮らし、世間では親孝行の息子とも云われ、あの人、信じられないと、職場の同僚も証言した。被害者が加害者になる事件だった。遊ぶ金欲しさに親父狩りを続けていた不良グループでも、殺した罪の大きさは中野の意志の消滅をもって報いなければならない。逮捕拘留されてから、刑の確定まで九年の歳月が流れていた。老母はその間、養老院で亡くなり、親の死に目にも逢えない。中野勇治も四十五になっていた。市民団体から、中野を救うべく嘆願書も出されていたが、罪の大きさは無期懲役ではすまされない。

独房の小さな窓にその朝に限って見慣れない小鳥が留まっていた。何かを知らせるように、可愛い声で鳴いている。中野は、それは誰の化身であろうかと思った。モンテニユのエッセーをその朝で読み終えた。日記と、支援者への手紙も認めた。中野にはなにか予感があった。気持ちはすでに整理がついて、独房の真ん中に正座して時を待っていた。

複数の靴音が、廊下に反響していた。中野はおどおどしていない。すっかり洗われた清い心で無の境地になっていた。靴音は、中野の独房の前で、びたりと止まった。名前が呼ばれた。「はい」と、応える。ドアが開いて、教戒師が入ってくる。刑務官が四名、中野について、独房を出た。別室へ案内される。教戒師の言葉を素直に聞いた。「ありがとうございました」と、中野は実に素直だった。ご馳走もおいしく食べた。「おいしゅうございました」と、綺麗に食べた。この世の最後の食事なのだ。

中野は頭から黒い頭巾をかけられて、両側を刑務官に支えられながら、刑を執行する部屋へと、長い廊下を歩いていった。

「ここから階段があるから」と、刑務官が注意する。これが、あの十三階段なのだ、と、中野は一段づつ、数えていた。ところが、十二段よりない。

「十二段よりないのですか」と、中野が問うと、あまりの冷静さに刑務官も驚いていた。階段を上りつめたところに、手術台があった。医師二名と看護婦が数名待機していた。

「麻酔の注射をうちます。よろしいですか。何か、云い残すことはありませんか」刑務官の言葉に、中野は頭を下げた。

「いろいろとお世話になりました。本当にありがとうございました。皆様によろしくお伝えください」そう、云い残すと、中野は手術台に横たわった。麻酔注射がうたれた。意識が遠くなってゆく。もう、この世に中野勇治として目覚めることはないのだ。

中野の髪の毛は剃られ、頭蓋骨が切開された。医師は、大脳に処置を施し、中野の記憶を消した。死刑廃止されてから、記憶だけを消して、新たな人間として生まれ変わるのが、最高刑となった。顔も整形手術して、全くの別人となり、名前も変えられた。麻酔が切れて、手術が終わると、中野勇治は、自分が誰か覚えていない。犯した罪も、過去も初期化されて、新たな名前で、人生をやり直すのだ。

第184話 銀行強盗

銀行強盗は最近分が悪い。セキュリティ・システムが完璧なまでになり、防犯のためのあらゆるガードがハイテクでなされている。これからの銀行強盗の成功率は低くなるだろう。そのくせ手口は次第に大胆になってきていた。ATMの機械ごとショベルカーで壊して、トラックで運び去ることが各地で行われた。無人だからやりやすい。ただ、機械一台に入っている金額が、苦勞の多い割に知れたものであることが、難点だ。

この不況の折、どこかで誰かが、如何にしたら銀行強盗を成功させることができるかと、緻密な研究をしているもののがかなりいるだろう。いまでも、密かに、銀行の地下まで穴を掘り進めて

いるものがあるかもしれない。

従業員四人の小さな建設会社を経営する大道寺は、月末に大きな手形を落とさねばならない。従業員の給与も二ヶ月溜めていた。このままでは倒産間違いない。なんとかして急場を切り抜けるために、銀行強盗を思いついた。

大道寺の旧友で、町で小さな運送屋を営んでいる若山も借金だらけで首が回らない。二進も三進もできないところまで追い込まれていた。二人は居酒屋で安い酒をちびりとやりながら、今月をどう乗り切るか、話していた。

「あんたと手を組みたい」大道寺が若山に計画を持ちかけた。

「強盗だって？」若山はつい大声を上げた。大道寺は周囲を見回しながら、

「これは、いまだかつて、誰もやったことはない。あんたとなら、きつとうまくゆく。成功すれば山分けだ。どうだ」

若山も藁をも掴みたい心境だった。ふたりの声はやがて小さくなっていった。

きたむら銀行虹ヶ丘支店は、工場地帯をバックに控えている、新興住宅街に昨年できたばかりだった。周りには住宅も商店もあまり建っていない。いつも、都市計画を先に読んで、銀行からいい場所に建てゆく。近い将来は団地は埋め尽くされる予定だった。銀行は駐車場は広いが、建物はプレハブで、コンパクトな造りだった。銀行の面している通りでは、下水道工事が急ピッチで進められていた。

「支店長さんはおられますか」と、ある日、銀行に土建屋の作業服を着た男が訪ねてきた。支店長に面会すると、男は名詞を出して、丁寧に挨拶した。

「外で、下水工事を暫くいたしますが、ご迷惑をおかけいたします」

支店長は車が入れば問題なく、歩道を掘り返すのも営業に差し支えないと思っていた。

「どうぞ、どうぞ、これからいい町になってゆくのでしょから」

と、歓迎している口ぶり。

ショベルカーがきて、翌日から銀行の脇を掘り進んだ。掘った溝には鉄板が敷かれた。作業は雨が入りこまないように、さらにその上から青いシートをかぶせて進められていた。銀行の横と裏が、溝が掘られてそこから先は、地中の中で作業が進められているようだった。早いもので三日とかからない。土木作業員たちは、日雇いだが、穴掘り専門で渡り歩いてきた人たちなので、作業が慣れている。現場監督を大道寺の会社のベテランが受け持っていた。図面を見ても、どうもおかしい。下水工事にしては、無駄なところまで掘っている。ただ、命じられるままに文句を云わずに作業するまでのことだ。これから、新しい団地のことだから、銀行の周りは住宅でびっしりとなるだろう。都市計画では、道路や下水道、電気などのライフラインの整備が先だった。

虹ヶ丘支店には、それでも周りに銀行がないせいか、近くの工場地帯の女子事務員が頻繁に足を運んでいた。工場の従業員も利用しているから、周りが寂しいのに、利用頻度が高い。数年後にはさらに大きな建物にしなければ間に合わなくなると思われた。

この形の銀行やコンビニをいままで大道寺建設ではいくつも手懸けたことがあって、構造も知り尽くしていた。企画型の商店なども販売していたことがある。建物の構造は年々簡単になって

ゆく。量産された部品の組み合わせで作られてゆくからだ。

支店長は、毎朝、誰よりも早く出勤することをモットーにしていた。率先垂範、若い支店長だけあってやる気は満々だった。その支店長が、私鉄の駅から降りて、未完成の団地の並木道を歩いて、十五分で虹ヶ丘支店まで到着すると八時きっかりとなる。生活も几帳面なら、時間にも正確で、銀行マンとして二十年やってきて、すっかり型に嵌っていた。

並木道の向うに人だかりができていた。団地の奥さんらが銀行の前に集まって、わいわい騒いでいる。支店長は何事があったのかと、歩を進めた。銀行の前に来て、支店長は真っ青になった。

「ない、銀行がなくなっている」
一晩で建物ごと虹ヶ丘支店は消えていた。

第185話 ダブル・ブッキング

佳子は、ホテルのロビーである男を待っていた。遅いので、少し不安になりながらも、腕時計ばかりみつめていた。口もつけないダージリンティーはすっかり冷めていた。

札幌で父がホテルなどのオーナーをしている里村佳子は三十になる。昭和五十三年の春、すなわち来年結婚する許婚者がいた。相手は青年実業家で、外食のレストランなど道内に十二店を持つ、三十半ばで成功した週刊誌でも騒がれた星野犀也だった。単身アメリカへ乗り込んで、日本食レストランを成功させ、そのノウハウをそのまま逆輸入させた。俳優にでもなれたマスクに、見合いして一発で佳子は惚れた。佳子の父の政略結婚のようなきらいがある。

佳子は、ロビーに走りこんできた男と接触した。彼は、佳子の後ろの席について、アイスコーヒーを頼んだ。そして、新聞を広げながら、実は佳子と話していた。

「どうだったの、彼」

「相手は判りました。函館のピアノの教師をしている橋本尚子、二十七歳。函館市内にレッスン場を三箇所持っています。かなりの美貌と才能で...」

「判ったわ、それで、彼と逢っていたの?」

「それが、電話を盗聴したら、確かに今日の正午にホテルで逢う約束をしているのを聞いておりますが、あのう、実は、彼女を尾行していて、実は、見失いまして...」

「ドジ、いくら探偵料払っていると思っているの。だったら、彼と逢っている現場を押さえられなかったというわけね」

「誠にもって面目ない」

男は私立探偵の前島だった。依頼主の佳子は、犀也と尚子が密かに交際しているものと疑っていた。犀也に女の匂いがするのは、もてる人だから、当然だが、女の勤でどうも、親密な相手がいるのではないかと、犀也の素行調査をさせていた。そこに一人の女が浮かんできた。犀也が函館に行くのは不思議でもない。彼のレストランの支店があるからだ。ただ、かなり嫉妬深い佳子は、犀也の行動を分刻みで知っていなければ気が済まないタイプだった。一時間おきに彼に電

話を入れさせるほどの縛りかたをする。今日も朝から函館に行っていた。自分というフィアンセがありながら、二又かけているのは許せない。必ず尻尾を掴まえてやる。そう、いきまいていたが、どうしても証拠が掴めないでいた。

前島は、前日から犀也が函館に入る予定を知って、張り込んでいた。ピアノ教室の電話に盗聴機を仕掛けておいた。「いつものホテルで正午に」という約束の声は確かに犀也のものだった。犀也は日帰り出張だから、夕方には札幌に帰る。六時に佳子と夕食の約束もしていた。いまは五時だった。探偵のほうが一番早い特急で札幌に帰っていた。どんなに早い特急でも四時間二十分かかる。

佳子は待ち合わせの時間になったので、探偵と別れた。次回は手抜かりのないように、函館行きをちゃんと監視するよう頼んだ。

札幌駅前のホテルで、六時に犀也は佳子と逢っていた。

「今日ね、犀也さん、正午にはどこにいたの？」

と、佳子の詮索が始まった。

「まだ、特急の中だったかな。確か、八時十分発の特急北斗で行ったから、函館に着くのが十二時半だ。それがどうかしたの？」

佳子は笑いでごまかしながら、

「テレビで今日の事故のニュースやっていたから、見たかなと思って」と、自動車事故のニュースと摩り替えた。

「レストランの連中と三十分会議してとんぼ帰りだ。列車に乗っている方が長い」

犀也の証言を佳子はまとめていた。函館駅に十二時半に着いた犀也は、すぐにタクシーで市内のレストランへ向かう。一時前には入るだろう。そこで一時から会議。一時半には終る。すぐにタクシーでまた函館駅まで戻り、一時四十分発の特急すずらんに乗る。そうして、札幌到着が六時。駅前のホテルだから、数分で彼は待ち合わせ場所までやってきた。どうして、女とホテルへ行ったりする逢引の時間が取れるだろう。どう考えても無理がある。やはり、彼は仕事だけに、函館に行ったのだろう。では、あの盗聴した電話の内容は嘘だったというのか。佳子はますます判らなくなる。二人で一見楽しそうに食事をしているときでも、佳子はどこかでそのことを考えていた。佳子がレストランの函館支店に昼の一時半に電話したときは、確かに犀也は電話に出た。彼のアリバイに間違いはない。前島探偵も事務所でそのことばかり考えていた。聴き違いではなく、確かに正午の約束をしていた。函館空港から飛行機でも時間が合わない。飛行場までの距離もばかにならない。朝は佳子が札幌駅まで車で送っている。八時少し前だ。

事務所のテレビで、交通事故のニュースを流していた。

「中山国道で、スピードの出しすぎで若者のグループが対向車と接触、乗用車は大破し、...この国道は信号も少なく、百キロで走る車が普通で、以前から危険とされていた」

「車か、高速道路でも完成すれば、早いんだろうがな。いや、車という手がある」

前島は食べかけのホットドックを放り出すと、車のキーを取り出した。

前島の車は、札幌市内を南下して、定山溪方面へと向かった。札幌を八時に出た。朝方の混雑はまだ続いていた。昨日と条件は変わらないだろう。国道230号線を中山峠、喜茂別と走る。百キロ平均で走っていた。すべての車が慣れたもので、まるで高速並のスピードだった。普通なら、

函館へは国道36号線を通る。千歳、苫小牧、室蘭と通って走るのが、山越えは信号だけでなく、車の通行も少なく、大きな街も通らないから、確かに早い。

前島の車はラリーのように通過点をチェックするように記録していった。長万部から国道5号線を走る。内浦湾を望みながら、海岸線を走る。大沼を過ぎて、函館市内に着いたのが、十一時半だった。早い。三時間半で走ってきた。これなら、特急より早い。北海道は特急と云っても、ディーゼルだから、スピードが出ない。広い大地を苛々するほどゆっくりと走る。

前島はさっそく、佳子に電話をした。

「星野さんのアリバイは完全に崩れました。特急で来たのではなく、車で走ったのです。実際、走ってみました。快適でしたよ。三時間半で函館まで来ました。すると、正午の約束には充分間に合います。しかも、二時間近い、空白の時間ができる。レストランの会議は、調べたら、一時半から二時までだったんです」

興奮して、函館から電話してくる探偵の報告を信じたくはなかった。佳子は、

「そう、ありがとう。今度の函館行きでは車で尾行してね」と、力なく受話器を置いた。犀也は、少しの時間のトリックを利用して、週に一度はピアノ教師と寝ていたのだ。里村佳子は、自分の父の経営するホテルの展望レストランの窓から、遠く函館の方角を眺めていた。近いうちに、橋本尚子と対決する日がくるだろう。

「でも、わたしは、絶対に誰にも犀也を渡さないわ」と、佳子は挑戦するような視線をまだ見ぬ敵に向けていた。

第186話 ボランティア

ぼくは、ずっと建物の蔭に隠れていたが、湿っぽい五十センチの隙間と、ダストボックスに挟まれた格好で、通りに飛び出せないでいた。少しでも顔を出せば、やつらボランティアにみつかって、射殺されるのだ。この街には、二通りの人間よりいなかった。ボランティアか、ボランティアでないか。その区分は時間が限りなく使える、裕福な身分の階級か、喰うために働いて、自分自身の時間もない下層階級かで分かれた。

見分け方は簡単だ。政府のやつらに洗脳されて、ボランティアに走った連中は、実に単純な素直な目をしていて、あるいは何かに憑りつかれたような、狭窄の目。真っ直ぐと信じた前方より見えない視線と、丁寧な言葉遣いが、やつらの特徴だった。それに引き替え、われわれ、プロレタリアは目を常にきょろきょろと動かし、疑い深い目つきをする。目でものを云えるのはわれわれの特徴だった。

銃口を四方に向けながら、パトロールしている兵士たちも、かつては学生であったり、サラリーマンであったりした。不穏分子を粛清するために、愛国心をテレビという催眠機械で、心理操作した政府は、思考回路の短絡的なものたちを食事を与えるだけの無給の兵士として募集した。それが、彼らだ。妄信的な性格のものだけが、選ばれたから、彼らは、きっと撃つ。命じられれば拒絶することなく行動する。それが正義であり、世界平和のためになると信じ込んでいるから

こそ、一直線に行動する。ジ・ハードも十字軍もそうだが、聖なる殺し合いというのはあるはずがない。誰がそれを望んだか。遠隔操作されている機械仕掛けの人間集団、それがボランティアだった。最初は、予算の少ない政府や地方公共団体が、市民に募ったものが、人の善意を利用するだけ利用するようになったのだ。すべてが。政府の黒幕によって心理操作されていた。

われわれレジスタンスは、それを暴き、人民を奴隷化する心理プログラムを破壊することを任務としていた。政府が国民にデジタル化した信号を送るのは、テレビだけでなかった。ラジオもインターネットも、ケータイも、映画もDVDから雑誌、新聞に至るまで、あらゆる媒体が介在していた。われわれレジスタンスは、それらの汚染されたマスコミは見ない。見てはならないことになっている。引き込まれたが最後、コントロール・プログラムから逃げ出されなくなってしまうのを知っている。以前、マインドコントロールという言葉が流行ったが、それ以上に高度な暗示、思い込み、深層心理に訴えて、睡眠時間でもわれわれの脳に侵入してくる命令があった。われわれは特殊な耳栓をしている。雑音をシャットアウトするための自己防衛のマシンだった。そして、千分の一秒単位で網膜に送られてくる画像信号をカットするためのサングラスもかけていた。

われわれが破壊するのは放送局、新聞社、出版社、大手のプロバイダのホスト・コンピュータだった。情報を断つことによって、ボランティアの人々は長い眠りから覚めるのだ。

ぼくのすぐ前にトラックが停まってくれた。ぼくはすかさずその下に潜り込んだ。それから、下水のマンホールの蓋を開けて、下水溝に侵入した。

「遅かったな、やつらに掴まったかと思ったぜ」

ぼくは、下水溝を歩いて、二十一番街のとあるアパートの地下に辿りついた。みんな、根城にしているアジトだ。仲間が十五人集まった。

「身動き取れなかった。設計図をコピーするに手間取ってな」と、ぼくは、MOをポケットから取り出した。放送局の平面図を建設会社の管理部のコンピュータからコピーしてくるのは至難の業だった。パスワードを女子事務員から聞き出すために、強い催眠ジュースを飲ませた。

「よし、これさえあれば、襲撃のプランを綿密に立てられる」リーダーは、放送局の建物に仕込まれている監視カメラの位置と、赤外線装置、配電盤の位置などを確認して、マークを入れた。

いまのところ、人々に影響を与えるのが一番大きいテレビ局を破壊するのが先決だった。一方的に茶の間へ、各個人の寝室へと、入り込み、四六時中、信号を送り続けることができるもの。情報は操作加工され、視聴者に送られる。戦意高揚を促すために、敵国がどんな残忍な犯罪行為をしているかと、そこだけクローズアップして国民に示すだけでよかった。常にニュース番組は正しいものと信じているからだ。われわれ、レジスタンスもテロリストと結ばれて、いまやマンガ映画でも悪役である。子供たちに、悪いものとして植え付けている。イメージ化戦略も緻密に計算されていた。それには、広告代理店もかなり参加していた。政府の影の参謀は広告代理店だった。いずれ、やつらの社屋も破壊しなければならない。

と、いきなり電源が切れた。地下室は真っ暗になった。全員、身構えた。鉄製のドアが爆発してふっとんだ。近くにいた仲間がドアもろとも壁に投げ飛ばされた。

「伏せろ」という声がした。同時に機関銃の乱射が始まる。赤外線スコープで撃ってくるのだ。かなり正確だ。ドアから数名のボランティア兵士たちが銃を手に雪崩れ込んだ。机も椅子も天井

の照明も、空き缶も、パソコンもプリンタもすべて、形あるものは人間もろとも狙い撃ちにされて、火を吹き、血潮が飛んだ。地下室の中は、数秒間のあいだ阿鼻叫喚の地獄となった。やがて、動くものの影がなくなり、呻き声すら聞かれなくなると、銃声も止み、静になった。

「よし、兵士たちは下がれ、看護のボランティアは前進、負傷者がいれば洗脳病院に運べ」
ぼくは、足と手に銃弾を受けていて、かなりの出血をしていた。看護の若い娘たちが、ぼくの手と足の出血を止めるように応急処置をしていた。

役人のひとりがまたボランティアたちに命じた。

「看護班は救急車で病院まで付き添え。次、清掃のボランティアは、ただいまからクリーン作戦を展開する。外に清掃車が待機しているから、ガラスとアルミ、リサイクルの紙などと仕分けして積むように」

「あのう、死体はどういたしますか」と、ボランティアの一人が訊いた。

「服は脱がせ、チャリティ班があとで売る。遺体は生ゴミだから、燃えるゴミだな」

ぼくは、これから病院に運ばれて、治療も受けるが、催眠剤を射たれ、それから毎日、テレビを見なければならぬ。そして、農作業のボランティアにでも回されるのだろう。

死んだほうがよかったかもしれない。死んだほうが...

第187話 ゴルフ狂たち

「どうしても、今日、これからコンペをやろうというのか」
メンバーの一人が心配そうに訊ねた。

「わざわざ、ゴルフツアーを組んで外国まで飛んできたんだ。雨が降ろうが、槍が降ろうが、決行する」

主催者側は強気の姿勢を崩さない。参加メンバーの多くも、それに同意していた。

「条件が悪すぎる。どうなっても知らないぞ」メンバーの一人は不参加を表明して、帰り仕度を始めた。

「度胸のないやつは帰れ。止めはしない。こんな絶好のゴルフ日和にスリルもあるというのは、なかなか味わえないことだ。こういうコンディションでコースを回れるのは生涯に二度と経験できないだろう。万が一のときのために、ゴルフ保険も入っているから、安心してプレイを堪能してもらいたい」主催者の云うことに多くのゴルファーは頷いていた。しかも、ここは名門のコースとして、全世界からプロがやってくるころだ。こんなコースを回れるだけでも自慢になる。

コンペは予定通り九時からスタートした。晴天で風もあまりない。よく設計されたコースとして、その光景はまた素晴らしいものがあつた。海辺のゴルフ場で、アップダウンが少ない。フラットなロングコースが前方に広がっていた。その遙か先には青々とした海原が波もなく、輝いていた。四名づつのグループで、六組が参加した。

キャディは恐れをなして今回はひとりも出ていないので、やむなく、高いキャディフィーを出して、特別に傭兵を頼んだ。カートには迷彩服にベレー帽の黒人兵士がカービン銃を構えながら

、運転していた。一番のコースはドライバーで軽快に飛ばした。スライスもなく、ボールは真っ直ぐと飛んでゆく。三百は飛んだか。ホールは左に曲がって、松林の蔭にある。ここは四つで決めたいところだ。二番のグループが移動しているとき、いきなり、グリーン周りで爆発音がした。芝と土が数カ所で炸裂した。プレイヤーは全員伏せた。敵の迫撃砲が、狙っているようだ。バラバラと土がみんなの頭に降ってくる。

「くそっ、あちこちにバンカーを増やしやがって」

「やはり、中止して引き返しましょうや」と、気弱になるメンバーもいた。

「よりによって、こんな内戦の起こった国に来なくてもよかったんだ。両軍の前戦がこのゴルフ場になったなんて」

頭上をミサイルが飛んでいった。クラブハウスに見事に命中して、火災を発生させた。

「ほら、もうわたちには逃げ場がないんだ。どこへ逃げてもあなあっちまう。プレイを続けるよりないんだ。弾に当たったやつは運がないと諦めるんだな」

そう云われれば、ここまで来たら、やるしかない。みんな、気にしないことにした。

二番ホールは少し高い丘から見下げるショートコース。川が間にある。ここはワンオンだ。うまくゆけばホールインワン。商品はメーカーがついている。豪華船旅の招待付きか、装甲車一台とある。

「船旅はいいが、軍から装甲車を貰っても嬉しくともなんともない」と、メンバーが三番 アイアンで、ボールを叩いた瞬間、胸と腹を撃たれた。背中に大きな穴が空いた。口から血を吐きながら、その場に倒れた。すかさず、キャディが銃で応戦した。

「ここは、高台だから、三方から丸見えだ。狙われやすいんだ。注意しろよ」

みんな怖々と、辺りを見ながら、すばやくボールを打ち降ろした。打ち終わると、姿勢を低くして、下まで匍匐前進だ。

「犠牲者が一人出ました」と、キャディはケイタイで本部へ連絡していた。

三番ホールはミドルコース。トップを回っていたグループの一人が、一打を飛ばしたあと、フェアウェイを歩いていると、いきなり手足が千切れてふっとんだ。フェアウェイが一面の血で染まり、白煙が晴れると、肉塊がばらばらと辺りに散った。

「気をつけろ、地雷が埋めてあるぞ」と、注意を促しても、どこに埋めてあるか見当がつかない。みんな一列になって、恐る恐る歩いてゆく。先頭を歩く者が一番緊張していた。「地雷で三人やられました。これで六人の犠牲者です」と、本部へ報告が入る。ゴルフがサバイバルゲームとなった。十八ホールを最後まで回れるのは、何人いるだろうか。

四番ホールも至難のコースとなった。両サイドのラフから、機関銃でプレイヤーを狙い撃ちしてくるのだ。あるメンバーが、ころころと転がってきたボールを自分のボールと思っていたら、なにやら白い煙が吹き出ている。

「すわっ、し、手榴弾だ」と、クラブでつい打ち上げた。そいつは、空中で爆発した。

また、あるメンバーが打ち上げたボールが、空中で見事に撃ち砕かれた。メンバーはルールブックを開いて見たが、どこにも書いていない。

「敵弾で撃ち砕かれ場合は、やはりOBなのかなあ」「カラスがくわえてゆく場合と同じだろう」

とかなんとか話し合っている。

なんとか、無事にハーフを回ったのが、半数。あとは、戦争の犠牲になった。

十ホールを回っているときだった。コースに戦車がいきなり乱入してきた。頭にきたメンバーは、

「おい、コースに入るな、邪魔だ、どけ」と、クラブを向けて怒鳴っていたら、戦車砲が火を吹いた。あちこちに土煙が立ち、砲弾が炸裂していた。もう、ここまで来ると、みんな慣れたというか、度胸がついてきて、多少のことでは驚かなくなってきた。

「まあ、仕方がないか、戦車も障害物としようか」と、避けて打つことにした。たまたま、メンバーが打ったボールが戦車の上ののっかった。彼は、クラブに白いハンカチを結び、白旗に見せて、それを振りながら、戦車に近づくと、大胆にも戦車に飛び乗って、ボールをそこから打った。

「どうも、失礼いたしました」と、礼儀も忘れない。

最終コースに入った。すでにメンバーは死亡、負傷者を除いて、残ったのはたった四人だけ。その四人で優勝が競われることとなった。点差は上位二人の争いになった。二番を追うものは是非ともバーディーはとりたい。その十八ホールは海岸に面していた。沖合いに停泊していた巡洋艦から艦砲射撃が始まった。敵軍が上陸用舟艇で、続々と海岸線から上陸してきた。それを迎え撃つべく、歩兵が重機関銃で応戦するが、形勢はかなり不利だった。海岸は死体でいっぱいになったが、それを乗り越えるように攻めてくる。両軍入り乱れての激しい戦闘になった。弾はひっきりなしに、飛び交う。その間にいて、四人は真剣な表情で、芝目を読んでいた。まさにパターで、ロングパットを決めようとしたその瞬間、敵兵がグリーンに雪崩れ込んできた。そうして、キャディが十八番の旗を抜いたホールに、持ってきた敵国の国旗を押し立てた。兵士たちは橋頭堡を確保したことで万歳をしている。ゴルファーたちは、その最後の一打を占領されていた。

「もはやこれまで」

第188話 展覧会のえ？

銀座の月動画廊といえば歴史も権威もある画廊だった。画家なら一度はそこで個展を開いてみたいと思う。

いつもは静かな画廊も、この夕方は何故か人の出入りが激しい。画廊の前には新聞社、テレビ局の車が横付けされ、マスコミ各社が押しかけているようだった。そればかりではない、高級車が続々と到着する。見覚えのある面々が次々に降りてくる。閣僚のものものしい姿が目立った。そして、財界のボスたち、芸能人と、華やかさも有り、展覧会にしては珍しい動員だ。明日からの展覧会に備え、宣伝も兼ねたオープニング・セレモニーがこれから始まろうとしている。画廊側としては、できるだけ大きな花火を上げて、話題性を呼び起こすためにも、招待客を厳選していた。入口には看板のほかにポスターも貼ってあった。題して一食・ショック・色展。日本を代表する若手の画家たちが造る、現代美術会のメンバーによる企画展だった。主に平面の油絵、アクリル画を160点、新作ばかりを展示していた。

テープカットが済むと、厚生労働大臣の挨拶が冒頭にあった。

「わが国の食品産業は、いままさに危機に立たされております。消費者の不信感を払拭するために、ただいま東京都で開催されております食の博覧会の記念イベントとして、このたびの展覧会を併開いたしました。この入場益の一部は食品振興のために使われることで、わが国の食品産業を世界に負けない業界まで押し上げる一助にしたいと画策された次第であります...」

一通りの挨拶や画家たちの紹介が済むと、別室でパーティーが催された。すべて、国産の食材を使用した料理と、食肉の試食、ワインや酒も振舞われた。絵はどうでもよく、みんな、そっちの方に興味があった。ことに政治家や事業家たちは絵に対する芸術的価値より、金銭的価値が頭にあり、画廊のオーナーや画家たちが案内する展覧会でも、すぐに、

「これは号いくらですか」と、値段ばかり訊く。

オーナーは六十号くらいの油の前で説明していた。何がなんだかよく判らない。アブストラクトが多いから、説明を受けて初めて、そうかなと思う。

「これは、アイスクリームが路上に落ちて、溶けたのを少女がしゃがんで、悲しげにみつめております。題して、『夢の終り』です」

「そう云われれば、そのようにも見える。わしはまた女の子がお漏らししたのかと思ったわい」と、代議士の一人が下品にげはげはと笑った。

次のは、四枚の連作。二十号のキャンバスに砂絵のように四季の風景を背景にショートケーキが描かれている。上に乗っているフルーツだけが季節の果実だ。

「これは、すべて砂糖とメレンゲ、ドライフルーツで描かれています。すべて食べられます。ん？誰ですか、齧りましたな」すでに作品の端には歯型がついていた。絵の下には、(食べないでください)と、注意書きが貼ってあったのに、食べるなど云えば食べたくなるものだ。

次の絵は画面いっぱいに蕎麦が盛ってある。その蕎麦が画面から床まで垂れている立体的な構図だった。題して『over』。刻み海苔が生々しい。そんな半立体のものもあれば、フロッタージュもあり、一様に皆、首を傾げている。前衛のシュールなものから抽象ばかりだから、絵を見ても食欲が沸かない。

次の絵は南瓜の形そのままのパイと、半分さつまいものスイートポテトを描いた静物画。その絵の中に、It's beautiful.と横文字で書かれている。パクリというよりパロディだった。生きて、泳いでいる魚が生き造りだったり、ステーキに人間が食われる絵だったり、とても理解ができて、みんな退屈していた。元々、芸術の素養のない人ばかりが招待されてきたから、ざわざわ無駄話ばかりしている。画廊のオーナーは展示フロアの中央に掛かっている大作の前に進んだ。

「皆さん、この絵が今回の展覧会の超大作であります」

壁面いっぱいに飾ってある、額もまた古風で素晴らしかった。格子状の金属の網の上に白い何かの四角い塊が載っているコンポジション。その白い塊の上が膨れて風船のように天に向かっていている。何かをデフォルメしたものなのだろうか。やはり、その絵に何が描かれているのか想像がつかない。

「なんなのでしょうな」「幻想的だわね」「題は、『ポリシー』とあるね。一体、何を描いたのでしょうかね」みんな、ざわめき始めた。

「これは、何だと思いですか。これぞ、わが国でいまだかつて誰も描いたことのないモチーフ

です。これは画餅です」

「画餅？」

「そうです。絵に描いた餅ですな」

あちこちから溜息が聞かれた。

ひとりの新聞記者がオーナーに質問した。

「この展覧会の主催者はどなたですか」

オーナーは代議士先生たちの顔を眺め渡しながら云った。

「自民党です」

第189話 ジベタリアンたち

地べたにごろごろ座っている若者たちが増えた。それを社会現象として、ジベタリアンと呼んだ。電車の中でも、ホームでも、デパートの中でも、どこでも汚くないのか、学校の制服のまま、スカートを広げてぺたりと座りこむ。パンツも真っ黒になるのではないかと、他人事ながら心配になる。

「なあ、見てみろよ、あの連中の格好ったらどうだ。これから日本を背負って立つ、若者たちの姿か。われわれの若いときにも、ヒッピーというのが流行って、ジーンズを履いて、ああいうふうに座った時期もあった。しかし、ヒッピーは社会から離脱していたが、ちゃんと哲学を持っていた。それに引き替えあの連中はどうだ、墮落しているだけではないのか」

中年のサラリーマンたちが、電車の中でジベタリアンたちを眺めてそう話していた。

昔の中国でも外にしゃがんで貧しい人々は御飯を食べていた。日本でも明治の初頭まで外でしゃがんで食べていたので、外国人が入ってくるようになって、田舎町でも恥ずかしい行為として禁止する御触れが出たほどだ。しゃがむという、うんちんぐスタイルは、それを連想するためか、どうも抵抗があるようだ。ましてや、地べたに座るのは乞食のようで格好が悪いとみる。精神的に幼児化した若者たちが、退行現象で地べたに座るのではないかと、心理学者が説いていた。

中学から学校に行かなくなった不登校の子供たちが増えた。高校へ進学しても続かないで、中途退学するものも増えた。仕事もしたくない、勉強は嫌いだ。人生の目的も、趣味もなにもなく、何をしたらいいのか判らない未成年者たちに加えて、高卒でもいまは就職難、まして大学卒なら余計にない。仕事をしたい若者たちでも仕事がない。次第にアパシーな若者が増えてくる。家にいれば、親と喧嘩になる。ぶらぶらしていれば、世間体が悪いから、家にはいられない。さりとて居場所がない。小遣いもないから、遊ぶ金もない。希望もなければ、先行きも何も考えていない。ないないづくしの若者たちが、ある日、立って歩くことをやめた。歩いても疲れるだけだ。どこへ行くという宛もない。すべてを投げ出してしまったときに、地面があたたかい母に思えた。座るということが、どんなに楽なことか。これ以上の底はないところから、社会を見上げていると、逆にせかせかと歩く人たちが滑稽に見えてくる。あくせくと働いて、稼ぐ人間を羨ましいと思わない。ごろんと横になったら、街も横に見えた。

ひとり、ひとりと座り始めた。地下鉄の階段にも、デパートの店頭にも、公園にも、歩道という歩道に、雨が降れば庇のあるところに、風があれば風避けのあるところに、立つということを忘れて、芋虫のごろごろと転がるか、しゃくとり虫のように這いつくばって移動するだけで、立つということを徹底的にしないジベタリアンたちが急激に増殖していった。家にも帰らない家出同然の子供たちも増えて、搜索願が手に負えないほど殺到していた。歩道はすでに歩行が困難なほどにジベタリアンたちに占領されていた。

腹が減っても、喉が渴いても、自分から生きようとする意志がないから、横たわったまま動かなくなる。トイレもその辺に垂れ流しだった。多くの親兄弟たちが、声を嗶らして子供を捜しにくる。夥しいジベタリアンの中から探すのも大変だった。学校の先生たちも総動員された。みつ

けて、連れ戻そうとすると、本人だけでなく、ジベタリアンたちの抵抗に遭う。一様に、言葉を忘れたように、「あう、あう」と、云うだけで、まるで人間を棄てたようだった。

ついに、政府がこの事態を重くみて、ジベタリアンたちの保護に乗り出した。機動隊が出動して、片端からごぼう抜きにして、バスに乗せようとするが、ジベタリアンたちは、悲しげに、ただ、「あう、あう」と涙を流しながらスクラム組んで拒絶するのだ。そんな若者たちを放っておくわけには行かないと、各地でジベタリアンを救済する動きが出てきた。食糧と水が配給された。そうでなければ、のら犬のようにゴミ箱から残飯を漁るものも出てきていた。座ったまま用が足せる簡易トイレの設置も急がれた。夜は寒さを凌ぐための毛布も支給された。ジベタリアンたちは帰る意志と立つ意志がないから、ぐにゃぐにゃとゴム人形のように、力も入っていないで、一日中同じところに座っているだけだ。

マスコミは、その現象を世界に伝えた。

「大人の身勝手に、離婚も増え、片親で苦勞する子供たちもいます。政府の無策のため、仕事のない若者たちもいます。官僚たちは、自分の私腹をこやすことばかりで、天下りで莫大な退職金を貰って渡り歩いているのを若者たちは知っています。政治家も清廉潔白なものがどれほどいるのか、探るのが大変なほど汚れきっているのも知っています。大人の世界は、私利私欲にまみれて、こんな失業率の高い、財政難で、税金の高い国家を作り上げてしまいました。彼ら、ジベタリアンはそんな社会への一種のストライキです。これは言葉を変えれば、無力な若者たちのメッセージです。日本だけで、こうした若者たちは五百万を数えました。この現象はアメリカでも、お隣の韓国でも現れはじめました。なんとかしなくてはなりません。このままでは、全世界の若者たちが、続々と人間を辞めてゆきます」

ジベタリアンたちは、次第に形が崩れてゆき、どろどろのアメーバ状になって、歩道を埋めつくしていった。口と目だけが粘性のある体液の中に見つけられ、何かを訴えるように、「あう、あう」と、泣いているのだった。

第190話 輪廻転生

目が覚めたときは、ぼくは頭ががんがんにしていた。長い眠りから急に覚めたように、朦朧としている。白い壁と天井、そして、鉄パイプのベッド。ぼくは、どうやら病院に寝ているらしい。起き上がると、そこは個室のようで、他に患者はいなかった。何か、妙に身体が小さく縮んだように感じていた。ぼくは、自分の指を見て驚いた。小さい、まるで子供の手だった。顔に手を当ててみると、それはぼくじゃない。毛布をはいで、バジャマから出ている足を見た。やはり小さい。まさか。と、パンツをずりおろしてみると、陰茎もまだ皮をかぶっているばかりか、陰毛すらない。どうなってしまったのだ。ぼくは、飛び起きて、壁に掛かっている鏡の前に立った。そこに映っているのは見知らぬ子供だった。八歳くらいの男の子が驚いた表情で鏡を覗いている

。近眼だったぼくの視力は回復していることに気がついた。

ぼくは、初めてある重要なことに気がついた。それは、もう何年も昔のようであり、つい昨夜のこのようにも思える交通事故のことだった。ぼくは、高速道路を東北へと走っていた。学会の会議が東北のある大学であった。それに出席するために走っていて、そうだ、前のジープがトラックと接触して転倒した、それに突っ込んだのだ。あとは全然覚えていない。ぼくは死んだのか。だが、ここにいるぼくは誰なのだ。四十六歳の大学教授が、いきなり小学生になっている。

病室のドアを開けると、廊下には人影もなく、電灯も暗い。いまは夜なのだ。ぼくは裸足のまま、エレベーターで階下に行った。どこだろうか、広い病院らしいが、人気がないのが気になった。非常口があった。下足棚にサンダルがあったので、そのまま裏口へと出た。何という市だろうか、電信柱にある地名も聞いたことがない。東京ではないようだ。住宅街をふらふらと歩いていると、いきなり懐中電灯で照らされた。

「どうした、子供じゃないか、こんな真夜中に、寝ぼけて歩いていたのかい」と、夜回りの警官が立っていた。

「坊主、家はどこだ」と、訊くから、「板橋区東新町」と答えると、警官は笑って、「家族で旅行にでも来ていたのかな。泊っているところはどこだい。おまわりさんが送ってゆくから」と親切だが、困った。

「親とは、はぐれたらしいんです」と嘘をついた。ぼくの声もすっかり子供だったが、云い方は大人でおかしいと警官は思ったろう。迷子と思ったのか、交番まで連れてゆかれた。

「ぼくの名前は、住所は、お父さんの名前は」と、立て続けに交番で訊かれた。「ぼく、いくつだい。どこの小学校?」と、訊いたところで、

「四十六歳で、筑波大学に勤務しています」と、云うと、警官は大声で笑った。

「いやあ、面白い、そんなギャグ、テレビで流行っているの?」

電話番号を教えたので、警官は確認のために東京の自宅に電話を入れていた。

「はい、夜分すみません。こちらは一関の交番ですが、一関、岩手県です。そうです。お宅の松尾美津夫くんですが、はぐれたと云って、こちらで保護しておるんですが。ええ? 冗談はやめてくれと、何? 美津夫さんとはお宅のご主人ですか。亡くなった、交通事故で? 判りました。おかしい子供でしてね、失礼いたしました」

警官は怒った顔を向けてよこした。

「大人をからかっちゃいけないよ。ちゃんと話しなさい。本当の名前と、住所」

ぼくは、いましがたの電話のやりとりを聞いて愕然としていた。交通事故でぼくが死んだ。

「ちょっと、電話貸してください。家に電話しますから」と、ぼくは、また自宅へと電話した。呼び出し音がしていたが、妻の綾子が出た。

「ぼくだ、綾子か。ぼくが死んだって本当か」

電話口は暫く沈黙があった。

「あなた、声が違うわ、子供のいたづらでしょう」

「本当にぼくなんだ、盛岡の大学に学会出席のため車で走っていた。そして事故に巻き込まれたのまでは覚えている。そして、ここの一関の病院でさっき目が覚めたんだ」

また、沈黙が続いた。

「ああ、嘘だわ、だって、あなたの葬儀は終わったのよ。亡霊なの」

「今日は、何日なのだ」「八月の十一日だ」と、後ろから警官が云った。「ということは十日意識を失っていたんだ。昨日は美保の誕生日だったろう。プレゼントの約束をしていた」と、わたしは中学の娘の約束を思い出していた。ケイタイを買ってやるという約束。

「それは娘とわたししか知らないことでしょう、何を買ってやると約束したかおっしゃってください」

妻は疑ってテストしていた。

「ケイタイを買ってやると、風呂上りに云ったんだ。ほら、ビールで酔った勢いでと、おまえが笑って」

妻は電話口で泣いていた。電話は警官に代わった。「相手は本当に子供ですよ、それでもいいんですか、どうも判らない、まあ、お迎えにあがるというなら、こちらで朝までお預かりしておきます。一番の新幹線でおいでになりますな」

朝まで何時間もない。ぼくは、奥の部屋で寝かされた。外が騒がしくなって、朝の光が眩しかった。交番に妻が顔を見せた。ぼくの顔を見るなり、落胆していた。

「どうして、わたしたちのことを知ったの」と、疑う。

「それなら、ぼくたちの秘密でも思い出でもなんでも質問してみたらいい」と、ぼくは妻の質問にすべて答えた。妻は驚いて、子供のぼくの身体をかい抱いた。

「あなたは、高速道路のこの先で車ごと滅茶苦茶になったの。この一関の病院に運びこまれたときは、時間の問題だった。学会の先生たちが駆けつけてくれて、あれこれと手当してくれましたが、でも、駄目でした。この街で火葬して、一週間前に葬儀をやりました。初七日をやったばかりに電話がきて、どうして、あなたが、こんな子供に生まれ変わったのかしら」

警官は頭が混乱するばかり。

「奥さん、その病院にいたと証言していますから、行ってみたら何か判るかもしれませんよ」面倒くさそうにそう警官が云った。

「そうだ、ぼくが入院していた病院に行けば、すべてが判るかもしれない」

ぼくたちは怪しげな病院の前に立った。病院は去年倒産して、閉鎖してあった。駐車場に雑草も生えていた。ただ、どうも、誰かいる気配があるので、正面から入った。鍵もかけていないようだ。

「誰かおりませんか」と、大声で叫んだ。廊下に反響して、声は階段をも登る。電気は通してあるので、誰かが使っているのだ。

「よかった。戻ってきましたか」と、後ろから声がする。妻と二人振り返ると、そこに立っていたのは、盛岡の学会で同席するはずのマサチューセッツ工科大学の教授のサミュエル白井だった。

「ドクター、どうしてここへ。ぼくは、松尾です」ぼくは、脳外科の世界的権威の白井がいることに驚いた。

「先生、このたびは主人のためにありがとうございました」と、妻までが挨拶していた。「知っているのか?」と、妻の方を向いた。

「ええ、事故のあと、学会の先生方が駆けつけてきてくれまして、白井先生があなたの手術の執刀をしてくれました。でも、ここの病院ではなかったわ。市立病院でした」

「まあ、どうぞ、おかけください」と、待合室の椅子に座った。「ここは、わたしが借り上げて、研究室に使用しております。設備も悪くない。松尾先生の研究はわれわれにも大事なものでしてね、死なせるわけには行かなかった。どうしても生きて、研究を続けてもらいたかった。それで、わたしが長年、研究してきた実験に先生の身体を使わせてもらいました。そして、実験は成功しました。ただ、ひょっとして、これは大変な犯罪になります。あなたを生かすために、一人の少年の意識をこの世から抹殺いたしました。わたしは実に罪深いことをやりました」白井先生は胸でクロスをきった。

「ど、どういうことですか」

「研究室へ案内しましょう」白井先生はエレベータで三階まで妻も連れてゆく。

研究室の中は医学の研究とは思えないほどの見たこともない機械で埋め尽くされていた。一見すればコンピュータの周辺機器という感じだ。すべての機械が自作機であることは、剥き出しの配線で判る。それが、中央に設置してある椅子とヘッドギアに繋がっていた。

「これらが何を意味するか、判りますか。人間の記憶をデータに変換して、別の人間にコピー&ペーストする機械なのです。わたしは、孤児院から一人の少年を養子に貰いました。それがあなたの身体です」

ぼくたちは絶句した。そんなことが可能なのだろうか。肉体を若いものに変えて、また長い生涯を続けることができるとは。

「わたしの研究を継いでゆくのは、あなたよりおりません。どうか、一緒にやってください。その年齢なら、あと六十年は続けられる」

ぼくは、自分の娘より年下に生まれ変わった。人間が、肉体を次々と借りながら、何千年も生き続けることができるかもしれない。死ねないということはどういうことなんだろうか。ぼくは、戦慄を覚えながらその機械を直視していた。

第191話 夏祭り

A市のスーパーマーケットのチェーン店が倒産した。支店が三十にデパートも二つあるという地元では最大手だった。従業員三千名がある日突然解雇された。夏のボーナスどころか、給与も未払いがあり、この就職難の折、家族を抱えて路頭に迷うこととなった。

県が駅前再開発をそのスーパーに依頼して、無理な投資をさせた挙句、第三セクターの開発会社から県はあっさりと手を引いていた。駅前の巨大ショッピングセンターがオープンしてから、目標達成まで程遠い実績を睨んで、責任逃れした格好となった。

中心商店街が年々寂れてゆくので駅前の市場を整理して、衰退してゆく商店街を回復させる目論見は外れた。競合のスーパーも不景気で、再雇用の道はない。パート社員は、かろうじてどこ

かに潜りこめたが、正社員たちは、全くといっていいほど仕事がなかった。食品部門の部門長をしていた長浜は、家のローンもあり、子供二人も高校とこれから金のかかるときに、出された格好となった。他の五人の元幹部社員たちと、家に集まって、焼酎の自棄酒をやりながら、不満をぶちまけていた。

「五十過ぎれば、仕事はよその県でもなさそうだ。出稼ぎもめっきりと減ったしなあ、八方塞がりだよ」

「そうさな、道路工事の旗振りも倍率が高くて、ないそうだ。ゴミの回収の仕事に、この前、三人採用するのに四十人が殺到したというじゃないか」

「女房の内職でどうやって食べてゆけるんだよ。家を売るよう不動産屋に出したが、いまは売り物件ばかりで、買い手がいないそうだ」

そんな話ばかりしてボヤいていた。

「何が悪いって、行政の指導が悪い。郊外にどんどんとニュータウンを建築させて、郊外型ショッピングセンターの大手を呼んできて、地元がダメになる政策ばかり進めてきた結果がこれだ」遠くから祭の囃子が聞こえてきた。

「笛太鼓の音だ、そうか、忘れていた。今日から流し踊りだった。よし、みんなで踊りに繰り出そうか、鬱憤を晴らそうじゃないか」

酔った勢いで、豆しぼりの手拭でそれぞれ鉢巻しめた。一升瓶ごと持ってゆく。呑みながら踊ると酒が効いてくる。

沿道に見物客も多かった。この市で唯一の夏祭だった。威勢のいい囃子に血沸き肉踊る。失業者たちは、踊りの列に乱入した。

団地の奥さんたちが、集まって内職をしていた。昼間だけパートに出て、戻ってくるとこの内職だ。それでも足りないものは、夜のスナックへ働きにゆく。三毛作しても家計のやりくりがつかないのは、どんどん税金が増えるからだ。亭主はリストラに遭ったり、減給されているのに、どうしてか、税金だけが高くなってくる。収入の三割払っていたものが、いまや四割近くなんだかんだと引かれている。普通預金の口座はまるで筆り取るように、残高不足になってしまう。

「奥さん、疲れない？ これからまた夜のバイトでしょう。いつ寝ているの？」

「まだ若いから平気だけど、子供たちが可哀想でね。グレやしないかと心配で。最近、何か性格変わったように暴れるの。家庭内暴力ね」

「飲み屋も暇で、以前のような時給は出せないんですってね」

「掃除婦も募集すると殺到するから、なかなかどうして、仕事はないわ。わたしたち庶民が四苦八苦しているときに、知事と県会議員たちの豪邸、あれはなんなのよ。絶対に裏でうまい汁を吸っているのよ。許せないわ」

「税金といえば、江戸時代から四六公民と云ってね、稼ぎの四割が持ってゆかれた重税だったというのね。上は賄賂に使い込み、退職金目当ての天下り。わたしたちが、爪に灯ともして儉約しているのに、湯水のように金を使って、ほら、助役の息子さん、イギリスへ留学したというじゃない」

「ほんと、うちじゃ、大学にも上げられないというのにねえ。とにかく、不正は許せないわね。税金払うのがばからしい」

「とくにここの県政は昔から腐りきっているのよ。それをまた許してきたわたしたちも悪い。選挙で入れるのも、お零れを貰っている会社、団体でしょう。上から下まで団子のように繋がっていて、弱いものにしわ寄せがゆくなんて、絶対に不公平だわ」

遠くから祭の囃子が近づいてくる。

「そうそう、今日から流し踊りね。どう、いっちょうみんなで繰り出さない。浴衣に花笠はみんな持っているしね」

「随分祭にも出ていないわね。こんなところでくすぶっていないで、やりましょうよ」

奥さんたちは、各々部屋に戻り仕度していた。

街のあちこちから、不満を抱いた市民たちが、笛太鼓に呼ばれるように、どんどん家から出てきた。ハーメルンの笛のように、女も子供も年寄りも、忘れていた祭を思い出したように、流しの列に加わった。

「ええじゃないか、ええじゃないか、ええじゃないか、税金高くてええじゃないか」

祭の流しは異様な雰囲気になってきた。次々に、見物客も加わり、配達途中のクリーニング屋も、カミソリを手にした床屋も、出刃包丁を持った魚屋も、喪服を着た葬儀の列からも、下水工事の鶴嘴を持った男たちも、無意識に誘導されるように、踊りながら列に入ってゆく。

「ええじゃないか、ええじゃないか、ええじゃないか、贈賄裏金ええじゃないか」

列はどんどん膨れあがり、長くどこまでも続いていた。一本の狂い猛る龍のようにも見えた。日頃の不満が大きな合唱となって、街を震わせた。

「ええじゃないか、ええじゃないか、ええじゃないか、医療費値上げもええじゃないか」踊りの列はものすごいエネルギーとなつて、誰にも止めることはできなかった。踊りの先頭は、大通りから逸れて、県庁に矛先を向けて前進していた。警備の警官たちが、予定にない行動にホイッスルを鳴らして制止していたが、誰も聞くものではない。ハンドマイクで叫ぶ警官の声も聞こえない。制止する警官は踏み倒された。車はたちまち、県庁通りに入れなくて、交通麻痺を起こしていた。信号が赤でも構わずに踊りは進んでいた。

やがて、県庁の正面から踊りながら群衆は雪崩れこんだ。県庁の前庭が踊り手でいっぱいになっても、続々と後ろから押し寄せてくる。その数、何万を数えるかしれない。

「ええじゃないか、ええじゃないか、ええじゃないか、年金払えずええじゃないか」

踊りは殺意にも満ちていた。異様な集団になって、どんどん県庁の玄関から建物に入ってゆく。まるで一揆の農民たちが、城に押し寄せるように、どんどん入ってゆく。太鼓は叩かれ、鐘も鳴り、笛はより高く響いていた。窓ガラスが建物の二階で割れて落ちた。悲鳴が聞こえ、窓ガラスに血が噴き上げるのが見えた。それも、囃子の音量に負けて、何も聞こえないに等しい。中で何が起きているのか、賑やかに踊り歌い、夏祭りは絶好調で高鳴る。

「ええじゃないか、ええじゃないか、ええじゃないか、誰が死んでもええじゃないか」

青森では、八月七日をなぬかびと云う。その日は市を挙げて行われるねぶた祭りの最終日で、夜は、ねぶたを海に流す海上運航と、花火大会が行われ、祭りのフィナーレを飾るのだ。

今年、平成十四年のねぶた祭りは暑くもなく寒くもなく、雨上がりの合間に祭りが行われるという幸運に恵まれた。

わたしは、夜のねぶたより間の抜けた昼のねぶたが好きだった。六日までは毎夜、行われるねぶたも、最終日は昼に出陣する。観光客も帰り、沿道は疎らな観客で、跳入の数もめっきりと減る。明るい真夏の太陽の下で運行するねぶたは、ようやく市民の手に戻ったねぶたという感じがした。

その日、わたしは不思議な体験をした。このことは、まだ誰にも話していないが、話したところで信じてもらえる筈もなく、真夏の白昼夢としてここに書き留めておくだけにしようと思う。

七日の夕方、わたしは会社を早めに切り上げた。七時から始まる花火大会を家族で見ようと、子供たちは女房と昼のうちに電車で、青森に来ていた。みんなは時間があるので、デパートを見て歩き、わたしとは、花火大会の会場である青い海公園のトイレ前で待ち合わせをしていた。その前に蕎麦でも食べようと、わたしは混んでいる新町商店街から逃れるように、松木屋デパートに入った。暫く、このデパートには入ったことがなかった。戦前からの老舗のデパートだが、建物も老朽化してきていた。わたしは、一階の奥にあるトイレを借りてから、その隣りにある、古ぼけたエレベーターのボタンを押した。こんなエレベーターがあっただろうかと、思いながら、ひょっとして従業員専用のものではないのかという考えが頭を掠めた。五階に蕎麦屋があったが、そのエレベーターは三階までよりなかった。あとは階段かと思いながら、年代もののエレベーターを三階で降りてみて驚いた。薄暗いのだ。天井からは裸電球がぽつりぽつりと下げられて、懐かしいセピアに売場が浮き出ている。ガラスのショーケースも木枠で組まれて、いまどき珍しい。品物が殆どなかった。店員たちが黙々と荷造りをしていた。その店員の姿を見て、わたしは笑った。ねぶたの化人に出たのかと思った。制服の和服も髪型も化粧も戦前のように古めかしい。客の振りをしてうろうろしている婦人もモンペなんか履いている。それにしても、売場自体がレトロ調でこしらえているのには、何か催し物でもあるのだろうと思っていた。逆に、みんなわたしの服装を見て、珍しそうにじろじろ見ている。

「あのう、五階までの階段はどこですか」と、わたしが店員に訊くと、

「ここは三階までしかありませんけど」と、津軽訛りでつけんどんに応えた。

「そんな筈はない。テナントでお蕎麦屋さんがありましたよ」

「テナント?」と、首を傾げる店員は、上司の男性に訊きに行った。まもなく、主任らしい男が応対した。

「お客さん、菊屋デパートの間違いではないんですか、うちには食堂しかないけど、いまは配給で材料が入らないから、休業してますが」ガラガラと音を立てて、扇風機が回っている。クーラーがないのか、店内はむっとした暑さだった。

わたしはからかわれているようにひとり腹を立てて、やはり古めかしい階段で、一階まで降りた。なんだか、懐かしい雰囲気が出ていた。死んだ両親のアルバムにあったような、焼けたモノクロームの世界だ。売っている商品もどれも昔のものだ。値札に五十銭とついている。「ま

さか」わたしは異常に気がついた。走って、デパートの外に出た。

わたしは立ち止まった。「嘘だろう」そこは新町商店街には違いなかった。すべての建物が低く、古いのに加え、走っているバスは木炭で走り、馬車まで通る。映画のセットにいきなり、紛れ込んだような錯覚を覚えた。この光景には見覚えがあった。戦前の商店街の写真を青森市の史料で見たことがある。

「そんな、馬鹿なことがあるか」と、わたしは声にして叫んでいた。通行人がみんな振り向いた。幻覚でなければ、夢を見ていると思った。だが、何に触れても、存在感があり、現実のものだった。わたしは、通りかかった荷車引きのじいさんを呼び止めると、

「すみません、ここは確かに青森ですね」と、訊いた。

怪訝そうな顔をしたじいさんは、「んだ、あんだ、旅の人か」と、逆に訊いてくる。

「今日は、何月何日ですか」「今日が、七月の二十八日だあべ」「昭和何年ですか」しつこく訊くのに、じいさんは馬鹿にされたと思っていたのか、また荷車を引いてゆく。追いかけると、「うるせえじゃ、昭和二十年だべよ。なんだ、おめは」と、振り切るようにして行ってしまった。とっぴりと日は暮れてきた。昭和二十年七月二十八日だって、わたしはある重要な日付を思い出していた。郷土史を習っていて、忘れられない日付、その夜は青森空襲の日だった。全市が灰燼と帰し、多くの犠牲者が出た日だった。別の通行人に確かめても、同じ返事だった。間違いがない。

何故、タイムスリップして、五十七年前の世界に来たのかは知らない。とにかく、ここには危険だということだけは判っている。わたしは、通行人に手当たり次第に呼びかけた。

「今夜、空襲がある。ここにいたら大変だから、市外へ逃げるんだ」そう、云いふらしていたら、警官らしい制服の男たちがわたしを取り囲んだ。

「おめえか、昨日のアメ公がばらまいていったビラのことば、真に受けだが、それども、おめえは敵国のスパイでねえべな。ともがく、来てもらう」いつのまにか頑強な連中に両側を取り押さえられ、柳町の拘置所に連行された。そこでは、寄ってたかって殴られた。「さあ、おめえは何もんだ。云わねえか」

わたしの腕時計を外して眺めていた憲兵隊の隊長が、珍しそうな顔で部下になにやら囁いていた。腕時計はデジタル表示だから、戦前にはないものだった。

「貴様、これをどこで手に入れた。何に使う機械なんだ。暗号なのか。この機械の使い方を説明しろ」わたしは後ろ手に縛られて、身動きがとれない。鼻血まで出ていて、それどころではなかった。部下の一人が、わたしのジャケットからケイタイをみつけて、また隊長に提出していた。

「こいつは何だ」ケイタイをわたしの顔の前に突きつけた。

「それは、携帯電話だ」「なるほど、小型の無線機か。スパイに間違いないだろう。いいか、おまえの知っていることをみんな吐いてもらう」

隊長はわたしの首を締める格好をした。

「わ、判った。何でも、話すから、手を緩めてくれ」わたしは椅子に座らせられた。

「敵軍はいつ飛来するのだ？」

「今夜、確か十時過ぎだと思った。焼夷弾を投下して、全市が燃える。何千人もの死傷者が出るんだ。この建物も燃えてなくなる」

「なんだと、どうして貴様にそんなことが判る」

「歴史の時間に習ったんだ。あと、半月余りの、八月十五日に日本は無条件降伏するということもな」

「こいつは、気違いかもしれねえですよ」三人が小声で話していた。時間はすでに十時を過ぎた頃だった。

いきなり、空襲警報のサイレンが鳴った。拘置所の電灯が全て消されて、辺りは真っ暗になった。やがて、雨のように降ってくるものがある。きっと油を撒いたのだ。B29の爆音が遠くから聞こえてきた。無気味な唸り声だった。そのうち、高射砲だろうか、やはり遠くから大砲の音がした。きた。わたしの耳には何千発という焼夷弾が落下してくる音が聞こえる。逃げなければと思っても、椅子に縛られて、立つこともできない。わたしは、もがいた、憲兵たちは、みな出払っていない。ここで、焼け死ぬのだろうか。わたしは他人事のように考えていた。ヒューという花火の上がるような音がした。建物の窓を突き破って、焼夷弾が飛び込んでくる。そいつは、床に突き刺さるなり火を吹き始めた。すでに、窓の外は真赤に燃えている。部屋が燃え始めた。煙が充満してくる。わたしは椅子ごと倒れて、ドアの方へとにじり寄っていった。ようやく、椅子からロープを解いて立ち上がると、廊下によるけながら出た。空も街も赤く轟音と共に燃え盛る。古いエレベータがあった。さっきのデパートにあったものと同じだ。廊下も黒煙と炎で煙突のようになってきた。夢中でわたしはエレベータのボタンを押した。ドアが開くと、転がり込むように入ると一階のボタンを押した。エレベータはがたと止まった。助けてくれ。ここから出してくれ、と声にならない声を出していた。すると、ドアが開いて、松木屋デパートの一階に出た。明るい、蛍光灯の光にエアコンの冷気を感じた。店員も現代の制服を着ている。

わたしは外へ出た。すでに暗く、空は花火で燃えていた。ふらふらと新町から海の公園へと歩いていた。

「お父さん、どこへ行っていたの、花火大会もう始まってしまったじゃないか」

わたしは、青い海公園のトイレの前につっ立っていた。息子が、ぼんやりと立っているわたしの腕を引いていた。夜空一面の花火が開花していた。ものすごい見物客で、座る場所の確保も大変らしい。

「たったいまのことが、夢だったというのか」わたしは、花火と空襲をどこかで錯覚していたのか。わたしは恐怖感から解放されてどっと疲れが出ていた。爆弾が花火でよかった。平和な時代でよかったと改めて思っていた。

女房が、シートを広げて、娘と座っていた。

「何よ、あなたの顔、誰かと喧嘩したの？鼻血が出ているじゃない。それに、なによ、この煤だらけのワイシャツ。ジャケットはどうしたのよ。朝、着ていったでしょう。さっきから何度もあなたのケイタイに電話していたんだけど、電波の届かないところにいるって、何処へ行っていたんですか」

わたしは、腕時計のないことに気がついた。

「昭和二十年に忘れてきた」と、呆然とした顔で云うと、女房は憐れみを浮かべてわたしの顔を覗いていた。

今日も三人、荒川刑務所に未決囚が護送されてきた。刑務官は、それがどの筋の罪人であるか、顔や態度を見ればだいたい判る。出戻りの常習犯は、人懐っこい態度をしている。初犯は項垂れて、視線が落ちつかない。ヤクザは妙に堂々としている。刑務所の中でも肩で風をきる。ところが、今日の囚人のひとは、実に毅然として、姿勢よく真っ直ぐに前を見ているのだ。身なりも清楚だった。犯罪者面をしていない。細縁の眼鏡の下に鋭い目をしていて、時折、労咳のような咳をするのが気になる。長身で細い身体をしている。

「岸田泰介だな。生年月日を云ってみろ」と、刑務所の刑務室で引渡しの書類に目を通していた刑務官に質問されていた。

「昭和元年二月十日」岸田は判然りと返答していた。「二十六歳か。落ち着いているな。職業はなんだ」

「教師をしていました」

「どうりで、どこかインテリくさいところがあると思った。いまはしていないのか」

「公職追放されて、山下事件に関与していると嫌疑をかけられ...」

「それ以上はいい。レッドパージ組の赤だな。おまえは、十四号室だ。六人部屋だ。ここでは、規則正しい生活と、われわれの命令で作業をしてもらう。服をこれに着替えて、持込しているものがないか、検査をする」

岸田泰介は、囚人服に着替えると、十四号室へ案内された。

「今日から入る岸田泰介だ。うまくやるように」と、刑務官はにやりと意味ありげに笑った。

「へえ、ご苦労様でした」と、みんな刑務官に妙にぺこぺこしている。かっぱらい専門でやっていて、三度の出戻り組のサンピンが岸田のところに寄ってきて、囁いた。

「あのでげすね、あちらにおわす藤島組の親分のところに挨拶に行かれたがいいですよ」と、忠告してくれた。岸田はぎろりと藤島親分を睨んだ。その周りに控えている二人も、どうやら手下らしい。岸田の態度がいままでの囚人とは違い、威圧するような雰囲気なので、三人とも身構えていた。

「おう、おまえが牢名主か。積む畳も座布団もないのか。冷たいコンクリートの上に直に寝るなんて、冷たいだろうな」と、岸田が平然と見回しているのので、手下が岸田の胸倉を掴んできた。

「たいした度胸じゃねえか、お兄さんよ」その手下の手をあっさりと払いのけると、岸田は親分のところに進み出て、握手を求めた。

「まあ、暫く厄介になるが、仲良くやってゆこう。おまえたちヤクザも考えてみれば、この歪んだ社会が生み出したはみ出しものだ。犠牲者には違いない」

親分に向かって、いままで、そんな口を利いたものはいない。手下も驚いた。親分もただものではないかと、警戒しながら握手に応じていた。もうひとは、隅っこで小さくなっている。赤線の女と心中しようとして、女だけ死んだ。哀れな恋の片割れだった。

岸田は、何を思ったか、突然、鉄格子をガタガタ揺らしながら叫び始めた。

「看守、所長をここに呼べ」看守でさえ怖いのに、それを呼び捨てにするどころか、泣く子も黙

る鬼の所長を呼べとは。全員、岸田を止めようとした。騒がしさに看守が飛んでくる。

「所長をいますぐに呼べ」「な、何用だ。貴様、なんという態度なのだ」看守は目を見開いて興奮していた。

「こんな畳もない土間を部屋といえるか、家畜でも寝藁ぐらゐは敷いている。おれたちは人間だ。人間らしい扱いをしたらどうなんだ。刑務所の改善要求をする」

ヤクザの親分も真っ青になった。大変なやつが入室してきたものだ。

岸田は、食事の麦飯にまでケチをつけて、いちいち「所長を呼べ」と、怒鳴っていた。そんなことがあってから、藤島親分や手下の、岸田に対する態度がガラリと変わった。岸田はリーダーシップを発揮して、何かあると、みんなをまとめようとする。

「ばかやろう、もう戦前じゃないんだ。世の中変わったんだよ。憲法でも法律でもおれたちの権利は守られているんだ。昔のような犬畜生のような待遇を甘受してはいけない。共に闘おう」と、先頭に立つので、逞しく思えてきた。しかも、法律に詳しい。弁護士の友達もいるという。頭も頗る切れるし、学歴がある。ヤクザの親分は尊敬の眼差しで岸田を見つめていた。

ヤクザは権力と金には滅法弱い、左翼はそのどちらにも強い。それは逆に敵なのだ。

いつまでもぐずぐずと悔悛の情に懊悩している心中生き残りをも激励する。

「どうだ、男尊女卑の時代は終わったのだ。赤線廃止、青線廃止、女性の権利を守るために闘おうではないか。貧しさも敵だ。その悲劇をなくするまで、おれたちと立ち上がってくれ。それが、亡き人への供養となるだろう」

ヤクザたちには、

「立て、万国のヤクザ、チンピラ。諸君も社会の底辺でもがいているプロレタリアには違いない。わたしも労働組合の委員長をしてきた男だ。他の部屋の囚人たちにも呼びかけて改善要求貫徹のためにストライキをやろう」

「つ、強い。岸田はん、わ、わしらの組の組長になってもらえませんか」

藤島親分に惚れられて、そうまで頼まれた。

ヤクザと左翼がスクラム組んで、獄中で労働歌を歌い合った。シュプレヒコールのやりかたも教えた。

「ヤクザは893、足してゼロになるから、おいちょカブではブタなのだ。最低の手で役立たず。欲を引けば892、役に立つと読める。しかもそれは足して下一桁が9になるカブだ。最強の手だ。ヤクザから欲を引けば、義理人情だけ残る。それがこれからの日本再建には必要だ」ヤクザも人間、いいところもあるという岸田の持論に藤島は涙ぐんでいた。

「お、親分」と、感激して手を握ってくる。

「よせ、親分子分でもない、お互いにオルグとなって、娑婆に出た暁には、労働運動の種火となるのだ」

岸田は、獄中でみんなにマルクス主義の哲学を説き、資本主義の矛盾をといた。岸田は教宣活動をして、煙たがられ、独房に隔離されたりした。

何年かして、岸田も藤島親分も出所した。世の中はがらりと変わっていた。テレビと車が普及し、経済は二桁で伸びていた。

炭坑で労働争議が起こった。労働組合と会社側が一步も譲らず対立し、長期のストライキに突

入っていた。その旗振りをしていたのが岸田だった。

「岸田はん、スト破りでっせ、会社が暴力団雇ってやられてま」

「なんだと、卑劣な、おれに続け」

と、岸田が現場へ駆けつける。トロッコを占拠するように、不気味な軍団が待ちかまえていた。その先頭に木刀を手にして、羽織をはおっている藤島親分が立っていた。

藤島は岸田の姿を見て顔色を変えた。岸田も驚いた。

「岸田はん」「藤島か」

互いに熱い視線を送っていた。

第194話 受付

いつも高梨雅夫は受付に座っていた。世話好きで社交的な性格が、いつも快く引き受ける。

文学仲間の出版記念会のときも、総会のときも、結婚式するときも、映画祭のときも、葬式のときも、雅夫は入口にいてくれた。そういえば、人生の入口にいつも座っていたのだった。少なくとも主役は嫌いだった。脇役に徹することで、安心していられる、そんな性分だったのだ。

雅夫の本業も実は受付だった。受付請負業という仕事は珍しい。彼の仕事の道具は、折り畳みの椅子に机、受付と書かれたスタンド。この三点セットだけである。自宅に商店街から依頼の電話が来る。彼は三点セットをひょいと持ち上げて、商店街に向かう。彼の定位置は商店街の入口の歩道の真ん中。そこで机と椅子を開いて店開きする。彼はよく頼まれるので、商店街の各商店のすべてを熟知していた。歩道の真ん中に受付として、ぽつんと座っている。

「あのう、すみませんが、炭を買いにきたんですが、どこで売っているでしょうか」と、気品あるばあさんが尋ねる。

「茶道にお使いでしたら、高森のお茶屋さんにあります。堅炭なら、アウトドア用品の三和堂ですわね」

「ペーパーセメントってどこで売っているかしら。どこの文房具店でもなくて」と、メガネの女子事務員風。

「それなら、和田の額縁屋さんにあります」

デパートではインフォメーションがあるから、教えてくれるが、一般の商店街ではないので、何かを買いにきてても、どこで売っているか判らないで、うろうろして仕方なく帰ってしまう人もいる。機会ロスをなくするためにも、高梨雅夫のような商売は必要なのだ。それによって、各商店の客が増える。目的を持って訪れた客を逃がさないのだ。そのために、雅夫は、どこで何を売っているか下調べに時間をかけた。新しい商品が入荷したり、催し物の案内、売り出しなど、商店の主人たちは雅夫のところに教えにくる。チラシなども置いてくれるし、案内もしてくれる。

駅前の観光案内所も体質が古く、型どおりの案内しかできないので、シーズンになると雅夫が頼まれる。駅前に机と椅子を置いて、受付の店開き。

「この町でおいしいお蕎麦屋さんがありませんか。南部蕎麦でおいしい店がいいわ」

「それなら、青里香庵という蕎麦屋が、ショッピングセンターの三階にあります。夏なら南部の長芋の冷やしとろろも美味しいですよ」

「太宰治の卒論で調べに来たのですが」と、東京の女子大生たち。

「合浦公園に昔の青森中学の跡があります。この商店街を真っ直ぐに行くと、常光寺がありますが、『思ひ出』の中に出てきます。寺の入口が下宿先の豊田家だったところですよ」

観光案内所では教えてもらえない最新の情報も勉強して、頭の中で更新しておかなければならない。そのために、ガイドブックだけでは足りない。あらゆるメディアから町の情報を入れておかなければならない。記憶力もなければならぬ。町を隅から隅まで知り尽くしていなければならぬ。広く浅くでいい。町のインデックスなのだ。

高梨雅夫は、いつまでも出張受付はしていただけないと、駅前に小さな事務所を借りた。事務所の外に看板を出した。ずばり「なんでも受付」。それで飯を喰うので、一回の相談でいくらと料金が決められている。万相談承りますと、看板にある。

早速、客がやってくる。

「遺言書を書いたのですが、それはどこでどう手続きできるんでしょうか」
老婆が入ってきて、おろおろしている。

「公証人役場が、柳町のすぐ傍のビルにありますから、そこにお持ちなさい」
旅行客が入ってくる。

「各地の古本屋を回っているんですが、この町の古本屋を教えてくださいませんか」

「古書をお探しですか。それなら、誠信堂さんが、青森高校の隣りにあります。上古川には林語堂、ここの亭主は少し変わり者ですが、根はいい人です。ただいま、市内の地図に印つけて差し上げましょう」

事務所にはパソコンとプリンタ、膨大な町の資料が分類整理していた。雅夫は、それらをデータベース化して、検索が容易になるよう、自分でシステムを作っていた。どんな客の捜しているもの、求めているもの、どこに行けば用が足りるか、ここに来れば一発ですべてが判る。こんな男が一人いれば、便利だった。

その高梨雅夫が、ある日突然ぽっくりと死んだ。あまりにデータを大脳に詰めすぎたためにオーバーヒートを起こして、ついに倒れた。

雅夫の通夜は寺で執り行われた。弔問客がひっきりなしに訪れる。

「あれ、受付にいつもいるはずの高梨さんがいない」
と、誰しも思った。

「ばかだな、今夜は当人のお通夜だ」

「そうか、今日は主役なんだな」

脇役で徹してきた雅夫も今夜だけは、祭壇の中央の一番目立つところで笑っている。

「きっと、あいつ、あの世でも受付やっているぜ。三途の川の入口でな」
道しるべがなくなったら、町はまたうろうろする人間が増えるのだ。

主のいない机と椅子が、ぽつりと寂しそうに駅前広場の真ん中に置かれていた。受付のスタンドの前に休業の札が貼ってあった。

第195話 玉砕の島

飛行機は青い海に吸い込まれるように着陸体勢に入った。珊瑚礁の海は空の上からでも透明で海底が見えるほど怖かった。

三橋紀子と、向井菜緒子、榊万理の三人は会社の夏休みを利用して、サイパン島に三泊四日の日程でツアーに参加した。まだ、二十代前半だが、彼氏が三人ともただいまのところ募集中で、このツアーでチャンスがないかとそれぞれが期待する旅だった。同じツアーに格好の三人組がいた。やはり二十代後半の南雲隼人、笈茂典、三田桂介の三人だった。目的はいずれも同じだった。

空港からホテルまで直行した。ホテルはプール付きのリゾートホテルで、免税店も大きい。一行は、さっそくバスで島内見物に出かけた。綺麗な島で、とても五十八年前に、玉砕した激戦地だとは思われない。それでも、バナデロの指令基地跡とかには、戦争の生々しい傷跡が残っている。爆撃や砲撃の跡を触りながら、みんなアイスクリームをなめっている。三人ともに、男たちから声をかけられて、すでに意気投合していた。

「これから、ダイビングをしたり、ヨットに乗ったりするんだけど、一緒にしない」と、誘われていた。それは明日からの予約とした。

夕方から、ビーチで泳ごうと、紀子たちは隼人たちとビキニになって、泳いでいた。多くの米兵と日本兵の死体が散乱した血で染まった浜で、若い娘たちが健康な肌を露出させて走り回っている。それも供養になるだろう。夕日が日本では見られないほど、ロマンチックだった。ビーチでトロピカルドリンクを飲みながら、すでにカップルが誕生していた。

翌日は珊瑚礁の海中散歩を楽しんだり、バナナボートに乗ったりと、手を握り合うほどの親密な関係に近づいていた。異国での開放感と、ムードのある情景が、若い女たちを何か外国映画にでも出ているような夢を見させていた。

ホテルのロビーで、ツアーコンダクターが、オプションツアーを募集していた。隼人に、「このツアーに参加すれば、生涯かけがいのない人として、ゴールインする組も出てくるんです。どうです、料金は少しかかりますが、いい思い出になりますよ」と、誘っているから、六人は参加することにした。ミステリアスなところがいい。単なる観光では若い人たちが飽きるから、いろいろ趣向を凝らしているらしい。

ツアーの集合は夜、車で案内するという。六人はそれぞれカラフルなTシャツやホテルの売店で買った民族衣装を着て集まった。車は、島のジャングルに入っていった。ツアーコンは、「道路が切れましたので、ここからは徒歩になります」と、懐中電灯を渡して、六人を先に歩かせた。

「ここで、少し待っていてください。後でお迎えにあがりますから」と、ツアーコンは暗闇に姿を消した。六人はジャングルに取り残される形になった。

「日本兵の亡霊が出るという噂だよ」と、茂典が聞いたような話をすると、奈緒子たちは悲鳴を

上げて縋り付いてくる。男たちは満足そうに、このことだったのかなと、より親密な関係を作るチャンスを与えてくれるツアーと思っていた。鳥だろうか、奇妙な鳴き声があったり、木々がざわざわと風もないのに、揺れ動いたりして、怖さ万点だった。

と、いきなり銃声が響いた。キャーと女の子たちはしゃがんでしまう。弾が近くの木に命中している。男たちも度肝を抜かれて、身を伏せた。

「撃ち方やめえ。女だ。島民たちだろう」という男たちの声がしていた。女の子たちは余りのショックに泣いていた。

「誰だ、島のものか」と、懐中電灯が照らされた。六人はまだしゃがんでいた。隼人は、「旅行客だ」と、ハンターに出会ったと思っていた。「日本人か」と、訊くので、「そうだ、東京から来た」と、隼人たちは立ち上がった。お互いに懐中電灯で照らすと、向うは日本兵の格好をしているのが三人、こちらに歩兵銃を向けている。

「ここには危険だ。すでに敵軍は上陸してきている。島民たちは洞窟へと隠れている。こんなところをうろつくな、敵と間違われて撃たれても知らんぞ。おれたちについて来い」兵隊の格好をした男がそう命じた。

「でも、旅行会社の人都在这里で待っていてくれと云うんで、動けないんだ」と、桂介が云うと同時に、強いライトの光がジャングルを走った。アメリカ人だろうか、英語で何やら喋っているのが聞こえた。突然、機関銃が撃ちこまれてきた。三人の兵隊のうち、一人が胸から血を噴出して倒れた。

「みんな伏せろ。米軍だ」兵隊はライトの方角に銃を何発か撃ったが、多勢に無勢と判断して、退去することにした。六人もそれに続いた。

「何が起きているんだ」何がなんだか判らないまま、震えている。ジャングルの中をどんどん入ってゆくと、やがて断崖絶壁に出た。暗いから月明かりだけが頼りだ。高い崖で、遙か下方に海が月明かりで光っている。

「ここを降りるんだ」兵隊の一人が急な崖を降り始めた。「こんなところをどうやって降りるんだ」「怖ーい」と、みんな足が竦む。

「なんだ、だらしが無いぞ、女子供でもこんな崖は降りてゆくんだ。それでも日本男児か。まあ、ここにロープがあるから、身体を結わけ、降ろしてやる」一人ずつ、ロープで下まで降ろされた。隼人はポケットからライターを出してタバコに火をつけた。

「ばかやろう、敵に居場所を教えるようなものだ」と、もう一人の兵隊に隼人は怒鳴られた。空に何か花火のような音がして光が上がると、暗い崖が昼のように明るくなった。

「ほら、みつかった」隼人はタバコを口から落とした。照明弾が撃たれたのだ。沖合いに停泊していた艦船から砲撃が始まった。崖に火柱が立った。凄まじい音とともに岩が炸裂した。二人は、急いで、ロープを伝い、崖の中腹の洞窟へと辿り付いた。

洞窟の中には、島民たちと兵隊たちが十数名、疲れきったように身を横たえていた。負傷して、包帯を頭や腕に巻いているものもいる。一様に、六人を眺めていた。死んだような目だった。「貴様ら、なんという格好をしているのだ」と、隊長らしき兵隊が、男三人を並べた。ハイビスカスのプリントのTシャツだから派手だった。

「そんな敵国の女のような格好して、恥ずかしいとは思わんか」女の子たちは原住民のような格

好をしていたから、お咎めなし。洞窟の中は悪臭に満ちていた。風呂に入っていないので、みんなの顔にはコビがたかっていた。

「あのう、喉が渴いて、何か飲物いただけませんか？」と、隼人が云うと、

「また、そんな女のような言葉だ、女形か貴様は。水は病人が先だ。みんな飲まず食わずで我慢しているんだ」

六人ともしゅんとなっている。

「でも、お腹空いたね」と、こそこそと万理が云うと、島の子供が、

「これ、おいらのだけど、お姉ちゃんに上げるよ」と、岩虫をよこした。

「キャー」と、虫を払い落とすと、全員から敵意のある眼差しが向けられた。

「何をするんだ。これは坊主がみつけた唯一の食べ物なんだぞ、それを粗末にしやがって」と、また怒鳴られる。

隊長はみんなに向き直って、

「敵軍はここを発見した。明朝は総攻撃をかけてくるだろう。食糧もなくなっただけ、もはやこれまでだ。敵の手で辱められるよりは、潔くここで自決しよう。いまから、手榴弾を手渡す。一個で三人は死ぬ。残りの者は、銃剣で喉を突け。それができない子供は、崖から海に飛び込め」と、玉砕を促す。

「そんな、もう戦争はとっくに終わっているんですよ。何でこんなところで死ななければならないんですか」桂介が隊長の言葉に噛み付いた。

「何だと、死にたくないやつは、おれがとどめを刺してやる」

「そうだ、ここはバンザイクリフの崖なんだ。昨日のガイドが云っていたろう、何千人もの島民が身投げしたというところだ」

「それじゃ、みんな幽霊なのか」「怖い」六人は固まって抱き合っていた。

「何をごちゃごちゃと話しているんだ」隊長は銃剣を突きつけてきた。洞窟の奥のほうで爆発音が聞こえた。手榴弾で自決したのだ。洞窟の出口からは、母親と子供が手を取り合うようにして、崖から飛び降りた。

「お先にご免」と、負傷していた兵隊がナイフで喉を突いた。血が噴水のように吹き出していた。

「いやあ、もう、いやあ」と、女の子たちは気が変になったような泣き叫んだ。男たちは、そんな女の子たちを守るように、抱きしめていた。

「さあ、大和民族の誇りを最後まで持って、立派に死ぬんだ」と、銃剣を向けてじわじわと六人に迫ってきた。みんな目を瞑って、自決のときを待った。すると、ケイタイの着メロでどらエモンの歌が流れた。隊長がポケットからケイタイを取り出した。

「はあ、次のグループがもう来ましたか、はい、こちらはもう終わります」隊長はみんなに向き直ると、

「次が来たそうだ。準備にかかってください」と、全員に話すと、自決したはずの負傷兵もむくりと起き上がる。崖から落ちたはずの親子も出てくる。洞窟の奥から、ツアーコンダクターが姿を現した。

「何なんですか、これは」全員、恐怖から醒めたように泣き出した。

「これは、日米で造ったテーマパークです。戦争の悲惨さを現代の若者に教えるためのセットなんです」

「はい、お帰りは洞窟の奥に出口がありますから」と、隊長が真迫の演技をやめて、急に優しい声になる。

おいおいと、まだ泣いている。平和を実感しながら、恐怖の共通体験したカップルは、よりいい仲になるという。

第196話 智害呆見

六畳間に本棚が押し込められていた。ようやく人ひとりが通れるくらいの際間よりない。本棚にはびっしりと全集ものが収まっていた。室生犀星全集、高橋和巳全集、喜多村拓全集などが揃っていた。主に文学関係が多く、隣の部屋は壁面に天井まで、単行本が平積みで積んである。廊下から階段まで本、本、本である。

その本の山の間に座卓があり、溝江芳夫が座布団に座り、カリカリと原稿用紙に小説を書いていた。太いモンブランの万年筆を使っている。ワープロ、パソコンは使わない。あくまで原稿用紙に肉筆で書くという拘りをもっていた。五十にならんとするが、若い頃から頑固一徹で人の話を聞かないところがあった。本業はミニコミ紙の編集長だった。奥さんとはこの数年、家庭内別居を続けている。子供のように我が儘な亭主に匙を投げた。日々、新人賞を狙って下手な小説をせっせと書いていて、家庭を顧みない芳夫に嫌気がさしていた。書斎に閉じこもって、自分だけの世界に浸りきっている芳夫の書くものは、私小説だった。自分の思い出話をたらたらと書き綴るのだが、本人は面白いかもしれないが、他人は人の人生なんかどうでもいい。山も落ちもない身辺小説を読んでも何の感動も呼び起こさなかった。

知性は人間性を歪曲させる。達観する前まで多くの本を読んだものは、自分だけが世の中を見ているような錯覚に囚われて、自惚れる。学問が人間を墮落させると、学問弊害論を唱えたのは安藤昌益であり、井上ひさしもそのことを述べている。芳夫もその輩で、本を読めば読むほど、優越感に浸り、自分ほどものを知っている人間はいないと、逆に本は人を悪くした。さらに読み進めば、だからどうなんだというところまで行きつけば、ようやく敬虔になれるのだ。人間ひとりが吸収できる知識なんか、実にちっぽけなものだと、立ちほだかる膨大な知識の前に敬服するまでには読書人は実に孤独で、知己もなく、理解されないもどかしさに孤高に留まることになる。

芳夫が人の作品をろくに読まないのは、同人作品と文豪の小説と比べるからだ。比べるほうがどうかしている。

この北国は自虐的な文学の徒が多い。無頼派を気取る貴族趣味の嫌な性格が多かった。ただ、それは実体のない不安定な生活の上を好き勝手に泳いでいるうちにはいい。何か事があれば脆い性格が露呈することになる。

溝江芳夫は地元の新聞社や、地方の雑誌の原稿依頼はみんな断っていた。そんなところに発表していれば、自分の経歴に傷つくとも思っているのか、常に中央を狙っていた。

印刷屋をやっている元山春樹は昔の同人仲間で、溝江の出版社の取引先でもある。春樹はいまは一匹狼で、ポルノ小説ばかり書いていた。芳夫は、春樹にいつも、書き下ろした小説を持って行って、評を聞きたがった。春樹はうんざりして受け取るが、友人のことでもあるのでじっくりと読むことは読む。

「どうだ。今回は自信作だ。太宰治賞に出そうと思っている」と、芳夫から電話が心配そうにくる。春樹は言葉を濁していた。

「ううん、おれは、純文学自体が好きではないし、もう離れてしまったからな。ううん、なんと云ったものか、もう、その私小説路線はやめたらどうかな。はっきり云って、日常的なサラリーマンの生活なぞ、どこにでもある。まして、生い立ちなど、ありきたりで面白みに欠ける。事実も小説も奇ではないんだな、おまえのは」

春樹は、純文学に別れを告げてから、ポルノ一直線だ。所詮、文学などと気取っているが、娯楽に過ぎない。釣りをしたりパチンコをしたりするのと同じ暇潰しだ。それに、生きるの死ぬのと、命を懸ける気がしれない。読んで、笑ったり、泣いたり、感じたりするだけの清涼剤でいい。何が高尚な趣味だとばかにしている向きがあった。

春樹は最近の芳夫の小説を読んでいて、一抹の不安にかられていた。主人公は一人称でいつも自分なのだが、それを殺そうとしている。死の影がいつもちらついていた。破滅型の作家を自認する芳夫は自分の死を持って一連の作品を完成させようとするナルシストが多い。

「書きすぎるなよ」と、春樹は芳夫に注意を促していた。書きすぎて、自分を追いつめ、ついには殺してしまう。それが、作品だけの世界であればいいのだが、現実には自殺というラストシーンまで持ってゆくのだ。危険な匂いがした。

芳夫は、最近、仕事にも身が入らない。ぼうとしていることが多かった。新人賞は悉く落選するし、二次選考までもゆかない。仲間も読んでくれない。自分を理解してくれる人間が周りにいない。酷い孤立感に囚われていた。頭痛がするだけでなく、何か外に出るのもたいぎで、倦怠感があった。みんな自分から離れてゆくようで、視線が冷たいように感じていた。

芳夫は仕事を辞めると云いだした。妻はそれについて何も反対はしない。

「おれは、いまが正念場なのだ。筆一本で喰ってゆくよう、自分を追いつめなければいいものは書けない」と、さっさと仕事を辞めて、書齋に籠もった。さあ、時間はたっぷりある。余計なことを考えることもなく、創作に専念できる。原稿用紙に向かって、一日奮闘していたが、一行も書けないでいた。そんな悶々とした日々が何日も続いていた。白紙の原稿用紙をくしゃくしゃにまるめた反故紙が屑籠に山となった。

「書けない、書けない」構えてしまうと逆に書けなくなっていた。次第に芳夫は鬱病になって、外にも出ないで書齋に閉じこもりきりとなった。髭も剃らないから、無精髭になり、食事もせすに痩せてきていた。昼から酒ばかり呑む日が続いていた。

「ちょっと出かけてくる」と、珍しく芳夫は下駄をひっかけて外出した。蒸し暑い夜だった。芳夫の背中を妻が見たのはそれが最後だった。

昔の同人が芳夫の通夜に集っていた。

「ばかなやつだ。たった一作でもいい、いい小説が書けたらと云っていたが、ついに書けずに未完で終わりやがって」

彼の死は最終章ではなかったことだけは確かだった。

どうしてこうなったものか、考える隙を与えないほど、脳裏は混乱して、事態を冷静に判断し、状況を把握するには、頭の中を数字やらアルファベットやらが飛び交っていた。こんなときに焦ってはいけないと思いながら、焦る気持ちはますます攪乱してきて、整理がつかない。いま、自分はどこに置かれて、次に何をしなければいけないのか、考える余裕を確保しようとするのだが、いよいよ混乱する思考の交差点では、信号機がどれも黄色で点滅していた。四方から難問が交差点でぶつかって身動きがとれないでいた。少し、交通整理の必要があるのは判っていたが、どこから手をつけていいの判らなくなる。

まず、順を追って思い出してみよう。そうして、ここに至るまでの経過をきちんと整理して組み立ててゆかなければ、自分の置かれている状況が判明できないとは、弱った話しだった。ゆうべのコンパの酒が残っているのか。それとも、あの薬か。何も思い出せないでいた。

この朝、ぼくは皮膚が全身から浮き上がる体験したことのない不思議な感触で目が覚めた。手や腹をさすってみるが、剥がれる皮膚はすでに感覚がなく、ぼくの身体の一部ではなくなっていた。それは髪も足も爪までだった。全身がごわごわと剥離してゆく。初めは、何者かがいたずらして、ぼくに変な皮の服を着せたものと思っていたが、見慣れた手の甲の黒子だとか、手相は間違いなくぼくのものだった。ぼくは、薄い乾いてゆく皮膚の着物をぱりぱりと脱ぎにかかった。頭皮は帽子のように取れたし、足の皮膚は靴下のように脱げた。何か胸の辺りが腫れている。一皮剥けた掌は白く、生まれたばかりの赤ん坊のように透明に見えた。それもすぐに、血色を帯びてきて、滑らかな少女のような肌が露わになってきた。指も細い。ぼくは二周りも小さく、細くなったようだ。しかも、体毛がないことに気づいた。毛深い二十歳の男の体ではない。急に嫌悪感が嘔吐のようにこみ上げてくると、ぼくはベッドからいきなり飛び起きて、残りの皮膚を剥ぎ取った。驚いたことに、タイトのように脱いだ下半身にペニスまでくっついて剥がれ落ちた。そして、ぼくの肝心の男性がない。奇妙な感覚だ。そればかりか、乳房が若い女性のように小さなカップをつけていた。「わおー」と、ぼくは叫んで、洗面所へと駆け込んだ。声まで女の子の声になっていた。髪も長くしなやかに肩まで伸びていた。ぼくは、最後に残った仮面のようなぼくの顔を剥いだ。それを取れば、もうぼくはぼくでなくなる。最後の未練を振り切って、顔を剥ぐと、そこに美しい女の顔があった。ぼくは信じられないといった顔で、細い、女の指でぼくの小さな鼻やほっそりとした顔の輪郭をなぞっていた。

「雄高、いつまで寝ているの、スープが冷めるわよ」

母さんの声だ。この姿では卒倒するだろうか、どうしたらいい。ともかく、ぼくは少しだぶだぶになったジーンズを履いた。ウエストなんか十センチはへっこんだ。そっと階下に行くと、階段で父さんとばったりでくわした。

「おお」と父さんは驚いていた。「雄高の友達か」と、不思議そうにみつめていた。台所の母さんと目が合った。

「あんた、誰、雄高の服を着て、昨日から泊まったの」母さんは汚らわしいといった顔をして、階段の下から呼んだ。

「雄高、何しているの、起きてきなさい」

ぼくは、母さんの袖を引っ張って、

「ぼくならここにいるから」と、云うけど、どうしても女の声だ。

「何云ってるの、女まで連れ込んで、あの子、何考えているのかしら。あなたは帰りなさい」と、すごい剣幕だった。母さんは二階に上がってゆく。大変だ。ぼくの脱皮した皮を見たらショックで倒れるだろう。ここは、ともかく逃げの一手だ。ぼくは、スニーカーを履いたが、がふがふだったから、母さんのサンダルで外に出た。今日は日曜で休みだ。どこへ行ったらいい。

ぼくは、大学の同級の梶谷美世を思い出した。彼女なら親しいから、何か相談に乗ってくれるかもしれない。

玄関で、美世は見知らぬ来客を迎えた。

「ぼくだよ、雄高だよ、本郷雄高」

「ええ？」と、美世は戸惑っていた。ぼくは、子細を話した。それでも信じない。

「君から本を借りていたね、ヘルダーリンの評伝、それと、君が先週、ぼくと約束した研究レポートの題名ね、『エズラ・パウンドのケーキ試論』だったろう」

美世は目を丸くして、

「どうして知っているの。それは、雄高くんしか知らないことよ」

それが、パスワードになって、美世はぼくを信じてくれた。

「まあ、入って、その格好なら怪しまれるから、わたしの服を貸してあげるから」

と、美世の部屋に初めて入った。ぼくに服を脱ぐように命ずるから恥ずかしそうにしていると、いまは同姓であることに気付いた。ジーンズを脱ぐと、当然、ぼくはトランクスをはいている。それがだぶだぶだから、美世は笑うこと。

「全部、脱ぎなさい。下着から取り替えないとね」

ブラジャーを借りたが、美世の方がカップが大きかったから、ぼくがつけるとおかしい。美世は笑いが止まらない。後ろでホックが止められないでいると、

「前にかけて、後ろに回すといいわ」と、いろいろ手解きしてくれる。ピンクのTバックを貸してくれたから、

「ええ、こんなの履くのかよ。やめてくれよ、とても恥ずかしくて履けねえよ」

ぼくは抵抗したが、女の子になったので諦めて、パンストにスカートまでつけた。美世は、ドレッサーの前にぼくを座らせて、まるでお人形さんごっこでもしているように楽しそうに、ぼくに化粧して、髪型までいじくっている。鏡の中にすごいキュートな子が出現した。ぼくは、危うくぼくに惚れるところだった。

階下から、美世のママの声がした。

「美世、テレビのニュースでね、あなたの友達が殺されたって出ているわよ」

ぼくは、例のぼくの皮が問題になっていると思った。すぐに美世は自分の部屋のテレビをつけた。

一大学二年の本郷雄高くんの身体の一部だけが、ベッドに取り残されていた奇怪な事件で、事件の直後、雄高くんの部屋から逃走した髪の長い二十歳くらいと思われる女性の行方を警察では捜しています。この事件のなんらかの鍵を握る人物として…。

「ほら、ぼくの云った通りだろう。嘘じゃなかったろう。だけど、どうしたらいいのかな。このままでは、指名手配になっちゃう。ぼくがぼくを殺したことになる。まさか、本当のことを話しても、誰も信じないだろうしな。どうしたらいい、どうしたら...」

美世も考えこんでしまった。

「そもそも、どうして変身したのよ。何かあったんでしょ」

ぼくは、常日頃から女になりたいとは思っていた。それが、まさか、昨日のあの薬のせいなのかな。ぼくは、ジーンズのポケットから粉薬を取り出してじっと見つめていた。

「この薬のせいなのかな、昨日、コンパで変なアラブ人に逢ったんだ。女になりたいというと、この薬をくれた。これは、砂漠に棲む蝶の幼虫から抽出したエキスを粉末にしたものだと言っていた。みんながはやし立てるから、ぼくは酔った勢いで呑んだのまでは覚えている」

「きっと、それだわ。もう一度、その薬を飲むのよ」

美世に勧められるまま、ぼくはまたその薬を呑んだ。すると、急に眠気が襲ってきた。

何時間、寝ていたのだろう。ぼくが起きたときは、もう夕方ようだった。美世のベッドなのだろう。頭がずきずきする。美世が心配そうに、ぼくの顔を覗き込んでいた。

「あなたの皮膚、剥離しているわよ」美世が不気味そうに眺めていた。脱皮が始まったのだ。ぱりぱりと、皮膚が乾燥して剥がれてゆく。顔も髪もずるりと剥けると、その下から一段と小さくなった、男性が出てきた。

「やったわ、少し小さいけど、雄高くん間違いないわ」

美世も手伝って、全身の皮を剥いてくれた。腰の皮を剥いたときは、男根も出てきた。

「きゃー」と、美世は顔を背ける。

ぼくは、またジーンズを履いたが、ますますだぶだぶだ。

「もう一度、薬を呑むと、またその下から女の子が出てくるのかしら。これは面白いわ。玉葱の皮みたいね」

ぼくは慄然とした。もう二度と女になりたいとは思わない。男でよかった。ないものがあつたほうがいい。もともとないものはないほうがいいのだ。

ぼくは、一皮剥けてすっきりして家に帰った。さて、警察と家族にはなんと釈明していいものか。ぼくは、恐ろしい薬を川に捨てた。

男の下には女が隠されている。女の中にも男が住みついている。マトリョーナのように無限にぼくらの中には異性たちが隠されているのだ。

第198話 夏が消えた

今年の八月は、気温も低く、長雨ばかりだった。まるで梅雨が明けないように、二十度くらいの気温にじとじとといつまでも雨ばかり。お陰で海、山の施設はがら空き。海水浴場も人影がない。ひと夏で稼ぐ海の家主人は、腕組みして空ばかり睨んでいた。今年是一回も泳いでいな

いと、子供たちの肌は日焼けしないで白いまま。デパートでは夏物衣料が売れない。家電のエアコン、扇風機は売れ残る。ビアガーデンもさっぱりだ。農家では、野菜が腐る。果樹も根腐りを起こしている。スイカも売れない。水害で田畑の被害が拡大していた。暑いときに暑くなくてもらわねば、いろんな商売に差し障る。ただでさえ、この長引く不況にダブルパンチだった。

このままでは、日本経済にさらなる打撃を与えると判断した、政府はついに重い腰を上げて、各地の市民から出されていた夏の搜索願を受理し、大々的に搜索することになった。

一警視庁は、ついに夏の公開捜査に乗り出しました。全国的な規模での搜索は、気象台始まって以来のことです。これが、夏の指名手配のポスターです。入道雲にカンカン照りの太陽、ビキニにサングラスのギャル、かき氷を食べている麦藁帽子の少年の凶柄です。このポスターを十万枚、駅や街頭、役所などに配布、国民にも協力を要請しました。夏を発見した人は、速やかに最寄りの警察署に報告してください。

テレビ、新聞ではこの異常事態の消えた夏をなんとか捜そうと、警察官を総動員し、しらみ潰しに捜すために、各地でローラー作戦を展開した。地方では、消防団員による山狩りも日夜行われていた。懐中電灯を手に手に、「おおい、隠れていないで出てきなさい、夏、夏はおりませんか」と、必死で叫んでいた。

自衛隊にも協力要請があり、ヘリコプターによる広域の空からの搜索も開始された。さらに、みつけた人、もしくは有力な情報をお寄せくださった方には、賞金まで出すということになった。

テレビでは連日、評論家や専門家が出て、夏の行方についての討論番組が茶の間を賑わしていた。

「気象予報士としての織田さんは、今回の行方不明の夏についてどうお考えですか」ニュースキャスターの久米アナウンサーがコーディネイターを務めていた。

「そうですね、これはエルニーニョ現象とは無関係と思いますよ。あくまでわたくしの推測ですが、毎年の夏というと、皆さんはエアコンをフル回転させますでしょう。それで、特に都市部の気温が上昇いたします。夏は、自分が暑くしてやるのに、人為的に暑くしているので、気分を害したのだと思いますよ。それは、誰だってそうでしょう。自分の仕事を横取りされてご覧なさい。面白くないですね」

「そうですか、人間たちへの自然の警告だとおっしゃるんですね。長年、自然現象を研究されてきた、早稲田隣大学の理学部長の迫田さんは、いかがですか」

「わたしの場合は少し違いますね。七月に台風が立て続けに日本を直撃しましたでしょう。台風は一年に本土上陸するのは、せいぜい二つか三つです。それが、すでに七月だけで三つも来てしまった。これは、歴史的に視ても過去にはなかったことです。梅雨が明けると、いつも夏は出番を待って、太平洋上で待機しているのですが、それが、台風によって吹き飛ばされてしまった。そう解釈しています」

「なるほど、台風の通過で交通事故に遭ったということですね。夏は、台風によって轢き殺され、死体はばらばらになって海の藻屑となったと。これほど、大がかりの搜索でも発見できないのですから、案外その説が妥当かもしれませんね。履き物専門店で、いまでも下駄を作り続けている、人間国宝の坂井さんをお呼びしております。坂井さんは、御年九十六になられます。少し耳が

遠いので、娘さんの三上さんがお隣で通訳いたします。それでは、坂井さん、下駄職人として、今回のこの異常気象をどう思われますか」

「じいちゃん、久米さんがね、今年の夏がなくなったのはどうしてかって」

娘の三上さんが、じいさんの耳もとで大声で叫ばねば聞こえなかった。

「はあ、小鼠内閣ね、あれはよくないですよ、田中も腰が退けてよくありませんね」

「そうでなくて、夏、夏って判る。どこへ行ったかって」

「ああ、昔は气象台からよく下駄の注文が来ましてね、ああた、下駄を投げて明日の天気を予報していたものです。わたしの作った下駄はよく当たると評判で、全国から注文が殺到しましてね、いまは、なんですか、人工衛星にコンピュータで、下駄は廃業、相手が機械でも外れるものは外れます。ほほほほほ」

「こりゃ、ダメだ。ありがとうございます。いつまでもお元気で」

太平洋上を操業中の漁船の網に夏の遺体の一部が引っかかった。遺体の現状を把握するために、灯台病院の法医学室で司法解剖されることとなった。死因に不審な点が見受けられるために、自殺と他殺の両面から捜査が進められた。合同捜査本部が警視庁に設置された。政府は重大発表の記者会見を行っていた。

「皆さんに悲しいお知らせがあります。事態は最悪の結果になりました。夏が死体で発見されたのです。もう、来年から夏は来ません。文部科学省は、夏休みを廃止する方向で審議を進めております。俳句協会も夏の季語を削除することをすでに発表しました。春夏秋冬の三季しかなくなりますので、夏という言葉を使わないよう呼びかけております」

翌日、ビール会社の株価は暴落した。夏関連のリゾート地を運営する開発会社の株も同じだ。人々は、夏の死を悼んで、半袖や水着をタンスの奥深く蔵った。浴衣もまるで遺品のように、夏の思い出として棺に入れるのだった。それから、「懐かしい」という漢字は「夏かしい」と改められた。

第199話 奇食

三世代同居の喜田家では、大きな食卓に九人が並ぶ。大正生まれの年寄り夫婦に戦後生まれの息子夫婦、そして、高校生の長男と中学の娘、小学の次男と、次女、三男と今時珍しい五人の子供がいる。いつも食事時になれば、年寄りたちは、じっと、怖いものでも垣間見るように、孫の食事風景を気にして箸が進まなかった。五人とも御飯を食べるのはいいが、大正生まれのじいさんには考えられない。

「味噌汁は飲まないのか」と、いちいち煩く訊くから嫌われる。孫たちは、御飯の傍にコーラやスプライトを置いて、それで御飯を流し込んでやる。味噌汁はいらないのだ。三男が、そのうち御飯にコーラをかけてお茶漬けのようにじゃぶじゃぶと食べ始めた。老人は啞然として眺めているばかり。次女は、プリンに醤油をかけて、雲丹味だと、御飯にかけて、雲丹丼と云って食べていた。中学の娘ときたら、マヨネーズを口をつけて飲んでいる。

「やめなさい、そんな、気持ち悪いこと」と、婆さんが注意するが、聞くものではない。

「姉ちゃんは、マヨラーなんだよ」と、末っ子が云う。

「何だ、そのマヨラーって」と、父親が訊く。

「なんでもマヨネーズかけて食べるの。納豆も、サンマも、お刺身もだよ」

「そうか、世の中、変わったもんだ」と、じいさんは妙に感心したりしている。すでに子供たちの食生活は異文化なのだ。

長男も御飯に砂糖をかけて食べている。次男はどうかというと、御飯は食べない。わざわざカップラーメンを作って食べている。刺身にジャムをつけて甘くして食べている。

「ダメだ、まともなやつは一人もおらん」じいさんが歎いている。孫たちの食事風景を見ただけで食欲がなくなる。日本人の味覚嗜好はどうなってしまったのだ、とボヤクことしきり。

その喜田老人は、よく連れ合いと外食する。いつもは、老舗の蕎麦屋などへ行くのだが、この日は少し探検を試みたくなった。

「どれ、ばあさんや、いまの若い人たちが、巷でどんな食べ物を食べているのか、見聞を広めるためにも、原宿へでも行ってみるかい」と、山手線で出かけた。日曜ということもあり、ものすごい若者たちで混んでいた。年寄りはどこか場違いな雰囲気。さっそく、昼にファーストフード店ではないかと紛らわしい、寿司バーへ入ってみた。横文字ばかりで、寿司屋の雰囲気ではない。内装も現代風なら、職人の着ている服もコック・コートではないのか。

二人とも恐る恐るカウンターに座った。外人も来ている。

「どれ、みんな聞いたこともないネタばかりじゃな。珍しいものを頼もうか。わしは、アイスクリームの寿司にするぞ」

ばあさんは、見ただけで気分が悪くなるが、何がなんだか判らないままに頼んだ。

「シャリの上にアイスクリームと海苔か。まさか、醤油では食べないだろう」

喜田老人は食べ方が判らない。えい、ままよ、と口に放り込む。吐きそうになるが、ぐっと飲み込んだ。ばあさんの頼んだものは、シャリの上にチョコレートのガナッシュが乗っている。ばあさん、それを醤油につけて食べた。口に入れたまま、持て余して、とても吐き出せないから、無理して飲み込んだ。続いて、フルーツの乗ったもの、レアチーズの乗ったもの、納豆巻に生クリーム、そこまで来ると腹の中がごろごろと悲鳴を上げている。

「出ようや」と、二人とも口を押さえて、寿司バーを後にした。

「おじいさん、気持ちが悪くなったので、どこかで口直ししましょうよ」と、ばあさんが選んだのは、エスニック料理店。看板が読めないなので、入ったところが不味かった。

メニューがまた判らない横文字だから、適当に指で示して頼んだ。ところが、出てきたのは、ばあさんが腰をぬかすほどのゲテモノだった。雑炊のような御飯の上になんと、半分雛に孵っているアヒルの卵が半熟状態で乗っている。とても、食べられないどころか、見るのも気色悪い。じいさんの頼んだのは、猿の脳みそ。スプーンで掬って食べる。これも頂けない。出てくるものすべて珍しいが、とても口をつけるのも怖い。蚊の目玉のスープに、チーズの蟻合わせ。それらを、さもうまそうに食べている客もいるのだ。若い人が中心だが、どうなっているんだ。全世界の

食べ物、この東京では食べることができるが、いくら国際的になったといえ、味覚まで変わってゆくのだろうか。喜田老人は考え込んでしまった。とても世の中の進化にはついてゆけない。その店も途中で食べ残して出てきた。

「ばあさんや、今度はまともなラーメン屋にしようではないか」

「そうですよ、おじいさん、いくら見聞とはいっても、あれじゃね」

二人は、外見は普通のラーメン屋に入った。店内は並んで待っている客もいるほどの繁盛店だ。テレビで紹介されたと、壁に写真まで貼っている。メニューには、一この店のお勧め、特製百倍ラーメン、全部食べればお代は無料。と、あるので、ばあさんとそのお勧めを頼んだ。

「やめたほうがいいですよ、お年寄りには無理だから」と、店の人が云う。そう、云われれば、ますます食べてみたくなるのが人情だ。

「何事も経験だからな、味見のつもりで頼むよ」「そうですか」と、みんな若者の客もにたにた笑っている。

「きっと、百倍おいしいのだろう。それとも不味くて食えないのかな」

出てきたのは、ごく普通の味噌ラーメンに見えた。少し赤いかなと思ったが、二人とも同時に口に入れた。止せばいいのに、初めからあぐりと口を開けて食べた。

ラーメン屋の前に救急車が到着したのはそれから七分後だった。

第200話 推理小説家の殺し方

月刊ミステリー倶楽部に短篇を抱えている、推理小説家の吉田平成はネタ切れになり、スランプに陥っていた。原稿の締め切りが過ぎていた。催促の電話が出版社からかかってくる。あまり煩いので受話器を外しておいた。

「あなた、出版社の方が、玄関においでですけど」妻の多津子はいつものことで書斎の襖を開けて報せる。

「煩い、判っている、待たせておきなさい」平成は苛々して、いつも妻を怒鳴るのも、結婚して二十年来この方のこと、慣れていた。

吉田平成の頭の中には密室殺人とか、完全犯罪とか、時刻表のトリックとかの陳腐な構想よりなかった。それが使い果たしてしまい、新たな発想が枯れてきていた。もう小説家としては出がらしで、落ち目になっていた。読者も、またも同じようなトリックかと、かなり無理のある設定で、ラストにいちいちカラクリを説明するのでしらけること。

平成は、題とテーマとプロットが決まっているのだが、書き出してから、肝心のトリックのところで引っかかっていた。今度のは、DV殺人事件、現代的なテーマだった。夫婦間の殺意を全体に漲らせる。主人公は推理小説家の妻、日頃の夫の暴力に耐えかねて、妻が小説家を殺すという完全犯罪もの。

「問題は、凶器なんだ。意外なものがいい、それも証拠隠滅しやすいもの」独り言のように、口に出していると、妻が書斎の襖をそっと開けた。

「あなた、湯豆腐が冷めてしまいますわよ」

「うるさい、入るなど云ってあるだろう。何、豆腐だって、そうか、これは使えるぞ。それから、死体をベランダから落とす。妻の力では無理だから、滑車を使う。ふむふむ、自殺に見せかけるために、遺書だな、それは小説の一部を切り抜くか、それだ」

平成は、ひらめくと、いままでの鬱積が晴れたように、書きまくった。プロットをメモに書き出していた。

夕食もとらずに書斎で寝入っていた平成の様子を多津子が見に来て、そのメモを目にした。

夫の書いている小説はそのまま、吉田家の話だった。いつも夫は妻に暴力をふるう。愛情なんかすでに憎しみに変わっていた。夫には美人の出版社の編集員という愛人がいた。それは妻も知っていた。妻は妻で、外に愛人を作って、互いに好きなことをしているのだから、恨みっこなしだった。吉田には多額の保険金が掛けられていた。吉田平成の小説は最近、売れなくなっていた。もう落ち目で、連載も減った。新聞からも声がかからなくなってきた。みんな、吉田平成は終わると思っていた。妻としても、それぐらいは理解していた。一世を風靡した平成も、書けなくなり売れなくなると、もうお払い箱だった。夫の収入は確実に減っている。その変わり、ヤケになって遊興費が増えた。愛人へのお手当も増えて、生活費もままならなくなっていた。ここいらが潮時か、と、小説にも書いている。まさにそのままだった。

一妻の冴子は、景太郎の書斎にそっと入ってきた。

平成が原稿用紙にそのシーンを書いているとき、実際、多津子が入ってきた。

一景太郎は事件のクライマックスを書いている、後ろから近づく冴子には気づかない。冴子の手には、凍らせてカチカチになった豆腐があった。

妻は、その通り、凍らせた豆腐を手を持っていた。

一冴子は豆腐の塊を夫の頭上に振りかざした。と、景太郎は何事かと振り向いた。

妻は豆腐を振りかざした。平成が人の気配で振り向いた。その瞬間、平成の頭は豆腐の角で思いっきり殴られていた。声も出ない。一瞬で、平成は頭から血を流して机に伏せた。原稿用紙に血が零れた。妻は、夫の書いた小説のプロットを読んでいて、その通り実行していた。もし、ストーリーに過ちがなければ完全犯罪になる。

多津子は、台所に走って、凶器の豆腐を鍋に入れて用意していた牛肉や玉葱と共に煮た。牛鍋にしてしまい、証拠隠滅のために食べてしまうというカラクリだった。それから、書斎の夫の死体を台所のワゴンに載せて、ベランダまで運んだ。九十キロの巨体をその半分もない妻が運べるわけがない。まして、死体というのは重いものだった。血のついた原稿用紙とプロットを書いたメモは台所で燃やすことになっていた。妻は、ベランダに用意していた滑車で平成の死体を吊した。重さも半分になる。ベランダの柵の高さは一メートル五十はあるので、女の力で持ち上げることはできない。妻は柵のへりに死体を乗せると、ロープを解いて、死体をベランダから突き落とすとした。

妻が次にやることは、前から夫の小説の未完の草稿から切り取っていた、物語の一部だった。小説の中の被害者が書いた遺書がそのまま、平成の肉筆だから、遺書として使える内容だった。一わたしは、行き詰まってしまった。足の折れた競走馬が薬殺されるように、書けなくなったものには、死の安住が与えられる。多くの方々にお世話になりました。わたしが死ぬことについて、すべては妻に委ねておきます。

けっして不自然ではない内容だった。その切り抜きをそっと、机の上に置いた。それから警察におもむろに電話した。

「お、夫がベランダから飛び降りました」

階下ではマンションの住人が騒いでいる声がした。遠くから救急車のサイレンが聞こえてくる。妻のもうひとつの役割は、階下に血相変えて、駆け下りて、ヒステリックに泣くことだった。夫の書いた台本にはそう書かれていた。

第201話 理想と現実

女が結婚に焦り始める年齢は個人差もあるが、26歳という。30を過ぎると逆に落ち着いてきて、35を過ぎるとどうでもよくなり、40を過ぎると女は女でなくなる。

広田保奈美は、今年で33歳、微妙な年齢である。仕事は広告会社でデザイナーをしている。美大出の一筋縄ではゆかない美貌の持ち主。結婚願望はあるが、かなり理想が高い。いままでも、沢山の男たちとつきあってきたが、どれもいまいちで妥協することなく別れてきた。

最初の結婚を考えた男は、40歳の青年から少し過ぎたが実業家。起業家で成功した、通販の会社を経営している。年収もかなりある。保奈美の結婚の基準にある、身長も180と高いし、学歴も慶応ボーイで申し分ない。マスクも甘くやさしい目と口元が素敵だった。保奈美は、結婚の約束までしていたが、ある日、デートのときに、彼は、持ち合わせがないからと、食事代を保奈美に払わせた。いつも、車で家まで送って行くのに、その日からタクシーだった。

「車はどうしたの?」と、訊いても、修理に出している、外車だから時間がかかると云うが、数ヶ月が経過しても車は治らない。彼はデートに自転車で来るようになった。社長らしく、舶来のダブルのスーツをぱりっと着ていたのが、だんだんと作業服になってきた。髪も朝起きたばかりの手入れもしない髪になり、靴にも穴が空いていた。

「どうしたのよ、だんだんみすぼらしくなってきた」と、問いただすと、

「すまん、会社が倒産寸前で、社員はみんな辞めて、ぼく一人なんだ。頼みがあるんだが、なんとか五百万貸してくれないか」

そうきたから、保奈美は仰天した。これだから事業家と云っても判らない。こんな不況の折、へたに保証人にでもされたら心中するよりない。保奈美はやんわりと断って、自然と彼から離れた。

二番目に結婚を考えた男は、長身、美男、内科医と条件を満たしていた。大学病院に勤務しているから倒産することはない。今度こそ玉の輿に乗れると思っていた。彼とのデートは高級レストランが多かった。グルメ志向の保奈美にとって、普段とても行けないところに連れて行ってくれる。テーブルに料理が運ばれてくる。シャンパンが注がれる。

「ぼくらのゴールインのために」と、乾杯しようとしたら、彼のケイタイが鳴った。

「すまない、患者を抱えているものだから、これから病院に急行だ」と、いうことが度々あった。

いつかはホテルでシャワーを浴びて、ベッドインして、まさに前戯で燃え上がり、これから結ばれるというときに、またあの憎きケイタイが鳴った。

「すまない、急患だ。医者は休みもプライベートの時間もないんだ。それでもいいのだね」と、火照る体を置き去りにして彼は行ってしまった。

二人で一泊の旅行に出かけるときも、いままさに電車が出発しようというときに、またまたケイタイだった。

「すまない、君ひとりで旅行へ行ってくれたまえ。大事な患者が危ない」そうして、電車のドアが保奈美だけ乗せて閉まった。

「もう、嫌あ」

保奈美は、またも空振りだった。

三番目の男は、こちらも外見は条件にぴったり、三ヶ国語を自由に操る商社マンだった。「あなたは、きちんとお休みはとれるわね」と、今度は慎重にいちいち確認していた。

「大丈夫だよ。海外勤務から戻ったばかりだから、当分は本社での内勤が多くなる。土日は休めるよ。君のご要望にお答えしよう」と、優しいフェミニスト。

彼とデートのときだった。映画を見てから、ホテルへといつものコースを辿ろうとしていた。地下の駐車場で、彼のポルシェに乗ろうとしたとき、いきなり黒塗りの外車がポルシェを塞ぐ格好で停車した。咄嗟に彼は、「危ない、頭を低くして」と、保奈美を抱くようにシートに倒れた。覆面姿の二人組が、車から降りてくると、ピストルを三発発射して、タイヤを軋ませて、逃げ去った。銃弾はフロントガラスを滅茶苦茶に割っただけで、二人に怪我はない。

「ここには危ない、狙われている。逃げよう」と、彼は血相を変えて、猛スピードで駐車場から出た。保奈美はがたがた震えている。

「何があったのよ」

「すまん、実は、マフィアに追われている。少々危ない取引に手を出した」とんでもない。そんなアクション映画でもあるまいし、ご免蒙るわ、と、保奈美は商社マンを諦めた。

なかなかお眼鏡に適った相手は登場しないでした。どこかに必ず欠陥がある。この世に完璧な理想の男性などいるのかしら、保奈美は自信喪失気味だった。そんなときに、親戚の叔母がお見合いの話を持ってきた。

写真を見た限りでは、背が高く、スマートで、俳優にでもなれそうな顔をしている。東京大学を優等で卒業し、親は国会議員、祖父は大臣までしたという血筋で、申し分ない。本人は三十六で財務省の将来有望な官僚だ。親方日の丸なら、倒産することないし、転勤もなさそうだし、殺されることもなさそうだし、そう忙しいとは聞いていない。いままでの男たちよりずっといい。これ以上の条件の揃った相手は百年に一人出るかどうかだ。保奈美は、ここいらで妥協するかと腹を決めていた。

お見合いは都内のホテルで行われた。相手はスーツ。保奈美も洋装だ。大野真吾という写真よりも実物の方が数段いい。

「ご趣味は」と、型通りの質問から始まる。

「ぼくは、チェロを奏いています。堅い仕事だから、逃げ場所もなければね。スポーツは夏はウインド・サーフィンで、冬はスノーボードです」中々のジェントルマンで育ちがいい。気品ある面立ちに、優しさが満ち溢れている。こんな人と一緒になると大事にされるだろう。保奈美は、初印象からすでに夢の中に入っていた。

二人のつきあいは一月もなかったが、どちらも気に入って、とんとん拍子に婚約、結婚式と、なんの障壁もなく進んできた。それでも、この一月の間に、保奈美は失敗は許されないと、結婚の条件のチェックリストに則って、彼の仔細をマークしてきたが、すべて問題がなかった。

いよいよ結婚式の当日、保奈美は夢にまでみたウエディングドレスを着て、控え室に座っていた。親戚友人が、カメラを向ける。みんなから祝福を受けて、保奈美は、いままで妥協せずに、じっと出逢いを待った甲斐があったと、この世で最高の幸せを手に入れたことに、ほくそえんでいた。

「ぼくの花嫁さん、素敵だよ」と、白のタキシードの真吾も入ってきた。ぴったりと向うの母親が真吾に付き添っていた。

「今夜出発する新婚旅行には、ママもついてきてね」

保奈美はわが耳を疑った。確かに「ママ」と、この男は云った。

「当然でしょう。真吾ちゃん。ママはいつもついていきますからね」

真吾ちゃん。三十六の男だ。保奈美は背筋がざわざわした。マザコンだったなんて、履歴書に書いてなかったじゃない。ひょっとして、いままでの男の中で最低だったりして。

「さあ、お二人並んで、記念写真撮りますよ。ああ、お母様もご一緒ですか。よろしいでしょう。さあ、チーズと云ってください」

ああ、人生最悪の日。保奈美は無理に笑って顔が引きつっていた。

第202話 わがキタ・セクスアリス

夏は開放的になり、性の臭いがした。わたしが十一のとき、「太陽の下の十八才」の洋画がこの町にもきて、水着を着た若い主演女優のポスターがあちこちに貼られていた。あのサウンドトラックのテーマを聞くと、いまもそのころを思い出す。

体がクラスで一番大きかったわたしは、小学六年生ですでに一メートル六十五センチはあった。年齢的なものより、体の成長がより自然と求める性。初めて異性を意識するという新鮮な臭いがあった。それは罪意識と秘密をいつもどこかに隠しもっていた。そういう意味ではわたしは同級生が疎いだけ早熟であったかもしれない。

学校の図書室で保健の本を開いて、女性の体の断面図を見て、どきどきしたのはわたしだけのようであった。まだ、大概の友人たちはどんな体の構造になっているか興味もなく、また知らなかった。穴が三つあるんだということ、そのうちの余分なひとつが何に使うのか説明しても判らない友人が多かった。

四人姉妹の男ひとりだから、いつも女の中で育ったわたしは女に対する違和感がなかった。妹は健康優良児で、初潮が早かった。それをタンスの中に隠していて、一番上の姉に見つけれ、「どうして、教えないの。病気じゃないんだからね」と、叱られていた。わたしがそれを見ると、「男はあっちへ行きなさい」と、窘められた。ただ、姉妹に対する性の意識はまるでなかった。みんな太って遅しく、か弱い女性からほど遠かったせいもあり、どんな着飾った女も家ではこんなものだろうという失望感もどこかにあった。男ばかりの兄弟では女に対する神秘性もあるかもしれないが、一緒に風呂に入っても、醜く垂れ下がった腹を見せ、三段、四段を自慢しあうあたりは綺麗なものから程遠く、幻滅以外のなにものでもなかった。

六年生のときに、林間学校が三泊で南津軽の温泉地であった。夜、川沿いの公園で、全員で盆踊りやフォークダンスをした。わたしの好きな女の子がいて、その子が順番で回ってくると、どきどきした。手を繋ぐときも、手が汗ばんでいないかと、気になったりして、その小さな細い指の感触を密かに楽しんでいた。そろそろ胸も大きくなっている子もいて、女の体の変化が現れる年齢で、こそこそと先生も隠す何かがあるのだと、子供心にも興味があって、それもあの酸味のある臭いがしていたものだった。

女の子だけを教室に集めて、性教育をするのもおかしかった。あの頃は、男子には教えなかった。女子は生理がそろそろ始まるので、学校として教えていたのが、何か秘密めいて、それが何かを知っている男子がいて、誇らしげに級友たちに教えていた。

わたしは、よく父親の部屋に不在のときにそっと忍び込んだ。カメラを趣味にしていた父親の本棚の、引き出しにカメラ雑誌があった。ヌードばかりが載っているもので、その雑誌をこっそりと持ち出しては、近所の子供たちと眺めていた。その本の匂いも、何か精液に似た匂いがして、それがいつか悪びれた秘密の匂いとなった。父親の文箱を開けると、さらに驚くべきものが出てきた。ブルーフィルムというもので、男女のまぐわいをあらぬ姿態で撮影している白黒写真だった。年増の女がセーラー服を着ているのが、子供心にも不自然で奇怪に思えた。初めて、女性器の形が判った。実に汚らしい形に、幻滅していた。もっと綺麗なものを想像していたが、グロテスクで恐ろしいものに見えた。その他に枕絵などの刷り物があり、それは江戸時代の男女が交わっている多色刷りの古いものだった。父親のコレクションはそれだけでなかった。文箱の中には媚薬や、ずいきなどの蒐集で、当然、それが何なのか判らない。いつも、どきどきしながら、部屋に忍び込んで、盗み見るのが、スリルがあってわたしの日課となっていた。

たまたま、高校の上の姉がいきなり部屋に入ってきたことがあった。わたしは慌てて文箱を蔵った。

「どうしたの？」と、訊くので、「うん、捜し物」と、嘘をついた。姉は、わたしの上気した顔を見て、変に思ったろう。わたしの胸に手をあてがい、

「あら、心臓がどきどきしている」

そんなこともあった。

その以前の話だが、近所の下駄屋の娘とお医者さんごっこもした。四つつ年下だからまだ小学校一年だったかもしれない。親にみつければ叱られるので、押入に入って、ごそごそと解剖ごっこ称して見せあうのだった。肛門期が長かったのか、肛門に快楽を感じるというのは、幼児と

同じだった。それで、性器にはあまり関心を示さない。一度、母親に見つかって、しこたま怒られたことがあった。それは悪いことと、罪の意識を持ったのはそれからだった。

すべてが、夏に開いてゆく。花が咲き、実が成るように、一夏で子供たちも大きく成長してゆくのは、植物と同じだった。

「ゴーカートツイストとも云うんですがね。ないですか」

わたしは、近頃たまらなく、あの「太陽の下の十八才」の映画のテーマソングが聞きたくて、そのCDを探し回っていた。五十年代、六十年代のオールディーズのCDをあれこれと見て歩くと、いまだにあの歌に出逢っていない。ないとなるとたまらなく聞きたくなる。

わたしの歌探しの旅はいまも続いている。

第203話 メイド・イン・ジャパン

「メイド・イン・ジャパンですか。信用できませんね。うちでは、取引できません。中身の誤魔化しが多くて、消費者の不信感から、日本製を置くと、店の信用にもかかわりますからな」

友隅製菓の中国駐留の営業マン佐々木治郎は、上海のスーパーなどを歩いて、健康食品を売り歩いていた。どこでも、そう断られる。かつて、香港製というだけで、偽物とか、粗悪なものというイメージがあったが、いまは世界的に日本製がやり玉にあげられている。

治郎が悪戦しているのは、新規の取引先開拓だけではなかった。長いつきあいの会社でも、再契約を断ってくる店があった。

「うちで扱っている食材は、絶対安心です。こちらに、保健所が出した、成分表も添付してございますから、参照してください」

治郎は、コンビニのチェーンを展開している公社の本部でねばっていた。

「佐々木さんは、わたしたちは信用しています。あなたは多分、間違ったことはしない人と思います。でも、これを生産している工場がどうもね。ハムも産地偽装、酒は灘の生一本と嘘をつき、牡蠣も広島産ではないとか、最近の日本のニュースを見て、わたしたちは笑っています。日本には嘘八百ということがありますね。それでは少ないのです。嘘八百万です。神様もやおろずいと申しますね、神様の数と同じくらいの嘘があってもおかしくない不思議な国です。わたしたち中国人は信義というものを大事にします。目先の利益だけで逃げることはしません。もっと長い目で商売を見据えたらいかがでしょうか」

華僑の国の商売人は、かつて日本人が持っていて、忘れたものを持っていた。治郎はセールスで断られるたびに、勉強していた。十二億の消費者がいる中国は計り知れない未来を持っていた。なんとか食い入りしたいところだった。ようやく、治郎が歩いて手応えを感じた。それは市内で一番由緒ある食品店だった。

「困ったときはお互い様。わたしの父は、日本の兵隊さんに助けられたことがあります。どうも、日本製品の排斥運動が起こっているようですが、一店だけでも置いていていいでしょう。昔、

中国でも羊頭狗肉ということがありました。商人はみんな嘘つきでした。あなた、違います。判ります」

いい店主に巡り会って、治郎は久々の契約が取れた。

ところが、商品がその店に並んでから、問題が起こった。内容物の変色、変質して出荷されていた。すぐに返品、取引中止となった。そのことは、「までも日本製品、製造年月日を偽る」と、大々的に新聞で叩かれた。

治郎は、胸ポケットに辞表まで入れて、本社工場に赴いた。製造年月日のシールを剥がして、新しい日付に張り替えることは、どこでもやっていた。ところが、今回のクレームは、商品そのものを廃棄せずに、また原料に混ぜて製品化したことによる人為的事故だった。恒常的に行われていたふしがある。それを工場長に直談判しに帰国したのだ。これでは、どんなに一生懸命、現場が走り回っても、面目も丸潰れだった。

「工場長、会社ぐるみと世間では噂していますが、上からの命令でしたんですか」

治郎は顔を真っ赤にして、詰め寄っていた。

「これは、わたし一人の判断でしたことだ。上からはコストダウンを迫られるし、デフレで価格も下がり、利益を出すためには、かなり無理な原価率の低減を図らねばならない。すべて会社の業績悪化のしわ寄せだよ」

「そんなことが理由になるんですか。これは、人間の口に入るものです。さあ、ここで、この我が社の商品を工場長に食べていただきますでしょうか」

「ええ？ これを食べろっていうのか」

「何を怯えているんですか、これは、近くの売店で買ってきたばかりの商品ですよ。まさか、食べられないと云うんじゃないでしょうね」

治郎は工場長の口もとに押しつけた。

「勘弁してくれ、わたしには妻と子供たちがいるんだ」

工場長は土下座して謝った。邪なものを生産しているところでは、けしって自分たちの作ったものは食べない。よそから買ってきて食べているという。

「この表示シールには、メイド・イン・ジャパンと書かれていますね。それを今日から印刷し直してください。メイド・イン・邪販とね」

治郎は総務に辞表を叩きつけて会社を出てきた。

世はグルメブームだった。すっかり騙されている軽薄なグルマンたちは、実はすべて味盲だった。人間の舌はあまりに美味しいものばかり食べてきて、いかれてしまったのだ。こんな国では働きたくない。治郎はヨーロッパ行の飛行機に乗っていた。歴史と伝統と貧しさから学び直さねばならないと。